THE CENTRAL REVIEW

中央公論

一年一回定期増刊

『知識階級と無産階級』號

第三十八年 第七號 第四百二十三號

大正十二年六月十五日發行（毎月一回一日發行）


純品質主義
鷹印麥稈帽子
權威ある最新型
帽子は人格を象徴す
株式會社
高橋製帽所
東京・大阪

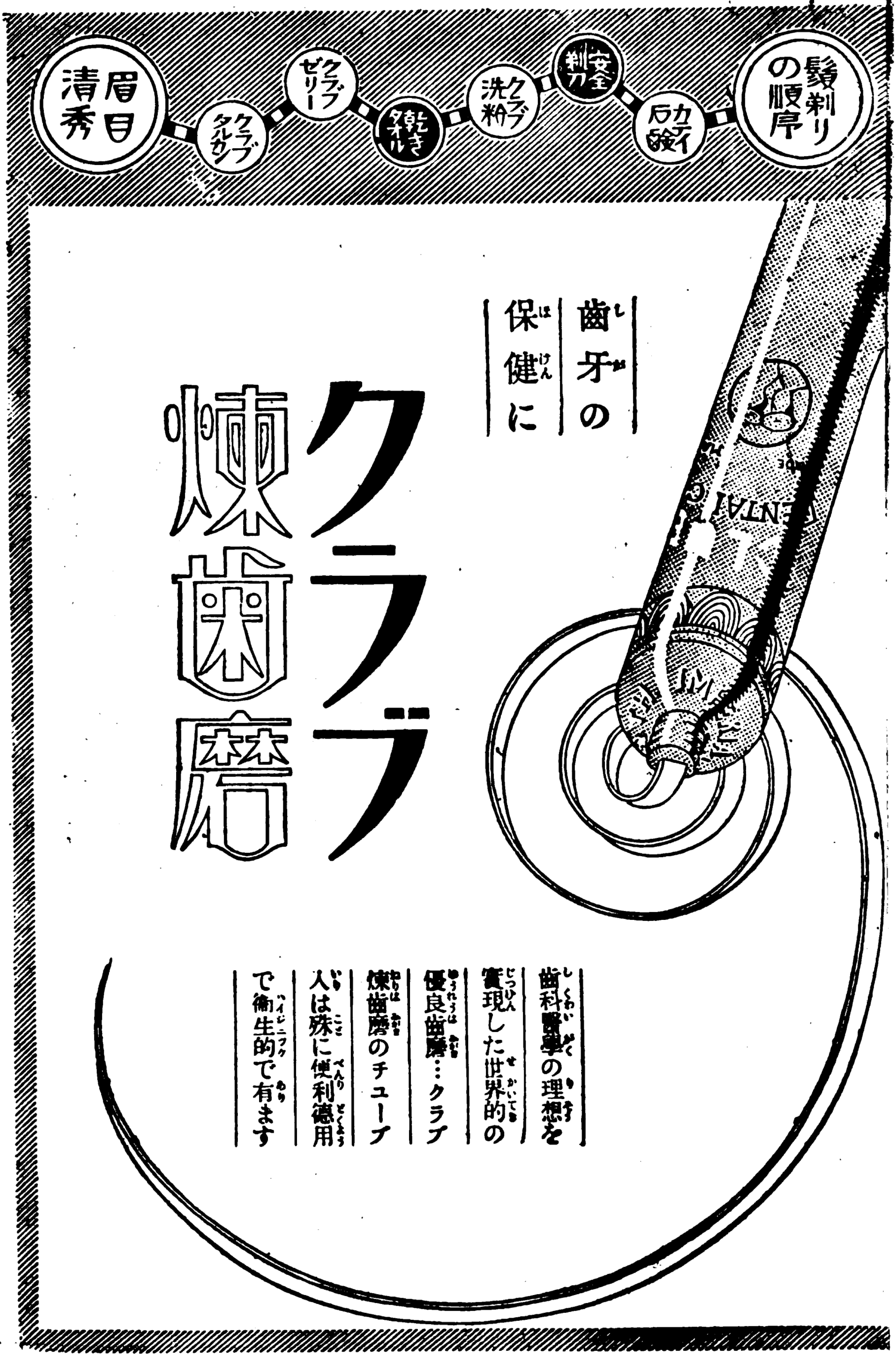
中央公論第卅八年夏季増刊「知識階級と無産階級」號目次

無産階級歌人としての啄木其他……安成二郎……一二八

農村見聞録……白鳥省吾……一四八

無産者から出た世界的作家と無産者を主題とした世界的作品……千葉龜雄……一七三

プロレタリア作家と其作品……………野村吉哉…二〇四
ロシアの舊きインテリゲンチャと
新らしきインテリゲンチャ………尾瀬敬止…二二〇


鬚剃りの順序
カテイ石鹸
安全剃刀
クラブ洗粉
乾きタオル
クラブゼリー
クラブタルカン
眉目清秀
歯牙の保健に
クラブ煉歯磨
歯科醫學の理想を實現した世界的の優良歯磨…クラブ煉歯磨のチューブ入は殊に便利徳用で衛生的で有ます



泉　　平福百穗筆

中央公論

大正十二年

六月十五日發行

一年一回定期增刊

「知識階級と無產階級」號

第卅八年第七號

第四百二十三號

保守と急進との內面的一致

結婚は相當の媒妁人を立て華々しき盛宴を設けて行ふといふが我國古來の風習である。夫々の身分に應じて規模の大小はあるが、法律上の手續如何に拘らず、之れ丈けの順序を濟まさないでは結婚は社會的に成立したものと認められぬ。所が昨今東京などの風を見るに、花聟花嫁とは從來何の係はりもない如何はしい人物が、單に俗界の盛名あるの故を以て其場限りの媒者に頼まれ、且所謂披露の宴は無用の贅澤を盡して莫大の費用に虛榮を誇るといふ流行になつて居る。そこで少しく事理を辨へた當世の反抗兒などは、披露の宴も要らぬ、媒妁人も無用だとて、所謂自由結合一點張で行かうと主張するやうになる。法律上の手續も冗な事だといふのは聊か矯激に失するが、本人同志の戀愛的同情さへあれば十分だと云ふ立場には、無論十二分の理窟はあると思ふ。

我々は戀愛を以て結婚の最も根本的な要素だとする說を無論否まない。戀愛は全然當人同志の事だ。從て結婚に就ても、他人の濫りに干渉すべからざる所以は、亦十二分に心得て居る。けれども戀愛とか結婚とかいふ樣な事は——外の事でもさうだが——殊に若い人達の動もすれば判斷を誤り易い所だから、然るべき先輩の助言を求むるといふは好もしいことである。のみならず、之が一つの社會的制度の形に進み、媒妁人なる第三者の介入を許すことゝなつたに就ても我々は必しも之を無意義とは思はぬ。且又結婚は同時に社會全般に對しても全く新しき關係を發生せしむるものであるから、別に社會的公認を得るの方式といふものが無ければならないのである。この必要に應ずる客觀的形式としても所謂結婚制度は決して之を無視することは出來ない。只現在普ねく行はるゝ制度が這般の要求を最もよく充たすものか否かは別問題である。

吾人は結婚を例として述べたが、實は結婚のことを主として說かうと云ふのではない。凡そ社會制度なるものは、右の例で云つた如く、元來、皆それ〳〵の據る所あつて作られ、それ〳〵の理由あつて行はれ來つたものである。而して今日不幸にして其多くは本來の趣旨から遠ざかつて濫用さるゝに至つて居る。このことを明にせんと欲するのが、吾人立言の目的なのである。

社會の制度は、一言にして約せば、或る「意味」の表現としての樣式に外ならぬ。幾くもなくして樣式は「意味」を離れて其れ自身獨立し、直接に吾人の生活規範たらんとする。茲にいろ〳〵の弊害は起る。其處からまた社會制度に對する革命的反抗も起る。斯くしてまた新舊思想の衝突も起るのである。

復た結婚の例に戻つて話を進める。媒妁人を立てゝ披露の盛宴を張るはもと尊信に値する立派な人格の紹介に

依て社會に夫婦としての新責任を聲明するといふ、深くして高い意味を含有するものなのだ。それを昨今ではたゞ見榮にやる樣になつたから無意義だと難ずるのである。而してこゝに氣が附けば、當然に現在のやり方を熱心に非とすると共に、之を排斥した上、更に有意義の新樣式を工夫するの努力が生れて來なくてはならぬ。換言すれば、破壞後の創造又は創造の爲の破壞が現れて來なくてはならない。今日の如き變轉動搖の激しき時勢に在て最も切に賴みとさるゝは實にこの精神ではないか。

然るに這般の問題に對する世上一般の傾向は、如何といへば、惜むらくは甚だ愼重を缺くの嫌があると思ふ。徒らに舊慣の輕んぜられ在來の規範の蔑にせらるゝを危險として、總ての改革に反對する保守家がある。彼は果して現制度を其內面の「意味」に遡つて批判し、而して後仍ほよく之を支持するの確信を持ち得るや否や。又徒らに無意義なる在來の仕來りを陋とし、之を徹底的に拒斥するだけに無限の快哉を叫ぶ急進家がある。彼亦果して在來の制度の眞の根據にして而かもそが未だ之を體現し得ざりし所の、その內面的意味を併てあぢはひしことありや否や。二者各其の稱ふ所を異にするも、「意味」の源泉に遡るの勞を取らず、樣式の末節に拘泥して制度を淺薄に理解するは同一である。

破壞しやうと思ふなら、先づ何を作らうかをよく考へよ。何を創るべきやを省慮することなしに、本當の破壞の熱情は湧いて來ない筈だ。さらでだに創造は困難な仕事だ。破壞に由て一旦規範を喪つた人心に向ひ、多數人の滿足を捧げしめ得る底の新形式を與ふるは、容易に出來るものではない。かくて動もすると新しい結果は破壞前の期待を裏切り易い。遂に野心家の乘ずる所となりて再び古き形式に復歸するやうのことも歷史上には珍しくない。併し新形式に失敗した者の動もすると古き形式に一時の滿足を尋ぬるのは、一面に於てまた古き形式が內在の「意味」に一種の眞理を包藏するを語るものでもある。保守家は須らく一歩を進めてこの眞理を洞察し、又その表現に熱情を有つに至るべきである。かくて彼は同時にまた本當の改革家にもなれる。最も洗練された形に於て保守家と急進家とはもと決して相反目すべき運命に在るのではないと思ふ。

保守家はその保守すべきものゝ何かをよく考へねばならぬ。急進家もその突進がそも何ものゝ爲にするのかをよく考へねばならぬ。現代に在てはとにかく改革は必要だ。たゞ何を改め何を創るかに就ては盲目的に突進するのみではいけない。それには指導が要る。而して最も良き指導家は、最もよく古き制度の「意味」に通ぜる人でなければならぬ。保守家が一から十まで改革家の言動に反對 ることのみを自家の責任だと考へるなら、それは實に憐れむべき偏見である。

中央公論



第卅八年第七號
「知識階級と無産階級」號
第四百二十三號

知識の時代相、永遠性

田中王堂

一、知識はフェニックスなり

昔、一つの靈鳥があつた。其の名をフェニックスと呼んだ。彼れは五百歲を以て彼れの生涯の一期となした。五百歲を經ると、(彼れの體力の減じ、彼れの意力の衰ふるを待たず)彼れは自づから進んで日府の火中に身を投じて、おのれを一片の灰燼に歸せしめる。然し、其の灰燼の中より一羽の雛が生れる。さきの靈鳥の後身たるこの雛は一夜にして其れの羽翼を長じ、大空に向つて飛翔し去るのである。

此れは希臘の神話の物語るところである。わたくしは、當初、この神話が如何なることを意味したかを知らぬ。又、其れが如何なることを意味しようとしたかを詮索しようとも欲しない。たゞ、わたくしはフェニックスがおのれを更新する唯一の方法として、自づから進んでおのれを火中に投じた一事に多大の興味を感ずる者である。そして、榮枯盛衰して一刻も息まざる人間の生活に在つて、苟くも久しきに亘り、其れの作用を保たうとするあらゆるものの象徴として、この一事の中に絶大の暗示を見出だす者である。

人間が如何なる風にでも彼れの生を持續して行くためには、必然に、如何なる程度にか外來の刺激と内應の行動とを整齊せねばならぬ。されば、若しわたくし共にしてさうするはたらきを知識と呼ぶならば、人間の生活に於て知識の存在したのは隨分久しいものであつて、其れの起原は人類の起原と殆ど其の期を一にするものと言ふべきである。然し、知識は人間に依つて工夫されたあらゆる機關の中で最も自由に生活の要求に應じて絶えずおのれを改造し、更新して行く性質を最も豐富に有つたものである。この特殊の性質に依つて、過去幾千年間に亙つて人間の生活の構成と其れの理想とは幾度となく變遷するにつれ、其の時々の習慣や、制度や、信仰や、學說も、亦、幾度となく其れが權威と生命とを失なつて、暗黑の中に葬られて了つたのに拘はらず、其等の改廢の發動者であり、命令者であつた知識だけは永劫に其れの權威と生命とを保つことが出來た。

人間の生活に對して一つの機能を有つあらゆるものの完全なるはたらき振りを想像する時、わたくし共は其れが必要とされる場合には、一つの方針として一つの形式を組織してはたらくが、既にして、(そして、多くは、其れが十分に利用された結果として、)生活が其れを必要とする狀態の外に、若しくは、上に生長して、更に新らしき形式の上に組織される新らしき方針を要求する場合になると、一刻も猶豫せず、何等の執着も感ぜず、何等の痕跡も殘すことの無いやう

に、潔くおのれを解體し、其の新らしき方針の一部を構成するためにおのれの全力を捧げて勇敢に、然し、謙遜に、其れにまで參加する底のものでなければならぬ。知識に取つても、わたくし其の想像の及ぶ限り、斯くの如きが其れの完全なるはたらき振りであることに就いては多言を須ゐるまでもなく明白である。然し、あらゆる他の機關よりも遙かに優れて自由におのれを改造し、更新する性質を、遙かに優れて豐富に有つて居る知識にしたところで、決してこの想像され得る狀態に於てははたらきはしない。此れは如何なる事由からであるか。

知識は其れの根本作用よりして、其れ自づからに獨立して存在するものではなくして、人間の生活に依立して始めて存在し得るものである。隨つて、其れのはたらき振りは必然に人間の生活に内著する生物的特徴と社會的傾向とを分領せねばならぬからである。それならば、こゝにわたくしは何を指して生物的特徴と呼ぶか。一旦、知識の一つの形式が一つの方針としてはたらいた以上、(其れの動力に依つて新らしき方針を促進して居りながら)兎角、生活全體の功利より孤立し、其れに逆行してまでもおのれの形式を固守しようとする特徴を其れと呼ぶのである。こゝにわたくしは何を指して社會的傾向と呼ぶか。如何なる方針と雖も、其れの存在は或る人格に依つて運用されることに依つてのみ保障されるのである。されば、異なつた、そして、互に矛盾する一つ以上の方針が並立するには、そこには其等の一つ一つは、其等を利用して自分の利益を、若しくは、自分のと併せて他人の利益を擁護しようと志して居る個々の人格に依つて運用されて居らなければならない。さうすると、勢ひ、(概して言へば)舊き方針は過去を代表する父、老年、現に權力を擅にする階級に依つて採用され、新らしき方針は未來を代表する子、青年、將に其の權力を奪はうとする階級に依つて採用されることになる傾向を其れと呼ぶのである。知識が此の生物的特徴と社會的傾向とを分領するがために、これまで知識の體系を中心とする歴史を通じて、しばしば、無益の反目と、爭鬪と、分裂とが起つたのであつた。知識が一つの

形式より他の一つの形式に移り行く過程は最も多くの場合に於て決して圓滑和平なものであつたとは言へぬ、之れが證例として、無數のものを擧ぐるに及ばず、其等の中で、嶄然、尙ほわたくし共の記憶に新たなる、否、永久にわたくし共の感銘に新たなるべき天動說と地動說との關係、若しくは、種造論と進化論との關係を擧げるだけで十分であるとわたくしは思ふ。

俗人は地動說が天動說に變はつたのを目して、若しくは、進化論が種造論に變はつたのを目して、無雜作にも、相反する知識の一つの形式が其れの他の一つの形式を壓倒したのである、或は、征服したのであると謂ふ。然し、わたくし共が愼重に考察し、精細に評價しなければならぬ一事は、此等の二つの現象の裏にはたらいて居た志向、此等の二つの現象の經緯を構成して居た意味である、一層端的に言へば、此等の二つの現象そのものの Entelechy である。わたくし共にして、一度この觀點を取つて來ると、此等の二つの現象は從前とは全然別種の性質を有つて來るのである。試みに天動說と地動說とを比較して見ても、若しくは、種造論と進化論とを比較して見ても、前者と後者との間には與料に關し、目的に關して何等の異なるものはない。其れの與料は知覺であり、其れの目的は生活の持續と發展とのために其等の與料を統一することであつた。たゞ、知覺を統一する方法は其等をして目前の生活に役立たしめるやうに、どういふ風にか其等を處置する目的を以て工夫されるのであるから、生活の理想が變遷するにつれて、異なつた機會に於て、異なつた目的を以て、工夫された異なつた方法の間には扞格が生ずる。此等の扞格が堆積されて行くと、終には生活の持續と發展とに對して障礙となる。其等は或る適當なる時期に方つて整頓されねばならぬ。然し、斯く互に扞格する方法を工夫したのは知識であるから、其れは又其等を、整頓せねばならぬ。そして、知識は實にさうする力を有つて居るのである。この力を有つがために、知識は同一の材料と同一の目的とを以て同一の材料を處置しながら、たゞ、そこにあ

る指格を整頓することの一事に依つて、自然に、必然に、天動説をして地動説にまで變形せしめ、種造論をして進化論にまで變形せしめたのである。されば、キリストが「自分は法律を破るために來たのではない、其れを滿たすために來たつたのである」とおのれの事業を釋明した言葉の意義に隨へば、地動説は天動説を破つて居るのではなく其れを滿たして居るのであり、進化論は種造論を破つて居るのではなく、其れを滿たして居るのであると言はなければならぬ。何故ならば、天動説の志向と、種造論の志向とは、地動説と進化論とに依つて一層完全に實現されて居るからである。

畢竟するに、知識はフェニックスである。絕へず永遠に向つて、おのれの意思よりして、おのれの過去を火中に投じ、其の苦行に依つて、おのれの未來を造り出して居るのである。

二、知識の作用

古來、知識の非難者は決して尠なくはなかつた。彼等の或る者は、(例へば老子の如く)醇乎たる理會より、他の或る者は、(例へば秦始皇帝の如く、)利害の觀念より知識を非難したのであつた。近世に於て、カアライルと、トルストイとは醇乎たる理會より其れを非難した者の最も顯著な代表者である。然し、わたくしから觀ると、此等の二人は總じて一度も生活に照準して知識の機能を考察したことなく、當時、誤つて知識の作用でないものを共れであると廣く世間に流布されて居た解釋を盲目的に、沒反省的に受け取つて、知識を非難したのである。(いつの時代に於ても、學者の大多數は卑屈にして無智なるものであるから)わたくしは知識の作用に關して、そんな誤まつた解釋を臆面もなく世間に流布して居た當時の學者の卑屈と無智とを憎むよりも、寧ろ、其れを盲目的に、沒反省的に受け取つた彼等の不明を憐まさ

るを得ない者である。

カアライルも、トルストイも、知識は（科學の形を以て）事物の說明を其れの職分としながら、宇宙の出現と人世の趨歸との問題に關して何等の解決をも與へることは出來ない。智識を以て此等のものを解釋しようとするならば、わたくし共はたゞ懷疑に陷ゐるのみである、と言つて、生活に取つて知識の無益を絕叫し、トルストイはキリスト敎の信仰に趨り、カアライルは勞作の福音を唱へたのであつた。然し、彼等二人があのやうに知識を非難し、其れに對してあのやうな態度を取るに到つたのは、全く彼等が知識の作用を誤解した結果に過ぎない。知識は、其れが聰明であるに止まる限り、言ひ換へれば、其れがおのれの職分に就いて反省することを忘れぬ限り、其れが科學の形を取つた場合は無論のこと、形而上學、若しくは宗敎の形を取つた場合でも、未だ曾て宇宙の出現とか、人生の趨歸とかいふやうな問題を解決しようなどといふ大膽な、否、愚劣なことに志したことは一度もないのである、そんな事柄は問題とさへもしなかつたのである。

何のためにこんな組織を持つた宇宙が存在するか、何んのためにこんな性情を有つた人間がそこに生を營むか。そんな事柄は何人にしても了解出來るものではない。其れは、わたくし共としては、わたくし共の一切の思念を超絕した、然し、儼たる事實として受け取るより仕方のないものである。眞の知識の作用はそんな事柄を素直に肯定した後より初まるのである。詳しく言へば、知識が與へられた唯一の職分は宇宙と人間との起原を發生的に、探究するところには無くして、どこまでもわたくし共の生活の持續と發展とを中心として、其れが干はる限りに於て、宇宙と人間との交涉を作用的に整齊して行くところにあるのである。

「如何なる問と雖も、其れが人間に依つて發せられたものならば、又其れは人間に依つて答へられない筈はない。答の

半ばは既に其の間自づからの中に含まれて居る』とエマソンは道破したのであつた。考へ方、觀方によつては、この不思議極まる世界に於て見出だされるものは、何一つとして不思議でないものはない。青空を翔る一羽の鳥、大地に萠え出づる一莖の草にも無限の神秘は宿ると言へよう。されば、人間にして其等の孰づれの一つに對しても勝手に問を發するならば、大凡、人間に依つて發せられる問にして、一つとして彼れに依つて滿足に答へられるものはないといふのが眞理であらねばならぬ。然し、事實として、人間は彼れの經驗に入り來たるあらゆるものに對して勝手に問を發して居るものではない。其等を生活に役立たせるがために、どういふ風にか其等を支配しようと企て、其の企で都合よく支配出來ない部分だけが隨時に疑惑の種となつて現はれるのである。さうすると、實際に、人間に依つて發せらるる問といふものは、總べての場合に於て、其れの範圍と、方向と、性質とは、その時彼れが達しようと志して居る目的に依つて既に大體限られて居るものである。例へば、物理學や化學がして居る如く、目前の物質を分析して其等を組織する元素にまで還元するにしても、又は、星學や、地質學が現在の天體や地球の歷史を解繹して其等を過去の狀態にまで溯源するにしても、此等の孰づれもは、わたくし共の生活を構成する要素を一層完全に統一するために、一層正確に其等を理會する目的の支配の下になされるのである。決して人間的の立場を離れて超人間的の立場からなされるのではない。

知識は根元的のものではなくして、派生的のものである。知識に先立つて或るものがある。知識はこの或るものの志向を滿たすために、この或るものより派出するのである。若しくは、其れの材料より工夫されるのである。こゝにわたくしが或るものと呼んで居るのは衝動であり、知覺である。表面不合理に見える其等の衝動や、知覺にも(其等が生活の道具の材料たらんとする志向を含んで居るといふ簡單なる事由より)おのれを合理化せんとする、言ひ換へれば、おのれを整頓しようとする傾向が潜んで居る。この傾向の反省に依つて一層純粹になり、自由になつたものが知識であ

る。

人間の生活は其れの本質より絶えず矛盾を發酵して居る。矛盾は知覺の中にも、衝動の中にも發酵する。生活の持續と發展とを保障するためには、其等は絶えず整齊されて行かねばならぬ。然るに、知識の有ち得る唯一の職分は其等を整齊するにあるといふからには、生活に對して知識の價値は極めて重要であると言はねばならぬ。試みに、知識のない人間の生活の存在を、矛盾を發酵するのみであつて、其等を整齊する方便を有たぬ人間の生活の存在を假定するとすると、わたくし共は、たゞ、其れの無限に混沌狼藉たる狀態を想像しただけでも、忽ち目眩み心狂ふのを覺えるではないか。人間の生活は知識を俟たないでも相應にやつて行けるのに、其れを工夫したのではない。知識を俟たないではどういふ風にもやつて行けないから、其れをして發生せしめたのである。若しくは、工夫したのである。されば、人間に取つて知識は裝飾品でも、贅澤品でもなくして、日常の必需品である。メフィストフィリィスはヴアグナアに對つて、『生活は綠色であるのに、理論は灰色である』と說いた。之れはヴアグナアのやうな『在る』ものと其れを『象徵』するものとを取り違へ、『象徵』するものの價値のために『在る』ものの其れを沒却する學究のためには、一服の淸涼劑とはなるが、決して正當な見解とすることは出來ない。人間の生活である限り、其れの如何なる段階に於ても、若しくは、如何なる側面に於ても、或る種の理論に依つて統一されないならば、其れは倏ちにして解體して了ふではないか。或る人々に取つて、理論は灰色と見えるかも知れない。然し、生活をして其の綠色を保たしめるものは理論であることに一點の疑を挾むことは出來ない。

わたくし共は現に知識が滿たして居る職分を滿たし得る代用物を他に見出だし得ない限り、到底知識と絕緣することは出來ない。よくよく古來の知識を非難した者の所爲を吟味して見ると、彼等は知識以外の或るものを以て知識を非難

して居たのでなくして、知識の一つの形式を以て他の一つの形式を非難して居たことが明らかになるのである。今日に於ても、知識を非難して居る者の見解の中には、謬誤と併せて眞理の含まれて居ることをわたくしは十分に認める。然し、彼等は悉とく知識の一つの形式を以て其れの他の形式を非難して居るのである。

三、知識の二型

今日、西洋に於ては、有史間の年代を三期に區分することが歴史家の常套をなして居る。上古、中世、近代が、即ち、其等である。之れは現代より四千年、乃至、五千年の過云に亙り、其等の世紀を數的に三等分し、現代よりの距離の遠さに隨つて其等の各に上古、中世、近代の名稱を冠らしたのではない。其等の各を支配して居た理想の相違、若しくは、其等の各が表現した意義の相違に據つて區分して居るのである。此等の三つの世紀に於て、營まれた生活が等しく人間の生活であつて見れば、其等のものの間に共通の要素の多分に見出だされ、一つのものより他のものへの過渡の中に因果の關係の明瞭に見出だされるのはいふまでもないが、全體として人間の文化の進行を理會する上に於て、此等の各を支配して居た理想の相違と、其等の各が表現した意義の相違とに據つて、三つの時代に區分することが便利であるからである。嘗て八面玲瓏なる詩人哲學者(Poet-Philosopher)サンタヤナは上古を以て自然主義を代表するものとし、中世を以て超自然主義を代表するものとし、そして、最後に、近代を以てロオマンチシズムを代表するものとしたのであつた。

然し、このやうに有史間の年代を三期に區分することが、全體として、人間の文化の進行を理會する上に取つて唯一の方法であるとは誰れも速了せぬであらう。そこに十分に優れた理由さへあれば、其等に一を加へて四つとするも、或

は其れより一を減じて二つとするも差支ないわけである。わたくしは、現にこの論文に於てわたくしの有てる興味よりして、人間の文化の進行の象徴として知識の變遷を考察するに方つては、有史間の年代を二期に區分することが一層便利である、即ち、一層合理であるとするものである。それは其れを古代、近代の二つに區分し、文藝復興を以て中世を割し、其れ以前をして古代に屬せしめ、其れ以後をして近代に屬せしめることである。

さうすると、わたくし共は大まかに觀て、これまで行はれた知識に二つの型のあることを見逃がすことは出來ない。其等の一つは文藝復興期の前に行はれたものであり、他の一つは其れの後から行はれ始めたものである。わたくしはこゝに前者を希臘型と呼び、後者を近代型と呼ぶであらう。

此等の二つの型はその志向に於て、その構成に於て、互に反對すると見えるほどに異なるが、其れは、此等の各の工夫された社會の理想と組織とが異なるところより自然に來たつて居るのであつて、忠實に生活の機關たらんとし、事實、さうなつて居たことに於ては、全然、同一である。古今を通じて、知識に與へられた役目はたゞ一つしかなかつた。其れは、個人的に、及び、社會的に、知覺を統一するために其れの中に概念を見出だし、衝動を整頓するために其れの中に理想を見出だすことであつたと言へる。然し、如何にして知覺の中に概念を見出だすか、如何にして衝動の中に理想を見出だすか、隨つて、如何なる風に此等の二つの組に含まれた項の關係を考慮するかに依つて知識は希臘型ともなり、近代型ともなるのである。

古代の民族の中で、希臘人は思索力と感受性とに於て最も豐潤に惠まれた民族であつた。他の民族がなほ神話と、傳說と、習慣との黎明の裏に、模索しつゝ生活して居る間に、彼等希臘人は夙に其等のものを彼等の理性のはたらきと其れの成果にまで啓明し、偏に、その理性の命令に依つて彼等の生活を處置して行かうとしたのであつた。彼等に取つて

は、生活の方針なるものは、獨り自由討議と、自由精神とに依つてのみ創造さるべきものであつたのである。

然し、概して言へば、希臘人に取つて世界は既定のものであつた。世界は完成された樣式を有つた類型の體系であつた。されば、知識の有ち得る役目はたゞ其等を的確に見出だし、總べての個體をしてそれぞれ本來おのれの屬する類型の中に正當に一つの位置を占めさせることに限られたのであつた。プレトオの理念説も、アリストオトルの論理學も、この假定の下に組織されたのである。希臘の彫刻や悲劇が表現しやうとした理想も希臘人が一般に奉じて居た宇宙觀と人生觀との註脚に過ぎない。

之れを要するに、生活に關する希臘人の理想は靜的であつて、動的ではなかつた。改造的ではなくして、保守的であつた。成るほど、彼等は自由討議と自由研究との精神に依つて生活の方針を確立しようとして努めて居た。其れに據らざる生活の方針は奴隷的のものであると考へて居た。然し、其れは神話や、傳説や、習慣を破つて其等の外に其れを創造しようとしたのではなくして、其等の中に承認し得る事由を見出だすことに依つて其等を生活の方針としようとして居たのである。彼等に依つて理性の生活は、知覺を概念に、衝動を理想に、個體、若しくは、個人を類型、若しくは、階級に服從せしむるにあるとされたのは極めて自然のことである。斯くして彼等の藝術は彫刻に、彼等の政治は貴族主義に、彼等の學問は幾何學と形而上學とにまで結晶された。此等のものは、其れの類に於て、嘗て人間に依つて工夫されたものの中で最も卓越したものであらう。然し、畢竟するに、靜的であり、保守的であることを其れの理想とする生活の表現であり創造である。

この宇宙觀と人生觀とは、その後、希臘の文化が滅び、基督教の其れに依つて取つて代はられるに及んで、大分に同化され、變化され、畸形化されたところはあつたが、大體に於て、中世に至るまで傳承されて行つた。

ところが、十四世紀に至つて人間の宇宙觀と人生觀とに一大變化を生ぜしめた一つの運動が起つた。其れは、即ち文藝復興の其れである。其れの原因としては、通例、當時の學者や、藝術家や、自然研究者が久しく埋沒して居た希臘の文化にまのあたり接觸し、其れより來たる溌剌たる刺激の感化に依つて彼等が新たに自然の美と人生の意義とに甦つたことが指摘されるのである。わたくしと雖も古典の、特に、プレトオの新たなる研究が彼等の呼吸のために、彼等の未だ曾て經驗したことのない新鮮な、そして、自由な空氣を與へ、其れが文藝復興の機會となつたことを疑はない。然し、其れの眞の原因は彼等の心靈の不思議なはたらきの中に索められねばならぬと思ふ。

凡べて現存する或る狀態に反抗して其れを打破しようとする運動は、過去に彼等の理想を求めることを標的とし出立したのである。然し、其れはほんの手掛りに過ぎない。わたくしは復古を名として起らなかつた運動の一つも無かつたことを知るが、其れと同時に、其の結果の復古に終つたものの一つもあるのを知らない。如何なる改革の事業にしても、其れが一つの古櫃より取り出されたぼろぼろの衣冠の假裝行列でない限りは、過去の文化の復活のやうなものに依つて成就される筈はない。彼等は彼等の理想の標的を過去の如何なる時期に取るにしても苟も彼等の祖先と彼等とが其の時期と彼等の當時との間に閲した體驗が彼等の上に何等の生理的、及び、心理的の感化を殘さないといふことが假定され得ざる限り、其の文化がそのまゝで復活されるといふことは想像もつかぬ話である。其の文化の意義さへも已に其の當時のものとは全然異なつたものしか有てゐではないか。されば、復活は總べての場合に於て、其の實、新生である。わたくしがこゝに問題として居る文藝復興に關しても、道理は同一であらねばならぬ。當時の人々は現存の狀態に反抗し、其れを打破しようとして、偶ま彼等の力を用ゐる槓杆を希臘の文化に借りたに過ぎない。其力の性質や其れの向けられた方角は全然、彼等の生活の中に磅礴し來たつた彼等の理想であつたのである。かう觀て來れば、彼等の創造した宇宙觀

と人生觀とが其極致の教權を超越したものであつたのみならず、古典文化の傳統を超越したものであつたことに何等の不思議もない。

實に文藝復興の現象は、到底、千古の驚異であり、神秘である。然し、强ひて之れが說明を索むれば、例へば、一滴、一滴と地殼を穿つて深く地層に入つた石淸水が、人知れぬ中にそこに溜つて井を堀り、河を通じて一刻も息まず、終に遙か彼方の荒野に於て、驀然、一條の洪泉となつて噴出したやうなものであらうか。兎に角、文藝復興は人間の歷史に於て起つた最も重大なる出來事であつた。何故ならば、其れの洗禮に依つて、人間は其れまで彼れが一度も體驗せざる風に、程度に、自分の欲望の尊貴と、自分の才能の威力とを意識し、自覺するに至つたからである。

近代人に取つて世界は未定のものである。世界は其れ自づからに何等の既定の類型も、階級も有つて居るものではない。若しさういふものがそこに見出だされるならば、其等は人間が彼れの生活の便宜のために創造したものか、若しくは、是れより創造しようとする圖案に過ぎない。隨つて、其等は彼れの努力に依つて無限に改造され得るものである。個性はあらゆる樣式と秩序との動力である。この意味で、この世の中に於て唯一の實在と目せらるべきものは、獨り個性だけである。希臘人が其等の前に慴伏した類型や階級の如きは、畢竟するに、個性に依つて工夫された分類と分業との沈澱であるから、其等はどこまでも個性の支配の下に隸屬すべきものである。

之れを要するに、近代人の宇宙觀と人生觀とは動的であつて靜的ではない。保守的ではなくして改造的である。彼等の生活の理想はおのれの欲求を過去の神話や、傳統や、習慣に服從せしめるところにはなくして、過去の神話や、傳統や、習慣をおのれの欲求に服從せしめ、適宜に其等を改造して行くところにあるのである。斯くして、近代人の藝術は(尠なくも其れの理想は)音樂であり、彼等の政治はデモクラシイであり、彼等の學問は微積分と、自然科學と、認識

論とである。

希臘型の知識は論議に依つて過去の生活の方針を辯護することを目的として作られ、近代型の知識は實驗に依つて將來に向つて新たなる生活の方針を開拓することを目的として作られる。隨つて、希臘型の知識は常に疑ふことを許さない大前提を立し、共れの範圍の中に將に統一さるべき個々の事實を拘束して、或る結果を引き出さうとする演繹法を共れのヴエヒクルとし、近代型の知識は始めから何等の大前提を立せず、將に統一さるべき個々の事實をして自由に共れも綜合意義を發揮せしめる歸納法を共れのヴエヒクルとして居る。希臘型の知識は、往々進歩の敵となることはあるが、近代型の知識に至つては、常に改造の味方たることを失はない。共れはいつでもわたくし共の生活の理想の命令に隨つて、おのれの形態と精神とを變改することを辭せない。されば、世の中に若し知識を攻擊する個人、若しくは、階級があるならば、彼れの、若しくは、彼等の攻擊は希臘型の知識に向けられることはあつても、決して、近代型の共れに向けられてはならない。何故ならば、さうすることは彼等に取つて自家撞着となるからである。

四、知識に於ける生存鬪爭

「理想は吾々を驅つてアレナに赴かしめる」とハイネは言つた。理想は動力である、無上命令である。わたくし共が或る理想のために戰ふ時には、わたくし共は理想を以て戰ふのではなくして、理想がわたくし共を使つて戰はしめるのである。ソクラティスがアテンスの法廷に於て、自分の行爲を釋明し、法官が彼れに死刑を宣告した時に、單に所信に依つて動いて居たといふ點からだけ觀れば、直は全たくソクラティスにあつて、曲は悉とく彼等法官にあつたと言へようか。彼等は不正義の徒であつて、獨りソクラティスが正義の士であつたと言へようか。わたくしは必らずしもさうは考

へない。何故ならば、彼等は『神を瀆し靑年を墮落させた』といふ條件の下に彼れを告發し、そして、ソクラテイスは當時のソフィスト等の口吻に紛らはしき口吻を以て、一般に神聖とされて居たものに關して、やゝ輕佻に論議し、批判して居たのであるから、彼等の見解よりすれば、彼れには確かにさう解釋される行爲が無かつたとは言はれぬからである。つまり、彼れと彼等との間の衝突は、彼れの理想と彼等の理想との間の鬪爭であつたのである。されば、後世よりソクラテイスの行爲が賞讃され、彼等の處置が非難されるのは、彼れが理想に據つて動き、彼等が理想に據らずして、或は、理想を枉げて動いたからではなくして、どちらも理想に據つて動いて居たのであるが、たゞ、アテンスの、そして、人類の幸福の大局よりすれば、ソクラテイスの理想が彼等の理想より遙かに優れて居たからである。

一度、ダアウィンが進化論の假定に依つて種の存亡と變化との條件の說明を試みて以來、其れは啻に動物界の現象を說明する一大利器たるに止まらず、延いて、人間界の現象を說明する一大利器となつた。今日に於ては、言語にしても、信仰にしても、道德にしても、法律にしても、はた、政治にしても、苟くもそこに存亡があり、變化があるところのものに關しては、悉とく其れの說明の方法として進化論が、應用され、そして、進化論は他のあらゆる種の理論よりも遙かに優れた効果を擧げて居るのである。知識も、無論、其の範疇を脫するものではない。

抑もダアウィンに依つて創設された進化論とは如何なるものであるか、如何なる見地に據りて種の存亡と變化とを說明しようとするのであるか。

總べての生物は彼れの置かれた境遇に適應することに依つて、始めておのれの生存を保障し得る。然し、境遇は絕えず變遷して居る。されば、新たに生れ出づる動物にして、おのれの生存を保障しようとするならば、彼れの境遇が變遷する風と程度とに步調を合して變化せなければならないわけである。然し、新たに生れ出づる動物は其等の兩親より身

體の構造と動作の樣式とに於て異なつて生れ出づるが、此等が必らずしも彼等の境遇の變遷して居る風と程度とに一致はしない。否、彼等の或るものは、其等に逆行して生れ出づるのである。そこで、境遇への適應を標準とすれば、新たに生れ出ずる動物に優者と劣者との差別が生ずる。優者は生存し、發達するのに、劣者は衰替し、滅亡することになる。されば、境遇に適應すると、しないとは、新たに生れ出づる動物に取つては、偶然の事柄ではあるが、この偶然の事柄が彼等の死命を制することになるのである。これが進化論の大意であるとわたくしは理會して居る。

さうすると、進化論を移して人間界の現象の説明とする場合には、其れの上に一つの重要なる變更を施さなければならないことになる。其れは、人間は動物とは異なつて、目的を以ておのれの生活を決定する能力を有つて居るところから、境遇といふ意味も極めて複雜になり、其れに適應するといふ意味も、極めて廣汎に、且つ、自由にならなければならぬからである。つまり、彼れに取つての境遇は、物質的の刺激と、併せて、精神的の刺激を含んだものでなければならないし、其れに適應するといふことは被動的に其れに隨順することと、併せて、能動的に其れを改造することを含まねばならぬ。例へば、天國をこの地上に實現して萬民に慰安を與へるために磔殺されたキリストは生物的には確かに境遇適應の失敗者であつた。然し、精神的には境遇適應の大なる成功者と言はねばならぬ。然し、これだけの變更を進化論の上に施した上、わたくしは、なほ其れを以て、人間界に於ける現象の存亡と變化とを説明する理論の中の最も優れたものの一つであるとすることに躊躇せぬ者である。

法律でも、政治でも、道德でも、將た、産業の方法でも、人間の欲求の組織されたものであり、彼れの生活の機關となつて居るものである限り、悉とく知識の樣式を取り、又知識の樣式を取るに至らなければ法律とも、政治とも、道德とも、産業の方法ともなり得ぬものである。されば、此等のものの改造は直ちに知識の形式の改造を意味することにな

る。然し、其等の改造は常に闘爭の過程を經て結果するのであるから、隨つて、知識の形式の改造も闘爭の過程を經てのみ始めて結果するといふことになるのである。

何故に法律、政治、道德、產業の方法等、總べて知識を其れのヴェヒクルとするものは闘爭の過程を經なければ、改造されないか、變遷されることが出來ないか。これは、深く其の源を人間の生活の固有性に發して居るのである。わたくしは、さきに其れを生物的法則、及び社會的傾向と呼んで、其等が如何なるものであるかを抄しく髣髴したのであつた。こゝには、一層詳しく其等の性質とはたらき振りとを考察して見よう。

生物の生活には一つの法則がある。其れは或る機會に於て、或る目的に對して役立つた作用は、一つの組織となつておのれを保存しようとすることである。わたくし共は、其れを個體の場合に於ては習慣と名づけ、種族の場合に於ては遺傳と名づける。彼れの置かれた境遇にしても、又は、彼れの子孫の置かれる境遇にしても、其れが絶えず變遷するとは言つても、急に激變するものでないから、言ひ換へれば、全然同一の機會は續かないが、ほゞ類似の機會は常に起るのであるから、一度役に立つた作用は一度限りに解體されずに、次の機會に於て其れが利用されるために保存されることが必要である。されば、習慣も、遺傳も、無益の能力と消耗とを避けるための自然のエコノミイより來たつて居るのである。されば、理想的に考へれば、其れは、（類似の機會といへば、既にその中には多少の變遷の生じたことは假定されて居るのであるから）次の機會が要求する程度に隨つて素直に改造され得る風に柔軟性を保つておのれを保存すべきであるが、事實はそんなに都合よくなつて居らぬ。おのれを保存する法則は必要とされるあらゆる改造に反抗してまでも、往々、おのれを保存しようとするのである。こゝに、其れが孤立となり、生活の中に分裂を齎らすことになる。尤もこの進行がこの極度に達しておのれの存在を危殆に陷らしめることになれば、自己改造の動力は、自然、其の中より

はたらき出すのであるが、それまでには餘程の期間がかゝる。この生物的法則は人間と雖も繼承して居るのである。たゞ意識を以て行動する人間に在つては、特に、彼れが知識を以て反省するやうになつて來ては、この生物的法則は大分の變更と修正とを受けることになる。

知識の職分は反省することにあるが、反省の作用は其れの役立つ主體の中に沈澱する矛盾のために其れが解體するまでに至るに先立ち、若しくは、さうする性質を有つ矛盾の發生を豫想して主體の組織を改造するところにあるのである。然し、かゝる職分を有つた知識と雖も、人間の生活の所產である。隨つて、其れの特徵を分受することを免かれない。其れが一つの形式を取り、その形式が生活に役立つことが證據立てられると、やゝもすれば其れは生活の要求より孤立することになる。今日に於ても、人類の多數に取つて、數千年前に工夫された信仰や、道德や、產業の方法が殆ど尠しも反省を受け入れる餘地を有たないまでに、其の原型のまゝ行はれて居るのでもこの間の消息は十分に了解出來る。

社會的傾向は生物的法則の變更されたものに過ぎない。生物的法則が分業的に異なる個人の間に、若しくは、異なる階級の間に分布されたものが、即ち、社會的傾向である。さうなると、自他の利害觀念の關係が附け加はることになるから知識の形式の改造は一層も二層も困難を增して來るのである。信仰の改造と雖も、所詮は、生活の方針としての知識の形式の改造に他ならないが、宗教改革がいつでも流血酸鼻の火と劍との鬪爭であつたのは之れが何よりの證據である。

トオマス・ハツクスレエは、或る論文に於て、教權と實驗とは全然異なる原理に立つて居る、と痛論して居る。然し、此れは彼れの誤謬である。如何なる教權と雖も、苟くも其れが生活の方針となつた以上は、或る時代に於て實驗の

知識の上に築かれなかつたものは一つもない。若しさうでなかつたならば、其れが教權となり得る理由はないではないか。たとひ其れが神意とか、神託とかいふ寓言を以て行はれたにしても、其れの對つて說かれた民衆の生活に依つて、其れが便利であるとか、眞理であるとか證明されなかつたならば、どんなことをしても、其れが彼等の心の中に崇敬を得る理由はないではないか、其の實驗なるものが實驗科學者たる、そして、實驗科學者の狹隘な見解の上に出ることの出來なかつたハツクスレイが實驗と認めたものとは大分其の種を異にして居たことは言ふまでもないが、兎に角、正しく實驗であつたことに一點の誤りない。たゞ、其れが時代、時代の要求に應じておのれの組織を改造することを怠つて來たから、當時の生活の要求を標準とすれば、其れの意味を大いに減却して居ただけのことである。そして、これは、生物的法則と社會的傾向とより來たる拘束に依つて其れが久しく實驗たるに必要なる改造を妨げられたからである。ハツクスレエが全然實驗の知識の上に築かれた知識であるとして力說して居た科學と雖も、(其れに特有の構成の上からして、無論、宗敎ほどではないが)やはり、敎權となるの素質は有つて居るのである。科學上の理論も、一度眞理として確立されると、其れが餘程人間の知覺及び理會と扞格することになつて、其れに取つて代はるべき一つの新らしき理論が工夫されても、なほ、後說が前說の地位と權威とを奪ふには兩者の間に可なりの鬪爭が行はれるではないか。

過去に於て構成され、一時勢力を得た知識の形式は歲月の推移と俱に人間の生活の理想の變遷するにつれて、其れはだんだんに民衆の欲求に滿足を與へないものとなる。この機運が或る程度に達すると、其れに反抗していろいろの知識の形式が社會に對つて提供される。此等は皆まだ試驗的の性質しか有たぬ。其等の優劣を鑑別し、其等の中に賢を選擇を施すのは獨り實驗に依つて其等の效果を吟味する生活だけである。其等の多數は失敗に歸し、たゞ、其等の一、二が成功するであらう。然し、最後に至つて成功して民衆の心を支配するに至るものと雖も、始めに於ては彼等の疑惑と輕

蔑とを招くのが常である。其れの首唱者たるものは、名譽や信用を失なふことは勿論のこと、場合に依つては、生命さへも失なふことのあるのを覺悟せねばならぬ。然し、能く其等の迫害に堪え得て、彼等の努力を最後まで續ける英雄だけが智識の形式の改造に於て勝利の月桂冠を贏ち得るのである。

五、近世生活に於ける知識と知慧

嘗て、人間の歴史に於ては、智識と智慧とは一つものであつた時代があつた、全然一つものでないまでも、一つものの二つの側面であつた時代があつた。然し、近代に至つて、智識と智慧とは二つのものであるのみならず、往々にして相扞格する二つのものとなつて居る。若し近世文明に缺陷があるとするならば、この事實の如きは確かに其等の優なるものの一つに數へらるべきであらう。

漠然と生活全體の幸福を司る本能が先づあつて、其れがおのれを洗練して行くに随つて、一方に於ては智慧と分化し、他方に於ては智識と分化したのである。智慧は個々の方便を總合する理想であり、知識は其の理想を實現するに必要なる手段である。手段たる知識を含まない智慧が空虚であるやうに、理想たる智慧を伴はない知識は盲目である。されば、智慧にして、知識にして、正しくはたらく限り、智慧は同時に知識であり、知識は同時に智慧であるべきである。然し、不幸にして、近世生活に於てはさうなつて居らぬ。ベエコンが『知識は其れ自づからの用を知らぬ。其れを正しく用ゐるものは、其れの外に在り、上に在る智慧である』と言つたのは、彼れが既に人間の生活が墮落して、知識と智慧との分離し始めた時代に生きて居つたからである。然し、（こゝには詳述して居られないいろいろの事情と趨勢とから）彼れに固有する生物的法則と社會的傾向とに依つて、人間が特に近世社會に入つて以來、智慧と知識とは彼れの生

活の或る側面に於てはますます乖離して來たのである。こゝに近世文明の病根が潛伏する。

福澤諭吉に『文明論之概略』と題する一著がある。彼れは、この著の一章に於て、わが國の道徳の西洋の其れに遥かに劣つて居ることを指摘し、彼れは、この理由として、西洋の道徳は知識が其れに加はつて社會的となつて居るのに、わが國の道徳は知識が其れに加はらないために、纔かに私人的たるに止まつて居ると論じて居る。そして、一片の憐憫の情も、たゞそれだけで止まる時は、偶ま或る個人の不幸に同情するに過ぎないが、其れに知識が加はる時は、其れは多数の人々の生活を改造することが出來るといふ一例として、彼れはウィバアフォスの一監獄改良の事業を擧げて居たとわたくしは記憶する。福澤諭吉がこゝで語つて居ることは眞實である。然し、知識と道徳との關係に就いての彼れの洞察には十分の徹底さが缺けて居る。嚴密なる意味に於て、知識のはたらきを胚胎しない道徳は、其の實、道徳ではないのである。知識が道徳に加はるのではなくして、道徳が知識にまで發展するのである。されば、こゝで彼れが語つて居る事實はたゞわが國の道徳はまだおのれの志向を知識にまで分化するに至らないほど幼稚であるのに、西洋の其れは既に知識にまで分化して居るほど發達して居る、といふことに歸するのである。そして、道徳は智慧の別名に過ぎない。

近世の初期に於て、形而上學を排斥し、其れの代りに實驗科學を鼓吹して眞の知識の發達と普及とを圖つたのは、恐らく道徳觀念に燃えて居たヒュウマニストであつた。彼等は當時人類の生活の安定と幸福とを脅して居た貧困と、疾病と、無智と、罪惡との跳梁し、跋扈して居るのを見るに忍びず、之れが撲滅の唯一の方法として、敢然起つて實驗科學を首唱したのであつた。これは道徳の情操が其れの外にある科學を方便としたのでは無くして、道徳の情操がはたらいて、其れがおのづから科學の方便となつたのである。道徳は斂縮した科學であり、科學は發動して居る道徳である。

彼等ヒユウマニストとの苦心と努力とに依つて、道德觀念は科學化され、智慧は知識化された。その結果として、いろいろの産業は勃興し、人間の生活は整頓され、改造されて、こゝに其の面目を一新することになつた。わたくしは交通の改良にも、點燈の改良にも、衣食住の改良にも、道德觀念の結晶を見るのである。

アダム・スミスは、是れより將に科學が産業の方法を革命せんとして居た初頭に立ち、未來に於て科學が人間の幸福の增進に貢獻することの甚大なるべきを豫想して、歡喜と希望とに滿ちながら、あの『國民の富』の一卷を著はしたのであつた。この點に於て、彼れは一個のヒユウマニストとして知識と智慧との一致の素直な信者であつたのである。然し、其の後の成行はどうであつたか。

今日、協同生活を組織する多數の者はヒユウマニストではない。隨つて、ヒユウマニストの寛厚なる精神を汲み取ることが出來なかつた。折角、彼等と彼等の同胞との生活の幸福の增進のために與へられた科學も、彼等は其れの實利だけは理會することは出來たが、必然に其れに附帶する智慧の理想を體することは出來なかつた。これがために、人類全體の解放を目的として知識に依つて工夫された法律や、産業組織の改造は、彼等の手に依つては、人類に幸福を齎らさずして不幸を齎らし、彼等の間に諧調を來たさずして不調を來たらすことになつた。彼等の一部が、而かも、少數の一部が、人類の他の一部、而かも、多數を占むる他の一部を抑壓し、迫害し、そして、この他の一部は（殆ど彼等と同一なる心意氣を以て）彼等を憎惡し、彼等に反抗することになつた。若し彼等ヒユウマニストをして今日九原の下より蘇生し、この狀態を觀せしめたならば、彼等はおのれの卵と信じて家鴨の雛を孵化した牝鷄に等しく、其の結果の意外なるに驚異し、失望することであらう。眞の知識の創造と普及とのために科學を皷吹したヒユウマニズムの導師たちは人類全體の幸福のために其れを皷吹したのである。彼等は其れの一部をして其れを悪用しておのれの貪慾を飽かせるため

に共れを皷吹したのではない。彼等資本家が大して優れた才能も、品性も有たず、容易に巨萬の富を貯へることの出來るのは、決して彼等の實力からではなくして、たゞ彼等が偶然生れ合はした現代の文化の恩惠である。されば、若し彼等にして一片の眞心だにあらば、彼等の同胞の迷惑を顧みずして共れを私しようとするやうな不都合な了見などは起さぬ筈ではないか。彼等にしておのれの行爲の矛盾を覺らないのは、畢竟するに、彼等の生活に於て智慧と知識とが分裂して居るからである。彼等は知慧より分化した知識の實利だけを受用して、共れをして分化せしめた智慧の精神を體認しないのである。

わたくしは今日現存する不滿足なる狀態や關係を改善する最後の方法としては、再び本來の志向に立ち歸つて、智慧と知識とを融合せしむるの一つあるのみであると確く信じて居る。

それならば、どうして一旦斯くまでに分離し、孤立した智慧と知識とをして再び接近し、抱擁せしめることが出來ようか。そこに一つでも方法があるか。わたくしはあると信ずる。そして、共れは有識者と無識者とを合めて、殆ど總べての世人に依つて氣付かれぬことではあるが、さほど神祕なものではないのである。共れを發見し、把住するためには、たゞ心眼にして開かれ、事物の理會に關して一つの新らしい境地にして拓かれさへすれば、誰れにしても、彼れの現在有つて居る經驗と考察力とだけで十分であるのである。わたくしとしても、こゝまで論じて來て、その方法が如何なるものであるかの事柄に勘しも觸れないのは、恰かも龍を畫いて睛を點じないのに等しいから、共れに關して勘しくわたくしの見解を披瀝して見よう。

わたくしからすれば、今日、殆ど總べての世人は現代社會の特徵を誤解して居る。否、全然理會するところがない。隨つて彼等は口を開けば、忽ち共れの墮落を叫ぶのであるが、共れが如何なる性質のものであるか、如何なる理由より

來たつて居るのであるかに至つては、彼等は全然理會するところがないのである。この事柄に關して、彼等などのくらゐの程度に無智であるかは、彼等が、智慧と知識、若しくは、道德と科學とは二つのものである、甚だしきに至ると、相反對するものであるといふ假定の下に、『現今の教育は智育に偏して居る、一層德育を盛んにせねばならぬ』といふ常套語を平氣で繰り返して居る一事からしても解かる。多分、彼等は智育といふもの、德育といふものの何物であるかを知らぬのであらう、教育の何物であるかを知らぬのであらう、彼等自身の語つて居ることの何物を意味するかを知らぬのであらう、若し彼等にして知つて居つたならば、こんな愚にも付かぬことを言つて、それで現代社會の缺陷が匡正されると想像する筈はないから。

わたくしはこゝに現代生活の缺陷の由來と性質とに關する世人の沒理會の象徵として、教育の改善に關する彼等の意見を擧げたから、其れをきつかけにわたくしの考察を進めることにしよう。

わたくしの見解よりすれば、若しわが國の現行の教育に缺陷があり、其れが延いて社會の缺陷に影響して居るといふならば、其れは斷じて智育の不備より來たつて居るのである。智育に偏するからではなくして、其れを十分に徹底させないから來たつて居るのである。其れが淺薄なものであつて、其れが學生に授けられるに方つて本來其れに含まれた志向が十分に發揮されるに至らないからである。其れに含まれた志向が十分に發揮されるやうに知育が授けられゝは、其れは直ちに學生の人格の發達に關係を有つて來なければならぬから、其れが、即ち、第一義に於ける、眞正の意義に於ける德育であると思ふ。これを外にして、第一義に於て、眞正の意義に於て、德育なるものが如何なる形に於てでも存在し得るかをわたくしは知らぬ者である、事實さうであるのに、德育は智育と獨立して、場合に依つては、其れに反對して成り立つものであるといふ假定の下に、智育を排して德育を奬勵しようとするやうな根本的に間違つた意見にはわ

たくしはどうしても不贊成である。そんなことをしたならば、其の結果は、反つて社會に不德の市民を增加することになることは火を睹るよりも明らかである。

智慧と知識とをして、若しくは、道德と科學とをして接近し、抱擁せしめることは殆ど總べての世人が考慮して居るやうに、(彼等の想像に隨つて)知識と科學との外に在り、そして、上に位する智慧と道德とをして權威と命令とを以て其等に滲ましめることに依つては達せられずして、獨り知識と科學とをしておのれが現に爲しつゝあることの上に反省して、其等を醇化し、其等に含まれてゐる志向の內面的發動から、其れの作用に於て、おのれを智慧と化せしめ、道德と化せしめることに依つてのみ達せられるのであるとわたくしは確く信ずる者である。

世人はやゝもすれば現代文明を其れが物質的であつて、精神的でないと非難する。然し、わたくし其の經驗の事業に對照して、物質的とは如何なることであり、精神的とは如何なることであるか。精神的なる行爲は如何なる組織を有するものであり、物質的なる其れは如何なる組織を有するものであるか。わたくしの考へるところでは、考へ得るところでは、精神的と物質的との差別はたゞわたくし其の經驗の、若しくは、行動の樣式に關してのものである、其等の內容の種に關するものではない。どんな欲望の滿足でも、其れと他の欲望の體系との間に調和を保つやうになさるれば、其の樣式は精神的であり、之れに反して、どんな欲望の滿足でも、其れと他の欲望の體系との間に矛盾を生ずるやうになさるれば、其れは物質的なのである。さうすると、若し現代文明が物質的であつて、精神的でないとしたならば、(そして、わたくしは、わたくしの解釋して居る意味に於て、其れが事實であることを十分に認める者であるが)其れは必らずしも知識が發達したり、科學が勃興した結果ではなくして、知識も科學もまた其の生長や發達の途中にあるがために、十分におのれの志向を反省することが出來ず、隨つて、人間の生活の總べての部分と完全に諧調することが出來な

いためである。

さきに引いた實例に對照して、如何に智慧と知識とをして再び接近し、抱擁せしむるかの工夫を語つて見るならば、其れは現存の產業の方法を破壞することではなくして、其れに含まれた當初の、そして、本來の志向を追窮し、擴張して、其れをして其れに携はる總ての人々が公平に其れの恩澤に浴し得るやうに、產業の制度を改造することである。さうすれば、斷片的にはたらいて居た知識は統一されて智慧となり、こゝに始めて現代文明に適した、現代文明を指導するに足る新らしき道德がおのづから成立するといふのである。

六、知識の民衆化

概して言へば、古代の社會は二つの階級から成り立つて居たのである。其等は支配の階級と被支配の其れであつた。前の階級に屬する人々の生活の特徴は、考へるだけで、はたらかないことであり、後の階級に屬する人々の生活の特徴は、たゞはたらくだけであつて、尠しも考へないことであつた。それであるから、文字通りに、前の階級に屬する人々は主人であつて、後の階級に屬する人々は奴僕であつたのである。かゝる組織を有つた社會に在つては、如何なる文化が創造されるにしても、(其れの創造に貢献する者は、直接、間接の相違はあるも、そこに協同生活を營む總べての人々であることは自明の理であるに拘はらず)其れを享樂するものは一半の人々に限られて、他の一半の人々は殆ど其れに與らなかつたのである。協同生活といふものに關して現にわたくし共が抱く理想を標準とすれば、かゝる社會組織の不正であることは言ふまでもなく、又、不合理であると言はねばならぬ。希臘の社會はこの種のものの一つであつた。

希臘人は古代に於て最も優れた文化を享樂して居た國民である。彼等の創造した藝術と、哲學と、政治思想とは、千

古に亙つて燦然たる光輝を放つ。然し、其等は彼等をして其等の修得と洗練とに必要なる條件として、彼等のために卑乎たる手足の勞作に服した奴隷なる一つの階級の存在と是認とを俟つて始めて成立の可能を有つたものであつた。

アリストオトルが奴隷は人間の文化に取つて缺く可からざる制度であると說いたのは有名な話である。アリストオトルの『人間』の概念の中には奴隷全體は含まれて居らなかつたのである。つまり、彼れの眼には奴隷は人間ではなかつたのである。協同生活の維持と繁榮とのために大切な貢献をなして居る一部の人々が、人間でないとは隨分奇怪な考ではないか。わたくし共はこんな考を信ずることは出來ない、採用することは出來ない。其れは不正であるのみならず、又、不合理であるからである。何故に其れが不正であるか。協同生活を營む一部に義務のみを負はして、權利を與へなかつたからである。何故に其れが不合理であるか。其れは其等の一部の人々をして文化の恩澤を享樂せしめない自然の結果として、彼等より來たる惡影響に依つて其の文化の破壞されることに氣付かぬからである。ソクラテスはアテンスの法廷に立つて、彼れが青年を腐敗させると論告された時に、『否、自分は決して青年を腐敗させない、善き隣人を有つことは惡き隣人を有つよりも自分の幸福に取つて大切であるから。』と答辯したのであつた。然し、アテンスの社會は奴隷制度を支持して努めて多數の惡き隣人を有たうとして居たのである。

斯くの如き制度を有つた社會に於て養成され、發達し得る文化の機關は、其れが政治にしても、學問にしても、藝術にしても、たゞ小數より成り立つ優秀階級の滿足を其れの對照としたものとならねばならぬ。つまり、排他的であるといふ意味に於ての貴族的であらねばならぬ。今日、わたくし共の正義と合理の觀念とはそんな種の文化を有つことに反撥する。知識にしても、わたくし共が靜平な良心を以て知識と呼び得るものは、わたくし共と一つの協同生活を組織する總べての人々の幸福と啓發とを目的として、一層廣汎な、そして、一層自由な基礎の上に立てられねばならぬ。如何

なる意味に於ても、そこに、前瞻的に身分の差別を付けるものであつてはならない。其れは、總べての人々のために組織され、そして、だんだんに總べての人々に依つて共有し、共營され得る種のものでなければならない。わたくしは此の理想のはたらく過程を知識の民衆化と呼び、其れの成果を民衆化された知識と呼ぶのである。

トオマス・エッチ・グリインは生活に對する希臘人の理想と、基督教徒の理想との優劣を論じたのであつた。そして彼れは、希臘人は多數の人々の生活を犧牲にして政治や、哲學や、藝術に卓越しようと志したのに、基督教徒は其等に卓越する才能や、餘裕を犧牲にして多數の人々の生活の向上を圖つて居るところから、基督教徒の理想は希臘人の其れに比して確かに優れて居るとしたのであつた。わたくしは、グリインを以て近代人の寬厚にして微妙な情操を代表するものとして、彼れの評價に滿腔の同意を表する者である。

相應な名譽と安逸とを贏ち得る一切の機會を棄てて、アフリカの蠻人の布教に殉死したスタンレエの如き、若しくは、モロカイ島に渡つて癩患者の看護に一生を終つたドミアンの如きは、獨り、近世に至つて人の心に芽ざした人道主義の作り出し得た英雄として、わたくしは近代社會の理想に對して一方ならざる崇敬を拂ふ者である。然し、近代の人道主義は、其れの情操からすれば、惱める者を慰め、病める者を癒やすところよりはたらき始めねばならぬであらうが、其れの發動からすれば、其のはたらきは終にそこに止まるべきであるか。こゝに、わたくしの疑義がある。

工藝や、美術や、科學や、哲學は人間が彼れに固有の性情を以て生活して行く間に、彼れの欲求に隨つて彼れの生活の完成として、自然に其れより分化し、洗練されたものである。否、精細に考察すれば、遊戲に對する欲求は仕事に對する欲求と並んで、或は、其れに先立つて既に人間の原始生活を支配して居たのである。して見ると、人道主義を名として、性來、工藝や、美術や、科學や、哲學に特殊の才能を有する人々までが其等の一切を棄てて、一身を謂ふところ

の社會事業に投ずるのは輕浮な所爲であるとわたくしは思ふ。眞に民衆の永遠の幸福と啓發とに志し、そして、如何なる方便に依つて其等が最も善く實現され得るかを理會して居る者が、こんな輕卒な態度に出でてはならない。『人はパンのみにて生くるものにあらず。』とは、あらゆる階級に生れ、あらゆる境遇に置かれた人間に對つて說かれたものである。如何に衣食に窮迫して居る人々と雖も、苟も彼等にして人間の性情を受け繼いで居る限りは、彼等の心の中に知識欲と審美欲とを尠しも餘さないほどに窮迫して居る者は殆ど無いのである。無論、彼等は衣食の供給を欲求して居る。然し、さうであるからと言つて、其れがために、(彼等の趣味と理會との許す限りに於て)、彼等が工藝と、美術と、科學と、哲學との供給を欲求して居らぬといふことを誰れが斷言し得るか。若し世の中に民衆の大部分を單に『經濟人』とのみ見做す者があるならば、彼れは、彼等の人間性に全然盲目の者である。わたくしは、今日、勞働者の經濟狀態を改造することの急務なるを認める。其れと同時に、彼等の精神狀態を改造することの急務なることをも認めるのである。されば、彼等の經濟狀態を改造するのに適當な素質と素養とを有つた人々は其れに從事するがよい。そして、決して其等の人々の數の多きを厭はない。然し、其れがために、彼等の精神狀態を改造するに適當な素質と素養とを有つた者までがおのれの才能の適處を棄てて、悉とく彼等の經濟狀態の改造の事業に趨るのは、眞に彼等の永遠の幸福と啓發とに忠なる所以でないとわたくしは信じ、且つ、語るのである。わたくしはさきに希臘人を非難した。其れは、決して彼等が優秀なる文化を創造したからではなくして、偶ま彼等の創造した文化が彼等と協同生活を營んで居た多數の靈魂を排外して出來たものであり、獨り、其等を排外することに依つてのみ出來得る種のものであつたからである。

知識の民衆化に依つて其れの形式の改造されることは必然である。然しながら、其の品質の低下されることは必要ではない。其れは民衆一般の幸福と啓發とを目的としなければならぬから、彼等の少數の幸福と啓發だけを目的として工

夫された其れの從來の形式は改造されねばならぬ。然しながら、總べての民衆の協同を俟つて建設さるべき文化が從來のものに比して、その構成と意義とに於て、遙かに豐富であり、莊嚴であるべきものであるならば、其れの品質はますます昂騰しなければならぬわけではないか。然し、この事は文化の開拓を未來に求める見識英邁なる勇士と語り得ることであつて、其れの典型を過去に探す情操卑屈なる俗士と語り得べきではない。箇中の消息を篤と會得するためには、わたくし共は、清新なる氣分と明快なる判斷とを以て、的確なるパアスペクチヴを通して、事物の相關價値を改價することが肝要である。

知識の民衆化の理想とするところは、知識の分化を貧塞にすることにあるのでもなく、又、其れの品質を粗硬にするにあるのでもなく、之れに反して、全然自由と緊張の氣分との上に、今日在るよりも遙かに光彩陸離たる文化を建設するために、知識の分化を複雜にし、其れの品質を精緻にするにあるのである。この理想を實現するには、何よりも先に、この世の中には、ただ考へるばかりではたらかない者や、たゞはたらくばかりで考へない者は一人も無くなつて、總べての人々をして、等しく、考へながらはたらき、はたらくために考へる者たらしめやうと心掛けるだけである。

七、知識の性質に關する社會主義者の僻見

カアル・マアクスの思想の中には二つの異なる要素が見出だされる。其れの一つは彼れの研究より來たつたものであつて、科學的であり、他の一つは彼れの單なる情操より來たつて居るものであつて、非科學的である。此等の科學的の要素と、非科學的の要素とが結合して、彼れの歷史觀と社會改造の方策とを形造つて居るのである。わたくしは何を指して非科學的の要素と呼ぶか。彼れの革命的憧憬が、即ち、其れである。彼れの階級鬪爭の理論はこの革命的憧憬の知

的表現に過ぎない。

今日、社會主義者の或る一部の者の間に見出だされる現存の知識に對する、（わたくしからすれば極めて沒批判的なる）彼等の反感と不信とはマアクスの思想の中に含まれた革命的憧憬より自然に發して居るのである。こゝには、現存の知識に對して彼等が抱く反感と、不信とにどれだけの眞理があり、どれだけの不眞理があるかを一通り點檢することに止める。

現存する知識の體係は其れが歷史であつても、倫理學であつても、論理學であつても、經濟學と等しく資本主義の下に沈澱され、發達したものであるからと言つて、此等のものは全然新らしき立場より廢棄されねばならぬと彼等は主張するのである。斯くして、彼等は此等のものを敎へる大學を排斥し、そこに學んだ、謂ふところの知識階級に屬する人人を排斥するのである。彼等の見るところに一分の眞理のあることはわたくしも認める。然し、其れは全部の眞理であらうか。一部の眞理を全部の眞理と受け取るがために、終に彼等の主張をして虛僞に陷らして居ることはないであらうか。

從來の人生の研究者は、其れが歷史家にしても、哲學者にしても、餘りに人間の經濟的欲求と社會の經濟的關係とが生活全體に及ぼす勢力を無視して居たことは事實である、驚くべく、悲しむべき一大事實である。此等の學者の所見と所說とに隨へば、近代に至るまで、人間には經濟的欲求がなくして生き、社會は經濟的事實がなくして動いて居たやうに見える。然し、初めより衣食住の改善が人間の欲求の中で最も根本的のものであり、政治の欲求も侵略の欲求も、畢竟するに、間接に自分のために、他人のために、衣食住を支配する力を得んとしてさきの根本的のものより派出されたものとすれば、どうしても人間が經濟的欲求なくして生き、又、社會が經濟的關係なくして動いて居た時代があつたと

は思はれない。さうして見ると、其等の歴史家や哲學者は人生を研究すると言ひながら、何を研究して居たか一向解らないことになつて了ふ。

近世に至つて、個人に於て經濟的欲求が、社會に於て經濟的關係が人間の生活の樣式と方向とを決定するに與つて大なる勢力であることを認めたのは、決して、カアル・マアクスに始まつたことではないことは、佛國の重農主義者や、英國のアダム・スミスを始めとして、經濟の研究者に多くの光輝ある名を數へ上げることが出來るのでも解かる。然し、一層組織的に、一層徹底的に、之れが史的解釋を試みた者はマアクスである。その結果は、（實は、經濟史觀であるが、）俗に、唯物史觀の名を以て呼ばれて居るのである。

確かにマアクスの見解には多大の眞理が含まれて居つた。然し、其れが無制限に誇張されることになると、一つの大なる誤謬に陷いるとわたくしは考へる。經濟的欲求と經濟的事實とはマアクスの想像したやうなはたらきを以て彼れが想像したやうな廣がりにまで人間の生活を支配して居たのであらうか。

第一に經濟的欲求と非經濟的の欲求との關係を考へて見る。

若し人間の爲すこと、考へることの總べては彼れの欲求の滿足のためであるといふならば、この考察に勝る眞理はない。其れは一つのツルイズムである。然し、始めから彼れの欲求の中には普通の意味に於て實行に依つて滿たされるものと、遊戯に依つて滿たされるものとの二種のものがあつた。遊戯は目的を有たない活動であるから、其れ自づからには經濟的考慮に依つて支配されることはない。のみならず、往々、經濟的考慮を犧牲にしても實現されるものである。それが啻に後に至つて繪畫や、彫刻や、音樂の本體となるのみならず、工藝を感化し、延いては生活のあらゆる側面を感化して、其れに美的外觀と、美的秩序とを附け加へるものである。

それから、理知的方法に依つて經濟的欲求が滿たされ得ない時には、其れの代償として、人間は、前のものより遙かに優れたものであるといふ想像の下に、感情的方法に依つて其れを滿たさうとして、その質、非經濟的の、若しくは、超經濟的の設備を計畫して來たのであつた。魔法も其等の一つである、宗敎も其等の一つである。形而上學も其等の一つである。實際の生活に於ては、此等の經濟的の方法と非經濟的の、若しくは、超經濟的の方法とは互に錯綜し、紛糾して、或る時は經濟生活を援助し、或る時は其れを阻害したが、兎に角、人間の生活を整頓する方法として、若しくは、其れに慰安を與へる方法として、經濟的實利を代償して、非經濟的の、若しくは、超經濟的の美感が多分に人間の生活の中にはたらいて來たことは否むべからざる事實である。

第二に、經濟的活動と資本主義との關係を考へて見る。

經濟的活動は、もともと、人間の有てる性情を以て、彼れの置かれた境遇よりの刺激を利用して、最も多く彼れの欲求を滿たす方法として工夫されたものであるから、其れに關聯する制度の組織されるに先立つて、既にはたらいて居たものである。其れは制度の變更するに隨つていろいろの形式を取つて來たが、異なる形式を一貫して、大體、其等の制度より獨立し、其れに依つて大して影響されずに今日に及んだ部分がある。哲學や倫理學政治學の研究對象の中には多分にこの部分が含まれて居る。經濟學の中にさへもそんな部分は可なりに含まれて居る。例へば、産業を開發する方便として、其れに要せられる器具や知識を改造したり、分業と協同との組織を改善したりしたことである。此等のものは、産業が家庭主義の下に在るも、資本主義の下に在るも、將た、共産主義の下に在るも、大して相違することなき其れの恒久要素である。

事實、かういふわけであるとすると、人間の生活には、たとひ資本主義の時代に於てでも、非經濟的の欲求は無論の

こと、經濟的の活動の中にでも資本主義に依つて左右されない部分が多分にあるのである。さうすると、若し或る學問が其等のものの考察と醇化と統一とより成り立つて居るならば、わたくし共にして其の學問に對して、社會主義者の或る者が爲して居るやうに、反感と不信とを抱くことは間違つて居る。

歴史は二十年每に書き改められねばならぬ、と或る人は言つた。この見解は直ちに他の學問に對してもあてはまることである。總べての學問が人間の生活のヷエヒクルとして始めて其れの存在の意義を有するものであり、そして、人間の生活の理想が絕えず變遷して居るものであるならば、其れは當然のことである。わたくし共が生きた學問を有つて行かうとするには、其れをして隨時の要求に合せしめるがために、絕えず其れを改造して行かねばならぬ。然し、わたくし共がさうする態度は、社會主義者の一部が散漫なる情操を以て其等に對する態度とは大分に異なつたものである。其れは舊きものに對して、好意と信賴とを寄せながら其れを新らしきものにする必要のある限りに於て、其れを改造して行くのである。

八、知識の傳統と階統との拭却

ゲエテは『作用することは存在することである』と言つた。カントの一代の事業はゲエテのこの宣言を哲學的に證明することにあつたとも言はれ得る。物の存在と其れの組織とは、心の存在と其れの組織と等しくたゞ實際に於て心のはたらきの中に、及び、其のはたらきが識別するものの中にのみ見出だされるのである。其れを離れてわたくし共は其等に就いて何事も語ることは出來ないとカントはしたのである。わたくしはゲエテの智慧に心服し、カントの知見に敬服する者である。

『物質は精神の化石化したものである』と觀たのはシエリングであつた。わたくし共の經驗内に於て、物質の特徴は其れが暗黒であることで、精神の特徴は其れが透明であることであるとすると、シエリングのこの見解には（形而上學的にどれだけの眞理があるかをわたくしは知らぬが、）心理學的には十分の眞理はある。其の始め透明なる知識はやゝもすれば暗黒となる傾向を有つて居るからである。其れは横に暗黒なる個所を作り、縱に暗黒なる個所を作るからである。前者の結果は傳統となつて現はれ、後者の結果は階級となつて現はれる。

知識の性質には一つのヂレンマが含まれて居る。如何なる知識の形式でも、（其れが作られる當時の人間の理想と容智のはたらきとを標準とすれば、）悉とく實利の基礎の上に作られたものであることは明らかである。然し、一旦、其れの實利が生活への應用に依つて證明されて來ると、其れは一つの象徴となる。其れが象徴となるのは、實利である間、其れに關する反省のために費やされた力を行爲の實現の方へ注ぐためであるから、有効なる行爲に取つて知識がこの傾向を有つといふことは生活のエコノミイより極めて大切なことである。其の初めに當つて、反省に依つて作られ、反省に依つて支持される知識の形式が象徴とならないならば、其れが役立つ行爲は永久に微弱であるに止まらなければななない。然し、其れが象徴となつて、反省より獨立して生活を支配することになると、だんだんに其れは生活より孤立して、生活の新たなる要求より改造されることがむづかしくなる。こゝに於て、生活の方針として有力なものとなるためには知識は是非とも象徴とならなければならないが、其れが象徴となると、生活より孤立し、時としては、其れに逆行するといふ一つのヂレンマが生ずるのである。

或る知識の形式の生活より孤立して、其れに逆行する程度に進んだものを、尠なくとも、其れの要求に依つて素直におのれを改造しなくなつた程度に進んだものをわたくし共は傳統と呼ぶのである。

總じて、傳統なるものは、或る時代に於て、實利の立場より混沌たる樣式を以て民衆の欲求と實行との中に沈澱したものを、當時の或る天才が（其れが僧侶にしても、若しくは爲政者にしても）受け取り、其れを醇化したものである。其れの出來上つた樣式は民衆の智力を超越したものであるから民衆は其れに對して、多大の崇敬と讚美とを抱くことになる。此れが、たとひ傳統は彼等の理想と扞格することになつても、彼等は自づから其れを改造することに氣付かないし、氣付いても、其れを改造する實力を有たぬ大なる理由である。斯くして、其れはますます象徴としての體系を固め、象徴としての價値を增して行くばかりである。

傳統はわたくし共の祖先の生活の結晶である。彼等の生活條件とわたくし共の生活條件とに共通點のある限り、其れはわたくし共に取つて一つの價値を有つて居るものでなければならぬ。然し、彼等の生活理想とわたくし共の生活理想との間に相違點の生じた限り、其れはわたくし共に取つてそれだけ意義を失なつたものでなければならぬ。そこで、わたくし共が傳統を尊重する唯一の正しき道は、改造しながら其れを利用するにあるのである。若しさうしないならば、傳統はわたくし共に取つて一つの桎梏とはなるが、決して何等の援助ともならない。過去に於て傳統を有たないことは一つの不幸である。然し、其れを有つて、其れに囚はれることは更に大なる一つの不幸である。『聖賢の教は例へば氷のやうなものである。氷は直ちにわたくし共の用をなさぬ。其れをして用をなさしめるには、わたくし共の各がそれぞれ自分の體温に依つて其れを溶かして水と化さなければならない』と二宮尊德は言つた。こゝに彼れの思想はやゝ散漫ではあるが、彼れは傳統萬能の時代に在つて、稀有にも傳統を利用するの道を會得して居たのであつた。

それならば、わたくし共は如何にして傳統を尊重しながら、其れを利用することが出來るか。

傳統を正しく評價するのには、二重の觀點が必要である。其等の一つは、其れが作られた時代の社會狀態を參照し

て、其れの成立の理由を理會することである。其等の他の一つは、わたくし共の生活理想を標準として其れの價値を判斷することである。さきの觀點よりすれば、總べての傳統は多大の意義を有ち得る。後の觀點よりすれば、其等は總かに少許り意義しか有ち得ない。わたくし共は此等の二重の觀點よりして總べての傳統を分析し、已に傳統としてではなく、單に參考として其等を改造しながら利用することが出來るのである。

過去に於て善くあつたものは今日に於ても尙ほ善くなければならぬと考へるのは、今日に於て虛僞となつたものは過去に於ても虛僞であつたと考へるのと等しく迷信である。過去に於て善くあつたものは、今日に於て、必然に、尠くとも其れの一部は惡となり、過去に於て眞理であつたものは、今日に於て、必然に、尠くとも其れの一部は虛僞となるものであるから、わたくし共にして賢くある限り、傳統を利用するの責任があると同時に、其れを改造するの責任があるのである。ヴインケルマンは希臘の藝術を復活したために功勞があるのではない。彼れは近代生活を豐富におるやうに其れを改釋したために功勞があるのである。言ひ換へれば、彼れは、一つの傳統として其れに憧憬したためではなく、近代生活の一要素としようとして其れを研究したために功勞があるのである。

傳統を繼承することは容易である。其れを破棄することも左程困難ではない。然し、其れを適當に改造することは極めて困難な、そして、極めてデリケエトな事業である。理論の上にでもさうであるが、特に實行の上にさうである。此れは、獨り、賢明なる爲政家のみの爲し得ることである。傳統を改造することに關して、大切な事は、其れの風と、程度とを實利の點よりと等しく、傳統に對する民衆の情操の點より考察することである。古來、計畫としては稱讃さるべきものも、傳統に對する民衆の情操を計算の中に入れなかつたために、幾度失敗に歸したか。然し、一層大切なる事は、改造の遂行された後に到つて、其れが民衆の間に新らしき情操を作るのに、どれだけ有力なものであるかを逆賭し

得る智慧をはたらかせることである。この道路にして正しきものである限り、實利の命ずるところに隨つて、大抵の改造は斷行して差し支へないものである。

ユウゴオの『レエ・ミゼラブル』の中に、僧正ミリエルが或る田舍に佛蘭西革命の殘黨の一人として寂しく暮して居る老政客を訪問する一節がある。僧正が彼れの家の戶口に立つと、彼れは忽ち怒聲を發して『一體お前は何人だ』と僧正に尋ねた。そこで、僧正は、『自分は一個の僧侶である』と答へた。すると、彼れは更に、一段と聲を勵まして、『其れはお前の職掌である。自分の問ふて居るのはお前の品性に就いてである』と言つたのであつた。階統の弊害は、やゝもすれば、其れの本體たる資格より孤立するところにあるのである、孤立しないまでも、資格の本來の作用を掩うて了つて、資格をして其れを十分に發揮せしめないところにあるのである。

個人の生活に於ても、社會の生活に於ても、個々の要素の存在は獨り其等の間にはたらく作用に依つて構成され、保障されるのであるが、この作用は統制と相助との二つの樣式となつてはたらいて居る。階統は社會生活に於て（尠なくとも、今日までの文化に在つては）統制の志向の發動に必要なるものとして、統制より自然に沈澱した機構である。然し、作用の全體を組織する個々の要素の價値は其れ自づからに平等であるべきであるのに、統制が、一度、或る機構の形を取つて來ると、其等の要素の間に固定した價値の差別を立てて、或る要素は他のものの上に在り、或る要素は他のものの下に在るとして、道理の關係が、權力の關係となる。こゝに、個々の要素の間に意思の阻隔が生じ、本來自由の融通であるべき作用の中に乖離が起ることになる、この結果は閥である、官僚制度である。閥の形作られる處、官僚制度の形作られる處、どこに一つとして痛ましき暗闘と腹黑き陰謀とが行はれなかつたか。暗闘と陰謀との行はれる處には、才能の自然の發達と發揮とを望むことは到底覺束ないことである。こゝに階統の一切の弊害は一括して歷々認取

される。

生活に於けるあらゆる種の階統を打破することを其れの使命の一つとする知識はおのれの中に階統を沈澱させてはならない、其れを沈澱させる機會と氣分とを潜在せしめてはならない。

生活の要求に應ずるために、知識の形式にはいろいろの種を生じた。例へば、常識の所産を洗練するために科學が生じ、常識と科學との所爲を反省する爲めに哲學が生じたといふ風に。然し、若し常識の職分にして人間に固有する衝動の志向を尊重して、其れをして自然の發展を遂げしめる一事にあるならば、科學の職分にしても、哲學の職分にしても、亦、この一事の他にある筈はない。然し、常識を洗練する目的を以て常識より派出した科學が常識の與らざる一つの獨立した世界を作り、常識と科學とを反省する目的を以て常識と科學とより派出した哲學が常識と科學との與らざる一つの獨立した世界を作つて了ふことは事實ではないか。そして、當初の目的を忘れて、やゝもすれば自足の專制君主の態度を以て、科學が常識に臨む如く、哲學は常識と科學とに臨み、科學は常識の欲求を無視して、おのれの命令を行はうとし、哲學は常識と科學との要請を超越して、おのれの獨裁を施さうとすることは事實ではないか。

知識そのものからの性質として、こゝにわたくしは科學の構成が常識に依つて理會され得るものでなければならぬとか、哲學の構成が常識と科學とに依つて理會され得るものでなければならぬとか論じて居るのではない。そんなことを目標とすれば、常識より識別される科學といふものも成り立たず、常識と科學とより識別される哲學といふものも成立たないことになる。わたくしがこゝで論じて居るのは、科學も哲學、常識の住む知覺の世界を離れてどんなに深く、若しくは、どんなに高く概念の世界に入るにしても、常識と科學と、常識及び科學と哲學との間に歴然一條の關係の筋道だけは保留され、そして、科學と哲學との最後の理想は再び知覺の世界に復歸し、人間に固有する衝動の志向を尊重し

て、其れをして自然の發展を遂げしめるところになければならぬといふことだけである。

例を教育の體系に取るならば、社會生活に有用なる人材を造らうとして個人の生活の時期に應じて、それぞれ、幼稚園より小學校を經て專門學校、若しくは、大學の設備がある。今日、此等のものは、それぞれ、異なつた社會狀態に在つて、異なつた實利と情操とを以て別々に創始されたものであるから、此等のものの間に、其の理想に於て、其の組織に於て、統一はない。此等のものの統制は名目の上の階統であつて、實質の上の統一ではない。たゞ、漫然、學科の難易といふ點から等級を付け、學園の初步は幼稚園であつて、其れの最高は大學であるといふに止まる。

然し、人間が彼れの文化を子孫に傳へ、彼等を通じて其れを擴張するために學校といふものを工夫した最後の目的は、全體として、其れに依つて聰明にして善良なる市民を作ることの一事に限られて居るのである。されば、其れの要素たる一つ一つの學校其れ自づからに、『上』とか、『下』とかの價値の相違があるのではなくして、孰づれの學校にしても全體の目的よりして、最も善く其の作用を滿たして居るものが最も價値があるのである。この立場を離れては、異なる段階に位する異なる學校に異なる價値を附さうとするのは一切無意味であらねばならぬ。一つの階統として學校が見做された時に生ずる弊害は、其れを組織する個々の要素たる個々の學校に固定の價値を附することになるからである。

欲望にしても、制度にしても、學校にしても、其の他の何物にしても、總べて人間の生活の機關として役立つものは其れの作用に依つて役立つのである。然し、作用は其れの成立に干はるいろいろの要素の動的交渉より成り立つのであつて、靜的構造より成り立つのではない。

わたくしは知識をして其れの本來のはたらきを保たしめんがために、其れの形式の傳統となり、階統となつたものの拭却を叫ぶ者である。

九、知識の分業をして常に其れの協同の指標たらしめよ

世の中に、物の發動のはたらき振りを認める者は多いが、其れの據つて立つ原理の精神を知る者は極めて尠ない。世人の多くはやゝもすれば現代を目して分業の時代となし、そして、其れより來たる弊害を數へ上げようとする。恰も分業には百の弊害あつて一の利益なく、わたくし共の現代文化より蒙つて居る損害の十中の八九までは分業といふ一つの事實より來つて居るかのやうに。トオマス・カアライルも確かに斯くの如き一人であつた。然し、如何なる種の活動に關するにしても、協同の原理の存在しないところに獨り分業のはたらきだけ發動することが出來るであらうか。して見ると、わたくしは世人が現代を目して分業の時代とすることに反對はしないが、現代が一面に於てさうであるのは、其他の一面に於て協同の時代であることの事實を會得せんことを彼等に警告する者である。

分析の活動は、必然に綜合の活動を前提とし、綜合の活動を包含するもの、つまり、綜合の活動の一つの表現であることは論理學のわたくし共に敎へるところである。

生物學者の說くところに據れば、總べての高等動物は、其の始め、極めて簡單な組織を有つた下等動物なるアミイバより發達して來た。ところが、このアミイバはたゞ一つの官能しか有つて居らぬ。其の一つの官能をはたらかして、この動物は或る時は手として食物を取り、或る時は鰭として水中を泳ぎ、或る時は眼として敵の近寄るのを感ずるのである。然し、このやうに一つの官能で生の保存に必要なるいろいろのはたらきをすることになると、どうしても其等の孰づれの一つをも散漫にしか出來ないわけである。それで、生物が高等の程度に進化し行くにつれて、だんだんに、この一つの官能より、今日、高等動物が有つて居るやうに、五官と、其等の官能を聯結し、且つ、統一する神經系統とに分

化したのであるといふ。

若し、現にわたくし共が有てる五官の進化の説明として、この理論がその當を得たものならば、（そして、わたくしは、大體に於て、その當を得たものと信じて居るが、）五官の孰づれの一つも其れのはたらきは其れ自づからに完結されて居るものでなくして、他の四つのもののはらきを竢つて構成されるのであるといふことは極めて見易き道理である。眼のはたらきが食物の所在を見、且つ、其れの良否を選擇したり、敵の近寄るのを認め、且つ其れの種類を識別したりするのにあるとすると、眼のはたらきは食物を捕へる手のはたらき、若しくは、敵より逃れる脚のはたらきを竢つて、始めて一つの意味を有つことになる。斯くして、見ることの意義は聽くこと、捕へること、歩むことの他の四官の合議に依つて、始めて定まり、其れに依つて制せられて居るのである。そして、言ふまでもなく、この事柄は他の官能に關しても、全然同一であらねばならぬ。

生物の生活は其れが人間のに達しても、この生理的特徴は啻に保存されたのみならず、ますます增大されて來て居る。そして、此れは他の一つの生物的特徴たる孤立のカウンタア・パアトとして、人間の生活に於て極めて複雜にして微妙な現象を生じて居るのである。さうすると、欲望にしても、學問にしても、職業にしても、苟くも其れが人間の生活の機關である限り、一方に於て、其れが分業の形を取ると同時に、他の一方に於て、其れが協同の形を取るとすることは事實に合した正しき見解である。

ソクラティスは事實の考察の上に學問の基礎を築かうと志し、始めて、嚴密なる意味に於ける哲學と論理學との開祖となつた人である。然し、惜しいかな、彼れは知見に優れて居たほど推理には長じて居なかつた。其れがために、彼れの歸納法は事實の中に法則を見出だす段になると忽ち大なる誤謬に陷つたのであつた。彼れの考察はソフイスト等の懷

疑に對して反證を擧げることより始まる。

當時、ソフィスト等は當時のアンテスの生活の風潮を高調し、論理化して、世の中には善もなく、正義もないことを主張した。ソクラティスは彼等に對つて現にアンテスには一つの協同生活の成立して居る事實を指摘したのであつた。そして彼れは、『協同生活の成立するのにはどうしても共れを望む總べての個人の生活の中に共通の要素の含まれて居ることが假定されねばならぬ。共れが、卽ち、善といふものであり、正義といふものである。若し總べての個人が等しく認めて、善や正義とするものが無いとしたならば、現に成立して居るこの協同生活の成立を如何に說明するか』と彼等に反問したのであつた。此れは總べての正しき學問の發端に缺くべからざる優れた知見である。然し、彼れはこの優れた知見を發展する推理に於て誤まつたのである。

彼れは各個人の生活の中に共通性を見出だすのに、共等を組織する成分にまで彼等の生活を分析し、そして、外見上、互に相違するところに共れは存在せずして、纔かに相一致するところにのみ存在するとしたのであつた。例へば、こゝに政治家と、詩人と、大工との三人が一つの協同生活を營むとする。さうすると、政治家が政治を取り、詩人が詩を作り、大工が家を建てるところには、それは存在せずして、纔かに彼等が租稅を拂ひ、兵役に就き、子弟を敎育するところにのみ、共れは存在すると想像したのであつた。

かういふ風にして、事實の中より法則を發見するのも一種の歸納法には相違ないが、共れは術語で機械的歸納法と呼ばれるものであつて、有機的歸納法と呼ばれるものではない。然し、彼れの當初の志向よりすれば、彼れは有機的歸納法に依つて共同生活の中に善と正義とを見出だすべきであつたのである。有機的歸納法に隨へば、政治家が政治を執ることも、詩人が詩を作ることも、大工が家を建てることも、獨り協同生活に於てのみ可能であり、價値を有つのである

から、彼等が、各、おのれの業務に從事することと其のことの中に協同生活の利益と鞏固とは構成されねばならぬ。さうしたならば、此等の三人が正しく其れに從事する限り、彼等の生活の全體を擧げて善であり、正義である。即ち、社會價値であるとならなければならなかつたのである。わたくし共にして、この理を推擴して行くならば、活動の種の如何なるものであるかを問はず、どこにしても分業の方向へ發達のある處には、其等をして可能ならしめ、意味を有たしめるに必須の條件として、そこには、亦、協同の方向への發達がなければならぬことが容易に會得出來ると思ふ。

世間は廣く、人間は多い。その中には神秘家と呼ばれる一味の黨がある。マアテルリンクも彼等の一人である。彼等は、主義として、直接と全體とを尊び、分化と間接化とを嫌ふ。彼等の意見に憑ると、總べて、純なるもの、神聖なるものは、獨り、直接と全體との中に宿り、分化と間接化とは墮落と罪惡とをしか孕まない。斯くして、彼等は『沈默は雄辯より更に雄辯である』『孩兒は最も賢き大人よりも一層賢くある。』『死は生よりも無限に多くの意義を藏する』などと說くのである。此等の人々の意見を窮極すれば、混沌は、價値に於て無限に秩序に勝るといふことになるのである。然し、このやうな見解にどれだけの眞理が含まれて居るであらうか、どれだけわたくし共の信頼し得る眞實性が含まれて居るであらうか。わたくしは篤と吟味して見ねばならぬ。

或る日、わたくしは閑散の時を得て郊外に遊ばうと思ひ立つ。南の方にも行つて見たい處もあるし、北の方にもある。どちらへ行つても相應な滿足は得られると思ふが、どちらへといふことははつきり定めずに漫然と家を出る。然し、街頭に達すると、丁度そこへ來合はした友人の勸めか、電車の都合で南の方へ行くことにする。尠なくとも同一時刻には兩方へ行けないから、南の方へ行くことを肯定することは、北の方へ行くことを否定することになる。さうなつて見ると、まだどちらに行くとも決定しない前には兩方へ行ける可能性を含んで居たのであるから、一旦、其れが決定

された後に比ぶれば、其の時の方が一層豐富な內容を有つて居たやうに想はれ、其れが決定されると、內容は頓に貧弱になつたやうに想はれる。斯かる情操よりして、Determinatio est negatio（決定は否定である）といふ諺までも生じたわけである。然し、かう考へるのは果して正しい考へ方であらうか。

南へも北へも兩方へ行ける可能性を含んで居たのは、其れが情操の形であつた間の事である。南へ行くためには北へ行くことを棄てなければならなくなつたのは其れが實行の形にまで進んだ後の事である。それであるから、二つの場合に於て、判斷の對象となるものは全然異なる。情操は實行にまで進むことに依つて、始めておのれの志向を完成するものであるならば、そして、實行になることに依つて、始めて分明な內容を有つて來るものであるならば、情操は實行となるに及んで、其れの內容の豐富を增して來たのであると言はなければならない。事實、さうであるに拘はらず、其れの內容が貧弱になつたと考へるのは、實行しての南の方へ行くのと、北の方へ行くのとが、完成された形で夙に情操の中にあつたと想像するから起る誤謬である。特に、南の方へ行くのと北の方へ行くのとの價値が十分に心の中で商量された結果として、其等の一つが選擇された場合に於ては、物質的には一つが取られても、精神的には兩つが取られて居るのであるから、さきの情操は何等の失ふところなく、最も完全に圓熟したものと言はなければならない。されば、其れに對して不滿を抱く者は、畢竟するに、かういふ性情を有つて、かういふ組織を有つた宇宙に生れ出たことに對して不滿を抱くことになるのである。わたくしからすれば、決定は否定でなくして、肯定である。そこに在る客觀の條件を取り入れて、一切を肯定するのである。

又、（前のと同樣の情操から）或る一つのものが分化して二つとなると、其れが一つのものであつた時に比して一層特定の樣式を有つて來たといふ理由からして、或る人は其れの意義は一層落漠になつたと考へるのである。然し、さきに

萌芽であつたものが、成熟した結果として、こゝに二つに分化したのであるから、其れの意義は一層精潤になつて、其等の二つのものに分賦されて居らなければならぬ。其等が分化した後に、互に協同し得る性質を保つて居ることは、さうなつて居る何よりの證據である。

わたくしは、此等の事由よりして、物事に對する神秘家の考へ方には大なる誤謬が含まれて居るものとして、彼等の見解に反對する者である。

わたくしからすると、分業に對して痛恨を感ずる世間の人々の心の中には、神秘家の迷信が、知らず、識らず、含まれて居るやうに思はれる。何故ならば、彼等は決定は否定であるといふ單純な前提よりして、分業のあるところには人格の毀損があると想像して、何等の大した事實に據らず、一向におのれの情操に任して社會に見出だされる分業の傾向を呪詛しようとして居るからである。

わたくしがかういふ風に論ずるのを見て、讀者の中には、或はわたくしを以て盲目的に現代社會の分業の傾向を謳歌して居る者と速了する者がないとは限らない。然し、其れはとんだ間違ひである。わたくしは決して現代社會の分業の傾向の盲目的の謳歌者ではない。たゞ、わたくしは其を鑑識的の肯定者たらんと欲して居る者である。

わたくしには其の理由は解らないが、そして、何人にも其の理由は解るまいが、分化、若しくは、分業はこの不思議な宇宙の永久の傾向、若しくは、法則であるやうに思はれる。然し、分化、若しくは、分業は決定である。生物となつたものは無生物とはなり得ない。動物となつたものは植物とはなり得ない。人間となつたものは他の動物とはなり得ない。或る個人となつたものは他の個人とはなり得ない。或る個人が彼れの個性より、彼れの境遇より、若しくは、其の他の事情より、一つの専門を選び、一つの職業を取るに至るのは、この宇宙の傾向、若しくは、法則の延長に過ぎな

い。されば、若し何人にしても絶對的に現代社會に見出だされる分業が人間を墮落に導くと言つて其れを呪詛しようとするならば、彼れは、先づ、個人となつたことより更に溯つて、人間となつたこと、動物となつたこと、生物となつたこと等を呪詛しなければならないことになる。否、存在物となつたことをさへも呪詛しなければならないことになるであらう。然し、何人と雖も、流石にこの程度にまでは行かぬやうである、若しくは、行けぬやうである。何人と雖も、彼れの呪詛の限界をどこにか立てゝ、現代社會に見出だされる總べての種の、總べての程度の分業が惡いのではなくして、たゞ、或る種の、或る程度の分業だけが惡いのであるとして居るのである。さうすると、問題は、非難されるものと是認されるゝのとの鑑別を世人は如何に付けて居るかといふことである。

政治家となることと、詩人となることとは兩立しない。大工となることと、左官となることとは兩立しない。多くの場合に於て、科學者となることと、哲學者となることと、若しくは、畫家となることと、彫刻家となることとさへも兩立しない。然し、世人はこの事實を以て、人間性と社會制との缺陷としては居らない。之れに反して さうあることに依つて、彼等は、各、ますますおのれの才能を發揮することが出來、おのれの才能を發揮することに依つて、ますます協同生活に貢獻することが出來るとして、彼等はこの事實を是認して居るのである。天才が天國に入るには、たゞ一つの門しかない。然し、天國に入つた後は、總べての天才は平等である といふやうなことをエマソンは言つた。こゝに、彼れは世人が分業に對して抱いて居る評價を代言したのである。

して見ると、世人の多くが非難して居る種の分業は、主として、近世科學の知識に關するものと、其れの分派、若しくは應用に關するものとに限られるのである。彼等は、Divide et impera を標語して、出立した近世科學の感化の下に、研究室に於て研究される題目にしても、實驗室に於て實驗される材料にしても、將た、製造所に於て製造される機

械、若しくは、薬品にしても、一人の擔當する部分は日を追うて狹隘となり、纎細となつて來て、今日では、彼れの人格を全體としてはたらかせ、感激せしむることは出來ないやうなものになつた。此れが現代人の生活に取つての唯一のでないまでも、確かに、重大なる疾患である。其れは、人間の生活に於ける感激と喜悦との二つの源泉たる、おのれの職業に對する興味と、おのれと社會及び自然の間に成り立つ一致の意識とを兩つながら窒殺し、戕害することになつた、と彼等は考へ且つ說くのである。

わたくしは科學に對する無理會と神祕主義より來たつた病情操とを含むこの見解には到底同意出來ない者である。

最初に、一體、全人格をはたらかせるとは如何なることを意味し得るであらうか。若しそれが一つの協同生活を營む總べての個人の各が彼れの有てる總べての欲求を滿たすために、てんでに、平等に劃一におのれの能力をはたらかせるといふことを意味するならば、其れは協同生活を以て生活し始めた人間としては、如何に原始時代に在つても、決して實現されたことのなかつた空想である。何故ならば、協同生活の目的は其れを營む總べての個人の各が才能の代償の方便を通じて自他の幸福のために彼れに特長たる才能を直接にはたらかせることに依つて間接に他人に特長たる才能のはたらきを借り、さうして、おのれの總べての欲求を滿たすことにあつたからである。協同生活に在つては、さうすることが、全人格をはたらかせることに取つて、最も優れた方法なのである。斯く全人格をはたらかせるといふ意味を解釋した後、わたくしが伺ひたいことは、近世に於ける知識の分業が、果して、事實、個人の人格を分割して、彼れの職業に對する興味を窒殺したかといふことと、彼れと社會及び自然との間に成り立つ一致の感情を戕害したかといふことゝである。

便宜のために、わたくしは第二の問に答へることより始める。

人間が感情を以て自然を描寫して居た時代に於ては、彼れと自然との關係の多くは猜疑であつた、畏怖であつた。兩者の間の關係が信頼と親愛とに變つたのは、人間が理智を以て自然を理會し來てからのことである。そして、この新らしき關係は、全然、近世科學の知識の創造したものである。成るほど、科學の知識は、其れの一面に於ては、實驗の方法に依つて自然の現象を分析する。然し、其れがさうするのは、他の一面に於て、從來よりも遙かに大なる總合を成り立たしめる準備としてである。例へば、空氣の壓力のはたらきを發見するためには、先づ、其れを、其れと結合していろいろの異なつた外觀を呈して居る他の要素より分解し、切り離さねばならぬ。然し、一旦さうしてあらゆる異なる條件を通して恒久にはたらく空氣の壓力そのもののはたらきが發見されるや、否や、その結果は新たに人間と自然との融合を二重に成り立たせることになる。其れの一つは理論的のものであつて、從來異なつた勢力のはたらきと受け取られて居たものが、其の實、一つの空氣のはたらきであつたといふことが發見されるに至ることである。他の一つは實行的のものであつて、其の知識のいろいろの應用に依つて新たに機械を發明して、いろいろに自然を支配することである。

此等は絶えず『自然を支配しようとすれば、先づ、其れに事へねばならぬ』とベエコンの言つた謙虚の精神と純眞の態度とを以てなさるゝのである。この事實よりしてい わたくしは、どうしても知識の分業が人間と自然との間の一致の感情を戕害するものとは信ずることの出來ない者である。

次ぎに、わたくしは、第一問に遡つて其れに答へねばならぬ。

『人間は眠る間に限り、てんでんに獨自の世界に居るが、彼等が目覺めて來ると、復び共通の世界に入る』と或る一人の古哲は言つた。この意味に於て科學はわたくし共の内に人間の社會性を覺醒させる大なる方便である。個人間に於ても、國際間に於ても、人間の協同作用を促進する點に關して、科學の精神に勝る所以はこゝにある。科學の知識の進

歩に依りて、共れの建設した共通のヴェヒクルを通じて、始めて、個人間に、國際間に、共同の目的を有ち、協同の行動を取ることが可能となつたのである。わたくしは、今日、一つの研究室の内に於てと等しく、多くの研究室と研究室との間に於て、一つの實驗室の内に於てと等しく、多くの實驗室と實驗室との間に於て、そして、一つの製造所の内に於てと等しく、多くの製造所と製造所との間に於て、幾十萬の、幾百萬の、否、幾千萬の學者、技師、職工等が互に提携し、互に信賴し、互に補角しつゝ人類の共同理想の實現のために營々としてはたらいて居る莊嚴なる光景を心に憶ひ浮べる時、わたくしは、どうしても知識の分業が個人と社會との間の一致の感情を恢復するものであると信ずることの出來ない者である。

共れでは、今日、知識の分業が現に用ゐられて居るまで、わたくし共は、そこに百利を觀て、一害を觀ないか。必らずしもさうではない。そして、わたくしも決してさうは考へぬ、言はぬ。そこには目に餘まるほどの弊害は確かにある。然し、共れは知識の分業より來たつて居るのではなくして、主として共れを誤用し、濫用して居る資本主義より來たつて居るのである。彼等資本家は金錢に對する彼等の貪欲より、一層詳しく言へば、實際に於て、想像に於て、金錢より得らるゝ權利に對する彼等の貪欲より、富に於ける彼等の優越せる位置を恃んで、彼等の配下に來たる者と彼等と接觸に來たる者との總べてを羈絆し、驅使しようとするのである。そして、(之れが道徳上の影響から言へば)彼等をして金錢上の奴たらしむべく彼等を强制して居るのである。何故ならば、彼等が學者や、技師や、職工のメリットを計る唯一の尺度は、彼等はどれだけの金を自分に獲らすかの共れであるからである。隨つて、學者や、技師や、職工がどれだけ彼等の勞作に依つて人類の文化に貢獻するところがあつても、共等に對しては何等の酬も得ずして、たゞ、資本家のために儲け出す金錢に對してのみ、その額に比例して酬を得て居るのである。學者も、技師も、職工も、無論、人間

である。衣食の資を得る必要がある。斯かる環境の中に在り、斯かる事情の下に在つては、勢ひ、衣食の資を得るの道を講ずることを先としないわけに行かぬ。學者を除いては、其れも極めて少數の學者を除いては、技師も、職工も、滔々、相卒ゐて資本家の心意氣に迎合し、終には僞似資本家の心意氣を以て、おのれの心意氣とし、金錢に對する欲望をして彼等のあらゆる他の欲望を抑壓する一暴君たらしめて了ふことに何等の不思議もない。

世人は、今日、學者や、技師や職工等が斯かる環境の内に、斯かる事情の下にはたらいて居るのを知りながら、なほ、彼等に對つて彼等の仕事そのものに關して興味を持つことを期待するやうな不合理を爲すの勇氣があるか。人はおのれの仕事に價値を見出だす時に、始めて滿足を感じ、滿足を感ずる時に始めて、おのれの仕事に關して興味を持ち得るのである。そして價値は彼れはその仕事の卓越性を通して人類の幸福に貢獻して居ると信じてはたらく時に限られるのである。事實、彼等の中心興味は已に彼等の仕事の卓越性より去つて、其れの副産物たる金錢上の所得の多寡に移つて了つて居る。彼等に對して、一心におのれの仕事を愛惜し、おのれの仕事におのれの靈を捧げた往昔の名工の心意氣を彼等に期待するのは極めて突梯の話ではないか。

其れでは、一打して、この百年來の宿弊を矯めるに何か方法がある。一つある。其れは、彼等をして、おのれの仕事に含まれた悠久の意義を觀照し會得せしめるだけの餘裕を有たしめることである。現今のまゝでは、彼等は、折角、身、連城の璧を抱きながら、其れの眞價を認得する餘裕を有たないために、其れを泥土に委して平氣で居るのである。されば一度、彼等にして、おのれの仕事が人間と自然との融合を增益し、個人と個人との親和を增益して居るのであることの事實を悟得したならば、おのれの仕事に對する興味は油然として彼等の心の中に湧き來たるべきである。

重ねてわたくしは言ふのである、「こゝに絮説した三重の缺陷は、今日、知識の分業に伴隨して日出だされるが、斷じ

て、其れに内著して發生したものではない。一旦、經濟制度の陥つた誤謬だに訂正さるゝれば、尠なくとも其等の大部分は取り除かれ得るものである」と。

十、徹底個人主義者の知識觀

こゝに、或る美術學校の一つの教室に於て、其れの中央に置かれた一つのモデルを四方から圍んで、澤山の學生が其れを寫生すると假定する。彼等の總べては其のモデルに向つて悉とくいくらづゝか異なつた距離と方角とに席を占めねばならぬ。つまり、彼等は悉とくいくらづゝか異なつたパアスペクチヴを通して同一モデルを眺めねばならぬ。さうすると、彼等の各が等しき程度に、眞實に、そのモデルを寫生するとしたならば、彼等の仕事の成績は、必然に、彼等が通して見たパアスペクチヴが異なるだけ異なつて居る筈である。若し其等の成績の中の二つでも同じものがあつたとしたならば、尠なくとも、其等の孰づれかの一つは虚僞のものであるとせねばならぬ。彼等にして彼等が通して見たパアスペクチヴに眞に忠實である限り、二つと同じ成績を有つた繪は出來よう筈はない。

わたくしはこの假定の下にさうあることを繪の眞實性と呼ぶのである。何故ならば、各の繪の成立の一條件たるパアスペクチヴの相違が割引された時に、總べての繪は同じ程度に眞實であるからである。こゝでは、理屈を簡明にするために、パアスペクチヴの相違だけを取つたが、實際に於ては、各學生の遺傳や、教養や、性癖や、趣味の相違も自づからそれぞれ寫生を構成する條件を形造るのであるから、嚴密に考察することになると、繪の眞實性といふものは、わたくしがこゝで語つて居るものよりも、遙かに、遙かに、複雜なものであらねばならぬ。わたくしの唱道する個人主義は、徹底個人主義は、この眞理の上に立脚するのである。

社會は個人の協同より成り立つ。そして、各個人は獨り、社會の環境の内に在つてのみ生存し、發展することの出來る個性である。されば、人間を劃義して、社會的動物とすることは固より其の當を得ないが、此れを訂正して、社會的にして個性的たる動物であるとしても、尙ほ、其の完きを得たとすることは出來ない。何故ならば、彼れが個性的であるのは主體であつて、彼れの社會的たるのは客體たるに過ぎないからである。個人は、到底、獨自性である。教養の目的はどこまで行つても、この獨自性を擴張することに在つて、其れを毀損し、若しくは、其れを破壞するところに在るのではない。偉人となつた個人は、その個性をその社會性の中に陷沒して、さうなつたのではなくして、その社會性をその個性の中に溶解して、さうなつたのである。個人を In-dividuum 即ち、不可分體と呼ぶのは、各個人の獨自性の圓熟化されることはあるが、決して、其れの均等化されることの無い事實を指して居るのである。

わたくしは嘗て次ぎのやうな話を聽いたことがある。其れはかうである。東京市の或る小學校に於て、そこの校長は生徒の間に訓練の行き屆いて居たのを誇りとして居たが、其れの最も顯著な徵候として生徒が階子段を昇るに方つて、兒童が脚を運ぶにつれて、彼等の肩の上がり下がりが恰も機械仕掛けの一列の人形でもあるかのやうに、寸分違はず、齊然動くのを最も大なる誇りとして其れを參觀人に指示して居たと云ふのである。

わたくしが此の話を聽いたのは、もう十年前の事にもなるから、今日でも、猶ほ其れが實行され、其れが依然としてその校長の最も大なる誇りとなつて居るか、否かを知らない。然し、十年前の事にしたところで、何んのために、その校長はそんな馬鹿氣た事を企て、そして、其れが實現されたからといつて、そんな馬鹿氣た成功に誇りを感じたか。わたくしには其の理由が一向に解らないのである。小學校が將來に於て、善良にして、聰明なる市民を教養する處である以上、無論、わたくしとて訓練を以て兒童に取つて大切な事と考へる。然し、訓練の大切なのは、彼等をして善良にし

て、聰明なる市民たらしめるやうに彼等の個性を啓發するところに在るのであつて、彼等をして不善良にして、不聰明なる市民たらしめるやうに、彼等の個性を毀傷するところにはないのである。總じて、秩序といふものは、或る目的に對して始めて一つの意味を有つて來るのであつて、其れ自づからに何等の意味を有するものではない。隨つて、目的の種の異なるにつれて、秩序の種も異なつて、千差萬別でなければならぬ。借問す、この校長は如何なる種の目的のために、そんな秩序を彼等兒童に要求したのであるか。この社會に在つては、總べての場合に於て、何人も必要とする秩序は全然こんな種のもの以外にあるとわたくしは考へざるを得ない。

然し、わたくしがこの一事をこのやうに重大視するのは、偶ま、其れがあの學校に於けるあらゆる學科の授業の精神の、そして、方針の一つの象徴に過ぎなくはなかつたかを懸念するからである。若し果してさうだとしたならば、あの學校に於ては、或は、國民教育の名の下に、最も極端なる非國民教育が行はれて居たことなきかをわたくしは懸念するからである。

小學校に入り來たる兒童は、各、異なる遺傳を承け、異なる性情を有ち、異なる境遇に育つて、異なる義務を負うて居る。されば、そこに行はれる國民教育は、彼等を同一程度に教育することをこそ目的とすべきであるが、彼等を同一型に教育することを目的とすべきではない。彼等は彼等の性情と義務とが互に異なるだけ、異なつて教育されて、始めて、おのれの個性を標準としておのれの生活を營み、さうすることに依つて、最も善く他人と協同し、他人に同情し得る善良にして聰明なる市民となることが出來るのである。されば、理想から言へば、たとひ便宜上、一室に於て、一つの教科書が用ゐられるにしても、其れが多數の兒童に教へられるに方つては、擔當教師の堪能である限り、異なる兒童の異なる要求を計算に入れた上、それぞれ、異なつて說かるべきである。さう說かれて始めて、各兒童の個性は社交的

に、協同的に、成熟を遂げることが出來るといふものである。徹底個人主義の唱道者として、わたくしはこの理想に基ける教育だけが正しき教育、教育の名に價する教育であると確く信じて居るのである。

然し、わたくしの唱道する個人主義、徹底個人主義は（多くは、説明の便宜の上からではあるが、）そこに止まるわけに行かぬ。其れは國民主義、徹底國民主義にまで進まればならぬ。此れは一つの焦點より他の一つの焦點へ移るのではない。始めより終りまで一つの焦點に立脚して螺線狀に展開するのである。結局、徹底個人主義も、徹底國民主義も同一原理の主張である。若しわたくし共にして其れを中樞より考察すれば、其れは徹底個人主義であり、其れを末梢より考察すれば、其れは徹底國民主義であるのである。何故にわたくしは單に國民主義と言はないで、徹底國民主義と言ふか。其れは單に個人主義と言はないで、徹底個人主義と言ふのと同一の理由より來て居るのであつて、其れが誤れる愛國主義、即ち、侵略主義と混同されることを防ぐためである。

異なる個人は異なる遺傳を受け、異なる境遇に置かれたために、異なる性情を有ち、異なる義務を負ふ如く、異なる個人の團體たる異なる民族、又は、異なる國民はそれぞれ異なる風土に置かれ、異なる歷史を繼ぐがために、異なる國民性を養ひ、異なる文化を創め、異なるアスピレエションを抱いて居るのである。如何なる國民、若しくは、民族と雖も、此等の高貴なる基本を放擲しては、到底、純眞なるそして、光輝ある發達を遂げることは困難である、否、不可能であるとわたくしは確く信ずる。彼等は此等の基本を束修とするにあらざれば、到底、世界共和國のメムバアたる資格さへも有ち得ぬのである。

わたくしの唱道する徹底國民主義の主張は徹底個人主義の主張が社會に於ける個人間の give and take の關係の上に立つ如く、世界に於ける國際間の give and take 關係の上に立つものである。自國民の文化を發揮することに依つ

て他國民の文化を補益し、他國民の文化を尊重することに依つて、自國民の文化を潤飾しようとするものである。わたくしは自國民の文化を發揮すること、他國民の文化を尊重することとは、どうして兩立することの出來ないかの理を知らないのみならず、他國民の文化を尊重することなく、どうして自國民の文化を發揮し得るかの理をも知らない者である。

わたくしとても、過去に在つては、悲しいかな、現在に於てさへも、愛國心と愛族心とのしばしば惡用されたのを知つて居る、否、其等が正用されたことよりも寧ろ誤用されたことの多かつたのを知つて居る。然し、其れは、總べての國民、若しくは、民族が、まだ世界共和國のメンバアとしておのれの存在と價値との自覺に達しなかつたために、誤れる功名心に燃える帝王や、外交家の詐術に依つて其れが惡用されたのに過ぎない。利用は惡用と殊なり、正用は誤用とは違ふ。過去に於ける惡用や、誤用の結果より、どうして將來に於ける利用と正用との結果を類推することが許されようぞ。

安價な國際主義の流行する昨今に於て、何故にわたしは、こゝに唱導する主張を國際主義と呼ばずして、徹底國民主義と呼ぶか。其れは名稱の相違にはあらずして、觀點の相違であるからである。そして、觀點の相違は、則ち、覺悟の相違であり、計畫の相違であるからである。

わたくしは嘗てわたくしの主張たる國民主義、若しくは、徹底國民主義の思想を釋明してつぎのやうに言つたのであつた。

『今日に於ける、及び、特に、今後に來たる文化生活に在つては、如何なる個人も或る國民の一員となつて、始めて、彼れの個性の完成を期することが出來る如く、如何なる國民も世界共和國の一員となつて、始めて、其れの國民性を修練することが出來るのである。この事實を、逆に、そして、一層切實に言ひ換へれば、世界共和國の性質は個々其れの

獨自の特徴を保ちながら國際化された各國民の國民性の交徹より構成され、或る國民の性質は個々彼れの獨自の特徴を保ちながら國民化された各國人の個性の錯綜より融成されて居るといふことになる。して見ると、正しき個人主義の基礎の上に立たざる國民主義の誤謬であることは、正しき國民主義の基礎の上に立たざる國際主義の空虚であると同樣である。徹底すれば、個人主義は世界主義にならなければならないし、溯源すれば、世界主義は個人主義であらねばならぬ』からである。わたくしが、わたくしの徹底國民主義に於て如何に重きを其れの獨自性に置いて居るかはこの章句より、ほゞ、髣髴することが出來るであらう。そして、此れは、深くわたくしの哲學識と歴史見とに根ざして居るものであつて、宿年わたくしの懷抱し來たつた信念であり、經綸である。

斯かる徹底個人主義と徹底國民主義とを唱導するわたくしは、之れに關聯せしめて、知識の性質を如何なるものと理會して居るか。

嘗てウオタア・ペエタアは純眞なる美學を構成する條件を論じて、『こゝに自分の眼前に美しい風景なり、品性なり、學說なり、乃至は、藝術の作品なりがあるとする。さうすると、自分は、先づ、其等が眞に自分にまで美しくあるかを吟味する。そして、其等が眞に自分にまで美しくあるならば、其等を其等の成分にまで分析して、何故に其等が自分にまで美を呈供するかを考察するだけである』と言つたのである。マシウ・アアノルドも、ゲエテが何故に近世文化の先驅者となり得たかを說明して『其れは、彼れが或る物は是れまで何百年間、或は、何千年間何千人、或は何萬人の人々に依つて眞理と受け取られて來たにしろ、其れが果して自分にまで眞理であるかとの一つの疑問を發したところにあつたと言つたのであつた。孰づれも甚深の言であるとわたくしは考へる。

便宜のため、知識に象徵的のと實際的との二種があるとすると、象徵的の知識とは、或る個人に取つて、若しくは、

或る國民に取つて、既定の様式を以て世間に流布して居るものの謂であり、實際的の知識とは、或る個人、若しくは、或る國民に依つて彼等の體驗を經て個性化されたものの謂である。例へば、化學書に見出される水の化學式たるH_2Oは知識としてまだ象徴的のものである。其れが或る個人に依つて實驗され、彼れの感覺に依つて其れの眞理たることが吟味され、納得されて、始めて其れが實際的の知識となるのである。されば、第一義に於ける知識は實際的のものに限らるべきものであつて、ペエタアやアアノルドが、明目張膽、何人に取つても、獨り所有するの價値ありと力說して居るのは此の種の知識である。

然し、或る個人にしても、若しくは、或る國民にしても、彼れ、若しくは、彼等にして、正しく生活し、眞に優れた力量を有つて居るならば、他の個人、若しくは、他の國民より象徴的の知識を受け取つて、其れを、彼れの、若しくは、彼等の體驗に依つて容易に實際的のものと化すことが出來なければならぬ。又、彼れ、若しくは、彼等にして正しく生活し、眞に優れた力量を有つて居るならば、彼れ、若しくは、彼等に依つて創造された知識は他の個人、若しくは、他の國民に依つて容易に象徴的たるものより、實際的たるものに化せられ得る性質を多分に具へて居らなければならぬ。理屈の上でさうであるのみならず、事實の上でも確かにさうなつて居る。

ウイリアム・ジエムスは知識に親炙の知識と理會の知識との二種あることを主張した。親炙の知識とは五感覺を通して來たる色彩的知識であり、理會の知識とは直接に其等に由らずして、間接に類推や推理より把住し得らるゝ知識である。ジョサイヤ・ロイスは經驗に鑑賞の世界と叙述の世界との二種あることを力說した。そして、彼れは鑑賞の世界は他人に對つて通報し得ざる經驗であつて、叙述の世界は他人に對つて通報し得る世界であると說明したのであつた。

然し、理會の知識は親炙の知識よりの派生であり、叙述の世界は鑑賞の世界の改造であることだけは明らかである。

ジエムスとロイスとに依つて兩種のものとされて居るものは、畢竟するに、起原の相違ではなくして、作用の相違である。其れの性質から言へば、親炙の知識と鑑賞の世界の中にも既に、幾分、間接的要素は潜在し、理會の知識と叙述の世界の中にも悠久に直接的要素は殘存して居るのである。事實さうであるがために、象徴的の知識と實際的の知識との間には、孰づれの方角に向つても、能く轉換され得る性質が成り立つのである。斯くして、幽暗なる瞑想も廣汎なる運動となり、平凡なる傳統の中より清新なる覺悟が生じて來たるのは斯かる理由からである。

個人に取つても、國民に取つても、眞に價値ある知識は、直接的のもの、實際的のものに限られるのであるが、或る個人にして、若しくは、或る國民にして眞に偉大であるならば、彼れも、彼等も決して、そんな物に事を闕かないであらう。何故ならば、彼れと彼等とは必要のある場合には、何時でも、そんな物を創造し得、又、現に創造して居るからである。

十一、知識人の使命

嘗て、ジヨオジ・エリオツトは戯れに、社會は男と、女と、僧侶との三つの性より成り立つて居る、と言つたのであつた。彼女のこゝでの考へでは、僧侶は女と男との中間の性であつたのである。今日、社會主義の色彩を帶びた政論家と經濟學者とは、社會を組織する階級をブルジヨア階級と、プロレタリアツト階級と、其の中間に在つて、どちらの階級にも附かず、而かも、兩方の鼻息を窺ふことに依つて、纔かに其の生を續けて行く知識階級との三つに分けて居る。

曉昔に在つても、徹底的に考察すれば、職業の種類よりせず、知識の程度よりして、一つの特殊の階級の存在することを假定したのは固より妥當ではなかつた。何故ならば、太古よりして、知識を所有し、其れを運用することは人間一

般の特徵であつて、如何なる個人と雖も、知識を所有せず、運用せざれば、彼れは已に人間たるの資格を失つたものであつたからである。然し、通俗的には、若しくは、便宜的には、過去に於ける文化の或る狀態の下に、さういふ階級の存在することを假定しても大して不當ではなかつたのである。何故ならば、その狀態の下に在つては、謂ふところの常識以上の知識は、當時、知識階級と呼ばれた一階級の殆ど專有するところとなつて居たからである。そして、敎師と牧師と法官と醫者とがこの階級を構成して居たのであつた。

然し、近世に進むに隨つて、此の狀態はだんだんに變更されて行つた。そして、現代に到つては、知識はあらゆる階級の間に普ねく分布されることになつた。今日では、高等の知識、否、幽玄なる專門の知識と雖も、或る一階級の專有物ではない。知識が協同生活を營む總べての要因に普及された結果として、理論と實行とは互に接近し、感觸し、滲透し合ふことになつて、理論家はますます實際的となり、實行家はますます學理的となつた。今日では、理論家と實行家との間の區別は、彼等の有てる敎養からではなくして、たゞ、彼等の置かれた社會の位置と、彼等の擇んだ職業とからでなければならなくなつた。

斯かる社會狀態に在つて、知識階級なる言葉が如何なる意味を有し得るであらうか。

わたくしは、今日の社會に於ては、知識個人の在るのを知るが知識階級なるものの在るのを知らぬ者である。それでは、如何なる資格ある個人をわたくしは知識人と呼ぶか、呼ばうとするか。

事實の問題として、そこに棲息する個々の人々に就いて、誰れが知識人であつて、誰れが其れでないかを鑑別することとは不可能ではないが、極めて複雜な手數を要することである。然し、理屈の問題として、知識人と知識人ならざる人々の間に標準を立てることは、左程困難なことでない。

元來知識の作用は生活の改造にある。最廣義に於て、最深義に於て、生活の改造といふことを離れて知識には、他に何等の作用もないのである。さうすると、職業の種と專門の種との如何を問はず、誰れにしても、聰明なる理會よりして、人間の總合理想を發見し、彼れの志向と、業績と、アスピレエションとに於て、一歩、一歩、其れを實現するために、生活の改造に或る貢献を爲して居る者が、わたくしの知識人と呼ぶところの者である。人間の總合理想に關する正しき理想の下になされるといふことが必須條件として劃される以上は、その仕事の性質は何にしても宜いわけである。たゞ、特にわたくしの注意したきは、知識階級の限定にはコンヴェンショナルの標準が用ゐられて居るが、こゝに用ゐらるべき標準は、嚴重に實質的のものでなければならぬといふことだけである。されば、知識人の資格は財産や社會上の地位と何等の關係が無いのみならず、教養や學問と雖も其れと、必然の關係があるのではない。何故ならば、世には飴を以て母を養つた柳下惠もあり、其の同じ飴を以て錠を盗んだ盗跖もあるからである。されば、或る人の有てる知識の量が彼れを知識人たらしめるのではなくして、其れの反省される意義と、其れの運用される方法とが彼れをして知識人たらしめるのである。

現に、わが國には、教育ある人は可なりに多い。學問や技能のある人とても決して尠いとはいはれない。然し、極めて重大なる問題は、彼等の中の幾人が眞に知識人であるか、知識人たる資格ある人々であるかといふことである。

昔、神はソドムの民に告げて、彼等の中に三人の義人が見出だされるならば彼れは、ソドムを滅すまいと言はれたさうである。わが國が幾人の知識人を缺いたならば、わが國は終に滅びるであらうか、否か、をわたくしは知らぬ。然し、刻下、わが國が、其れの窮迫した事情よりして、知識人の一人でも多からんを切に望んで居ることだけは事實である、確たる事實である。

單なる株主とある知識業者

杉森孝次郎

世間に無産階級、知識階級のことばが多少流布されて見える。無産階級といふことばも隨分大ほ雑把な觀念の表現だが、知識階級といふことばに至つては、沒批判と無反省の程度が層一層でないか。しかし、いまの世に無産階級といふことばの用途がたしかに存すると同時に、知識階級といふことばの用途も決して絶無ではない。その用途の存在は、それを有意義にする目的の存在と、そのことばを客觀妥當的にする對象的事實の存在を多少ながら意味する。

たとへば富の生産に從事する人人についていふならば、勞働者は勿論いはゆる無産者だらう。けれども技術家はなにか。科學者は知識階級に判然として屬するのかも知らんが、技術家は勞働者と科學者との中間に位して、ある程度に兩者を兼ぬるがゆゑに、勞働者よりはすくなく無産者であり、科學者よりはすくなく知識者であるのか。諸學校の教師、記者、著述家、僧侶、これらは當然、知識階級内か。

現代のいはゆる勞働者は、現代のいはゆる知識階級者に比して、しばしば、收入に於いては下位に立たないかも知れん。なほかつ、いはゆる勞働者といはゆる知識階級者との間にはある階級別がある。いはゆる勞働者は、富の生産を本業とする。しかるに、その富の使用者すなはち消費者または享樂者はかれら自身ではない。加ふるに、富は、これを消費する人にとつてさへも、目的價ではなく、手段價だ。人生に於ける富の位置は、富以上の文化價値、人間目的を獲得し、達成するための一必要條件たるところにある。されば、他人が消費する富を生産することに自己の最善努力を集中する勞働者は、手段の手段たる生活の持ちぬしであり、實現者であると判斷される。勞働者が、かならずしも收入に於いて知識階級者に劣らざるにかかはらず、社會的位置に於いて、身分に於いて、道德的人格的資格に於いて、現代に於いては、ほとんど明確に知識階級者に劣つてゐるやうに思はれ、且つ扱はれてゐるのは、上述の事情あるに

よる。

大學出身者でもあれば、たとひ、本質的には、いふに足るほどの文化能はないにしても、それでも、表面上、及び自覺としても、讀書趣味や、藝術鑑賞的興味や、なほその他いろ〳〵のかたちに於いて、いはゆる知的生活に於ける有權者として通ほる現代だ。それ、藝術の特徴は、それの自己目的質に存する。いはゆる知的生活、文化價値、敎養、リファインメント、これらは、みな、自己目的を特徴とする。技術は敎養を意味しないが、美術季節には上野に半日を閑消し、折り々々には音樂會にも聽きにでかける。これらが敎養を意味するわけは、技術は、それが醫術に例示されるやうな性質のものであつても、またそれが機械製作に例示されるやうな性質のものであつても、功利主義であり、結果主義であるのに、藝術は、觀劇にしても、聽樂にしても、その事自身に價値があるからだ。現代のいはゆる勞働階級の人人は、觀劇、聽樂、賞畫、讀書、思索、旅行、探勝等に要する時間と費用と頭腦上の訓練としての準備を缺く。ここに於いてか、大學出身者あたりは、貧ながらも自己目的の生活を享樂しえ、單なる勞働者は、貧しさは別問題としてさへも自己目的の生活を享樂するために必要な知的敎養に不足してゐる。勞働者はどこからどこまで、すなはち、どこから見はじめても、どこまで見進んでも、目的を賃錢に有し、最低級の衣食住に有し、資本家の營利意思と、消費階級の贅澤意思に有し、すなはち、自己の原始的低級物慾の、あるひは自己の單なる生存慾の滿足に有するにあらざれば、他人の自己目的の外部的、物質的條件を滿たすとに有すると見られる一大側面を持つ。賃錢といふ名のつく報酬をば、受ける人でありたいか、與へる人でありたいかと自問して、現代のなに人もが、受ける人ではありたくないと即答しうるのに、謝儀とか、俸給とかいふかたちに於いての報酬なら、これを受ける人でありたいか、與へる人でありたいかと自問して見て、なに人も、現代人としては、即答しかねるにちがひない心理の裏面には、勞働者は、現代に於いては、あまりに過酷に他人と物慾の手段だからだ。みづからかへりみて尊嚴なく、他からは非人格扱ひされるのが現代の勞働者だ。勿論、そのみづからかへりみて尊重なきわけは、かれが賃錢勞働者であり、そして、賃錢勞働者には、上記の諸弱點と關聯して、事業、産業に於ける經營參與權も許與されてゐないからだ。

敢ていふまでもなく、勞働者が上說の狀態にあることは、社會的不完全を意味する現象だ。しかしながら、現代に於いては、いはゆる無産勞働者と、いはゆる無産知識者との間に　設

い、しかし離破の一膜が階級的に介在してゐることは事實だ。

現代のいはゆる知識階級は、純化の餘地を多大にしめす。純化の極、皆無に歸するかも知れんほどだ。しかるに、現代のいはゆる勞働階級は、純化されればされるほど、むしろ存在權を增大する。さればこそストライキも押しが利くなれ。十二ケ月の短期間にわたつてさへ、全國の勞働組合員が申し合はせて罷工すれば、英國の資本主義はすくなくとも一時斷絶する確實性があることを見ても、これは明瞭だ。しかるに、現代のいはゆる知識階級が、かれらの教職や文業をなげうつても、社會に恐慌は起こらないにきまつてゐる。なに人の生存も、目的も、ほとんどそのために脅威されないといひうるほどにも、いはゆる知識階級の全部でないまでも、ある著大なる部分はやくざものだ。

想うてここに及べば、なに人か、現代のいゆる無産知識階級者と、あるひは單に知識階級者と、單なる株主としての投資家、すなはちそのかたちの資本家との間なる酷似に驚ろかさるをえようか。親ゆづりの資産や、投機で儲けた暴富で、いはゆる不勞所得に小安や奢侈をぬすんだり、むさぼつたりする一部のブルジワと、なんらの實質なき、またなんらの社會的本質價なき一部の知識階級とは、原則を完全に共有し、現象だけをや別有する現代的二大偶像ではないか。

勞働者としての無産者が純化され、自覺し、正認されてゆくにしたがつて、いはゆる知識階級の存在權は明確に限定されてゆく必然關係がある。勞働者は衣食住をはじめとして、社會の必要品を生産する。勞働者の社會價は疑ふ餘地がない。いはゆる知識階級者の多少曖昧な存在權は、久しく現代のやうに不問に附されては續かない。存在權ある知識階級は、社會價ある知的奉仕をなす人人から成り立つべきだ。勞働者が、社會價ある物的奉仕をなす如くにだ。

しかし、社會は大きいほどよい。潔癖は社會の場合に於いても、個人の場合に於いても同樣に多少有害だ。社會にとつて有用な、必要な、すなはち社會價ある知識または知識的の富の生産者として判然たる資格を有しないものでも、ある程度までは、ある條件を附して、社會はこれを寛容する度量を持つ方がよい。この意味に於いて、われらは、かならずしもいはゆる知識階級の存在權を白日下に分析しつくさうとは意思しないが、現代に於いては、かたちだけでも、知識の生産者といふ風態になつてゐれば、勞働者や商賣人はかれを先生呼ばはりし、かれみづからまた半神振りを發揮する慣習と觀念と制度さへも公行してゐるのだから、いかにその慣習と觀念と制度が迷信であり

謬見であるかを、われらは、一とたび自他にむかつて注意する理由がある。

物質といへども、それが富としての資格を有するためには、人のある欲望を滿足させうることが必要だ。欲望は精神的事實だ。それの滿足もまた勿論精神的事實だ。たとへば渴は一精神的事實だ。癒渴といふ經驗もまた一精神的事實だ。ただ、水そのものは、一物質的存在だ。勞働者といへども、それゆゑに、精神的必要を滿たすための物質的方法を生產することに從事するのだ。もしも知識者が、社會の人人の精神的必要を滿たすための物質的方法をば勿論生產せず、且つ、社會の人人の精神的必要を滿たすための精神的方法をも、すなはち思想らしい思想をも、知識らしい知識をも、藝術らしい藝術をも、教育らしい教育をも生產しない人人の別名であるとするならば、知識者の存在權は、社會の無知と寬容とを唯一の條件にして成り立つといふ判斷が避けられない。

勞働者は、すくなくとも間接的に精神主義者だ。ある種類の知識者は、間接的にも、直接的にも精神主義者でない。ある種類の知識者よりは、勞働者の方が、それゆゑに、遙かに高度に眞の知識者であるのだ。

勞働者は米を生產し、鍋や釜を生產する。ある種類の知識者のでたらめ文句は、社會に有用ななにを生產するか。

分勞の原則と方法が改正されて發揮すれば、勞働や技術や商賣に從事すべき人の數は今よりもふえ、いはゆる頭腦勞働に從事すべき人の數は今よりもへるにちがひないと考へられる。勞働や技術や商賣に從事してこそ、當人も幸福であり、社會も益を受ける本質、性能の人人が、今日の世に於いては、知識業に偶像崇拜的に爭うてたかる。社會すなはち大多數人が、現代に於いては、知識に對する眞信をのみならず、はなはだしばしば、眞信と共に、及び眞信の代はりに、偶像崇拜的迷信を持つてゐるからだ。

勞働者に、自己目的の生活を享樂しうるだけの時間と金錢と教育とを與へよ。知識階級者から、古來のあやまつた二元觀に寄生する「精神」崇拜の社會的迷信といふ立脚の基礎を奪へ。勞働者の新信獲得の悅びと知識者の幻滅の悲哀とは、併行する。

しかしながら、正しきかたちの知識者が、現代に於いては、あまりに菲薄に酬ゐられてゐることは爭ふべからざる事實だ。世間には、小學教師の俸給がすでに高すぎるとか、雜誌寄稿者の待遇がすでに厚すぎるとかいふ聲さへ散聞するが、これは、心物二元主義の別の一發現にほかならない。眞の知識者の位置

は、それの自認と他認とは、いまなほひとへに低すぎる。

最後に、單なる株主とある知識業者との内面的類同に再び想ひ及ぶ。それから、無産勞働階級と無産知識階級とのある異同點を、いま一とたび注意して置きたい

知識そのものは眼に視えず、耳に聽こえず、手で觸れることもできない。しかしながら知識は立派に一存在だ。ブルーノーは知識愛のために火刑に處せられることを辭しなんだ。知識はそれほどにも力強い存在だ。けれども、知識は物ではない。それは物質でも、物體でもない。知識は五官のすべてまたはどの一とつもの對象となれないといふ事實がこれを證示する。知識は存在だ。しかも、知識は、直接に人格内容の一部分または一特質としての位置を保有する存在だ。三角形の内角の和は二直角に等しいと考へること、またさう考へた結果としての知識、すなはち作用としての知識も、結果としての知識も、また實に知識慾、認識衝動、眞理愛、あるひは驚異等のかたちと名稱とに於ける原因または動機としての知識も、いはゆる十分なる理由の法則としての認識根本能も、これらは、ことごとく、人格そのものの本質的構成要素の内なる事柄だ。知識は人自身であるのだ。それは、人自身の全體ではないが、人自身のそとなる事柄では決してないのだ。しかるに、いはゆる物は、知識との比較に於いては人のそとなる事柄だ。物は、知識ほど直接に人格内容たる位置をば保有しない。さればこそ物は五官的認識の對象ともなれる。知識は人によつて内覺され、物は人によつて外驗されるのだ。勞働者は、人に有用な物を生産することを本職とする人人であると同時に、原料、機械、工場等と同列に立つて、無自治的に、したがつてまた無責任的に、その有用物の生産の專從する人人であるといふところに、勞働者の無自覺と、勞働者に對する世間の不正行爲とがある。

生活者と知識者との問題

澤　田　　謙

一

いまの時代の一つの特色として、生活と知識との問題を考へて見たいと思ふ。從つてそれは、生活者と知識者との問題である。

生活と知識との問題が、現代社會の特色をなすのではない。それは人間と社會との本質的の問題である。エジプト王の時代から、プラトンの時代からの問題である。たゞわれ等の住む時代が世にも特異なる時代なるに從つて、その生活と知識との問題が、特異の色彩と型態を裝つて來るのである。從つてそは一般に生活と知識との問題ではない。時代社會の問題である。この意味において、時代研究の一管見でさへある。

いまの世界は、資本主義末期の社會と稱せられる。共産社會への過渡期とも言はれてゐる。或はまた革命時代とも、改造社會ともよばれてゐる。いづれにしても、資本主義的社會組識は、その内部に幾多の崩壞的毒素を釀成して、その外部に夥しい根本的缺陥を暴露しつゝあることは明白である。そして時代は時代へと移らんとしつゝある。これを例へば大湖と大湖とをつなぐ山峽である。山峽に水は激して雜音の山彦する時代である。かくの如き社會において、生活と知識との問題は、悠々として白帆を泛ぶる問題ではない。斷崖と絶壁との上に、一歩を過てば生と死との問題である。

もとより生活と知識とは、二致すべきものではない。生活を離れて知識はなく、知識なくして生活はあり得ない。知識は生活の上に建て上げらるべきものであり、生活は知識によつて指導さるべきものである。知識の起原が然ありしばかりではなく、その本來もまた然あるべきものなのである。これはものの本性である。しかるに時代はものの本性を歪めた。生活は或る意味において、異常の向上を遂げた。そして獨自の方向に獨自の歩みを運んだ。知識もまた或る意味において、驚ろくべき高

度の階梯に達した。これもまた獨自の方向に獨自の歩みを運んだ。かくして本來一なるべき生活と知識とが、相距ること千里に至つたのである。こゝに時代の一特色としての、生活と知識との問題が發生し來たるのである。

私をして言はせるならば、生活と知識とが分裂したばかりではない。生活者と知識者とが分裂したのだ。いや、社會のうちに、生活者とか知識者とかいふものが、發育するに至つたことそれ自體が、すでに著るしい時代特色である。

このことを、も少こし進んで論じやう。

二

現代は分裂の時代である。生活が分裂した。知識が分裂した。そして生活と知識との間が分裂した。私はこれを是であるとも、非であるとも言ふのではない。たゞ分裂といふ現象が、時代の一特色をなせるの事實に至つては、これを陰蔽する由がない。

生活は、いたましき分裂を遂げつゝある。經濟學者はこの生活の分裂を『分業』と稱してゐる。分業とは生産手段の社會的分割にすぎない。しかし生活の分裂は、なほ根深きところに、社會組織の根本相をなしつゝある。

ある人が頭取室に葉卷を燻らしつゝある間に、ある者は針のみゝどを作りつゝある。札を數へることゝ、發條を捲くことが、各專門となつた。役者の床山と、原稿の字數を數へることも、社會内の分業である。『又は青山三丁目！』と叫ぶ商賣も、眞暗な坑内でカンテラの灯を頼りに、默々と鍬を振る職業も、各々獨立して來た。これが經濟學のいはゆる分業であつて、これが資本主義經濟の據つて立つ根據である。

恐るべきことは、職業の分業ではない。この分業せる職業が、生活化したことである。生産のための分業ではなくて、生活のための分業となつたことである。生活が職業のために支配されて、生活が職業の埒外に出づることを拒まれるに至つたことである。從つて職業の分裂が、生活の分裂となつて出現したことである。

生活が分裂した。銀行の頭取の生活と、坑夫の生活との間には、超ゆべからざる溝渠が生じた。床山と運轉手との生活の間に、なん等の共通點を見出すことができなくなつた。終日終夜職業のために驅使さるゝ分業者は、分業生活以外に生活を見出すことができなくなつた。その結果は知識の分裂となつてあらはれる。

知識とは、生活を統一し、指導し、規範し、評價するために

生れ、そのために存在するものである。從つて社會生活の分裂とともに、知識もまた社會的分裂を遂げる。知識の專門化に現代の一特色である。株の騰落と割引率の上下とにのみ腐心する銀行業者の知識と、いかにすれば石炭を多く掘り出しうべきかと苦慮する坑夫の知識との間に、どこに共通の點が發見され得やう。いまの時代は、生活を分裂せしめたる勢に乘じて、知識をも分裂せしめた。知識は最高の徳性で、すべての人の生活を統一するものであると言ふやうなことは、これ過去の夢にすぎない。現代は分裂の世である。知識さへも分裂された!

學校の生徒や學生は、相當に廣い知識を與へられる。法學部の生徒は、政治・經濟・法律・財政の一般理論を頭につめこんで校門を出る。しかしそれがなんであらう。それは理論であつて、眞の知識ではない。生活にはなんの關はりを持たぬ。學校出の會社員や役人が、二三年は役に立たぬといふ上職の愚痴は、かれ等の知識が生活の知識でないといふことにすぎない。一度校門を出たとき、これ等の生活に即せざる知識は、生活のために次第に洗ひ去られて、新たに生活の知識が注入される。或るものは議會の答辯案を書くことを教へられ、或るものは噸數から利益金額を算出する方法を覺える。そしてそれが知識となり、さらにそれが唯一の知識となる。知識は見事に分裂される。民法・商法・刑法・行政法といふやうな知識の分裂ではない。生活の分裂に伴ふ知識の分裂である。

知識の分裂によつて、生活の分裂は完成される。職業の分裂が、生活の分裂に化する速度は、知識の分裂の完成の速度に比例して進行する。まことに現代は分裂の世の中である。

三

生活の分裂は、さらに進んで、階級の分裂を惹起す。そして階級爭なる時代特色を發揮し、資本社會末期の色徵を明白にするものである。しかしこれは後に至つて說く。こゝに言はねばならぬことは、生活と知識との間の關係が分裂して、つひに生活者と知識者との差別を發進せしめしことである。

生活はもと自己の完成に向つて進行すべきものである。その目標は生活自體の絶對的完成にあり、その努力は相對的完成にあらねばならないものである。知識もまた自己の完成に向つて努力し、そして完成知識を目標として向上する。生活と知識とがこの態度を採るとき、兩者は不即不離の伴侶である。生活は知識によらずしては完成されず、知識は生活によつてのみ向上するからである。しかるに生活は完成のかはりに分裂した。分裂の方向へ向つて進行しつゝある。詭辯すれば、分裂によつて

向上しつゝあるのである。こゝにおいて本來一なるべき生活と知識とは、いつまでも行動を共にすることが出來なくなるのである。

およそ生活と知識とは、必ずしも完全なる渾一體をなすものではない。その可能範圍内においては、つねに接近の傾向を示し、またその理想型態においては、渾一體を要求するものであるけれども、生活と知識との分裂が、各々極端に走るに至つては、二者間の關係もまた分裂せざるを得ない。これ生活と知識とが、獨自の完體を有し、たゞ相關々係の下に立つものなるの必然の結果にすぎない。かくして知識は、その一部を專門的生活の上に殘しおきて、知識自體の完體へ向つて、獨自の天下に發展し去るのである。

この生活と知識との關係分裂は、個人についても認め得られる。のみならず現代社會の著るしい現象をさへなすものである。「私はたゞ生存のために勞働するにすぎない。生活は自ら別個の天地である」などと稱するものの多いのは、生存と生活との間に、必ずしも特定の意味があるのではない。生活（生存）の特定化に對する叛逆によつて、この間の消息を洩すものである。甘んじて金錢奴隷たる生活者が、骨董品の蒐集や、慈善事業や公共事業のために、數百萬の寄附を惜まないのは、日常生活以外になん等かの生活領域の樹立を欲するが故にすぎない。そして分裂せる生活と知識とを、分裂せるがまゝに殘しながら、生活の上には一部の知識を、また知識の上には一部の生活を附着せしめて、こゝに二重生活を營まんとしつゝあるのである。

しかし最も著るしい現象は、生活と知識との間の關係の分裂が、社會的にあらはれたものである。すなはち社會内に、生活者と知識者との別が生じたことである。生活を主とする人生觀と、知識を主とする人生觀とが、社會成員の上に反映して、生活と知識との關係の分裂の間隙に乘じ、生活者と知識者との區分を生じたることである。

生活を主とする人生觀者は、すべて生活者の群に入る。かれ等にとつて生活は人生の第一條件であつて、知識はその方便にすぎない。かれ等は生活の完成に向つて邁進する。知識はその方向に向つて歪められる。その目標は生活上の英雄たらんと欲するにある。その道程は生活の一歩一歩の向上にある。知識は生活の向上に役立つときにおいてのみ價値あるものであつて、これに無益または有害なる知識は、すべて殲滅されなければならない。現代の如き時代においては、人間の大多數が、この態度をとるべく餘議なくされるのは、いふまでもないことである。

しかし社會内においては、かくの如き人生觀者のみではない。

こゝに少數の、知識中心主義者がある、これ等のものは、知識の下に生活を隷屬せしめんと欲する。知識の要求する方向に、知識を牽引しやうと試みる。この試みは、生活の脅威の少ないことゝ、生活に對する愛着の少ないことに比例して、相對的に完成する。そしてこの方向に進行したもの達が、ことごとく知識者の群に入るのである。いはゆる『知識階級問題』とは、かくの如き知識者の群の起せる社會問題である。

しからばかくの如き生活者と知識者との、社會的對立の意義は如何。その社會的關係は如何。過度時代における社會關係と、當來社會における分野は如何であるか。

四

その前に明かにしておかねばならないことは、生活者の群の社會的統一原理のことであり、さらに進んではその必然の結果たる階級分裂と階級鬪爭のことである。

生活は分裂した。從つて生活者も社會的に分裂した。實に四分五裂の狀態に歸してしまつた。しかも社會は、なん等計劃的の統制力を有しない。各々の生活者は、自己の能力の許すがまゝに、寧ろ自己の機會の指導する方向に向つて、勝手な生活を營む。なに人もこれを強制するものはなく、なん等の權力もこれを指導しない。これを經濟界の無政府狀態と稱する。

いまの時代は、まことにある意味においては、無政府狀態である。しかし『なに人もこれを強制するものはなく、』といふのはまことであるが、『なん等の權力もこれを指導しない』といふのは、抽象的意義においては、全部眞ではない。もとよりかゝる指導的中央權力はない。しかしこゝに一つの指導的原理があつて、この原理が生活の上に君臨し、すべての生活者を統卒してゐるのである。

しからばその統卒的地位にある原理とは何であるか『價格』がこれである。

げに價格こそすべての生活者の生活を統卒するものなることは、多くの紙數を費すべく、あまりに明白なる原理である。殊に私はすでに國家學會雜誌第三十六卷第四號乃至第六號に亘つて、『價格經濟學上に於ける利潤の地位』なる小論策のうちにおいて、やゝその意味を評論しておいたから、いま更再說の必要はない。まことにすべての生活者は、價格生活である。眠るも覺むるも價格である。働らくも働らかざるも價格である。資本家の生活とは、利潤といふ形式における價格を獲得するための生活であり、勞働者の生活とは、賃銀といふ形態における價格を獲得せんための生活である』。何人が利潤なきところに、××

會社と△△商店を營むであらう。何人が無賃銀にて、汗を流してハムマアを振ふであらう。

いはゆる藝術家と雖も、生活するためには價格生活者である。流行作家とは、而して大家とは、印税收入の大なる文藝家である。書肆はこれに一割二割の印税を支拂ひ、讀者はそのために一圓二圓の小使錢を貢納する。もしこの價格原理がなければ、文藝界なるものは成立しないであらう。

生活者の社會が、社會としての秩序を維持して行くことのできるのは、すべての生活者が價格を最高原理として生活してゐるからである。經濟界の無政府狀態は、價格原理によつて始めて統制されてゐるのである。すべての生活活動が、價格といふ唯一の標準によつて律せられてゐるが故にこそ、選擇と秩序とがあるのである。生活者の社會は、價格大帝の統治社會である。これが、いまの時代の特色である。

價格社會はその完成期に近づくに從つて、すなはちその末期に近づくに從つて、其の間に一大溝渠を發生せしめた。すなはち利潤を生むべき資本價格を私有する『資本家』と、自己の勞働力を切り賣りにしなければ、賃銀價格を獲得することのできない『勞働者』との對陣である。すべての生活が價格生活である限り、價格は社會的勢力である。そして價格が社會的勢力である限り、價格の社會的具現たる資本は、社會の動機である。資本家が生活社會の中樞に立ち、賃銀勞働者を驅使すべきは、むしろ理の當然である。

こゝにマルクス以來唱道され來りし、階級分裂の由緣を羅列するは徒勞である。たゞいま資本社會の末期に至つては、階級分裂と階級鬪爭とは、理論を去つて現實の事實となつた。現象界の出來事となつた。ブルジョアとプロレタリアとの對立は、最も眼覺ましき社會事實となつたのである

そしてさらに注目すべき現象は、プロレタリアの近時における擡頭である。

プロレタリアが擡頭したといふことは、必らずしも無産者の勢力が增大したといふ意味ではない。『なんだブルジョア奴。おれあプロでい!』といふやうな氣焰が、方々の居酒屋で聞かれるやうになつた位のことである。しかし少なくとも、無産者は階級的に自覺しつゝある。そして資本家も、また階級的に眼覺めつゝある。かくして生活社會内における溝渠は、日に日に堀りかへされて、夜に夜にその深さを增しつゝある

いまの時代は生活分裂の時代である。そして生活の分裂は、階級分裂と階級鬪爭とにおいて、その最高發展形態を見出すのである。

こゝにわれ等の『生活者と知識者との問題』は、この階級鬪爭なる社會現象に對する、知識者の地位は如何といふことに歸着する。

五

階級鬪爭が激烈になるに從つて、知識者の歸趨如何といふことが、問題となつて來る。知識階級問題といふのは、主としてこれである。

嚴密に言へば、知識者は階級をなすものではない。社會階級は、さきにも述べた通り、生活の分裂から發生し來つたものである。その差別は、生活手段の差異に基く。しかるに知識者と生活者との差別は、すでに生活者間の階級別以前に(時間的關係でなく空間的關係における)發生せるものである。從つて知識者の群は、社會階級の埒外に存立するものである。これに加ふるに、知識者なるものは、その內在的特質によつて、階級を作ることを妨げられてゐるのである。

その一は、知識者の本質から來るものであつて、その二はその傾向に基くものである。

知識者の本質は、すでに述べた如くに、人生觀としての知識本位論者である。その生活は、知識を本位として營まれるものである。生活から知識を生み出すのではなくて、知識から生活を生み出さうとするのである。從つてかれ等にとつて、生活手段の共通は、生活內容の共通を惹起さない。そこには資本階級や勞働階級の間に存するやうな、生活內容の共通に基く利害關係がないのである。

知識者の多くは、中產階級以上の子弟である。そはさきに述べたるところの如く、知識の天國に逍遙するの自由は、生活の脅威の少ないに比例して與へられるからである。しかしその出生が中產階級または有產階級にあるといふこと、それがなんであらう。かれ等は資本を元本として、利潤生活を根柢とするものではない。その人生觀は別のところにある。またその社會的所得から見れば、多くは知識を賣物にする勞働者である。知的勞働者とも稱せられてゐる、しかしそれがなんであらう。その目標は、現實生活の向上ではなくて、知識世界の完體にあるのである。

知識者は、生活の利害が共通せざる限り、またたとへ共通するとも、生活の利害を人生觀が重現せざる限り、自ら階級を作るものではない。

知識者が知識階級を形成しない理由の第二は、その傾向が、個人主義的なるにある。このことは、いま少し說明を要するで

あらう。

知識者が個人主義者であるといふのは、その理論が個人主義理論であるといふのではない。理論としては、個人萬能論者もあれば、社會萬能論者もある。或はその妥協論者もある。個人の完成に人生の眞義を發見するものもあれば、社會の進化に人格を沒入すると說くものもある。しかしかれ等が、その生活傾向において、すべて個人主義的なるは一般である

知識者は、その人生理論の如何に關せず、すべて個人主義的である。これは知識が生活から分離して、自體の完成を目標とするに至りし、必然の結果と言はねばならぬ。地上においてこそ、(生活の土に立つてこそ)知識は握手する。高く天上に飛翔するものは、共同意識を有しない。等しく個人主義的なのである。

知識者が個人主義的なることは、その階級鬪爭に對する態度において、著るしき特色を發揮し來たるものであるが、これは後に說くであらう。とにかく知識者は、階級鬪爭の當事者ではない。そして自らもまた知識階級なるものに團結することをなさない。自ら獨自の地位より、獨自の見解をもつて、階級鬪爭に臨むのである。

六

獨自とはなにを言ふか。その個人的理想主義これを言ふのである。

現實の立場に立つてこれを觀れば、いまの時代は潮流の社會である。一方にはいはゆる社會運動がある。この社會運動も、さらにこれを勞働組合運動・消費者組合運動・社會主義運動の三個別潮流に分れねばならず、その個別相は、各々混同すべからざる特性を有することは、「社會運動の批判的原理としての社會政策」(社會政策時報本年二月號乃至六月號連載)のうちに詳論しておいた通りであるが、とにかくこの三潮流か、或は個別運動として、或は合同運動として、資本社會の城砦の礎石を搖がしつゝある一方の潮流であることは、疑のない事實である。

これに對抗するものに、資本家並にその指揮する傭兵達の、社會維持運動がある。或はその運動の消極的なるために、或はその思想の退歩的なるために、ともすれば社會の運動としては忘れられ勝ちであるけれども、その實勢力は決していはゆる社會運動に劣るものではない。いま勢力は比敵してゐる。

この相頡抗する二大潮流は、一つの溝に落ち合つて、衝突し、反撥し、そして渦を捲きつゝあるのである。いまの時代は

渦の世である。當來社會のために渦を割く時代である。當來社會は渦の動く方へ落着する。而してこの渦に對する知識者の地位は？

知識者の地位は、渦のなかに浮き沈みする水草である。かれ等はいはゆる社會運動のなかに混入して流れ來つたものもある。資本主義運動の上に泛んで流れ來つたものもある。そしていま渦のなかで浮沈してゐるのだ。しかしかれ等が、潮流ではなく、たゞ水草であることは、いかにしても事實である。

知識者は、或は生活者を指導し誘披し來つたものと、自ら信ずるかも知れない。しかしそはかれ等獨得の自惚にすぎない。かれ等は潮流を指導したのではない。潮流におし流されたのだ。生活の潮流は知識の如何に關せずして流れ去る。知識者は理想の天國から、この現實の流れを見て、天空から舞ひ降りた落葉である。

資本家の武器は算盤と會計簿である。勞働者の武器はハムマアとシヤベルである。この爭鬪に、知識者は、徒手空拳をもつて參加せんとするのである。

資本家は資本家の理想を有する。勞働者は勞働者の理想を有する。生活者を無理想者と言ふことはできない。たゞ生活者の理想は、生活の現實から生れ出でたる理想である。これに反して知識者は、理想から現實に降下し來たるのである。そして現實の理想と相關し來たるのである。

知識者の、社會内における特異の地位は、實にこれに所以するものである。知識者と雖も、この生活の動搖に際しては、いづれにも袖手してゐることはできない。たゞ資本家と勞働者と、いづれの側に加擔するとも、結局は異邦人にすぎない。

知識者は、いまの時代においては、つひに異邦人である。つひに『無緣の衆生』である。これもまたかれ等の本質に基く、一つの運命にすぎない。

七

有知識者にして、資本家の幕下に馳せ參じ、資本増殖の内助の功を擧ぐるに、日も夜も足らさるものがある。私のこゝに論じつゝある知識者とは、これ等の人々の謂ではない。かれ等は資本家の走狗であり、その亞流である。その特質は生活者であつて、いはゆる知識者の群に入るものではない。

勞働者として生れ、勞働者として生活してゐる人々の間にも、特殊の高級知識を有する人々はある。いはゆる知識者と稱せらるべきものよりも、その知識程度においては、さらに高度の人々さへある。はなはだ稀ではあるけれども、ないことはな

い。かれ等こそまことに畏敬するに足る人々である。しかし私のこゝに論じつゝある知識者には、これ等の人々を編入しない。その人生觀が、生活中心に存せざる限りにおいては。

さらに本論から除外さるべき知識者のうちには、生活の階級闘爭に全然沒交涉なる知識者がある。かれ等は知識至上主義者であり、かれ等こそ純眞の知識者であるけれども、知識者と生活者との關係を論ずるにあたつては、この純眞の知識者も、姑く論外としなければならない。科學としての科學、藝術のための藝術。そこにどれだけの價値があるかは別問題として、それが知識の埒外を一歩も踏み出さざる限り、この問題の範圍內には入り來らぬ。プロレタリアの欲求がいかに衷心のものであり、階級闘爭がいかに激甚なる現象を呈しやうとも、そは全然心を動かすに足らずとなし、または强いてこれに眼をふさぐ人々に對しては、多く語るべき言葉を見出さない。

こゝに論じつゝある知識者とは、第一に、生活を知識によつて統一し、知識によつて生活を指導せんとする態度を採る人々である。第二に、かゝる態度をとりながらも、生活者の闘爭に對して、全然無關心なることを得ずして、その獨自の立場から、生活者の階級闘爭に向つて、交涉し來たる人々である。双方から、異端者として遇せられ、且つは無緣の衆生たることを自覺しながらも、なほ階級闘爭に加入し來たるが如き人々である。

かれ等は、或る意味においては、不徹底なる知識者である。同時に或る意味においては、不徹底なる生活者である。或は言ひよるであらう。知識者ならば、なぜ知識者としての領域に、自ら安然としてすつこんでゐないのだと。生活闘爭に參加するならば、なぜ知識者としての誇を捨てゝ、純然たる生活者の群に入らないんだと。

しかしそれは、責めるものの無理である。私はかくの如き言責に對して答へる。――生活者の闘爭に參加せんとする如き、知識者の群の生じたことは、生活者の階級的差別と、その階級闘爭とが 歷史進展の必然の意志であるのと同じ意味において、歷史の盲目の意志によるものであると。それもこれも歷史的所產であると。從つてかゝる知識者の出現には、なん等かの社會的意義が、なくてはならない筈であると。――私はかく信ずるものである。

次にこの知識者の、生活者の闘爭に對する參加の社會的意義が、果していづこにあるかといふことについて、若干の考察に入る。

八

知識者の生活者鬪爭加入について、力強い否認の態度を闡明したものは、有島氏の『宣言一つ』であつた。氏はその後引き續き、『「雜思」を讀んで芥川氏に』（泉第一卷二號及び三號）『文化の末路』（第二卷第一號）を發表されて、その根據を明らかにされた。私は私の理論をして、よりよく理解され得んがために、有島氏の所言を引用しつゝ、論を進めて行く。

有島氏は、階級鬪爭の本質が、生活者と生活者との鬪爭であつて、知識者の干渉が、それになんら等の貢獻なきことを述べ、『學者若くは思想家の學說なり思想なりが勞働者の運命を向上的方面に導く』ものであるとは『いはば迷信』であつて、知識者の『勞働問題の根本的解決は自分等の手で成就さるべきものだとの覺悟』が、勞働者に對して或る『魔術的暗示』を與へてゐたものであるが、『然しながらこの迷信からの解放は今成就されんとしつゝある』と言ふのである。

もとより、生活者の鬪爭が、生活者自體の問題であつて、知識者生活の問題ではないことは、これまで幾度となく縷說したところである。しかしなに故に、知識者の『思想なり學說なりが、勞働者の運命を向上的方向に導く』といふことは、『いはば迷信』であらうか。もとより生活者の運命が、知識者の知識によつてのみ、向上されるものと信ずるならば、それは『迷信』である。生活者の運動は、よし知識者の啓蒙がなくとも、起るべきところには必ず起るであらう。そして行くべきところには、必らず行きつくであらう。しかし知識者の、この異端者の、或る意味の指導がなかつたならば、現在見るほどの秩序的運動となり得たであらうか。私はそれを疑ふものである。さらに進んでは、その革命的行程が、知識者の援助を缺きたるがために、思はぬ迷路に陷るやうなことはないであらうか。私はその點について、さらに深き惑ひを持つものである。

若し私一個の所信を、端的に言明することを許さるゝならば、生活者が社會運動を起すのも、歷史進展の必然的運命ならば、知識者がその社會運動に對して、或る意味の指導を與へ、少なくとも幾分の貢獻をなすべく餘儀なくされるのも、これも歷史の意志である。この運命に對しては、有島氏の言を借りて言へば『國家の權威も學問の威光もこれを遮り停めることは出來ないだらう。』問題は知識者なる異邦人が、生活者の鬪爭に干渉することの是非にはなくて、その意義如何にある。……とこう私は考へるのである。

九

もとより有島氏が、知識者の生活者鬪爭に對する干與を非な

りとなさるゝのは、その社會的意義を無または害と考へらるゝからである。「私が第四階級の人々に對して何等かの暗示を與へ得たと考へたら、それは私の謬見であるし、第四階級の人が私の言葉から何等かの影響を被つたと想感したら、それは第四階級の人の誤算である。」と考へらるゝが故である。

生活者の生活鬪爭が、生活者の解放運動であつて、知識者の示唆なしにも成立しうるといふことは疑ない。「第四階級者はクロポトキンなしにもいつかは動き行くべき所に動いて行くであらう。」これは有島氏の言明の通りである。しかしその動き方が、またその動く方向が、知識者なしに動いたときと、知識者とともに動くときと、多少の差異を來たすことはないであらうか。

もとより知識者の知識が、生活者の運動に或る影響を與へ得るのは、生活者の運動が起らんとする機運を發したるときに限る。その運動が芽生え初めたるときに限る。しかしその芽生えが、妥當なる方向に向つて、妥當なる發達を遂げんがためには、ある培養を必要とはしないであらうか。もとより發達の力は、芽のなかに、大地のなかに、大氣と太陽とのなかにあるので、培養者のうちにあるのではない。さりとて培養者の努力は、全然無力であると排拒すべきものであらうか。

是非の問題は姑くおく。事實として、これまで知識者の努力が、生活者運動の發展について、多少の效果があつたといふことは、これを認めなければならない。クロポトキンやマルクスの努力は、決して空には投げ捨てられはしなかつた。これは歴史の事實である。いかに巧妙にして力強い理論であつても、かれ等は「第四階級以外の生活と思想とによつて育ち上つた」が故に、第四階級の運動に影響を與へ得ない筈であるといふ理論をもつて、この事實を覆すことはできない。

有島氏が、無下にこの事實を否認さるゝものでないといふことは、言ふまでもない。たゞ有島氏は、この影響が、運動自體のために、不堅實なる影響なるが故に、これを排斥すべしと言ふのである。「眞個の第四階級から發しない思想若くは動機によつて成就された改造運動は、當初の目的以外の所に行つて停止する外はないだらう。」と考へらるゝからである。

私は、生活者の生活運動が、異邦人たる知識者の協同によつて進捗したものであるといふ事實を率直に認むることができ、さらに協同できない筈はないといふ理論を、充分に粉碎することさへできれば、それで滿足するものである。必しもその是非に論及する必要はない。それはあまりに歴史の意志を無視した、冒瀆の行爲と考へるから。しかし歴史が、なに故異邦人た

る知識者を驅つて、生活者運動に參加せしめたか、その所以を揣摩することを許さるゝならば、私は有島氏に反してから言はねばならない。

一〇

生活者の生活運動は、生活解放のために開始されたものである。賃銀奴隷が解放の叫びである。生活の向上の努力である。むしろ資本家に對して、勞働者の有利なる賃銀要求の戰である。端的なる貧乏退治の運動である。これは各國の勞働運動史が證人に立つてゐる。勞働運動は、資本家に對する權利の要求から始まつて、權利の獲得によつて終るものである。これが勞働運動の『當初の目的』である。

知識者の立場は、自らこれと異なる。かれ等は階級鬪爭の當事者ではない。從つてその考へは餘閑がある。かれ等の思索は、「貧乏」といふ社會現象に、それほど痛切に當面しなかつた。從つてこれに固執することも、生活者よりは少ない。知識者は貧乏といふ社會現象から離れて、この『社會現象』を發進せしむべき、『社會組織』にまで思をひそめた。そしてこの社會現象は、この社會組織の必然の結果なることを發見した。從つて「貧乏」なる社會現象は、單に社會現象としてのみ當面したのでは、結局滅却せしむるを得ないものであるといふことを見出したのである。そこで知識者の理論は、社會改造論——從つて社會道德改造論——にまで進展したのである。

勞働運動が生活解放をのみ目的とするとき、知識者を中心とする社會主義運動は、さらに高翔して、社會改造論にまで到着した。生活に即せざるこの『社會改造論』は、有島氏の眼から見れば、『不自然にして不堅實』であつたかも知れない。しかし私から觀れば、生活者のほかに知識者なる社會群を發生したことも歷史の自然であるし、この知識者が、この社會改造論を提げて生活鬪爭に臨むのも、また歷史の自然である。或は不自然であつても自然であつても、とにかく事實として、この知識者の社會改造論が、生活者の生活運動に對して、或る希望と、目標と、限界とを與へたことだけは、これを否定することはできない。

歷史は共產社會へ向つて進行しつゝある。資本主義社會は、その事實的根據を供する。生活者の運動は、その進行の本流をなすものであり、知識者の參加は、これに頭と眼とを供するものである。私はかく信じてゐる。しかし有島氏は、この生活者の運動から、頭と眼とを奪ひ去らんと企てるのである。なに故であるか。いはゆる勞働運動なるものが、すでに當來社會の萠

芽を有するものと認められるからである。當來社會の道德的基礎は、資本主義社會のうちにおいて、生れ育ち教育されたる勞働者が、すでにこれを有するものと信ぜらるゝをもつてである。

果して然るものであらうか。

二

社會道德は、社會組織の基礎の上に立つものである。いまの社會には、その社會組織に附屬する社會道德がある。すべての生活者は、それが生活者である限り、この社會道德の羈絆を脱することはできない。その心意が、資本主義社會特有の社會道德に寄せられてゐる點においては、有産者も無産者も、そこに差別はない。資本家も勞働者も、ともに一般である。有産者はその有産の故をもつて、無産者はその無産の故をもつて、資本道德の縛めを脱することはできない。或はむしろ、産なきものは、産なきことに比例して、彌々益々痛切に、資本主義の眞相に徹底し、その心裏の奥底までも、その血管の末梢に至るまでも、資本道德に喰ひこまれてゐると、論ずることもできる。資本主義社會組織の怖るべき所以は、かくの如き心意を、民衆に與へるといふことである。

知識者の社會的地位は、生活を超越せるところにある。一度び天上に翔つて、思索の自由を與へられたるところにある。資本道德の縛めが、より少ないところにある。かるが故にかれ等は、資本道德の毒素を研究した。そしてその原因が、社會組織そのものにあるといふことを、發見したのである。そして社會組織の改造のみが、この資本道德よりの民衆の解放を、可能にするものであると唱へだしたのである。

新らしき文化の創設は、社會組織の改造によつてのみ、始めて望むを得るものである。これが知識者を中心とする、社會主義者の理論である。かれ等が資本社會より共産社會への道程に、革命時代なる過渡期を想定したのは、この革命期において、まづ社會組織を改造して、この改造社會の道德により、民衆の心意の縛めを除き去り、新らしき道德をもつて、その肺腑を改造せんとする所以にすぎない。逆に言へば、資本主義社會の内部に生息せる民衆に、共産社會の基礎たる、社會中心の道德を庶幾し得ずと信じたからである。

私もまたこの信仰をもつものである。しかるに有島氏は、これに反して、現在の第四階級たる民衆のうちに、この新社會道德の發生を認められるのである。かるが故にこそ、知識者の生活鬪爭に對する干涉を拒まれるのである。社會主義者が、革命

期の長き教育によつて、始めて發生し得べしと想定したる道德を、現在の、資本主義的民衆のうちに、すでに在ると主張さるゝのである『勞働運動の道德的基礎に就いて』及び『文化の末路』なる二雄篇が、氏のこの信仰を物語つてゐる。

三

「道德原理としては勞働する人もまた病人と同じくパンを『儲ける』のではなく、人類に對する奉仕として行はれ、パンは病人も勞働する人と同じく必要に應じて與へられるのであるといふ氣持で生きなくてはならぬ。」と有島氏は言はれる。この氣持こそ、共産社會の道德の最高原理である。問題はいまの社會に、かゝる氣持で生きてゐる人が、果してあるか否かといふことである。

知識階級は、理論としてまた知識として、かゝる氣持を理想してゐる。しかしそれが生活として、または生活の理想として、體驗的に痛感したものでないことは、言ふまでもないことである。それでは資本社會内に生息してゐる勞働階級が、かゝる生活的理想を、眞に把握してゐるかと言ふに、これも甚しい疑問である。或は二三あるかも知れない、しかし社會運動は集團運動である。勞働運動が集團として、これを痛感してゐるか否か。私は躊躇なく否と言はねばならない。

勞働運動は、民衆の資本的生活から生れ出でたものである。その道德的根據としては「權利としてのパン」といふ思想が、最も深くひそんでゐる。勞働運動の根據がそれにあつて「奉仕としての勞働にないといふことは、自明のことである。かるが故にこそ有島氏の言はれるやうに「勞働問題を提げて立ち向ふと、人類といふものが同質な一つの集團としては迎へて來ない。」『勞働問題に對しては、人類は明らかに相反噬する二個の集團に分離してゐるのを發見せねばならぬ』のである。理想は『奉仕としてのパン』であり、現實としては『權利としてのパン』である。しからばこの現實は、いかにしてその理想に移り得るか。

それは資本主義的社會組織を崩壞することである。そして資本と勞働との障壁の破壞である。「勞働階級は資本主義者がかゝる罪惡を犯すに至つた資本階級存立の源頭に溯つて、それを打崩さうとしてゐる。」『彼等の熱意は制度破壞に集注される。』――と有島氏は言ふのである。

勞働階級が、少なくとも理論として、かゝる態度を採るに至りつゝあることは、勞働運動の一進展である。しかしこの理論が、生活者の生活運動の、體驗的傾向であるか。或は單なる理

論にすぎないではないか。その理論さへも、知識者の知識からの借物ではないか。私は疑をもつてゐる。

生活者の運動はたゞ戰鬪としての運動である。かれ等の心頭には、自己を苦めつゝある資本家に對する憎惡のみが、生活體驗として痛感されてゐる。「かれ等は戰ふことのみを知つてゐる。知識者は、その戰が、なんのために戰はれつゝあるかを教へた。そして無産者の勝利の後には、いかなる社會が待ち受けてゐるかを教へた。これは單なる知識である。しかしその知識は、かれ等に希望と、目標と、秩序とを與へた。

この知識がなかつたなら、階級鬪爭は暗黒の戰であり、盲目の戰であり、迷路の戰である。知識者は、鬪爭を、迷路から惹き出すのである。この文明は、生活者の地上から湧き上つたものではない。知識者が高く天翔つて、遠く天上より持ち來りし文明である。

これが知識者の、存在の社會的意義である。

一三

『明らかに私達の文化の末路は來た。『次の時代には『民衆全體の力によつて文化が生み出される。』

然りいま資本主義社會は、死の床に苦悶してゐる。社會組織は、生活者自體の運動によつて、早晩は革命されるであらう、そして革命されたる社會組織からは、新らしい文化が、再び燃え上つて來るだらう。われ等はこの新たる文化を待ち望みつゝ、革命時代の過渡期に、苦悶しつゝあるのである。

新らしい文化は、『民衆全體の力によつて』生み出さるゝ』かも知れない。しかし文化を生み出す民衆とは、資本主義社會のうちに教育され、いま階級鬪爭に熱中してゐる民衆ではない。かれ等の心腦は、資本道徳の毒素のために、あまりに多く腐蝕されてゐる。かくの如き民衆は、資本階級の人々とともに、前世紀の遺物として、新らしき文化社會においては、廢物の如くに捨て去られなければならない。

新らしき文化を起すものは、新社會の理想を知識する、現在の知識者ではない。かれ等の知識は、あまりに生活から分離してゐる。社會制度が生活と知識とを、かくまでに分裂せしめたのだ。新らしき文化社會から見れば、かくの如き分裂見は、卑むべき不具者にすぎない。

新らしき文化は、新らしき社會からのみ、發生し來たるものである。新らしき社會の民衆の間からのみ、生み出されるものである。いまは過渡期である。なに人も新らしき文化者なりと、自ら呼號する特權はない。

生活者を過信する勿れ。かれ等は知識の眼を失つたる不具者である。知識者を信ずることを愼めよ。から等は生活の體驗を有しない。新らしき社會は、新らしき人格によつてのみ、建設さるゝものである。現代は、かくの如き人格を育て上ぐべき、社會を建設せんがために苦闘しつゝある、不具者の構成せる社會である。

いまの時代は、分裂の時代である。生活と知識とが分裂した。この分裂は、社會の罪である。何人も咎めることはできない。たゞ新社會の建設は、社會の全身をもつて努力すべき大事業である。この大事業に向つては、不具者は互に握手しなければならない。社會の名をもつてする以外、生活者は知識者の協力を拒む權利はない。生活者獨力をもつて、新社會を建設すべしと豪語するは、知識者が自らその指導者、頭梁をもつて任ずるのと、同程度の冒瀆である。

生活者から見れば、知識者が異邦人である如くに、知識者から見れば、生活者は異邦人である。いまの時代は、異邦人の手をつなぐべき時代である。

一〇

終りに臨んで、一言蛇足をつけ加へることを許して戴きたい。

階級闘爭は、生活者の闘爭である。その意味は、生活者全部の闘爭であるといふ意味ではない。その急先鋒たる工業勞働者と、商工資本家との闘爭である。眞に民衆たる名に値する農民は、この運動に參加してゐない。知識者が階級闘爭の異邦人であるといふ以上の意味において、農民はその異邦人である。

この事實は、生活者と知識者との問題以上に、重大なる意義を有する問題である。この農民の忘却は、一部マルキストの罪である。その『資本論』が、主として商工業に立脚せるがために、農民は無產者でありながら、殆んどプロレタリアの地位をさへ奪はれたのである。

この農民の忘却は、ロシア革命に大きな反影を投げた。ロシアの農民が、コオペラテイヴの旗下に集つて、プロレタリアの獨裁に對抗しつゝあることは、すでに本誌四月號に詳說したるところである。ロシア革命の成敗、惹いては共產社會の出現如何は、この農民問題の解決如何にあると言はねばならない。

農民が生活者でないといふのではない。工業勞働者以上の生活者である。農民が生活の脅威を感じてゐないといふのではない。その脅威は工業勞働者を超えてゐる。工業勞働者が資本階級のために虐げられつゝある以上の壓力をもつて、農業は商工

業のために虐げられつゝあるのだ。

しからばなに故農民は起たないのか。之の理由は、一部は農民の傾向にもよる。しかし農民も漸次自己防衛に集團しつゝある。かれ等の起つべき機運は動いてゐる。たゞかれ等は社會から見殘されてゐるのだ。階級鬪爭に熱心なる知識者達は、そしてマルキシズムに心醉せる學者や思想家は、——（尤もマルクスの資本論には、農業が商工業に壓制せられることを明記してある）——農民問題に主力を傾注することを嫌つたのである。この知識者の偏頗は、農民問題を未完成のまゝに殘す一原因となつたやうに思はれる。

農民生活者が、知識者の援助を缺きたるがために、農民運動がいまだ社會運動化することの出來ないことは、その裏面において、工業勞働者の運動の社會運動化に、知識者の貢獻多かりし事實を物語るものであるが、いまこれは措く。たゞ農民問題の閑却が、社會革命の進行に從つて、共産社會建設の途上に、一大支障を置くものであることは、ロシア革命がこれを立證した。

農民と知識者との關係は、勞働者と知識者との關係と一般である。ともに現代社會の不具者である。不具者は互に手を握らなければならぬ。農民運動は知識者の協力を得て、始めてその希望と目標とを得る。そして純然たる社會運動を形成することができる。農民の運動は、知識者の干與なくとも、動き行くべきところには早晩動くであらう。しかしこれを缺いでは、社會運動となることはできない。

惜むらくは知識者にして、眞に農民運動の本質に徹底し、工業勞働運動の徒なる議論から離れて、個有の眼目を入るゝ人の稀有なることである。

一五

ツルゲニエフの「散文詩」に、「白い手の勞働者」といふのがある。いまの知識者は白い手の勞働者である。嗅いで見ろ、鐵の臭ひがするであらう。彼れもまた共産社會の建設のために、努力する勇敢なる戰士だ。そして鐵鎖に手をつながれて、牢獄にさへ眠るであらう。しかしその手は、それにも拘らず、白い。白い手は生活者の異邦人である。

社會革命は、異邦人の握手以外の方法によつては建設されない。しかしながら異邦人の握手しなければならぬ時代は殃なるかな。かくのごとき時代を作り出せる社會は殃なるかな。社會内に異邦人を共存せしむる社會組織は殃なるかな。

しかし、それもこれも過渡時代である。之は異常の事態であ

る。異常の時代には異常の現象が簇生する。知識者とか生活者とかいふ區別の生ずること、それ自體が異常である。そしてかゝる不具者が、互に共同の目標に向つて、協力するといふ如き、異常のまた異常である。『生活者と知識者との問題』を、論じなければならぬやうなことそれ自體が、すでに異常である。

私はこの文章が、無用のこととして、紙屑籠のなかにほりこまれるやうな時代であつたら、どんなに愉快であらうかと思ふ。

（完）

プロレットカルト論

土田杏村

甲、プロレットカルトの意義

プロレットカルト――其の言葉が新奇風變りだから流行して居るといふのであつてはならない。出來得べくんば、かうした新らしい言葉を避けるが實質的の效果を擧げる所以かも知れない。プロレットカルト論の爲めに特別の一書を書き、そして其の書の爲めに我國へプロレットカルト論の渦卷を起させたかのポオル氏夫妻は、其の別の著の中では、獨逸のワルテル・ラテナウ氏――其名も亦我國では今以上に高く評判せられてよいものであるが――の言葉を引用して、「新らしい思想は、其れが一の新らしい名稱と聯結せしめられた場合に、我々の精神の上に、より確固たる印象を與へる」と言つた。特別に、プロレットカルトだとか、エルガトクラシイだとかの新語を使つた彼の心理的理由だ。流石に精神分析學に深い興味を持つポオル氏の言ひさうな理由だ。けれどもさうした新奇の言葉は、我國では、一時にパツトとした流行を喚び起すが、後とはばつたりと火の消えた樣になるが普通である。プロレットカルトに其の運命を喚びたく無い。我々は新らしい言葉に幻惑せられず、其の新らしい精神を我々の社會生活の中にすつかり吸收して了ひたいものだ。

プロレットカルト――勿論其の言葉は the pro'etarian culture を縮めたのだが、此の場合のカルチュアなる英語は、邦譯するに困難だ。獨逸語ならば、我が國人としては一層親しみ深い、同時に其の意味を熟知する、クルトゥールといふ語だ。露語の場合にも、其れは本來の露語では無いが、やはりクルトゥールといふ語を革命前から使用して居る。革命政府がプロレットクルトなる新語を使用した場合には、言ふまでも無く其のクルトゥールの意味に於てしたのであり、若し此れを邦譯するとすれば「無產者文化」である。プロレットクルトの新語を使用する前にも、ルナチャルスキイ氏の如き、頻りに「無產者文化」なる語を使用して居た。クルトゥールは英語には飜譯せられ得ない。シヴィリゼーションでも無ければ、エデューケーション、カルチュアでも無い。だからボオル氏も其の說明にすつかり弱らされて居る。獨語のクルトゥールの意味を熟知する我々には、さうした英語の中介無しに、プロレットカルトの意味を正當に理解し得るのである。

けれども此れを社會運動に關係させて考へる時には、成果としての「文化」よりも其れを創成するまでの「敎化運動」の方が眼立つて來る。だからルナチヤルスキイ氏やボオル氏の論じたプロレットカルト論は、內容的にはやはり一の「無產者敎化論」であつた。其れ故に我々も此の意味に於てロプレットカルトなる新語を使用する事にしたい。言葉が短かいから我々には便利だ。已ならず此處にカルトなる言葉を使用したのは、我々が今後主張したいと思ふ內容を示すに丁度ふさはしいからである。成案に隨ひ、意識的、連續的に影響を與へる學校の所謂「敎育」だけがカルトではない。其他斷片的、無意識的に、其の社會の傳統が其の社會の組成員に與へる影響をもすべてカルトと呼ばなければならぬ。然るに強いて「敎育」の語に固執する時には、「敎育」以外のカルトを「成人敎育」「國民敎育」「社會敎育」などゝ呼ぶ事となるが、此等の語を使用する事自身が、後に述べる如く、現代人のカルト觀に大害を與へて居るのだ。其れ故に我々が最初からカルトなる語を使用し、所謂「敎育」を其中に含めて了ふ事は、現代人の所謂敎育觀を根本的に革命することであるし、隨つて又我々の所謂プロレットカルトの意味を社會人の意識內に浸染せしめ得る所以でもある。其時はボオル氏が言つた樣に、實際新らしい言葉を使つて新らしい思想を表現し得る實效を我々は擧げ得たのだ。

二三年前私は社會改造の方策を論ずる時に、敎育と藝術と宗敎の三者に、最も多くの期待を置くと主張した。然るに其の當時は、客觀的社會組織を改造するもので無ければ、改造運動

たる價値を持たない樣に言ふ評論家の數が可成りに多く、私の主張する樣な改造方策を「心的改造」と呼んで輕蔑するものさへあつた。併し今になつて見れば、人間の文化觀の問題こそは實は社會改造論に根本的の問題であつた。そして我々が今現に着手す可き改造方策としては、客觀的社會組織の變改の方面に幾干の力をも加へ得ない事が明瞭となつた。例へば歐洲の社會運動に取るも同じ事である。社會革命は今や正に其の時期で無い。同盟罷業は現時の如く失業者の頻出しつゝある時に、却て慘憺たる影響を勞働者の生活の上に投げつける。勞働運動指導者は既成の勞働組合の糾合勢力を失はない樣に、全力を其事の上に注がなければならない。レニンでさへ、昨年十一月十三日の長演說では、世界の無產者運動に對し、「退却の確保」を警告した。或るものは、現在の勞働組合を基礎とし、同盟罷業や革命とは違ひ、現時の不景氣時代にあつても實現の出來る改造運動を案出しようとし、かの所謂ドゥーグラスイズムの新潮流——其れも近來私が熱心に紹介して來たに拘らず我國ではまだ何等、評論の題目にはならない新潮流ではあるが——を生んだりした。

かゝる場合、私は殊にプロレットカルト運動に多くの興望を置く。其れは勿論他の改造運動の成績と無關係に、獨立に發達す可き性質のものではあるが、併し今の場合に因んで、特に私は其の運動に大いなる興味を置く。今こそは我國の教育に大變革を與へ得る——隨つて現代人の懷抱する教育、教育の制度、教育の精神、學校等の概念の考へ方に、全然の變革を與へ得る時が來たと、私は考へざるを得ない。換言すれば、其れは現代人の人生觀を根本的に變革せしめる其の運動なのだ。社會改造の方策として此れほど根本的のものは無い。又プロレットカルト運動が相當の實蹟を擧げ得た時には、事實に於て客觀的社會組織其のものが、大いなる變革を與へられて居るに相違無いと私は信ずるのである。

プロレットカルト論を、私は昨年以來幾度と無く書いて來た。其れ故今は私と立場を異にするマルクス主義者のプロレットカルト論を批評する事などを省略して、私の懷抱するプロレットカルト——其れは直ちに我國で實行し得られる——の主張を述べて見たい。此の考へが生み出される爲めには、マルクス主義者の主張が私に大いなる影響を與へた事は勿論であるけれども、併し私は實際ボオル氏の著書などを讀む以前から其の考へを持つて居た。そして其の考へは、私自身のものだといふよりは、實は私が地方の新らしい青年達と交つて居る間に、自然に其の雰圍氣の中から與へられたものである。其れ故に今述べる

事を私は寧ろ地方青年の爲めに代辯するのだといつてよい。敎育の學者と行政家、其他現代の政治家は、今日の地方青年がどんな要求を持つて居るかを、其中から聽取して欲しい。其れは全然の幻想だとさへ見えるかも知らない。併し私は彼等青年が過去と絶縁した全然新らしい社會觀を其中に確實に摑んで居る事を否定し得ない。結局彼等は勝利者であると、私は固く信じて疑はないものである。

乙．精神としてのブルジョアカルト

プロレットカルトの眞義を知る爲めには、我々は先づ現在の地方青年達が、どんな仕方でどんなカルトを受けて居るか、換言すれば彼等の人生觀社會觀を造る爲めに彼等はどんな精神的の糧を與へられて居るかを、豫め觀察しなければならない。

其れを爲すために我々は、都會の中の場末に近いところにあるさゝやかなる書店を素見する。田舍から都會や何かの買物に出て來た地方青年達は、歸りには此の書店へ立寄つて、廉價なる一二の書冊を買ひ、——其れは勿論頻繁に爲され得る事では無いが——其れから歸宅を急ぐであらう。此の一二の書冊こそは地方青年が敎養を受ける大切の源泉だ。其の書冊が轉々として借り讀みせられ、其れによつて彼等の人生觀社會觀は形成せられて行くのだ。だから其等の書冊は實に「國民的の讀み物」なのだ。此の書店の前に立つて私の瞥見した書物は何であるか。「木下藤吉郎」「加藤清正」「雷電爲右衛門」「毛谷村六助」などの講談物が、先づ其の一半を占める。其の殘りの大部分は、我々が其の作者の名前をさへ知つては居ない小說家によつて書かれた、安つぽい感傷的な、家庭戀愛小說の本である。

地方青年の人生觀社會觀は、其れ故に木下藤吉郎、毛谷村六助の其れである。其の覗いて見る自分達以外の家庭は、此の家庭戀愛小說の中に常に取扱はれる某々華族の其れである。彼等は先づ立身出世をする事の必要を鼓舞せられる。立身出世とは、祖先傳來の田園を振り捨て、投機的、英雄的に、運命を開拓して行き、全くの僥倖を以て高位高官や巨萬の富やを獲得する事だ。偉勳赫々たる勳章を胸間に飾り、馬上豐かに三軍を叱咤する將軍は、何といふ英雄主義的な、男子と生れた甲斐のある壯快な活動であるか。內國を征略したゞけでは滿足出來ず、朝鮮支那をさへ併吞しようとして大軍を遠征せしめた豐太閤の雄志は、何といふ肉躍り血湧く壯擧であるか。綺羅錦繡に身を飾り、出入には常に自動車を以てし、夏冬には其れ々々の別莊へ移り住み、朝に夕に舞踏だ、音樂だといつて愉快に暮らす華族富豪の生活は、如何に我々の羨望に値するものであるか。併し我

々は既に水呑百姓として生れた爲め、永遠に其の生活を望む事が出來ない。いかにも社會は我々に、さうした富豪にならうと思へば努力次第ではなれない事の無い自由競爭を保留したであらう。所詮は自分の實力が足りない爲め、其の地位に達する事が出來ないのだ。——

彼等はかうした人生觀社會觀を其等の書冊の中から與へられる。其の書冊の著者が此の人生觀社會觀を一般民衆の中へ宣傳する爲めに、其れを書いたのでは無い。彼等はたゞ其の社會の傳統的カルトの傳達者となつたに過ぎない。今述べた事は、すべて現代人の人生觀社會觀の總和として現に社會人の懷抱するところだ。社會人は其の價値に何の疑念を挿まず、幾分でも其れを疑ひ出す人があれば、彼を目して、危險なる社會の叛逆者だとする。

此等の青年達は、亦其れ々々の村や郡の青年會處女會に所屬し、青年會處女會に特有なるカルトを其れから受け取る。青年會は青年の道德的修養の機關だ。だから青年會は、其れに固有なる道義的標準を持つ。社會主義や、アナキズムは何としても排斥せらる可き國賊の思想だ。青年團の指導者は自分の眞實の良心からさう考へる。そして近來の思想界ほど浮薄輕佻なものは無く、國家の爲め實に忌々しい事だと憤慨するのである。彼等は時々中央へ招集せられて、其等の過激思想の批評を敎へ込まれる。始めて聞いた西洋の思想家の名前が頻繁に出て來るのを、彼等は一つでも聞落さない樣に手帳へ書き止める。此の「外來思想批評」の講義を、大學の國民道德の敎授か誰かから三四日聞いた後、自分の郡村へ歸つて青年會員を招集し、其れへ復演する。私の住んで居る近傍の郡の青年會で、此の指導者の報告する處では、無政府共産主義といふ最過激の國賊主義は、「モリといふ（森戸氏の「戸」は何處か手帳の隅へ飛ばされて了つた）外國人の唱へた邪說」であつた。マルクスが露西亞の過激派の大將になつて活躍したり、クロポトキンが日露戰爭の時の露軍の總指揮官であつたりする。さうした思想問題批判が青年會の事業である。英國のラッセル氏が來られた時、氏は頻りに我國の青年會の內情を聞きたがつて居たが、私は幾多の青年から聞いた其等の實話を氏に話して聞かせたら、謹嚴なラッセル氏も大笑ひであつた。そして「何處の國へ行つて見ても同じ樣な事をやつて居る」と述懷せられた。

其等の青年會の文庫を覗いて見ると、其處には某々氏等の修養書が堆く積まれて居る。其の購入圖書の選擇は偏へに指導者の意志による。もう一つ奇觀を呈して居るのは、其等の文庫の中に、——一々の名を擧げる事は其の經營者に失禮であるから

しないで置くが――我々が平生雜誌屋の店頭で見た事も無いし、新聞で廣告を見た事も無い名稱の修養雜誌が、澤山に積まれて居る事だ。此れを一括して協調思想雜誌といはうか、其の種類、其の發行部數の共に大いなること、到底今日の大評論雜誌の及ぶ所では無いのである。其等の雜誌の鼓吹するところは、すべて一樣に、外來の過激思想を排斥して我國固有の國民道德を推奬し、勞資協調、互尊共榮のモットオを押立て、社會奉仕の念慮の下に青年は活動しなければならぬといふにある。此の同じ調子の説教を青年は何百度と無く聞き、社會奉仕と稱しては幾十回と無く雪避け、道普請を負課せしめられた。だから土地によつては、「社會奉仕」といふ語が、「道普請」と同意語に使用せられて居る實例さへある。

　此等の地方青年は、青年となる前に小學校の義務教育を受けた。其れ故に私は最後に、小學校の學校教育が如何なる精神を以て行はれつゝあるか　瞥見して置かう。

　小學教育の目的に基本とせられるものは、言ふまでも無く「國民的精神」である。國民的精神が即ち人間の道德的、人格的訓育に外ならぬのだ。一歩脚を小學の校舍内に運んで見んか、其處には日清日露役の戰利品、義勇報公の掛圖、某々將軍の揮毫にかゝる額面、日本海々戰の掛額等、何れか軍國主義的帝國の赫々たる武勳を語らぬものがあらう。兒童等の純眞なる感情は、其の英雄的の精神によつて燃え立たせらる。實際教育家の中に其の國民教育的訓育を疑ふものは無く、彼等は眞に良心的に其の精神を鼓吹する。教育學者倫理學者も亦、國家を以て個人の最高完成と見、國民精神を教育の目的の究極的なものだとする。彼等學者の信念の根本的誤謬は何處にあるかを知る爲めに、私は近來其等の學者によつて書かれた幾つかの論文を讀んで見たが、其の結果私には幾分其の消息が讀めた氣がする。彼等には最近社會學の知識が缺けて居るのだ。其れ故、國體、社會、國家等をすべて同一視し、個人は國體を離れては生活し得ないから、だから個人は國民精神、國家的精神を最高目標にしなければならぬといふのである。彼等は屢々「國家、社會」と併用し、國家と社會とが本質的に如何なる差違を持つか近代國家は如何なる機能を發揮して自存して來たか等を顧慮しない。

　次に兒童が學校で鼓吹せられる道義心は、「偉いものになれ」といふ事である。「偉い物」とは、田舍の水吞百姓を以て朽ち果てる其れでは無い。米を作り織物を織る生産の仕事は、能の無い、低い人物が、其の偉い物になり得ないで、仕方無しに選擇した職業であり、偉い物になる爲めには、我々は商人となつて

投機的に一攫千金を得るか、或は職業的の政治家になつて高位高官に陞らなければならない。小學校の老教師が、自分の教へ子の中から斯ういふ偉い人物を出した時には、「此れで始めて三十年の教育が酬ゐられる事が出來た」といつて大悅びをするのだ。

第三に、兒童は實生活の準備として、職業の下稽古を教へ込まれる。學校ではさうした性質の教育を施したく無い場合にも、兒童の父兄、社會、國家が其の爲めの教育を學校へ註文する。學校は其れに反對するだけの實勢力を持つて居ない。其れだからやはり、商業道德――商人として儲けつゝ人格をも修養するといふ珍らしい複雜の道德――を學校は念入りに教へ込まなければならない。國家が其の註文者になつた時には、其の教育は國産の獎勵、輸出の超過、國力の增進などいふ高尙の理想を實現する爲めの手段だと呼ばれる。

私は右を以て、今の兒童青年、――次世紀を組織す可き其の青年達が現に社會から受けて居るカルトの特質を語つた積もりである。此等全體のカルトは、今現に我々の眼前に公示せられて居るものであるが、其れを聞いた讀者の感慨は如何なるものであつたか。或人は確かに言ふであらう。「其れは如何にも其の通りにある。それで誠に立派なのだ。其の特質を觀察して、其處に一體何の疑問が起きるといふのか。」私は其の質問を豫期するものである。併し此點に、――眞に此點に、我々が自由人となつて自らの判斷を解放しなければならぬ核質が潜んで居るのだ。其等すべての特質は、眞の意味に於て人間の爲めのカルトでは無い。其れには現在の社會制度其物の直接的反映がある！其れはすべての人間を現代社會制度の中へ無雜に織り込んで了ふ爲めのカルトだ！ 約言すれば其れは全くブルジョアカルトなのだ。

舊時代のカルトは商人をブルジョア、リベラリズムの精神にふさふ樣に訓練した。そして社會制度は正に其のブルジョア、リベラリズムの精神の上に立つて居たのである。マックス・ステルナアが評した樣に、此の精神の支配する社會に於ける商人へのモットオは、「運を摑め」であつた。商業とは投機であり、自由とは競爭であつた。商人は英雄主義的心願に燃え立ちながら、互ひを排斥し、自らを主張した。此の精神を保護し、開發として其の實現を計るものは國家だ。國家は其の精神の實現の爲め、互ひに軍備を競爭し、自己の「集團的利己主義」を滿足せしめようと欲して、當然戰爭の手段に訴へ、他の國家の勢力を根底から破壞しなければならなかつた。

「實生活の爲めの準備を小學校がするのだ」といふ事は「現在

のカルトは現制度の支持を目的とするのだ」といふ要求を體裁よく言現はしたものに過ぎない。現在のカルトは「白紙主義」では無く、制度を支持するための一定の精神を持つ。其の精神で無いものを目的とするカルトは、國家により法律を以て禁止せられる許りでは無く、其の社會の社會的良心から大いなる抗議を受ける。

併し我々は熟考する必要がある。一體我々のカルトとは、教育とは、人間を人間にする事では無いか。人間の判斷や意志的活動を自律的にする事では無いか。其のカルトにあつては、人間をブルジョア、リベラリズムの鑄型の中に打込む事をしない。ブルジョア、リベラリズムを超越し、其れの價値を批評し得る人物を作る。投機や相互的排擠によつて其團生活は完成せられない。偉い人物とは生産をしない人物である筈が無い。同様にして人間の爲めのカルトは國家自らの存續を計るために民衆を强制する其れでは無い。よし國家は國家自身で社會組織の一種と見られ、永遠に存續する理論根據を持つて居たにせよ、眞のカルトは民衆の批判心をして其の國家以上に超越せしめ、國家の機能や構成を批評し得る人物を作る。一定の制度的内容を民衆の上に强制するものは、カルトでは無くて『宣傳』だ。ブルジョ・アカルトは其れ故に、カルトと呼ばれるよりは『宣傳』と呼ばれるがふさはしい。教育は宣傳では無い。宣傳のからくりを内面から分析し、其れの破壞に力を努す様な人物を作る事が教育だ。

丙、制度としてのブルジョアカルト

此れまでの處私は、ブルジョ・アカルトの精神が現代社會人の良心の上に如何に執拗なる根據を置いたかを主として見て來た。次には其のブルジョ・アカルトが現代社會の中に、其れ自身で如何なる制度を作つて來たかを見て行かう。勿論一の制度は一の人生觀或は良心の基礎の上に立つ。ブルジョ・アカルトの此の制度は、前に觀察した精神其物と緊密に對應するものであるから、社會的良心は今此の制度の上に何等の疑惑を投げようとはしない。けれども其の時代は去り始めた。――地方青年は次第に其上へ疑惑を集める。ブルジョ・アカルトの精神を疑ひ得ない狀態に止まつて居る場合でも、彼等は既にブルジョ・アカルトの制度には、多くの反感を持つて居る。

ブルジョアカルトの制度は當然ブルジョア、リベラリズムを肯定し、其れの基礎となり得るものでなければいけない。何をか其れであるといふ。「教育の機會が萬人に均等では無い」其事だ。現代の教育制度は民衆に向つて呼びかける。「今や我國の封

建制度は破れた。教育の上にもデモクラシイの精神の支配する時が來た。今の學校はすべてに向つて公開せられて居る。其の修學の精神能力をさへ持合せるものならば、どれだけ高い教育をでも受ける事が出來るのだ。來れ！　民衆よ。學校は諸君を待つて居る。國民擧つて高い教育を受けた時、國力は眞に充實するであらう。」けれども其れは教育の上に於けるブルジョア、デモクラシイの掛け聲である。我々は其の教育の精神能力を持つよりも前に、其の教育に堪へるだけ、多額の經濟的資力を持合せなければならない。其の資力を持たないものに取つて、最高教育の美しい名も所詮は空虚である。其時デモクラシイは我々に宣言するだらう「勿論デモクラシイは其の經濟的資力の面倒をまで汝等の爲めに見てやる事は出來ない。其れは汝等の奮鬪如何によつて克ち得る範圍のものだ！」如何にもさうだ。其れがブルジョア、リベラリズムの社會制度に根本制約として立つものだ。だから我々は教育の世界にあつても、依然として運を摑め！と叫んで居なければならない。

學校は自由に民衆の前に解放せられたが、其の教育を受ける機會を持つものは有産者の子弟だけだ。然るに現在の社會にあつては、個人の教育と收入とは相關々係を持つ。極く例外の場合で無い限りは、高い教育を受けたものが高い收入を受けるものと極められて居る。僅かに二三年の修學年限の差違をしか持たないに拘らず、學校を卒業する直ぐ其日から、專門學校出身者と大學出身者の間には、立身出世の道程を異ならしめる。僅かに義務教育だけをしか受けなかつた樣なものは、永遠に賃銀勞働者として止まる。茲に於てか財産の世襲と同じく「教育の機會の世襲」が起る。蛙の子は蛙の子、鶴の子は鶴の子としての教育を、世襲的に受ける。經濟的政治的意味のブルジョア、リベラリズムは社會惡の究極原因では無い。其れの根據にはカルトの上のブルジョア、リベラリズムがある。獨占は財産の獨占を最惡とはしない。ルトゲルスも言つた如く、知識の獨占こそは究極的の意味を持つものだ。我々は議會選擧の上に於ける普通選擧を要求する位で滿足して居てはならない。眞に社會の構成と及び其の民衆の人生觀を一變せしめることの出來るものは、教育の上に於ける實質的のデモクラシイだ。普通選擧に對せしめて言へば、字義通りの「普通教育（ジエネラル、エヂユケイション）」だ。私有財産の不均等に疑惑の眼を向け始めた現代の青年が、教育の機會の不均等に、いつまでも運命的に、眼をつむつて居る筈は無い。青年の本性は財産の糧よりも精神の糧を愛するものだ。

社會が學校を見る眼は、生産機械の製造所である。學校は其の機械を製造するに忙しく、社會は出來上つた機械を一方から

費消する。出來るだけ早く其の機械が製造せられる事は、即ち其の機械の生産費用が出來るだけ少なくせられる事であるから、社會は學校の修學年限を能ふ限り短縮しようと努める。一旦青年が其等の學校を卒業したとすれば、社會は彼を出來上つた一個の機械として遇し、いかによく能率的に此の機械を費消す可きかをこそ研究すれ、其の人間は生涯に亘つて永遠に教育の機會を得る人間的權利を持つものなる事を容認しようとはしない。彼等は朝夕其の勢力の有りつたけを會社や工場の爲めに割き、自己の教養の爲めの纏つた餘暇を得る事が出來ない。教育とは、民衆に取り學校を卒業すると同時に終りを告げるカルトである。此事は、會社や工場に働く學校出の人達に、現に多大の不滿を買ひつゝある。

生涯に亘り永遠に自己教養の機會を持つものは、學問を專門の職業とする學者にだけ限られる。大學教授や專門學校の教授が其の專門職業の人達だ。一般の民衆は、どんなに骨を折つて見たところで、其等の專門職業の人達の様に豐富の書庫や研究の時間を持合せて居る譯では無いから、其の精神的教養の上では彼等に後れを取る。此處に於てか社會萬般の問題は、其等の專門職業の人達の解決す可きものとせられ、彼等がさう自信するのみならず、社會も亦其れを肯定して怪まない。此事は、知識的精神的の問題に就きすべて大學本位になるといふ官僚思想の源泉となつた。政治的經濟的の官僚思想よりもなほ一層根柢の深く、弊害の大いなるものは、知識獨占の此の官僚思想だ。鐵橋を架けるとか、化學肥料を製造するとかの技術的方面に關してのものは、いかにも其の研究を專門の職業とするものは、さうで無いものに比較して眼ざましい成績を擧げるでもあらうが、思想方面の事になれば、其れを考へる事を職業とする人の解決は必ずしも常に正當のものでは無い。何故なれば、思想問題の解決には、其人の人格の關與するところ甚だ多く、寧ろ思想の批判は其の人格の直接的表現であるといつて至當なものだからである。併し我國にあつては、今なほ大學教授の言論と言へば、いかなる思想問題の解決にせよ、常に最高の權威を持つて誤らないものとする絶對的信用の傾向が、社會の上に、進んでは新聞や雜誌の上に充滿して居る。

其等の學校教育は、すべて國家の教權により、周到の指圖を受ける。例へば小學教育は國家の義務教育として絶對に強制せられ、其處で教へる教科目、教材、教科書を始めとして其の教育の目的、精神までが、すべて國家の教權により決定せられて居る。今現に教權は國家の手中にあるから、教育と國家とを分離して考へる事は何と無く不自然な、有り得べからざる事の様

に考へられるであらうが、嘗て教會の勢力の强力なる時には、教權は、寧ろ教會の手にあつた。現在といへども教會寺院の學校にあつては、强力なる宗教的教權が其等の教會寺院の手にあるのだ。教會は教會的宣傳を、國家は國家的宣傳を、教育の名に於て民衆の上に加へる必要のあつた時、教育は其等の宣傳者の强制力と關係せしめられ、宣傳者は教權の所在となつた。けれども人間の教育的活動は、軍備だとか外交だとかの活動の如くに、國家を離れては其の成立の意味を失ふものでは無く、藝術や宗教の活動と同じく、國家とは無關係に考へ得られる、其れ自身で獨立完成した活動だ。併し國家がカルトの或る內容を强制する必要を持つ時には、常に自ら教權の所在となり、一定內容の教育を强制し、宗教を强制する。宗教を强制する場合は國教だ。國教制度は民衆の宗教意識を墮落せしめるに力のあつた事はすべての宗教史の語るところである。同樣にして、教育が國家の教權により支配せられる事は、却て民衆の教育に障害を與へる。教權の手を解放せられてこそ教師と學生との關係は人格的となるが、教權の干渉力が大きくなればなる程、教育活動はたゞ機械的に行はれる。教育者は其の教權に絕對の服從を誓つた教權の牧師であるから、僞善と怯惰とを其の習性と爲す。教育界に人材の集らない根本の理由は、教師としての俸給の乏しい事では無く、教權への絕對的屈從を爲す其の卑屈を惡むが故である。

最近我々は、早稻田大學學生を以て組織せられる軍事研究團の發會式に起つた痛切の一事實を見た。軍國主義に反對する學生の一團は、何の遠慮も無く自らの教授の言論を批評し妨害した。世論の一部は此れを以て子弟道の頽廢した結果だとし、學生の擧動を苦々しく眺めて居たのである。併し私は必ずしも其の世論に賛しない。教育が教權により强制せられて居る間は、大學の研究とて其の教授が常に誇らしく宣言して居る樣な自由なものでは無く、又自由であつてはならない。かゝる制度の下にあつては、教育は日一日機械的のものと化せざるを得ない。學生は一教授の人格學識を欽慕して其の學校に學ぶのでは無く、一の職業教育を受ける爲めに其處へ入學するのだ。又一旦或る學校へ入學したとすれば、學生の學ぶ教科目の一定分量は彼等に强制せられ、彼等は自己と思想を異にする教授達の講義をさへ聞かなければならない。然るに技術方面の事は別として思想方面の事となれば、必ずしも學ぶ學生の方が教へる教師より賢く無いとは定まらないのである。例へば教へる教師は軍國主義の信者であり、學ぶ學生は國際主義者であつたとすれば、此の場合、何れの側が賢いかは容易に決定せられまい。然るに

此等の思想問題は、各人の人格と離れる事の出來ない關係を持ち、人生觀社會觀に觸れ合つた事であるから、自己と異る人生觀を持つた教授が、必ずしも自ら敬慕して其の學校へ這入つた當の目標では無く、其の學校の教授であるといふだけの因緣を以て、序手に其の講義を聞かされて居るのであつたとすれば、此の子弟の間に嚴格なる人格的關係を責める事は、寧ろ責める人の間違ひであらう。況んや一の學校の教授に、一はマルクス派社會主義者、二は勞資協調主義者、三は資本主義者であるといふ樣な三人の經濟學教授が等しく經濟學を講義して居たとすれば――其れは實際我國の某大學に見る奇觀であるが――學生は其れ〻〻の人生觀に隨つて其の中の一に歸し、他を輕蔑するは當然である。大學其のものが、其れに學ぶものをして機械的態度を取らざるを得ない樣に仕向けて居る時に、師道、子弟道を云々したとて、其れは意味の無い事だ。

教育が國家の教權を離れる事は、教育自身を自由にこそすれ、何の危險をも其の上に及ぼすものでは無い。其れは現に藝術が民衆の手に自由に任されて居て、何の危險をも見ないと同じ事だ。國家と教育とは其の機能の目的を異にするが故に、本來分離するが當然なのである。然るにマルクス派のプロレットカルト論者は、此の究極點を忘れ、プロレットカルトは飽くまでも社會主義的教權の手にある可きものと考へプロレットカルトなる語さへ、眞の意味の教育といふよりは、さうした社會主義的宣傳教育と解せられて居る。現在のブルジ・アカルトの弊害の根本原因が何處に潛むかを忘れ、其の原因を再び繰返すものに過ぎない。

マルクス自身は、教權による教育に對し、最も强く反對する事を忘れはしなかつた。其れは彼の『ゴオタ綱領批評』の中の主張により明瞭である。ゴオタ綱領の中には、國家による國民教育、なる條項が入れられて居たに對し、マルクスは、『國家による國民教育は全然排斥せられねばならぬ』と論じ『寧ろ政府と教會とが同樣に、學校の上に影響を及ぼす事は排斥せられねばならぬ。プロシャ獨逸帝國では、反對に國家は國民により甚だ嚴格なる教育を受ける必要がある』と批評したのである。ゴオタ綱領の條項以上に此の批評が卓見を示した事は言ふまでも無い。

丁、我國のプロレットカルト運動

現在のカルトが其の精神から其の制度に至るまで、いかに徹底的にブルジ・アカルトの特色を持ち、人間を教育するといふよりは寧ろ一定內容の判斷や道德心を信仰する樣に宣傳するもの

であるかは以上の記述を以て明瞭にせられたと思ふ。眞正のプロレットカルトは、此の意味の宣傳を排除し、制度を改造し、教化をして其の正當の地位を恢復せしめる事だ。マルクス派のプロレットカルト論者は、毒を以て毒を制する様に、此のブルジョア的宣傳に對抗するにプロレタリア的宣傳を以てし、已ならず其のカルトを教權により強制しようと欲する。併し人間のカルトは其様に手段的の價値をしか持たないもので無い。又其の宣傳的意味のものによつて、自由人の養はるゝ道理も無い。教權によりカルトが強制せられるは、カルトを害する根本的原因なる事は、既に詳しく論じた通りだ。此の意味のプロレットカルトを眞正のものだと私は信じない。プロレットカルトなる語は、マルクス主義と離れる事の出來ない關係を持つ事を、語其のものゝ意味の中に含んで居るのでは無い。其れ故に私は依然として此の語を使用し、新らしい意味のカルトを言現はすが、其の內容は全く次に述べる様なものでなければならぬと信ずるのである。

第一に私は制度としてのプロレットカルトを考へよう。教育及び學校の概念は全然的に變革を受けなければならない。「教育」なる語が狹義に過ぎ、「カルト」なる語が其れに代らなければならぬとする理由は此處にある。教育とは、人格の自律を完成する爲めのものだとするならば、教育は青年である十數年の間だけ行はれて其れで止む可きものでは無い。又同時に人間の生活の中に、教育を受ける期間と、生產的勞働に從事する期間と、截然たる區別を生ぜしむ可きものでも無い。學校とは、民衆が其れ々々の生產的勞働に從事しつゝ、生涯を盡して永遠に、或は學び、或は討論し、又或は研究する爲めの、其の機關である。勿論其の全教育時期の中の一定部分は、勞働をしないで專心教育を受ける事、現在の學校と同じいものであらう。併し此れは教育に取つては寧ろ變態的の形態だ。少くも現在の中等教育に相當するものより以上は、其の正しい形態に歸り、民衆は勞働しつゝ就學するのでなければならぬ。其れ以下の變態的部分、即ち現在の小學教育に相當する部分すら、勞働學校としての形態を持つ事は後に述べる通りである。

略ぼ此の精神を以て經營せられ、歐洲の教育運動として近時著しい注意を受けて居るものは、かの所謂成人教育（アダルトエデュケーション）である。成人教育の發達した場所では、民衆は教育を受ける事に、生產的勞働を爲すと同じだけの生活意義を見出し、教育即生活の理想を眼ざましい程度に實現しつゝある。我國から最近に歐米の教育視察に出向いた人達は、期せずして此の成人教育の實況に一驚を喫して歸朝した。併し其の人

逹の報告書を讀んで見れば、此の運動の根本精神を掴んで居ない。そして成人教育を見るに單なる補習教育であるかの觀察を下したものさへある。成人教育は斷じて補習教育では無い。教育や學校の本來の形が成人教育であり、現在の所謂學校教育は、其の一部を占める變態の形にしか過ぎない。此れを補習教育だとするものは、依然として現在の學校概念に固執して居るのだ。

第二に、此等の教育機關は、現在の集中主義、官僚主義を打破して、地方化せられ、民衆化せられ、至るところの地方に設立せられる。且つ其の機關は教權としての國家の管理を離れ、其の地方の民衆自身の經營するものだ。此くいふならば或人は疑ふかも知れない「現在の小學教育でさへ地方費の負擔としては重きに過ぎる。此れ以上の專門教育大學教育等をどうして至る處の地方が負擔し得るか。國家が教育の事に干涉するは國民の教育を保護する爲めの場合にのみ限られて、國家自身の利益の爲めでは無い」と。併し其れは現在の樣に教育が官僚化せられ、隨つて民衆の爲めに輕視せられて居る時の心理である。如何なる高い教育も實質的に民衆自身のものであり、彼等は勞働しつゝ其の就學の便を持つとするならば、隨つて教育は生活の中の最も尊とい部分となり、民衆は其の衣食住の爲め、多くの財力を費すと全く同じに、教育の爲めに多額の費用を支出する事を惜まないであらう。此の事は延いて彼等をして、公の爲めの費用と私の爲めの費用との間の區別觀念を概廢せしめることの端緒となるであらう。其の教育機關の經營者は彼等民衆だから、彼等は其の地方的個人的要求に隨ひ、其れ々々特色を異にした施設をし、且つ其の就學する學科の自由選擇、相互的討論、圖書館を利用しての自學等、出來る限り自由の制度を作る事が出來、現在の教育の機械化を打破するのである。

今や我國の各地には成人教育の芽生えが生長し始めた。我々は此れを「自由大學」と名付けて來たが、其外にも種々の名稱を持つたものがあり、統一した名稱は出來て居ない樣である。併し此等の設立者に警告を發して置きたい事は、其の機關は斷じて教權としての國家と結び付いてならない事だ。自由大學が文部省の所謂公民教育の機關となつた時は、即ち成人教育が今日の青年會處女會の地位に陷落した時だ。成人教育こそは、其の教權を離れて自由に活動する、特色を持たなければならない。そしてマルクスが言つた樣に「反對に國家は國民により甚だ嚴格なる教育を受ける必要がある。」其れが國家として結局大いなる利益を受けて居るのだ。成人教育に社會改造の重點を置く所以は其れだ。文部省は昨年其の豫算の中へ成人教育の費用

を計上して置いたが、大藏省は此れを削除したと私は傳へ聞いて居る。併し此の場合は何としても削除せられた方がよかつた。民衆の成人教育をまで文部省の手で經營しては、民衆として其れ程大いなる損害を受ける時が無い。

第三に、學校のカルトは、現在のブルジョア、リベラリズムの精神から完全に脱却せられなければならない。ブルジョア本位では無く、プロレタリア本位だ。「偉いものになれ」の自由競爭主義は排斥せられて、共同社會主義的精神の教育が行はれる。生産的勞働は何よりも尊重せられ、學校自身が勞働學校(アルバイツシユウレ)の特質を持つ。「學校は實生活の準備所だ」といふ觀念は、此のカルトにあつて最早全く無意義である。教育以外に實活生は無いし、又實生活以外に教育は無い。

第四に、民衆的讀物は全然の變革を受けるであらう。多くの藝術的作家は、此等の民衆に高い藝術的カルトを與へる事を何よりもの悦樂とし、現在の「文壇」と呼ぶ特殊の社會は消失するであらう。隨つてプロレタリア文藝なるものは、現在の如きストライ文學ではなく、もつと根柢から民衆のプロレタリア精神を喚び覺ますものとならう。甚だ廉價に得られはするが、其れには香氣の高い文藝と繪畫とが掲げられて居るといふ樣な「民衆的讀物」が至る處の書店に現はれるであらう。トルストイの「イヴァンの馬鹿」の如きものこそ、其の意味のプロレタリア文藝である。童話、俗話、俚諺等が改造せられる事はいふまでも無い。

以上私は自分の考へて居るプロレットカルトの實現せられた世界を簡單に描き出して見たのであるが、或人は此れを讀んで單なる幻想だと評するでもあらう。併し私は斷じて其れを幻想だと考へない。苟くも人間のカルトを考へる以上は、此れ以外の形態の存在す可き道理は無いと思ふ。已ならず此の要求の決して空想に終らない事を斷言し得る所以は、今日地方の青年達は、既に私が述べただけの要求に自覺して、至るところに自由大學運動を起し始めた事である。其の運動の量は微力であつても、其の意義は眞に革命的なものだと思ふ。私の知つて居る一二の自由大學は、其等の施設を連結する爲めの自由大學聯盟をさへ作らうと現に計畫を立てゝ居る程である。此等の經營は經費としては自律的に極く僅かのものをしか費して居ないが、大學擴張運動、補習教育、公民教育といふが如き、教育上の協調主義を目標とせず、全く新らしい學校概念の基礎の上に立つて、相當の成績を擧げて來たのは一奇觀である。若し其等の自由大學の會員が今日考へる如くに、自由大學聯盟を全國的に作り得たとすれば、其れが社會及び國家の上に及ぼす影響は偉大

たものであらう。一見幻想の如くに考へられる私のプロレットカルト論の事實として具現せられる日は、其様に遠い將來の事では無い氣がする。

併し其のプロレットカルトの勝利を占めた時――民衆の人生觀は根本的に改變せしめられ、「我々は嘗てカルトを斯様に狹義に、且つ封建的に考へて居た時があつた」と言つて、私の此の論文などをも、過去の人間の書いた笑ふ可き一紀念物にする事であらうと思はれる。（完）

附記。我國で最初に纏まつたプロレットカルト論の現はれたのは、私が昨年八月の『創造』（教育雜誌）に書いた『階級自由教育（プロレットカルト）の新潮流』といふ一文であつた。次に私は『文化』の九月號に、『ポオルの社會思想研究』の中で『其のプロレットカルト論』を書き、別に、教育設備の改造』といふ一文を掲載した。最近には、本年四月號及び五月號の『文化』誌上に、『プロレタリア文化及びプロレットカルトの問題』といふ長論を書いた。此れは最も徹底的にプロレットカルト問題を分析批判したものゝ積もりである。其他にも幾つかのプロレットカルト論を書いて居る。此の論文では其等既載の論文と内容の上で成る可く重複しない様に努めて書いて來たから、其れに疑問を懐かれた讀者諸氏は、前記の私の諸論文を參照して欲しい。

階級藝術と超階級藝術

（菊池寛と前田河廣一郎の作品を論材として）

林　癸未夫

一　階級藝術と超階級藝術の意義

茲に或種類の人がある。彼等は社會革命を以て志とする。彼等は其生活を此目的に集中するの意圖を有する。併しながら彼等は筆を執つて資本主義の弊害を論究したり、勞働組合に入つて階級鬪爭の塹壕戰に從事したり、演壇に立つて社會改造の急

務を絶叫したり、××を×にして街頭に出沒したりするよりも、藝術といふ形態を借りて、其思想を宣傳し、革命の氣運を無產階級の間に煽揚することが、自分一個として、或は自分たちの屬する一集團として、より適當なる任務であると考へる。彼等は革命運動の此部署に就くことによつて、全體としての革命運動を、より迅速に、より有効に進捗せしむる所以であると信じてゐる。さういふ場合に於て、此種類の人々が、かゝる任務に就かうとする志向の正當であることを否むわけには行かない。

それと同時に茲に彼等と正反對の立場に在る人々がある。彼等は資本主義の存續を是とし、現社會組織の改造を非とする。併しながら彼等は論文によつて社會主義の缺陷を排撃したり、官吏や議員や實業家となつて、直接革命運動の鎭壓に從事したりするよりも、藝術といふ形態を借りて、非革命思想を鼓吹することが、其目的のために一層適切な方法であると考へる。さういふ場合に於て、此種類の人々が、かゝる任務に就くことも亦正當であるとしなければならぬ。右の如き二種類の人々の現社會に於ける存在の可能は等しく保障せらるべきである。その存在を否認したり、その運動を妨害したり、その意圖を不正呼ばはりしたりする權利は何人にも許されてはならない筈である。私はかういふ種類の人々を——それがプロレタリアであるにせよ、ブルジョアであるにせよ——假に階級藝術家と呼んで置かう。

又茲に或種類の藝術的作品がある。それは確に藝術であつて、藝術の名を僭稱する所の非藝術品ではないとする。しかもそれは讀者又は觀者をして、現存の社會組織を呪詛し、階級鬪爭意識を喚び起し、革命的精神に燃え上り、無產階級によつて建設さるべき新社會の理想に直進するの勇氣を振ひ興さしめるやうな藝術的表現を有つて居るとする。然るに、それと列んで他の種類の藝術的作品がある。それは現存の社會組織を擁護し、階級協調の福音を高調し、革命の不正義、非人道、沒道徳なことを深く感銘せしめるやうな藝術的表現を有つて居るとする。かゝる場合に於て、是等二種類の作品は、共にそれが藝術と名け得べき限りに於て、藝術としての社會的存在の可能が十分に保障せらるべきであつて、その存在を阻礙したり、その創作を妨害したり、その發表を不當視したりする權利は何人にも與へられてはならない筈である。かういふ種類の藝術を假に私は階級藝術と呼んで置かう。

然るに茲に階級藝術家ならざる藝術家がある。彼等は社會革命を可とし或は否とするであらう。彼等は又無產階級によつて理想されてゐる新文化を是とし或は非とするであらう。併し、

彼等は其社會思想が何うであるにせよ、それを以て自己の藝術創作の動機とすることができない。若しくはさうすることを欲しない。彼等は又自己の藝術が資本主義に偏するか、社會主義に偏するかに關知しない。彼等は又自己の作品がブルジョアを樂しませるか、プロレタリヤを樂しませるかに頓着しない。彼等はひたすらに自己の美意識を、至純至美至完の形態に於て、社會に表現することのみを念とする。或は時として、其美意識が偶然他の意識、例へば道徳意識の如きと接合して、藝術的表現の中に融化されるやうな場合はあるかも知れない。併し其場合にも彼等の道徳意識は社會組織や階級制度に關する政治經濟上の思想とは全く無關係であるか、或は全く無關係ではないにしても、社會組織や階級制度の是非に關する宣傳的の意圖は、毫も彼等の藝術創作の動機となつてゐないとする。かういふ種類の藝術家の存在の可能が十分保障せられ、何人もそれを否認し、排斥すべき權利を許さるべきでないことは、曩に述べた階級藝術家と同樣でなくてはならない。私はかふいふ種類の藝術家を假に超階級藝術家と呼んで置かう。

又玆に階級藝術ならざる藝術的作品がある。その作品に表現されてゐる技巧的及内容的價値は、現代の社會組織にも階級制度にも全く無交渉のものである。或はそれはムリリヨの畫の如く果實を食ふ乞食の兒であるかも知れない。或はそれはヴエラスケスの畫の如く、金衣繡服を纏ふ貴公子であるかも知れない。人物が帝王であれ、牧羊者であれ、舞臺が邸宅であれ、貧民窟であれ、題材が義勇であれ、戀愛であれ、憎惡であれ、鬪爭であれ、そこには唯人が人として、社會が社會として表現されてゐる以上の何物も存在しない。時としては富者も讃仰する所の貧民が描かれ、又時としては奴隷も嘆美する所の貴族が描かれる。併し吾等が其處に見出すものは、善惡正邪の理性的批判を超越したる唯一つの美の世界である。かくの如き種類の藝術の存在の可能が充分に保障され、何人もそれを破棄したり、その創作を妨害したりする權利を與へられてならないことは、曩に述べた階級藝術と同樣である。私はかういふ種類の藝術を假に超階級藝術と呼んで置かう。

二　階級文化と藝術との關係

階級藝術家も超階級藝術家も、又階級藝術も超階級藝術も、等しく其存在が可能であり、又存在の權利が尊重されなければならぬことは前述の通りである。併しながら玆に是非とも吾等が明瞭に理解して置かなければならぬことは、階級藝術家によつて創作された作品が必ずしも階級藝術であるべき必然性を有

ただ、超階級藝術家によつて創作された作品が必ずしも超階級藝術であるべき必然性を有たないといふこと之である、譬へばそれは美人の描いた風景畫が常に美しく、醜婦の描いた風景畫が常に醜かるべき理由がないのと全く同一である。又それは美人をモデルとする肖像畫の藝術的價値が常に優れて居り、醜婦をモデルとする肖像畫の藝術的價値が常に劣つて居る理由がないのと全く同一である。階級藝術家の作品も、超階級藝術家の作品も、それが藝術である限りに於て、時としては、階級藝術であり、時としては超階級藝術であり得る。又それが個人心理の描寫であり、社會生活の表現である限りに於て、時としては革命精神の鼓吹又は鎭壓として役立ち、時としては階級鬪爭思想と全く沒交渉なる藝術として終始することもあり得るのである。

かういふ私の見地からすれば、一つの作品がブルジョアの生活を描寫したがゆゑに、それが非階級藝術と呼ばれ、プロレタリヤの感情を表現したがゆゑに、それが階級藝術と唱へらるべき理由は毛頭ないのである。何となればブルジョアの生活もプロレタリヤ藝術家によつて描寫されるならば、その奢侈と放縱と無產階級の搾取とを主題とすることによつて、革命精神を鼓吹する道具ともなり得るであらうし、プロレタリヤの感情もブルジョア藝術家によつて表現されるならば、その無智と粗暴と惡癖とを主題とすることによつて、反革命的精神を宣傳する手段ともなり得るからである。それが階級藝術であるかないかの問題は、その描寫の對象とは全然沒交渉であつて、單に其對象の取扱方の如何によつてのみ決定される問題である。

更に又一つの作品がブルジョア階級から生まれ、ブルジョア階級によつて翫賞されるものである限りは、それはブルジョア文化の產物なるがゆゑに、プロレタリヤ文化には無價値のものであつて、ブルジョア階級と共に滅亡すべきものであるといふが如き議論は、藝術其物の本質に對して全く理解を失つた者の謬見に外ならない。藝術はそれが何人によつて、何を目的として何を内容として創作されやうとも、それが藝術としての價値は絕對のものである。それは政治にも、經濟にも、社會組織にも、階級制度にも、超然として太陽の如く遍照するものである。成程過去に於て、あらゆる種類の藝術が、ブルジョア階級にのみ翫賞の機會を獨占されてゐたことは事實であらう。併しそれは社會組織の罪であつて、決して藝術其物の罪ではないのである。又或藝術はブルジョア階級のみを享樂せしめる目的を以て創作されたことも事實であらう。併しそれは創作者自らが其作品に藝術的價値をより多く與へるか、より少く與へるかの一

つの誘因となるだけであつて、出來上つた後に於ける其作品の藝術的價値には無關係のものである。若し作者がブルジョアを樂しませる爲に、故意に非藝術的作爲を施したとするならば、必然その作品の藝術的價値は低けられるに相違ない。併し若し作者が其藝術的良心によつて、斷乎としてかゝる誘因を却けたとするならば、必然その作品の藝術的價値は超階級的の純眞さを保つてゐるに相違ない。それがブルジョアによつて享樂されやうとも、プロレタリヤによつて翫賞されやうとも、其作品の藝術的價値を一毫も左右するものではないのである。

譬へば自然のまゝの美しい風景があるとする。現に此風景を享樂しつゝある者が、其附近に別莊を營んだり、自動車を驅つたりする者に限られてゐるとするならば、それは社會組織の一缺陷には相違ないが、風景其者の與り知る所ではない。譬へば又堅牢にして快速力の自動車があるとする。現に此自動車を乘用しつゝある者が、貴族富豪に限られてゐるとするならば、それは社會組織の罪には相違ないが、自動車其物に何の係はりがあらうぞ。然るに若しブルジョアのみによつて翫賞される風景は、ブルジョアの享樂の具なるがゆゑにブルジョアと共に亡ぶべきであり、ブルジョアのみによつて乘用される自動車は、ブルジョア文化の産物なるがゆゑに、プロレタリヤ文化から排斥すべきであると主張する者があるならば、誰か其愚を嗤はない者があらうか。藝術もやはり同様である。貴重なる藝術は過去に於てブルジョアを享樂せしめたやうに、將來に於てプロレタリヤをも享樂せしめ得るものである。無論多少の取捨選擇は免れ難いであらう。併しプロレタリヤ文化の標準から排除されなければならぬやうな藝術は、ブルジョア文化の標準から見てもやはり低級な藝術であることは疑ひない。何となれば藝術の本質的價値は、政治や經濟に超越して存在するからである。現に勞農露國に於ても、過去の高級な藝術を鄭重に保存しつゝあることは、過去の科學や、産業を大事に保存しつゝあるのと全く同一ではないか。然るに若し或論者の言ふが如く、過去の藝術がブルジョア階級の所産であり、ブルジョア階級の享樂の具であつたといふ理由によつて、過去の政治組織や經濟制度と等しく之を破壞し、滅亡せしめなければならぬとするならば、ボッチエルリも、ミケルアンゼロも、シエクスピヤも、ゲーテも、ワグネルも、ロダンも、共にプロレタリヤの世界では一炬に燒燼し悉されなければならぬ道理である。かくの如きは狂にあらずんば則ち痴であつて、固より正氣の沙汰ではないのである。

三　論客にして且作家たる菊池氏と前田河氏

私は右に述べた私の論旨を明かにするために、詳しく言へば、階級藝術家も超階級藝術家も現社會に存在の權利を有し、又それが可能であること、階級藝術も超階級藝術も現在社會に存在が可能であり、又それが認容されてゐることを前提として、階級藝術家の作品が必ずしも階級藝術でなく、超階級藝術家の作品が必ずしも超階級藝術でなく、藝術の社會的價値は藝術家の創作の動機や、その社會的意圖とは無交渉に存立し得るものであり、又現に存立して居ることを立證し、進んでブルジョア文化の所産たる藝術も、プロレタリヤ文化のために創作される藝術も、其藝術的價値は社會的價値を超越してゐるものであつて、自然科學と同じく恒久的な存在の理由を有するものであることを、最も手近な材料によつて、讀者に辯證するの手段として、玆に菊池寛と前田河廣一郎の兩氏の作品を利用したいと思ふのである。

私が特に兩氏を選んだ理由は、兩氏が現文壇に於て最も傑出した作家であると認めたからではなく、兩氏が昨秋以來文壇に喧囂を極めつゝある階級藝術論の中心的論客であると同時に、又其敵味方の代表的作家であるといふ理由からである。前田河氏は革命運動の手段としての藝術、プロレタリヤ文化の爲の藝術を標語としてゐる點に於て、階級藝術論者であり、菊池氏は革命運動と藝術との兩立を否定し、藝術の價値は階級を超越して存在すべきであることを論據としてゐる點に於て、超階級藝術論者であるとは疑ひを容れない。併しながら此兩氏は論者であると同時に作家である。單なる論者は兩氏の外に澤山ある。『文藝春秋』と『新興文學』を一瞥すれば、兩氏と並んで、或は兩氏以上に口達者な論客は無數に發見することができる。それと同時に、單なる作家も亦兩氏の外に澤山ある。例へば階級藝術派の作家としては小川未明、中西伊之助、新井紀一、金子洋文の諸氏があり、超階級藝術派の作家としては、芥川龍之介、里見弴、谷崎潤一郎、久米正雄、宇野浩二、室生犀星の諸氏がある。殊に芥川、里見、谷崎の三氏の如きは、菊池氏よりは遙に生粹の超階級藝術の作家である。併し彼等は菊池氏の如く超階級藝術の論客ではない。彼等は議論が嫌ひなためか、喧嘩を厭ふためか、引込思案のためか、興味を有たないためかは知らぬが、未だ馬を階級藝術論の陣頭に乗り出さない。之に反して菊池氏は負け嫌ひのためか、彌次であるためか、義勇公に奉する道德意識のためかは知らぬが、とにかく超階級藝術論の主將たる地位

を占めて居るのである。

かういふ關係に於て、菊池氏と前田河氏の二人は、自己が議論として主張する所を、同時に作品に於て表現することのできる地位に在り、又しかすべき責任を負はなければならぬ立場にも在る。言ひかへれば彼等が論客としての主張は、あからさまに彼等の作品の上に實證されてゐなければならぬ筈である。從て私が自分の藝術論の材料として、此二人の作品を選ぶことは、私としては確に策の得たものであらうと思ふのである。

併し、他の或意味からすれば、菊池氏と前田河氏とを、階級藝術と超階級藝術との代表的作家と看做して、對照論評することは、適當なる方法でないとも考へられるのである。それは菊池氏が大家であつて、前田河氏が小家であるといふやうな、數量的の理由からではなくて、菊池氏は既に完成された作家であり、前田河氏は未完成の作家であるといふことが一つの理由であり、又前田河氏は明白に純粹のプロレタリア作家と認められるが、菊池氏は必ずしも純粹のブルジョア作家と認めらるべきでないといふことが他の一つの理由である。

菊池氏は年齢尚壯ではあるが、作家として其有する特質は既に十分に其作品の上に發現されてゐる。今後の彼が其特質を一層完成するだけで終るか、或は全く新しい方面に轉向して別の特質を發揮するかは、恐らく彼自身にも分らない疑問であらうと思ふ。が、それは何れにしても彼の特質として一般に認められてゐるものは、技巧的にも内容的にも既に完全に表現されてゐることは確かである。それは彼が最近一兩年間に發表した小説戯曲が、彼の過去の作品の價値に何等の附加をも爲し得なかつたことによつて明かである。之に反して前田河氏は尚駈け出しの新進作家であつて、彼が作家として相當に勝れた素質の持主であることだけは、ほゞ疑ひないけれども、彼の有する特質はまだ十分に發現されてゐない。言はゞ無名作家の日記一時代以前の菊池氏くらゐの地位に在るのである。彼が果して五年十年の後に、菊池氏の現に有するが如き文壇的地位を占め得るか、或は菊池氏に比敵する藝術的才能を發揮し得るかは固より豫想し難い。或は彼の取材の範圍の餘りに狹少であることゝ彼の感情の餘りに一本調子であることゝのために、彼は到底菊池氏ほどに大成すべき素質を有たないのではあるまいかと疑はれる節もないではない。併しそれは時の解決すべき問題である。唯此場合に於て、彼の作品は尚僅少であつて、未だ其全豹を窺ふに不十分な、未完成の作家であることが明かである以上、菊池氏に對するが如き決定的の態度を以て、彼の作品を批判したならば、或は彼に不公正な結果を導き出しはしまいかを

選れるのである。併し彼以外のプロレタリヤ作家も大抵彼と同程度の未成品であるからして、やはり彼を論材とすることが此際私に取つて、已むを得ない手段と考へられるのである。

次に、前田河氏が生粋のプロレタリヤ的思想感情の持主であることは、個人としては知らず、其作品の上では明に觀取せらる丶所であるが、之に抗敵すべき地位に置かれてゐる菊池氏の思想感情は必ずしもブルジョア的と言ひ得ないのみならず、寧ろプロレタリヤ的思想感情にも、少からず共鳴し得べき素質の持主であると信ぜられるのである。少くも彼は芥川、里見、谷崎諸氏の如き生粋のブルジョアではない此意味からして、菊池氏は前田河氏に對して、他の極端を代表せしむべき完全な資格を具備してゐないと言へるのである。恐らく里見氏の如きは遙に完全な資格者であらう。併し本論の目的は、階級及超階級の藝術論と藝術品との關係を論究するにあるのであるからして、作家であつても論者でない里見氏の如きは、私の論材としては適當とは言へない。從て私の選はやはり菊池氏の上に落ちざるを得なかつたのである。

四　菊池氏の作品の優越性

前田河氏の小說が、他の三四のプロレタリヤ作家のそれ等と共に、藝術品として相當に勝れた價値を有するものであることは爭はれない事實である。然るに彼の文學的成功を正當に認識することを快しとしない彼の論敵は、彼の作品を難ずるに、或は其作品に表現された神經が粗笨であるとし、或は其技巧が未熟であるとして、其藝術的價値を貶さうとしてゐる。私は是等の批評が全然當つてゐないとは言はない。唯併し、神經の纖細を缺いでゐたり、技巧の洗練の足りないことを理由として前田河氏の作品を非難するならば、それと同じ理由によつて、菊池氏の作品をも亦非難することができるのである。何となれば菊池氏の神經や技巧を、他のブルジョア作家、即ち芥川、里見、谷崎の諸氏に比較するならば、確に不纖細であり、不洗練であつて、其點に於て前田河氏との間に著しい徑庭があらうとは思はれないからである。それにも拘らず、菊池氏の作品が、其藝術品としての價値に於て、芥川、里見、谷崎諸氏の作品に比し、毫も遜色がないと認められる所以は、菊池氏の作品に表現せられる彼に獨特の思想的批判力が、強く讀者の道德意識を刺激すると同時に、彼の創造する藝術の世界へ、讀者の藝術的感覺をぐんぐんと引張込んで行く一種剛健とでも形容すべき彼の說服力に在るのである。言ひかへれば、彼の思想的批判が藝術的感覺の中に融化されて、讀者の胸奥に深く喰ひ込んで行く所

に、彼の作品の優越性が在るのである。從て彼の作品は、どんな短篇でも、單純な描寫といふやうなものは殆どない。常に何事をか讀者に說得しやうとするのである。そして彼は然かするに適當した、簡明直截なる一種の文體を有つてゐるのである。適當した文體ではあるが、洗練された文體とは言へない。若し前田河氏の技巧をマドロス式と呼ぶならば、彼の技巧は百姓式とも言へやう。凝りに凝つた芥川氏の、或は灰汁ぬけのした里見氏の、或は華やかな色彩の調和に巧みな谷崎氏のやうな、都會人らしい纖細な技巧は到底彼に望めない。何處までも地力でひた押しに押さうとする田舍者のそれである。賴もしくはあるが氣が利かない。堅實ではあるが粗雜である。若し彼が今少しく修辭に骨を折つたならば、彼の作品はもつと藝術品として完成されたものになるに相違ない。かくの如き技巧上の缺點にも拘らず、彼の作品が、彼よりも遙に技巧に勝れてゐる芥川、里見、谷崎諸氏の作品に比肩すべき藝術であり得る所以は、全く彼の作品に表現されてゐる思想的批判力に依るのである。卽ち彼自身の語を借りて言へば、其作品の內容的價値に在るのである。

　菊池氏の作品の有する藝術的價値は主として其內容的價値に在る。そして其內容的價値の基調をなすものは、氏に獨特なる思想的批判力である。かういふ私の見解は恐らく彼自身並に彼の作品に親んでゐる總ての人々によつて肯定されるであらうと私は信ずる。現に菊池氏は『公開狀を機緣として』と題する一文の中でかう書いてゐる。「放蕩にも、姦通にも、その他凡ての惡いことにも、人間的なところがあると云つて、ちつと見詰めて居る丈で世の中が少しでもよくなつて行くでしようか。私は、人間性に萠して居ることでも、惡いことや、無意味なことなどは、それを批判することなしに、小說に書いてもつまらないと思ひます。」又芥川氏も『菊池寛全集』の第三卷の序文に於て、道德的批判力の强さが、作家としての菊池氏の特質であることを擧げてゐる。此序文の中で、芥川氏がメリメとスタンダールとの比較に於て、又ショオとガルスウオルシーとの比較に於て、前二者は後二者よりもより優れたる藝術家であるけれども、後二者は前二者よりもより偉大なる作家であると言つてゐる言葉が、そつくり其儘に芥川氏自身と菊池氏との比較にあてはまつてゐることも、吾等に取つては興味の深いことである。菊池氏の作品の優越性はどこまでも其思想的批判力の强さに在る。師をも、先輩をも、朋友をも、肉親をも、彼自身をも、寸毫も假借しない其思想的批判の峻嚴さ銳利さに在る。勿論彼の此思想的批判は、そのまゝでは一箇の社會思想であり道德思想ではあり得ても、未だ藝術ではあり得ない。然るに幸にして彼は

其思想を表現するに藝術の形態を以てし得、程度の技巧を有つてゐる。彼の技巧は彼の思想に比較すれば、彼の藝術を仕上げるための力として多少見劣りがするかも知れないけれども、併しそれは彼の作品から藝術的價値を失はしめるほどに稚拙なものではないことは勿論である。そして又思想に於ける彼の弱味は、技巧に於ける彼の弱味を償うて餘りあるがゆゑに、技巧に於ける弱味を以て、思想に於ける弱味を償うて餘りあらんとしつゝある所の芥川、谷崎、里見諸氏に比べて、彼の藝術家としての地位が決して低いと言へないことも、亦疑ひのないところである。

五　菊池氏の社會思想

菊池氏の藝術家としての優越性が其思想的批判力に在りとするならば、吾等は進んで彼の思想其もの丶内容を検討しなければならない。言ふまでもなく、藝術上に表現された批判力は思想其もの丶理論上の當否とは全く別箇のものである。從て菊池氏の批判の基調をなす所の思想が、現に流通して居る社會思想の肯定であつても否定であつても、又革命思想家から見て健全であつても病的であつても、其思想が生地のまゝの思想としてでなく、藝術的表現の一構成分子として、藝術的感覺の中に融化されてゐる限りは、其思想の社會的——政治又は經濟の方面——價値とは無關係のものとして存在し得るものである。併し今の場合は、菊池氏の作品の藝術的價値を論じてゐるのではなくして、彼の藝術に表現されてゐる思想の社會的價値を究明し、それによつて階級藝術論上に於ける彼の位置を正當に判斷しやうとしてゐるのである。而して階級藝術論は本來藝術の社會的價値の上に立脚しなければ、議論として成立たないものであるからして、姑く菊池氏の思想を彼の藝術から切離して、其正體を検討することが、吾等に取つての必要缺くべからざる一勞作となるのである。

先づ彼の思想の社會的方面を觀やう。彼は「社會主義に就て」と題する一篇でかう言つてゐる。「資本主義を基本とする現在の社會組織が、ホンの一部分の者のために、多數の人間を如何に不正に不當に虐げて居るかと云ふこと、又それに對抗して起つた社會主義の理論が大體に於て眞理であることは、少しでも思索的良心のある者の否定し得ない所であると思ふ。世の中が社會主義化することは、たゞ時の問題である。」かういふ彼の思想からすれば、彼も一個の社會主義者であると言へる。併しながら彼は「社會主義その物が合理であると同じやうに、社會主義化する手段も、出來るだけ合理でありたい」と言ふ。然らば彼

の所謂合理的手段とは如何なるものであらうか。それは「勞働者が自覺して、猛獅の如く立ち上る前に、現在の特權階級が翻然として、その非を知ること」によつて、「維新の時の大名の藩籍奉還」のやうに、「資本家が自覺して彼等の不當な不正なことから脱出することが、第一の良策」であるといふのである。彼はそれを「ヒロイック」であると考へる。そしてそれが「資本主義のせめてもの罪滅し」となつて、「さうして贖罪に依つて新しき社會組織に於ても、資本家たりしが故を以て、継子扱ひにされることから免れ得るだらう」と想像する。これによつて見ると彼は、資本主義は不合理であるが、それを社會主義に改造する合理的手段は資本家の覺醒に依る自發的の特權放棄で在つて、勞働者自らが闘爭的手段によつて資本家の特權を剝奪し、其結果「露西亞のやうな混亂に陷る」ことは、正當なる「改造の徑路」ではないといふことに歸着するのである。言ひかへれば目的に於ては社會改革を是認するが、手段に於ては平和的でありたいといふのが彼の社會思想の根柢であるらしく思はれる。併し何故に彼が平和的手段のみを以て合理的とするかの理由は、茲では説明されてゐない。

然るに彼は『ある青年』と題する短文の末尾に於てかう記してゐる。「社會主義の理論を聞く毎に、自分はそれが眞理であることを疑つたことはない。が、青年時代を、資本主義全盛の世に過した自分は、……理論では、資本主義の諸惡を知りながら、それを憎む生々しい實感は、容易に生れて來ない。」これによると彼が理性に於て資本主義を不合理と認めながらも、それを鐵鎚を以て擊滅するに忍びないとする理由は、彼の感情が然らしめるのである。恐らくそれは彼に取つて詐らざる告白であらう。併し彼はさういふ自分の感情を説明するに當つて一つの矛盾を犯してゐる。彼は青年時代を資本主義全盛の世に過したといふが、我日本は今日尚決して資本主義全盛の國にはなつてゐない。未だ資本主義發達の中途に在る國である。從て菊池氏が資本主義憎惡の實感を喚起されないのは、彼が未だ資本主義全盛の世に遭遇しなかつたからである。言ひかへれば彼が未だ眞に資本主義の害毒を體驗するの機會を有たなかつたからである。併しこれは彼が説明の方法を過つたゞけであつて、眞底憎惡の實感なくして、斷罪の利劍に血塗るに忍びないとする、その彼の思想は、吾等がそれを是認するにせよ否認するにせよ、恐らく現代の日本人の大多數によつて共鳴せらるゝ所の思想であることは疑ひないと思ふ。

右の如き彼の社會思想を最も良く表現してゐると思はれるのは彼の長篇小説『火華』である。彼は此小説に於て階級闘爭を

題材としてゐる。これは新聞の續物として發表されたゝめか、氏の作品としては大分甘い物ではあるけれども、それでも現代の日本に典型的な一ブルジョアの生活と、彼に搾取されつゝある一群のプロレタリヤの生活を描寫して、兩者の思想上の衝突、感情上の葛藤、經濟上の鬪爭を生き〳〵と表現してゐる點に於て、所謂プロレタリヤ作家といへども容易に追隨のできない巧みさを認められる。併しながら此小說の筋は、ストライキの失敗から、同志に裏切られた青年職工佐分利の破壞的行動に及び、彼が匕首を閃めかして、ブルジョア的精神の權化ともいふべき驕慢冷酷なる令孃美津子に迫るといふ、最後のどん詰りに至つて、日本現代のプロレタリヤ的反抗精神の體現者として描かれてゐる鐵造が、突如友の暴行から美津子を救ひ、これがために自己の生命を失つた代りに、美津子の精神が一變して溫情寛容の工場經營者となるといふことに終つてゐるのである。これによつて見ると菊池氏は、ブルジョアの生活や資本家氣質にかなり强い反感を有ち、プロレタリヤの生活や勞働者の立場に十分の同情を以て、此小說を書いたに相違ないと思はれるにも拘らず、そして又其結末が、氏の是認しない破壞的混亂にまで及んでゐるにも拘らず、彼は終に此破壞を破壞のまゝに放置することもできず、又破壞の中に新しい秩序を建設することもできないで、只多少修正せられたる舊秩序の復活に滿足したのである。彼の構想からすれば、多數のプロレタリヤの生命が犧牲に供せられたことによつて、南條父子は苛酷な資本家から溫情主義の資本家に代つたゞけであつた。南條工場の勞働爭議は一先づ解決を告げたではあらうが、美津子父子は依然としてブルジョアの生活を營み、南條工場の職工はプロレタリヤの生活を續けて行くのである。そこには徹底的な階級鬪爭が行はるべくして遂に行はれず、勞資協調主義の妥協が成立したのである。かゝる狀態に於て、此小說の大團圓を結んだ所に、作者の社會思想があからさまに觀取されると私は思ふのである。

　惟ふに社會思想家としての菊池氏は、彼自ら言明して居る通り、現社會組織の不合理、現社會生活の不公正を認めてゐる點に於ては、プロレタリヤ作家に多く讓る所はないのである。併しそれは單に彼の理性の認識であつて、彼の感情は未だこの不合理不公正な社會を破壞し盡さうとするほどに、熾烈なる憎惡の念となつて燃え上らないのである。言ひかへれば彼の理性は破壞を肯定しても、彼の感情が之を否定するのである。普通人は感情の奔放を制御するに理性を以てするけれども、彼は理性の奔放を制御するに感情を以てするかの如く見える。これが彼の個性に著しい一つの特徵である。然らば彼の理性を制御しつ

いある彼の感情は何であるか。私はそれを說くに先つて、彼が思想の他の一面、即ち其道德思想を觀なければならない。

六　菊池氏の道德思想

『父歸る』は彼が無名作家時代に書いたものであるけれども、彼自身の最も得意な作品の一つで、又彼自身が過去の生活から得た實感の最も良くにじみ出てゐる戲曲であることを、彼は雜誌『文藝春秋』の三月號で表白してゐる。果してさうだとすると、此一戲曲は、彼の道德思想を究明するに好箇の一資料として、吾等の注意を引くのである。

妻と三幼兒とを棄てゝ、遊蕩なる父は情婦を携へて出奔する。妻は飢餓と恥辱とに堪え得られないで、三兒と共に自殺を圖つたけれども、幸に人に救はれて命を繋いだ。併しながら其後の彼等の生活は困苦窮乏のどん底に於ける長い年月であつた。それがために長男の賢一郎は十二の年から縣廳の給仕を勤めなければならなかつた。彼は妻子を棄てた父の無情非行を憤ること最も痛烈であつた。彼等の艱難辛苦の責任は悉く逃げ去つた父に在ることを片時も忘れることができなかつた。父に對する反抗心は彼をして人並ならぬ奮勵努力に堪えしめた。そして漸く母子四人は貧乏ながらも安樂な生活を營むことのできる境遇に達したのであつた。冷酷な父の恩義にすこしも預らないで、母親を、「亭主運は惡かつたが子供運が善かつた」と人に言はれるやうな身柄にしたこと、二人の弟妹を素直な出來の良い息子と娘とに仕上げることができたことは、兄賢一郎の誇りでもあり、又無情な父に對する面當でもあつた。彼が過去の辛苦を追想する毎に、父に對する反感は生々しく彼の心に甦つて來る。彼の心には父に對する愛慕の情は全く消失せて、憎惡の念のみが強く根を張つてゐたのであつた。

かういふ彼の前に、突如として尾羽うちからした父が歸つて來た。あらゆる過去の罪業を負ひながらも、昔棄てた妻と、獨りでに成人した子供等の恩惠を賴る外に生きる道を失つた廢殘の父であつた。此哀むべき父の姿を見た時、母も弟妹も何の躊躇もなく彼を迎へやうとした。併し賢一郎だけは斷乎として父を拒んだ。父に對する多年の反感憎惡は、血を吐くやうな言葉となつて其面上に降り注がれた。彼の道理ある言葉には父も返す言葉がなく、母や弟妹もなだめる術がなかつた。彼等は確に彼の理に服したのであつた。理に服したればこそ父は彼に得さからはずして生きる道のない世界へすご〳〵と出て行つたのである。又母も弟妹も彼をなだめて父を救はふとも得せなかつたのである。茲に於て最早此問題は解決を告げたのであつた。

幕はすべからく其時に下りて然るべきであつた。

併しながら菊池氏は此時に幕を下すことを敢てしなかつた。何故であるか。それは彼が此問題を單に理性の解決に放任するに忍びなかつたからである。彼は賢一郎に對して充分の理性を賦與してゐる。賢一郎が、過去の一切を忘れて直に父を赦さうとする母や弟妹の態度を怒責して、其無反省、不合理を難詰し、寸毫も父の罪惡を容捨すまいとする時に、彼の透徹したる理性が示されてゐるのである。そして彼の此理性の批判は飽くまでも合理的であることが、父母により、弟妹により、而して又讀者により、觀客により納得されたのである。玆に於て彼は自己の理性の透徹と、其批判の結果とに對して、滿足して然るべき筈であつた。それにも拘らず彼は最後の瞬間に於て、自ら其理性を破棄し、其批判を取消して、まつしぐらに父の跡を慕うて走つたのである。何者が彼を走らしめたか。それは彼の感情である。理性に於て當に爲すべき所を、感情が彼に拒んだのである。疑ひもなくそれは、菊池氏が理に於て資本主義を否定しながらも、自ら手を下してそれを破壊するに忍びないとする、其感情と正に同一轍のものであると看做されるのである。

理性の横威に對する感情の反抗は、『父歸る』ほどの強い色彩ではなくても、彼の作品中に最も多く描かれてゐる所の主題である。例へば、吾等は『葬式に行かぬ譯』に於て、「世間的な關係は、師弟であらうが何であらうが、根本的な所では、第一義的な所では、S博士は雄吉に取つて對蹠人ではなくても、少くとも路傍の人であつた」に拘らず、舊師S博士の葬式にも行かず、香奠も出さなかつたことに、「長い間、自分の不義理な行動から、絶えず苛責を受けて居らねばならなかつた」青年文學者の雄吉を見出すのである。又吾等は「我鬼」に於て、電車の吊革にぶらさがつてゐる老婆に席を讓らない他の乘客に對して極度の憤慨と輕蔑とを浴せながら、うつかり其前の空席を奪はふとした彼自身の利己的發作を未然に制するとができないで、「人間は、自分で意識し、注意し、警戒して居る中は、どんな道徳的な樣子でも、爲ることが出來るが、一旦その注意が無くなると、忽ち利己的な尻尾を出してしまふ」事實に直面して、「落莫たる心持」に堪へ難い「彼」を見出すのである。又吾等は『藤十郎の戀』に於て、「藝の爲には、一人や二人の女の命」くらゐは犧牲にしてもと、「幾度も力強く繰り返し」ながら、「恐怖と不安と罪の怖しさとが、身體一杯に溢れて」そして「折にふれ、時にふれ彼を苛まずには」置かない、自分の「目に見えぬ深手」に惱む一俳優を見出すのである。又吾等は『友と友との間』及其續篇とも見るべき『神の如く弱し』に於て、皆が平氣で少し

も良心の苛責を受けずに、いくらでも惡口を話し續け得るほど」に舊友から輕蔑され、非難されてゐる久野に對し、「心からの涙を流さずには居られ」ない雄吉を見出すのである。又吾等は『義勇』に於て、「海の勇者として、英雄として、人々から賞讃され、感嘆され」ながら、内心それに「不服をいだ」く上等兵曹を見出すのである。又我等は『船醫の立場』に於て、船中の衞生に責任を有つ醫師として、當然の義務を果したに拘らず、「自分の烈しく動搖する良心」を何うすることもできない外科醫のワトソンを見出すのである。又吾等は『啓吉の誘惑』に於て「妻以外の女性に接近することを、罪惡だと思ふほど、道德家ではない」と理性では自認しながらも、生れて初めての戀の誘惑から免れて何事もなく「家に歸つたとき、妻の顏を正視することが出來た」ことを嬉しく感ずる流行作家の啓吉を見出すのである。而して又吾等は彼が最近作の『從妹』に於て、亡父の遺身の幼女を狹斜の巷に賣飛ばしてまで、仇し男と同棲した「從妹の生活に不滿」であり、彼女に對して「何の義務をも感じません」と言ひながら、彼女の無心の金を半分しかやらなかつたことに「氣の咎める」從兄を見出すのである。

凡そ理性と感情との思想的價値を同一の水準に置いて、兩者の葛藤を描寫することは、最も平凡な小說戲曲の主題であつて、固より珍とするに足りない。併しながら菊池氏の場合はさうでない。彼は理性の價値を感情のそれよりも遙に高い水準に置いて居る。彼は理性は君臨し、感情は臣從しなければならぬものとする。彼は『公開狀を機緣として』と題する文章の中で、自ら「現代の作品に現はれて居る悲劇や苦惱は、その凡てだとは云はないが、多くは人間がもう少し聰明で、もう少し理智的であれば、もう少し徹底した新しい道德を樹立することが出來れば、難なく除去し得るやうなものが、多くはないでしようか。……我々は我々の善良なる意志を培ふことに依つて、我々の生活から、運命の名のものに不可抗力だと考へられて居た諸惡を、段々少くすることが出來ないものだらうか。自分は出來るものだと思ふ。」と述べてゐる。彼はかくの如く理性を尊び、道德を重ずる。それにも拘らず、彼は人事葛藤の極所に於て、理性の命令に何うしても屈服することのできない或感情を體驗するのである。そして此感情に理性を超越する所の必然性を賦與しやうとするかに見られるのである。

彼は其感情に超理性的な必然性を賦與しやうとする。併しそれが爲に彼は決して理性を無視しやうとするのではない。彼が若し然かするならば、彼は既早其思想的批判の標準から理性を驅逐して、純感情に盲從するものとなる。併しそれは彼の敢て

し得ない所である。彼は社會主義者の破壞的行動を好まないといふ感情のゆゑに、資本主義を是認しやうとはしない。又彼は放蕩の父を見殺しにするに忍びないからと言つて、父の過去の罪惡を忘却し得るものでもない。彼に取つて理性は最上のものである。彼の思想的批判力は、それが理性のみに依據する限りに於て、常に嚴正であり、峻烈である。只彼に特異とする一點は、彼が自己の理性の下した斷罪の宣告によつて罪人の蒙むる所刑の苦痛を、獄吏の冷酷を以て傍觀するに忍びないで、出來得べくんば之を赦免しやうとする自己の感情、或は赦免することができないことによつて苛まるゝ自己の感情を何うしても抑制することができないといふ、其一點に在るのである。

惟ふに彼は冷やかな理智の使徒たるべく餘りに人間的である。高山樗牛は「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と言つたが、人間は餘りに現代を超越すると人間性を失ふものである。英雄が年代を歷るに從つて、神性を增すかはりに人間性を滅ずるのはそのためである。トルストイも現代を超越しない間は人間的であつた。彼の初期の作、例へば『コザック』『幼年』『少年』及「青年」等が、異國人の吾等にすら無限の親しみを感じさせるのも主としてそのためである。此意味からすれば菊池氏は餘りに人間的なるがゆゑに、理性を撥ねかへすほどに感情的であるとも言ひ得られるのである。

七　階級藝術家としての菊池氏

單に其理性の關する限りに於ては、菊池氏が革命家としての素質を有つと言つても必ずしも彼を誣ゐるものではないと思ふ。貧窮であつたと稱する彼の少年時代の實感から言つても、彼の旺盛なる反抗的精神に見ても、彼のかなり透徹したる合理欲から考へても、彼が資本主義の弊竇と社會主義の眞理を認識してゐる點から推しても、又『火華』の如き彼の作品中に描かれた階級鬪爭の心理的洞察力に察しても、社會人としては革命運動に參じ藝術家としてはプロレタリヤ作家の群に伍することが彼に必然の傾向でなくてはならないやうに思はれるのである。それにも拘らず彼が革命運動を避けて、協調主義に甘じやうとし、あまつさへプロレタリヤ作家の群からは、正面の仇敵視されるやうな立場に在ることは、一見不思議の感があるのである。併しそれは毫も不思議でない。彼の感情が彼の理性に叛いてゐるからである。彼は理性を自ら欺瞞し得るやうな横着者でない。彼の良心は敏銳である。彼は終始理性に聽從することを欲する。それにも拘らず彼の感情は、理性の斷罪に從うて、自ら對手の下に當るべく餘りに人情味に富み過ぎてゐるの

である。彼の血管には、憎い／＼資本主義の權化でありながら、美律子を救はなければならない鐵造の、又憎い／＼遊蕩無慚の父でありながら、終に之を吾家に呼び迎へなければならない賢一郎の血が流れてゐるのである。これは理性を尊ぶことと彼の如く、道德を重んずることと彼の如き者に取つては、寧ろ一つの悲劇でなくてはならない。如何なる場合にもデカダンであり得ない彼、如何なる窮境にも自律道德を棄て得ない彼が、理性からは當然革命家たるべく示唆されつゝあるに拘らず、感情によつてそれを喰止めるべく內心苦闘しつゝある態は、達人からは寧ろ氣の毒なる地位と見られるであらう。併しながら達人でない大多數の民衆は、彼に同情することができるのである。

千葉龜雄氏は『解放』の四月號に於て、菊池氏の生活も作品も、理性的潔癖であり、非妥協的であり、第二義的道德を排除するものであるとして、彼に敬意を表して居られる。成程彼は因襲な虛禮を排斥し、無反省な僞善を容捨しない點に於て、潔癖であり、非妥協的であるに相違ない。併し私は虞る、彼は其第一義的道德に於て案外妥協的であり、不潔癖であるのであるまいか。何となれば若し彼が、其第一義的道德に於ても潔癖であり非妥協的であり得るならば、彼の作品に表現される其思想的批判は今少しく徹底的でなくてはならない筈である。例へば『火華』に於ける美津子は、平素蛇蝎の如く憎惡し、侮蔑してゐたプロレタリヤの一人によつて、其危難を救はれたといふ自覺によつて、一層其自尊心を傷けられ、驕慢と冷酷とを增長し、到底融和の途なきまでに階級闘爭の敵愾心を鼓吹さるべきではなかつたか。例へば又『父歸る』に於ける賢一郎は、如何にしても赦し難い父の罪惡を膺懲するために、其野倒れ死をも冷眼視し得べきではなかつたか。作者の第一義的道德は確にそれを肯定しなければならぬ筈である。然るに彼は理性に於て肯定しつゝ感情に於て肯定し得ない。大義親を滅するには彼は最後の勇氣を缺いでゐる。彼は舊道德の外殼は破り得ても未だ其內實を棄て得ない。此意味に於て彼は過渡期の思想家であると言へる。しかも彼は新時代の先驅者であるよりも、寧ろ舊時代の後衞者である。所詮彼は徹底的に非妥協的ではあり得ない。最後のキヤタストロフヰーの眼前に迫るに及んで、彼は心機一轉、忽ち妥協に投ずる其本能を何うすることもできないのである。

彼が革命家たるべくして終に革命家たり得ない所以は實に茲に存るのである。感情に於て革命的であり得ない者は、如何に理性に於て革命を是認しても、到底眞の革命家とはなり得ないのが常である。學者や理論家によつて實際の革命の成し遂げら

れたためしがない。理性を滅却し得る程に強く大きく動く感情によつてのみ、唯革命の實行が可能である。革命的感情の無い所には、數百篇の革命理論を積み上げても、到底煙草の火ほどの熱も起すことはできない。菊池氏は此革命的感情を缺いで居る。從て彼は革命家ではあり得ないのである。

茲に於てか吾等は、菊池氏が藝術と革命運動（私の最初に與へた解釋からすれば、非革命運動も同一）との兩立を否定し、藝術の價値は階級を超越すべきであることを主張しつゝあるに拘らず、彼も亦階級藝術の創作家に外ならないことを發見するのである。何となれば彼の作品に表現せらるゝ感情は階級協調主義であり、舊道徳に對する妥協であり、究極に於て非革命的精神を表現するものであるからである。そしてかくの如き非革命的精神は『火華』及『父歸る』の結末に於ての如く、現代の日本人の實感に十分共鳴せらるべき形態に於て、藝術的感覺の中に融化されてゐるからである。畢竟彼は論客としての超階級藝術家でありながら、作家としての階級藝術家であると斷ずることができるのである。

八　革命精神を表現せざる前田河氏の作品

これから私は前田河氏の作品の檢討に移らう。併し有體に言へば、私が菊池氏に關して言ひ得た所と、同じほどに多くを前田河氏に關して言ふべき資料を有たない。これは前にも述べたやうに、前田河氏によつて發表されて居る作品は、菊池氏に比すれば、極めて少數であるから、十分藝術家としての彼の特質を窺ふべき機會が、まだ吾等に與へられてゐないからである。

併し既に發表された作品だけに就て見ても、前田河氏が小説家として相當に秀でた才能の所有者であることは疑はれない。彼の技巧は屢々ジヤツク・ロンドンを彷彿せしめるものがあり、彼の題材は幾分かゴルキーに似通つてゐるものが少くない。彼は菊池氏よりも、もつと強い意味に於て人間的である。彼の表現はそれが粗雜であることに於て菊池氏を超えて居り、彼の感情はそれが放慢であることに於て又遙に菊池氏を凌駕してゐる。それにも拘らず、彼は菊池氏と共通の或物を持つてゐる。惟ふにそれは彼が其表現にも其感情にも、剛健とも形容すべき「男らしさ」を有つからであらう。勿論彼の有つマンリーネスは菊池氏の有つそれよりも、ずつと放縱である。マドロス的のマンリーネスである。從て自由である代りに無節制であり、豪宕である代りに無反省である。菊池氏の有つ自律的な「きちようめん」は彼の更に有たざる所である。そこに彼等の素質の差が認められる。

菊池氏も前田河氏も共にリアリズムに立脚する作家である點に於ては同一である。併しながら菊池氏のリアリズムは主として個人の上に表現されるがゆゑに、より多く心理的であり、前田河氏のリアリズムは主として集團の上に表現されるがゆゑに、より多く生理的であると言へる。菊池氏は觀照の焦點を常に或個人の上に置くがゆゑに、其描寫は簡潔であり、其印象は鮮明である。之に反して前田河氏は觀照の對象を常に或集團の上に求むるがゆゑに、其描寫は緊縮を缺ぎ、其印象は散漫である。併しそれは前田河氏の技巧が必ずしも菊池氏に及ばないがためでなくして、寧ろ其題材の然らしめる所であらうと思ふ。

併しながら此兩氏の間の何よりも大きな相違は、菊池氏の最大の强味である所の思想的批判力を前田河氏が缺いでゐること之である。（無論これは人としての前田河氏に關して言ふのではない。氏の作品に關して言ふのである）成程彼の小說の或物、例へば「地獄」などの中には、或一群の人々の醜劣な生活に關する憎惡反抗といふやうなものが多少描かれてゐないではない。併しそれは反抗者の側に於ける道德的無節制を暴露して居ることによつて、餘程帳消しされてゐるのであつて、全體の印象として、讀者を思想的批判の下に服せしめるやうな（例へば菊池氏の「忠直卿行狀記」の如き）力は極めて乏しいのである。併し「地獄」の如きは、前田河氏の作品中、思想的批判を表現してゐる殆ど唯一の例と見て可いのであつて、他の傑れたる作品、例へば「マドロスの群」の如き、「三等船客」の如き、一種のプロレタリヤの一群を、かなり正確な且力强いタッチを以て描き出してはあるけれども、そこに思想的批判と認められるやうな何物も存在してゐないのである。

彼の著作集「三等船客」中に收められたる諸篇、並に彼が『サンデー毎日』に揭げた『ピストルを買つた男』等の作品は、悉く米國移住の本邦勞働者の生活から題材を得たものである。是等の題材は、日本の文壇に於ては確かに新鮮な題材である。殆ど題材の飢饉と言つても可いやうな今日の小說界に、從來何人も全く指を染め得なかつた方面を、前田河氏が新に開拓したことは、彼の小說が意外に多數の讀者を吸收し得た一つの原因に相違ないと思はれる。併しながら彼は階級藝術論者である。彼は社會革命の一手段として自ら小說を書きつゝある人である。從て彼の小說は、それが藝術としての價値の大小高下に拘らず、讀者をして、社會革命を祝福せしめ、階級鬪爭思想を勃發せしめる底のものでなくてはならない筈である。我國現代の勞働階級をして、資本主義の害毒を痛感せしめ、一讀三嘆、慨然としてプロレタリヤ文化の建設のために、蹶起せしめる底の

ものでなくてはならない筈である。若しさうでなければ彼の革命藝術論は、畢竟言葉の遊戯に過ぎないものであつて、作家としての彼は、自ら已れの理論を裏切つて恬然たるものと言はなければならぬことになるのである。

然らば、借問す、前田河氏の小説の何處に革命精神の表現があるか。何處に階級闘爭の鼓吹があるか。何處に資本主義の呪咀があり、プロレタリヤ文化の理想があるか。無産階級の生活を描くことがそれであるならば、トルストイやツルゲニエフは露西亞の農民を、ゾラは巴里の勞働者を、ロンドンはアラスカの工夫を、ゴルキーは露西亞の貧民を描いてゐる。彼等は何れも世界的の名聲を有する作家である。しかも彼等の作品が、革命精神の鼓吹に、階級闘爭の實行に、果して幾何の貢獻を爲し得たか。況んや前田河氏の描出すプロレタリヤの生活は、日本數百萬のプロレタリヤには、全く緣故も興味もない外國の、しかも極めて限られた境遇に置かれてゐる數名の放浪者の生活ではないか。同じ米國移民を描くにしても、機械職工や石炭坑夫の生活でも描くのであつたなら、多少は祖國の勞働階級の實感を動かし得たかも知れない。併しそれが船のボーイであつたり、文學に志す肖像畫工であつたりするのでは、それに興味を有つ者の範圍は極めて狹少である。若しそれに日本の勞働階級の興味に訴へる何物かゞあるとするならば、唯その異國情調だけである。物珍らしさだけである。到底彼等の生活苦の實感に刻み込まれるやうな興味ではあり得ないのである。私は必ずしも類型的な生活を描かなければならぬと言ふのではない。併しその作品が廣く數百萬のプロレタリヤの實感に訴へるべく企圖されたものである限りは、日本現代の社會に於て、吾等が日夜まのあたりに視つゝある所のプロレタリヤの生活を描くことの方が、遠い亞米利加のマドロスの群などを描くよりも、どれだけ有効であり又有意義であつたか知れないと思ふのである。

(此意味からすれば中西伊之助氏や新井紀一氏は前田河氏よりもずつと勝れて仕事をして居ると言へる。中西氏が四月の『新興文學』に發表した『機關車の朝』の如きは、短篇ながら四月文壇での壓卷であつたと思ふ。)

併しそれは尙恕すべきである。唯如何にしても恕すべからざることは、前田河氏の小説の何處にも、革命精神の表現も、階級闘爭の鼓吹も存在しないことである。私は我日本の勞働者中、一人でも彼の小説によつて革命精神を鼓吹されたり、社會主義の信仰を喚び起されたりした者があつたとは想像できないのである。言ひかへれば彼の小説は階級藝術としては無價値であり、從て又無意義のものであると斷定して誤りないと私は信ず

るのである。

總に澁んで、私は玆に彼の『三等船客』から、不思議な一節を左に抜萃するであらう。彼はかう書いてゐる「すべての人に共通な、すべての人を滿足させる、すべての人の理想である、そして、今までの現實よりも高い、偉大な、幸福なものが、彼等の目前に迫つて來て、すぐと彼等の生活に溶け込んでしまふ、といふ晴々しい豫感が、各自の小さな迫害心や、獸力や、利己主義などを打ち破つて、彼等を同じ大きな目的に向つて進んでゐる仲間同志にしてしまつた無意識な欣びが、相互の結合力となつた……」若し此小說の全文を通讀しないで、此抜萃のみを讀む人があつたならば、それは何處かの國で、社會主義の革命が成就したことを祝福し合つてゐるプロレタリヤの一群を描寫したものとでも思ふであらう。ところが意外！ それは祖國に歸る米國移民が始めて日本の陸地を遠望した時の心理狀態の描寫である。然り、この官僚政治と資本主義の國日本を望み見た其時の！

玆に於て私は重ねて言ふ、彼の小說の何處に階級藝術としての價値が認められるか。社會人として、或は階級藝術論者としての彼が、いかほど革命精神に燃え上つてゐやうとも、唯それだけで彼の作る小說が必然的に革命精神を表現すべき原因にはならない。それは彼の小說が理論でなくて藝術であるからである。原則として藝術に革命精神を表現することが不可能だと言ふのではない。唯前田河氏の場合に於て、若し彼の小說が論文であつたならば、直截に明瞭に强烈に表現し得たであらう所の革命精神が、一向彼の藝術の中に表現されてゐないといふ、單なる事實を指して言ふのである。畢竟彼の藝術は階級藝術としての實を全く缺いでゐるのである。若し單に作者が社會主義者であるといふだけの理由で、或は單に作品が無產階級の生活を描寫したといふだけの理由で、それが階級藝術と呼ばるべきならば、これも一つの階級藝術であるに相違ない。併し若し、革命精神を鼓吹し、階級鬪爭を振興し、プロレタリヤ文化の建設に役立つものゝみが階級藝術と呼ばるべきならば、吾等は如何にしても、前田河氏の小說を階級藝術と名くべき理由を發見しないのである。

併し、彼の小說が階級藝術でないからと言つて、それが超階級藝術として有する價値を、寸毫も左右するものではない。革命精神が表現されてゐやうがゐまいが、プロレタリヤ文化に貢献しやうがしまいが、彼の小說が一箇の藝術品としての、存在の價値を有することだけは疑へないのである。要するに彼は、菊池氏とは反對に、論客としては階級藝術家でありながら、作

家としては超階級藝術の創作に從事しつゝある者と言へるのである。

九　藝術の社會的價値

惟ふに藝術の有する文化價値は之を藝術的價値と社會的價値との二つに區別して見ることができる。藝術的價値は、それが繪畫であれ、彫刻であれ、音樂であれ、文學であれ、演劇であれ、あらゆる藝術と名くべきものに固有のものであつて、いやしくも此價値を有たないものは、藝術としての存在を有たないことになるのである。然るに社會的價値は之と異り、藝術に固有なものでなく、從て之を缺いで居つても、それが藝術としての存在には影響を及ぼさないものである。然らば謂ふ所の社會的價値の實體は何であるかと言ふに、それを明かにすることはかなり困難な問題であつて、私は後日別にそれを論究するの機會を得たいと思ふのであるが、今それを簡單に要約するならば、藝術の社會的價値とは要するに藝術の社會生活に及ぼす一種の副作用の謂である。藝術的價値も、藝術が人類の社會生活を離れて存在するものでない以上は、社會的に何等かの作用を有たなければならぬものであることは勿論である。如何に藝術至上主義者といへども、絕對に社會を離れて藝術の創造があり得るとは考へないであらう。旣に社會を離れて藝術がないとするならば、藝術の有する固有の價値も亦それが社會に與へる或種の效果以外のものではあり得ない筈である。此效果は要するに直接には人間の美意識の涵養と其滿足であり、間接には人間の美意識を通じての社會生活の美化である。それが卽ち藝術の文化價値に外ならない。かういふ見方からすれば藝術的價値も亦廣い意味の社會的價値の一部面であるとも言へるのである。

併し私が玆に謂ふ所の社會的價値は狹義の意味に於てのそれである。言ひかへれば藝術の文化價値の中から、その藝術的價値を引去つた殘餘の部分だけを意味するのである。そしてそれを社會的價値と呼ぶのである。かういふ意味に於ての社會的價値の實體は、要する藝術の有する教育力に外ならないと私は思ふ。私がそれを教化力と言はずして教育力と言ふ所以は、社會的價値中から藝術固有の價値を除外したからである。尤も玆に謂ふ所の教育とは理智と感情との双方の修養、啓發、陶冶を含むことは勿論である。それは最高文化の建設に役立つ所の一切の教育(但し藝術固有の價値に依るものを除いて)を意味する。從てそれは時としては哲學的であり、科學的であり、時としては政治的であり、經濟的である。又或る場合には叛逆的であり、破壞的であり、或る場合には歸順的であり、建設的であ

る。それは宗教的信仰の鼓吹といふ形態に於て表現されることもあれば、道德的覺醒の警告といふ形態に於て作用することもあるであらう。いづれにしても文化の完成に貢献するところの、あらゆる人類の活動の誘因たるべき理智及感情の啓發、それが玆に謂ふ所の教育であつて、此教育のために役立つ力を私は藝術の有する社會的價値と名付けるのである。

右の如き社會的價値を全く有たない藝術は其例に乏しくない。例へば人體や動物を刻める彫塑や、單純な風景畫の如きはそれである。叙事や叙景に專らなる詩や歌や俳句の如きもそれである。音樂なども大部分までがそれである。小說も單なるスケッチ風のものは大抵それである、戯曲に至つては全然社會的價値を有たないものを製作することは却て困難であるが、併しさういふ種類のものが絶無とは言へない。從て社會的價値を有たなくても、藝術が藝術としての存在を有つことは勿論であつて、又それだけで文化價値を具備することも爭はれないところである。今日プロレタリヤ文學論者などの間には、社會的價値を有たない藝術は藝術としての存在を許すべからざるものゝやうに考へてゐる人もあるやうであるが、それは藝術が社會的價値以外に尙文化價値を有つものであることに氣付かない無識の致すところである。

併し一方から見れば、大部分の戯曲や小說、若干の繪畫、少數の音樂や彫塑などが、社會的價値を有することは爭ふべからざる事實である。此社會的價値は、その藝術の創作者が之を意識する場合もあり、意識しない場合もある。又たとひ意識したとするも、創作者の期待とは異つた或は反對の價値として表現されることも屢々ある。又時代の異るに伴れて其價値に增減のあることも疑はれない。併し藝術はそれの創作が完了された瞬間に於て、創作者とは全く別の存在を有つものであるから、その存在によつて自然に發生する社會的價値は、創作者の支配の範圍外に在るものであつて、創作者自身といへども、最早それを何うすることもできないのである。藝術は制度や學說のやうに後日之を訂正したり增補したりすることを許されない。そこに藝術の社會的價値の特異性があるのである。

十　藝術家の意圖と藝術品の効果

階級藝術とは畢竟右に述べた社會的價値の或る限られた効果を有つところの藝術の一種を指していふのである。即ちそれは現存社會組織の改造とプロレタリヤ文化の建設といふ一つの社會運動を、或は助勢し或は抑制するために役立つやうな効果を期待することのできる藝術の謂である。從てそれは藝術の有ち

得る多くの社會的價値の僅に一部分を具へたものに過ぎないのである。資本主義や社會主義に全然沒交渉なものは勿論階級藝術ではあり得ないが、併し階級藝術以外に社會的價値を有する多數藝術の存在することを忘れてはならぬ。從て階級藝術ならざる藝術を悉く排斥することの狂暴なるは言ふまでもないが、さりとて階級藝術は非藝術だと考へることの誤謬であることも亦疑ひを容れないのである。

翻つて惟ふに、前田河氏が、其作品に階級鬪爭のためにする社會的價値を賦與する意圖を以て、創作に從事しつゝあることは明かである。併しながら私の觀察する所によれば、嚢に述べたやうに、彼の作品は彼の期待に背いて一向此意味に於ての社會的價値を有つてゐないのである。それが他の何等かの意味に於ての社會的價値を有つか否かは此場合問ふを要しないが、とにかく階級鬪爭、社會革命といふが如き部面に關しての社會的價値を有たぬことによつて、それが階級藝術としての存在は無意義なものとなつてゐるのである。

菊池氏も亦、其作品に何等かの社會的價値を賦與することを目的として、創作に從事しつゝある點に於ては、前田河氏と同一である。唯兩者に相異する所は、前田河氏が階級鬪爭のための社會的價値を明確に企圖して筆を取りつゝあるに拘らず、菊池氏は階級鬪爭には無關係なる他の社會的價値、即ち道徳意識の改造といふやうな部面を目標として筆を取りつゝあることに在るのである。言ひかへれば此兩者は、藝術に純藝術的價値を賦與するだけに甘んじないで、併せてそれに社會的價値を賦與しやうとする意圖に於ては、同一の態度を取つてゐるのであるが、二人の目標とする價値の部面に相違があると見られるのである。

それにも拘らず彼等の實際社會に提供しつゝある作品其ものは彼等自身の意圖とは全然反對の社會的價値を有つてゐるのである。即ち前田河氏の作品は彼の意に反して階級鬪爭のためにする社會的價値を缺いでゐるし、菊池氏の作品は彼の期待に叛いて階級鬪爭のためにする社會的價値を備へてゐるのである。言ひかへれば階級藝術をものせんとした前田河氏が超階級藝術をものし、超階級藝術をものせんとした菊池氏が階級藝術をものするといふ結果に陷つてゐるのである。

併し、階級藝術と言ひ超階級藝術と言ふは、要するに藝術の社會的價値を對象としての問題である。社會的價値を取除いた後に於ての藝術的價値の有無多少は全然別箇に觀照せらるべき問題である。此點に於ては、菊池前田河兩氏いづれの作品も、確に多くの藝術的價値を有することを斷言し得るは、私の愉快

とする所である。乃ち超階級藝術としては　菊池氏の作品がプロレタリヤの文化の下に於ても其生命を保ち、前田河氏の作品がブルジョアの世界の中に於ても其價値を認められるであらうことを、私は信じて疑はぬものである。

（大正十二年四月二十八日）

無産者兒童に對する無産階級教化の實際とその原理について小學校教師に訴ふ

武藤直治

一　プロレット・カルトのＡＢＣ

プロレット・カルトの原理は私達の現實生活に對する批判意識と、××意識とから出發する。この兩者は必らずしも對立的なものでなく、一つの意識生活の兩側面を假りに抽出して、かく對させて云ふにすぎない。

すべて××意識なき批判意識はなく批判意識なくしては如何なる意味での××意識もおこり得ない。一方が消極的、反省的側面を云ふならば、一方は積極的　行動的側面を指さす。斯くて兩者は一つの意識生活の兩側面をかたちづくる。世に所謂冷靜なる、批判のための批判といふものが決して存在し得ないと同時に、暴力と破壞のための破壞の××はあり得ない。現實に對する根柢的批判のあるところ、必らずや徹底的の××を誘發する。××意識の誘發する意識の勃發するところ、先づ現實に對する根柢的の批判意識が動く。

さて、今日の私達のこの二つの意識は、私たちの當面直下の現實生活の全局面に向つて、發動する。私達の現實生活はその全局面に亘つて、ブルジョワ的色彩、特質、屬性をもつて完全に

復ひつくさせてゐる。マルクスの道破したやうに、經濟生活は人類生活のすべての基本である。所謂現代の諸般の精神文化は、ブルジョワの支配する資本主義經濟組織の上に咲いた爛漫の榮華に外ならない。それをば、云ひかくさうとして、多くのブルジョワ的學者は、所謂人格主義、文化主義、藝術至上主義、新宗教主義の壯麗な論理の大ビルデングを築いて、民衆を幻惑しようとする。然しかれらの神秘の殿堂は、かの新理想主義又は新カント主義の名によばれる神體によつて神聖化されてゐる。然もこの理想主義の哲學はブルジョワ的個人主義、自我主義自由主義の源泉に外ならない。それ自身、超人と天才と超現實の理想とを以て、少數者が全人類の上に君臨する意志を露骨に指示してゐる。少なくとも社會××主義、或ひはマルキシズムとはその方向を絶對に異にしてゐる。同時にブルジョワ的個人主義、自由主義と共通の傾向に立つてゐる。

無產階級の文化の哲學的基礎は、理想主義哲學、殊に新カント派哲學に對する根柢的批判によつて、それの完全なる解體を豫想することによつて基礎づけられる。それはアプリオリや理想への現實の隷屬を排斥して、現實の裡に理想を發見し、創造する。別言して云へば、現實の批判を、その××の尺度たり原理としての理想を追求する。理想とは現實の批判と、××の尺度として原理として必然に生れ出でるものである。科學的社會主義者にとつて、當來の××社會とそれへの必然的歷史の進展とはたゞに、現實××の尺度であり、原理である。唯物史觀は現在までの人類歷史生活に對する根柢的批判そのものである。ユートピアンにとつて空想であり、美しき夢であつたところの當來の××社會は、私達にとつて全然意味を異にしてゐる。それと同樣に理想と云ひ、現實と云ひ、人格と云ひ、私達のやがて建てようとしてゐる新哲學の領域では、從來の理想主義者や新カント派の人々の意味するそれとは全たく別個の內容をもつて來なければならない。要するに私たちは一切の從來のヶ化に向つて、根柢的の批判をもつて臨み、それらのブルジョワ的傾向、特質、屬性すべてを淨化し、摘出して、全く別種のものに改鑄することを欲する、それによつて當來の無產階級的、世界××の精神的、文化的側面に於ける破壞と建設との作用が達成せられる。

無產階級の爲めの新文化創造の過程に於いて舊き文化に對するこの批判と××の二つの意識が、即ち消極的、積極的二側面の意識がいかなる過程をとつて働らくかを今は全體として之れを云ひ得ないにしても、現在私たち、無產階級の前衛としての知識分子が從來のブルジョワ文化の各分野に亘つて夫々に批評を加へ更らに進んでそれらの改造を叫ぶに當つては、明らかに

銳どい批判意識が熾烈な××意識を伴なつて、現實の底の底までも摘發し變改しないでは置かない。批評が批評として、あるがまゝの現實に一指も染めないで所謂高踏的態度に安んじてゐるが如きは私たちにとつて緣のないブルジョワ學者の態度である。私たちにとつては認識は同時に行動である。現實への批判は即ち理想への驀進である、××への道である。兩者は一であつて、二ではない。

無產階級にとつて、智識、科學、思想すべての文化は全人類の現實生活を指導する根本の乃至は部分的の原理としての意味を失はない限りに於いてのみ意義がある。價値がある。ブルジョワが自己の階級の特權と榮華をほこる威容として、享樂としてかの溫室的の文化を培つたのとは全たく意味が別であるのだ。

プロレットカルトには無產階級敎化と云ふ狹義の意味と、無產階級的文化といふ最も廣義の意味とが一般に併び行なはれてゐる。然しその原理としての無產階級的新文化の輪廓と、大體の體系が明らかにならないでは、決して十分に、ブルジョワ意識から淨化したる、新しき無產階級としての敎化を施こすべき實際的方策が確立しないのである。故に、無產階級文化の原理的研究と、その創造的活動がすゝむにつれて、無產階級敎化の方策が一層切實に根柢的に、確立するであらうが、現在のやうに未だ無產階級文化の原理さへも、明瞭になり切つてゐない時代に當つては、無產階級敎化の方策の內容が不完全、不十分であるのも止むを得ない。

プロレット・カルトの根本精神は科學主義と勞動主義の結合にある。それはすべての生產的勞働の科學化である。同時に一切の科學の生活化である。プロレタリアの階級の生活指導原理としての科學及び科學主義の適用と創造である。原始的生產勞働は、科學化されることによつてのみ××社會に適應される。資本主義の崩壞は科學の發達と、勞働の科學化によつて速かに促進させられる。それと共に科學は全人類の共同的勞作によつて、支持され發達させられる。『科學の哲學』又は科學の形而上學がやがて成り立つならば、それは在來の哲學がさうあつたように、個性的主觀的の色彩と特性をそれは有しない。『科學の哲學』の全體系は人類的、人間的の特色と屬性とを有する。科學は概念としてに非ざる、實在としての人類、或ひは人間の主觀的立場を、尺度とし、標準とする。そこに科學の國境を超越し、人種を超越し、階級を超越する立場がある。現在の科學がある特權階級の獨占、又は搾取のための應用を目的としてゐることは、科學自身の罪過ではあらぬ。プロレタリアが經濟的、社會的無力であるにつけ込んで、特權階級が科學の成果をば掠奪

し、さらに搾取作用に適用してゐるにすぎない。かれら特權階級の利己的努力こそ科學の眞精神と相反するものである。科學に內在する眞の科學主義を刺激し、覺醒を與へるのは、社會主義であり、社會××主義であり、プロレタリア的世界主義である。そして科學をプロレタリア、全人類の所有に奪還し、全人類の所有にふさはしき特色と屬性とを附與するのは當來の××社會に於ける無產階級文化の仕事であらねばならない。同時に、無產階級文化の建設を根柢づけ、促進するものは、眞に覺醒されたところの科學主義である。科學化され、合理化されたところの勞働主義である。生產勞働と科學智識の一致であり、融合である。

けれども所謂『民衆教化』『社會教育』と呼ばれるところのものと、無產階級教化の根本的相違といふものさへ未だ明らかにプロレタリア階級の大衆によつて知られてはゐないのである。勞働者教育、貧兒教育、民衆娛樂による社會教化等と云はれるところのブルジョワ閥の支配するがまゝの社會組織に適應すべく、無產者の大衆を教化しようと企ててゐるところの所謂民衆教化の諸方策と、私達の主張する無產階級教化とは全然反對の立場に立つ。前者は上より與へる教化であり、現在社會組織支持のための、換言すれば無產者に對する間接的搾取作用としての職分を盡すところの教化である。後者は、無產者全體にかれらの現實に對する批判意識と革命意識とを目ざまさせ、その無產者としての自覺に合理的、思想的根據を與へることによつて、即ち社會××主義的、マルキシズム的教養を與へることによつて、更らに無產階級的世界革命の促進のための、無產者の陣營の前衞の鬪士としての訓練を與へるところの教化である。兩者は相尅的立場に立つところの二つの教化的方策である。彼れに從ふものは悉とく我れにとつて敵である。

無產階級教化とは、無產階級の教化的獨立を意味する。無產者が自己とそして自己の階級の一部又は全般に對する無產階級意識の覺醒を促がし、さらに當來の××社會への無產階級の歷史的使命を推行するための革命意識の熱火を燃すところの一切の活動――それが無產階級的社會革命への道をととのへる、革命勃發前のプロレツト・カルトの中心的使命である。從つこの中心使命に違背する、又は冷淡なる一切の現行の教育或ひは教化はこれを指してアイロニカルに、ブルジョワ・カルトと名つけるのである。

如何にブルジョワ閥及びそれの支持する××が無產階級に與へるところのブルジョワ・カルトが組織立つて居て、辛辣、陰險、殘忍のきわまりなきものがあるかは茲に指摘するまでもな

い。就中最も組織的で、大仕掛けに、何らの例外と自由を許さないものは、第一に××に於ける××教育であり、第二には小學校に於ける學齢兒童の教育である。この二つは現在××のブルジョワ閥とその××組織の支持のために根本的必須のブルジョア・カルトである。

前者が近時一種の社會教育の形態にまで手をのばして來て、一意資本主義的軍國主義の勃吹につとめてゐるのは最も注目すべき現象であるが、その晩近某私立大學で、おこつた或る一集團を中心とした紛爭の一例の如きは、その露骨なる動反動の相剋する波の一つと見るべきであらう。なほ、ボオイ・スカウトや青年團の組織とその精神の中にも、この形態を新たにしたところの資本主義的ミリタリズムの亡靈を認める。

第二の兒童教育に於ける組織的ブルジョワ・カルトについて見ると、現在の小學校教育の全過程とは、實にあるがまゝの階級制度への拜跪と、資本主義社會の謳歌讃美と非科學的神秘思想と、そして權力政治と軍國主義への絶對信仰とが强制されるものに外ならない。別言すれば、金儲け思想（マムモニズム）の鼓吹と、侵略的帝國主義の讃美とが人間處世のモツトーとして幼い兒童に教へ込まれる。これがブルジョワ・カルトそのものでなくて何であるだらうか。

實に、革命以前の社會狀態では、無產階級的新文化は芽生さへも培はれるに適してゐないかもしれない。然しそれかと云つて、私たちはこの困難なる、餘り仕榮へのしなく見える無產階級文化の創造といふ仕事を捨てて置くことがあつてはならない。周圍のわるい狀態の一つ一つと戰ひながらも、新文化創造のために私たちの力の半分は合はせられなければならない。それなくしては當來の無產階級的世界××への急速度的進展は期されない。殊に反動期に於ける諸般の反動思想の跋扈に對して、其の一つ一つをば敏感に徹底的に摘發し糺彈してゆくことが不可能である。同時にあるがまゝのブルジョワ文化が與へるたへまなき害毒からして一日も速く無產階級を自由ならせることが困難である

無產階級の共同戰線の中での、その思想的智識的、文化的局面に於いて、ブルジョワの陣營に對して抗爭、戰鬪に當るのがプロレツトカルトの現在の使命であることを、私は立證、主張して來た。

云ふ迄もなく、無產階級的意識、乃至は無產階級的社會××精神をもたざる、凡百の、所謂社會改造運動や社會政策の悉くは、ブルジョワ・カルトの個別的表現以外の何物でもあり得ないのである。かの平和主義、或ひは非軍國主義（アンチミリタリズム）、國際主義と名

づけられるものの多くも、同じくブルジョワ・カルトの範圍に屬してゐる。ブルジョワ閥とて、何時になつも軍國主義や侵略的××主義に固執して居るとは限らない。資本主義の成熟と、世界市場の變化と、國際關係の推移によつて、昨日までの侵略的帝國主義を今日は國際的平和主義に塗りかへるか、明日はさらにブルジョワ・インターナショナルを組織して、國際間の所謂永久平和と非軍國主義をより多く徹底させるかも知れない。然しブルジョワ閥は、決して無産者に對する搾取作用を止めることは絶對にあり得ない。從つて、無産階級に對してはブルジョワ階級は、永遠の死敵であり、搾取者であるには變りがないのだ。故に、ブルジョワ閥が永久平和と國際聯盟を口にして、綿羊の假面にかくれても、無産階級の反抗と階級鬪爭の精神はこれを寸時たりとても飜がへすことがあつてはならないのは勿論である。

それだのに、ブルジョワ的教養に麻痺してゐる智識階級の中には、ブルジョワ閥の一時的策略に出でた永久平和と非軍國主義の思想を、美しきユートピアに導びく大道のやうに誤まつて、平和を叫び、非軍國主義と國際主義に隨喜する者が出る。かの一部教育者婦人運動者の唱へる、小學校中等學校の教科書教材から軍國主義と偏僻なる愛國思想の撤廢を期するとか云ふ平和主義の運動の如きも、無産階級解放の精神に立脚しない以上は、單なるブルジョワカルトの新手と見る外はない。私達の立場はそれらとは全然異なる。實に無産階級の階級鬪爭は眞に未來の××××——ユートピアに導びく狹い門である。

私達はあくまで無産階級の共同戰線の上に立つ。そしてブルジョワ意識、ブルジョワ思想、ブルジョワ精神のすべてに向つて、容赦なく私達の批判意識と××意識とを働きかける。そこに不斷の反抗と爭鬪がおこるのは當然である。所謂平和とか、愛とかが共同の死敵との間に成り立つ筈があるものでない。私達はすべての、感傷主義と宗教的不抵抗とを捨てる。

愛は全人類を對象として働かねばならぬ。全人類の解放は無産階級的世界××によつてのみ達せられる。無産階級がその歴史的必然の使命に覺醒し當來の××社會への世界××を促進するところに無産者の全人類に對する熾烈な愛の心は發現する。眞の永久平和とは當來の××社會に於いてのみ可能である。現在の全世界の無産階級は、その眞の永久平和實現のために、あらゆる爭鬪と流血を辭せないであらう。

私はプロレツトカルトの大凡の方向と大略の原理について述べてきた。諸君は以上のプロレツトカルトのABCについて、何らの不審もなく、疑惑もなく、そして反撥を、感じることも

なしにうけ入れることが出來たに相違ない。そこで、私達はさらに進んで、より詳細に、そして現實生活の諸相に亙つて個別的にも考察を進めて行くことにする。

二　ブルジョワ教化の諸相と無産階級教化の實際

　ブルジョワ的智識階級の一部によつて、在來の劃一的小學校教育を補足し、改革しようとして企ててゐるところの、新しき兒童教育の方策の中でも、最も有力であり、且つ樣々の方面に實際的に應用されてゐるのは所謂藝術教育と呼ばれるものである。藝術教育とは、藝術的、美的情操を特に教養するところの教育であるか又は、ある種の藝術を應用して兒童の美意識、藝術意識を涵養する教育である。後者の例としては、自由畫教育があり、童謠教育があり、兒童の自作自演の兒童劇、學校劇がある。前者の例としては一寸適當な實例を思ひ當らないが、後者のいづれの例の中にも含まれると同時に、文藝、美術、音樂その他の鑑賞と享樂とによつて兒童の情操を教養しようとしてゐる一派の主張も一例であらねばならない。

　然し私達の立場より云へば、在來の藝術は嚴正なる批判をもつてすれば餘りに、ブルジョワ的意識に混濁されてゐるではないか？。ブルジョワ的色彩、特色、屬性によつて悉とく覆はれてゐるではないか？　藝術そのものの觀念、美そのものの意義に對してすら、私達は根本的の疑義を提出しようとしてゐるのだ。所謂藝術至上主義の藝術及びその美學に對して私等は徹底的に革命を要求しようとしてゐるのだ。そして總ては在來の藝術と美學に對する根柢からの價値顚倒の來るであらうことを私達は期待してゐるのだ。從つて在來の藝術の與へる美的情操、藝術的情操をそのまゝに兒童教育に應用することには絕對に反對せねばならぬのである。また、それと共にブルジョワ意識によつて混濁されてゐる社會生活の環境に育つた兒童達が美と感じ、快と感ずるその意識の內容にすら、可成りに警戒しなければならないところの、ブルジョワ的美感と快感を私達は見出すのである。兒童の手になつた自由畫や童謠の中にさへ私達はいかにブルジョワ藝術の基調と共通するところの、感覺的、末梢神經的美と官能の陶醉を見ることだらう、殊に都會の、ブルジョワの家庭に育つた兒童のそれらにおいては。

　兒童の敏感さと模倣性を、徒らに感傷的な、同時に、感覺的なブルジョワ藝術の色彩や、音律や、感情や、女性的官能的の美の世界に放縱に誘導することによつて、彼れらの剛健な、質朴な、誠實な、活動的な社會の若きゼネレーションとしての教養

を怠らせることは、私達の坐視するに忍びないことである。故に私達は一切のブルジョワ的藝術教育に反對する。

兒童の精神生活は成年者のそれとは餘りにかけはなれた、神秘の世界に在ると云はれる、その神秘の世界を庇護すべき、より高めるべき藝術教育が唱道される必要があると云はれる。けれどもそれらの言葉の中には何と云ふ古めかしい神秘思想の響きがあることだらうか。私達はそれに反對して、兒童にはすべて當來の社會生活にふさはしき科學的、勞働的教養を與へるべきだと主張する。さらに無産階級意識と鬪爭精神にみちたる、前衞のよき鬪士としての覺悟と訓練とを與へるべきだと主張する。××主義のABCによつて、プロレタリアニズムの精神によつて無産階級的世界××促進のために、プロレタリアの共同戰線に立つに十分なる決意と熱情とを喚起すべきだと主張する。それらの立場と關係のない所謂藝術教育の一切はブルジョワ閥のものである。ブルジョワ教化の新しき形態のあるものに外ならないのである。

私はより進んで一つ一つの所謂藝術教育の實際的例證をあげて、說明すべきではあるが、玆にはその餘裕がない。たゞ原理として藝術教育が、如何に在來のブルジョワ藝術と、その美學の無批判な應用であるかを指摘するに止めて置く。そして藝術教育を唱道するブルジョワ的智識階級が、如何に宗教的神秘主義や、安價な女性的感傷主義によつて、兒童の精神生活を愛護すると稱しながら、かれらをより一層スポイルしてゐることかそれらの人々が非科學的のこれらの迷信に囚はれて、未來の、新社會建設の使命をもつて生れて來た若きゼネレーションをブルジョワの陣營へ引きづつて行かうと無意識的にも努力してゐることか。私達は在來の藝術と美學とを拒否すると共に、藝術教育をも拒否する。

しかもこれらの藝術教育なるものは、現在の社會狀態では、一般の無産者の兒童達に齊しく與へることは云ふ迄もなく不可能事である。たゞたゞ、特權階級の兒童達か、若しくは一部の無産者の兒童をも辛うじて其恩惠にあづからせることが出來るだけである。大多數の無産者の兒童は、藝術教育などの前に飢餓と窮乏にこらへることと、勞働にたへることと、社會的境遇の不合理と屈辱に無感覺になり得ることをば先づ學ばねばならないから、先づかれらとは緣のないものと云はねばならぬ。從つて藝術教育はその實質と內容をおいても、その、社會的意味から云つてすでに價値の尠いものである。いはんや實質と內容の點で零なる上はなほ更らである。

勞働教育、職業教育といふものが、藝術教育と並んで主張さ

れてゐる。これには無産者の兒童に生業を與へるためのものと、勞働精神を與へることによつて兒童の克己心や趣味や健康を與へ、心身の鍛錬に資するためのものとがある。後者はブルジョワ階級の兒童に向つても時としては與へられるが、前者は無産者の兒童に限られてゐることと勿論である。

然しブルジョワ智識階級によつて考へられる勞働の意味は甚だ私達のそれとは異なつてゐる。かれらは『勞働の神聖』とか『働らく者の幸福』とか口にすることがあるが、それらの勞働は、資本家階級に搾取されるための苦役としての勞働の神聖である。勞働賃銀を得る手段としての勞働することの幸福である。決して勞働それ自身に内在する快樂や、自主と獨立を保てる××社會に於ける生産勞働の神聖をば意味してゐない。

特殊小學校などで無産者の兒童に課してゐる勞働教育或は職業教育は、一個の徒弟としての賃銀勞働者としての、職業的勞働を與へることに外ならない。生産勞働の眞の社會的意義と價値とに對する自覺を促がすことによつて、創造的、科學主義的の勞働教育を與へることを目的としてゐるのではない。從つてその勞働教育、職業教育の効果は精神的方面には殆んど其價値を認めることが出來ない。たゞ熟練勞働者又は職工としての生活の道をより早く與へられることがかれら兒童のための小さい幸福であることはたしかである。然しそれだけ一方に無自覺にして從順なる被搾取者の群れを多くつくる結果ともなるのだ。由來熟練工や技術的勞働者には、プチ・ブルジョワ根性がしみついてゐるものが多い事實を考へれば、無産者の兒童が組織的な職業教育によつて、精神的にもブルジョワの搾取をうけることには多少の危険を豫想されないではない。ともあれ、職業的勞働を年少な時代からして課されねばならぬ無産者の兒童と、藝術教育によつて『神秘的な兒童の精神生活』を庇護され、愛撫され甘やかされる有産者の兒童とはどれだけの相違であるだらう。けれども、ブルジョワ的温室教育をほどこされた年少兒童たちが、何かの機會で一たび社會に投げ出され、無産者の仲間に伍して賃銀勞働を求めるとしたならば、果して藝術教育はどれだけの効果をもたらすだらうか。同時に、現實生活に對する正しき認識と批判とを如何にしてもち得るだらうか。私はこれをも疑問とする。

私達は兒童教育は、かれらの環境にしたがつて適應されねばならぬ。故に、現在以後のやうに、當來の××社會へのプロレタリア的世界××を達成すべき時代に當つては、何人もプロレタリア的階級意識にめざめ、無産者の前衛の闘士としての訓練と及び、勞働と科學との根本主義による教養とによつて一樣に

育てられねばならないことを主張する。假令ブルジョワ階級に生れた兒童達にしてもが、若しかれら自身、或ひはかれらの家庭の年長者、かれらの學校教師にして、この無產階級的自覺に到達した者があるならば、かれらにも同じくここに述べるプロレツトカルトの立場からの教養を與へなくてはならない。それは實にかれらに對する愛の唯一の表現である。かれらを眞に生かすの道である。

とは云へ、無產者兒童の全般に對するプロレツトカルト（無產階級教化）の實際的方策の考察は何よりも最初に置かれねばならない。そのために我々無產階級の智識分子は一致共力して事に當らねばならない。

社會教育としての民衆娛樂の問題はまた可なりにブルジョワ智識階級の間に喧ましいものがある。この場合も民衆娛樂とは上より與へる教化としての、慰安としてのそれであつて、無產者自身がかれら自らの力の自覺と獨立と自由の欲求と、抑壓者に對する反抗と鬪爭の精神の表現としての娛樂又は藝術とは別個のものである。その內容は全たく無害―階級的自覺にふれないものか、或ひは勞資協調的思想を鼓吹するものかのいづれかである。かの野外劇、ページエントを見よ。工場音樂、工場舞踏を見よ。これらはその臺詞や歌詞や、リズムや其他すべてブルジョワ藝術のお下りものであり、同時に階級的自覺を麻痺させる使命を帶びてゐるものである。浪花節や、舊劇映畫や、講談などについては私は一瞥を費やす興味もない。

民衆に對する既成宗教の宣傳もその民衆娛樂と結托したり、又はお祭りさわぎの催ほしをもつて、一般無產者の生活に直接に交涉する場合は私はこれをブルジョワ教化の一表現とみる。新愛國思想や武士道主義が同樣に民衆娛樂と結托するときは、矢張りさうである。これらの上から與へる民衆娛樂、民衆藝術のすべては、無產者にとつてはお振舞ひに貰ふ一包みの菓子か、又は一折りの辨當と一壜の冷酒を享樂すると同樣の程度の價値しかない。民衆娛樂はそれ以外の何ものをも意味しない。また、それでよいのかもしれない、それほど一時的の、何でもないものかもしれない。唯だ時としてその酒と辨當の中にはよくない害物がまじつてゐることを警戒しなければならないのである。

不良兒或ひは低能兒への教育と矯正については醫學的、心理學的の科學上の研究範圍に重に屬するものであるからして玆には私は云ふまい。たゞ不良少年少女に對する特殊な矯正的教育の中でも、職業化された勞働生活を强制的に賦課することと、ブルジョワ社會に行はれる俗情主義の道德をより一層偏狹にした倫理觀念をもつて、所謂不良性を矯め直さうと企ててゐるこ

と等には私達の糾彈に値するものがあると思ふ。不良兒は、醫學上の範圍に屬する病理的低能兒は兎に角として、然らざるものは恐く現實の社會生活に對する本能的反抗者である。かれらの反抗の態度の是非は別として、かれらの反抗の動因を與へたものはかれらの環境としての現實の社會生活に外ならない。社會生活に多分の不合理と不正義と矛盾がある以上、その結果の責任の過半は社會それ自身にある。それは成年の犯罪者よりも未能力者である不良兒の場合には一層云はれるべきである。然るにそれらの年少男女に對する矯正法は恐らくはすべてが不當であり、苛酷であつて、當人の犯行に對する責任を追めて悔ひさることを主眼としてゐる。決して純科學的の矯正法は使用されてゐないらしい。

天才教育、又は才能のすぐれた兒童に對する特殊的教育が或方面には可成り眞面目に唱へられてゐるやうだ。けれども天才とかすぐれた才能の所有者とか云ふものが、ブルジョワ社會下では一種の生きた偶像視されて、神秘化され、神聖化されて考へられてゐる事實を思ふと、この論者の天才と云ふ觀念には理想主義哲學によつて根柢づけられた「先驗性」「理想」などの立場からの一般人に對する天才、凡人に對する超人の思想を實際生活に推し及ぼしてゐることを私達は見る。これらの意味からの天才の尊重はブルジョワ的迷信の一つである。但しそれらの意味をはなれて純粹に生理的に心理的に、ある兒童の中に卓拔なる智能の發達を見出して、特殊な教育を與へることに止まるなら、私は何をか云はう。たゞ天才なる觀念のブルジョワ的偶像崇拜が年少兒童の生活を害することの少なくないのを指摘して、その迷妄を云へばそれでよい。同時にブルジョワ閥が天才とか才能の優れた者とかの名によつて、智識階級の多くを自己の階級への忠實なる從屬者として、飼ひ殺してゐる事實――大學教授、博士、高級技術者、藝術家等はその大部分である――をも私達は忘れてはならないのだ。

××に於ける××教育に亞いで、ブルジョワ閥とその××組織の精神的搾取の組織的機關は小學校に於ける兒童教育である。その國定教科書を見よ。いかにそれが、非科學的迷信と、マムモニズムと、資本主義的軍國主義の謳歌讃美と鼓吹とにつきてゐるかは云ふ迄もない。また學園に於ける貧富の兒童の差別待遇や、少數同胞に對する甚だしい壓迫、侮辱や、學課以外の强權や迷信に對する宣傳的教化などに年少兒童を精神的に搾取して居るその何と甚だしいことか！　私たちは自分自身にそれらを經驗して來た。そして私たち自身の家庭の年少男女の上にそれを經驗しつゝある。

然も兒童の周圍の何ものもがかれらに、眞の科學的眞理と、眞の論理的正義觀念を指示してはくれないのである。かれらのうちの敏感なものであればあるほど、正直な、美しい心の持主であればあるほど、かれらの現實生活に對する懷疑の念は深まるであらう。理性の指導者を失なつたかれらが、若しも本能的反抗を盲目的に實行に移して行くならば、ブルジョワ的社會制度は『不良兒』或ひは不逞の徒として、かれらの額に烙印を押して、生涯の暗い生活へ追ひやつてしまふ。この本能的反抗から救ふべき、現實生活への根柢的批判を與へるものは、無產階級教化以外に何ものもない。科學と勞働との一致、融合した無產階級教化の精神に基づいた教育の外に何ものもない。

凡そ生產勞働ほど、ブルジョワ社會下に於いて、賤められたる、苦痛の甚だしき、最も酬はれざるものは外にはない。かうした勞働に對して反撥的に知つてるところの勞働嫌惡の感情こそ、兒童の精神的向上を阻害し、同時にブルジョワ化するに最も力あるものである。勞働嫌惡の感傷に惑かれることは無產階級解放に對する裏切り者となり、死敵の仲間となる危險をもつことである。然るに現實の社會生活では、幼少な學齡兒童の間にさへこの勞働嫌惡の感情と、マムモニズムと、權力に媚びる心の發露するのをみる。同時に社會的ソリダリテイに背反する英雄崇拜と、ミリタリズムへの愛好とが、兒童の原始的のエゴチズムと、鬪爭的、破壞的の本能と、半ばめざめかけた科學的窮理の欲望の中に取り入れられてゐることも兒童ことに男性の兒童にはより多く見られる。それらは人間の原始的性情の正しい發現であると共に、かうした形をとつて、それらが兒童生活に現はれることは、ブルジョワ閥の支配する現下の社會生活の產んだ餘りに悲しむべき事實であらねばならない。

若しも全たくちがつた環境に生れたならば、かれらの原始的性情、エゴチズムや、鬪爭的破壞的本能や科學的窮理の欲望などが決して社會的ソリダリテイに背反する英雄崇拜思想やミリタリズムへの愛好などの形をとる筈はないのである。まして勞働嫌惡の感情や、マムモニズムや權力に媚びる心をかれらが持つであらう道理はない。

兒童に對する無產階級教化の實際當面のしごととしてはかれらの惡い環境の與へるこれらの悄むべき惡癖、惡習慣に對する解毒劑としてのあるものを與へることが第一である。そのあるものは何であるか。私は貧弱ながらも以上に語つて來た、どうかそれによつて察していたゞきたい。

實はこれをばよく明らかに的確に云ふことを私は餘り欲しないのである。何となれば、それは餘りに多岐に亙つて、複雜

な、そして個々の實際問題に及んでゐるし、明らかに述べることの自由も今は私達に許されてゐないかもしれない。完全なるそれの自由を我々無產階級の手に獲得し、そして實際の現實の問題として無產者兒童に對するプロレツトカルトの方策を考究し、實行するのは、讀者よ、諸君と私たちすべての使命であり任務であることを忘れてはならない。はじめ私は『兒童に對する無產階級教化の實際』と題する一つの章を設けて考察すべき計劃であつた。然し考へてみるとそれは餘りに材料に於いて不備であり、同時に實際の方策としても私は餘りにまだそれへの用意が貧弱であることを告白せねばならぬのである。

ソウイエツト露西亞のことを私は云ふまい。無產階級的××××以前のこの國に於いて、兒童に對する資本主義社會の精神的搾取に對抗すべき實際上の力強い運動を喚起するには、先づ是非とも小學校に於ける實際教育者の自覺分子が結束して、無產者共同戰線の前衞と立ち無產者兒童に對するプロレツトカルトのしごとに專心當つてくれなければならない。それと共に私たちのすべてが、自己の家庭の年少男女に向つて、無產階級的自覺と、さらに進んで無產階級的世界××への前衞の力强き鬪士としての覺悟と訓練とを與へることに眞劍に力を盡さなければならない。

一人をよりよく教化訓練することは軈て、百人千人に宣傳し、教化するの基礎である。一人を眞に無產階級的意識に自覺させることは、軈ては百人千人をして、無產者の共同戰線に立たせる原動力となる。私たちはこの意味に於いて、無產者兒童に對する教化の必須的意識と價値を見出すものである。

三　結語――同志に訴ふ

小學校實際教育者諸君よ。

諸君の多くは、恐らくは無產階級かそれに近い家庭に育つた人であるであらう。從つて若し諸君がブルジョワ閥とそれの支持する權力××組織の與へるブルジョワ教化から、多少でも自由な精神を殘してゐるならば、諸君は無產階級の解放運動に對して、他人であることは出來ない筈だ。諸君は社會的に云つても、權力と金力に緣のとほい、同時に無產階級に可なりに近い地位に居るのではないか。諸君は他のブルジョワ的智識階級に比して、もつともブルジョワ閥とブルジョワ的智識の恩惠から遠い地位にゐるではないか。諸君こそ、すべての智識階級のうちで卒先してプロレタリア意識にめざめるべきである。また、諸君こそ如何なる場合に於いても、無產者の兒童のための最も力强き味方であらねばならぬのである。

然るに諸君の同僚のある者は無産者の兒童に對して決して善き味方ではない。反つてかれらの仇敵であるブルジョワ閥とその支持する權力××のために、精神的搾取作用の手先きとなつて忠勤をぬきんでてゐるではないか。諸君はそれに氣付いてゐる筈だ。

小學校實際教育者諸君よ。

諸君はすべてのよきもの、正しきものの味方であらうと、自ら努めてゐるに相違ない。そして諸君の育つて來た環境に於いて、所謂師範學校教育なるものに於いて、義務教育年限なる制度に於いて、諸君の生活から自由と獨立を掠奪して行かうとするある勢力に氣付いて居るに相違ない。そして毎日の諸君の日課とされて居る授業の内容に、無産者の兒童に對して何を教へ、何を與へる結果となつてゐるかをも恐らくは感じてゐるに相違ない。

諸君は諸君の現實生活に對して明確な批判意識をもつに從つて、諸君は何を欲求しはじめるか。即ち諸君の批判意識に伴なつておこるところの××意識は諸君の現實生活に對して何を意志するのであるか。其時こそ諸君は無產階級解放運動の共同戰線に立ち、無產者兒童に對する無產階級教化のしごとに當るに十分なる覺悟と自覺が自分自身のうちに湧き上るに相違ない。

かくて、諸君はプロレタリアの陣營に投じ、その前衞の力強き闘士となる。

諸君は教壇に立つ一瞬の時間を割いて、無產者の若きゼネレーションの心に、眞赤な熱い火を點ずべき、樣々の寓話と、事實談と、感想とを用意し、工風し或ひは考案してかれらの理解に適するかたちにつくり上げること、そしてつねにかれらの全部にその火を點ずることを怠つてはならない。それと共にあらゆる機會に於いて、生產勞働か一切の人類社會生活の中心であり、それ自身充實した快樂であり、さらに最高のあるものであらねばならぬ自由を、實際について反省させ、かれらの意識の底へ確かと刻みつけねばならぬ。同時に科學に對する正確な智識と、科學的精神についての信念とをかれらに會得させねばならぬ。科學と科學主義ばかりが明日の人類生活の智識生活、精神生活の基本であること、それが一切の幸福と生活の充實の源泉であることをかれらにめざまさせねばならぬ、また、科學とそして一切の文化が、人類全體に共有さるべきものであつて、一部特權階級の獨占にまかせらるべきでないことをも知らさねばならぬ。……要するに諸君が常住に自己のプロレタリアとしての自覺と使命とを忘れずに、諸君の愛する兒童たちに向つて不斷に、プロレットカルトを施こすことが、諸君の階級戰に當つて

の唯一無二の任務であることをしかと知つてほしい。

諸君は諸君の上に降りかかる、あらゆる種類の迫害と、壓迫に堪えて、毅然と自己の信ずる道を歩み得るであらうことを私は信ずる。諸君が無產者としての自覺と使命の前には何ものも妨たげることはない筈だ。既に我々無產階級は未來の歷史的必然の使命を推行するに十分なる覺悟をもつてゐる。前進せよ、前進せよ。

全國の小學校教師よ、團結せよ!!

（完）

附記――この小論文は起草中の『小學校國定教科書の科學經濟及び藝術思想批判』と併せ讀まれたいのである。其れによつてやゝ私の意味が完全しようと思ふ――筆者。



沖野岩三郎氏著

薄氷を踏みて

最新刊

半年あまり滿鮮を旅して來た著者の頭に殘つた印象——それは山でもなく、川でもなく、やはり我等人間の心であつた。强いものの氷のやうな心、弱いものの燃ゆるやうな心、やさしく美くしい心、あはれに醜い心のいろ〳〵であつた。

其の樣々な收穫は著者獨得のユーモアの中に辛辣な諷刺と皮肉な批判を交へた一大創作「薄氷を踏みて」を薦む。

四六判四六〇頁
總布裝函入

定價貳圓五拾錢
書留送料十七錢

三宅雪嶺氏序
高田雄種氏序
（訂正三版）

聖雄ガンヂー

金貳圓七拾錢
書留送料十七錢

白刄も榮譽も富貴も牢獄も動かすことの出來ぬ力强さを持つた彼聖ガンヂー。奇蹟のやうに現代に生れた彼の總てを見よ！

東京日本橋數寄屋町
振替東京一七五番

大阪屋號

電話三七三七番
本局四二八九番

知識階級と無産階級の相互抱合論

自然淘汰に代はるべき社會淘汰

杉森孝次郎

無産階級とは、筋肉勞働階級の現代に於ける一名稱であり、知識階級とは、かならずしも頭腦勞働階級の別名ではなく、有閑階級の一部をも意味しうることばであるとするならば、無産階級と知識階級とは、現代に於いて、抱合すべき必然性をば持たない。

無産階級は、それが筋肉勞働階級の別名である限りに於いて、一とつの社會奉仕階級だ。物質善を使用し、消費することとは、社會の各成員に、すなはちすべての人々の自己必要に屬する事柄だ。しかるに、その物質善に存在を與へ、またそれを消費者の手にまで交付する力のうちには、筋肉勞働が一大要素として確實に必在する。筋肉勞働階級の別名としての無産階級が一大社會奉仕階級たることは明白だ。

筋肉勞働階級が一大社會奉仕階級であるにかかはらず、適當に社會から報謝されてゐないとするならば、義憤と、社會的不正に對する意識とが、すくなくとも筋肉勞働階級自身の心内に發動すべき事情と理由とがあるといはねばならん。現代に於ける頭腦勞働階級が、精神善の生産者及び分配者であるにかかはらず、また適當に社會から報謝されてゐないとするならば、物質善と精神善との差こそあれ、要するにそれらの生産者及び分配者として社會奉仕階級に屬する筋肉、頭腦兩樣の勞働階級は、無奉仕有報謝の階級に對して、共同戰線を持つべき理由があるといはねばならん。

いはゆる知識階級のうちには、精神善の生產または分配、要するに生產に從事しつつ、社會から適當に報謝されてゐない部分もたしかにある。しかしたがら、現代のいはゆる知識階級のうちには、單にあるかたちの教養を有する有閑階級にすぎない部分もある。この部分と無產勞働階級との間には、前者は精神的にも物質的にも社會奉仕せず、後者はすくなくとも物質的に社會奉仕し、前者は奉仕せずして報謝され、後者は奉仕して報謝されないといふ本質的差別がある。

また、現代のいはゆる知識階級のうちには、無產といふ點に於いて、すなはち貧といふ事情に於いて筋肉勞働者と共通であり、奉仕といふ點に於いては、筋肉勞働者はたしかに有資格だが、自分たちの方は、眞實には無資格であり、不合格であるといふ部分がある。筋肉勞働者としての無產階級か、この種類の知識階級から同情されることは、義務を遂行しつつ權利を主張する人々が、義務を遂行せずに權利を主張する人々から同情される一形だ。すくなくともわけのわかつた抱合などはそこに期待されない。

社會に奉仕する階級は、社會から報謝されるべきだ。報謝されることを目的として奉仕すべきではないが、奉仕された社會としては、その受けた奉仕に對して報謝すべきだ。勞働階級が無產階級の別名であり、無產階級が勞働階級の異稱である現狀は幼弱でなければ不具だ、もしくは疾患だ。奉仕階級は有產階級であり、有產階級は奉仕階級であることが健康態だ。產はそれだけの自由を意味する、しかるに、人にとつて最も必要な、貸貴なものは、疑ひもなく自由だ。

功勞階級と享產階級との間には完全なる原因結果的一致關係が常に造られるべきだ。筋勞者も心勞者も、かれらが社會の必要を滿たす限りに於いて功勞者だ。ただし、筋勞者自身の範圍內に、また筋勞者と心勞者との間に、さらにまた心勞者自身の範圍內に、精確には、享產の多少の必要別が、その功勞の質及び量を標準とし、及びその他の合理的な人間的社會的諸種の事情を標準として、當然認識されん。

現代及び殊に近き將來にわたつて發展すべき偉大なる社會淘汰の原則と方法は、これを要するに、個人的眞必要とこれに對する社會的供給との間なる平等關係を目的とする。能力と機會との間、また功績と報償との間なる平等關係の如きは、それのなかに完全に含まれてゐる。共產主義も、社會主義も、階級革命も、この大努力の多少不完全なあらはれにほかならない。

人は、だれでも、かれ自身の生產態に於いて自己を發見し、かれ自身の消費態に於いて社會を發見する。社會內に、抱合す

べき階級があるとするならば、もしもその社會が、生産すべく消費する人々からのみ成り立つてゐるならば、それらの階級は、その社會内のすべての階級以下のものではありえない。現代に於いては、しかしながら、いはゆる社會内に、消費すべく消費する人々がある、それらの人々の一群としての階級がある。怠惰なる富者の階級がある。これを上ても、潔癖的に純化するには及ばないが、今日の事實として、その階級が、かたの[illegible]な程度に肥厚し、化膿し、腐爛してゐるから、切開、廓清の社會的必要が、またその程度に應じて熟した。社會革命的觀念と、その觀念の行動化とは、この意味に於いては、時務中の時務に屬する。

無産・知識兩階級の提携を提唱す

安部磯雄

我國に於ける勞働の歴史は英國の勞働史と非常に趣を同じくして居るところがある。英國に於て最初に勞働運動を興した者は多くは大學の教授とか、或は相當の地位を占むる政治家であつて、所謂智識階級がその指導者であつた。それが後になると勞働組合も出來るやうになり、勞働者の教育も進むやうになつて來たので、勞働者は最早や智識階級の助けを借りる必要がないといふ風に考へるやうになつて來た。實際勞働者の側に於いても其組織が巧く出來て、彼等が獨立して行けるやうになつたので、當然智識階級も手を引いて、餘り勞働組合のことなどに就いて其世話を燒くことをしないやうになつた。然るに日本の勞働の歴史もそれと同じやうなことを繰り返して居る。日本に於ても勞働問題の歴史を溯ると大分古い所まで行けるやうに思ふが、併し乍ら本當に今日の所謂勞働組合の出來るために盡力した人々の運動が勞働運動の初めと見ればそれはさう古いものではない。私の見る所では日清戰爭以後、即ち明治二十七八年後にさういふ運動が主として起つたやうである。其時の指導

者は何ういふ人かと云ふに、一方には資本家であつたが佐久間貞一といふ人が活動して居たし、また島田三郎氏などの顔も見えて居た。其時分には矢張勞働組合を作らう、先づ團結から始めやうといふ考へで、此運動には其他の智識階級の人々も多く加はつて居た。又明治三十年頃になると片山潜君などが勞働者の團結を作ることに盡力したし、其後引續いて今日に至るまで或一部の智識階級の人々は直接間接に勞働運動に關係を持つて居るのであるが、現在では鈴木文治君などが此方面に働いて居るし、其他官立、私立の大學の出身者で勞働運動に携はつて居る人が大分ある。然るに五六年前から勞働運動がやうやく盛になり、組合もあちこちに出來るやうになり、勞働階級の努力が世間に認められるやうになつて來た。すると矢張り日本の勞働階級にも自分の手で總てをやつて見たい、智識階級の助けは要らない、寧ろ智識階級からいろ〳〵の世話を受けるのは恥辱であると考へる者が出て來るやうになつた。五六年前であると思ふが、或勞働者の團體で、神田の青年會館で演説會を開く企てがあつた。私も辯士の一人として依頼を受けたが、私が承諾した後に勞働者側から手紙を寄越して、それに依ると自分達は一切勞働運動に關しては智識階級の助けを要しない、若し智識階級に依頼することになればそれは勞働者の無力を表はすものであるから、演説會には勞働者以外の者は頼まないことを主張したのであるが少數で破れた、たゞ其事を貴方にまで通知して置くといふことであつた。私はどういふ態度をとるべきかと考へたが、併し約束をした後であるから、兎に角其演説會場に出席して、其場で私に送られた手紙に對する考を述べた。それは將來勞働者が智識階級の助けを借りずに勞働運動をやることが出來ればそれに越したことはないのであつて、我々は其時に進んで勞働問題に對して喙を容れたいとは思はぬ、出來るならば勞働者諸君は自分の力で勞働問題を解決して貰ひたいといふ意味のことであつたが、其頃から大分勞働者が智識階級に對して快く思はぬ傾向があつた。近頃になつても五月一日のメーデーの示威運動に、勞働者側の意見か、ことによると或は警視廳側の意見かも知れぬと思ふのであるが、智識階級を入れないといふことを考へて見ると、日本の勞働の歴史は英國のそれと經路を同じくして居ることが察せられる。

右に述べたやうな傾向が勞働階級の智識階級に對する態度を語るものとするならば、それは少し極端に行き過ぎて居るやうである。勞働運動になるべく智識階級の援助を求めまいとする態度はいゝが、絶對に智識階級を排斥する必要はない。然し斯ういふ傾向を來したのには特殊の原因があるかも知れないので

あつて、それは近頃大分智識階級及び準智識階級の人々で勞働運動に携はる者が増えて來たが、私などは實際の勞働運動から遠ざかつて居るから、明言は出來ないけれども、そこに一種の野心を持つて勞働運動に參加する者があつて、一時勞働ブローカーと云ふ言葉もあり、斯くの如き階級が出來て勞働者に關係を持つやうになつたとが自然勞働階級の反感を買ふに至つたのではあるまいか、少くとも勞働階級が智識階級に對して疑の眼を向けるやうになつた一つの原因が其處にあるやうに思はれる。これは特別の原因であるが、併し此原因がなくとも勞働階級は智識階級から離れ易い傾向を持つ。人間に共通の性質として人は餘りに他人から指導されるとを好まぬ。無力の時には止むを得ず他人の助けを借りるとがあるけれども、人は自己の力で立てるやうになれば、他人の指導を排して自分の道を一人で行かうとするやうになるのであつて、之れは人間の自然の情であるが、日本に於ても勞働組合が相當の年齢を經た今日、智識階級の力を借りないで勞働者は自己の進むべき道を獨りで行かうとするやうになるのは當然である。猶我國民の共通の缺點として團體運動の困難なことが智識階級と勞働階級の提携を一層困難ならしめて居る事實があるのであるが、之れは單に智識階級と勞働階級の間の問題丈けではない。同じ勞働組合の間に於ても提携はなかなか難かしく、一つの組合の中に於てすら一致協同の精神は容易に見出せないが、其原因は國民の訓練の不足に依るのであつて、それが現在に於ては總ゆる團體行動を不可能ならしめて居るのであるが、將來此點に考を廻らない限り勞働階級と智識階級の提携を妨げることになり易いのである。併し此二つの階級は其中の孰れが他の一方を排斥すべきものではなく、將來兩者は互に相提携すべき運命を持つて居るのである。勞働階級も、智識階級も大體に於て今日の資本制度に反對の態度を示して居る點に於て、兩者の立場は共通であると云へる。勞働階級が資本制度に反對の立場にあるのは云ふまでもないのであつて、勞働運動の目的は實に産業的デモクラシイの實現に在る。彼等は資本階級を戴かないで産業の權利を直接に自己の手に収め、何も彼も自分達の力でやつて行かうとするのであつて、勞働者の天下を現實にしやうとするのが其理想であり、それは世界共通の傾向でもある。智識階級の立場に就いて云へば、無論智識階級と云ふ言葉其物に制限があるのであるが、今それを大別して一方は自然科學を研究する人々、一方は社會科學を研究する者であつて、前者は純粹の學者で現在の社會組織や社會制度の如何といふとに餘りに興味もなく、或は全然沒交渉であり、また所謂智識階級の半ばは實際に於てどちらつかず

の態度不明であるが、後者の社會科學を研究する大學若くはそれ以外の學者達は多少に拘はらず現在の資本制度に滿足して居ないのが現狀である。極端に云へば社會科學を研究して居る人々は口では兎に角心では社會主義者である。彼等は資本制度を倒して新社會を建設することが希望であつて、個々の點に於ては違ふけれども、大體に於て彼等は社會主義の理想を信奉する者である。殊最近文學者の間に社會主義者の增えたことも顯著な事實であるが、斯くの如く考へて來ると勞働階級と智識階級とは殆んど同一の目的に向つて進みつゝあることが分るのである。此二つの階級の中其一方が他を排斥するといふことは有り得べからざる筈であつて、同じ目標に向つて進む以上互に提携することが其本來であり、互に乖離することは兩階級にとつて非常な不幸であると云はなければならない。

又勞働階級も智識階級も同一目的に向つて進むけれども其爲す所の仕事には自ら分擔がある。勞働階級は其數の上から云つて實行的能力を多分に持つ。愈々世界改造の實行に際しては勞働階級の承認がなければそれは困難であつて、いくら智識階級が騷いで見ても其僅かな力ではどうすることも出來ないのである。勞働階級の中にも激烈なのは暴力に訴へても社會改造を遂行しやうとする者があるが、今後の勞働階級の執るべき正しい道は投票の力に依つて議會に多數を占めることでなければならないのであつて、そこに私は彼等の實行能力を認めやうとするのである。彼等が結束すれば議會の立法權は自ら彼等の掌中に收めることが出來るのであつて、そこに勞働階級の强味があるのである。然るに智識階級の任務は思想の宣傳に在る。之れは勞働階級の未だ手の屆かない所であつて、思想の宣傳は實に智識階級の特權であり、他の階級の追隨を許さない所でもある。彼等は經濟學の原則や政治の原則にも通じ、社會主義の主張する所は勿論、全世界に於ける勞働運動や社會主義運動の實際にも通じて居るのであるから、彼等が其書物に依り、講演に依り、其主義を宣傳することになれば、世の中の多數の人々、又は勞働階級に對して强ひて反對の立場に立つのでもなく、或は進んで其運動を援けやうとするのでもない中立の立場に在る人々をして、其宣傳に依つて次第に勞働階級に接近せしめることになり、そこに一つの輿論が生れて來ることになる。即ち智識階級は輿論を指導する力があるのであつて、そこに此階級の强味が存するのである。此智識階級と勞働階級とは昔の諺の、車の兩輪の如きものであつて、二つの階級は互に相支持することが必要である。

私は今英國の實例に就いて玆に述べて見たいと思ふのであ

る。英國には智識階級であつて社會主義を信奉して居る團體がある。それはフェビアン・ソサイティであつて、其創立は千八百八十八年頃であるから、既に三十年以上の歴史を有つて居る。フェビアン・ソサイティは學者、思想家であつて熱心に社會主義を信ずる人々の團體で、其會員の中、日本に於て最もよく知られて居る代表的の名を擧げれば、經濟學者、政治學者としてシドニイ・ウェブがあり、現代の劇を書く文學者としてバーナード・ショオがある。此團體はもう三十年以上も社會主義の宣傳に竭して居るが、其最も有効な方法として、それに關した大小の書物、或は安價な小冊子等種々な出版をやつて居る。これは智識階級の團體の社會主義的團體としては世界に類がないかも知れぬ。此フェビアン・ソサイティは其會員の増えるに連れて思想の宣傳丈けでは足りなくなり、實際政治にも口を出す必要を感じて來て彼等の中の或者が政黨を組織することになつた。フェビアン・ソサイティからは全く離れて、社會主義を政治に應用する目的で政黨が出來、それが所謂獨立勞働黨であつた。而して此獨立勞働黨に屬し、代表者として議會に出て居る多くの者はフェビアン・ソサイティの會員である。然るに此獨立勞働黨の出來た時分には一方に勞働組合も發達したばかりでなく、今では四百萬以上の組合員を有つ勞働組合が社會主義に傾き、社會主義の主張を採用して居るが、其勞働組合からも議員が出て、其主張も獨立勞働黨と同一である點から、智識階級の作るフェビアン・ソサイティの出店たる獨立勞働黨と勞働者代表者とが合同することゝなり、それが今日の勞働黨である。これは一部は智識階級のフェビアン・ソサイティ、換言すれば獨立勞働黨から出た人と、一部は勞働組合から出た者との合同であつて、英國に於てはかういふ聯合體が存在して居るのである。即ち智識階級と勞働階級とが、渾然として一團體を形造つて居る。そして勞働黨は決して勞働者のみのものではなく、大多數はさうであるが、敢て毛嫌ひをせず、智識階級を排斥する樣な偏狹な心を有つて居ない。今日の勞働黨は此前の總選擧が行はれるまでは黨員六十何名かであつたものが一躍百四十名以上となり、シドーニー・ウェブも議員となり、現に勞働黨の一員である。日本に來たバートランド・ラッセルは落選したが、彼が若し當選して居たならば當然勞働黨に入つたに違ひない。斯くの如く英國に於ては勞働者が智識階級に對して反感を有つて居ないばかりでなく、兩者は相提携して政治の上に活動して居るのである。

然るに現在の日本に於ては智識階級と勞働階級の兩階級は提携することが一層必要である。換言すれば今述べた英國などの場合に於けるよりも此兩階級の提携は更に一層必要な理由があ

るのである。英國に於ては勞働組合が有力であつて、教育機關の如きも組合の手で具はつて居る。そして若い勞働者達をそこで教育することが出來るが、日本に於ては勞働組合の力が微弱で、勞働者のために十分な教育の機關も具はつて居ないのであるが、今勞働者のために夜學でも開くことになると早速必要なのは教師であつて、幾ら智識階級を排斥しても學校關係の智識階級の援助を受ける外はない。東京や大阪などに於ても勞働學校が設けられて、勞働者が智識を求めやうになつたが、教師は大概大學教授か或は其卒業者である。で、何と云つても今後十年や二十年は未だ智識階級の援助が必要であつて、勞働階級は智識階級を仲間に入れて、彼等に對して好感を持つやうにしなければ今の所勞働階級にとつて損であると云はなければならない。では現在に於ては智識階級のみが勞働者を援けて、智識階級は勞働階級から何物をも得て居ないかと云ふに決してさうではない。智識階級も種々な意味に於て勞働階級から得て居る所が少くない。例へば智識階級が勞働問題を研究しやうとしても、日本に於ては政府の研究材料も少く、民間には大原社會問題研究所のやうなものがあつて、調査報告をして居るが、未だ研究資料が豐富でない。斯ういふ時に學者は勞働階級の中に直ちに入つて行つて、そこでいろ〳〵の材料を求める時、セコンド、ハンドの材料でなく、ファースト、ハンドの生た材料が得る事が出來るのであつて、斯ういふ點に於ても智識階級は利益を得て居るのである。今云つたやうな意味に於ても、智識階級と勞働階級とは相互扶助で行つて居るのであつて、それは認めなければならない事實である。

以上大體に於て私は智識階級と勞働階級の二個の階級が今日提携したければならない理由を述べたが、最後に此兩階級に對して注文と希望を懸けて置きたい。先づ勞働階級から云へば寛大な心で智識階級に對することである。勞働階級が智識階級に指導されるといふ考へを持つことはよくない。指導といふ言葉は一方の服從を意味するので惡い感じを作ふけれども、それは勞働學校に於ける場合に於てのみ用ひられ得る言葉であつて、今日では勞働階級の中にも指導者たる資格のある、教育あり、見識のある人達が續々輩出して來るのであつて、最早智識階級が勞働階級を指導するといふ時代ではない。指導されると思へば惡いが、對等の位置に立つ者と考へれば勞働階級の方から智識階級に對して疑の眼を以て見る必要はなくなるのである。で、兩者は對立提携して、其分擔に於て、前に云つたやうに一方は實行、他方は宣傳といふとになれば、どちらが主も從もないのであつて、また當然さうならなければならないのである。英國で

シドニー・ウエブが出たと云つて、それを尊敬して勞働階級が彼の云ふがまゝになるといふのではなく、彼は學者であるから唯だ相談役として、顧問として働くまでゝあつて、何もそれが勞働階級の不名譽でも何でもない筈である。又今日は既に時勢が一變して居るのであるから、智識階級もそれに鑑みて、勞働者は無學であるから、教へてやらなければ獨立が出來ないといふ風な傲慢な考へで勞働階級に臨むのは間違つて居るのである。勞資戰に於ては智識階級は自ら軍師であると考て、帷幄に計を廻らす軍師氣取りで勞働階級に臨むのが誤つて居るのである。勞働階級も智識階級も飽くまで對等であつて、相互扶助で一つの目的に向つて進まなければならないのであるが、勞働階級としても、多くの人の中には勞働運動の旗色が好ければ所謂勞働ブローカーになる者も増えるのであるから、勞働者の方でよくそれを見分けて、徒らに智識階級に對して反感を持つべきでない。私が見る所でも、此人なら野心もなく、眞に勞働運動のために盡すことが出來ると思ふ人の名を二三擧げることは出來るが、知らない人の中にも斯の如き人が多くあるべきであつて、偶々勞働ブローカーのあるを以て、それが爲めに總ての智識階級を同樣に見做すのは間違である。

若し、我國に於て普通選擧が行はれるやうになれば勞働階級と智識階級の提携は益々必要となる。一部の人は普通選擧に重きを置かないけれども、普通選擧は將來我國の勞働史の上に於て重要な地位を占めるものである。普通選擧が實施された曉に、勞働階級が投票を正しく用ひれば、勞働運動は一躍成功の域に達することが出來る。其曉には純粹の勞働者の代表があれば議會に送るべきである。又智識階級の人で十年一日の如く勞働運動のために戰つて居る者があれば之れ亦議會に送るべきである。若し勞働者と智識階級とが全部提携して同一の目的のために投票すれば其大部分を選出することが出來るであらう。勞働階級、智識階級其孰れにも偏せず、英國の如く政黨運動を起すやうになつても、此兩階級は何處までも相提携して、同一目的の實現に向つて進まなければならない。

兩階級の關係に對する私の考

有島武郎

知識階級と無產階級とを區別するとは、嚴密に云へば、意義を成さないと思ふ。なぜならばこの區別は、例へば物の大と小、形の長と短、或は量の重と輕といふやうな意味の、對立的な關係を表はしたものではないからである。元來知識階級とは思想上の一つの階級であり、無產階級とは經濟上の一つの階級であるから、兩者の間には何等思索上の聯絡が無いのである。單に知識と云ふならば、必ずしも書物や學校の教室から得たものばかりが知識ではない。無產階級に屬する下駄の齒入れ屋が有つてゐる技術上の知識は、如何なる學者と雖も有つてゐない知識である。かういふ意味の知識ならば、無論無產階級の人々も有つてゐる。更にさういふ職業上の知識でない、謂はば容智とでもいふべきものならば、現今の所謂學問をしたものに之を缺くのが少くなく、却つて無產階級と稱せられてゐる人々の間に、銳く美しく磨かれた容智を有つてゐるものが多い。であるからこの意味から云つても、知識階級といふ語は不正確であると思ふ。

然らば知識階級とは如何なる階級を指して云ふのであるか。吾々が單に漠然と知識階級と云ふ時は、學校の教室に於いてとは云はないまでも、少くとも書物や學者を媒介として授けられる知識を有つ階級、といふ程の意味である。

さて、かういふ內容を有つたものが知識階級であると前提して、この階級と無產階級との關係を考へて見ると、斯くの如き意味の知識階級となる爲めには、實生活の上の餘裕が必要である。この實生活上の餘裕が必要であるといふ點で、知識階級は自ら無產階級と違つて來る。更にこの階級に屬するものは、有產階級のものか、又は有產階級から何等かの恩顧を蒙つてゐる人々である。現在のやうな世の中では、有產階級の庇護の下に立たなければ、前に述べたやうな知識は得られないのである。かういふ性質を有する知識階級が、新興階級たる無產階級の人々から、疑惑の眼を以つて視られるのは、當然のことと云はな

ければならい。

ところで今述べた通り、知識階級には有產階級の人々と、有產階級から何等かの庇護を受けてゐる人々とがあるが、數に於ては、後者が遙かに大多數を占めてゐる。これらの人々は有產階級の庇護の下に於て教育され、知識を授けられてはゐるが、一度びその營んでゐる實際の生活を見れば、無產階級の人々と毫も異る所がない。卽ちその有する知識に於いては無產階級と云はれなくとも、その實生活に於いては明かに無產階級である。これが所謂ブルジョア的プロレタリアートと稱せられるものである。

このブルジョア的プロレタリアートは、今後社會生活の上にどういふ働きを爲すであらうか。卽ちその人々が自分達の庇護を受けた有產階級の爲めに犬馬の勞を竭くして、自分もその階級の一人とならうと努力するか。或は自分の實生活の實感から出發して無產階級に投じ、その階級と共に生活の改善に着手するか。彼等の前にはこの二つの途が遺されてゐると思ふ。

現在までの狀態では、有產階級が知識階級に賴むところが多かつたのは事實である。つまり有產階級の人々は、自己階級の福利を增進する爲めに、無くてならぬ武器として迎ふる必要から、知識階級の人々を需要もし、好遇もしたのである。然るに現在ではその數が激增し、動ともすれば供給が需要を超過する傾向を示して來た。その爲めに知識階級の間に生活上の不安が起つて來た。この生活の不安は、やがて知識階級の人々をして自分達の地位がどういふものであるかを反省せしめる機會を與へたのである。彼等は今日まで自分達が調法がられて來たのは、その實力が支配階級の立派な要素であるからであると考へてゐたが、自分達の數が增加すると同時に、要素ではなくして、實は道具に過ぎなかつたといふことを自覺するに至つた。言葉を換へて言へば、自分達は有產階級の中の人間ではなくして、その階級を利益する爲めに使はれた生產機關、或は資本と同じき一種の物的材料として用ひられて來たのであることに氣づいたのである。今後この階級の數が增加するに從つて、斯くの如き自覺はますます高められ、實際に於て生活の餘裕が縮少されて來れば、當然無產階級の同情者となり援助者となるべき强い傾向を有つてゐると信ずる。

第二の問題は知識階級は無產階級の生活更新運動に對して、今後どれだけの貢獻を爲し得るかといふことである。現在に於いては、知識階級には尙ほ一つの矜りがある。それは彼等の有する組織的な知識、アカデミックな知識を以つて、無產階級の缺いてゐるところを補ひ、無產階級の指導原理を作り出すこと

が自己の任務であるといふ氣持である。この氣持が、彼等をして無産階級運動の指揮者、若しくは最前線を勤めさせたのである。一千八百七十年代のロシアに於ける年若き知識階級の人々の「農民へ」といふ運動などは、その好適例である。かういふ一種の英雄的な氣持で働く知識階級は、今日でもやはり少くないと思ふ。けれども實際に於いて、アカデミツクな教養を受けたものと、凡ゆる知識、凡ゆる感情を、その痛烈なる自己の生活の實感から體得して來たものとの間には、どうしても踰えることの出來ない根柢的なギャップが介在してゐるやうに思はれる。

であるから今後の知識階級の有つべき大なる覺悟は、私の考に據れば、彼等が如何なる方面に向ふにせよ、自分の自覺によつて起された運動なら、それが必ず無産階級の利益になると想像するのは由々しき僭越である、といふことを認識するに在ると思ふ。彼等の爲すところの貢獻を、取ると捨つるとは偏へに無産階級の權能に屬する。取捨選擇の結果、その貢獻が幸に無産階級によつて、生活の更新を行ふべき武器とされることもあらう。けれども若しさうして正しく拾ひ上げられた場合でも、それは無産階級の叡知を表はす結果とはなつても、決して知識階級が誇るべき功績とはならない。かかる場合に無産階級が、これを與へたものに對して感謝する念を起すならば、もとより感謝するを妨げないが、知識階級自身が、それを與へたといふ意識を動かすのは、僭越な態度であると思ふのである。五十年ほど以前に於けるやうな英雄的な氣持などは全部捨て去つて、今後はもつと違つた態度を執つて無産階級に臨まなければならない。

これが大體知識階級と無産階級との關係ではないかと思ふ。

只「人」としての自覺に待つ

文學博士 三宅雪嶺

知識階級も無產階級も時代及び土地によつて違ふが、今日までのところ、前者が政治關係に現はれ、後者が經濟關係に現はれて居る。古來種々の變遷あるにしても、近世新世界の發見と共に經濟の發展し、前に全く無關係と見られた上下階級の相接近するを覺え、今後更に接近の著るしきを加へまいかと考へられるを以つて新現象とする。

知識階級は支配階級より派別したものであり、當初支配階級が殆んど全知全能を示し、其の首長たる者は聖人と云ふやうな名稱を下され、其の當時の人に較べ、何でも知り何でも行ひ得るとなつて居つたのが、漸くにして業務を分擔し、其の中に知識を擔任するのが起るに至つた。豫め意識して定めたのでなく、又必ずしも其の事實あつたのでなく、後に傳說を集め、想像を加へたところあるが、何にせよ君主即ち聖人、聖人即ち君主と看做すべき時代があつた。支那で堯舜の名に於いて之を稱して居る。若干部落の聚合する處では、之に似たものがあらう。殷の湯王が伊尹を輔佐にし、周の武王が太公望を輔佐にしたと云ふのは、實行と知識との分れたのを示して居る。支那では多くの事が早く成立し、それが例に成つて後に傳はる如く、實行力の秀でたものが知識の秀でた者を輔佐にし、少くとも斯くするに努める事が歷代の紋切形になつた。漢の高祖に張良、蜀漢の先主に孔明、唐の太宗に魏徵など、それぞれ型通りになつて居り、成吉思汗でも支那方面に耶律楚材が居る。是等は皆型に成つたのであつた。社會の發達するに伴ひ知識を傳播するを職務とする者が增加し、君主に用ひられると否とを問ふことなく、孔子や孟子や、君主を輔佐するの意があつても、適當の君主が無く、知識の傳播を職務とするやうになつて居る。後の學者は之と傾向を同じくしつゝ、分業に分業を生ずるに及んだ。

ところで眞に權力を握るには、兵力とか操縱とか、普通に實行力とする所を必要とすると同時に、密かに勢を察し、宜しきに處するの知識を備へねばならず、力が有つても無鐵砲に突出し、失敗するのが少くなく、絶えず之に知識を供給し、能ふ限り最少抵抗の道を進むやうにすべきである。後に學問の必要を認めるのも之に關聯して居る。然し如何に君主が、輔佐を重んじても、要するに君臣の關係を以てし、即ち明かに優劣を區別して居る。輔佐は劣位に居ると知られるが、自ら君主を利用すると考へるのがあり、自ら考へなくても、他よりさう考へるのがある。伊尹が湯王を使つて世を平定したと解し、太公に對してもさう解する。張良が高祖に使はれるよりも、高祖が張良に使はれたとする。此の關係が何時迄も權力者と知識階級とに纏はつて居る。原はと云へば性質及び境遇よりして、實行を欲する

のと、知識を欲するのとに分れる。實行とて豫め考へて之を行ふのでなく、何でも力任せに他を壓倒しようとするのであるが、さういふ力も養成次第で增して來る。何でも控へて居らず、進んで戰ひ、爭つたり打つたくりしたりする。知識に興味を覺えた方では、駈け爭ふを多く好まず、力を以て進んで來る者あれば、之を避けようとする。花ならば實を結ぶか、八重になるかと云ふ所である。實の生る花は見榮えなく、花の美くしいのは實が生るか生らぬかである。同じ力でも、實に化したり、瓣に化したりする。權力者は力を以て押倒し、自ら大なる宮殿に住居し、百官を隨へ、天下を我が物としたとして滿足する。知識の優つた者はさういふ譯には行かず、さうしようとも思はず、輔佐となれば結構、祿も貰へず、貧乏暮しするのが少くない。權力者から觀れば一代の碩學といふのも憐れな者であつて、之に何等かの位置を與へれば、喜んで働らく。高位高官はさまざまな情實で無能無識の徒に與へ、それが連りに威張り散らし、學者とか物知りとか之に從ひ、お剩り頂戴といふ姿である。事があれば此の輩は、閑に束ぬべきものとして捨てて置く。之れ學者や物知りや、知識が有つても、單に知識を職とし、知識を樂しみ、進んで欲する所を求めようとするの力を缺くからである。頭腦の大部分が知識化し、突進力を失つて居

る。

それで優劣が判然定まつて居るかと云へば、さうでなく、權力者の盛んな間こそ懸隔が明かなれ、一度事變が起ると共に、權力者が悲慘な狀態に陷るを免かれぬ。高位高官といふ連中がさうなつて了ふ。低い位置に居る者は安全であつて、變亂は到底免かれぬとして居つたとし、或は新に起る權力者を指導するやうな事がある。直接に指導しなくても、判斷の參考となるべき事がある。倒れた權力者は囚はれたり殺されたり、之に使はれて居つた學者の意見が用ひられる事がある。突進力を以て權勢を得たものの、何うすればよいかが判らず、そこで知識ある者に尋ね、或は古い書類を引き出すに及ぶ。學者にもいろいろあるけれど、老子とか孔子とかになつては、一時に盛衰するものと違ひ、長く參考し得さうに思ふ。之を利用して民心を得やうとするのもある。學者の多くは何程の力無けれど、若干人が尊敬する所を藉りて、學問の力を吹聽し、學問萬能といふやうに云ひ振らす。權力を得、人を使役するのも愉快なれども、知らぬ事を知るのも樂しみであつて、學問が漸次普及し、大學者・小學者・准學者が根を張り、其の贊成すると否とが權力者の位置に關し、權力者に於いて、如何に之を懷柔するかが考へものとなる。滿洲が興つた時、康熙帝や乾隆帝や、學者を懷柔

し、之を愚にしたと云はれて居る。學者は愚にされるけれど、それで捨てて置く事が出來ず、衰へようとする權力者が其の援助を求め、興らうとする權力者が亦其の援助を求めたりする。現在の支那では督軍が權力を爭ふの外、學者准學者が理窟を捏ねるのは、政府に取つて最も面倒である。

支那では知識と云ふても、經書と諸子百家と云ふやうなところであつて、何の時代をも同じく看做し、特別に進步發達に益するやうな事が甚だ少い。近年遽かに他國の學說を輸入し、盛んに之を主張するが、民國の文明文化に何程の益を與へるかは、今後の經過に徵して知るの外はない。他の國は之と違つて居るけれど、知識階級が權力者より觀て憐むべき狀態であり、それが權力者に優るかに認められに至つて變りなく、支那よりも文明文化に貢獻するところが知れ渡つて居る。歐米でも活動家といふ側から見て、學者は小理窟を捏ね、薄給に甘んじて居るのを嗤ふが、學者側で屈せず、自ら眞の帝王であると云ふのがある。スペンサーは、普通の帝王は帝王の力無くアダム・スミスの如く國是を一變してこそ眞の帝王と云へると稱したが、それは見樣による事とし、本年スミス誕生二百年祭が行はれるところ、帝王の名ある者が多く忘れられたのに對し、知識の力の優るを示さぬとせぬ。知識は力と云ふ語は此處で確められて居る。

然し知識が力でない場合も多く、無駄な學問して生涯貧乏するとは何の因果ぞと嘲けられる事がある。スミスが國家經濟の權威と成り得ながら、己れ一家の財政に窮したのも、不思議がられる。不思議でなく、寧ろ有り勝ちである。知識を樂しむやうになつては、富貴に對する興味が薄く、興味がないので富貴に成れず、成れなくて心配もせぬ。俸給を大事がり、俸給を上げるようにと運動したりするが、それも欲の寡いのであつて、纔かばかり增して滿足する。其處が意氣地なしと看られるところであつて、場合によつて面倒を起す所以である。收入が少くて困つて居るが、それだけ身の振り方が易く、機會あれば事を起すを厭はぬ。支那で學者を懷柔したのが、歐米で議會制度となつたとも云へる。支那では學者を諫議太夫にしたりしたが、議會は諫議を擴張したやうなところがある。やはり湯王に伊尹あり、武王に太公あると云ふ關係であつて、知識が一面から見て力無く、他の一面から見て力が有る。知識階級と云ふべきは、富貴者流から見て貧賤であり、それが富貴者流を動かすの力を具へて居る。平生は特別の事なく、權力者に異變ある場合、それが著しく現はれる。マルクスは富貴者流から見て全く云ふに足らず、勝手な熱を吹くに過ぎぬとしたが、今露國皇帝

が消滅し、權力者が之に據つて政治を行はうとして居る。

皇帝で知識の秀でたのが無いではなく、マルクス・アウレリウスの如き、眞に傑出して居るが、さういふのは皇帝の驕りを好まず、頗る質素にして居る。日本で德川光圀は、碩學と稱するに足るが、生活の質素な事、現に遺物を見て察せられる。知識を樂しめば、力を以て富貴を得ても、富貴を樂しむ念に薄い。力が無ければ富貴を諦めて了ひ、尚ほ求めようと足掻くのは、未練氣の失せぬのであつて、富貴に成つたとて知れたものである。公爵になつたりする事は出來ぬ。男爵になるなど餘計な骨折りと見える。一代の碩學で富んだのが無いでなく、英國のグロートやラボックや、銀行家で學術上に立派な業績を成し遂げたが、一般に富まぬものとせねばならぬ。富むべき力が無いにもよるが、長い眼で見れば、頻りに富んでも、無意義なやうに考へられる事ないでない。獨墺露三帝國の始末を見れば、富貴も一場の夢と思へぬでない、今尚ほ他に資本萬能と云ふべき國があり、金の多寡に重きを置くが、幾百年の後それが如何になるか、疑を免かれぬ。

ところで現在の支配階級は、昔、士農工商と分けた時、士に屬する部類であつて、農工商を賤しみ、其の雇主をも輕んずる位であり、雇人の如き、齒牙に掛けぬ程であつた。農工商で金有つても知れたもの、金無い手合は相手にせず、非人と呼んだりした。奴隷の如き、物品同樣に取扱はれた。日本で足輕と云へば貧乏暮しであつて、それが農工商を叱り付け、非人は土足に掛けて構はなんだ。無産階級は常職無いか、有るとして農工商に雇はれ、雲助とか立ちん坊とか云ふとこであつて、雇主になつたとて士に頭が上らず、いつそゴロついて世の中を送るのが氣樂であるとしたやうなところがある。それが四民平等で徴兵に取られ、一通り讀み書きもするとなつては、前に及びもつかぬ階級と見たところに對し、疑を挾まずに居れなくなつて來る。日本でも最下級から最上級に上つた事、豐臣秀吉及び其の時代の多くの大名の如きがある。明治維新に百姓から伊藤博文が出て居る。考へて見れば運命次第、何うなるか知れぬとする。日本では甚だしいのが少いけれど、歐米では普通になつて居り、米國でログハウスからホワイトハウスへ移るのがいろいろあり、剩へリンコルンの如く傑出したのがある。無一文で何處まで働き得るか測り知られぬといふ事が、實物を以て示される。機械が進歩し、貿易が擴張し、大富豪が現はれるだけ、貧乏生活がしみじみ身に沁みるを覺える。昨年まで同じ仲間であつた者が、一躍大邸宅を築き上げたと見ては、如何に貧富が分れるかを考へずに居れぬ。貧乏人が富豪と成り得るを知るの

侍、何故に同一の能力で貧乏人になつたり、富豪になつたりするかを疑ふ。前に貧乏人は全く捨て育ちであり、物の分らぬ者となつて居り、又實に分らぬのが多かつたが、今日文明國と稱する所では、貧乏人にも昔の知識階級程の知識がある。昔の知識階級は讀み書きしても、眞實の知識を何程も得て居らぬ。日本で舊幕時代の侍が何程の知識あつたか。儒者といふ部類を除いて、多くは文盲であつた。他の國々もいくらか其の趣きがある。故に雇主の云ふ通りに扱つて居つたものも、何とか理窟を云ふ事が出來る。教育の普及と印刷物の普及と、皆與つて居る。前に階級で拘束されて居つたのが、今は各自の奮發次第といふ事になり、奮發者が少いとして、何程かあるに相違なく、それが自ら進んで仲間を鼓舞しては、何としても動かずに居れぬ。

知識階級は支配階級より出で、農工商を眼の下に見て居つたのが、幾變動の後、斯く區別すべきでないとし、農工商の末流又は其の以外に跳ね出された者でさへ、希望を囑すべきかに考へる。世界はそれ程固定したものでなく、間斷なく流動して居り、實力は外形のみで定める事が出來ず、手を取つて話せば、分らぬと思はれるのが案外分る。而して分りさうなのが分らぬ。經濟關係より出でた無產階級は、自暴自棄の狀態であつたのに、何時しか位置が高まり、自ら氣強くなつて來た。知識階級は是等と列を同じくすべきものでないと考へて居つたのが、其處に道の氣脈を發見するに至つた。世界に於ける幾多社會は、如何になるべきであるか。前に爭はれぬ勢力と認めたのが消滅した事、幾回もある。其の長く賴むべきでないを知つたのは、知識增進の賜物である。之を知つて見れば、有產階級と無產階級と畢竟何の區別あるか、階級を異にしても人は人である。人について知る事、頗る明白を加へ來つた。今でも十分と云へぬが、人に重きを置くといふ事は、知識の進步した唯一の證明である。之を知つたのは自ら富貴の位置に因はれなかつたに因る。學者の多くは高閣に束ねられ、蠅蟲のやうにも見られたが、其の位置で人を比較的正しく見るを得るに至つた。今後いよいよ人を人として認むるに傾かう。

知識階級雜感

小川未明

こゝに一人の勞働者があるとする。其の者は、朝から、晩まで、手や、足を動かして働いてゐるが、頭で何か考へたり、また、靜かに、ものを見たりして、この人生に於ける有益な他人の研究を修得したり、それによつて自分の趣味を滿たすことを許されないとする。さうしたら、この男の生活が果して、人間の生活として、正しいと言へるだらうか。

これと、反對に、こんどは、朝から、晩まで、机の前に坐つて、考へたり、また、讀んだりしてゐる男があるとする。その男は、長い間、かうしてゐることによつて、手の力も、足の力も、自然に衰へて、勞働といふことには堪えられなくなつてしまつた。口でしやべつたり、筆で書いたりすることは相當にできるが、耕すことも、また車を曳くこともできなくなつてしまつた。もし、さういふ男があるとしたら、この人間の生き方が、果して、正しいといへるだらうか。

この兩者は、共に、間違つた生き方をしてゐることに於いて異りがないのだ。前者が不自然であれば、後者もまた不自然である。その不自然な生活が、長い間つゞけられて來た。しかも、それは、たゞ一人だけではなかつた。

この社會を形成する勞働階級と知識階級とが、まさにこのやうな生活の狀態に、長い間、置かれてゐるのだ。そして、彼等は等しく、無產者であり、被搾取階級者であることには變りがない。

たゞ、知識階級が、僅かな環境の相違から、專門的の知識を修得したがために、純勞働者に比較して、やがて生活の樣式の上にも、現在の組織下にあつては相違したけれど、根柢には、そんなに深い、兩者の間に踰えることのできない溝を有してゐるとは考へられない。

とはいふものゝ、この少しの環境の相違が生じた生活から、やがて其處に、斷然とした階級的差別を造るに至つたのは事實である。

知識とは何か？　凡そ知識といふものが、ある種類の人々にだけ專有さるべき性質のものでないことは、富といふものが、ある人々にだけ私有さるべきものでないことよりも、一層明かに、みんなに分つてゐなければならない筈である。

しかるに、知識の專有を誇り、それを唯一の武器として、無識者に對して、自己の方が優れりといふ意識を有する者は、恰かも富豪が、無產者に對して暴慢なるのと同じであつて、これによつて、もし、征服、被征服が、きめられるものとしたら、私達は金持の淺見を嗤ふよりも、更に後者の愚を嗤はなければならない。

いつでも社會の、目的とするところは、それ自身の文化である。即ち民衆の平和と幸福を理想として、それにいよ〳〵近づいてこそ、はじめて文明の慕はれるべき意義が存するのだ。もし、文化の普及がその社會に不平等であり、富の配分が甚しく不公平であり、そして、無識者や、無產者が、其の數から言つても非常に多かつた場合には、結局其の社會が、未開であるといふことを證する以外には、何ものも語らないだらう。

今日の資本主義制度は、一方に於て、盛に科學研究所の如きものを建設し、また各科の大學を建設するけれど、一方では、この社會をして、いつまでも未開の狀態に置かうとするものである。

何故といふに、私有さるべき性質でない富を私有し、知識を私有することによつて、富める者は、ます〳〵富み、また知識ある者は、ます〳〵深く研究することを得るやうに、其の結果は無產者を壓迫し、無識の者を服從しようとするからである。しかし、私達は、共勞、共榮の社會が、人生の理想であり、眞理の歸結であることを知る限り、かうした不合理な狀態がいつまでも永續すべき筈がないことを知つてゐる。そして、新社會が、實現された曉には、もはや、其處には、朝から晩まで、手や、足ばかりを動かして働いてゐる人間が、なくなるであらう。また、終日、机の前にばかり坐つて、考へたり、書いたりすべく餘儀なくされる人間もなくなるであらう。

顧みるに今日のやうな生活は、何も、私達が好んで選んだ生活とは、言ふことができなかつた。しかし、無產者である限りは、筋肉勞働に行くか、頭腦勞働に行くか、どの途、そのいづれかに就かなければならぬやうにこの社會からされてゐる。そして、一たび、その部署についたが最後、もう何うすることもできなくなるのだ。

資本主義が、人間までを、すべて機械の如くしてしまひ、そして、その組織のためには、いかなる犧牲も顧みず、また愛

も、正義も問はない程、殘忍苛酷であることは、更めて說く必要もないことだ。そして、無產者である知識分子と、勞働分子とは、由來接近し易く、また接近しなければならぬのに、この兩者の間に溝を穿つて、益々それを深からしめて踰え難いやうにしようとする。さうすることが、無產階級と對立する資本家側から見て最も安全なやり方であつたからである。

資本家と彼等の擁護者は、常に、さういふやうに企て來た。けれど、實際に於ては、彼等の考へる通りには行かなかつた。知識階級のある人々は、早くから勞働階級にはいつて行つた。勞働階級のある人々は、また、偶然の機會から知識階級に伍するやうな場合があつた。現に今、この兩者の間には、思想的にも、道德的にも、また經濟的にも、密接な關係があつたのである。

しかるに、我國の勞働運動は、歐洲大戰後に於て、世界の風潮につれて、急速の發達を遂げるに至つた。少數者は、夙に覺醒はしてゐたけれど、長い間、眠りから醒めなかつた多くの勞働者は、いろ〳〵な原因から、この機會に際して自覺したのだ。組合の數は遽かに增加し、勞働者は斯くして組合精神によつて行動することを學んだ。

いまゝでは、知識分子として、純勞働者の如く見られなかつた、技術家や、他の頭腦勞働者も、組合を組織して、各勞働組合と、いつでも場合によつては、聯合の行動を取るべく約束するやうになつた。

今年のメーデーの標語は、五箇條であつた。「八時間制即時實施」は、その一項である。

この主張だに實現された曉には、勞働階級の知識が、もつと今までよりは、著るしく增進するにちがひない。今日の如く、過度な勞働を强行されるにかゝはらず、彼等の中には、尙ほ多くの讀書家を有してゐる。或は、知識のみの階級にも劣らぬ、見識と思想とを有する者が少なくないのを見れば、この兩者階級の差別は、單に名目の上に止まることを思はしむるのである。

前にも言つたやうに、富の專有より、一層知識や、思想の專有は、無意味であり、且つ不可能である。勞働階級が、今日の如き進步をつゞけて、より知識的になつた時期には、所謂、知識階級は、事實に於て存在することのできない階級である。

しかし、こゝに至るまでには、知識階級の使命はあつた。今日でもなほ使命があり、それを果さなければならない責務をば有してゐる。

少なくも、無產階級が、同一の究極目的に向つて行進し、實

現を見る日までは、この兩者は決して、敵視すべきものでないのみならず、協力しなければならぬものだ。

私達が、ある時は、勞働し、ある時は、思索するといふ風に、最も、人間生活として、自然なまた、幸福な狀態に到達すると、否とは、私達の努力如何であつて、また未來に屬してゐる事實でもある。それまでは知識階級は、現在の地位にあつて、激勵と敎化の使命を果さなければならない。

最近、勞働階級の階級的自覺と戰鬪的氣分を振興したことは、驚く程である。そして、これを知識階級に較べると、非常に立勝つて見られるに至つた。これは仕方のないことであつて知識階級の衰退は、當然趣く運命のやうにも考へられる。併しては、中間階級であり、また中產階級の如くでもあつた。しかし、今日は、經濟的からいつても、果して、どうかと思はれる。しかも、一般知識階級には、いまだに自分達の立場を固守するやうな職業組合すらも有してゐるのが、稀れなのだ。

彼等の功利主義的、個人主義的思想は、社會生活を營むに際して、犧牲的精神を有すべく、あまりに臆病にされてゐる。半ブルジョア的の敎養は、常に、徹底を回避して、中庸を守ることを至德の如く考へてゐる。

けれど、また、熾烈なる眞理の擁護者も、彼等の中にあつた。そして、其の人達は功利を排し、自己を犧牲にして、正義のために、眞理のために盡さなければならないことを、勞働階級に警告した。のみならず、勞働階級にいろ〳〵な知識を與へたものも、また彼等であつたといはなければならない。

「無產階級敎化」が、幾分でもなされたといふ過去の事實を認むる者は、それが、知識階級の中の急進分子が、犧牲的精神の結果であつたことを否むことができないであらう。そして、たへず、無產階級の運動に氣勢を添へ、それを理論化し、合理化し、眞理の方へと導いて行つたのも、彼等であれば、特殊の學術的研究から、常に、必要な材料を供給したのも彼等である。そして、新社會の建設的方面に、考慮し、一歩先んじて、敎育に着手しようとしたのも彼等である。

この知識階級の大部分は、今、やうやく失勢された形であるけれど、ある人達は、全く勞働階級と步調を合して、協力の立場にありと見做すことができる。

無產階級中の知的分子を、所謂知識階級といふ名目を以つてするならば、彼等は、たとへ直接には生產に從事しなくとも、間接に助くることによつて、當然、勞働階級と同一線上に立つべき人々である。

而して、もし、眞に然らざるものは、卽ち資本家階級に附く

べき人達である。いづれにしても、今日、次第に影のうすくなつた、知識階級は、いつか瞭然として、分裂の運命に接することから免れ得ないであらう。

——(一二、三、五)——

社會改造にも忍耐を要す

内ケ崎作三郎

一　無産と有産と知識との意義

我國に於て貧者と富者との區別はあつたが、無産、有産と區別するは、耳新しい事である。無産とか有産とかはいふ迄もなく Proletariate と Bourgeois の譯語であらふ。露西亞の勞農政府は勞働者及び農夫の代表機關者といふので、盛にプロレタリアートといふ語を用ひ、資本階級、有産階級をブルジョアと呼んでゐる。從つて我國に於ける此二語の流行も露西亞に負ふ所は多い。尤も本家本元はマルクスであるらしい。

さて語源からいへばプロレタリアートはラテン語 proles の卽ち「子孫」といふ意味である。今日經濟學者と社會主義者は社會の極貧階級及び最下層階級の意味に之を用ゐてゐる。更に進んであらゆる俸給衣食者をも包含するに至つた。羅馬に於て有産階級 locupletes に對して、無産階級は國家に奉仕するには子孫を以てするより外に道がないので、この稱をえたのである。

Bourgeois ブルジョアはフランス語で、一市邑(bourg)の自由人もしくは市民の意味である。後貴族と農民との中間階級をも含むやうになつた。また商人階級を輕蔑の意味でいふこともある。この階級は極端なる現狀打破に協力せないので、露西亞のボルセヴイストからは非常に嫌はれてゐる。

また知識階級といふのも最近の流行語である。支那には讀書人といふ階級あり、我が國でも識者階級といふやうなものが存在してゐた。知識階級は滿更是等のものと別種類のものではな

いが、矢張露西亞のインテリゲンチア卽ち知識階級より暗示をえた流行である。

されば我が國に於ける無產階級と知識階級との關係を檢討する前に、露西亞に於けるこの階級の社會的及び政治的意義を研究する必要がある。

二　露西亞に於ける知識階級の貢獻

露西亞の或部分は獨逸思想の影響を蒙ることが多い。しかしこの兩國に於ける知識階級の位置が異なるものがある。獨逸はナポレオン戰爭の敗北を知力の復興によりて回復せんとしたので、國家は知識階級を束縛して、奉仕せしめた。その教育は劃一的となりて個人の創意を無視し、その哲學は抽象的となりて、實生活の道德と沒交涉となつた。露西亞は之に反して獨逸思想の影響を利用して、自由解放の運動に向けやうと努力した。

露西亞の上流階級は少數者にして、しかも著しく個人主義的傾向を有する文化を有する、所謂インテリゲンチア Intelligentsiya であるが、最多數者は何等の教育のなき人民(ナロード) Narod である。これが露西亞社會の見逃してならぬ一特色である。

ペートル大帝はその歐化政策によりてこの區別を一層著しいものとなした。上流階級は露西亞固有の長所美點を捨てゝ、歐洲崇拜に走り、最初はその弊風を學び、後にその高雅を學んだ。而して一般人民は之と全然無關係なる態度を持した。されば露西亞の社會は相異れる二國民の共存するごとくにも見えた。十九世紀に入りて、知識階級は漸く下層階級に對する社會的義務を自覺するに至つた。

米國及び佛蘭西に於ける革命は露西亞の青年を感動せしめた。共和政治もしくは立憲君主制に對して憧憬の念を生ぜしめた。ナポレオン戰爭後、多くの青年將校は佛蘭西に於て民主思想の刺戟を強く感じた。彼等はアレキサンダー一世の死を機會に革命を企てた。無學なる兵士は la Constitution 憲法萬歲と叫べと命令されしに、これは皇后の名なりと思ひ、皇帝の名は何といふかと問いたといふ挿話がある。これ卽ち無學文盲の悲喜劇である。青年志士は西伯利亞に流された。

當時の知識階級の基調は狐疑と優柔不斷であつた。眼高手低であつた。茲に懊惱と煩悶があつた。

同時に反動運動として汎スラヴ運動が起つた。國粹發揮運動が起つた。これは或る思想家をして反省せしめ、人民と密接に結合する必要を痛切に感ぜしめた。ツールゲネーフ、ドストエヴスキー、トルストイ等もこの運動より利益ある暗示をえたと

いふ事である。

十九世紀の初頭に於ける知識階級は上流階級に限られてゐたが、中葉以後に於ては商人や農民の間にも有識者を生ずるに至つた。さればこの頃の知識階級は一層人民と接近し、西歐の民主主義の影響を蒙ることが大きくあつた。

、アレキサンダー二世の農奴解放は革命豫防の政策に過ぎなかつた。されば政府は知識階級に大壓迫を加えて、不平の聲、怨嗟の叫がますく高くなつた。同時に革命を理想とする知識階級は民衆を教育せねばならぬことを自覺した。特に一八七四年に知識階級は勞働者に化けて工場に入り込み、又は靴工、指物師、教師などになりて宣傳をはじめたが、政府の探偵によつて嗅ぎつけられて、失敗に歸した。兎にかく知識階級は多大の犠牲を拂つた。彼等は自己の欲望を捨てゝ民衆の將來の幸禮のために奮鬪した。若し政府が早くこの精神を觀破して、立憲君主制を制定したらんには、却つて一層の安全をかち得しならんと思はれる。

此大戰爭の突發はスラヴ民族の團結を促した。獨逸の壓迫は露西亞政府が一百年も努力して得る能はざりし愛國心を振起した。もし當局者が民意を入れて、立憲政治を完全に運用したらんには革命を豫防しえたるべきを、事此處に出でず、民衆をして終に大革命を斷行せしめたことは當局の大失敗といはざるをえない。

三　社會改造の基礎

我が國に於ては有產も無產も知識も露西亞ほど明白でない。先づ我が國には露西亞ほどの大なる有產階級もないと共に露西亞のやうな無學なプロレタリアートも少ない。普通教育の普及のために、我が國のプロレタリアートは全然文盲でない。大抵の新聞や雜誌は讀める。さればこの三階級は露西亞ほどはつきりした輪廓を有してゐぬことを考慮の中に置かなければならない。第一に我が國に於ける無產階級は必ずしも無產階級でない。知識階級にも無產者が多く、時としては貴族階級にも無產者が少くあるまい。我が國のブルジョーアは勿論有產階級であるが、その子弟にはよしんば精神的に於てより無產階級に同情を有する者が少くない。

しかし何といつても我國に於て無產知識階級が卒先して社會改造の聲を高め、今や有產知識階級の中に共鳴するものが生じた。無產勞働階級はいふ迄もなく自覺して來た。所謂知識階級は勇氣がないから、今後は我々自身でやらなければ駄目だと考へはじめた。此處が考へ所だと私は思ふ。

若し我が國に於て露西亞のやうに、支那のやうに社會的政治的變動が一朝にして發生し得るものであると考ふる人があらばこれは間違ひである。この點は英國と比較すべきである。他のページに於て私は露西亞革命の成功は國土の大と食料の自給自足の可能に負ふ所があると述べた。しかも大戰爭といふ空前の機會があつたればこそ革命が生じたのである。又露西亞の當局は遙かに我が國の當局者よりも頑迷であつた。我が國に於ても普選反對や言論の壓迫はやるが、露西亞の帝政よりは無論寛大である。また我が國のブルジョアは贅澤もあるが、これを露西亞の豪奢に比すれば物の數にも足らない。いはんや大戰爭の動搖は次第に收まりて各國氣を採んで生産の增加を企てゝゐるし、おまけに世界的不景氣が襲うてゐて、この曇天は中々霽れ上りそうでもない。この際の勞働運動は一層の智慧を要する。好景氣の時代ならば一つの工場から排斥されても他の工場にて使用してくれる。然るに不況時代に於ては一度工業界のブラックリストに入れば一寸行く先がなくなる。これが往々にして勞働運動の指導者が勞働者の怨みを買ふ原因となる。要するにストライキは一種の戰爭である。戰爭は餘程の準備と作戰とを要する。輕擧妄動は愼むべきことである。この準備と作戰となくしてストライキを指導すれば、指導者の名は新聞にあらはれて有名になるか、馘首される勞働者は路頭に迷ふやうになりて、一將功成りて、萬骨枯るといふ怨聲を放つのである。

エッチ・ジー・ウエルスは歴史概要の一節に社會主義の理想を實現するは容易でないことを述べてゐる。

第一、教育、世界的事件の協力を理解し且つ進んでこれに當るやうに個人を教育すること。

第二、情報、公けの事件を個人に絶えず正直に發表して、その判斷と承認を求むること、又法律の編纂を改正し、誰にも明白に理解せられるやうにすること。

第三、代表者、この教育と情報に基く一般の意志と調和する集合的利害のために活動する代表者を選ぶこと。

第四、行政者を任命して、社會に對して責任を感ぜしむる方法を講ずると共に、その聰明なる創始力を妨げざること。

第五、思想及び研究、民衆が判斷を下し得るやうに材料を供給するために事件及び法律の組織的批判、又この判斷によりて人間社會の永久的改善を確實ならしむること。

とにかく社會改造は重大なる事業にして、單に力にのみ頼りうべきでない。知識を要する、聰明を要する。殊に大戰爭によ

りて誘致せられたる急進思想に對して反動思想も生じて、伊太利や英國に於ては勝利をえてゐるわけである。かゝる時代に於ける勞働運動は同情ある知識階級との協力が必要である。

英國に於てはオーウエンのやうた進歩的企業家が資本の側より現出したごとく、社會運動は何處となく一種の温みがある。社會主義はボルシエヴィズムでないと、過般の議會で勞働黨の領袖のフイリップ・スノーデンが聲明した。島國日本は島國英吉利をこの點に於ても參考にする必要がある。

私は我が國の勞働階級が忍耐して、着々として堅實に、一歩一歩を踏み出でんことを希望する。知識階級の犧牲と同情とは足らないかもしれぬ。しかし我が國の知識階級は生活の餘裕のあるものは少く、大抵一身一家の經營に忙殺されてゐる。或る場合に於ては勞働階級の所得がより多くあるとも珍しくないやうである。されば勞働階級は決して知識階級を敵視せず、協力して進むべきである。我が國のやうに古い國に於てはいろいろな社會的諸勢力がある。この間に介在する者は堪忍を爲すべきである。我國が、生み出したる最大なる政治家の一人であつた徳川家康は最も善く忍耐しえた人であつた。苟くも忍耐せずして功を急ぐ者は我が國に於てはいづれの方面にも失敗を免れない。露西亞に於てもケーレンスキーは失敗したではないか。しかし忍耐と泣寢入りとは違ふ。忍耐しながら進歩するのである。泣寢入りで寂滅するのではない。

四　眞の有産と眞の無産

最後に私は有産無産について更に一言をつけ加へたい。

有産無産の産は財産のことで、財産は動産と不動産を指すものである。しかし財産は猶一層廣義に解釋すべきものである。健康は活動の源泉にして、財産である。病氣の時の費用の多いのは消極的に之を證明する。知識は財産である。無知が招ぐ損失は之を裏書きする。信仰は財産である。これなき人の不愉快なる人生は之を反證する。理想は財産である、これを缺く人の墮落は之を確定する。慈善は財産である、家族は財産である、愛は財産である、新緑の天地は財産である。五月雨に啼く杜鵑は財産である。力ある夏の日影は財産である。否この大宇宙は我等の財産でないか。

然るに法律上の財産のみを以て唯一の財産と見なせば、大なる誤謬である。若し人多くの財産を有するも是等の無形形有の大財産を所有せざるものは眞の有産者でない。よしんば所謂無産者でも、是等の財産を所有すれば、矢張有産階級と呼ぶことが出來る。

又物の所有權にも二通りある。法律上の所有權と精神上の所有權即ち是れ。法律的所有權を得るは法律の手續きを要するが、精神的所有權にはこの煩ひがない。大庭園を法律的に所有して、精神的に之を鑑賞するを知らざる富豪もあれば、法律上の所有權はなきも、この自然美を精神的に玩味する智者もある。

されぱといつて貧富の懸隔を依然として現在の儘に繼續せしめよといふのではない。社會的公正の原理に基いて分配の公平を期して、その實現に我々は努力しなければならない。しかしながら有産無産の産に拘泥して、萬人に平等に開放せられてゐる天の財産、精神の財産、宇宙の財産を顧みないのは勿體ない譯でないか。マルクスは階級戰爭を力說したが、天地の大道は階級を超越して、あらゆる人々の接近と纏交とを要求してゐるやうに觀ぜられる。勞働も資本も知識も共にこの源泉に渇を癒やすことを忘れてはならぬ。

無産階級と知識階級との相互抱合

法學博士　堀江歸一

一

無産階級と云へば、從來勞働者を以つて、之に充てることが一般の慣ひであり、勞働者と云へば事實に於て、之を筋肉勞働者に限ることゝ爲つて居つたのである。勞働者は生活の資料を得るに就て、自己の勞働力以外に、何等の依賴す可きものを有しない。勞働に對する報酬の一部分を蓄積して、今後の生活に於ける變動に備へようとする者もあるかも知れないが、本來現在の經濟組織に於て、資本家と相對抗して、勞働者の賃銀の決定される場合には、假令ひ後者が勞働組合と云ふ團體の勢力に依賴したとした所で、賃銀が能く勞働者に不時の要求に備へしめる餘裕を與へる程度に於て定まるかどうか、一個の疑問に屬する。殊に私が現時の經濟組織に於て、最も不合理であり、又不公正であると考へるのは、第一勞働者階級に生を享けた者は

如何に自己の技倆を研き、德性を高くし、知識を收めても、此階級を脱して、今日の社會に於ける慣例に於て、一層高い所に居ると考へられる階級に進む機會を得ない、斯くて人の如何なる階級に生れたかと云ふことが其人の一生の運命を決定すること、第二勞働者階級に生れた子女も亦父兄の資力に乏しく、他の階級に進むに必要なる教養を得ることの不可能である爲め、父兄と同じく、勞働者階級の人と爲り、斯く父兄と同一の運命を荷はなければならぬこととの二點である。

若しも勞働者階級に產業管理權を有せしめ、又此權利を有せしめる前提として、勞働者にも其關係する事業に對して、必要なる資金を醵出せしめる道が開かれたならば、勞働者階級の社會に於ける地位に或る變化を齎すに至るであらう。然しながら斯の如きは他日は兎に角、今日に於て之を望むを得ないとすれば、勞働者は永久勞働者であるが如く、無產者も亦何時まで經つても、無產者であり、斯くて其階級に世襲的存續の狀態を生ずるのである。

二

斯くて今日の經濟組織の行はれつゝある場合に、無產者階級に對して、唯一の救濟手段たるものは、階級としての團結であり、又有產者階級の團結の鞏固であるが如くに、無產者階級の團結も亦鞏固なるものでなければならない。從來此種階級の團結が果して鞏固無比の狀態に置かれて居つたであらうかと云へば、必ずしもさうでない。勞働組合と云つても、敢て全部の勞働者を網羅するに至らず、其組織の最も制限的なるものに於ては、或る程度以上の技能を有する者でなければ、組合に加入する資格なしとする。是れは勞働組合として其決定した標準賃銀の制度を維持するに容易ならしめる爲めに、必要であると考へられるが、斯の如くして勞働者の間に職業の如何に依る差別が出來たり、熟練勞働者と不熟練勞働者との溝渠が設けられたりすることが果して得策であるか、其れとも勞働者の大同團結を組織し、階級的意識を強くして、行動することを以つて、可なりとしないであらうか、一個の問題と爲るのである。

三

右と同樣の問題は無產者階級と知識階級との關係を如何にす可きやの一事である。知識階級の何ものたるやに就ては、自ら異說なきを得ないが、知識階級として世間に處する以上は、財產を所有して、其れから所得を收め、斯くて生活の糧を得るが如き、純然たる知識階級ではなく、知識階級に兼ねるに有產者

階級を以つてしたものに外ならない。有產者であることは必ずしも知識階級たることを妨げないやうなもの〻、知識階級に屬する多數の人に就て、之を概觀すれば、知識と財產とは必ずしも併立するものではない。有形科學の內で、實地應用を主とするものを學修した人の如き、學問應用の方法如何に依つては、相當の產を成し得るに相違ないが、總ての人に向つて、之を望むを得ないし、一方に無形科學の學習者に至つては、知識と所得とは、槪して反比例する約束であつて、知識の低い場合に、所得の寡小であるのは勿論、知識の高きに隨つて、所得は高からず、却つて割合に減少するの傾きあるを免かれない。野に遺賢があるとか、賢者が陋巷に窮死するとか云ふことは、必ずしも前代に行はれた事實に止まらず、今日に於ても尙ほ其趣きを存する。官吏、學校敎師、文士、著述家の如きは、專ら知識階級を組立てるものであつて、其職務の價値の高く、又尊きことに就ては、何人も疑を挾まないであらうが、一方に其報酬の菲薄なることも、亦明白の事實であつて、如何に一生を腕いた所で、有產者階級に入ることは困難である。固より彼等の內には瀆職官吏、不正敎師、不良文士、惡德著述者があつて、職業の尊嚴を傷けて居るが如く、一方には一書の著述に依つて、意想外の稿料を得たとか、他日の榮達を期する楷梯として、官界に身を置いて居るとか云ふやうな以上の叙述に對して、例外に當る者のあることは勿論であるが、大體から云つて、知識階級が無產階級であり、勤勞に對する價値に比較して、適に均衡の取れない報酬に甘んじて、生活を送りつ〻あるものであることは、之を否定するを得ない。

四

然らば何故に知識階級に屬する者の得る報酬は斯の如く菲薄であり、又勤勞の價値に伴はないかと云ふに、其最も有力なる原因は彼等の間に於ける團結の皆無であり、又微弱であることに存する。彼等の間に團結なくして、一方に團結の鞏固なるもの或は一人の意思に依つて、事の決定される團結と相對した場合に、彼等の勤勞に對する條件が不利のものと爲り、彼等自身虐げられる地位に陷ることは、已むを得ざる所に屬する。茲に於てか彼等の間に團結を設け、集團的實力を發揮することが問題と爲るのであつて、既に外國に於ては其例に乏しとしない。唯此場合に問題と爲るのは、所謂知識階級なるものが團結を設けるに當つて、第一知識階級だけ別に分離して、一の團體を作るか、第二知識階級に屬する者自ら勞働組合に加入し、勞働組合亦彼等を抱擁するか、第三知識階級は勞働組合に對して、指導

者たる地位に立ち、組合を誘導啓發して、組合の發達を謀り、組合の勢力を通じて、間接に知識階級に利益を收めることゝするか、孰れの一に依ることを正しとするかと云ふことに爲る。

五

右の内、知識階級の者が外部に居つて、勞働組合を指導し、啓發し、勞働組合の爲す所に依つて、利益をしようと云ふ考には大なる間違の存することを知らなければならぬ。即ち知識階級が全然勞働組合の外部に居つて、勞働運動を指導しようとした所で、勞働者との間に思想並に感情の融和を缺く一方に、勞働者階級から、勞働運動發達の結果として、識見に於て、辯舌に於て、他の同志を統率する人物の出現することの當然である以上は外部の指導云々は全然無用の業たらざるを得ざるのみならず、勞働者階級だけに時に運動の失敗に依つて、犧牲を蒙らせながら、其成效の際に間接ながら、指導者に於て、利益に浴しようとするが如き、餘りに蟲のよき話とせざるを得ない。

玆に於てか知識階級だけで、例へば事務的仕業（クラーリカル、ウオーク）とか、敎員とか、特殊の職業に從事する者の間に於て團體を作ることゝ爲るであらうが、是れでは團體の擴がる範圍に限りがあつて、其大を致すに困難である。斯くて一層の事、是等の人々にも一種の精神的勞働者であると云ふ見地から、素裸かに爲つて、勞働組合に加入し、組合の方でも知識階級であると、勞働者階級であることを問はず、單に精神と肉體との方面に於て、從事する所を異にするだけの話であつて見れば、組合を開放して、知識階級を網羅し、總て賃銀や、俸給を給與する階級に對して、之を受領する階級の大同團結を形成し、兩者互に相對抗して、階級の利益を擧げることに努力するを以つて、頗る事の宜しきを得たものと考へざるを得ない。固より我國に於ては知識階級の間に武士は食はねど高楊子式の考へが殘つて居るであらう、何か偶然の機會に乘じて、有産者階級に進み入ると云ふ考へを持つて居るであらう。斯の如くして彼等の階級を驅つて、勞働者階級と事を共にせしめるに就ては、多少の困難の伴ふことを免かれるかも知れないが、無産者階級と云ふ廣い立場に居つて、利害を一にする以上は、斯る階級的差別の成長するのは、當然の勢と見なければならない。知識階級たるの故を以つて、高く標置した所で全權を擁する有産者階級に壓迫されること、今日の如き狀態であつて何として生活なり、生存なりの安きを得るであらうか。此點に於て、彼等の境遇を高め、生活の安定を得るの道は無産者階級の大同團結を組織するの一事あるのみであつて、勞働者階級の如きも、其心事を廣濶にして、總て同一の境地に居

る者を網羅し、抱合すると云ふ最も寛大なる考へを以つて、他を遇しなければならないと思はれる。

科學者と技師の立場

林　癸　未　夫

當面の問題は生産論を中心として渦を卷いてゐる。哲學も、社會學も、政治學も、經濟學も、それが社會組織の問題に關する限りに於ては、生産論を中心題目として、少くとも中心題目の主要なる一つとして論議されつゝある。しかし餘りに明白な事實は、如何ほど是等の理論を積み重ねたところで、それによつて一片のパンさへも現實に生産されはしないといふことである。

現實な生産は、唯現實な勞働によつてのみ得られる。それは分りきつた事である。しかし今日まで進み來つた人類の經濟生活を、具體的に言へば人類の必要とする生活資料の品質及分量を、現在の程度に維持して行くがためには、單なる勞働の豐富な供給だけでは其効果は甚だ微弱であることを免れないのである。況んや人類の經濟生活を現在よりも一層充實させるがためには、尚更さうなのである。何となれば現存の地球上の人口を養ふがためには、最早人間の勞働力の果實だけでは非常に不足してゐるからである。言ひかへれば、化學、電氣其他の科學的知識の發見に係る、科學的生産手段を以て人間の勞働力を補足しなければ、否寧ろ人間の勞働力に數百倍、數千倍、數萬倍するところの果實を生産するだけの力をそれに發揮せしめなければ、人類の經濟生活は到底向上發展の見込がないと斷言して可いのである。いかに勞働の遊戲化が可能であるとしても、いかに勞働が最少限度に減殺されるとしても、それが自己の遊戲的衝動に因る自由の體動でなくして、社會のために必要とせられる義務的體動として行はれる限りは、人間は必ず此義務のための體動を、自己に取つてより良き體動に轉向せしめたい欲望を失ふ理由がないのである。此意味に於て一定の社會秩序の規範

の下に行はれる勞働は、如何なる場合にも若干の苦痛――もつと適切に言へば限られたる時間内に於ける快樂からの退轉――なくしては行はれる筈がないのである。果してさうだとすれば、生產のための勞働は、純粹なる快樂のためにする體動とは永久に區別されなければならぬものである。從つて人類はあらゆる方法を盡して、生產のためにする人力の勞働を出來るだけそれだけ減却するの努力を、何時までも續けて行かなければならぬのである。しかも其手段は、畢竟自然力を以て人力に置き換へるといふことの外には何物もあり得ない。而してそれは只科學的知識の不斷の擴大と、その知識を常に最大限度に生產手段に實用して行かうとする努力によつてのみ可能とせられるのである。

○

現在の知識階級中、其主要なる一部を形造るものは科學者と技師である。科學者は新たなる科學的知識を開發する。そして技師は其知識を生產手段としての實用に供する。產業革命以後に於ける近代の大企業は、主として科學者と技師との職能によつて實現されたものである。如何に資本主義的生產方法に伴ふ弊害が多からうとも、又如何に富の分配が不公正に行はれてゐやうとも、近世の科學的知識と其應用とが、人類の經濟生活の向上に、どれだけ莫大な貢獻をなし得たかといふことは、吾等の認識しなければならぬ事實である。

過去百餘年間に、かくの如き顯著な功績を擧げた各國の科學者や技師等は、疑ひもなく知識階級の重要な一因子であるけれども、社會人として彼等の有する特質は、常に彼等の生息する國と時代とに於ける支配階級の勢力と結び付くべき自然の傾向を有することゝである。彼等の過去の努力は、それが人類一般の福利に及ぼしたよりも、より多くの効果をブルジョア階級に對してのみ及ぼしたことは爭はれない事實である。併しそれは彼等が意識的に、ブルジョアの味方となつてプロレタリヤを敵にすることが、自己本來の任務であると考へたからではないのである。彼等は單に自分等の開發した知識を尊重してくれる者、彼等の考案した機械を利用してくれる者が、殆ど常にブルジョアに限られてゐたといふ理由によつて、おのづからブルジョアに密接な關係を保つに至つたに過ぎないのである。

此關係は現在に於ても未だやはりさうである。今日の知識階級に屬する者の中、政治經濟に關する學問を修めた者或はそれに關した職務に從事してゐる者は、自分が目下官吏であつても、銀行會社員であつても、內心に於て、資本主義を是とする

か、社會主義を是とするかに就ての、大體の意見――それは勿論大抵漠然とした傾向に止まるのではあるが――くらゐは皆持つてゐるのである。併しながら、同じ知識階級ではあつても、科學者や技師の仲間に入ると、かくの如き社會思想には大部分のものが無頓着なのである。吾々は只試驗室で研究さへさせてくれゝば可いのだ。吾々は只自分の考案した機械を實地に運轉させて貰ひさへすれば可いのだ――くらゐにしか考へてゐない人たちが多いのである。つまり彼等は社會組織の問題には無定見なのである。ブルジョアの專制でも、プロレタリヤの獨裁でも、彼等の實生活の內容を攪亂せずに、其好む仕事をさせてさへ置けば、何方でも構はないのである。從つて彼等が過去及現在に於て、外觀上ブルジョアの勢力に阿附迎合した形があつたからと言つて、彼等は其思想に於て資本主義の擁護者であり、無產階級の敵であると即斷するのは正當でないのである。

○

しかのみならず、無產階級が若し天下を取つたとしたところで、現在の彼等に、否將來の彼等によつてすらも、長年月の專門的研究と熟練とに俟たなければならぬ科學的知識と科學的生產手段とが、さう容易に彼等にマスターできるものでないことは明かである。哲學や經濟學で機械は動かない。勞農革命直後に於ける滑稽な、併し尊重すべき經驗が良くそれを證明してゐる。まして將來の無產階級の社會秩序に於て、個人の自由が極度に尊重されなければならぬことが、必然の一要件とされる以上は、その個人の自由と、總ての人々に責任を分擔されなければならぬ筈の生產の豐饒とを兩立せしめるがためには、科學者と技師との固有の職能を、資本主義社會の下に於けるよりも、一層完全に發揮せしめることが最も肝要であることは疑ひを容れないのである。

勿論生產は單にそれ自體の問題としてのみ解決され得べきではない。適當な分配が之に伴はなければ適當な生產は成り立たない。しかも科學や技術は生產方法の全部ではなくて一部である。從つて科學者や技師が如何に完全に其職能を發揮したからと言つて、彼等を支配すべき勢力は、彼等の上に、別に存在しなければならぬ。それは無產階級自體の隨意に決定して然るべき問題である。唯私が茲に切言したいと思ふのは、無產階級が其文化の建設に當つて、知識階級としての、科學者及技師を羅致し抱擁することの如何に必要な事であるかを明にしようとしたに過ぎないのである。しかもこれは決して私の創意ではない。既にレニンやブハリンによつて十分論究されてゐるところである。

最早や知識階級なるものは存在せず

千葉龜雄

無產階級の概念の對稱になるものは、たゞ有產階級が唯一に在るだけである。どうして知識階級が、無產階級の對照になり得るといふのか。知識階級は、或る種の頭腦勞働によつて、知識所得であるところの一定の報酬をうけとり、それによつて暮しを立てて行く一點で、有產階級に寄生し、有產階級の尻尾にぶらさがる無產階級の一種に過ぎないのである。またこれは中等階級の名稱において、たとへ無產階級の一枚上に据えられ、中等階級が即ち中間階級であるとして、有產無產の二大階級が、斥候戰だけぐらゐの戰鬪前紀にあつては、或は二つの戰線間の緩衝地帶となり、二つの利害のどちらかの、キヤスチング・ヴオトを握り得るものであつたかも知れない。けれども全戰線に亘つて、生きるか、死ぬかの砲火が開始された曉には、もうそれらの中間階級は、雙方にとつて足手まどひとこそなれ、決してどんなかの利益にもなるものではなかつた。かくしてわづかに無產階級に自覺してはいつて行く其中の小數だけが救はれるだけで、救はれないペチイ・ブルジョアと見られる多數は、所詮絕滅する外は無いものであつた。それなら、なぜ、かつて兩階級鬪爭の緩衝地帶となり、またかつて兩者の利害の指導者であつた知識階級が、かくも俄かに足手まどひと見られ、賴み甲斐のない、日和見黨だと雙方から、考へられるかとならば、それは中間階級の置かれた地位が、また生活が、そしてそれが知識階級である場合には、その思想が、自然と彼等の態度をそうした傾向に向けて行つたためである。第一に彼等が有產階級の搾取餘剩によつて生活するといふことは、それがために、直ちに有產階級の番犬をつとめるものだといふ論理をひき出せるものではない。むしろそうした生活の不合理について、彼等は有產階級に對して、絕えず激しい反抗を懷いて居るものである。故に、止むを得ない生活の取引きだけを取りはなせば、彼等は決して、有產階級にいさゝかの好意をも感情の上に持つて居るものではない。

それなら、彼等が何故て、同じ有產階級の落ちこぼれによつて生きるところの、無產階級の戰線に直ぐ共同せぬかとなるとそれはからだ。第一に彼等の生活が、無產階級のそれに比べては、まだいくらかの餘裕のあるので、その事情が勢ひ鐵鎖の外に何ものの失ふものも無い無產階級のやうな、せつぱつまつた心境にまでその意志をさそつて行かない。第二に無產者の體驗が、すべて實生活に裏づけられる爲に、その懷く信念も、實行しやうとする理想も、すべてが生々しい物質の上に向ふのに對して、知識階級は、凡ての葛藤を長い間の知識と概念の上で養はれたところの、思惟と空想の上のみで解決しやうといふ動向が兎角につよい。平和、自由、デモクラシイといふ類がその見本である。が、それが悉くつまらぬ夢想だとして取捨てられてよいと言ふのではない。その理想には相應に高い、或は深い、或は思索の爲に、思索を樂しむやうな、奥へ入りこんだ素的な創造さへあるのであるが、さてそのどんなすぐれた理想も、それを現實の上にひきあてた、精密な實行によつてのみ始めて完成されるものだといふことを考へぬのはどうであるか。ラシアの一九〇五年までの革命が、それがいつも失敗に歸したのは、頭腦の革命であり、感情と理想だけの革命であり、それだけ知識階級の革命であつたために失敗したのであつた。そしてこの胚胎した革命が、すつかり知識階級の氣を腐らして了つた爲に、一九〇五年以後のラシア藝術がこれまでの社會革命の熱意をはなれて、唯一の自我凝視となり、性慾の享樂となつたのは、全くこの絕望の氣分をまぎらす爲であつたのである。かくして一九一七年以後の勞農革命は、全く民衆によつて成功した革命であつた。實生活から焚え立つて行く民衆の熱意が、もう知識階級の、思惟の上の社會改造のまだるつこさに堪え切れずに、彼等を賴みとせずに成功したのである。第三に、知識階級の置かれた地位は、生活の上から、彼等の性格を臆病にし、感情と理想の上から、彼等をして、爭鬪を避けて平和を悅ばせる。彼等の寄生生活は、彼等を有產階級や無產階級のやうに、絕對の支配の自信をも、また絕望から起る强烈な實行の力をも與へしめない。不合理だとて少しどてれば、そこには生活の脅威と不安定の外何ものも無いし、さればとて、その社會組織なり、制度なりを改訂するほどの團結力も自信もない。だからそういふ意志も惹き出されない。さらば一思ひに、無產階級の陣營に飛び込むかとなれば、また無產階級者が確信し、居るやうに、あれほど明い將來の確信が持てないのである。之を然らしめるは環境と教養のいかんによるもので、それはどうとも仕やうがない。勢ひ將來の永遠の

安住よりも、現實の一日の安定を、有産階級の世界に食ひのべやうとする事になる。それに彼等の感情は、無産階級者が直接にふれて居るやうな、雇主と勞働者との間にある、あのむき出しな敵意の取引きにまで接觸して居ない。社交といふやうな、わり合ひに裝飾された人間交際のみを見つけて居るので、自然すべての解決をも、平和とか禮儀とか正義とかいふ理解と妥協でやり遂げ得られるやうに考へることになる。

　要するに、これ等の知識階級の態度は、無産階級者から見て、ブルジョア・リベラリズムとして冷笑され、間接な有産階級存在の擁護者として考へられ、少くとも彼等の同胞と見られぬものとして思想され勝ちな止むを得ない諸種の條件である。所がまた一方の有産階級によつては、彼等が知識階級に貧しい生活を保障する一方、それによつて、ますます彼等の反逆心理を鋭くして居るものであることを彼等をして精確に自覺せしめて居る。そこで雙方から手切れ狀が來る。

　どつちにしても、知識階級の運命が、資本主義の發達と共に、無産階級により早く墮ち込んで行くものであることは爭へない。それなら知識階級と無産階級の抱合はどうして成功されるか。此場合知識階級は、長年年期を入れたそのブルジョア・カルトのすべてと離緣し、また前に擧げたやうな、いろいろな生煮えな態度と絶緣して、無産階級と握手したならそれでよいかとなると、それだけでは決してゆるされない。

　知識階級と無産階級との對立は、第一その命題が誤まつて居る。なぜなら無産階級を知識階級に對立させる事は、直ちに、無産階級が卽ち無知識階級である事を豫感させるからである。が、無産階級は果して無知識階級であることが斷定されるか。無産階級の範圍はたゞ無産者あるに止まる。知識はその限定外である。なるほど現在までの無産階級は、資本主義の社會組織が生み來つた社會情態として、教育均等の權利が極度に有産無産によつて蹂躙されて居たに相違ない、そして無産であることは、直ちに無知を示すことでもあつたらうから、かゝる教育制度を潰崩させねばならぬは自明な理くつである。けれどもそれよりも不合理なことは、現在までの社會組織が、殊に知識階級といふものを立派な一つの階級として存在さして居た不合理である。知識は何ものよりも、より多く流通性と普汎性を持つべきものであり、また何人も持たうとして希求するところのものである。然るにこゝに社會の一劃を區ぎつて、少數な知識階級といふものを置くことは、取りも直さず知識の獨占であり、知識の專制である。最も指彈せねばならぬ一つの不合理な組織

である。丁度或る資產によつて參政權を許し、或は許さぬことが不合理であると同樣にそれは不合理でもある。もし有產者も、無產者も、その先天性の許す範圍において、凡てが知識者であるのが正しい社會の狀態であるべきであるとすれば、無產者が知識階級と對立されるやうな不思議は決して起り得ない。元來が、もし知識が正當な地位に置かれるならば、どんなむづかしい一切の鬪爭も、正しい知識で解決されないものがないのである故に、今日の社會鬪爭の行き詰りは、即ち正かるべき知識が正しい地位に置かれてないからだと見ても差支へがないのである。しかして知識階級が前に擧げたやうな無用な惱みは、それが凡て正しくない地位に置かれた知識者か、自ら採らねばならぬ課稅なのである。

知識は一切の鬪爭を解決する。然るに現代の社會鬪爭の解決が、所謂知識階級の知識によつて解決されずに、かへつて無產者の知識によつて解決さ〻つ〻あるのは何といふ皮肉な現象か。そしてその無產者とはいはゆる無知識者と一般に見られて居る團集である。然るに彼等は無產者 あつても決して無知識者 は無かつた もし無知識といふべきものがあれば、それは彼等が無產者 あるために、ブルジョア式教育を受けることが出來なかつた事である。またいわゆる知識者階級のやうな知識を持たないまでの事である。彼等は彼等の流儀によつて自己を立派に敎化したので、今日の社會鬪爭の內容は即ち彼等の自己敎育の收穫である。或は彼等もその初步にあつては、多少ともいわゆる知識階級の手引きを、また指導を仰いだかも知れない。けれども彼等の知識の眼が見ひらいて來るに從つて、彼等はそこからブルジョア・カルトと、プロレツト・カルトの資料を鋭くえりわけた。もちろん現代のやうな過渡期にあつて、既成社會の敎化から、全く脫化されるやうた敎化はどこにも無いにしても、それにしても彼等は、いわゆる現代の知識階級から享け入れる敎化がもう何ほどもないことを覺え切つて、そうした既成敎化から採られた資料からすべてのブルジョア敎化の思想であるものを振りきつて、たゞ新らしい世界を約束する新敎化の方式と創造のみを用意しつ〻ある。もちろん現代の知識階級と見られる人々の中でも、無產階級の指導と敎化に凡ての熱意を注いで居る少數人があることは見遁せない。たゞそれ等の人々が、自分を知識階級人だと自ら信じて居る限り、それは本ものの無產階級者でない。なぜなら其人々は、無產階級者は即ち無知識階級 といふ前提の意識の上に立つ者でなければそれは爲し得ないものだから。

かゝる論理から、私の結論は惹き出される。卽ち先づ知識階級と無産階級の抱合といふことは、理論の上にも、また實在の上にも在り得ないといふことだ。それは一方に一切の知識階級なるものを潰崩して了ふと共に、一切の知識を一切の民衆の前に解放することでなければならぬといふのだ。知識を生活ととり放して、一つの生活の裝飾のやうに、また寶冠のやうに考へて居たのは、全くブルジョア文化の遊戲生活の一幻想に過ぎない。そうして、凡ての知識を持つことは民衆にとつて、今までのやうに何等の誇りでなく、それはたゞ生活を指導すべき、當然で、平凡で、また必然な民衆の原理とならねばならぬものであつた。執政者が知識者であり、被治者が無知者であつたことは、どこの國もとりのけなしに執行されて來た都合のよい今日までの國王倫理であつた。しかし被治者＝無知者は、もう飽きるほどその倫理にたんのうした。そしてその場合における執政者側の幕僚は、いつもきまつて國内の知識者であつた。この事は、バルビュスも、ロオランへ與へた公開狀の中で說いて居る。かくして所謂知識者の專制統治はもう長すぎるほど長過ぎた。そういふ特殊階級は、今はすべての特權者とともに席をけづらねばならぬ。故に無産階級者に抱合さるべきものがあらば、それはそんな薹の立つた知識階級ではない。知識直ちにそのものでなければならない。

× × × ×

兩者の正しい關係と間違つた關係

法學博士　吉　野　作　造

○無産階級必しも無識でなく、有識階級にも無産なるものは頗る多い。無産階級と有識階級とは本來相對立すべき觀念ではない。然るに當今社會問題などの實際的取扱に於て、此二者を對立させて何等の不合理を感ぜさるはどう云ふわけか。思ふにこ

れ、この兩者に或る特別の限定的意義を附し、互に連絡する一團中自ら對立する二つのかたまりをいふと解するからではあるまいか。

○第一にこの言葉は、所謂無產階級運動（廣義の）に直接間接の關係ある者に就てのみ用ゐらるゝ。斯種社會的運動と沒交涉の部面に於て、無產階級對有識階級は今のところ格別の問題となつて居ない。第二に所謂無產階級運動に於ては、主として智能的要素を分擔するものと實行的要素を分擔するものと二つある。或は運動を指導するものと實行の衝に當るものと分けてもいゝ。後者が所謂無產階級たるは言ふまでもないが、前者は後者の出なると又は外から來り投ぜるものなるとを問はず、均しく之を有識階級と呼ぶことになつて居る。斯う考へると二者の對立の意味はよく分る。

○所謂有識階級は、無產階級それ自身の中より出るのが好ましいことなのであらう。併し斯種運動の初期に於ては、之を外から迎へるといふのが普通であつた。何も知らなかつた無產者に取つては之も必要であつたらう。が、段々と訓練と經驗とを積むに從ひ、他所の手をからずに凡ての必要なる部分を自分達の一手にやるといふことになるのは、亦自然の順序であらう。この事はまた右兩者の窮極本來の關係を暗示するものと謂ふことが出來る。

× × × ×

○無產階級の運動に有識階級の參加は不要有害だと云ふ議論がある。この考の正しいかどうかは屢論ぜらるゝ問題だが、之は次の二つの場合を區別して考ふる必要があると思ふ。一は現實に見る樣な有識階級が有り難いのかどうかの點で、他は元來有識階級たるゝものゝ參加が道理上必要があるのかどうかの抽象的の問題である。尤も凡そ有識階級なるものは、一旦其地位に舉げらるゝと、必ず皆現に見る樣な下らぬものになつて了ふものだと決めて掛るのは別論である。

○今日我國に於て、現に無產階級運動の指導の任に當つて居る人々は、極めて少數なる例外を除いては、所謂無產階級出身の人ではない。少くとも筋肉勞働を賣つて辛うじて生命を繋いで居た者が仲間の推薦に推されて已むを得ず其任を引受けた、といふ樣なものは殆んどない。概して皆外から手傳ひに來たやうな人ばかりだ。斯う云ふ種類の人がいつまでも運動指導の任に當るといふは、本來不自然な事だから、其意味に於て有識階級が段々忌避さるゝに至るのは已むを得ない。が併し、今日日本の運動はさうすることに十分適當な時期に達して居るだらう

か。

○無産階級以外の義勇有識者流の缺點は、無産者としての本當の體驗を缺くことである。どんなにつとめても、子を有つたことのない者に本當の親心は分らぬ樣に、義勇有識階級者流では、完全に運動の全體を指導することが出來ぬのだ。彼が斯く云ふ本然的缺點を自覺して每に謙遜な助言者たるに甘んずる間は無難だが、動もすれば自分の思想なり計劃なりの價値を過信し、之を極度に遂行せんと強ひたがるので、破綻が起る。若し夫れ其人の個人的過失乃至不德に因る種々の失態の加はるあれば、破綻は更に大きくなる。我國無産階級運動に於ける有識者流の失敗が、其原因を多く這般個人的過失に存するの事實は、我々をして大に考へさせるものがある。

○併し我國に於て、有識階級排斥論の流行を見るのは、實は所謂有識階級から煩はされたといふ體驗に基くといふよりは、書物で讀んだ西洋の說明の請賣りの又聞きに因る方が著しいのではなからうか。概していふに、特に社會問題については、最近一般に西洋にはやつた偏つた說明が無反省に受け容れられて、公式の樣に言ひ囃される傾きがある。曰く直接行動、曰く階級鬪爭。曰く議會制度否認。曰く何。曰く何。而して有識階級の排斥といふことも亦斯種公式の一つに外ならぬのではあるまいか。

○西洋では、過去に於て有識階級が相當に無産階級の爲に盡したには盡したが、結局に於て無産階級の本當の要求は、彼等に由ては達せらるゝものでないといふ事を、深く〱經驗した。之と伴つて又多年訓練の結果、自分達仲間の中に本當に指導の任を盡し得る有識分子は今や續々と躍出して居る。斯くて人に賴んでは駄目だ、自分でもやれる、と云ふ消極積極兩面の條件が兼ね備つたので、そこで始めて有識階級排すべしといふ議論は、意外の破綻を現はさずに、故障なく行はれ得るのである。而して、之れ丈けの條件も具らぬのに、漫然有識階級の排斥を唱ふるのは、實は丁度子供が大人の眞似してあぶない藝當をするやうなものなのである。

○されば、と云つて僕は、現今我國の無産階級に今まで通り所謂有識階級ゝ指導に盲從すべきだと勸むるのではない。僕がこゝに特に讀者の注意を惹かんと欲するは、義勇有識階級が散々にボロを出し、所謂消極的條件は十分に備つて居るに拘らず且又有識階級排すべしとの議論は盛に唱へらるゝに拘らず今なほ實際に於ては矢張り彼等の指導助力が大に恃みにされて居るといふ顯然の事實に付てである。是れ事實は理論よりも雄辯に、無産階級運動は到底有識階級の指導助言を無視し得ざるを

語るものと思ふからである。

× × × ×

○僕は無産階級と有識階級との本質的關係を、嘗て醫者と病人とに譬へて説明したことがある。所謂無産階級運動は病をなほすといふ要望の痛烈なる發現だ。といへば其が醫者の爲の問題でないことが第一に分る、併し病に苦む病人自身は如何すればこの疾を癒すことが出來るかを詳かに知つては居ない。之を知るには專門の智識が要る。少くとも廣く深い教養なしに之を適當に處置することは出來ない。茲に醫者の助言を必要とする理由がある。無産階級運動に有識階級の參加するを要する本質的理由は畢竟こゝに在るのである。

○俗諺に、自分の事は自分が一番能く知つて居るといふ。之は一面の眞理であるが全部の眞理ではない。何處が痛いかは病人自身でなければ分らない。が之を處置する方法に至ては彼自身の全然知らざる所である。自分の事は自分が一番よく知つて居るからと云つて、無産者運動から全然有識階級を排斥するのは、恰も醫者に無相談で手療治をするに限るといふやうなものだ。危險此上もない話である。

○不幸にして從來の醫者は、其の與へられたる分を守らず、僭越にも病をなほすといふ問題を自分の仕事たるかの如くに考へて居つた。病人に就いて其の苦痛を親切に聽くの勞を取らず、自分の狹い經驗を根據として、勝手に相手方の疾患は、肺にあるの胃にあるのと獨り決めに決めた。そして之に基いて投藥配劑した。斯くして有識階級は、無産者運動に取つて遂に煩累とならざるを得ない。併し乍ら之は指導者助言者の心掛の間違つた結果であつて指導助言そのことに本來有害無用の性質が固着してゐるのではない。

○故に僕は最近の有識階級排斥論を以て、極端を矯める爲の極端論と爲し、其表現に用ゐらるゝ言辭に過度の誇張あるを已むを得ずと許し、その本來の意味は有識階級の僭越に對する彈劾に過ぎぬと認めるのである。若し彼が正しい地位に立ち還り、名醫と同じ樣に單なる助言者として其責任を盡すことになるなら、之は無産者運動に取て固より大に歡迎すべき所でなければならぬ。この點に十分はつきりして居ることは、運動の確實なる進歩の爲に極めて必要だと思ふ。

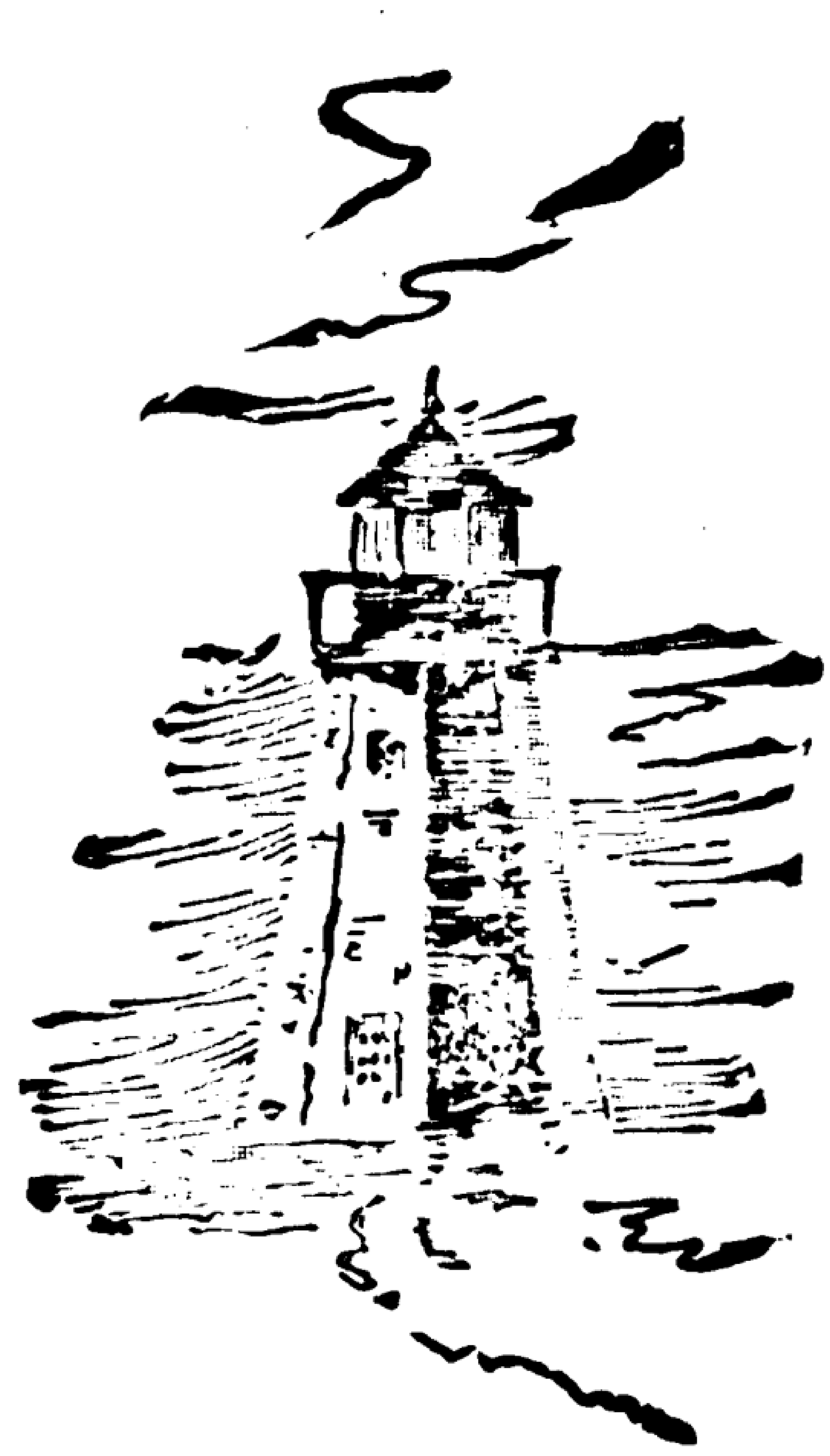
× × × ×

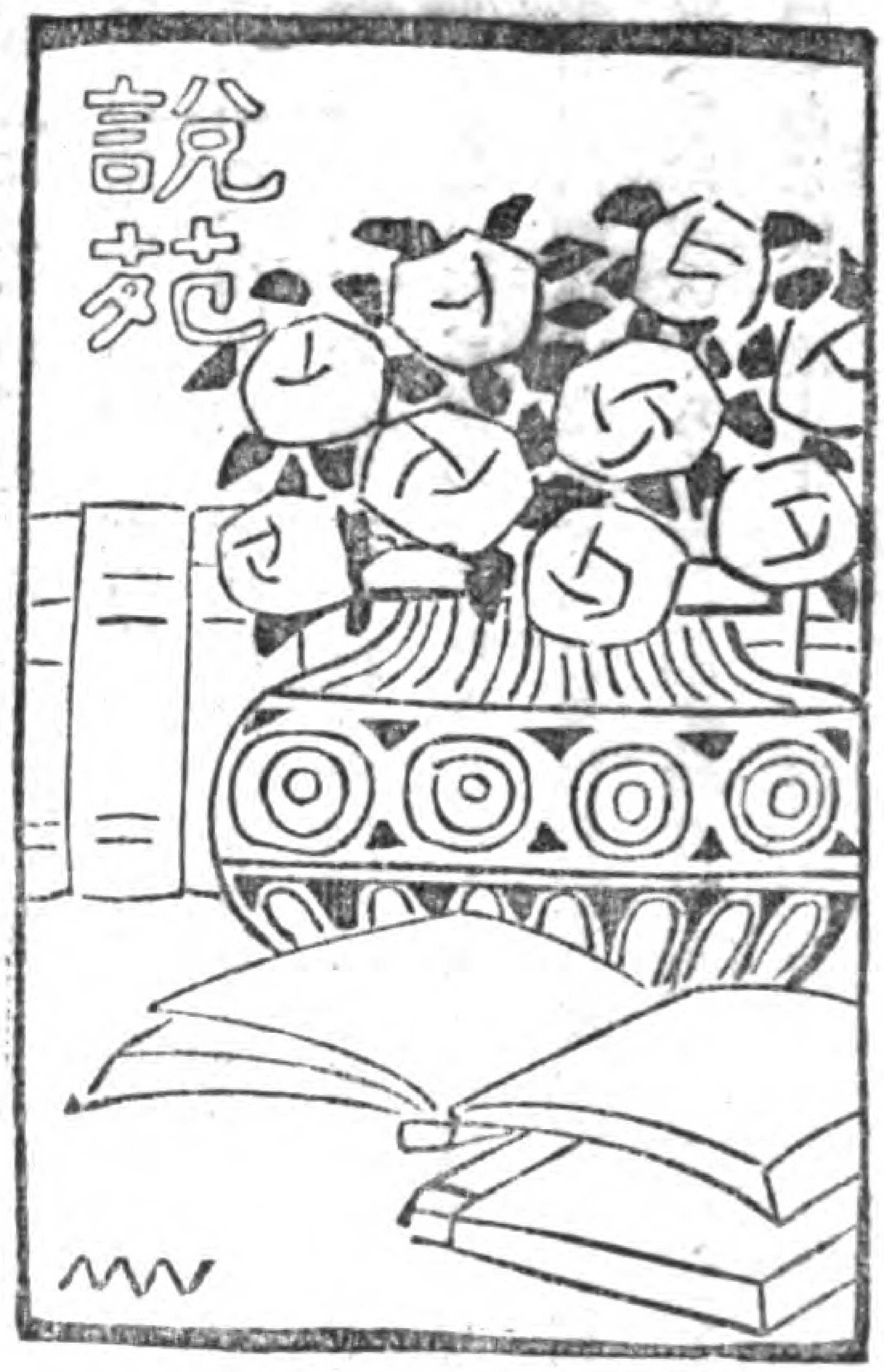
○要するに、僕の此問題に對する見解を約言すれば次の如くである。

一、無産者運動は、何處までも無産階級の運動である。當人の體驗と熱情とに依てのみ成功し得べき運動である。

二、但し如何にして其目的を達すべきやに就ては有識階級の助言に待たねば分らぬ。無産階級は自家の智能の有限なることと有識階級に恃まざる可らざる所以とを、十二分に知悉して居なければならぬ。

三、無産者運動と有識階級とは不可離の關係に在るものだが、之をして當然の効果を擧げしむる爲には二者が常に正しい關係に在ることを必要とする。而して正しい關係といふの何を意味するかは、上來述ぶる所に依て自ら明であらう。





貧しい自畫像

―『無産階級に生れて』續篇―

高須芳次郎

はしがき

昨年四月から六月に亘つて、本誌に『無産階級に生れて』(自傳)を發表してから、もう一年の日子がいつの間にか經つた。私は其の當時、一氣に續篇を書いてしまひたいと思つたが、貧弱な私の生活を長々と書くのは、どうであらうかと自ら省みて、一時筆を着けないで居た。ところが、本年四月下旬、本誌主幹瀧田氏が私を訪問されて「夏の臨時增刊號は「知識階級と無產階級」號と題するので、『無產階級に生れて』の記事が最も相應しいと思ふから續篇を書いたらどうか。」との懇命があつたので、私は好き機會であることを思ひ、喜んで執筆することになつたのである。素より私の貧しい自畫像が左程有力な暗示を讀者諸氏に與へるとは思はぬが、唯正直に僞らずに、(但し固有名詞は事情あつて多く變名を用ひた)筆硯勞働と貧苦と大きい不幸とに惱まされ續けて來た私の生を描き出した點に聊か特色があらうかと思ふ。茲に謹んで江湖諸氏の前に此の一篇を捧げる。

(第一) 貧乏生活時代

始めて新聞記者になつた話

四十四歳の今日、私が辿つて來た過去十數年間の生活を考へ

て見ると、何となく、大きな悪夢の連續であつたやうに、感ぜられる。そして今も尚ほ悪夢を見續けて居るのかも知れない。そこには、光りもなければ喜びもなかつた。得意の事もなければ僥倖の事もなかつた。唯生の苦鬪、悲痛、懊惱、煩悶、寂寞などが、太い一線を淋しく引いて居るだけである。

一體、お前は何のために生れて來たのか、何のために生きて居るのか。お前に取つては寧ろ呪はしく、厭はしい生を繰返し、繰返してお前は、そこに生き甲斐を感じて居るのだらうか。お前は十三歳から汗と涙なしに一錢の金さへも手に入れることが出來ないで、貧しい思ひをして來たのだが、筆硯勞働の二十年は一體お前に何を與へたか。貧乏と疲勞と厭世孤獨の感じばかりではないか。それにお前は前後、三人の愛兒を喪つて、お前の家庭はいつも五月雨頃のやうに陰鬱さに囚はれて居るではないか。何と云ふ憐れなお前であるか。何と云ふ淋しいお前であるのか。お前は大乘佛教の信仰に生きてゆかうと決心して居るらしいが、今のやうな貧しさと靑ざめた顔をして居ては、お前の信仰が、急にぐら付き出しはしないだらうか。底無し沼のやうに、いくら筆硯勞働を續けても、直ぐに素寒貧になるお前である限りは——

私はいつも、かうしたことを自ら考へることがある。それが非常に苦しい。けれども私は行くところ迄行くより仕方がないと思つて居る。新しい信仰の上に生きてゆくよりほかに道がないと信じて居る。それが私の定つた運命であると覺悟して居る。どうもがいても、あせつても、それ以上に出ることのむつかしい私である。今更『パルナッス・コンタンポラン』に據つて居た詩人メナアルやルコント・ド・リイルのやうに高踏して、パルナッスに引込んで見たところが仕方がない。

それにしても、私が十數年前、始めて新聞記者生活をした時分、私はいつも貧しかつたが、何となく、漠然とした幸福を感じて居た。それは、おぼろ氣ながら、未來に美しい運命が微笑んで居ると云ふ感じである。未だ見ない世界、知らない境地、美しい秘密、快い媚藥などが、仄かに私を待つて居ると云ふ感じである。日毎に生の醜悪や幻滅に直面しながら、ともすると、人生を夢幻的に美しくぼかして見ようとする幼稚な癖が、却て其の當時の私を幸福にしたのかも知れない。それが一時私を樂しくした。

私が好んで新聞記者となつたのは、それによつて生活を支えてゆくと共に、政治文學の上に新生面を開きたい爲めであつた。此の望みが遂げられたのは、ある偶然の機會からである。時は明治四十一年二月頃であつたと記憶する。ある日の午後、

K新聞編輯局長山田瑞二から私が假寓して居た京橋の旅館鶴屋へ電話が、かゝつて來た。

「成功か、失敗か。多分成功であらう。」

私は左樣考へながらも、胸を轟かして、二階の室を出て、電話室へ至つた。私が受話器を手にすると、

「高橋君ですか、私は山田ですが、只今社長から貴君について御話がありましたので、直ぐに社へ來て戴きたいのですが如何でせう。」

と云ふのであつた。

「有難う、直ぐ伺ひますから、徳谷先生へよろしく御傳へ願ひます。」

私はかう答へて喜びに滿ちながら、二階の室へ歸つた。

「愈よ新聞記者としての第一頁を展開すべき時が來た。」

と私は勇み立つた。私が此處まで行き着いたについては、一應事情を述べねばならぬ必要がある。私は二ケ月ほど以前不圖K新聞社長徳谷霞峰に逢ふ機會を得たことがあつた。其の時分、私は『東西南北』と云ふ雜誌を主宰して居て、ある政治上の問題について、霞峰の意見を聞くため、豫め電話で照會して置いてから、K新聞の應接室に霞峰を訪ふたのである。

□

私は田舍に居る時分から、霞峰の著書を貪るやうに多く讀んで、新聞界の第一人者として心から仰慕して居た。霞峰が主宰して居た『民衆之友』やK新聞なども、早くから愛讀した。時にはマコリイの如く、時にはバアクの如く、時にはエマースンの如く見ゆる霞峰の文章は、強く私を魅した。當時、彼れのやうに、花々しく、若々しいスタイルを以て、政治や文學や、思想や教育などを論ずるものは他になかつたのである。

私は東京へ來てからも、いつか霞峰に逢ひたいと思つて居た。『東西南北』を創刊した頃、私が『偉人修養之徑路』と題した小冊子を商業之日本社から出版すると、先づそれを霞峰に贈つて、教へを求めた。其の時、霞峰は、K新聞の『編輯だより』で、私の小著を推賞した。左樣した緣から、私は『東西南北』の用事で、霞峰に逢ふことになつた。

霞峰は、身長が高くて、がつしりした體格であつた。大きな半白の頭、少年のやうに血色の宜い顏、少し藪睨みらしい眼、高いギリシヤ式の鼻などは、特異の感じを私に與へた。彼れは、イギリスの紳士風に質素な鼠色の洋服を着て、胸間に時計の鎖を無造作にからませて居た。眞直な姿勢で、椅子により

かゝつて、肉附の宜い大きな手を膝の上に置いた樣子は、私がそれまでに見た小說家や文藝評論家などと丸で異つて居た。全體にはち切れるやうな精力が溢れて居て、神經纖維が太く健かであるやうに見えた。私が霞峰に何か問ふと「はあ」と大きく、落着いて答へる聲にも底力があつた。

霞峰は其の時、私に政治文學の話をして、『リチャード・コブデン傳』を書いたモーリイなどのことを語つた。十五分間ばかりで、私は霞峰の許を辭したが、其の時の印象を長く忘れることが出來なかつた。

「これを機會に霞峰先生の指導を受けて、新たに政治文學を研究したら、私のやうなものでも、ある程度の發達をするであらう。」

私はそれを信じた。それ以來、私はK新聞の記者になつて見たいと頻りに思つた。

私は種々考へた末、兎も角、一度霞峰に遭つた緣があるので、ある時、私は思ひ切つて、入社の希望を書いた長い手紙を突然、霞峰の許へ送つた。それを霞峰が手に取つてどう思つたであらうと其の事が、非常に氣になつた。一體私は臆病で氣が小さくて、妙にハニカミ屋であるので、突飛な事をやつたあとは、いつも後悔した。

「突然、私の手紙を受取つた霞峰氏は私の非禮を怒らないであらうか。苦い顏をして、其儘、默殺しないであらうか。それとも私の希望を容れて、K新聞の一員に加へてくれるであらうか。」

私は胸のうちで、左樣した考へを繰返して獨り焦慮つて居た。かうして二三日が過ぎた。それから、山田瑞二からの電話となつたわけである。私は飛び立つやうな思ひで、K新聞社へ出かけた。

□

受付へ名刺を出すと、私は直ぐに應接室へ通された。程なく、編輯局長山田瑞二が扉を排して私の前に現はれた。一見、五十歲に近い、人柄の宜さ相なところが親み易かつた。瑞二は始終、柔かい微笑を赤ら顏に浮べながら、

「目下、社には缺員がないのです、然し社長からの命令で、君だけは特別に入社して戴くことになりました。御手紙によると政治部へ這入りたいと云ふ御希望のやうですが、社會部の方では如何でせう。暫く其の方で我慢して貰ひたいのですが……」

と云つた。私はそれを聞いて一寸失望した。けれども既に乘

りかゝつた船である以上は、今更、後へ引返すわけにも行きかねた。

「後日、政治部へ這入る機會が來るだらう。」

私はかう思つて、

「社會部でも結構です。」

と答へた。

「では諸君に紹介しませう。」

と山田は私を薄暗い編輯局の中へ導いた。其處は、私が思つたよりも狹い質素な室であつた。全體で十六疊ほどの廣さしかなかつた。室の中央に大きな戸棚のあるテーブルを据えて、社長が『編輯だより』の筆を執つて居た。私は山川の後に蹤いて先づ社長に挨拶してから、政治部長の吉川太右エ門、社會部長の黑木敬一郎らに山田から紹介して貰つて「何分よろしく……」と挨拶した。續いて私は社會部の重立つた人々に逢つた。

私は其日、別に執務しないで、翌朝から出社することになつた。

「今日から私は久しく愛讀して居たK新聞の記者となつていつも仰慕して居た德谷良峰氏の許で働くのだ。」

かう思ふと、私は前途に希望と光りとを感じた。未だ寒い二月ではあつたが、其の朝の太陽は愉快さうに私を見下して「俺はお前の前途を祝福するよ、生の春がお前の眼前に現はれたのを見よ、俺はお前の新聞記者としての第一日が成功のページを以て開かれるであらうことを希望する。しつかり腰を据えてやれ！」と云つて居るやうに思はれた。

私は午前十時頃、出社した。其の日から私は社會部編輯主任塚原愛亭と向ひ合つて、編輯局の一隅で、地方版を編輯することになつた。私が擔當したのは、主として京阪版、房總版などであつた。それは地方通信員から送つてくる文章を添削したり取捨したりして編輯する丈のことで、私には寧ろ氣樂過ぎた仕事であた

當時私の興味を惹ゐたのは、新しい活氣に滿ちて居た編輯局の空氣であつた。それは、K新聞がH新聞やアメリカの新聞などを參酌して、社會部の記事に大きい刷新を加へた頃で、部長以下何れも血氣盛りの人たちが中心になつて活動して居た。部長黑木は血色の宜い丸顏に元氣を滿えて、いつも大きな眼玉をくるくる動かして、一分間もぢつと座つて居なかつた。彼は活動を愛し、諧謔を愛し、ぱつとした花やかな記事を愛した。

彼れの下には塚原愛亭のほかに雜誌記者として早く文名を馳せた千田鶴一や、木賃宿通信、貧民窟探檢などで知られた楢崎愁眠や、M新聞の懸賞脚本に當選した山谷狂花などを始め、劇通の永江寒泉、一種の頓才を持つた日部珍一などが居た。其の

他の記者も一粒選りの人々のみであつた。それに時々、社會部の記事を供給してくれる吉川太右エ門は子規門下の俳人として知られて居た。今一人、文學好きの政治記者舘林剛堂が居て、異彩を放つた。彼れはニーチエの哲學が文壇を風靡した頃、G・T生の名で、K新聞紙上に桑木嚴翼の『ニーチエ氏倫理說一斑』を非難して、桑木と論戰したことがあつた。そして剛堂の非難は鋭く桑木の弱點を抉つたのである。

かうして編輯局は社會部が中心となつて居た形があつた。何か少し大きな問題が起ると、それを中心に二ページに亘つて、花やかな記事を出すと云ふ具合で、K新聞の讀者は其の方へ注目を集中するやうになつた。以前にくらべると、販賣紙數が三倍にも四倍にもなつたと噂された。それほど、社會部が目ざましく活動したのである。其の中で、殊に外勤記者の働きがきびきびして居るやうに私の眼に映つた。私も何となく、ぢつとして居られなくなつた。けれども最初は自分を强ゐて抑へ付けて、地方版の編輯に甘んじた。

ある日、露峰が私の方へ近寄つて、いつものやうに「何うだ」と愛嬌ある調子で云ひかけてから、

「玆に好い材料を見付けたから、一つ譯して下さい。」

と一紙片を私の手に渡した。それは、あるアメリカの新聞に出て居た舞踏會の記事であつた。私は翻譯が得意でない上に側に英和辭典がないので、少し困つたが、大意だけはわかつたので、それに文飾を加へて、塚原愛亭に渡した。それが愛亭の手から直ぐに印刷工場へ廻はされて、翌朝の新聞に活字となつて出て居たのを見た時、私は少し擽つたいやうな氣がした。

其の後、社長はまた突然私に『ネーション』に出て居た『新聞社會の現勢』と題する論文を翻譯させた。それは前日の舞踏會の記事よりも遙かにむづかしかつた。一二箇所わからぬところがあつた。けれども其の時は、舘林剛堂が居なかつたので、私は大意を譯述してやつと責任を誤魔化した。私は何となく、冷汗が流れて出るやうな氣がした。

新參記者の平凡な日は、かうした事で、夢のやうに過ぎた。薄暗い編輯局の古机によりかゝつて、しめつぽい空氣の中に沈湎して居ることが、時々私に窮屈の思ひをさせた。私は靜かに外勤記者となるであらう時がくるのを待つて居た。

未知の世界を見た話

私が入社してから約一ケ月ばかり經つと、愛亭から始めて外へ出て材料を取ることを命ぜられた。私は久しく籠の中に居た小鳥が始めて大空に向つて放たれたやうな喜びを覺えて、花見

だより」を書いた。私は虚子や碧梧桐らが、『日本新聞』に居た頃、矢張左樣した閑文字を書いたであらうことを想ひ出した。

四月から私は全く外勤記者となつた。私が行く方面は略ぼ見た儘の印象を書けば、それで事が濟んだ。複雜な事件で精探を要するやうなものは、楢崎愁眠、田部珍一らが、探訪専門の小川地籟、下川華翁などと協力して興味ある記事を纒めた。私は有栖川宮（威仁王）が薨ぜられた時、其の葬儀の模樣を拜觀して書くために生れて始めて、いかめしいシルクハツトを被り、フロツクコートを着た。勿論、僅かに私ひとり生活してゆく丈の月給を貰つて居た私であるから、其の用意のあらう筈はなかつた。社に備へ付けてあつたのを借用したのである。シルクハツトは漸く私の頭に合つたが、フロツクコートは私よりも肥滿した人が着用したものと見えて、だぶ付いて仕樣がなかつた。それを我慢して、私は二人曳きの人力車に乘つて、護國寺へ出かけた。

私の見る世界は、日毎にぐるぐる變つた。ある名門の結婚について材料を調べる日があるかと思ふと、其の翌日は名士の病中の事を書いたり、其の翌々日は、ある俳優の園遊會の模樣を書くために向島へ出かけたりした。それらは　すべてが私の雜誌記者時代に經驗しない世界であつた。時には、觀櫻會、競馬會、避暑地めぐりなど、季節につれて起る事柄を興味深く眺めながら、書いたこともあつた。新しい刺戟から更にもつと新しい刺戟を追ひ求めて廻るのが、面白かつた。

左樣した中に私を困惑させた事件もないではなかつた。それは五月の風が爽かに若葉を吹く眞盛頃であつた。編輯主任の塚原愛亭の許へ其の日の拂曉、本所のある町に殺人事件が起つたのを電話で報じて來た。其の時、左樣した方面を精探する記者が地方へ出張して居なかつた上に、楢崎愁眠や田部珍一らも居合はせなかつた。差當り、私が其の事件を調査せねばならぬ役に當つた。

「私は、かうした血腥い事件を一度も調べたことはありませんから相當の記事を書くことが出來るかどうか、丸で見當が附きませぬけれども、一應出かけて見ませう。」

と云つて、先づ本所警察を訪うて大體の樣子を聞いた。それから殺人事件が演出された家に出かけて見た。これは、ある材木屋の隣にある古い家で、もう二三人の新聞記者が來て、近所の人たちから頻りに樣子を聞いて居た。私は探偵小説によく用ゐられる場面や犯罪心理のことなどを考へて、其處に物凄い光景、人物などを想ひ浮べた。ところが、其の殺人事件は一場の

痴情から演出されて、未遂に終つたと云ふので、事柄が單純で、ロマンチツクな色合が薄かつた。それがため張りつめて居た私の心持がゆるんで、警察で聞いた材料を土臺に平凡な記事を書いた。

「私が探訪術に長じて居たら、もつと興味多い記事が出來たかも知れない。けれどもそれは到底私の柄に敍まらぬことだ。」

と私は淋しくあきらめてしまつた。

□

七月に入ると、桂内閣が成立した。其の時、K新聞では、閣員の家庭を中心に其の夫人たちの日常生活を書くことになつて全員悉く出動した。私は陸軍大臣として居殘つた寺内の夫人と新たに文部大臣となつた小松原英太郎夫人の事を精探して書くことになつた。私は未だ一度も大臣級の人々に逢つたことがない。それに、窮屈な禮儀などを要するところへは行きたくなかつた。けれども新聞記者となつて居る間は、社命に背くわけにゆかぬ。私は社から紹介の名刺を貰つて、小松原文相と寺内陸相とを訪ふことにした。

□

私は内心、其の成功を危ぶんだ。重い足を引きずつて、先づ文相を其の自邸に訪ふたところが、執事らしい人が私を引見して、記事の材料を供給してくれた。私はほつと安心して、今度は官邸に寺内陸相を訪ふた。私は寫眞の上で、ビリケン頭の寺内を知つて居たけれども、未だ一度も逢はぬので、どんな人か知らなかつた。正直で謹嚴な風があるやうに思はれたが、また何となく、小むづかしいところのある人のやうにも想像した。

私は恐る恐る小さくなつて、受付へ名刺を差出すと、直ぐに陸相の居る廣い、さつぱりした室へ通された。陸相は卓子によりかゝつて、書類を見て居たが、やがて私の方を向いて、威容を示しながら、素氣なく、

「何の用で來たか。」

と冷めたい調子で、詰問するやうに云つて、頭からぢろりと私を見下した。私は一寸取り付きやうがないのに當惑した。平生、大臣級の人々に逢つて居れば、大體の呼吸がわかるが、左樣した經驗が未だないので、どんなことを云つて宜いか、わからなかつた。私は唯率直に、

「K新聞へ新内閣の方々の御家庭や御夫人のことなどを書き

たいと思ひますので……」

と述べて、都合で陸相夫人に逢ふことを許されたい旨を告げた。それを聞くと、陸相はぐつと私を睨み付けた。

「左樣なことは相成らん。」

と鋭く云ひ放つて「もう用はないから歸れ？」と命令するやうに不機嫌な顏をした。私は性來、氣が小さい癖に負け嫌ひで短氣であるから、陸相の言動がひどく癪に障つた。

「陸相と私との間にどの位の懸隔があるか知らぬが、德谷社長の紹介で來てゐる以上は、も少し士を遇するに道を以てすべきである。丸で私を眼下に見て、奴隷に對するやうな言動を示すとは何事だ、餘りに私を侮辱して居るぢやないか。宜しい、何も君から話を聞かなくとも差支えないのだ。また聞いたところで書かうとは思はない。」

私はかう思つて、「失禮します。」と冷かに挨拶した儘、憤然として陸相官邸を辭去した。そして社へ歸ると、直ぐに愛亭に寺內陸相のことを話して激怒した。それを社長が傍らで聞いて居たと見えて、靜かに私を敎へるやうに、

「君、新聞記者は怒つてはいけないよ。どんな場合でも、ある仕事を持つて居る間は怒るものではない。怒れば材料が採れなくなる。若い人は誰れも感情に激し易いから、それを謹むことが、新聞記者として、第一に必要だ。」

と云つた。私は此の言葉を聞いて、始めて新聞記者のコツに觸れたやうな心持がした。けれどもそれは私に取つて「可なりにむづかしい事だ。」と思つた。それでも「今後、成る丈、癇癪の虫を抑へて怒らぬ事にしよう。」と私は決心した。

貧乏に追ひかけられた話

其の時分、私の生活は興味中心で、少しも學藝に親まなかつた。唯日々に新しい刺戟を得て居れば宜かつた。唯私が一番困つたのは生活費の不足であつた。社で受取る月給だけでは、私の小遣にも不足することがあつた、其の不足を補ふために、時々雜誌へ趣味本位の記事を寄せて、其の報酬を小遣に當てゝ居た。

「こんなに貧乏では仕樣がない。」

と思つたが、どうすることも出來なかつた。愁眠や珍一や闘堂なども、矢張清貧組であるらしかつた。

「そろそろ寒くなるが、外套が買へないんだ。困つたことだ。」

といつも元氣な愁眠はある時、窶れながら、私に話したことがあつた。其の愁嘆を聞く私にも、未だ外套の用意が出來て居

なかつた。愁眠には妻子がある上に、折々よく酒を鯨飲するので、私よりも餘計に月給を貰つて居たらしいか、自制して貧乏に打克つ力がなかつた。私が其の後柳原へ出かけて、古外套を買ひ、それを着て出ると、愁眠は羨ましさうに、眼を瞬つて、

「外套を新調したね。えらい景氣やな。」

と冷かすやうに云つて、私の外套に手を觸れて見た。其の外套は私りよも二寸ばかり身長の高い人が着て居たと見えて、その裾が私の足許へ屆いて居るので、私はそれが氣になつて仕様がなかつた。

「實は柳原で十五圓で買つて來たんだが……」

と言はうとしたが、自分乍ら、情ないやうな、淋しいやうな氣がして默つて居た。

「高橋君、君は何を考へ込んで居るのだ。新聞記者には、貧乏は附き物だな。」

と愁眠は云つて輕く笑つた。

「貧乏、貧乏、こいつを追ひ拂はうとすればするほど、後から蹤いてくる。然し他日大記者になれば、貧乏を征服することが出來る。まあ幻滅的なことは考へないで置かう。僕らの前途は未だ長い。今日は何處かで飲もう。」

私は自ら慰めてもう夕刻に近い頃であつたから、相携へて葭町まで、電車で至つて、ある家で若い女を呼び、芳醇な酒を飲んだ。愁眠は直ぐにはしやいで、太つた腹を前へ突き出し乍ら、雲右衛門の調子を眞似て、浪花節を唸つた。

「頃は元祿十四年……」

と彼れは聲張りあげて、一節を巧みに歌ふと、盃を取りあげて、ぐつと酒を飲んだ。私は何も歌へないので、淺草海苔を肴に、無暗に酒を煽り付けた。二人はいつか醉ひ倒れて其の夜は待合で一泊した。

□

其の時分から、私は殊に酒に親むやうになつた。ひどく飲むと、其の翌日、頭がぼんやりして、考へる力が減退するのを知り乍ら、酒席へ出ると、飲める丈飲んだ。五六合の酒では、未だ醉ひが廻らなかつた。私はある時、大森に居る鳥羽筑峰を訪ふた。筑峰はニイチエ鼓吹以來、小說『洗ひ髮』などを書いて、ビールの泡を吹くやうに氣焔を揚げて居たので盛んに私にビールを勸めた。そして彼れは妻君の弦で、『太十』などの淨瑠璃を聞かせた。それがまた餘りに巧妙過ぎたので、私は避易して、到頭、ビールばかり飲み通して、一ダース以上に及んだ。筑峰の家を出る迄は、左程醉ひが廻らなかつたが、電車に乘

つてから、一時に醉ひが發して、私は車中で眠つてしまつた。私が品川へ着いて始めて目醒めて、電車を下りると、不圖紙入がないのに氣附いた。見事に掏摸に奪ひ去られたのである。今更、悔ゐても仕樣がないので、酒がすつかり醒めてしまつた。

其の翌日、私は悄然として一日、酒を謹んで居たが、翌々日になると、また以前のやうに、ぐんぐん飲んだ。それがため、私の頭は、始終霞が張つて居るやうに、ぼんやりして、思想問題などは、少しも考へることが出來なかつた。けれども「今に何か立派な物を書く。」と自分の愚昧を蔽うて、酒中の天地に放浪して居た。かうして私の頭は愈よ荒んだ。

私は新聞記者に一番必要な時計を質に流してしまつてから、暫く持つて居なかつた。大抵の事は、貧乏に負けて、頓着しないで居たが、時計だけは、何とかして求めたいと思つた。折柄、黒木が最近アメリカから來たと云つて、立派な最新式の金時計を私に見せたので、愈よ時計が欲しくなつた。それで私は商業之日本社の婦人雜誌を主宰して居る高谷綠水に其の事を話して、稍長いロマンスを書いた。其の稿料でやつと銀時計を買つた。

時計の事について、私は德谷社長の逸話を聞いたことがあつた。社長は新聞の事について極めて敏活で「私らには第六感、第七感が必要だ。」と云つて居たが、電車の中、街上などでは、時にうつかりすると見えて、其の銀時計を掏り取られることが度々であつた。それでも社長は一向、頓着しないで、また時計を掏られたことを呟しもしなかつた。私には左樣した餘裕がいつ出來るであらうかと考へさせられたことがあつた。

舊友の話

私が貧乏に沈倫して、荒怠の日を送つて居るうちに、舊友の多くは、緊張して、正しい努力に滿ちた日を重ねて居た。小村秋雨は私がK新聞に入社する少し前に、海外留學の人となつた。彼れは小說家として順潮に掉したばかりでなく、深くキリスト教を信じて、酒も煙草も口にしたことがなかつた。彼れは生活費の余分を年々貯蓄して、海外留學費を作つたのである。

秋雨は最初、アメリカへ渡つて、プリンストン大學に入學した。そして英米文學や神學などを研究した。秋雨は留學前、私が酒を飲み始めて、昔のやうに眞面目に勉強しないのを心配して居た。それで彼れは、プリンストンの學窓から、長い英文の手紙を私に寄せて、キリスト教を信じて、敬虔な生を送るよう、切に勸めた。其の手紙の中で、秋雨は「アメリカへ來てから、親友がないので淋しく暮らして居るが、イエスと共にある

ことを思ふと、精神的に淋しくない。」と云ふ意味を述べて、神の恩寵を謝した後、

「嗚呼此の世界は何と神秘的ではないか。それにしても、人間の靈魂は一層神秘的だ。若し人が此の眞面目な深い人生の意味に觸れないとしたら、世界中、これほど憐れなものはない。左様した人たちは最も悲惨な精神的孤兒だ。私は君が此の事に考へ及んで、其の心を天の父に向けんことを切に望む。左様すれば、君は人生の寂寞から必ず神の手に救ひ出されて、確實に樂しく生きることが出來よう。」

と述べてあつた。私は異郷の空を仰ぎながら、私の事をそれほどに思つてくれる秋雨の友情を感謝した。私は其の時分、秋雨とちがつて、キリスト教から離れて、異端者としての道を歩んで居た。靈よりも肉に、禁慾よりも享樂に、天使よりも惡魔主義に傾いて居た私は、到底イエスに歸することが出來なかつた。

「秋雨よ、貧しい一人の Bacchanalian の存在を許してくれ。曾て私は君と共に神の福音に耳を傾けて、極端な禁慾生活をしたことがあつた。けれどもそれはもう十年前の夢だ。私はキリストの教へについて深い疑ひを抱いて居る。私はニイチエと共にキリスト教に反抗する一人だ。人間の本能を謳歌する異端者だ。酒神の囁きに耳を傾ける破戒者だ。私はアメリカ人のやうに僞善の徒たるよりも寧ろ僞惡の人たらんことを切に欲する。皮相的に善を讃嘆するよりも、深酷に惡の讃美者たらんことを欲する。惡のうちにも美がある。眞實がある。結局、私の行く道は、丸で君と異つて居る。私は今それをどうすることも出來ないのだ。」

私はかう云ふ意味のことを書いて、プリンストンに居る秋雨の許へ手紙を贈つた。それでも、秋雨は私を咎めようとしなかつた。

□

其の後、また彼れから手紙が來た。もう其の頃彼れは、プリンストンを去つて、ドイツの首都ベルリンに居た。

其の後失禮、頃日起居如何。K新聞紙上、君の論説なり批評なり出てゐるものを時々送つてくれ給はんか。僕は久しく君の文を讀まない。三田村のは、時々『太陽』などに出て居るのを見て居る。伯林生活は中々面白い。これで金が澤山あれば申分なしだが、その點はどうも思ふに任せぬ。最も後援者を得たので、少くとも、一箇年は滯留し得らるゝ筈だ。友人は三箇年間居て、獨佛文學をマスターしてゆけ、便宜は

充分に與へると云つてくれるが、故郷からは、母が頻りと歸朝を促してゐるし、僕もあまり長く居るのが善いか惡いか分らぬので、右の友人の厚意は謝して居るが、まア長くて一箇年半、更に延期しても、二箇年以上は居るまいと考へてゐる。(中略)獨逸語は本場に來てゐると矢張それ丈功能が見えるやうだ。文學者としても、もう英語丈では時勢に遲れる。少くも獨逸語か佛語を兼ねる必要がある。三者行けば頗る結構だが、ソウもなるまい。君も獨逸語は大に進んだか。昨今はどうだね?。時々通信を待つ。

秋雨が大阪時代から一貫して、西歐文學研究を續けてやまぬ心持が茲にはつきり出てるのを見て、私は自分を恥ぢた。私は學校を出てから、ドイツ語を拋棄してしまつた。比較的親んだ英米文學からも次第に遠ざかつた。時々出る新刊書にも手を觸れなかつた。唯二三の新聞雜誌を見る丈であつた。それさへ義理一遍に見るので、自分から進んで思索したり、批判したりしようとしなかつた。かうして私は、おそろしく怠け者になつて居た。けれども私はそれをどうすることも出來ないほど頽廢して居た。それでも、私は不思議に失望しないで自ら欺いてゐた。

「私は秋雨のやうに學究にならずとも、一新聞記者として、生きた社會を研究すれば宜いのだ。書物の蟲になつて見たところで、それが何になる。街頭へ出て、火花を散らすやうに働き廻る方が眞劍で餘程愉快だ。それがまた私の行く道として、最もふさはしい。」

と强ゐて思つて見た。だが、心の底に何となく一種の物足りなさを感じた。左様した場合、私は酒をぐんぐん煽り付けて、自己に對する不滿を忘れようと力めた。だが却て醉はないで、頭が妙に冴えた。そして秋雨よりも一層峻嚴な野山段之助が其の時分、私に寄越した手紙の一節を思ひ起した。

(前略)悠々たる日月と共に根底深く厚き修養をするといふことは、年來僕の持論であつて、兄にも度々忠告したる處、兄の此頃の活動について、僕は深く以て悅びとなしつゝある。願くばともに〳〵前途遠き希望の彼岸に進まうよ。尙ほ僕らは、脚下を蹈むことが堅確で、眼光は常に遠大の處に透徹しつゝあらねばならぬ。

と云つた野山の言葉は異端者の眼から見ると、平凡な忠告にちがひなかつた。けれども野山の實生活から出た言葉として考へると、動かすことの出來ない重さを其處に持つて居た。彼れは日蓮主義の宣傳に日夜心身を勞した。自活布教をしたり、道路說教をしたり、毎月出る機關雜誌に原稿を書いたりした。其

の多忙の裡に彼れは深く佛敎を研究し、哲學、科學なども修めて倦むことがなかつた。彼れのする事はすべて眞劍であつた。彼はもう立派な學匠であつた。

それに野山は僅かに彼れの母と自分とを養ふ丈の收入しか得て居なかつたが、それでも、彼れは佛天の恩寵を感謝して、不平を云はぬだけの修練が略ぼ出來て居るやうであつた。一時彼れも生活について、可なりに惱んだ。宗敎に一身を委ねようか、それとも俗世間の人にならうかと頻りに迷つたことがあつたらしい。今は彼れの堅固な日蓮主義の信仰が、彼を力付けて、彼れの前に天地が、ひつくりかへるやうなことがあつても、其の信仰を揺がすことがないまでに進んだ。

私は野山と手を携へて、長い間、共に進んで來たが、今となると、野山の歩いてる道よりも遙かに後れたところに私が居ることを痛感した。秋雨にも、野山にも追ひ越されて後に自分ひとり取り殘されて居る姿を凝視すると、一脈の哀愁が水のやうに私の胸を流れた。

新聞改革に參加した話

其のうち、私は突然、私が愛して居たK新聞社を去らねばならぬ事情に迫られた。それは、今度、M新聞が私の母校の人たちの手で、すつかり編輯さるゝことになつた爲めである。母校の商學部長をして居る畑中穗麥が主筆となつて、M新聞を『ロンドン・タイムス』のやうな高尙なものにして、時流に媚びる惡風を排しようとするのであつた。私は北村浩月の推薦で畑中穗麥に逢つて、M新聞の社會部長兼文藝部長になることに決定した。K新聞の社長に對する情誼を思ふと、私は聊か心苦しかつたが、母校のためとある以上は、K新聞を去るよりほかはなかつた。私は社長に告別し、同僚に挨拶して、一年半ばかり、勤めた社から離れた。

M新聞社へ來てから、私は非常に多忙になつた。社會部には、母校を卒業したばかりの人たちが七八人居た。それらの人たちは、社會記事の書き方や、材料を精探して歩く呼吸などが丸でわからぬので、私から一々敎へねばならなかつた。それは恰度、新聞學校のやうな具合であつた。當座の間、私は初心の記者たちに、每日社會記事の講義を續けたのである。

私は朝九時半頃に社へ出て、夜は大抵八時頃まで居た。日曜日でも休まないで勵精した。それが纖弱な私の身心を烈しく害ねた。私は每日、二三度必ず眩暈を感じて、今にも卒倒しさうな氣分になつた。それでも、自分の思ふ儘に新聞を作つてゆけることが、私に仄かな滿足を感じさせた。

唯一つ非常に窮屈なことがあつた。それは社會記事の中へ男女の心中や俳優の結婚や藝妓、遊女などのことを一切採り入れてはならぬと云ふ規定であつた。其の時分、どの新聞も誇大なセンセーショナルな記事を争うて出して居た上に、俳優、藝娼妓や男女の心中、情事などを喜んで載せる風があつた。通信社もそれを知つて、左様した材料を力めて供給したので、美事善行の類は、丸で報じなかつた。それで高尚な記事を出すことは餘程困難であつた。私は仕方なしに、ある日、材料の都合で、ある青年俳優が柳橋の美妓と結婚する記事を出した。

ところが、畑中蓼坡は社へくると、私の處へ來て、柔かな調子で、

「俳優のことは一切、社會記事のうちへ出さぬことにして下さい。劇評だけは仕方がありませんけれど……」

と注意した。また私の下に居る編輯助手の秋花尚久太、不圖ある名妓のロマンスを地方版へ掲げたところが、それも東京版へ出すことを禁ぜられてしまつた。かうした具合で M新聞の社會記事は純潔ではあるが、普通の讀者には喜ばれなかつた。私はこゝら讀者の不滿を緩和するため、[illegible]曜[illegible]錄[illegible]特に力を入れた。それは第一ペー[illegible]を美[illegible]い色[illegible]にして、[illegible]味[illegible]心の家庭記事を程よく配置したものである。此の方は、讀者受けが

宜かつた。

□

當時社説には、一切ルビを付けぬと云ふ有様で、全體が堅苦し過ぎた。それで四五箇月のうちに紙數の賣高がぐつと減つて、經營困難となつた。そして半年目に編輯部を改革することになつた。私は其の時、主筆と進退を同じくして、社を辭した。それから間もなく、主筆の紹介で、N新聞の文藝部長に聘せられた。

N新聞には、古參記者が多かつた。最初から幹部の一人として這入ると、どうしても、長く留ることが出來ない例になつて居た。古參のものが、何とか理由を附して、新幹部を排斥する風があつた。私は左様したことを知らぬのではなかつたが。貧乏で、無爲に甘んじて居るわけにゆかぬので、入社した。それと前後して、私は新妻を迎へて、芝の南佐久間町へ寓居を定めた。

それから少し前に、秋雨が歐米留學の旅から歸朝した。私は三川村醒夢と共に、彼れを新橋停車場に迎へた。霧の深い朝秋雨は彼れを同伴して、新橋に近き、附近の旅館に休憩した。私は一見して、秋雨が日本を出發した當時と大分變つたこ[illegible]を知

つた。以前、いが栗頭で洋服を着なかつた田舎者のやうな彼れが、今は頭髪を伸ばして、それを綺麗に分け、立派な洋服を着て居た。そして日本に居た時、曾て一度も口にしたことのない卷煙草を旨さうに燻らして居た。

秋雨がどんなに變らうとも、私は何よりも彼れが無事に歸朝したことを心から喜んだ。私らは、旅館で先づ彼れのために祝杯を擧げた。其の時、以前禁酒を固く守つた秋雨も、快く酒を飲んだ。

「大分、君も變つたね。」

と醒夢が云ふと、

「變つた！僕はもうキリスト教から離れてしまつた。歐米に於けるキリスト教の墮落は實にひどい。」

と秋雨は慨くやうに答へた。

「君も僕のやうに異端者になつたわけだね。」

と私は云つたが、どうも意志の強い秋雨が一足飛びに、異端者となるやうに思はれなかつた。未だ何處かに秋雨がいつも嘆美した清教徒らしい氣分が、殘つて居るやうに私の眼に映つた。

其の日は、醒夢も私も社用があるので、直ぐに別れた。其の歸途、私は、秋雨の歸朝歡迎會を富士見軒で開くことに話を定めた。

新生を求めた話

私らが秋雨の歡迎會を開くと間もなく、秋雨の『牧師の家』が『東京朝日』に出た。其の時、秋雨は雅號をやめて、本名を出した。彼れは舊衣を悉くぬぎ捨てゝ、新戯曲家として、文壇に起つたのである。そして社會劇の荒野を根氣よく開拓してゆかうとしたのである。

其の時分、私は明治三十四年頃から、時々開いて來た金曜會を南佐久間町の家で催ほした。河合迷醉、大山松風、三田村醒夢、小村忠藏らが、久振に顏を合はせた。迷醉は『電報新聞』記者を振出しに『女子文壇』主筆となつて、いつも詩の一路を眞直に歩くことを忘れなかつた。一時『詩人』を發行して、詩壇に新空氣を注入した。大山は醫師となつて、龜戸に開業して居る傍ら、暇を見て短歌を作つて居た、此の二人には、長く逢はなかつたのである。

醒夢と私は一番親しく往來して居た。醒夢は大抵私と同樣の道を歩いて居た。此の頃は『東朝』社會部に居て、國木田獨歩や川上眉山が前後して死んだ時、醒夢が懸命に驅け廻つて、他の新聞よりも詳しい記事を書いた。殊に眉山のことを書いた折

には、其の毎月の生計費の細目を露骨に發表したので、文壇の一部に反感を起させたことさへあつた。それほど彼れは敏活に働いてゐた。

新歸朝者の小村は、珍しく和服を着て來た。秋雨の雅號をやめて、忠誠となつた新人としての彼れを迎へて、私らが金曜會を開いたのは、此の夜が其の最初であつた。昔と異つて、實生活に面して、種々別な方向へ進んだ舊友が、かうして一堂の下に集ると、たとひ一時的にでも昔の無邪氣な時代に歸り得るのを誰れも愉快に思つて居るらしかつた。

私は友人に新妻を紹介して、貧しい晩餐の膳を出した。酒がくると、眞先に大山が少し飲んで見て、

「どうも此の酒は少しまづいね。もつと宜い酒を出したらどうだ。」

と戯言を吐いて、大きく笑つた。

「僕は今夜、二升位飲むぞ。」

と醒夢が元氣よく云つた。

「かうして、久振に會合するのは愉快だね。矢張金曜會は宜い。」

と若醉は低い聲で云つて淋しく微笑した。小村はそれらの様子を默つて見乍ら、愉快さうに盃を手にして居た

「小村が酒を飲むやうになつたのは確かに進化だ。」

と醒夢は、もう顏を眞赤に染めて、皮肉な戯言を小村に浴びせかけた。

「僕が進化したのなら、君は退化して居るのだ。」

と小村は頭から醒夢を抑へ付けるやうに云つた。

「君は一時嚴肅だつたからね。君が酒を飲まない時代は窮屈で困つた。まあ君が飲んでくれた方が、僕ら異端者に都合が宜い。」

と私は小村に身方した。

「ベルリンの酒はうまいかね。」

と大山が云ふと

「ビールは實にうまい。ベルリンに居る時は鷗外の『舞姫』を思ひ出した。」

と小村は、當時の生活を追憶するやうな風であつた。彼れは少し眼を細めて何か心に幻を描いて居るやうであつた。

「金髮の美人が君にラブしたと云ふのは直實かい。」

と醒夢は小村の默想を突然破るやうに揶揄した。小村は急に眼を睜つて、

「さあそれは秘密にして置かう。君のやうな浮氣者にうつかり話せない。」

と啖く笑つた。かうした無駄話をしながら、酒を飲むうちに一同は大分醉つた。

「奥様、一杯獻上しませう。」

と大山は怒鳴るやうに大きな聲を出した。其の様子が滑稽泌みて居るので一同は覺えず噴き出した。妻は顔を赤らめて、

「私は御酒を戴きませんので……」

と挨拶して隅の方で小さくなつた。

「諸君！小村君の戯曲家としての前途を祝福して乾杯しようではないか。」

と私が云ふと、

「宜からう。」

と醒夢が共鳴した。一同は元氣よく小村のために乾杯した。

「此の席に君のお叔母さんが居ると宜いなあ、善い人であつたが、到頭亡くなられたさうだね。」

「僕も君のお叔母さんには隨分お世話になつた。」

と小村と醒夢が少し沈んだ聲で云つた。私が母のやうにして居た叔母は、小村がベルリンに居た頃、私の祖母と前後して共に地下の人となつたのである。

「君たちが、左様云つて下さると、叔母も地下で喜んで居よう。小村君や三田村君の事は、叔母が始終、僕に話して居た。君らを矢張、自分の子のやうに思つて居たんだね。」

と私も暗然とした。私は叔母が私や小村、三田村らと早稲田南町の家で一緒に暮した時分の事を思ひ出した。

「もう其の話はよさう。時に小村君の『牧師の家』は大分反響があるやうだね。」

と私が云ふと、醒夢も、調子に乗つて、

「小村君、君は脚本で大に儲けて、僕らの貧乏を助けてくれ。」

と故意に救ひを求むる人のやうな口吻で云つた。

「それよりも、君が第一に新聞社長となつて、僕らを救つて欲しい。」

と小村が苦笑した。もう夜が大分更けたが、一同は仲々騒いだ。やがて騒ぎくたびれて散會した。

□

N新聞社へ出て以來、私は新聞記者生活の困難を泌々感じ始めた。其處へ私を推薦した塚谷信雄は壯快な豪傑肌で、いつも私を擁護した。けれども塚谷のほかには、一人の身方がなかつた。周圍には久しく社に居た人々が多いので、新參の私は肩身が狭かつた。そして野中の一本杉のやうに孤立して居た。

社の幹部中には、最初から私の缺點を拾ひ出さうとして居るものがあるやうに思はれた。私が文藝欄に『二階から』と題した隨筆を書いた時、少しばかり私事に亘ると、もう其の翌日、霜谷信雄の方へ其の事を報じて、私を非難した人があつた。私は「うつかり物が書けない。」と始めて感じた。爾後、私は成るべく、自分の書いた物を出さぬことにした。

社内の空氣は少し自由なところがあつた。小說家で政治好きの江藤紅華や經濟學者で粹人肌の鐵島慶二郞などが顏を合せると、紅燈綠酒の趣味を話して、時に北廓情調に觸れたりした。紅華は興に乘ると、閑情を縱說し橫說して、京傳、春水らの世界に及んだ。左樣した時、鐵島は手を拍つて「左樣だや、其處までゆけば面白いが、どうも弊に堪えんね。」と哄笑した。彼れは、時々此の「弊に堪えんね。」を繰返した。

其の時分、私はM新聞の社會部長をして居た頃と異つて、仕事が割合に忙はしくないので、物を考へる餘裕を得た。久しく、私は單行本を書かずに居たが、やがて『愛弟に與ふる兄の書翰』を書いて出版した。そして『早稻田文學』へ寫生文めいた短篇を寄せた。また新刊書なども、ぽつぽつ讀むやうになつた。

秋の空が高く澄んで居る時分、私は編輯の暇を見て、N新聞の三階に突き出て居る露臺をひとり靜かに歩いて 色々の事を考へた。眼下にひろがつた東京の町家は黄な秋の日を浴びて、電車、自轉車が行き交ふ間を忙はしく縫ふ人々の姿が稍小さく見えた。其の時、私の頭に不圖閃めいたものがあつた。

「私は新聞記者として、特に優れた才能がない。それに自分の個性が沒却して、いつ迄も人に使はれて居るのは、どうも嫌だ。たとひ貧しくても、獨立して、自由に歩ける道を求めたい。K新聞へ這入つて以來、私はいつも新しい刺戟を求めて、感覺本位の生活を續けて來た爲めに、私の頭は恐しく散漫に陷り、平凡化した。恐らく新聞生活から離れない限り、私の頭は未だ未だ未だ散漫になり、平凡化の程度を深めるだらう。それは精神的、思想的に私を亡ぼす呪ひの因だ。私は此の因から、思ひ切つて拔け出さねばならぬ。」

私はかう考へ付いたのである。ある日、三田村醒夢に其の事を話すと、彼れは極力反對した。

「それは危險だ。記者生活をやめて、筆硯勞働をやるとなれば、收入が不定になる。時には皆無の場合があらう。君が未だ獨身生活をして居るのなら、それも宜からう。けれども旣に妻君を迎へて、一家を作つて居るのだから、矢張定收入のある方が安全だぜ。何も强ゐて生の冒險を試みる必要が

あるまいではないか。」

と忠告した。

「君の忠告は有難い。僕も其處に氣付かぬのではないが、僕には新聞記者としての才能が乏しいばかりでなく、N新聞では、殊に孤立の地位に居るのだ。どうも前途に見込みが立たぬ。思ひ切つて一つ生の冒險をやつて見ようと決心したのだ。然し一應篤と考へ直して見よう。」

と云つて、醒夢と別れた。それは秋の雨が淋しく降つて居る日であつた。

□

其の後、私はどう考へても矢張、最初の決心を飜すことが出來なかつた。それに酒を節したので、少しづゝ、私の思考力を恢復し始めた。當時の私は文藝協會、自由劇場などの新運動や新興文學の潑溂たる有様を見て、深く考へさせられた。私も古い殼を破つて、新しい殼を作り始めねばならぬことに氣付いた。

それに就て私は醒夢の許へ私の感想を書き送つた。

醒夢兄、

僕は愈よ潔く新聞社を去らうと思ふ。現在の新聞記者生活は。僕に取つて大きい不安だ。日本有數の大新聞に居てさへ、少數幹部の人々を除くと、兎角不滿な生活を送らねばならぬ。僕は思ひ切つて、大俗となり、淺薄、蕪雜の生活に甘んじて居ることが出來ない人間だ。自己の正しい自由、正しい自我の權威を抛棄するに堪えない人間だ。僕は未だ政治部、經濟部などに籍を置かぬから、其の方の事は何ともわからぬが、社會部に居た經驗から割り出してゆくと、僕の不滿は、大要五つある。(一)物質生活に於ける不滿(二)思想生活が散漫となり分裂し易くなる不滿(三)人格修養上の障碍多き不滿(四)老後に於ける何等保證なき不滿(五)任務を輕々しくする傾向多き不滿などである。君、試みに思へ！今日物質上の滿足を得て居る記者が幾人あるか、また思へ！思想生活上の統一を得て居るものが幾人あるか。人格修養上に於て、徹底し得たものが、どの位あるか。老人になつて生活上の保護を得て居る人々は殆ど皆無ではないか。中には若くして、少しばかりの理由で退社させられたものが少くないではないか。それらの問題は、いつ迄も解決せられぬやうだ。僕の如く才能乏しきものは、其處に大きい不安を感じ、且つ不滿をも抱く。去らざるべからざる所以である。

勿論僕は以上の責任を全部、新聞社に歸せしめようとは思

はぬ。大阪、東京に於ける四五種の大新聞を除くと、新聞事業は非營利的だと見られる。少からぬ經營難が其處にある。私の不滿は新聞社に對する不滿もあるが、自己に對しての不滿もある。僕は自己修養を主として、新聞記者生活をやめやうとするのだ。僕は君が先日、忠告してくれた厚意と友情とに對して、所信を告げるわけである。君よ、僕の露骨な言を許してくれ。

私がかう書いた手紙を醒夢の許へ送ると、間もなく、醒夢から一葉の端書が來た。

御手紙拜見した、君の言は全部贊成することが出來ないけれども、僕の胸にひしひしと思ひ當るところがある。僕はもう君の自由を妨げようとは思はない。君の所信を敢行せんことを期待する。

彼れは私の決心に共鳴したのである。私は勇氣を增した。

「自分は此の與へられた機會を逸してはならぬ。たとひパンに餓えるやうなことがあらうとも、斷然、新聞生活をやめて、新しい自由な世界へ出てゆかう。黴の生えた在來の自己を振捨てゝ、新生する自己の上に光りを求めよう。一刻も躊躇すべきではない。」

私はかう固く決して、四十三年の夏、N新聞社を退いた。それ以來、私は瘦せ細つた腕で、筆硯勞働を續けてゆくことになつた。勿論、一錢の貯蓄も、收入の見込も丸でなかつた。唯「どうにかなるだらう。」と思つて居た。私は書肆と契約したわけではないが、差當り二三の單行本を書いて、糊口を凌がうとした。

私は『百傑スケッチ』を先づ書く事にした。机邊に種々の史書、傳記類を集めて置いて、每日五六枚づゝ書いた。時には興に乘つて、十枚位書いたこともあつた。私は此の一事に全力を傾けて、終日殆ど外出しなかつた。每夜二十分間ばかりの徘徊散步と五日目每に入浴するため外へ出る丈であつた。

□

妻は未だ十九歲ばかりで、生活上の事には馴れて居なかつた。そして極無口な方で、必要のある丈は私に話すが、大抵默つて居る時が多かつた。私のする事にも、立ち入つて聞くやうなことがなかつた。すべて私の行く道を後から柔直に踏いてくると云ふ風であつた。それ丈に私は妻に苦勞させたくなかつた。私は生活の不安について、少しも話さないで、前途に光明があるやうに思はせることに力めた。

それにしても、私は新婚以來、妻に何も買つてやることが出

來ないのを淋しく思はないわけにゆかなかつた。唯僅かに當座の小遣を手渡すだけであつた。幸ひ妻が虚榮の心を持つて居ないので、私も聊か安心することが出來た。私はせめて、夫婦が季節の移り變りに新衣を求め得るやうな境涯になりたいと思つた。然しそれが、いつになつたら、實現されるであらうかは、眼前口頭の生活に追はれて居る私には、見當が付かなかつた。

一ケ月半の後に私はやつと『百傑スケッチ』を纏めた。そして成るべく、それを日本橋のH館から出版したいと思つた。先輩の岩田波山を訪うて、其の事を話すと、波山は快くH館の出版部長松山三郎に紹介する手紙を書いてくれた。私は松山の人物を醒夢から聞いたことがあつたので、内心成功を危ぶんで居た。と云ふのは松山が冷靜な人で、情實に左右されないと噂されて居たからである。

私が疑懼の念を抱きながら、松山を訪ふと、快く逢つてくれた。

「御著述の事は、波山先生から聞きました。大分面白いやうですから、私の方で出版を引受けませう。」

と彼れが云つたので、私は救はれたやうな氣がした。もう月末が近付いて居たので、『百傑スケッチ』が出版されないと、月末の支拂に忽ち窮して妻に心配させなければならぬのであつた。私は原稿を松山に渡して、若干の稿料を受取り、凱歌を奏するやうな勢で家に歸つた。

此の最初の成功が私を勇氣付けた。續いて私は東西文學の上に現はれた笑の趣味を比較研究して、其の大體を書き始めた。其の時分、妻は病んで、保養のため、一寸故郷へ歸つて居たので、知己の一老人に炊事を手傳つて貰つた。私は不自由を耐えながら、毎日朝早くから夜の十二時頃まで、頻りにペンを働かせて居た。それが二週間ほど續くと、老人は驚嘆するやうに、

「どうもよく根氣が續きますね。私が貴君のやうなことを唯一日だけやつても、直ぐ病氣になるでせう。」

と云つた。實は私とても苦痛で、日毎に一種の惱ましさと重い氣分とに壓倒され勝ちであつた。餘り長くペンを持ち續けて居ると、腕の筋が痙攣して、指が丸で力なくなることが多かつた。それに頭が疲れると、重い頭痛を感じたり、卒倒しさうな感じに囚はれた。深更まで筆を執つて居る時は、神經が過敏になつて、床に入つても中々眠られなかつた。妙に腹立たしい心持になつた。

私は東西文學の上に現はれた笑の研究をすつかり書き上げると、それを商業之日本社から出版することにした。かうして私の單行本はどの書肆でも出版を引受ける見込は立つたが、書い

ても、書いても、際立つた收入がないので、貧乏の泥沼からは容易に浮びあがることが出來なかつた。筆硯勞働の悲哀！それを私は泌々知つた。けれども私は新聞社に居る時よりも幸福であつた。自分の個性を抑へて、周圍の狀態に適應してゆくべき必要は少しもなかつた。私は比較的自由な生活のうちに本を讀んだり、考へたりすることが出來た。

(第二)　悲哀と動搖の時代

生活の方向を變へた話

故郷に保養して居た妻が歸つてくると、私は家を牛込西五軒町の方へ移した。其處は南佐久間町の家のやうに薄暗くなかつた。家の割に庭が廣くて、明るかつた。其の代り庭には申譯ばかりに樹木を植えてあるだけで、風致も何もなかつた。けれども私は以前の家よりも心持が宜かつた、筆硯勞働に飽くと、私は丸で空地のやうな庭を歩き廻つた。

此の家へ來てから、僅か半年の間に私は二冊の單行本を書いて出した。左様しなければ、一家の生活を支えてゆくことが出來なかつたのである。それに新しく女中を雇ひ入れた上に妻が姙娠して居たので、私は勢ひ以前よりも餘計に稼がなければならなかつた。けれども私は時々顧みて「お前もかうなつては、立派なブック・メーカーだ。」と自ら嘲つて　苦笑を禁じ得なかつた。

「自分は新聞記者として才能が乏しかつたとひとしく、著述家としても本物の資格はない。椅崎愁眠のやうに新聞記者として徹底する丈の力がないことを既に知つたのだが、今度は著述の方でも、純粹に徹底する丈の本質が乏しいのを確かめた。けれどもたとひ貧弱な操觚者でも、ある程度の自重は必要である。創作すれば、一層貧弱さを增して、精神的自滅を早める迄だ。單行本を書くことも、宜い加減にやめないと、ひどく後悔する時が來るであらう。そんなら私は一體どうしたら宜いのか。貧しくとも、田舍に家があるなら、百性になつた方が宜い。けれども大阪のやうな都會に生れた上に實家はもう亡びて居る。土に喰ひ付いても、東京に踏み留つてゐるよりほかに仕様がない。左様なると丸で見當が付かぬ。」

私はそれらを妻に告げなかつたが、此の點について、そつと人知れず苦悶した。そして十日間ほど、考へぬいた結果、小さな出版事業を始めることにした。勿論、資本は殆どなかつた。また事務員を雇ひ入れるわけにゆかなかつた。それで極小規模

の『出版世界』と題する月刊雜誌を發行して見ることにした。それは新聞を二つ折にした大きさで、毎號八頁から十二頁位とした。原稿を書くことも廣告も編輯も校正も最初の間、私の獨力でやつた。

それは第一號から損をしなかつた。時によると、小遣位はそれで出來た。けれども一家の生活を支えてゆく丈の收入は得られなかつた。私は矢張、半年に一回位は、單行本を一つ書かねばならなかつた。筆がそれがために荒むことを思ふと、私は單行本を書くのが嫌で堪らなかつた。私は當分、何とかして筆硯勞働を中止したいと切に思つた。

其の後、間もなく、妻が長男英夫を生んだ。私は小供嫌ひの母の性質を受けたと見えて、長男に對する愛を少しも感じなかつた。小供の事は一切、妻に任せて、私が抱いてやつたことは一度もなかつた、それほど、私は小供に冷淡であつた。そして私の行くべき前途の艱難ばかり考へて居た。

□

其の頃、大阪時代の舊友秋野松次郎が中途で帝大醫科をやめて、上京した。私は『出版世界』の方を秋野に任すことにした。そして私は別に親戚から少しばかりの金を借りて、受驗講義錄を發行することになつた。それは官立専門學校や高等學校の入學試驗を受ける學生たちを相手としたものであつた。

出版について僅かばかりの經驗しかない私が左樣したことをしたのは、冒險でもあり、無謀でもあつた。けれども一時、筆硯勞働をやめるには、其のほかにゆくべき道が見當らなかつたのである。其の時分、『東朝』を去つて、『學生』主幹となつて居た醒夢は、それとなく、私の無謀を諷じた。それでも、私は「どうでもなれ！」と思つて、講義錄の廣告を各新聞へ出した。

それが偶然當つた！廣告が出ると間もなく、規則書を要求するものが續々あつた。それから日毎に二十人、三十人の入會者があつて、一ケ月間に一千名近くの會員を得た。其處から得る利益で、私の一家を支えてゆくことが出來るやうになつた。私は始めて筆硯勞働から解放された、私は毎夜、自由に讀書を樂むことが出來た。

講義錄は、益々有望になつたので。私は新たに二人の事務員を雇ひ入れた。そして會務擴張のため、大正元年秋、西五軒町から飯田町の方へ移つた。私は講義錄の原稿を集めて、それを編輯し校正する事に當つた。他の雜務は、一切事務員に任せた。

私は用事がない時は、大抵二階の書齋に籠つて居た。其處で内外の新刊書に讀み耽る傍ら、力めて靜思を續けて、『日本文化論』と題する三百枚ばかりの長論文を書いた。其の少し前に私は西五軒町の家で、『平家の人々』『近松の人々』や『戯作に見えたDrsdents の群』などを書いた。其の時分、私は加瀬湖北、高野塔谷、依田文美などと親しくして居た。湖北は熊本の出身で、ある經濟新聞の主筆をして居た。社交好きで、能辯家であつた。私が湖北と交際し始めたのは、明治四十四年の春頃からであつた。私は彼れと相談して、二々會を組織して、毎月一回、各方面の酒豪を集めて酒戰を重ねた。

湖北が發行した月刊文學雜誌や週刊新聞には、いつも私と塔谷とが執筆した。論文、隨筆、小品の類を根氣よく、私は寄稿した。私は報酬など、どうでもよかつた。自分が書きたい事、云ひたい事、思ひ付いた事などを自由に發表出來るのが愉快であつた。

塔谷は私の書いた物に深い同感を持つてくれた。同窓の大川白明は、小說に沒頭して丸で別な道を歩いて居たし、吉井孤寒とは餘り親しく往來しなかつたので、私は自然、塔谷と度々往來した。塔谷は深川生れの江戸ッ兒で、何となく、成島柳北に似たところがあつた。彼れは書くよりも讀む方が多かつた。海外文藝について、彼れは折々の感想を私に話した。パルナッシアンの詩人に就て、シムボリストの詩に就て、私は塔谷から多くを聞いた。Vers Libre とか Manet, Monet とか Constatin Meunjer とかとか左樣したことを塔谷が、よく口にした。私は時々、深川の水亭で、彼れとアルチュウル・ランボオのソネットや、ヒュイスマンズの小說などについて、互ゐに感想を語り合つたことがあつた。私が新しい文學へ接近する機會は、塔谷との親交によつて作られたと云つて宜かつた。

□

四十三年の暮、私は塔谷と深川へ出かけた。それは可なり寒い晩であつた。辰巳劇場の近くによく店を出して居る屋臺で壽司の立喰ひをして、それから油堀邊をぐるりと廻つた。私らは宜い加減に疲れた頃、洲崎の紅い灯が見える竹林亭の二階で休んだ。

私は以前から、廣い草原となつて居る埋立地が好きであつた。亂雜であるが、野趣が横溢して、ロシヤの田舍へ至つたやうな感じがした。晩春から初夏にかけて、私は塔谷や深川の詩人鳴瀧篤太郎らと草原に寢ころびながら、雪茄を喫したとがあつた。酒客で宗教文學を好む藤江白隱らと草の上の饗宴を開い

て、夕暮の海に白い帆が淋しく動く頃まで、酒に陶醉したことがあつた。竹林亭へ來ると、私はそれらの事をよく思ひ出した。

私らは、はま鍋をつゝき乍ら、熱い酒を飲んで、携へたノートへ交互に感想を卽興的に書いた。塔谷が先づ萬年筆で、

暗い長い橋を渡つた、鐵で出來た永代だ。此の町の名は何だ。

と書くと、私は、

最早佐賀町だ。江戸ツ兒の君と深川へ來るのも久振だね。ヲヤ何時か澁澤倉庫前へ近づいた。電車を下りよう。

と續けた。塔谷は、

昔此の邊は、幕府の材木置場だつた。それから濃い紺青の大川沿ひに白い藏が幾丁も續いた事もあつた。それは諸家の廣重と云ふ男が、日本中の景色を紺と赤のコンツラストで描いた時分だ。その頃は西洋にも殺風景な電車と云ふものがなかつた。

と記して、凡そ一時間ばかり續けた。かうして『夜の巷に起ちて』の一篇を纏めたことがあつた。私は其の感興の高潮した時代を忘れることが出來ない。

私の生活が少しばかり安心を得たかと思ふと、激しい打擊が突如として、一家の上に加へられた。それは長男英夫の死である。私は彼れの死に依つて、始めて深酷な人生の悲みを知つた。今まで私になかつた親の愛に目ざめた、けれどもそれは、もう遲かつた。

飯田町の家に移つた頃、英夫はやつと起つて步くばかりになつて居た。私は其の樣子を見ても、別に深い愛を感じなかつた。普通の親なら、必ず深い愛を感じたにちがひなかつた。私は唯輕い喜びを仄かに感じた丈であつた。「もつと大きくなつたら、私の愛が深くなるであらう。」と思つて居た。そして小供の世話は依然、妻と女中との手に委ねて居た

其のうち英夫は輕い風邪に罹つた。妻は育兒の上に未だ經驗が淺いので、小石川のある醫師に診察して貰つたが、別に細心の注意を拂はなかつた。ところが、英夫の樣子は少しづゝ惡くなつた。ある日、私は英夫の泣き聲を聞くと、非常に力がなかつた。一種心細い感じを私に與へた。其の時、私は「英夫の病氣が重くなつたのでなからうか。」と推測した。私は妻に注意して直ぐに近所の醫師を呼んだ。

「どうもこれは胃腸が餘程弱つて居る。早く病院へ御入れなさい。」

と云つたので、私も妻も驚いた。私は其の日の午後、駿河臺の病院へ英夫を入院させた。それは大正元年の暮であつた。私

は何とも云へぬ淋しい心持に沈んだ。

子供の愛に目ざめた話

私は絶えず、小供のことが氣にかゝつた。ところが、大晦日が眼の前に逼つて、一年の總決算をしなければならぬ上に講義錄や『出版世界』一月號の校正などに追ひ立てられて寸暇がなかつた。小供には、妻と看護婦とを附けて、私は夜分だけ、病院へ出かける事にした。

院長の診察によると、小供の胃腸病は大分手遅れになつて居るので、恢復がむつかしいとの事であつた。けれども人の心は弱い。私には未だあきらめが付かなかつた。S院長が小兒科の第一流の人だと云ふのを恃んで或は助かることもあらうと丸で夢みるやうなことを思つて居た。ところが、小供は入院した夜から、次第に容態がわるくなつた。食慾が丸でなくて、食べたものを皆吐き出した。そして衰弱が加はりゆくのみであつた。其の翌日は、衰えが際立つて見えた。副院長が來て、カンフル注射をした。小供はぢつと其の痛さを耐えて居た。側で見て居る私は、自分の身を刺されるよりも、つらかつた。

「どうぜ助からぬものなら、注射をやめて欲しい。」

私は左樣思ひながらも、尙ほ一縷の望みをかけて居た。妻は青ざめた顏をしながら、石のやうに固くなつて、ぢつと小供の痩せ細つた灰色の顏を見つめて居た。私は强ゐて元氣を裝ひ、妻を勵まして、家に歸つた。

かうして毎夜、私が病院へ通ふうちに大晦日が來た。近所の家では、忙はしく、騷いで居たが、私の家は火の消えたやうに打沈んで居た。門松を立て、しめ繩を張り、玄關などを綺麗に掃除させたが、ひどく物足らぬところがあるやうに思はれた。私は成るべく、早く用事を片付けて、病院へ出かけた。

「もう愈よ一兩日しか持たない樣子です。」

と妻は涙ぐんで、そつと私に囁いた。それを聞いて私もすつかりあきらめた。それでも大きな溜息が自然に洩れて出た。そして妻と交代に、病兒が乾きを覺ゆる脣を絶えず筆先の水でぬらした。私は其の夜を病院で明かして、元日の朝、一度家に歸つた。

私は諸方から來た賀狀を見る氣も起らなかつた。雜煮も咽喉へ通らなかつた。毎年吉例に正月の芝居を見て廻るのであるが、今度はそれどころではなかつた。新春の歡樂が何處にも滿ちて居るうちに、私のみは、一向新春らしい氣分になれなかつた。そして病院に居る病兒の俤が眼先にちら付いて離れなかつた。

二日は危險のうちに過ぎたが、三日の夜、醫師は「もう駄目です。」と氣の毒さうに宣告した。小供には出來る丈の手當をしたから、何の遺憾もないわけだが、それでも、小供の死期が迫つたとなると、今更、名殘が惜まれた。私らは左右から、冷めたい小供の手を取つて、

「英夫、しつかりしなさい、ね、しつかりするんですよ。」

と呼びかけたが、英夫は答へなかつた。彼れは幽かに呼吸しつゝ、昏々と眠つて居た。醫師のカンフル注射によつて、辛くも四日朝まで、脈を保つことが出來た。

「此の上は、せめて自宅へ連れて歸つて、最期の呼吸を靜かに引取らせた方が、小供も快く思ふであらう。」

と考へて、私は病兒を看護婦と共に車に乘せて、一歩先きに家に歸らせた。私はぢつと合掌しつゝ、せめて小供が宅へ歸り着く迄、呼吸が保たれるやうに佛天に祈つた。

私は前夜、一睡もしないので、非常に疲れて居た。そして元氣を恢復するため、小供を家へ歸らせる少し前に病院を出て、其の附近を歩いて見た。初春の風は鋭く私の顔を吹いた。東方に上りかけた太陽は、空を微紅に染めて、其の日の新しい希望を象徴して居た。けれども私の眼には、太陽の色が、沈んだ重い悲みに包まれて居るやうに見えた。折柄、ニコライの鐘が、勤行の時を知らせると見えて、ゆるく、非重な音で鳴り出した。いつも朗かな心持で聞かれる鐘の音が、今は生の悲哀を弔する輓歌のやうに心の底まで響いた。私は首をうな垂れてぢつとそれに耳傾けた。いつか涙がぼろぼろこぼれた。

□

私は病院へ寄つて、それから前に述べたやうに小供を歸らせたのであるが、間もなく、私は妻と共に車を急がせて、歸宅した。小供は何ほ辛らうじて呼吸を保つて居たが、數分經つと、眠るやうに絕命した。それは大正二年一月四日の晝前であつた。

正月のことで、人々は歡樂に餘念のない頃であるから、私は極少數の近親、友人らに小供の死を報じた丈で、極しめやかに牛込のある寺で葬儀を濟ませた。それから以後、數日間、私は茫然として氣拔けしたやうになつて居た。

「寧そ坊主にでもならうか。」

と妻に囁いて却つて笑はれたことがあつた。

私は小供を喪つて始めて眞實に親の愛に目さめた。今更、掌中の名玉を奪はれたやうな感しが痛切に起つた。何故自分は、もつと親らしい愛を小供に注がなかつたか。平生どうして細心

の用意を怠つたのか。温和な優しい天使のやうな愛兒を僅か四歳になつたばかりで亡くしたのは、皆自分の愛が足らぬからではないか。私はかう自分を烈しく責めてやまなかつた。其の度毎に潸然として泣いた。

花が咲く頃まで、私は悲哀に浸つて居た、それは私の靈魂を清め、心を純なものにした。私はそれによつて、深く内省する機會を得た。夏になると、私は駿州三保に遊び、最勝閣に寓して、松籟、濤聲に親しんだ。夕の空に星がきらめく頃、ひとり、靜かに海邊に起つて、人生問題や宗教の事などをぢつと考へた。

三保から歸つて、私は『日本文化論』の推敲に力めた。別に新しく考へ付いた感想の斷篇をいくつも書いた。講義録や『出版世界』のことは、すつかり事務員に任せて、私は讀書に專心した。かうして大正二年は、平凡なうちに暮れた。翌三年秋になると、私は岡田書店から『新評論』を創刊した。

此の年の後半には、意義の深い世界大戰が勃發したのである。日本も日英同盟の義を重んじて、ドイツに向つて宣戰した。かうした空前の大亂に陷つたヨオロッパの暗い、物凄い有樣を想像しながら、私は『新評論』を出した。創刊號には、時代に對する觀察として、『ヨオロッパの大亂に際して日本文化の將來を思ふ』と題した長論文と『沙漠の獅子の悲み』(大ナポレオンの末路を弔した詩的散文)などを發表した。

『新評論』は意外の反響を得た。そして私の恩師富田小羊から、ある日、手紙が來て「少し話したいことがあるので、直ぐ來て貰ひたい。」とあつた。其の夜、私が恩師を訪ふと、『沙漠の獅子の悲み』を讀んだことを話された後、早大出版部から出る『世界全史』のうちで、大ナポレオンの時代を執筆して欲しいとの旨を告げられた。

正直に云ふと、其の時分、私には歴史的知識が餘りなかつたのである。大ナポレオンの事を書いたのは、ヨオロッパの大亂につれて、悲壯な英雄の末路に思ひ及んだからであつた。然し折角、恩師からの懇命を受けたので、私は歴史研究を始めるつもりで、大ナポレオン時代のことを書く決心をした。そして恩師から、種々の教へを受けた。それが歴史文學を開拓してゆく機縁となつた。

其の後、私は早大圖書館から、多數の參考書を借りて、フランス革命前後から、大ナポレオン沒落の時代までを頻りに研究した。それと共に『新評論』を編輯して、其の第二號に「現代國民性の改造」(論文)を發表した。それから間もなく、社中同人として、小村忠藏が私に推擧した小林壽郎や、高橋師範に居

た塚田桃村などが『新評論』へ執筆することになつた。

双生兒の出産と生活難の話

私の生活は漸く多事となつた。かうしたところへ、妻が十一月に双生兒（男子）を生んだ。妻の母が大阪から上京して、手傳つてくれたが、月足らずの子で、二人共「到底育つまい。」と産婆が云つた。一人は骨と皮ばかりで、一人は虫の呼吸であつた。私は長男英夫の死によつて、始めて親の愛を教へられ、自覺したので、今度は私自身が、双生兒の傍らに附き切つて居て、妻の母や看護婦と共に、双生兒を暖めたり、乳を呑ませたりすることに全力を傾けた。私は二晩、夜を徹した。自分で湯をわかして、室内を暖めた。道具屋へ駈け付けて、屏風を買ひ求め、双生兒に寒い風が當らぬように注意した。

「たとひ、産婆が二人共育たぬと云つても、折角、生れて來た子である。父として此の儘、死なせたくない。此の二つの新しい生をどうしても生ひ立たせなくてはならぬ。」

私は懸命になつて、双生兒のために祈つた。私の赤誠に反應があつたと見えて、骨と皮ばかりに見えた一人の子は、次第に元氣付いて、烈しく泣き出した。そして眞赤な顔をして力味出し、大きな眼を動かして、新しい世界を見るやうな様子をした。それに續いて、虫の息であつた今一人の方も、少し弱い聲で泣き出して、乳を求めた。

「愈よ助かつた！」

と私は思つた。双生兒の一人は到底駄目であらうと悲觀して居たのが、共に救はれたのは、何となく、私には奇蹟のやうに感ぜられた。妻の母も非常に喜んだ。私は次男を芳虎、三男を義士と名付けた。

「僕は曩きに長男を喪つて、非常に失望したが、今度双生兒を得て、其の失望を十分補ふことが出來た。」

と友人らにも話した。

□

ところが私の喜びは長く續かなかつた。芳虎も義士も胃腸が非常に弱かつた。それに百日咳に罹つたりして、風邪に侵され易かつた。私ら夫婦は少しの油斷も出來なかつた。百日咳になつた時は、肺炎になりさうで一時、徹夜して看護したことがあつた。妻は女中を伴れて、大抵小供たちを背負ひ乍ら、醫者の許へ通つて居た。

左様した心配が絶えない上に出版事業の經營難が新たに生じた。ヨオロツパの大亂のために洋紙の輸入が杜絶えて、紙價が引

きりなく突騰した爲めに私は少からず苦められたところへ、講義錄の讀者が漸次半減したのである。それに出版方面の不況は『出版世界』を衰微させた。それが直ぐに私の收入にわるい影響を及ぼした。私は止むを得ず、二人の事務員に事情を話して、三ケ月分づゝの手當を與へて解雇した。そして二ケ月ばかり前に大阪から來て、私の許に寄寓して居た甥の飯沼友三郞に事務を執らせることにした。

講義錄の損失、生活費の暴騰、小供の病氣、食客の增加などが重つて、急に私の借金が殖えた。月末の支拂にも時々支障を生じた。私は焦慮して、講義錄の景氣を以前のやうに盛返へさうとすればするほど、結果が惡かつた。私が月々、相當に得た原稿料だけでは、どうしても足らなかつた。そして愚痴をこぼさずに、ぢつと我慢して居る丈に、私の胸のうちは苦しかつた。ある時、不圖の舊友の加藤紫香を訪うて、相談すると「もう講義錄の時代は去つた。多少未だ有望なのは、中學女學の講義錄位のものだ。」と云つたので、がつかりした。私は強ゐて元氣付けようとして、盛んに酒を飲み出した。私が「日本のバイロンだ。」と推稱した小林詩郎と殊によく痛飲した。妻は私が酒びたりになるのを餘り喜ばなかつた。それでも私は酒癖を矯めなかつた。

其の時分、私は大きい Dilemma に陷つて居た。一方では、享樂の世界にまた象牙の塔のうちに自己の姿を見出すと共に、一方では、私の內部生命を統一する靈覺に憧憬れ始めて居た。私は新たに出來た酒の友山西枯葉、石田調左衞門、大林夢出鹿らと度々酒を飲んで、醉ふと北廓の茶亭で、午前二時頃まで放談して、それから飯田町の家へ車で歸ることがあつた。枯葉は『モザイク』同人中の酒豪で、どんなに痛飲しても、談笑、平日と異るところがなかつた。歌ひもしなければ、騷ぎもしなかつた。靜かに飲んで、しんみりと話す風があつた。私は其の嫌味のない、さつぱりしたところに共鳴した。

枯葉らと酒びたりになつて居る日は、享樂の思ひが私の胸に滿ちた。私は色彩と音樂の花やかな世界を思ひ浮べた。けれども私がひとり、飯田町の書齋に居て、二階から庭園を見おろしながら、ぢつと默想に耽る時は、感覺の上に刺戟を求めて廻る世界よりも、思想の上に力ある歸一を見出すべき靈の世界を夢みた。此の矛盾が、絕えず私の心內で戰ひ合つて、私の生活の上に分裂を齎らさうとする傾きがあつた。

〔〕

私はそれに惱み乍ら、靈の力を以て、肉の力を抑へ付けるこ

とが出來なかつた。私は『西鶴の人々』を書いて、肉の力を追ひ求める者の背後に暗い影が冷めたく附き纏つて居るのを知らぬではなかつた。ワイルドや、ボードレイル、バイロンなどの歩いた道を考へ、デカダンスの趣味を追ふ人たちの行きつく先きを考へると、私はもう自ら目ざめなければならぬと熱切に思つた。そして私は心に佛陀やキリストや日蓮、親鸞、孔子、トルストイなどを仰慕するのであるが、どうしても、肉の力から解放されるところ迄、行かなかつた。私は此の苦悶、此の矛盾を『新評論』に書いた。それを見て、小田原に病を養つて居た塔谷から手紙が來た。それは、大正四年の夏であつた。

（前略）小生は發病以來、野山兄につきて日蓮主義の研究に耽り居り、未だ何等の證悟も無之候へ共、別頭佛教の深趣は、わが迷妄倒逆の見を拂ふものなしとせず。思へば十數年前、兄と伊豆伊東に滯在して、偶ま相識の縁を得たる野山兄に依つて、わが病床唯一の法味、法悦を頒ち與へらるゝは、淺からぬ宿世の因かとも覺え候。小生が病と心中無限の悲痛とに依り、宗教を求めるやうになりたることを、或は心弱しとや兄はおぼすらむ。而も一切の現世的希望が我と相背くとき、而して人生の歸趨が、かの磊々たる有塊的知識を以てして、遂に一も究竟する能はざるを知るとき、誰か多くの先覺者がなせるあとに倣うて、眞乎菩提を求むる途に至らざるべき、かくして心弱しと云はれなば、小生は寧ろそを笑ふものを憫み、且つそを光榮とせん。眼底眞に涙あり、血あるものは、遂に宗教的觸發の機なからざるべからず。少しく嚴肅なる心情を有するものは、到底かの淺薄なる虛無主義や末梢的なる自然主義にては、居たゝまれざるなり。

高橋兄、兄が頃日『新評論』に物し給ふ論文を拜讀するに、兄も亦最近に於ては、ある法味に憧憬しつゝあるは事實なるが如し。小生は兄のために大にこれを賀す。小生をして直言せしむれば、兄や從來稍思想の多岐に亘り、徹底を欠くものなきにあらざりき。善にまれ、悪にまれ徹底なきは意義なきなり。兄の往くとして可ならざるなき才能を以てして、此の一事を欠くは、甚だ憾むべしとなせしに、兄今や醒めたるに近し。大に悅ぶべきにあらずや。（下略）

私は塔谷から、かう云はれて自分を恥ぢた。そして塔谷の勸めに従つて、小田原へ移住して、靜かな田園生活のうちに、大乘佛教を研究し、日蓮主義の思想について深く考へて見たいと思つた。けれども周圍の事情や生活難が到底それを許さなかつた。それに又始めた烈しい筆硯勞働が禍して、私は胃腸を病

み、神經衰弱に惱まされた。かうしてやがて秋となり、冬となつた。

左樣した時に私の思想生活の上に一つの打擊となつたのは、『新評論』を廢刊せねばならぬ破目になつた事であつた。それは九月から私の經營に移つたのであるが、其の前から久しく、新聞へ廣告しなかつたので、讀者は少しづゝ減じて居た。書肆はいくらか營利の考へもあつたので、中途から、手を引いた。私は其のあとを引受けたのであるが。矢張資力が乏しかつたので、思ふやうに行かなかつた。五百圓ばかりの損失を重ねるに及んで、私の手に餘つた。私は淚を呑んで到頭、廢刊の決心をしたのである。

一家の革命と孤獨生活の話

其の年の冬は殊にわびしかつた。夏以來、久しく胃腸が惡くて、醫者にかゝつて居た小供たちが、冬に入つて、めつきり衰弱を增した。大學病院のある博士の診斷によると「此の暮まで持つまい。」との事であつた。私は長男を喪ふた悲みを未だ忘れ得ないので、小供のために一切自分を犧牲にしても宜いと思つた。それで急に二人の小供を大阪市外の海近い田園に移住させることにした。大阪には、妻の家があるし、私の叔父の家もあるので、萬事都合が宜からうと思つたからである。

妻が小供二人と女中とを伴れて、あはたゞしく大阪へ旅立つたあとには、私と甥の飯沼や寺野と云ふ書生だけが殘つて居た。私は妻子のことが氣になるので、飯沼も大阪の方へ行かせることにした。かうして、妻や女中が家に居なくなると、生活が亂脈になつた。飲食のことも、兎角思ふにまかせぬことが多かつた。

それに大阪の親戚のうちには、大晦日を前に控えながら、妻子を突然寄越して、厄介をかける私の氣が知れないと云つて、手紙で憤つて來たものがあつた。それは借金に追はれて居た私が、妻に十分、用意の金を持たせてやることが出來ないからであつた。善意でしたことでも、金が乏しい時は、それを惡意でしたやうに、親戚のある者は解釋した。私は今更、自分の不用意を悲まないわけにゆかなかつた。

殊に其の年の大晦日は不如意な上に淋しかつた。私は借金の催促を受けるのが、心苦しいので朝から門を固く閉ぢて、寺野と共に外出した。晝餐は、同朋町の麥とろで、湯豆腐、刺身などで、小酌して、午後は深川から洲崎海岸の方を歩き廻つて十二時頃、歸宅した。かうして私は債鬼から逃れた。其の夜、徐ろに鳴り出した除夜の鐘は、失意、懊惱の私を憐むやうに、悲

しく響き渡つた。
「寺野君、淋しいなあ。」
と私は覺えず歎息した。
元日は形式ばかりの雜煮を寺野と共に祝つた。二日も三日も、わびしい氣分のうちに過ぎた。四日には、大林詩郎が櫻正宗の一升瓶を提げて來て、其處へ二三の友人が來たので樂しく酒を飮むことが出來た。馳走がないので、牛鍋へ無暗に餅をぶち込んで快食した。
家の中は、未だ一月も經たないうちに、汚くなつた。寺野が不精者で、掃除を怠つた上に私がまた疎懶だつたから、座敷にも塵埃が白く目立つほどになつた。また唯二人の男が住んで居るには、余り家が廣過ぎた。それらの　が原因で、私は一月の末、飯田町の家を出て附近の下宿屋へ移つた。寺野は、私の妻が起居して居るところへ赴くことになつた。
其の頃、私は講義錄を借金の抵當にある友人へ讓り、『出版世界』を廢刊して、僅かにM新聞へ寄稿して居る丈であつた。それで收入が非常に少くなつた。苦しまぎれに高利の金を借りなどした。そして久しく經驗しない下宿生活が非常に不愉快で堪らなかつた。

□

幸ひなことには、轉地して居る小供が、日を追うて、元氣を增してゆくと云ふ手紙が、妻から來たことであつた。「今頃、妻はどう暮して居るだらう。小供らは、どんな風になつたであらう。かうして、妻子に別れて居ると、朝晩、私の心は其の方へ引き付けられて仕樣がない。」と私は沁々思つた。左樣した時、私はすつかり嚴肅な心持になつた。酒を飮まうとする氣さへ起らなかつた。
私は切に妻子に逢ひたい一念に驅られて、二月半ばに、大阪へ出かけた。妻が小供と共に居る家は、玉出（岸の里）と云ふところにあつた。其處は大阪の南に當る郊外で、廣い野を隔てゝ遙かにちぬの海を眺めることが出來た。そして新築の家が二三十軒、列んで建つて居た。私が其處を訪ふたのは、夜に入つてからであつた。私は南海電車に乘つて、岸の里で下車すると、四邊が眞暗であつた。そして烈しい風が吹きすさんで居る野原を通る時は、餘りの寒さに一時吾知らず立ちすくんだ。
私たちの家は、東の端にあつた。家の內へ這入ると、寺野が玄關へ出迎へた。中の間には、妻子や女中が居て、私の顏を見ると、喜色を浮べた。二人の小供は、壁にすがりながら、機嫌

よく、少しづゝ歩いて居た。うす暗いランプ――未だ電燈の用意が何處にもなかつた――の下で、稍肥えて、いくらか血色がよくなつた小供らの顏を見た時、私の胸には嬉しさがこみあげた。

「運命の神は、小供たちを祝福してくれたのだ。」

と信じた。

「大分宜くなつたね、これなら、轉地させた甲斐があつた。」

と云つて、私は安堵した。

「はい、毎日晝は住吉公園の松原へ伴れていつて遊ばせますので、東京に居た時よりは、大分健康になつたので御座います。今夜は隨分、途中が寒う御座んしたらう。」

と妻は云つて、其の後の東京の樣子などを聞いた。

「坊ちやん、お父樣がお出になりましたよ。」

と女中は、小供たちを抱いて、私の前へつれて來た。芳虎は、ぢつと私の顏を見て居た。義士は莞爾笑つた。

「二人共、温和しいね、さあこれをあげませう。」

と云つて、私は道頓堀邊で買つて來た玩具の汽車を風呂敷包から取出した。

「汽車！汽車！」

と芳虎が云つて、直ぐにそれを手に取つた。かうして其の夜私は久振で、一家團欒を樂むことが出來た。

私は寢床の中へ這入つてから、一家の前途について、色々考へた。「此の土地は、小供のために宜いやうだから、若し大阪で文筆上の仕事を求めることが出來るなら、此の儘、ずつと大阪に踏み留つて居たいものだ。けれども茲では新聞社のほかには、仕事を求めるところがない。而も私は小說が書けぬから、此の方面の交涉は、可なりに面倒である。矢張、生活のためには、私ひとり、東京へ歸る方が便利だ。」と思ひあきらめた。

私は玉出の家に二日ばかり居た。それから後の事は吉野にも、よく氣を付けるよう命じて置いて、ひとり、東京の下宿へ歸つた。其の當座私は殊に淋しかつた。夜になると、よく外出して M新聞で親しくなつた友人石畑黎石の家を訪ふて、共におでん屋などへ出かけた。

喜びと惱みとが交錯した話

其の後、數ケ月の日子が流るゝやうに過ぎた。妻からは、小供たちが愈よ健かになつて、もうお自由に歩けるやうになつたとを報じて來た。私は今一二年間、ぢつと轉地させて置けば、一層小供たちの健康を增すにちがひないと思つたけれども、生

活の事情がそれを許さなかつた。高利の金を借りて、苦んで居るやうでは、どうにも仕樣がなかつた。それで六月の半ばに再び大阪へ出かけて、妻子と共に東京へ歸ることに決心した。私はM新聞へ、京阪旅行記を書く約束をして、いくらかの金を受取つて、西下した。

玉出の家へゆくと、もう東京へ歸りたくはなかつた。其の儘、其處に長く居たいと思つた。私はそれがため、二三の新聞社の樣子を探つて見た。ところが、もう四十歳に近い私を入社させるとなると、少くも、準幹部の地位に置かねばならぬので、差當り、空いた椅子がない具合であつた。強ゐて入社するつもりなら、半年間は、ぢつと待たねばならなかつた。貧乏な私には、それ丈の餘裕があらう筈もなかつた。私はひどく屈托した。

小供たちは、私の屈托を知らずに、家の外で愉快氣に遊んで居た。芳虎は氣が向くと、二三町離れたところまで、ひとりで出かけることがあつた。東京で痩せ細つて、苦い顔をして居た時分と丸で異つて、血色が宜くなつて居た。義士は丸く肥つて、夢みる小天使のやうに、あど氣ない顏をして居た。私は彼等を見て居るうちに、深い親の愛に伴ふ責任を感じた。

私はM新聞の用事で、京都、奈良、和歌山方面を一週間ばかり巡歴して、『赤毛布の見た京阪』と題する紀行文を匿名で書いた、それは私が田舍漢に假裝して、到る處失敗と滑稽とを續出したことを低徊趣味式に記したのである。それを讀んだ小栗風葉が「漱石以上の名文だ、一體誰れが書いたのですか」とM新聞の編輯局長浮島友次の許へ手紙を寄せた。それは、私が東京へ歸つてから、浮島から其の手紙を見せられて、始めて知つたことである。

『赤毛布の見た京阪』のうちで、私は最初に「キヤラメルを喰べる男」と題して、先づ私の假裝した樣子を書いた。初夏の雨がしと〳〵降る日、朝早く上本町の大軌の前に起つた見すぼらしい一人の男がある。」と敍して其の風體に及んだ。

古い麥藁帽を阿彌陀に被り、手に十八世紀時代の古鞄を携へ、色さめたインバネスを着け、破れかゝつた繻子張の洋傘を大事さうに抱へて居る。大抵黄金と衣服とだけで、人物を判斷しやうとする大阪の男女の眼から、それを何と見たか、貧乏な學生のやうであれば、田舍の學者らしくもある。唯其の眼が鋭く光つて、何ものかを求めやうとするやうなずるい奥式な點が、少しばかり、普通の人間とちがつて居る。

こんな風のことを私は毎日、新聞のために書いて、東京へ送るうちにも大阪で生活しやうか、東京へ引上げようかと度々思

ひ惑つた。結局、私は東京へ引上げることにした。其の時、私には生活の安心がなかつた。どうして生活するか、はつきりした見込が付かなかつた。筆硯勞働によく附いて廻る貧乏が、私には殊に身に泌みて厭はしかつた。

□

七月上旬、私は大阪の親戚に別れを告げて梅田から、急行列車に乘つて東京へ歸ることになつた。出發の夜、飯沼、寺野の二人が梅田まで送つてくれた。小供たちは「汽車々々」と云つて喜んで居たが、梅田驛へくると、待合室で、義士は其の母の膝にもたれて眠つた。芳虎は飯沼に手を引かれて、活潑に歩き廻つて居た、

發車の時刻が來て、私らが汽車に乘る時、義士も眼を醒ました。私は妻子を伴れて、東海道を旅するのは、それが始めてであつたから、前途の生活不安を忘れて、何となく、輕い喜ひに浸つた。

「芳虎さん、義士さん、また來年、大阪へ來なはれ。」

と飯沼が口早に云つた。それが小供たちと飯沼との永遠の別れとならうとは、誰れも知らなかつた。五年の後、小供たちが、不幸にも病のため、世を去るに及んで、始めて私らにわかつた運命であつた。人生の別離、遭逢ほど、わからないものにない。悲みは人の世に永遠に絶えない。

汽車が動き出してから、小供たちは、快く眠つた。朝早く二人が目ざめると、私は顔を洗はせて、食堂へ伴ふた。椅子に半身を埋めて腰かけて居た小供たちが、餘りによく似て居るので、ボーイが「どちらの方が、お兄さんですか。」と私に問ふた。私は消化し易い洋食を二三取つて小供たちに食べさせ、自分はビールの滿を引いた。

空は少し曇つて居た。けれども私の氣分は朗かであつた。小供たちと久しく離れて居た時の淋しさを思ふと、今は餘りに幸福であると感じた。再三、病のために危機に臨んだ二人の小供が、すつかり健かさうになり、ずつと成長しようとは、思ひがけないことであつだ。それにしても此の上「長男の英夫が生きて居たら……」と私はそれが悲しかつた。

私らが晝前に東京へ着くと、一時下宿屋に落着いた。そして妻子を伴れて、二三日、此處彼處を歩いて、家を探した。恰度牛込辨天町の閑靜なところに、適當な貸家が一軒あつたので、急に其處へ移ることにした。私は始めて半年振に親子が一つの家に落着くやうになつたのを喜ばれずには居られなかつた。家の周圍は夜に入ると、淋しかつた。隣の寺内にある大きな森の

中で、梟が「ホー、ホー」と鳴いた。それも氣にかけるほどのことではなかつた。朝、二階へ上ると、寺の廣い庭が見えて、鬱蒼とした樹木の茂りが涼し氣であつた。そして少しばかりの畑の側に鮮かな草花が見ざめるやうに日光の下に輝いて居た。

烈しい筆硯勞働を續けた話

私の生活は、案じたほどのことではなかつた。ある知人の紹介で、『新公論』編輯長として招聘された。それ以來、私は毎日京橋へ通ふことになつた。其の頃から、私は次第に酒量を謹んだ。社交のためのほかには、料理屋などへ餘り行かなくなつた。それに出來る丈、生活費を節約して、高利の金を返濟することに力めた。

「今度こそは、しつかり足を大地に着けて自分の立脚點を確保しなければならぬ。在來のやうな失敗を再びするならば、自分の前途は全く暗黑である。人間は誰れでも眞劍に自分の個性を闡明してゆかうとするならば、必ず其處に新光明を見出し得るのだ。私は純一に、眞實にあくまでも自分の志す一路を辿つてゆかう。」

私はかう考へて、暇があると、讀書し思索した。唯困つたことは、世界大戰の好景氣につれて、何處にも成金が續出して、一般人が景氣付いて居る時、私はプロレタリヤの一人として、生活必需品の高價に苦められ、依然として、貧乏の泥沼の中に足を突込んで居ることであつた。二人の小供らの前途を考へると、いつまでも、一錢の貯蓄さへなしに、晏如として居るわけにゆかなかつた。せめて二三ケ月間は、手を拱いて、遊んで居ても、優に暮らせてゆけるだけの餘裕を得たいと思つた。

「自分は、少年時代に貧乏のどん底に沈んで、うんうん唸るほど苦しんで來たから、せめて小供たちには、餘り烈しい貧乏の苦みを嘗めさせたくない。また自分は、周圍から壓迫されて、碌に教育を與へようとされないで、非常に苦學したから、小供には、自分から進んで、高等教育を自由に受けさせたい。それらの用意も、今から、そろそろ始めねばならぬ。長男英夫には、餘り愛をつくすことが出來なかつた代り、二男三男には、自分の愛情を心ゆくばかり傾注したい。嗚呼、それにしても此の貧乏では……」

私はそれを思ふと、はかない筆硯勞働の弱味や左様したことのほかに特に何の才能もない自分が厭はしかつた。また左様した微力、非才の父を持つた二人の小供の運命が何となく、氣遣はれた。

「然し今となつて、左様なことを考へて見ても仕方がない。

仕事の暇を善用して、單行本を書くなり、新聞雜誌へ寄稿するなりして、働ける丈、眞黑(まつくろ)になつて働かう。さすれば、其處に自然の宜い反應がくるであらう。唯働け！　働け働け！」

私はやつと斯う思ひ返して、新聞生活をやめた當時のやうに、また單行本を一年に二册の割で出すことに定めた。それ以來、私は『時事』『讀賣』などの文藝欄に時々執筆するほかに『ふらんす革命夜話』『江戸情調と惡の讃美』『美の廢墟に起ちて』などを書いた。あとの一册は、書肆が丸で廣告を怠つたので殆ど讀者子に知られなかつた。

□

其の時分、『新小説』の伊村龍が突然私を訪うて、享樂主義の英雄を主題として、百枚ばかりの詩的散文を書いて貰ひたいと懇囑した。私は當時、窃かに自分の不遇を嘆じて居た折であつたから、伊村龍を自分の大なる知己だと思つて、非常に感激した。私は一つの力を得た。そして晝夜兼行の勢で、『世界享樂園の天才達』を書いた。續いて『行く春と平家の人々』をも書いた。

其の後、私は『明治文化史』を書かうと考へて　種々の史料を渉獵した。大體の構想が纏まると、先づ總論を書いた。それは大正八年二月頃であつた。それ以後、私は毎朝六時に必ず起きて、『明治文化史』の原稿を晝前迄書いた。それから京橋の社へ出て、午後五時頃に歸宅すると、手早く晩餐を濟ませて、午後十二時前後まで、書齋に籠つて、また稿を續けた。それは、丸で版で捺したやうに定つて居た。左樣した事を七月の始めまで續けて一日も休まなかつた。それがため、私は少からず、健康を害ねた。

私は七月十日頃、社から二週間の暑中休暇を貰つたので、それ以來、丸で書齋に閉ぢ籠つた。食事のほかは、朝から晩まで、座りつめた儘、『明治文化史』を書いた。此の異常の努力によつて、七月下旬、原稿を完成した。それと同時に全身の疲勞が強く感ぜられた。またひどく胃腸を痛めて、それが原因で、神經衰弱の度を增した。私の苦痛はそればかりで濟まなかつた。痔疾を病んで、雜司ケ谷の大學病院で、手術を受けねばならぬ破目になつた。過度の筆硯勞働が私に禍したのである。私は入院當時の悲痛な絶望的な心持を未だに忘れることが出來ない。

其の時分の事は『病窓の秋』と題して、『早稻田文學』へ書いた。兎も角、三週間に近い日を病院に送つて、やつと退院した頃は、極度に衰弱して居た。後で聞いた話であるが、當時、先

生のお顔は青ざめて、頬が痩せこけて居て、とても、元氣を恢復されさうに思はれませんでした。」と私の若き友は云つた。痔質は次第に癒えたが、衰弱は容易に除かれなかつた。

それから重い神經衰弱、恐しい不眠症などがまた私を苦めた。それらのために、私は『新公論』の編輯を辭した。そして恩師坪田小羊の推薦によつて、早大出版部から出る『國民之日本史』の執筆準備をした。私は弱り込んで居たが、生活の資を得なければならぬので、十一月の始めから徐ろに『江戸時代』頽唐期を書き始めた。書いてゆくうちに次第に興味を感じて來た。私は史書山積の中に寢ころんで讀んでは書き、書いては讀んだ。

最大の悲痛に沈んだ話

大正九年は、私に取つて、最も大きな禍の年であつた。前年來の神經衰弱と不眠症は、私の身内をのたうち廻る毒蛇のやうに、ひどく私を惱ました。私が筆硯勞働をすつかりやめてしまつて、一ケ年も轉地靜養するならば、快方に向ふことは、素からわかり切つて居た。けれども私には、左様した餘裕があらう筈がなかつた。前年、高利の金だけは、すつかり返すことが出來たが、質屋に預けてある私らの衣服は、未だ一枚も出すことが出來ないで居た。

それで私は神經を休めるために、一月二日から八日頃まで、房總地方を旅したが、少しも効驗がなかつた。二月に入ると、一家が悉く流行感冒に罹つて、枕を列べて寢た。幸ひ妻が我慢强かつたので、小供たちの世話に事缺かなかつた。其の時分、私の友人中には、前後五六名の人たちが流行感冒の犧牲となつた。深川の詩人鳴瀧篤太郎も其の一人であつた。

私の一家は意外に早く全快したが、私は割合に長く苦んだ。快癒後も氣分が優れなかつた。そして不眠症は益々募つて、午前二時頃になると、いつも目がさめて四時半頃まで寢付かれなかつた。仕方がないので、五時に起きて、讀書、執筆などした。それが次第に續くと、厭世の情緒に囚はれて、氣が非常に沈むことがあつた。時には、「生きて居るのが却て苦痛だ、煩はしい。」とまで思ひつめた。すべての機能が衰えて、少しばかりの享樂の刺戟にさへも堪えられなくなつた。私は心も身も空虚で、全く彈力を失つたやうな氣がした。

不快で堪らぬので私は五月には一週間ほど、房總地方を旅した。七月には、秋田地方を旅して、十日間ほど、東北の名勝を巡歴した。それでも、私の氣分は矢張、沈衰して居た。强ゐて、酒を煽り付けて、神經の委靡を忘れようと思つても、痔を

病んでから、五勺以上の酒を飮まぬことにしたので、どうにも仕方がなかつた。また狹斜情調の中へ這入つてゆくにも、既にロマンスの夢から醒めた身はもう其處に何の魅力をも感ずるわけにゆかなかつた。私の健康狀態からして、それに適しなかつた。私は私自身を持てあました。

左樣した時、禍の惡魔は、其の虛隙に附け入るのだ。私は每夜惡夢を見た。醒めた時、冷汗が全身をぬらして居ることが度度あつた。

餘りに氣分が優れないので、私は新秋に入ると、郊外散步でもして氣をまぎらさうと思つた。せめてそれによつて、久しく鬱屈した私の氣分を一轉しやうと望んで居た。

□

九月の始め、よく晴れた日、私は二人の子供を連れて、郊外へ出かけた。神經がひどく弱つて居るので、行く方向も定らなかつた。新宿から市外線に乘つて、品川へ至つたが、其處から目黑へ出かけた。目黑驛で下りて不動堂まで、殘暑のうちを小供たちに步かせた。小供は多少疲れて居たが、郊外の景色に氣を取られて、力めてよく步いた。目黑不動の境內で、二十分間ばかり遊んでから、私らは歸途に就いたのである。

午後一時頃、私は小供らと四谷の三河屋で樂しく牛鍋をつゝいて、宜い心持で、三時頃家に歸つた。そして夕飯の折、妻が出した枝豆を小供たちは喜んで、喰べた。其の夜は、かうして一同、快い眠りに就いた。嗚呼、其の翌朝、芳虎が、大腸カタルを起して、二日の後に「義士ちやんも一緖に行ゆかう。」といつゝ町中で遊んで居る折の幻想を繰返しつゝ、病院の一室で此の世を去らうとは！ 誰れが思ひ得よう。そればかりでなく、義士が假そめの風邪から腦膜炎に罹つて、一ヶ月の後に名醫の手當すら効もなくて芳虎のあとを追ふであらうとは、どうして豫想しよう。丸で夢だ、恐しい夢だ、咀ふべき夢だ、咀惡夢！

筆硯の倆者としての私の悲みは、此の時、正に頂點に達した。私は一時、失神したやうになつて、足が地に付かなかつた。妻も同樣であつた。せめてつくせる丈の手當をしたことを考へると、强ゐてあきらめられるものゝ、それにしても、嗚呼それにしても、此の殘虐な運命は――

私は以上のやうな未だ生々しい悲痛のあとを此の上、書くことが出來ない。思へば、四十年の私の歷史は、慘憺たる色によつて、蔽はれて居る。私はずつとそれに堪えて、尙ほ進んでゆくよりほかに仕樣がない。いつになつたら、私の前に暗い夜が明けることか、嗚呼夜が餘りに長い。

サラリーマンの浮き沈み

生方敏郎

一　知識階級の使ひ分け

知識階級とは何か？

そんな階級が此世に存在するか？

之には人々に依りいろ／＼に解答されるであらう。世にはブルジョアとプロレタリアとこの二つの階級があるばかりだ。知識階級などいふ階級は存在しない。といふ者もあらう。併し、先年來知識階級といふ言葉は多くの人々の口から聞かれる。昔は、何かといふと識者といふ言葉を用ゐた。「大方の識者の教へを請ふ」とか「そは識者の執らざるところだ」などの識者だ。識見衆に優れたる人の稱呼だ。從つて識者といふものはさう天下に澤山あるものとは考へられなかつた。少し學問でもした者の中には、自ら已惚れて識者と思ひ込んでる者が幾らもあつたらう。而も彼自らですら識者はそんなに大勢有るものとは思はなかつた。寧ろその少ないところに識者の値打が有つたのだ。

然るに、今日の知識階級といふのは人數が如何にも澤山である。人數が澤山あるといふ事が今の知識階級の賴みとし强味とするところだ。人數の多いといふ事實は、その階級といふ言葉が明示してゐる程多いが、之が皆昔人の所謂識者だつた日には大變なことだ。大變目出度いことだが、さうは行かぬ。事實はしば／＼之に反して非識者の方が却つて多い。

そこで所謂知識階級とは同時にまた無識階級とも言ふことが出來る場合が屢ば有る。

學問が十分あつても、それは必ずしも所謂知識階級には入らぬ。否學問が十二分に有り過ぎると却つて知識階級の外へ逸してしまう場合が多い。博士、博士の中の錚々たる者、それらは大學に居ても相應の手當はあらうし著書もよく賣れ、從つて收入多く中には宏壯な邸宅を構へてゐるものもあり、又大學を出でて大會社の重役となる者もある。之等は立派なブルジョアである。役人となつても相當な位置に迎へられる。役人は大臣次

官又は局長となり知事と成るとも其年俸は多寡の知れたものだが、それでもその生活ぶりは決して所謂プロレタリヤのそれではない。矢張ブルジョアの中に數へられよう。

醫學博士工學博士等でブルジョア階級に編入されぬ人々は少なからう。自分自身が病院長若しくは工業會社長と成つてゐる人々は論なく、自分自身は病院會社の持主でなくとも大方はその幹部であらう。又は法學博士藥學博士工學博士醫學博士にして商事會社の重役たりは大顧問として最高幹部を組織する者も少くあるまい。之等は、何れも數百萬數十萬の大ブルジョアと行かざる迄も數萬若しくは十數萬の資産を擁し、一萬以上の年收あるプチブルジョア以下には落ちぬであらう。

美術演藝工藝等の方面とても同様に、矢張一技一能に秀でた人々は、これまた所謂知識階級の線を突破してプチブルジョアの部類に入つてゐるであらう。その中。演藝にはあまり知識階級のものもあるまいが、絶無といふわけではない。頭のいいことでは所謂知識階級の人々と比べて優るとも劣るものではない。學問ある馬の脚は知識階級なれども、學問ある座頭はプチブルジョアなのである。音樂でも小學校の音樂教師は知識階級であらうが、一夕千金の報酬を受ける柴田環さんはプチブルジョアの一人と云ひ得る。

だから知識階級の上澄みのところは、皆プチブルジョアで、稀には本物のブルジョアでさへもある。

廣義に知識階級といはれる場合には、これら上澄みの知識階級も含まれるが、狹義に知識階級といへば無産知識階級を指すことに成る。そして一般の人々が知識階級といふ時、それは無産知識階級を指していふか？有産知識階級を指していふか？甚だハツキリして居らぬやうである。

「普通選擧制度は知識階級一般の叫びである」といふ場合には無産知識階級の方を主としてゐる。勿論さういふ事は一人でも贊成者の人數の多い方が力に成るのだから、ブルジョア知識階級でも何でも歡迎する。併し、この場合多數であるところの無産知識階級の方に力瘤を入れてゐるのは確かである。

又三越その他の商店で

―弊店にて特にパリーのレーテストスタイルのサムプルを取り寄せ、更に日本の知識階級の御家庭に向くやうに調製いたしましたる婦人子供服陳列會を六月一日より開催仕候」

などといふ場合の知識階級は、プチブルジョア知識階級を指していつてる事は論を待たない。商店の目的は陳列會を見てもらうのが目的ではなく、見て而して買つてもらうのが目的であるから。

けれども、若しこのパリースタイル婦人子供服陳列會に、三等郵便局事務員諸君市役所區役所應籍諸君キリスト教會牧師諸君が妻子を連れて御見物なさるとも、店員は勿論門戸を開いて歡迎するであらう。そして若し牧師の奥さんが、主人も高等教育を受け自分も女子大學出身の故を以て知識階級向きとの振れ込みある今日の陳列會は自分達が見て而して買ふ爲めの陳列會と正直に思ひ込み、長女のために

「ちよいと、お父さん、この型が面白いぢやありませんか？百合子さん、乾度、貴嬢に似合ひますわ。」

といふならば、番頭はニコ〳〵もので揉み手をし

「えへへ、これは知識階級のお孃さまがたに誠によく似合ふ型だ相でございまして、今朝から幾つも出ましてございます。へゝ」

と調子を合はせるであらう。

牧師の妻が「富裕なる病院長の一家も、貧乏なる牧師の一家も、同樣に知識階級に屬する」と思ふやうに、三越の店員は「富裕なる病院長の支拂ふ十圓札も貧乏なる牧師の妻の拂ふ十圓札も、同じ十圓の價値ある十圓札だ」と考へるが故に、見て而して買ひさへするなら、牧師の妻といへども腰辨の家族といへども知識階級としてパツスされるであらう。

本物のブルジョアは勿論對手にして人數が少く、去りとてプロレタリアの上澄みと云つても面白くないと思はれる時、商人は盛んに知識階級を振り廻す。曰く知識階級御愛用の萬年筆、曰く知識階級御愛用の飲料水、其他。

於是乎、無産知識階級はすつかり嬉しく成り、財布の底をはたいて籐椅子でござれ羽根布團でござれ、

「配達してもらへませうね」

と意氣揚々だ。

從來、宮内省御用達、陸海軍御宿泊御旅館等の看板は、地方へ旅行すると屢ば見られたものだ。將來は知識階級御用達、知識階級御指定旅館等の文字も追々見られる事だらう。お目出度き限りである。

二　知識階級の誇耀

知識階級といふ言葉の起りは恐らくロシアのインテリゲンツィアの翻譯だらうが、ロシアに於けるインテリゲンツィアに就いては此處には言はない。

私は專ら日本の現代に於ける知識階級に關してのみ語れば、此階級は正にブルジョアといふ言葉に對抗する一種の誇耀を持つた言葉なのである。ブルジョアが金力を持つ時に、知識階級

は學識を持つといふのだ。同じ無産階級でも何も畝もないプロレタリアでなしに、相當の教育を受け眼には文字あり趣味は洗錬され世界の大勢にも通じ人格も高尚であるといふのだ。その點で知識階級は單に筋肉勞働者に對し優越感を持つばかりでなく、又他方ブルジョアに對しても「何うだ。金ばかり有つても藝術も理解せず哲理にも通ぜず、文明人としての教養が何一つ無いのでは、金庫の番人といふ丈けだ。邸宅ばかり宏壯でも衣服ばかり立派でも、魂が貧弱な人間は可哀相なものさ」とブルジョアを見くびる。

事古きに似たれど平家物語を讀むと、朝日將軍木曾義仲を京都の公家たちが嘲笑するところが甚だ巧みに描かれてゐる。義仲はその綽名の示すごとく旭日登天の勢ひある成金武將だ。將軍といつでも今日の陸海軍將校とは格が違ふ。現代の陸海軍將校はブルジョアの手先きと云つては少々氣の毒だが、まづ月給取りに過ぎない。然るに義仲は大資本家大成金だ。天下兵馬の權を掌握し金穀兵糧をも所有してゐる。ただ彼の持たなかつたものは、教養だ。文字だ。義仲は都の手ぶりに習はぬ野人だつた。京都の公家は貴族とは其名ばかりで、實は富もなければ兵力もなく權力もなく、その代り教養はあつた。貧弱なる文明人だつた。即ち今日の無産知識階級に相當する。そこで此知識階級は義仲の田舎言葉の口眞似をしたりして影で盛んに義仲を嘲笑した。

信長の場合とても同様だ。信長が京都へ侵入して三好松永の徒を追ひ拂ひ大成金に成つた時、信長は料理の味を知らない。信長は嚥卒き三番料理に舌鼓打つたとて京の知識階級の物笑ひに成つた。しかもその信長は淀君の伯父に方る名古屋の美人系統に生れた好男子で風流の嗜みあり、初めて京へ入つた時、連歌師紹巴が扇子一對を捧げて挨拶に來たのを見て直ぐに「二本（日本）手に入る今日の悦び」と出吟したほどの風流漢であつた。それですら、たうとう料理の一件で京都の知識階級に尻尾を捉まれてしまつた。

現代に於いても、斯の如き例は殆んど毎日見られるのだ。やれヂンバリストだのクライスラアだのといふ世界の大音樂家が、近頃度々乘り込んで來る。帝劇は毎も滿員だ。そしてブルジョアは特等席一等席を占めて聽いてゐても、憐れむ可しは耳は音樂に對して金聾だ。三等席四等席に團體の割引で聞きに來てゐる貧乏な學生や事務員の方に却つて本當の聞き手がゐるといふ滑稽な場合は、常に屡ば有ることだ。こんな時三等席は特等席に向ひその席に對する忌々しさ羨望の念よりも先きに、教養なきブルジョアの樂聖に對して如何に皮肉なる勝利の快感を

感じることであらう。

美術展覧會へ行つて見て、知識階級が特に愉快に感じる事は、徒に大幅にして極めて拙劣なる繪の下に賣約濟の赤札の貼られてゐるのを發見した時である。眼識ある者に良器を購ふの力無きは遺憾なれども同時に購買力を持つ者に器の巧拙を見分けるの力なきは可笑しくして又憐む可しだ。

たま／＼地方に旅行した際になぞ、その土地の成金諸君から所藏するところの美術品骨董品を見せられる時、その中に如何にも非美術品や僞物の多いのには恐縮せざるを得ぬ。時には全部贋物の場合すらあり、折角見せられても何とも返答に窮し苦笑を洩すの外なき場合に往々出會ふ事は、多くの旅行子の常に經驗するところであらう。

音樂家や美術家の如き、ブルジョアを對手にする人々は、嘸かし皮肉な經驗を澤山持ち合せてゐる事であらう。一夕の彈奏に千金を投じて惜まぬ大切なお華客さまがカナ聾でいらせられる時！　一幅の繪に萬金を捧げて泰然自若たるパトロン樣が色盲で御座る時！某といふ皮肉な藝術家が言つた樣な、油繪と水彩畫とを鼻でかいでみて初めて區別し得るところの美術愛好家であつた時！

ブルジョアは藝術家一度與し易し、と見て取れば、忽ちさま／＼な註文を出す。富士の山を描いてくれ、富士山の肩から初日出を出してくれ、勅題を描いてくれ、勅題の中へ惠比壽大黑を入れてくれ、風景の中へ忠君愛國の意を寓してくれ、それは／＼大變なことを註文してくる。

さて、さうなると藝術家の方でも之に對する作戰を立てねばならなく成る。三文繪かきは大黑さまでも金の生る木でも寶船でもブルジョアのお得意樣の御意のまに／＼描きなぐるであらう。彼等は藝術家に非ずして繪畫職人である。遊藝人こそ仰せに從ひ如何なカツポレをも吹奏するだらう。併し一ふし候ふ藝術家と成れば決してブルジョアの得手勝手な註文に盲從するものではない。彼等は決して唯金の爲めのみには描かぬ事を宣言する。國司大名の命令なりとて唯々諾々とは參らぬ意氣を示さうとする。そして此事は實際に於いて何の邊まで行はれたか、又行はれつつあるものであるかは知らないが、その心から出發した逸話傳説が實に澤山あるところから見ても、藝術家の方にさうしたブルジョア對抗の意氣及び對應策の存在する事は明かである。

加賀の千代をして「手をついて梅を眺むる蛙かな」と敬意を表せしめたと云はれる北陸の大藩前田侯の威望を以てしても、他藩の百姓俳人一茶に同樣に作句せしめる事は出來なかつた。

加州侯の一行參覲の途次信州柏原を過り、村名主をして一茶を呼んで來させようとしたが仲々面倒であつた。漸くの事で一茶は來て一句作り前田侯から着物なぞ拜領したが、その拜領物へ一茶は後で小便しかけた。といふ逸話がある。

之は大方作り話であらう。若し本當とすれば一茶はいやな奴である。何も衣類に小便しかけるには當らない。賣りこかして一杯飲んだ方が氣がきいてゐる。此話は大方後人の作り話であらうが、こんな虚話にも知識階級對ブルジョアの對抗意志が現はれてゐるだけは事實だ。

先年京都へ遊んだ時、東本願寺で狩野法眼(?)の富士山を見た。薄暗いところに懸けてあるのでお定りの裾野の松林だけ見えるが、かんじんの富士が見えない。その坊さんが蹲がんで下から見ろ、と云つた。成程座つて見上げれば山が見えた。坊さんは説明して曰く「之は法眼がゼヒ太閤に頭を下げさせてみようと思つて、此樣に描いたのです」と語つたので、一行大笑ひをしたことであつた。

次に京都へ遊んだ時、紫野の大德寺へ行き、殆んど等身大の千の利休の木像を見た。その木像を安置した御堂では像の前に供物なぞ飾つてあつた。それから少し行くと大きな山門があつた。それを潜る時、案内の坊さんが説明して曰く

「あの千の利休の木像は、前にこの山門の二階に在つたのどす。利休は自分の木像をこの上に据へて置いて下を太閤に通らせたといふので、後から太閤さんが知つて大層腹を立てて、木像をあすこへ卸されました。利休が後に太閤さんから殺されたのはそんな事が因だと云ひます」

利休は唯のお幫でなくブルジョアに對し一片の反抗的氣慨を持つてゐたとの傳説である。太閤は大成金大ブルジョアであつたから、京都邊にはこんな話が澤山殘つてゐる。

今のブルジョアにはプロレタリアといふ大敵が現はれて來て、その爲めに夜る夜中の夢の中にも魘されるのであるが、さう成つたのは最近の事で、從來はプロレタリアは物の數ならぬ奴隷であつた。ブルジョアが憚かつたのは唯知識階級のみである。千の利休は太閤を輕蔑しようとする。料理の名人は信長を嘲笑ふ。狩野法眼(?)は太閤を叩頭させようとする。油斷のならぬは知識階級だつた。

そこでブルジョアどもの方でも、さう輕蔑されては叶はぬから、茶を習ふ、連歌を習ふ、謡曲をやる、經書を學ぶ、いや仲々勉強したものだ。日本のダークエージとも云ふ可き戰國時代に於いても、武將や公卿、即ち當時の支配階級には學者や通人が多かつた。專門家そこのけの大家が澤山あつた。まして德川

時代となり世は昇平となるといよ〳〵支配階級に學問藝術が流行に成つた。水戸が學問の府と成つたのは云ふも更なり、松平不昧公の如き立派な鑑賞家、酒井抱一の如き優秀なる美術家が大名若しくは大名の家族から生て來た。かうなると

「ブルジョアとて木曾義仲ばかりぢやあないぞ。金もあれば權威もあり、その上、人並以上の教養もあるんだ」

と鼻が高い。

詰り、大正の白樺派諸君なぞがそれで、其身は皇室の藩屛であり乍ら、音樂と云ひ美術と云ひ文學と云ひ、何の方面にも知識階級そこのけ藝術家跣足ともいふ可き勢ひにて、大正抱一應大正不昧公を陸續輩出したわけで、殿樣藝の御盛んなる、前古無比、定に昭代の慶事と云ふ可きか。

いつの世でも知識階級の唯一つの賴みの綱は知識その物だが、支配者階級にはいろ〳〵の武器があるから、殿樣藝としていろ〳〵の事を學べばとて、それは決して知識階級に鼻をあかせんが爲めではなく、又自分自身教養のためのみでもない。太閤をはじめ諸大名が茶の湯や連歌を習つたのは一つは社交のためであつて、又一つには銷閑の具としてであつた。前田侯が德川時代に謠曲に熱中したのは二世利長が鼻毛を伸ばしてうつけ者を粧ふたのと等しく、高等政策の爲めでもあつたらう。弓を袋に刀を鞘に納めさせる政策上から幕府は學問を奬勵したと傳へられてゐる。併し、支配者階級の人々とて徹頭徹尾政策の化物ではない。人間性に深く根ざす藝術心や智識慾やが全く缺如してゐるのではないから、本當にそれを愛する心から藝術や知識を欲求した人々も有らう。そして時にはその方面の偉大なる天分を持つて生れて來た人々もあらう。そしてまた本當にその方面の天分を持つほどの人々に限り、それに深入りして遂には家を亡ぼし身を滅ぼす。下世話に「賣家と唐樣で書く三代目」、唐樣が巧みに書ける域まで達する頃には、國を失ひ政道を失つてゐるのが常である。而かも學問や藝術のために國を亡ぼした大名も殆んど無かつたところを見ると、殿樣藝は矢張殿樣藝だつたのだ。卽ち社交のためと銷閑の具としてであつたのだ。

三　知識の高賣り、高師直の災難

ダイヤモンドの高價であるのはその質の優秀なるが爲めのみに依らず。其數少きが故なる事は論を俟たない。知識の所有者とても其通りで、昔のやうに學者の數が稀少だつた時代には學者の値段は高かつたが、教育が普及して學問の所有者が殖えると共に學問の市價は減少した。

關原の役、細川幽齋は丹後の國、田邊に立て籠り無二の家康

方だつたから大阪方から大軍を以て攻め寄せ之を圍んだ。幽齋の身は危く成つた。然るに幽齋は神道歌道の奥旨を傳へたるオーソリテイーであるから、彼を喪つてはならぬといふので、彼を救ふ可く大阪の豐臣秀頼に對つて勅命が下つた。それで幽齋は助かつた。

德川時代に成つてもまだ知識が仲々高價であつた事は、赤穗義士の事件を見ても分る。即ち吉良上野介は殿中應答の儀に關する知識の所有者だつた。京都から來る勅使と應待して貧乏で人の悪いそして口の一層悪い知識階級たる公家に笑はれないためには、何うしても此吉良上野から學ばねばならなかつた。依てその役目に當つた大名は誰も惜まず高い束脩と授業料とを拂つた。然るに淺野のボンチ内匠頭は知識の相場を知らなかつた。彼はブルヂョアの坊ちやんだから致し方ないとして、その江戸家老は大店の白鼠のくせに吉良上野の持つ知識の相場を知らなかつた。そして上野介の滿足せざる程度の束脩を納めた。だから吉良が内匠頭に好い顏をして教へる筈がない。之は淺野の方の考へ方が無理なのだ。そして間胡つかせられ辱しめられた無念さに殿中刃傷と來たわけであつた。上野介こそ實にいい災難である。今日英語を教はるにしても、神田あたりの私立學校で教はれば月謝は安い。しかし西洋婦人に就いて學ばうとすれば月謝の高いのは覺悟しなければならぬ。吉良上野介から禮式を學ぶのは丁度西洋婦人から英語を學ぶやうなものだつたのだが、淺野の家老は不案内だつたのであんな悲劇が起つたのだ。芝居でする高師直は將軍の出頭第一の執事だが、本物の吉良家の先祖はたしか今川の旗下で、今川は代々學問があつたから、そんな事で彼も特殊な知識の所有者だつたのだらう。けれども石高は至つて少く、いはゞ武家の中での知識階級だ。京都から勅使が來るなどいふ時が實に彼の掻入時なのだ。彼がこの師走の掻入時に知識の相場を餘りに釣り上げ法外な高價を要求したことは、今日なら暴利取締令に觸れて叱られる位ですむところなのだが、彼は憐れや義士等の爲めに首を取られ、千載の下、一人も彼を憐む者がない。不幸な男といふ可し。

四　知識階級のモテた時代

嘘か本當か知らぬが、駿河、小夜の中山の人、中山鬼卯は煙草屋を渡世とし、店の障子に

世の中の、人と煙草のよしあしは
　煙となりて、後にこそ知れ

と手製の三十一文字をぬらくら書きつけ、宜しくやに下つてゐたところ、一年白河樂翁公上洛の道すがら此處を過ぎつて此

和歌を見、町人には珍らしき嗜みなりとて感心の餘り、褒美として金五兩を賜つたとある。

五兩といへば當時仲々の大金だが、樂翁公の御身分柄これよりケチには行かなかつたものか。それを思ふと現代では褒美の相場も安くなり、孝子節婦の表彰すら金何萬疋、之を札に換算すると金五圓位のものだ。況んや和歌を作つては褒美どころの沙汰ではない。鬼卯より遙にうまい歌を作つて親父からお目玉を頂戴するのが落ちである。

それは偖て措き、學問も時代と共に普及し、普及すると共に相場が下落した。徂徠や白石も學問を以て幕府に重用せられたが、幕末亂世に及んでは天下何處でも學識ある者は重んぜられた。幕末には武將や劍客は名を成さず學者の方は佐久間象山をはじめ皆天下に名を轟かせた。幕府をはじめ各藩で學校を建て士族をして就學せしめたから、士族の中に一種の知識階級らしいものが出來た。

明治革命の後にも、依然として知識の所有者は重用せられた。薩長氏が天下の利權を私したことが如何に甚だしかつたにせよ、矢張識者を天下に求めて重用した。大隈重信は何等の武勳なくして參與に擧げられ、西郷板垣らの巨頭と席を同じくした。概ね此類である。

明治時代は知識を求めるに甚だ勗めた。學校も建てた。洋行もさせた。出版迄も政府でした。文部省で美學の書物を飜譯して出版すれば、司法省では裁判錄を飜譯する。外務省では附屬の外國語學校を建てて人材を養ふといふ時代だつた。學校の卒業生は米の安い時代に高い月給で雇はれた。米が一圓に二斗もする時代に大學の卒業生は百圓にも雇はれたとの話だ。話半分として聞いても今の四五百圓には當る月給取だ。明治の中葉に及んでも、まだ月給取は世人の羨望し尊敬するアイドルだつた。月給取とは即ち知識階級だ。その中には士族の古手も大分有つたが、學校の卒業生は知識階級のチヤキ／＼だつた。

巡査だまして免職させて、俥挽かせて俺が乘る。

といふヨサコイ節がある。之で見ると、當時月給取の最下級に在る巡査といへども仲々實入があり又幅が利いたものと見える。今日では俥夫の方が遙に收入があり幅の利かぬこともない。此ヨサコイは丸で倒まだ。

俥屋だまして廢業させて、サアベルささせて門番にする。

當時、朝鮮に於ける鬼上官の如く「お巡りさんが來るよ」といへば如何な我儘息子も大人しく成つたその査公も、今やブルジョアの請願巡査として家賃無代の大悦びで門番をつとめる身とはなつた。あゝ浮世なる哉。だ。

一葉女史の小說は多く日清戰爭前後に書かれたものであるが、あの小說を讀むと當時の婦人が、如何に月給取、主として官吏に、又學士に敬意を表したかが分る。「十三夜」の女主人公おせきは下町娘である。正月追羽子をついて遊んでゐる時、おせきの突いた羽根が誤つて折ふしそこを通行の官吏の乘つてる俥に落ちた。そして見染められ求婚される。彼は若い奏任官である。一年を經て男兒を擧げる。その頃から良人は新橋の藝者に熱く成りおせきを虐待する。おせきは虐待に堪えかね家を出て親許へ逃げ歸る。父は弟猪之助もお前の良人に引立てられて漸く物に成りかけてゐる。一つには子供のため、又二つには弟の出世のためもある故、自分は犧牲に成れと說諭して返す。といふやうな筋だ。今の奏任官で藝者買なぞする人間は賄賂を取つて刑務所へ投り込まれる者に限られてゐる。マジメな奏任官では三度の御飯を頂くのが漸くの事だ。彼等に引き立てられたとて弟の出世は覺束ない。こんないい嫁を虐待するとは男冥利に盡きた奴だ。早速緣を切つて來い。官吏くらゐで滿足する積りなら、何處にだつて貰ひ手はある。と親父さん宜しく藥罐から湯氣を立てゝるところだ。

「經机」のあの初々しい女主人公の意中の人もたしか學士さんであつたと思ふ。「われから」の町子は美人にして大ブルジョアの一人娘、父母なし、そのお聟さんの恭助の事はハッキリ書いてないが「出世」といふ言葉やら紅葉館の宴會の歸りといふ文字から考へて、矢張官吏らしい、地方遊說の文字あるよりすれば或は政治家か？要するに何れにしても知識階級が、當年の女子から敬意を表されてゐる。知識階級には婦人を引き付く可き他の要素、教養から來るデリカシーもあるが、ただそれ丈けではない。物質的にもいい條件を持つてゐたのだ。

學校卒業生が如何に社會に歡迎せられたか？大學が如何に官界への登龍門だつたか？そしてその卒業證書は又ブルジョア社會に入る可き如何に有力の旅行免狀であつたかは、學士會名簿を一瞥すれば明白だ。大臣次官局長知事、大會社大銀行の重役の名は殆んど其中から拾ひ出される。更に新聞に現はれる死亡廣告に注視するならブルジョアと學閥とが如何に緣組して來たかが分る。

明治三十年頃——日清役後で企業勃興し金權やうやく盛んにして其勢力官權を凌がんとし富豪續々として出現した時代——金の世の中なる言葉をいよ〳〵明かに人々の頭に打ち込みはじめた時代——此時代にブルジョアの鼻息が荒くなつたのは勿論だが、その頃には知識の所有者、學士さん達も亦た意氣衝天の慨があつた。官界に於いては薩長の縄張と成り家に學閥は藩閥

に代るの形勢を馴致し來り、又金權とも深く結んだ。加藤高明氏の如き岩崎家の聟君をすら輩出したところの法科大學は、如何に金權と閨閥關係を生じた事だらう。

その頃の讀賣新聞に連載せられた紅葉山人の小說「金色夜叉」は大學とブルジョアとの腕押を試みたものである。女子は黃金を選ぶか學問を選ぶか？此問題に答へんとした試みであつた。ブルジョア階級を代表するものは三百圓のダイヤモンドを指頭に閃かす富山唯繼である。知識階級を代表するものは角帽を頂くところの間貫一である。山人は軍配を引いて相撲を取らせた。此所に私の說明が必要だ。何となれば本來ブルジョアと大學とは敵ではない。閨閥關係多く、謂はゞ御親類筋である。それ故、この二階級を戰はせはしたが、それはプロレタリアとブルジョアとの場合の如き階級戰爭ではない。たゞ金力か？知力か？といふ相撲の取組である。力比べの遊戲である。江戶兒にして明治兒であるところの紅葉山人には階級戰爭の考へは毫頭もなかつた。たゞブルジョアと一番腕比べがさせてみたかつた。ハザマカンイチは即ちハダカイツカンの洒落である。裸一貫の學士は勇ましく四股を踏んで土俵の中央へと進んだ。富山唯繼は即ち讀んで字の如く遺產成金の洒落だ。遺產成金は又「何を小癪な」と水を含んで含漱し小片紙で一つ鼻を引つこすつて、のそり〳〵と土俵の眞中へ出た。桟敷の見物人は即ち當時の讀者、いかで階級戰爭を知らんや。階級意識すら持つてゐない。これは面白き相撲なり、といふので手に汗を握り壯んに桟敷から應援した。

「貫一ッ」

「貫一ッ」

知識階級はバカに人氣があつたものだ。併し山人は

「勝負有つた」

と叫んで、富山唯繼に勝名乘りを揚げた。當時の知識階級はまだ今日の如く不景氣な顏をしてゐなかつたから、一般社會からの人氣が壯んにあり、此ままブルジョアを勝たせては、いつ迄も物言ひが付き相なので、山人はそれを見越して貫一を野州鹽原にやり、夢の中に勝を得させた。何處までも遊戲氣分だつた。

幸ひにして本當の間貫一は大學を止めて高利貸に成るの愚をなさず、大人しく卒業して法學士となれば金權之を待ち令閨之を迎へ、數年の後には彼自身第二の富山唯繼と成つて、ここに市は榮えた。

知識階級にとつて、ああ何といふ幸福な時代だつたらう。知識階級のモテた時代とは此頃までを指すのだ。

五　ルーブルの下落

好い事はさう永く續くものではない。いつも柳の下に鯲が居ない。とはこゝのことだ。

月給取に限りやす、と云つて小賣商人がその息子を學校へ出さうとする。學問させたら俺が悴も、はあ、郡長さまが話して下さる位にまで出世しべえか？とお百姓が土地を書入れにし農工銀行から借りたお金で息子を學校へ出す。そこで學校も殖えた。大に殖えた。卒業生もどし／＼殖えた。ただの學校だけでは間に合はないのを見て取り、學校商人めらが私立大學の招牌を下げて客を呼ぶ。中學を出た椋鳥が澤山來て引つかかる。學校商人は一儲けも二儲けもして別に生命保險だの火災保險だの印刷會社だの出版部だのを押立てて、景氣は益々上々だ。かう椋鳥が澤山ゐるならもつと校舍を擴げようか？と、專門部だ高等師範部だ何だ科だと科を殖やす。それでも又來て引かかる椋鳥の種は世に盡きまじといふ盛況だ、手の屆かぬところは講義錄を賣り付け二年も買つたお得意さまには卒業免狀を送る。月謝で賣るも月賦で賣るも僅か謝の字と賦の字の相違だとは濫太いものだ。その上鳴物入りで寄附金を募る。寄附したゞは太五作でも杢兵衛でもことごとく推薦校友に祭り上げる。こんな事で杢兵衛までも一かどの知識階級に引つ張り込まれた。一つの學校商人の製造しただけでも之ほど多い。尙ほ他に學校が無數に殖えた。知識階級もよく／＼殖えた筈である。

私達の幼年時代には、私の鄕里などでは高等小學校といふものは二郡に一つしか無く、利根郡九十方里、北勢多郡十四方里、合せて百〇四方里の中に高等小學校は唯一つしか無かつた。それが今では村々にある、又私が少年時代には尋常中學は一縣に一つしかなかつた。然るに私が中學へ行く頃には既に一縣五六校に殖えた。學校の增殖率、推して知る可しだ。學校の種類も亦た殖えた。

殖えた、／＼、と云へば如何にも景氣がいいが、マルクやルーブルの不換紙幣が殖えたとて話にはならぬ。知識階級も明治中葉のそれはロマノフ朝のルーブルだつたが大正の知識階級はソヴイエト政府のルーブル紙幣だ。一束三文のルーブル紙幣だ。

法學士の巡査現はる、といふ記事が現はれる樣に成つたのも、大正に成つてからの事だが、人々はそれを見ても格別な事出來せりとは思はぬ。驚きはせぬ。之れ經濟の向上か、法學士の相場下落か？

また法學士の受附や法學士さんの小使さへ出現しそれ、もはや

法學士の社會主義者はいよ〳〵ゐる。明治時代にブルジョアの御親類筋であり大官の卵のみであり、芳賀博士をして法科萬能論を書かしめたるほど全盛の法學士の中から、プロレタリアを指導する階級戰爭のチャンピョン諸君が輩出し様とは、さて〳〵世の中も變つたものだ。

之といふのも畢竟するにループルが安く成つた爲めなのだ。決して物ずきばかりがその動機ではない。社會主義の書物を讀んだだけのことで、儲かる口を捨ててストライキの音頭が取れるものでない。要するに、儲からなく成つたからだ。官邊も商界も上の方が先輩でギッチリ詰つてしまつたからだ。後進の士は進むに道がないからだ。あぶれたからだ。

紅葉山人逝いていまだ二十年ならず、もはや富山唯繼と間貫一とは到底取り組みにならず、富山は横綱格なり貫一は序の口にだに達せず、ふんどし擔ぎなり。要するに知識階級は黑丸ばかりだ。

知識階級で最も賴みとするところの法學士殿すら此次第である。況んや、その他の面々、ブルジョア閥に打つ突かつて一つ揉んで貰はうか、といふ勇氣すらなさ相だ。貧弱な、數のみ徒らに多い。曰く、腰辨、曰く新聞雜誌記者曰く銀行會社員、曰く小、中、大學教師、曰くヤソ教牧師、曰く文士曰く洋畫家曰く何曰く何。何れを見ても營養不良神經衰弱は到らぬところだ。

別してブルジョアの家庭教師などとなれば、たとへ報酬は多少よからうとも、これを先生とは態のいい雇人にすぎない。而かもその子弟の師である。先生である。この時の家庭教師の心持は何うだ？ブルジョアは家庭教師の前では呼ぶに先生の稱呼を以てするけれども、影では彼を何と呼ぶか？他のブルジョア仲間と話す時になぞ「内の何々が」とその姓名を呼び捨てにして被雇人扱ひにすることはないか？但し、それは絶無ではあるまい。ぐつと高等なところに話が飛ぶやうだが、マケドンのフイリップに招かれて王子アレキサンダアの家庭教師と成つたアリストテレスの感想は如何？同じ家庭教師でも王者の師と成れば待遇も亦格別であらう。ただの成上り者のブルジョアの家庭教師と同一の談ではなからう。プロシアのフレデリックの家庭教師としてフランスの故國を他所にポツダムの宮廷に行つてゐたヴオルテールは、いくら優待されても一種の反感を抱いてゐて、パリの友への手紙には常にこの「野蠻人の王」の惡口が認めてあつた。彼は何故それにも拘らず家庭教師になぞなつたか？だが普通の家庭教師、ブルジョアの家の家庭教師の心持は何んなものだらう。

孔子が「往きて教へず」と云つたのは、教育家としての見識

を示したものであつて、孔子に從へば家庭敎師と成る事は禁物なのだ。而かも「止つて食へず」となれば又考へ直さねばならなくなる。飢の前に見識は無い。恁うなるといよ〳〵心細い。知識階級も黄昏氣分だ。

ただに家庭敎師ばかりの事ではない、人に雇はれ、人の會社に雇はれて月給を頂戴すれば、外へ出て如何に立派な學者でも天下の名士で候といつても、社長の前では被雇人だ。

知識階級は、數の增殖と共に上下に廣く擴がつてしまつた。大臣重役を先頭に立たせた景氣のいい先發隊と、法學士の巡査さんを圍んで除々に歩む後方部隊と、大分そこに距離が出來た。そこで知識階級も自ら二つに分れる形勢を生じて來た。ブルジョアに接近するものと、プロレタリアに合併するものとだ。ブルジョアに接近して生活の擴張を計り得る者は漸々それに傾き、迚もブルジョアに近づいても一生うだつの上り相も無いのは左に傾いてプロレタリアと提携を謀る。一つの軒の下に住んでも、家庭敎師はプロレタリアの氣分に共鳴すれば、之に反して秘書役は動もすればブルジョアに忠勤をぬきんでようとするかも知れず。同じ新聞社の中ですらも、經濟記者はブルジョアに親しめば社會部記者はプロレタリアと抑れもしよう。環境の力も亦た大きい。

六　ラスコルニコフの就職難

さて、そこで、ブルジョアに近い知識階級乃至プチブルジョア的知識階級の事は暫く措いて、貧弱派に屬する方の知識階級に付いて語るとしよう。

先刻も一言した通り、知識のループルの値段が素晴しく下つた。明治三十二年以來、尤も上つたのは下女のループルと鰹節とで、印刷工之に次ぐ。知識階級では最近に敎員のループルだけが纔かに恢復したがそれとて殆んど物の數ならず、何のサラリーマンも一般にループルが下つた。しかも甚だしく下つたのだ。

さあ、恁うなると、弱り目に祟り目、知識階級には惡いことばかり附き纒ふ。不景氣には就職難、物價騰貴で生活難、借家難、細君難、女中難、子供があれば兒童の就學難、失業難、又此頃では納税難、とそれは〳〵御難つづきだ。

何の因果で知識階級はそんなに御難つづきなのだ？と問かれれば、その御難は天災でもなければ放蕩の結果でもなく、たゞ貧乏故と答へる外はない。然らば、では何故彼等は貧乏するかといへば、何うも貧乏する様に出來上つてゐるからだと答へるまでであらう。

月給取りがモテた昔の學校卒業生は大方少數富裕な士族又は保護者を持つ特殊な士族の子弟及び地方のブルジョアの子弟だつた。何となればまだ中學すら一縣に一校しかない樣な時代に於いて、わざ〱そこ迄出かけて學問させるといふ事はブルジョアでなければ打てない藝だし（當時學問する者の考へは專ら人格教養の爲めであつて、今のやうに丁稚奉公の代りにするのではなかつた。遊學は一種の高等な道樂だつた）又は月給生活以外を知らぬ士族ででもなければ志さない事だつた。士族を一口に貧乏士族といふがそれは奉還金の金祿公債をチヤ〱メチヤに浪費した迂濶士族と少祿者の話たるに過ぎぬ。士族は軍人又は官途に志す者多く從つて學問を志した。ブルジョアの子弟なぞ卒業後えらい月給を取らないでも困らぬ身分であるのに、えらい月給が取れた。猫も杓子も學問する樣に成り貧乏士族や中產階級以下の子弟まで學校を出る近代になると、月給取はモテなくなつた。所得も減つた。さても〱世は意地惡なものである。

だが現代といへどもブルジョア子弟の學校卒業生は矢張モテてゐる。諺に瑠璃は玉を呼ぶ、といふ。金の蔓を握つて生れた人間は、轉んでも起きても金に有り付く。「罪と罰」のラスコルニコフのやうに質を置いて高利を借りてゐる大學生では、卒業しても好い口はかかるまいが、ブルジョアの子弟なら「親の光は七光り」で何の方面にも手蔓はある。銀行にも會社にも親父が關係してゐたり、又は親父の友人が重役の椅子に着いてゐる。さてさうなると今度はこつちが我儘に成り、何の歟のと選り好みをする場合もあるが、先づ〱就職の道を失ふ心配はない。よしんば假りに就職口が無いにしてからが、少しも悄てることはない。高等下宿に、又は自邸に悠々と起臥して紳士の粧ひをし、暇に委せて尙ほその上の修養が積みたければ何んないい教師にも就き又は大學院に殘り、本は買ひたいものを丸善へ註文し、時々は帝劇、帝國ホテルの音樂會へ氣晴しに出かける。何の道結構な身分であるが、又不思議なくらゐ案外にもブルジョアの子弟は世渡も上手だ。社交は殊に手に入つたものである。貴族となると貴族特有の冷淡を持つてゐるものであるが、それにも拘らず社交は巧みだ。プロレタリアの樣な熟識と親みとは無いにしても、その代り又プロレタリアの樣なひつつこい要求がない。淡々としてゐる。虛榮はあるにしても要求はあるにしてもそれを露骨に示さない。落着いてゐる。之は何と云つてもブルジョアの長所、殊に貴族の長所である。金が有り手蔓があり社交が巧いと來てゐるから、鬼に金棒、とん〱と出世する。

之に反してラスコル＝コフの方はまた何といふ貧乏性だらう。彼の學費は田地を抵當にして農工銀行から借りたものである。彼の學費は何時首に成るか安心出來ぬところの親父の月給の二十パーセントである。國の親父は殘る八十パーセントを以て母は下女をも置かず五六人の弟妹を養つてゐるのである。そして伜の卒業を待つてゐるのである。從つて成功を急ぐ。一度高等學校の入學試驗にしくぢつたが最後、一年分の學費が其處に不足して來るのである。大器晩成などとやつてゐられない。私立でも專門學校でも何でも早く物にして妹と弟くらゐは引受けて貰はねば、腰辨の親父がやりきれない。そこで私立の學校へ入る。憐む可し、ラスコル＝コフ！之で彼の一生は呪はれてしまつた。椋鳥は教育商人が張る網にまんまと引懸つてしまつた。彼は平凡な成績で卒業した。卒業したが雇入れの口がかからない。

(優等生は例外だ。又最近昇格した大學の卒業生は社會で優遇しはじめたらしい。之は甚だ結構なことだ。昇格大學卒業生諸君幸ひにラスコル＝コフの仲間から脱せられんことを！以下謂ふ所のラスコル＝コフは昇格大學以下の諸學校又は半途退學者の代名詞とする)

卒業して就職口の無いもどかしさ。道中双六を大津まで來てゐ乍ら、何度ふつても京へ上れぬやうなものであるが、實生活の苦痛は双六の負けどころの沙汰ではない。卒業後の送金は何ぼ何でも親達に氣の毒であるのに、遊んで暮せば金が要る。ロクな小使錢も無く仕事も無くぼんやり下宿の二階に籠城する日の味氣なさ。こんな時こそ誘惑の魔の手の伸ばされる時期で、女の爲めに一生を誤る者も少くない。だが、それにも増して悲慘な事は同期生の友食ひである。

學校の方にも雇ふ方から小口の申し込みはあるが、その選に洩れ、いつ迄待つとも空しいと思ひ、ラスコル＝コフは徐ろに下宿を出でて口探しに取りかかる。親の光は糸しん蠟燭ほども利かず、その上ブルジョアの子弟とちがひ交際は下手、學生である間に先輩の家を拔目なく訪問して捨石を打つてでも置いたなら、こんな時に生目は出來るのだが、ラスコル＝コフに限り自分が黑を握つてゐることにすら氣づかない。學生時代には友人たちと安いカフエーに夜をふかすか散歩するか、よほど心懸のいいところで讀書三昧だ。本を讀んで蘊蓄の有ることなぞ何も就職の助けにはならない。(但し試驗勉強をして好成績を得るは立身の捷徑だ。何となれば社會の卒業生に要求するところのものは、學問才幹に非ずして成績點也、能率に非ずしてお態裁なれば也) そんな事より風采でもよければまだしも雇手がな

いとも限らぬのであるが、彼はブルジョアの子弟の如く時勢粧するを知らぬ。又氣の利いた背廣服を買ふ資本だになし、平素は先輩を訪れもせず、自分の用が出來て初めて先輩を訪ふといふのに、菓子折一つ持參する知慧もない。生憎と訪問學は學校の課目にもなかつたし、又彼に訪問術を教へる參謀もない。林子平の云ひ草ではないが、眞に就職口なき卒業生は六無齋である。金も無ければ死に度くもなしだ。その上更に處世に關する知慧才覺さへ無いのである。誠に大海の捨小舟、心細さの限りではないか？

ところで我がラスコルニコフに訪問せられた先輩なる者は、如何なる態度を取るであらうか？ブルジョアの子弟が無暗と人に頼み廻るものでもないが、若し頼んで來たと假定すれば、かれ先輩氏は悦んで一肌ぬぐであらう。對手が彼より大ブルジョアの場合ならば、此處らが忠義の盡し時だと大肌ぬいで盡力奔走する事だらう。（深切とか義俠とかいふものは大抵こんなものなのだ）けれどもラスコルニコフの訪問を受けた場合は全く其趣を異にする。或先輩氏は何度行つても玄關拂ひを食はせる。又もつと溫厚と人格者とを以て聞ゆる先輩氏はまづぢろ〱とヒューチャ君の風采を觀察する。頭の毛ばかり流行のオールバックに掻き上げて香油の香ひをプン〱させてるが、着物を見れば襟垢によごれ、叩頭の仕方も滿足に知らぬ。眼鏡は鼈甲まがひの太い大きい腮緣、その樣子つたら何の恰好だか？河童が無心に來たとしても、もう少し樣子がいいだらうに、などと心中に思ひ乍らも表面は如才なく、同鄕人ならば鄕里の話でもし校友ならば學校の近況を問ひ年齡を問ひ志望を問ひ月給は幾何要求するかを問ひ（此間に小間使が紅茶一杯を持ち來ることなどある可し）さて徐に目下世間甚だ不景氣にして此處ぞと思ふところも無いが、若し見當つたら御知らせする、と答へるだらう。これだけ應對するのでも、實は多忙なる先輩氏にとりては、可也迷惑なる事也と推察してやらねばならぬのだが、そこに氣の付くラスコルニコフではない。而かも言はれた事だけ正直眞法に、口の知らせは今日か今日かと空しく待つ。

ぶら〱してゐるのは彼ばかりではない。友人も同樣な筆法で就職口にあり付かず下宿の二階にごろ〱してゐる、そこへ一つ口が出て來る、彼等は之を讓り合ふか？彼等は之を爭ふか？恒產ある者恒心有り、とはかかる場合に情けないかな眞理である。恒產あれば彼等は互に讓るところをも、恒產なきばかりで淺間しく之を爭ふ場合さへある。爭はざるまでも落伍者は成功せる友を意識的か無意識的かに羨望嫉妬するを禁じ得ぬであらう。

ブルジョアの子弟にして此閑暇あらば宜しく洋行でもして箔を附けるところ、西洋へ行つて淫賣ばかり買つて來ようがカルタばかりして遊んで來ようが、洋行は洋行だ。投資しただけの箔が附く。我がロージヤ君はそれもならず、せう事なしに上野の圖書館と出かけるが落付かぬ心には本も實にならず、出るものは欠伸ばかりで智慧は出て來ず、されば言つて一層一思ひに筋肉勞働の世界に身を投じるの勇氣も出ない。伯夷叔齊は身ブルジョアの家に生れ不幸にして革命に逢つたから、まさか筋肉勞働をする事も出來ず首陽山に登つて蕨を食ひ、蕨盡きて餓死したが、史家之を憐み周の粟を食まざるを以て忠とした。ラスコルニコソは革命に逢つたのでもないに、豐葦原の瑞穗の國に生れて米が食へず、食べるだけは食べても下宿の拂ひに窮するのだ。

七　絶間なき首の心配

出發點からして右の通りの次第である。男子三年の後、また呉下の舊阿蒙に非ずとするも、昇進の遲々として牛歩の如きは知る可きのみ。漸くにして奉公口にありついても記者だ。平社員だ。腰辨だ。教員だ。サラリーマンだ。朝から晩まで追ひ使はれては奔命に疲れ、修養研學の暇さへなく、少し位の秀才では何うか怎うか腦味噌を搾り減らされて凡才庸才鈍才と冬の初めの寒暖計のやうにだん／＼低く落ちてしまふ。寒暖計なら一陽來復春風の吹くと共に盛り返して來る希望があるが、サラリーマンの生涯と來たら槁木の年取りと同樣年々歳々體力も才氣も減るばかりで、いつ迄しても頭の上らぬところは下世話に申す金槌の川流れ、獨身でゐては不經濟とあつて、止せばいいのに女房を貰うと、子寶ばかりヒヨコ／＼出來る。寶は寶でも此子寶は親父のサラリーを食ひ潰す方の寶、家を借りようとしては大家さんから斷られる方の寶だ。こんな寶に遠慮なく殖えられて早くからサンガア夫人でもやれば良かつたと後悔しても後の祭。バースコントロールの議論だけは、常に同僚と戰はせ乍ら實行の伴はぬ罰は右の始末だ。女房は女房で、自分が腦味噌くさくなりきつてる事をも忘れて、着物の不平帶の不平パラソルの不平オペラバツクの不平、帝劇へ年に一度も行かれぬ不平、その他種々雜多な不平の數々を並べたてる。何れも御尤樣御尤も樣でサラリーマンは座布團のやうに敷かれ通しだ。妾を持たず遊蕩をしないのも、怎ふなると夫德ではなく却つて不德だ。働きが無いからだ、と仰言られるに一理ある。

税務官吏は三百代言と高利貸とを打つて一丸と成したやうな面構へで、この哀れなるサラリーマンを誅求する。ブルジョア

の財產は間口は廣し奥行は深し、到底收稅腰辨の眼力では見通しが利かず、何萬圓何十萬圓の脫稅をされても分らぬが、（脫稅の捕まるものは千に三つか萬に八つ）サラリーマンの收入ときたら唯の一文の隱しも無し、職員錄に明白だ。極りが羞かしい位明瞭だ。赤貧洗ふが如き中からとて情け容赦もあらあらしく取り立てられる。負けろも引けも待つたもない。役所で御同役を相手にへぼ將棊をさす時の調子で待つてくれろと云つてる間には、赤刷葉書の財產差押のお差紙が三日おき五日おきには舞ひ込んで來て、數ふれば無慮二十枚。サラリーマンはつくづく厭だと思ふなら辭職する迄の話だが、辭職した日には鼻の下が干上る恐れあるに依つて共嫌な椅子にかぢりついてるが、何の、とどの詰りは向ふから辭職させてくれる、老朽陶汰、冗員陶汰、經費節減、口上はいろいろあるが要するにお拂ひ箱といふ事だ。知識階級がさんざん搾取されて骨までしやぶられた頌德表の文句は、

「貴殿事、明日より出社に及ばず候」

だ。邦文タイプライタアで禮儀正しく刷つた字面から云つても、流石に慇懃を極めたものだ。

サラリーマンが馘首された時の顏といつたら、何うしても記念寫眞に撮る可き代物だ。木から落ちた猿轍の鮒、青息吐息とは正に之で、神佛にも見放されたばかりでなく、親戚故舊はおろか女房にまでも愛想をつかされた體だが、さうなつてもまだ稅務署は見捨てて呉れぬ。

――拙者は目下浪人です。

――はあ、さうですか。大變な御家族であるのに失業とはお氣の毒です。でもまあ、よくやつて行かれますね。

――いやはや、お羞しい話で、少々あつた貯金も殆んど引き出してしまひました。

――ずゐぶん經費がしませうね。

――はい、案外かかつて閉口してゐます。物價はただただ高いですな。

――左樣、々々、そんなに經費のかさむ御生活をなさるのだから、所得はよつぽど有りませうね。何うか申告して下さい。

――いえ、何う致しまして、所得なんぞ殆んど有りません。全く賣り食ひです。七とこ借りをして借金でやつてゐます。

――借金も所得ですよ。持物をお拂ひなさるのも所得ですよ。

――へい、借金が所得ですか？とにかく拙者は浪人で、浪人といへばお分りでせうが、失業者です。

――それは分りましたが、失業しても此の多人數の御家族が食

べて行くには、二千や三千の所得なしにはやりきれますまいよ。物價もまださう澤山は下らず、家賃だけでも大抵ぢやありますまい。いや、お邪魔しました。へい、左樣なら。

――何うだい。婆さん。鬼の眼にも淚とはよく言つたものだ。收稅吏が「お大抵ぢやなからう」と大に同情して行つたよ。

數日すると約束郵便で決定書が來る所得金二千五百圓也、と記されてある。拂はない。とても拂へない。又々赤刷の催告狀、怨みと共に積り積つて二十枚、ああ、之が夢にでもいいから皆な札であつたらなあ。

この稅務官吏と共に、サラリーマンに對して特別の執着を特つものに高利貸がある。一生に恐らくただの一ぺんも婦人に惚れられた事の經驗を持たないサラリーマンでも、高利貸に逢へば屹度好かれる。お役人や教員さんは殊更、逃げも隱れもせぬ奇特な人とあつて、高利貸閣下は月給日に役所へ詰めかける。

併し乍ら、安心せよ。稅務官吏と高利貸と、もう此二人より他、誰れも君等サラリーマンに「親愛なる君よ」と呼びかけるものはないから。

八　知識階級の戰鬪力

知識階級の運命は前述の通り、哀れ果敢ないものである。何時までつづくか當にもならない一生の中の、ベスト、パアトを提供して、月賦で受け取つて命をつなぐ。彼等の月給とは命の月賦拂ひの別名だ。だから一寸算盤にあたつてみれば、その總〆高は出る筈であつて、此教師一疋幾ら、此事務員一個幾ら、と忽ち値ぶみが出來るのだ。さう思ふと萬物の靈長などと威張るのは可笑しい樣なもので、一頭千圓のゼルシー乳牛、一羽三圓の鷄と相場の高下こそあれ似たものではないか？

併し乍ら、古諺にも一寸の虫にも五分の魂とやら、蟷螂は三寸ばかりの小虫だけれども、その斧をあげて龍車に對ふと云ふ。この哀れはかなきサラリーマンにも五分か一寸の魂があるか？一口にて言へば彼も亦た戰鬪力有りや、如何？

何と云つても、現代に於いて世を支配する主人公はブルジョアである。知識階級も亦たその下に雌伏して哀憐を請ひその恩寵に浴せんと願ふはプロレタリアと擇りはない。ブルジョアの一顰一笑は、殊に神經質なる知識階級をハラ〱させるのだ。それほど彼等は忠僕だ。筋肉派のプロレタリアは一層忠僕だつた。併し、如何に弱小なものでも窮すれば鼠さへ猫を噛む、困窮

ほど恐ろしいものはない。使嗾されれば狗も亦た虎に向ふ。使嗾ほど強い興奮劑はない。プロレタリアの困窮してゐるところへ他から使嗾があつたから堪らない。永い間――殆んど歴史あつて以來忠實だつたプロレタリアも、此所に覺醒して近來時々反旗を飜すやうに成つた。反旗を揚げてみるとプロレタリアの力は仲々侮る可からざるものである事が分つた。彼等はブルジョアの如く要塞を特たず大砲及び速射砲を持たず、全く肉彈以外に何もない。而かもその多數がよく團結しさへすれば、その多數である事と狂熱的である事との爲めに、屢ば要塞を陷落せしめる底の驚く可き偉力たるの例を示した。プロレタリアは肉彈にすぎぬ。而かも二十世紀に於ける怕る可き偉力である。

知識階級は何うだ？知識階級は現在武裝してゐるか否か？知識階級も亦た筋肉派のプロレタリアの如く貧窮の極致に達したなら、或は爪牙を研いで蹶起することもあらう。今日既にその或者は筋肉派と同樣な慘境に陷り不平欝勃たるところへ、社會主義の潮流が外からどし／＼流れ押せたので、夙くもそれに刺戟せられて左傾したものも少くない。思想感情に於いては寧ろ筋肉派(プロレタリア)よりも險悪に成つてるが、まだ彼等が一致團結して事を擧げたのを聞かぬ。サラリーマンの小聯盟が出來た事を聞いた樣な氣もするが、まだ官吏なり銀行員なり又は尤も窮境にある新聞記者でさへもが、結束してブルジョアの牙營を突いたのを聞かぬ。

それにはいろ／＼事情のある事だが、要するに知識階級には樣々な弱味がある。

第一に、筋肉勞働者ほど事情が切迫してゐない事。

第二に、筋肉勞働者より生活力に乏しい事。

第三に、團結困難なる事。

等が重な理由だ

サラリーマンも物價騰貴の割合から云つて、給料の昇級は少く、不景氣に逢へば猶更昇級はせず手當は減る、危く首にも成り相だ。けれど如何に薄給と云つても筋肉勞働者の比でない。サラリーマンは月給であり筋肉勞働者は日給である。サラリーマンにも便郵局鐵道省などには或筋肉勞働者よりも薄給なのもあるが、――便郵局の事務員の薄給者よりは集配人の方が十圓も多いが、骨の折れ方が丸で違ふ。事務員なら下宿屋でこさへてくれた辨當でも凌げるが、集配人は日に幾度も美味な營養ある食物を攝取せねば體がつゞかぬ。だから結局事務員より薄給も同樣だ――サラリーマンの上級はプチブルジョアの足下まで屆いてゐる。筋肉勞働者の中の技能ある者、大工や左官でも、左官は親方の請負であるが職人には親方から日給五圓位は

やる。隨分高給の様だが之は天氣が惡ければ喉が乾かないので休む。又仕事も少い相だ。要するに休みが多いから月に延べると薄給に成る。昔から大工の手間は尤も高い方なのだが目下三圓七十錢位のもの、植木屋と成るとずつと安く二圓五十錢そこ〳〵だ。印刷工は大分前より高く成つたが骨が折れ根氣を使ひ體を痛める。老いては出來ぬ。傭夫も賃入はあるが老いては出來ぬ。サラリーマンはボーナスもあり永く勤めれば恩給も付き解雇手當も勞働者の比に非ずだ。即ち未だ事情が切迫してゐない。

勞働者の旗頭たる大工でさへも休まず働いて百何圓にすぎぬ。仕事の無い事もあり休み度い日もあり病氣の事もある。月收知る可きのみ、それで妻子あれば養はねばならぬ。まして技能を持たぬ、所謂勞働者の如き本當に食ふや食はずの生活だ。今春雪の降つた朝、夜中の三時から電車道の雪を掻いた富川町の失業勞働者のその日の日給が一圓二十錢とか新聞に在つた。何といふ人生の悲慘事だらう。

だが、サラリーマンの生活はそんなものぢやない。洋服を着た姿もハイカラだ。うまい物の味も知つてゐる。旅行も時々する。薄給で家族の多い者の他は、生活困難とは云へぬ。心懸けがよければ些少ながら貯金も出來る。望みさへ小さくば逼ふ虫のやうに生きる道はないでもない。無論それでもブルジョアの奴隷は奴隷に違ひない。ブルジョアが現代文明を享樂してゐるのを見て、　大邸宅を構へ珍寶貴什を貯へ美人を擁して自動車を乘り廻すのを見て、陳勝の言ひ草ではないが「王侯相將種有らん乎」などと羨望しはじめたら不平にもならうが、今のサラリーマンの中に滅多に陳勝が居もすまい。要するに彼等にはまだ鬱勃たる不平がない。筋肉勞働者のやうな悲痛な窮乏がない。それにも拘はらず、サラリーマンの中の不平家は比較的生活の樂な若手の中に多い。それは彼等に物質欲文明享樂慾が強い爲めもあらうが　又彼等不平家の多くは怠け者である。又は無能な者だ。そして左傾思想にかぶれた者だ。彼等の左傾思想は附け燒刄だ。だから無力だ。それは彼等が奮然として蹶起して戰はないのが何よりの證據ではないか？

次にサラリーマンの中の眞に苦境に在る人々、不遇な人々、扶養す可き家族多き人々、その連中には宜しく多分の左傾思想があり同時に左傾感情がある可き筈であるのだ。彼等の不平は附け燒刄ではない。だが、彼等はきまつて臆病だ。彼等はブルジョアに對つて結束して挑戰するなど夢にも考へぬ。彼等は重役の足跫を聞いても慄へ上る。彼等の不遇が彼等を臆病にし、骨抜き餡にしてしまつたのだ。彼等は重役のお袴の塵を拂ふことにのみ肝膽を碎き、惟命之從だ。重役の靴を揃へ重役の背か

ら外套を着せるなど小間使か下男のやうな事をして人目も恥ぢぬ。之が目下、大會社大銀行及び官廳の現狀である。萬が一にも重役に對し不平を洩す者でもあれば、彼等は如何にそれに同感であつても、共鳴するより先に其事を以て重役に密告し忠義顏を粧ふのだ。恁うまで奴隸根性に成りきつてる今のサラクーマンには手が付けられぬ。之をしも知識階級といふのはいささか勿體ない話、宜しく無產無識階級が適稱だ。

だが、これといふのも、知識階級にはヴアイタリテイーが乏しいからの事だ。プロレタリアは失業しても永く遊ぶ事はない。いくらかでも金に成る仕事でさへあれば、面倒を言はずに何でもやる。砂利も運ぶ、車も押す、豚も殺す、溝掃除もする、車掌にも成る、元手を出してくれさへすれば背負ひ商ひもする、緣日へ露店も出す。妓夫太郎すら辭するところでない。彼等は川柳が何處へ挿しても根を持つ樣に生活力が強い。知識階級はさうは行かぬ。力仕事は出來ない。不見識な事は出來ない。汚ない仕事は手が出ない。それで贅澤の味はブルジョア並みに知つてゐる。だから彼等に馘首ほど怕ろしいものはない。神經質で氣取り屋で負惜しみが強くて趣味性がある。この四つのものが知識階級の特色である限り、彼等の生活力は甚だ弱い。彼等は常に云ふ。「そこまでは身が落せないから」と。

併し、ブルジョア側から考へれば、奴隸根性でも何でも、サラリーマンが皆此通りの臆病者であつて吳れれば、お家は安泰益々繁昌であつて、たとへかぶれた附燒刄にもせよ、左傾せる若者たちは怕る可き怪物だ。

知識階級の中にサラリーマンならざる浮浪人がある。支那浪人滿洲浪人とやら天竺浪人とやらその他多くの政治ゴロ、美術家音樂家文士その他の幇女郎が東京にはうよ〳〵居る。彼等はこのせち辛い浮世の中を主人も持たず勤め口もなくて、その日〳〵を何うやら過ごすばかりでなく、場合に依つてはブルかと人の見誤るほど豪奢な生活を營みもする猛者どもだ。それだけ同じ知識階級の中でも此連中の方が氣樂に見えて、その實多く頭を使ふ。

主人持たずの天下の浪人と云へば、あはれ珍らしや、此黃金萬能の世の中に住んで、膝を屈してブルジョアの奴隸とならず、如何にも男らしい樣に聞こえやうけれど、それには外見だけの話で、政治ゴロはボスと稱する選擧請負師、浪人といふも何れ何處かに金穴を持つ資本家たちの油蟲、美術家音樂家も買つてくれ招いてくれる對手はブルジョア、プロの美術といふものが議論の上に存在しても買ふ者が無ければ成立すまい。それにはブルジョアに膝を屈せねばならまい。文士といふも水商賣。一人

で偉がつてみても社會が對手にしてくれねば治まらぬ。月々の雜誌日々の新聞へ執筆の依頼を受けるところは、藝者衆がお座敷のかかるのを待つ樣なもの。永くお茶を引くよりはと泣き泣き三文雜誌や地方の小新聞に見ず轉を稼ぐ者もあり、幸ひブルジョアの家に生れて衣食に事缺かず、あはれプロレタリアの鼻息の荒きを見て、隣もこの頃流行る貧乏とやらいふものがしてみたい、と貧乏に憧れ玉ふ公達文士を聟ふれば金持の親にかくれてキネマ女優を志願するおぼこ娘といふ可きか？老大家とて世の尊敬はさるもの乍ら、之とて自前の大姐御、といふだけの話白粉クリームに小皺を伸ばして何時まで取るやら左褄、敢果なき身をかこつ夕暮もあらう。新思潮橋の三人組早稲田坂の五人組と地廻りのニキビに騷がれこそすれ、その全盛は槿花一朝の榮えにしてやがては讀書界から忘れられて行くのであるが、その全盛さへ資本家の後援なしに成るものならず、書肆と小說家との結托は藝妓家が抱えを置くにほぼ等しい。「ちよいと新聞屋さん。この妓の評判をして頂戴よ」といふ格で、書肆は雜評家に命令を發する。中には對間末社どもを引連れ手讃めの雜誌を自ら經營する小說家もある。

既に之れだけでも　お家は御安泰であらせられるのに、かて加へて知識階級には團結心が極めて乏しい。ああの恁うのと銘々細かい理屈を捏ね廻す。まだ商人だけに銀行會社員などは一致する場合もあらうが、それより一層知識的な新聞記者など と來たら、甲論乙駁、何れも大家揃ひだから議論百出して殆んど協同一致の可能性がない。尙ほそれ以上に階級鬪爭問題に鋭意研究する專門家の社會主義者となれば、丸善に歐米の新刊書が到着する每に新に一黨一派が生れる位の形勢で、外から一口に社會主義とは云ふものの、中へ入つて見れば殆んど一人一黨。何れ劣らぬ首領株であつて．所謂兩雄並び立たず、況んや群雄は割據の有樣、ブルジョアの前で每日見つともない内輪喧嘩に月日を送つてゐるのは共邊の消息を物語るものだ。軍隊が「力」であるのは、彼等の中に理窟を言はず、萬事命令で行くからだ。水平社國粹會等、（質は違うが）双方とも力で有り得るのは、銘々が理窟を言はず一致團結するからだ。それが今の知識階級には出來ない。

十　輿論を作る、宣傳の力

宣傳の力はいよ〱近年に成つて誰にも認められて來たが、此宣傳に與かつて尤も有力なものは知識階級である。之が知識階級にとり何とも兎かんとも唯一つの力であり武器であるが、偖これが決してバカに出來ない力だ。之こそはブルジョアの金

力、プロレタリアの大衆力と相拮抗するに足るものであり、壓ば他の二者を凌駕する

十九世紀の末葉に方り、ピアス石鹸(ソープ)がアメリカの諸新聞に大々的廣告をして成功した頃から、世に廣告の力が認められ、商賣の成敗は廣告如何に依つて決せられる事となつた。之は品物だけの事と限らぬ。政治も社會がデモクラティックに成れば成るほど、宣傳が必要に成つて來た。すべて輿論に依つて事が決まる。そこで數に於いてブルジョアよりは遙に優勢であるところの知識階級（言説を爲すに方つてプロレタリアよりも尤もらしき理窟をこね廻し得るところの知識階級が、宣傳者として適任であるのは今さら喋々呶々を要しない。宣傳は殆んど此人たちの一手專賣と云つてもいい位だ。別けても新聞雜誌記者文士論客と來たら、宣傳その物といつて宜い。

知識階級は金力なく又暴力を持たない。彼等平時はブルジョアの奴僕である。けれども、彼等一度平を度されば即ち鳴る。と云つても唯鳴るだけの話で彼等自身痩せ腕をまくり上げてみても、サッパリ睨みは利かないが、彼等もそれは識つてゐるから、そこで一般民衆に敵愾心を宣傳する。遠くフランスの大革命やロシヤの勞農革命に例を引く迄もなく明治維新は實に貧乏士族（當時の知識階級）の宣傳革命だ。全國に勤王討幕を宣傳し、ロクな戰もしないで天下を覆してしまつた。幕府の方でも（即ち支配階級ブルジョアに相當す）公武合體だの佐幕攘夷だのとさまざま宣傳をやらせたが、御用宣傳ぢやあ力が無い。とうとう貧乏士族の宣傳に敗かされてしまつた。民選議院を開かせたのも明治十年代の知識階級（在野士族）が地方の有志（中產堦）に宣傳した勝利の結果に他ならぬのではないか？支那の宣傳上手は現代の李烈鈞君に初まつたわけでなく、戰國の昔に蘇秦あり張儀あり言論界は多士濟々だ。夫れ衆口は金を爍らせ巷說は市に三虎を出す。始皇は宣傳の如何に怕る可きものなるかを知つてゐたからこそ、時事を議する儒者を坑にしたのだ幕府も安政にクーデタアをやり明治政府も二十年代にクーデタアをやつたが、何れも結局失敗に終つた。言論を權力で壓迫するのは、石油で火を消さうとする樣なもの、去りとて壓迫せねば燎原の火の如しといふのだから、知識階級の宣傳は爲政家の何よりも怕れおののくところなんだ。

一犬嘘を吼え萬犬傳ふと云ふ。況んや知識階級の吼えるところは常に自ら眞理と稱し自由と許すものである。之が輿論となり大勢力となるのは當然であり又必然だ。プロレタリヤ先づ之に應じ、遂には軍隊をも同化する。そこで總ては成就する。

そんな時、軍隊は常に最後まで保守的なもので、動かざるこ

と山の如く靜かなること林の如し、といふのは眞に軍隊の特色だ。之に反して知識階級は常に左傾を以て本色とする。危險思想がその本來の面目である。赤色。急進はその旗印である。宣傳、煽動は其武器である。時に知識階級の一部が右傾を示して左傾に當たることがあるが、それはブルジョア、支配階級に操縱されてゐる場合で、平たく云へば御用をつとめてゐる時であるから、何うしても死に身に成れない。從つて大勢力にも成り得ずして止む。

學生は常に知階識級のために第一戰線に立つ。彼等は感情に走り易き時代にある上、その理性は一本調子であり。現實の俗情事務に暗くして、理想に向つて突進する。極めて煽動に乘り易いから每も急進中の急先鋒をつとめる。各國に於ける大學生等の政治運動社會運動は常にそれを裏書してゐる。ひとり頃者我が早稻田學園には左傾と共に右傾をも生じ、兩々對立して鎬を削ると聞くが、世界に類例なき奇現象であらう。さもあれ左傾右傾同時に大學內に存在するといふ如き、流石は學の獨立とやらを標榜する學園ほどのことはある。慶賀之に過ぎたるはなかる可し、抑も大山氏以下四教授の思想を以て危險思想と目做し之が罷免を要求するが如きは七十の老翁にして初めて考へ到る底の大發見であるのに、二十歲前後の學生三十前後の校友の

一部が之に氣付いたといふのは、何とも御發明、末賴母しき秀才と申すの外なく、之も理想の高遠とやらを標語とする早大黌舍の外に於いては一寸見られぬ珍事であらう。何にしても面白きは日本に於ける無產無識階級、否とよ、無產知識階級の將來である。

併し乍ら我知識階級は、その利器を濫用しすぎる弊はないか？恰も武人が時に武力を濫用し行政官が行政權を濫用する樣に、知識階級も亦たその筆と舌とを濫用する事はないか？たとへば學者が學問を適度に働かす事は之を藏してかびさせてしまうには勝るが、之を見せびらかさうとする結果、論理的遊戲をやり他を誤ることはないか？遊戲はまだしも宜しいが、その利器を賣名の爲めに又金錢のために汚すことはないか？學者にして軍閥官僚の御用をつとめ又ブルジョアの走狗と成る者も、不幸にして我々の時代にも無いわけではない。曲學阿官博士の綽名の下に社會の一部に輕侮の標的と成つてゐる法學博士某の如きは正にその一人であつて、彼の如きはただ風上に置けぬ人間であるのみならず又風下にすらも置くに足らぬ人間だ。もうそろ〳〵お葬ひを出してやつてもいいと思ふが、他よりの懲罰を待つ迄もなく、最早自滅の淵に臨んでゐる。

一かどの學者でさへも右の如くその本分を守らぬ弊があるの

だから、まして衣食に窮する演説使ひが言論を切り賣りして賣名賃錢に當てる例は珍らしくない筈だ。吾人はもはや帝國議會を言論の府とは見てゐない。あれは暴力で戰ふ動物園である。故に今議會を問題にしない。だが所謂國民大會と稱する野次馬非の決議文の如何に權威なきかを見よ。これは一部政界の野心家に利用せられた演説使ひに依つて每々興行されてるからだ。國民大會はかりでなく近頃は學生に至るまで、一たい無意味な決議文が多すぎる。あまり彌次馬氣分で決議をする事が度重なると、衆議も鼎の輕重を問はれるやうに成らう。

だがそれより何より吾々は、新聞雜誌が言論を賣り物にするのを憎まさるを得ない。一方に勞働者の味方のやうな顏をしたがり乍ら、陰でこそ〲資本家から金を引き出す卑劣な遣り口は何うしても輕蔑せざるを得ない、廣告のお得意さまなら何んな店の提灯でも持ち、廣告を出さぬとて筆誅するのは、淺薄すぎる。大商店が廣告を出さぬとて筆誅する位はまだ宥せるが、廣告を出せば奸商を庇護するとは甚だケチな根性ではないか？記者の役得が月給よりも多いとは、面白からぬ國情ではないか？初めは豪い劍幕で攻擊してゐながら、中途からグニヤ〱の龍頭蛇尾に終る記事の大半は、山吹色の謝酒の利目だとは何とも情けない話だ。又は記者が個人的の恩怨から報道を揑造して他に復報せんとする如き、惡弊も亦た甚だしい。さう言つたら腹も立たうが、誰が現代の新聞を天下の木鐸と云つて承知するかい？吾人はお世辭にもそんな事は云はれぬが、記者自身だつてその美名を承知しやすまい。

懲くして知識階級は、自分たちの唯一の武器たる言論の權威を、宣傳の効力を、次第に失墮せんとはするのだ。一杯の羹（あつもの）の爲めに相續權（バースライト）を賣つたエソウの愚にもまして、痴にして憫れなのは知識階級の宣傳濫用の惡癖だ。

見たロシアと見ぬロシア

内ヶ崎作三郎

一　アナトール・フランスの豫言

『ネヴア河、ヴィル河及ウィスツラ河の岸邊に於て新歐洲の運命と人類の將來とが決定せられつゝある。』(アナトール・フランス)是は十數年前佛蘭西の文豪に依つて發せられたる言葉である。然るに此豫言は實現せられた。新歐洲の運命も、人類の將來も、露西亞に依つて決定せられんとしつゝある。又露西亞の諺に「古きは死して新しきはまだ生れない」といふのがある。古き露西亞は死んでしまつて、そして新しき露西亞は兎に角生れた。此幼兒は如何に育つかは問題であるが、生れた事だけは確實であつて此有名なる諺が裏切られて居る。露西亞は歐羅巴の三分の一を占め、西伯利は其露西亞の三倍の面積を有して居る。全露の面積は殆んど世界陸地の六分の一を占めてゐる。されば露西亞の將來——其政治的經濟的の勢力——は世界人類に大なる影響を及ぼすのみではない、日本海を隔てゝ居る、否朝鮮とは纔かに豆滿江を隔てゝ相對する此廣大なる陸地と其の住民の將來は、我が民族の將來と大なる交渉がある。露西亞を研究する事は、吾々日本人としての大なる義務である。此切迫したる必要の前に立つ時、私は、自分の見聞と經驗と研究の甚だ貧弱なるを感ぜざるを得ない。先づ第一に私は露西亞語は丸切り知らない、唯だ五六語の單語を知つて居るだけである。露西亞文學に就ても幾人かの文豪の作物を覗いたに過ぎない。露西亞專門研究家の多い今日、私のやうな門外漢が飛入して、露西亞に就て語るのは、甚だ烏滸がましい次第である、併ながら露西亞に就ては滿更知らない譯ではない。古い話であるが、十數年前に一度西伯利より露西亞を通拔けたことがある。又二年前には哈爾賓を覗いて來た。其の間露西亞の友人を通じて、或は書物を通じて、此偉大にして不思議なる國と民とに就て、多少の觀察を試み來たのである。今や日露通商の三回目の會議が開かれかけて、その序幕が演ぜられつゝある時に當つて、門外漢

なりと雖も默して止むべき場合ではない。

私は明治四十一年、即ち千九百八年の九月初めに敦賀より浦潮に向つた。是は英國に赴かん爲めであつた。初め私は米國經由、若くは印度洋に依つて目的の地に達せんとした。然るに英國遊學は其年の夏の初めに持上つた事で、オックスフォードの私の學ばんとする學校との間に、書面の往復をしてゐた爲め、九月上旬でなければ出發することは出來なかつた。のみならずその學校では、十月の上旬より授業を開始するので、最捷徑を選ぶ必要が生じて、厭やでも應でも西伯利鐵道に依らざるを得なかつた。之に就ては幾多の不安があつた。露西亞語を知らざる自分は、單身西伯利及露西亞を、愉快に滿足に旅行し得るものであらうか。併し、絶對絶命の場合、運を天に任せて出立することになつた。今から考へると隨分無謀な話であつたが、當時の私の決心は餘程堅いものがあつたと思はれる。東京を立つたのは九月四日の午後で、大雨であつた。家族や親戚友人に新橋驛より見送られた。大船では故小山東助君が雨を冒して見送つて吳れたことを記憶する。米原で夜が明けると、神戸の村松吉太郎君が、我輩の行を盛にしやうといふので、商業上非常に忙しい身であるに拘らず、出掛けて來て、敦賀迄同伴せられたことは感謝に堪へない。敦賀に着いた頃は雨は霽れた。宿で即くと同行者があるらしい、それは帝大の金井博士、立博士及鐵道院の中川正左君の三名で、矢張其の夕方出帆する露西亞の義勇艦に乘つて、浦潮に向ふことを知つた。之を聞いて私は非常に安心した。全く思ひもかけぬ道伴で、是ならば露西亞語を知らざる我輩も大手を振つて、長い旅行が出來ると思つた。

九月五日の午後五時、愈々吾等を載せたる船が敦賀灣を出帆した。間もなく日は暮れて、月が輝き出した、北陸の山々は墨繪のやうに、ぼんやりと見え出した頃から、二百十日前の風が吹出した。船の動搖が激しい。甲板に居ることが出來ないで、ベットに潜込んでしまつた。船に弱い私は、翌六日も全く室の中に暮してしまつた。西洋婦人達が元氣好く靴の音も高くデッキの上を散歩するのが面憎くゝもあり、又自分の不甲斐ないにも呆れてしまつたが、子供の時から船には弱い性質であるので、觀念して色々自分の將來の事、日本の前途の事などを考へて居た。七日の朝は麗はしく晴れてゐた。波も次第に靜になつた。浦潮が目の前に見えるといふので、十時頃に床を起出でゝデッキの上に出ると、前面には高い丘陵が擴がつて居て、其赤禿の丘の上、海の邊には赤煉瓦の大きな家が見えた。是こそ浦潮斯德である。

二　浦鹽の第一印象

浦潮の第一印象は、敦賀と較べて如何にも大規模で、雄大で、何所となく大陸的の氣分が漲り溢れて居る事であつた。昨年七月私は敦賀に遊んだが、敦賀灣は擴張工事があつて、其頃とは幾分の變化があるが、敦賀の町其ものは大した變化はないやうである。それと對照すると浦潮の第一印象は私に非常に深きものであつた。此大なる玄關を有する露西亞が、あの見窄らしい裏玄關を有する日本の爲に、戰爭で負けたのは不思議な事ではないか、又吾々日本の立場から見て、此大民族と此大自然を背景とする露西亞に打勝つたことは、如何にも意外なことであつたかのやうに感ぜられた。上陸の際には荷物を調べられたが、私はオックスフォードのマンチェスター學院の院長カーペンター先生の依頼を受け、自分では土産物として持參したる小さい唐金の佛像があつた、多くの露西亞の稅關の役人が私の鞄や何かを開けて見て、最後に風呂敷包の箱を開けると、中から佛像が現れたので、手を擴げて喫驚して、其儘何も言はずに蓋をしてしまつたのも、時に取つての愛嬌であつた。波止場からドロスクに乘つた、藍縞の長い綿入のやうな上着を着て、中低のシルクハットのやうな帽子を被つた馭者が、如何にも露西亞風である。道路は丸石を敷いてあつて、其上を馬車が驅けるので動搖が激しい。近頃は目拔の通りは切石を舖き場末に丈丸石の路があるといふ事である。砲臺や兵營がそちこちに見える。如何にも軍國主義的空氣の濃厚なる背景を眺めつゝ、馬車は幅の廣い坂路を驅けて行く。やがてとある日本人の旅館に案内された。其所で初めて私は少し許り晝飯を攝つた。敦賀を出發してから最初の試みである。それで幾分元氣が出て、浦潮の街を散歩した。到る所に支那の苦力が居る。街は不潔で渾沌たるものであるが、どことなく活氣が溢れて、どし／＼發達して行く機運が動いて居るやうに思はれた。當時の浦潮の人口は八萬位で、支那人が一萬人、日本人が四千人、其中怪しげなる婦人が五百人位、韓國人は日本人よりも多いといふ噂であつた。純露西亞人の人口は三萬位であつた。夜分は物騷で殺人沙汰などが折々あることを聞かされた。途中、乞食が澤山居つて、中に丈の高い顏一面に髯のもじやもじや生えて居る老人が居て、道行く人に憐みを乞ふて居る。それを能く見るとどことなくトルストイに似て居たので、吾れながら一種の興趣を感ぜしめられた。行合ふドロスケの馭者の不潔なのにも驚いた、藍色の袖なしのやうな物を着て、其の下に赤い上着を着て居るのもある。又韓國人の勞働者が白い服裝で所々に働いて居るのも目に着いた。

三　西比利亞の旅の門出

午後の四時過ぎに吾々を載せた萬國寢臺會社の急行列車が浦潮の停車場を立つた。それは內地に見るが如きものでなく、頑丈な大きな汽車で、機關車が二臺で引くのである。汽車が出る前に鐘が二度鳴つたが、第三鐘で動出した。其鐘の音がまた妙にやさしい音である。金井、立兩博士は一等室に收まり、中川君と私は二等室に乘つた。最初汽車は入江に沿ふて走つた。鐵道の兩側には支那の苦力が何百人となく働いて居る、葱と麵麭を食つて居る者もある、西洋婦人などが車窓から姿を出して居ると、それを見て噪ぎ出すのもあり、吾々を見てジヤパンなどと叫ぶ苦力もあつた。程なく日は暮れた。機關車は薪を炊くのであるから、煙突より吐出す煙は大變なもので、全く小さい火事のやうなものである。夜の八時にニコリスク停車場に着いた。月は黑雲の中に隱れて居るが、風は涼しく、電燈の光が停車場の構內を照らして居る。露西亞の將校が佳人と手を組んで步廊を散步する狀が目に着く。どことなく大陸風の雰圍氣と露西亞風の情緒が現れて居る。寢てから折々目が醒めると犬の遠吠えが聞えて來る。定めて外部は淋しい、荒涼たる野原であらふ。いよ〳〵支那の古詩人の歌つた關外朔北の地を走つてゐるのだなど無量の感慨に沈んだ。

四　大陸の夕日

八日は曇天で、まるで冬空である。午後に微雨がある。停車場每に支那の商人が居て、煙草や花、瓜などを持つて來て擲げて居る。我々を見るとニタ〳〵と笑ふ、買つて吳れといふのであらう。停車場では五分停車の時は鐘が一つ鳴り、十分停車の時は二つ鳴り、十五分停車の時は三つ鳴る。一つ鳴る時は散步する餘裕もないから、室內に居たが、二つ三つ鳴れば運動の積りで步廊に降りる。子供等が無邪氣に遊んで居る、高粱の畑も見える、樹木が稍々紅葉してゐる、所々に森や林もある、野原には羊や牛、馬などが放牧されて居る。野の草の中には日廻が一番多い。七草めげる花もある。寒暖計は華氏六十二度で、暑くもなければ寒くもない、中川君と私は折々金井、立兩博士の一等室に押掛けて、四人して對談する。外を眺むれば、雨の景色が如何にもあはれである。四等立の荷馬車に傘もさゝないで苦力が淋しさうに行く。泥の中を驅け廻る豚もある。鷄頭の花が目立つて赤い。併し汽車の中は日本語で色々な話に花が咲くので、西伯利の一部分を旅行して居るやうな氣分にはなれない。少し大きい停車場へ來ると長劍を帶して居る士官や、銃劍

を持つて居る兵卒が居る、多分是は馬賊に對する警戒の爲めであらう。二年前に長春から哈爾賓迄往復した時に、到る所の停車場で支那兵が銃劍を揩いで、五六名づゝ隊を組んで番をして居るのが見られたが、滿洲、西伯利に於ては、斯かる用心も必要である。折々行違ふ地方汽車(ローカルトレーン)には支那人が大勢乘込んで居て、麵麭を嚙りながら窓から顏を出して居るのが目立つ。其の中に雨が霽れて、明々と夕日が照つて來た、初め、燃えるやうな眞紅の色が一際著しくあつたが、やがて茶色となり、樺色となり、終には果したく西の空は一面に薄茶色に彩られて、次第に夜の世界の支配に歸した。かゝる大きな夕日の美觀は大陸でなければ見られまい、私は太平洋、大西洋又は印度洋に於て麗はしい夕日を見た、殊に大正九年の夏、太平洋上に於て折々見たる夕日の壯觀は今も尙ほ忘るゝことが出來ない、夕日が沈むに隨つて、西の地平線に幾多の宮殿の如き、城廓の如き、稍々紫色を帶びた黑雲が現れて、其の後ろより夕日が差して來るので、其輪廓は黃金を以て飾付けられ、何とも云へぬ壯嚴なる景色である。印度人の西方淨土なる思想も、印度洋上に於ける斯かる壯麗なる夕日より聯想せられたのではあるまいか。大陸の夕日は斯の如く華美ではない、煌やかではない、併しどことなく落付きのある、凄味のある、又人を惹付けるやうな力があるやうに思つた。昔々、中央亞細亞の高原に繁殖したる人類が、東西南北に分散したる時、西の方歐羅巴に向つた團體は、此夕日の魔力に依つて道案内されたのではあるまいか。

五　ハルピンの戰前と戰後

夜半に哈爾賓に着いた。停車場に降りてみると、西部西伯利或は本國からでも來たかと思はれる農民の群が步廊や待合室にゴロ〳〵して居て、如何にも慘憺たる光景である、戰爭に負けて、追はれて來て、一時の難を避けて居る人々のやうにも思はれた。露西亞の農民の一狀態を初めて見た私に取つては、甚だ強い印象を殘した。哈爾賓は吉林省に在つて、松花江に臨む所の街である、主として露西亞人が其發展を助けて居るのであるが、當時人口は三萬五千位との噂であつたが、今日でも大した變化は無いやうである。其の時は眞夜中であつたので、哈爾賓は全く見物することも出來ず、街の薄暗い燈火を車窓より眺めた位であつたが、二年前の再遊に際しては幾分かよく哈爾賓を見た。沖、横川兩氏の墓參をもした、日露協會經營の學校をも訪れた、露西亞の高等商業學校をも見た、松花江の岸に佇んで、渾々として流るゝ濁流の物凄さをも眺めた。東清鐵道會社の倶樂部で御馳走にもなつた。戰爭中歐露の都會の淋れた噂を聞い

た私に取つて、哈爾賓は異様の感を與へた、其倶樂部の庭には毎晩音樂會が催うされて、大勢の聽衆が入込むさうである、又御馳走も隨分あつた。殊に給仕に出て來る婦人達は、何れも上品な婦人達で、奥さん風のもあれば、娘さん風のもある。聞いて見ると是等の人は戰爭前は、何れも將校や役人の家庭の人々で、こんな所へ出て來る人ではないが、戰爭に依つて惹起したる數奇なる運命が、是等の氣の毒なる婦人達を驅つて已むを得ず、餘り上品でない職業に從事しなければならぬ境遇に陷いたのである。一體露西亞でも獨逸でも佛蘭西でも、料理屋の給仕は大概むくつけき愛嬌のない大男に極つて居る。英國では女の給仕人が普通である。併し大陸は概して男ばかりで、日本から行くと頗る殺風景な感をする。然るに哈爾賓では已むを得ず英吉利風、日本風になつて居る、而も英國でも米國でも、日本でも、哈爾賓の婦人給仕程上品な氣高い人々の集つて居るのを見たことはない，それで第一回の哈爾賓通過は頗る暗いやうであつたが、第二回の哈爾賓訪問は非常に明るいやうな氣がした。しかし東清鐵道の倶樂部の給仕に出てゐる婦人達の心は無論明くはあるまい。旅人の心は閑氣なものである。序でに哈爾賓の印象を物語れば、露西亞人と支那人は割合に仲が善いらしい。其證據には露西亞人と支那人が同じドロスケに乘つて、街を馳けずり廻るのを折々見る、が、日本人が露西亞人と同乘して居るのは見えない。又支那人と同乘して居るのも見えない。大陸的な露西亞人と支那人は直に仲が善くなるのかも知れない、島國人である日本人は、支那人とも、露西亞人とも仲善くなり悪い事情があるのではないかとも思はれた。

六　千里獨行の月

哈爾賓を過ぎると、大平原は海の如く廣く、月は寒さうに照つて星は極めて稀れである、千里獨行の月とはかゝる景色を言ふのではあるまいかと思はれた、若し此時、遙か遠くの方に胡笳の聲でも聞えたならば、さぞ詩的であつたらうと思はれる。

九日朝、目が醒むれば晴天である。東の方は朝焼がして居る。程なく小雨が降出した。やがて長い隧道にかゝる。前夜中に大平原を通過したらしいので、北方には山がある。殊に石山が多い。所々に牧場も見える。停車場には乳を賣つて居る田舍の女なども居る。寒さがめき／＼と加つたやうな氣がした。冬襯衣を出して衣替をした、野原の草は大分枯れて居るやうで、黄く色付いて居る。其の上を荷馬車が行列を作つて通るのが見える。沿道の景色も幾分變つて來て、停車場なども木造の至つて粗末なのがある。民家も木造建の見窄らしいのが多い、唯だ敎會の

みが目立つて大きなのがある。木造でも大きさと高さだけは圖拔けて居る。此の邊は山がある爲めか塵埃が少い、西伯利の旅は、五月若くは九月は紅塵が多いと相場がきまつて居る、窓は二重硝子になつて居る、是は冬の寒さ凌ぎでもあるが、夏の塵除けにもなるのである。滿洲里邊迄は塵が少いといふ噂を聞いた。午後の四時頃又大平原に出た、東西南北一物の目を遮るものがない、先年米國を旅した時、ネブラスカの平原を汽車で走つたと同じ觀がある。但しネブラスカは西伯利の大平原のやうに荒れ果てゝは居ない。皆な開墾されて居る、或は牧場として整頓されて居る。併し此所は殆ど人工を加へない自然其の儘の大平原である、けれども大平原の一種の恐ろしい單調の感應を感ぜしむる點は同樣である。其の中に又大平原が過ぎて砂山が現れて來た。風の強い日にはさぞ塵埃が立つことであらうと思はれた。午後五時頃東の空に大きな虹が出た、大陸は虹迄大きい。一日の內陰霽定まらず、日本の十一月頃の天候のやうである。此邊は矢張馬賊が出沒すると見えて、一驛每に番兵が銃劍を持つて立つて居る。滿洲里に着いた頃月が出た。其の麗しさは特別である。二時間程停車したので、停車場に降りて繪葉書を買ひ、家族や親戚友人に送つた。

十日は朝の六時に華氏で四十度、空は陰鬱に曇つて居る、停車場では湯を出して顏を洗はせた、沿道には牧場がある、鳩や烏、燕など、何れも大きな群を成して飛交ふて居る、此の荒涼たる大平原にあつては、鳥も孤獨の生活には堪へないで、斯く群を成して飛廻るのではあるまいか。此邊から支那の勞働者は少くなつたやうである、是は寒さが加はつたので、段々東の方に移つて行つた爲めでもあらうか。此地方は松の木が多く見えるやうである。同じ汽車の中に英國のチェスターの實業家老夫婦があつた、一人娘を連れて支那見物に出掛けた歸りださうである、此の人達は熱心な基督教の信者であるらしく、漢文で書いた傳道の小冊子を持つて居て、停車場で支那の勞働者を見付ける度に與へて居たが、果して苦力に其書物が讀めるかどうか疑問であるが、其親切な志に對しては感服した。

沿道の農家には煙突が澤山にある、冬の寒さが察せられる。鵞鳥や鷄が其の周圍に居るのが目立つ。婦人は赤い模樣のある風呂敷のやうなもので頭を包んで居る。齊多に着く前に黑龍江の上流を渡つた。餘り廣くもないが、大陸特有の濁流である。午前十時頃齊多に着いた、齊多はトランスバイカル州の首府で、人口は三萬位と稱して居る。イルクーツク迄はまだ五百哩もある。此驛から露西亞の將官が乗込んだ。軍隊は見送りに來て、軍樂を奏した。其夫人は非常に華裝して居て、指輪などが

ピカ／＼光つて居た。停車場ではゲゼッツといふ新聞を賣つて居た。齊多の街は中々立派で、建築にも色々變化があり、屋根の色が種々に變つて居るやうに思はれた。白樺が殊に多いやうで、銀色の色彩が何とも言へない美觀を呈して居る。停車時間は可なり長かつたので、停車場の場内を一周したが、噴水や花園があつて、小綺麗な所である。停車場には聖畫像（アイコン）を安置した室があつて、二人の露西亞人が帽子を取つて禮拜して、賽錢を捧げて居るのもある。露西亞の基督教は後にも詳述する積りであるが、偶像の代りに聖像を拜ませる習ひである。是が汽車の食堂にも飾つてある、少し大きな停車場には待合室にも飾つてある、學校にも飾つてある。斯かる事はローマ教國にも見ることの出來ない現象である。齊多と其次の停車場との間に線路の故障があつて、數時間汽車が止つた、其所は丘と丘との線路で見る物も無く、頗る退屈したので讀書を始めた。英吉利人のフレーザーといふ人の書いた西伯利に關する書物であつたが、其中に斯らいふ事が書いてある。

西部西伯利に於て、移民が政府の許可を受けて來れば三年間は無税である、一人に就て三十二露英里を與へられる、時としては六平方哩の森林が付加へられることもある、それでも露西亞の農夫は世界中で最劣等に屬するもので、極めて怠惰であるから貧の持腐れである。

中央西伯利に於ては馬が非常に多い。人口百人に對して八十五頭、米國に於ては百人に對して二十二頭、佛蘭西に於ては百人に對して七頭である、世界に於て中央西伯利に於ける馬の比例を凌ぎ得るものは南米のアルゼンチンのみである、此所は人口百人に對して百十一頭である、中央西伯利に於ては馬のみではない、羊も牛も多いさうである。

十一日は晴、汽車は前夜の二時半頃動き出したらしい、華氏寒暖計四十五度、漸く冷さを感じて手袋を篏めた、西洋人は外套を着始めた。私は外套を持つて行かなかつた、肥滿の爲に別に其必要を感じなかつた。松林が多い、朝霧が深い、遠山が紫がかつてゐる。支那の苦力は殆ど見えない。午後の二時、バイカル湖に注ぐセレンガ河を渡つた、沿岸の景色は頗る佳い、遠い山には雪が消えない、近い森林は白樺が多いので又中々に捨て難い景色である。午後四時半、バイカル湖畔に達した、天氣晴朗華氏寒暖計六十八度、何所からとも知れず蝿が來て窓硝子にたかる。

七　聖湖の秋色と西伯利の円、里

バイカル湖は西伯利の土人には「神聖なる海」と呼ばれて居

る。此湖水は亞細亞大陸に於ける最大の淡水湖で、世界に於ては第六位を占めて居る、バイカル連山に圍まれ、長さ三百九十哩、幅十八哩乃至六十哩、面積一萬三千二百五十平方哩、海拔千五百六十尺、最も深い所は五千尺である。セレンガ河は此湖水に注ぐ川の中で最も大なるもので、此湖水に流れ出る河は、アンガラ河で、イニスエ河に合する。鮭、海豹、鯡等が獲れる、湖水の周圍に住むブリアット人や、ツングース人が漁業に從事して居る毎年二千頭の海豹が獲れるさうで、湖岸の土人は全く此湖水に依つて生活して居るのであるから、此湖水を神聖なるものと尊敬するのも無理はない、此湖水にゴロミンカと稱する特別の魚があつて、それから魚油が搾り得られるさうである。

西伯利には湖水が多い、就中バイカル湖は西伯利の聖湖として名高いが、其の周圍には高い岩山が聳えて居るので、西伯利鐵道は一方ならず其の開通には苦心したらしい。西伯利鐵道の開鑿は千八百九十二年に數箇所に於て開始されて、其大幹線はキリビヤビンスクよりオムスクに至る線で、千八百九十五年十二月に貫通した。千九百一年にはトランスバイカルヤ迄達した。然るにバイカル湖畔の線は工事の困難があつて、其竣工に手間取つた。此湖岸線は長さ五十六哩に過ぎないが、其間に三十九の長い隧道と、地辷りを豫防する爲に丈夫な屋根を戴く所の切割つたる場所が十三箇所もある。最初バイカル湖は大きな渡船に依つて連絡され、冬期は碎氷船が氷を破つて渡船を通した、汽車は渡船に依つて岸より岸に運ばれたのである。日露戰爭中に始めて湖岸線が通過するやうになつて、初めは主として軍事用に使用された。それは千九百五年に漸く通じたのである、私達は千九百八年の秋通過したのであるから、比較的多くの便利を與へられた譯である。

バイカル湖は西南より東北に斜に連なる大なる湖水で、鐵道は東南の一隅より湖水に沿うて進み、其西南端を一週して、西北の一端に在るイルクーツク市に達する。幾つも長い隧道があるので、湖水の展望が妨げられるが、隧道を出づれば又湖水を眺むるので、風景は佳い。程なく夜になつて、十分に景色を眺むることは出來なかつたが、折好く月夜で、湖上の清月を眺むることが出來たのは何よりの幸ひであつた。

イルクーツクに着いたのは十二日の午前一時半頃である。此驛で汽車が行違ひになるので、乘換へさせられた、吾々の二等室は上下二人乘の室で、室内の装飾はイルクーツク以東より遙に立派である。住めば都の譬があるが、五晝夜程乘續けたる汽車に別れるのは何となく殘り惜しい。食堂の愛嬌あるボーイや親切な室付ボーイに別れるのは後髪を引かるゝ感がある。バイカ

ル湖以東には鑛山が多い、カルホルニヤならばコロンダイク地方とでも言ふべき所であらう。毎年五百萬封度の黄金を露西亞の本國に送るさうであるが、もう少し産出額を多くすれば、倍額の黄金を送ることが出來やうといふ事である。さればイルクーツクは西伯利に於ける文化の中心である、此の大なる湖水と鑛山を背景として居るのであるから、西伯利の巴里といふ名を取つて居るのも當然である。イルクーツクには大きな金の鑄造所がある、又茶と毛皮の取引が盛に行はれる。隨つて此地方では財産の標準は毛皮ださうである。土人は毛皮と寶石を以て財産の標準とする。是より西方に行くに隨つて盛裝したる婦人が汽車に乘込むのを見る。イルクーツクは西伯利の文化の中心だけあつて、三萬二千磅もかけたオペラの劇場がある。此の日はアレキサンダー第二世かの記念日とかにて、停車場毎に國旗が飜つて居た。

八　眞夜中のウラル越え

十三日、晴、霧が深い。今日は日曜日で、至つて靜かである、沿道の景色迄が安息の狀態に居るやうに思ひなされる、私も安息日であるから、露西亞の宗教の事を書いた書物を讀んでみる。西伯利の僧侶の第一等の俸給は最高給は一年に百二十磅、最も劣等なる者は乞食同樣である。僧侶の務めは教會の儀式を司るのみではない。新築の儀式、學校の儀式或は病人の爲めの祈禱、却々に仕事が多い、一年の中二百二十六日も斷食する者がある、僧侶は芝居を見てはならない、酒を飲んではならない、歌留多をしてはならない、ダンスをしてはならないといふ規則がある、併し實際は必ずしも御規則通りには行つて居らぬかも知れぬ。夜、或る小さい停車場に降りる、大勢の子供がやつて來て、牛乳、松の實、果物を買へとせがむ。

十四日、朝方雨であつたが、やがて霽れた、午前十一時頃オビ河の鐵橋を渡る、矢張濁流である、可なり大きな汽船が川を遡つて來る。オビ河は源をアルタイ山脈に發して、其長さは二千百哩、其の後方のイルチツシ河と合すれば二千五百哩、北氷洋に注ぐ。オビの街は森林の中の美しい小さい町である。眞夜中にオムスクを過ぎた。

十五日、快晴、大變暖かい。十月小春の感がする。沿道には大小の湖水が見える。停車場近くの平地には墓地がある、餘りに日當りが好く、氣持が快いので、氣早の西洋人は停車場の構内の木の枝に登つたり、鬼ごつこを始める者もある。午後二時頃クールゾンの停車場に着く、日廻の實や、樫の實、林檎などを賣つて居る、風車のゆるやかに廻るのが遠くに見える。茶の

花のやうな黄い花が野原に咲いて居る。牛、馬、羊、豚、鵞鳥など、喜ばしげに戯れて居る。浦潮を出發してから今日のやうな快い日はなかつた。林の紅葉も美しい、畑には麥を刈る農夫が忙しさうである。復線工事の近付いて居る所も見える。華氏寒暖計六十三度。午後七時半チエルビンスクに着く、此所はセントペーテルスブルグに達する支線の起點である、非常な雑沓、下等の待合室の混雑は名狀すべくもない、農民は此所でも矢張地面に寢轉んで居る、其一隅には聖畫像(アイコン)が安置されて、一人の老尼が番をして居る。蠟燭の火がキラ〳〵と光つて居る。ウラル山の寳石や象牙や、鐵細工を賣る者が停車場の構内に店を開いて居る。商人は大抵猶太人らしい、步廊や構内のそちこちにうろ〳〵して居るのは移住の農民である、停車場からチエルビンスクの街の電燈の光が美しく見える、是から愈々ウラル山に差しかゝるのであるが、多分眞夜中らしいといふことである。

十六日の午前二時頃同室の中川君に起さる、愈々ウラルに來たらしい、寢卷の儘で廊下に出て見ると、下弦の月が輝いて居る。オライオンの星座が低く南方の空にかゝつて居る。夜氣が極めて凊涼。幾多の小停車場を通過して、岩山、森林等幾つも通り過ぎて行く、ウラルに、亞細亞と歐羅巴の境の、石か鐵の木標があるといふので、私はそれを見たさに起して貰つたのであるが、何分夜のことゝて見えない、其の内次第に汽車は下りかけて、夜明方には歐露に這入つた。ウラル脈山はキャスピアン海と北極洋とを結ぶ千六百哩の山脈である、最高峰のテルポレ山は海拔千五百尺であるが、鐵道の通じて居る所は低い、此山脈は東西に裾野をひろげて居る一種の高原のやうなもので、幅の廣い所は二百哩もある。平均の高さは海拔千五百尺に過ぎない、此山脈は鑛物に富んで居て、金、銀、白金、銅、鐵、石炭、炭鹽を産する。其他エメラルド、トーパッツ、ダイヤモンド、チャスパーの如き寳石をも産する。

私は少年時代に、故福島大將が少佐時代に西伯利を騎馬で横斷された壯擧があつて、ウラルの山に馬を立て、西、歐羅巴に會釋し、東、亞細亞に挨拶されたことを、美しく謳つた新體詩を讀んだことを記憶する。ウラルを越えることは、亞細亞を捨てゝ歐羅巴に入る事であるから、非常なる期待を以て眞夜中に起きて居たが、平凡にウラル山を通抜けたのは、稍々失望を禁じ得なかつた。

九　半世紀に四百萬方哩の占領

私は十日間で廣い西伯利を東より西に横つた。是れ偏へに西伯利横斷鐵道のお蔭である。西伯利は東經五十五度より西は百

七十二度に達し、北緯四十六度より七十八度二十五分に達して居る。其總面積は四百八十三萬千八百二十平方哩である。千九百十四年の國勢調査に依れば、總人口約千萬人。但し是は各地に散在して居る各種の土人を含んで居るや否やは明瞭でない。私は十日で西伯利を横つたが、露西亞が西伯利を領有にする迄には長き歲月と犧牲とを要した。

十六世紀の半ば頃、ウラル山脈の東の方に韃靼人の一族が住んでゐたシビールといふ地方があつた、其酋長にイチゲルといふ者があつて、莫斯科のイヴアン第四世に臣事した。是が露西亞が亞細亞の地を領した初めである。その時イルマルクといふ冒險者がゐて、千五百七十九年に、露西亞人、コサック人、獨逸人、波蘭人、脫獄者など約八百人の無賴漢を率ゐてウラル山脈を横つた。イルチッシ河畔のシビールの首府よりは、此侵入者に對する防禦軍が出たが、固より遊牧者のことゝて、コサック兵の敵ではなかつた。イルマルクはやがてシビールを征服した。西伯利（シベリア）といふ名はシビールに語源を有する。イルマルクは露西亞に歸つて非常に名聲を博し、朝廷よりは厚く賞せられた。後ち再び彼れは西伯利征服を繼續する爲に、東の方へ歸つて、直にイルチッシ河及オビ河の沿岸を征服した。露西亞のツアールは大に滿足し、新領土の人民を正教會の信者にせんとして僧侶を送つた。露西亞にてはイルマルクを大將軍と崇め、歷史家は之を英雄として書立て、教會は聖者として祭つて居る。併し要するにイルマルクは馬賊の大將のやうなものであつたら う。イルマルクは色々苦心して、ボクハラの酋長と貿易することを始めたが、敵と戰つてイルチッシ河を泳いで逃げんとして溺れてしまつた。さればとて、イルマルクの死は露西亞人の領土的侵略心を衰へしめなかつた、新領土の物資の豐富なる事は輪に輪をかけて本國に評判された。

千五百八十七年にはシビールの下流十哩を隔てるイルチッシ河の溡にトボロウスクの街が建設せられた。トボロウスク市が建設せられるといふ評判が多くの人を東方に惹付けた、其結果として千六百十四年にトムスクが、千六百十九年にイニスエックが、千六百三十二年にヤクーツクが、千六百三十八年にオコーツクの町が建設せられた。

西伯利の征服は大した困難もなく、生命の犧牲も割合に少かつた。此の廣大無邊の大陸の處々には澤山の異れる種々なる土人が住んで居た。西部及中央西伯利は何の手答へもなく露領となつた。カルマック人、ブリアット人、ツングース人、カムチヤダル人、コルヤック人、アイノー人、オスチヤック人、シムウ人、是等の者は全く無學文盲の民族で、帝王といふ言葉の意味も分

らずして、露西亞の民となつた。されば半世紀以上の短かき歲月の内に、殆ど四百萬平方哩の大領土の征服が完成されたのである。

一〇 黑龍江上の最初の露西亞人

千六百三十六年にコサックの一隊がトムスクよりアルダン河の邊に住むツングース人より稅金を取立てる爲に派遣された。此一行はイヴアン・モックウイッチンに率ゐられて、東に向つて三年の後にオコック海の岸に現れた。そしてウリヤ河岸に定住した。彼等は黑龍江邊に住む種族及其耕地は繁榮の評判を聞いて其所を探險せんとする志を起した、又マックスペルフリーフを指揮者としたるコサックの他の一隊がイニスエックとウイテム間のアムール河畔に住む種族の甚だ殷富なることを聞いた。かゝる評判がヤクーツクに達して、其の最初の知事ペーターペトロウイツチが黑龍江に向けて遠征隊を送ることを決定した。其結果として千六百四十二年の七月十五日に百三十二人の遠征隊と兵糧彈藥を携へてヤクーツクを出發した、其指揮者はワシリー・ポヤルコーフであつた、此一行は千辛萬苦してアルダン河及其支流ウーチヤール河を渡り、それより四週間陸地を旅して、偶然親切なるツングース人に遇つて、黑龍江の評判を聞いた。彼等は更にデッエヤ河を下つて、黑龍江と此河との落合ふ所に出た。丁度其所はブラゴエチエンスクの市街が今存在する地點である。此一行は黑龍江を航行したる最初の露西亞人である。松花江の落合ふ所迄三週間を要した。二十五人の一隊が松花江を遡つて探險した、生命を完了して歸つた者は二人に過ぎなかつた、他の者は土人に殺戮せられた、六週間の後に一行は黑龍江の川口に出た。彼等は親切なる土人ナトキー人の部落に冬を過した。稅金の代りに毛皮を集めた。此一行は千六百四十四年の六月ヤクーツクに歸つて、非常なる名聲を以て迎へられた。

ヤクーツクにては黑龍江に達する近路を發見せんと計畫した。其爲に一隊のコサック兵が黑龍江に派遣された。此一行はオレクマ河を横つてウルカー河の近くに於て目的地に達した。時にイロフエー・カバローフといふ富める青年士官があつて、自費を以て黑龍江岸を探險し、之を征服して、ツアールに獻上せんことを提案し、許可を得た。彼は千六百四十九年にヤクーツクを出立した。その一行はツクリユーツクに冬營して、翌年の一月十一日橇に乘つて黑龍江に向つた。然るに其地方を所有せるラブカイの王は其兄弟と共に途中迄出迎ひ、露西亞人は何を要求するかを尋ねた。カバローフは、吾々は商賈が日

的で來た。併し僅かの税金を納めれば露西亞のツアールはお前達を保護してやるといふやうな事を述べた。談判半かばにしてラブカイ王の一行は馬に鞭ち逃去つてしまつた。カバローフは二三の砦を燒き、之を報告する爲にヤクーツクに歸つた。其の年の六月カバローフは再び黑龍江に立歸つて、此度は百三十人以上の兵を率ゐ、二三の大砲を齎した、彼は船を造つて黑龍江を下つた。此小艦隊が進むに隨つて沿岸のドーリヤ人の村は大騷ぎをして立退いた。三日間は無事であつたが、四日目の夕暮に新造の砦が川口に見えた。是は滿洲の騎兵が守る所のものであつた。露西亞人は大砲を放つて、其二十人を射殺したるが故に滿洲の騎兵は逃げた。殘りの者は砦に閉籠つて矢を露軍に放つた。露西亞人は三門の大砲を以て砦を壞し、之を陷れた、逭れたる者は極めて少く、死する者七百人、女子供は捕虜となつた。露西亞側の損害は死者四名、負傷者四十人に過ぎなかつた。斯くしてカバローフの艦隊は向ふ所敵なく、戰へば必ず勝つといふ勢ひを以て、沿岸の諸族を平げつゝ黑龍江を下つた。カバローフは隨分殘酷に捕虜を待遇したといふ傳説がある。されば滿洲人の間には、露西亞人は人を丸燒にして喰べるといふ評判が廣まつた。八日の航海の後、此遠征隊は松花江の川口に達し、更に一週間の後に烏蘇里河に出たけれども注意しなかつた、クンガール河の川口に達して大きな村を見付けた。カバローフは此所で冬籠りをする決心をした。彼は此所に砦を造つた。其の間カバローフは土人と度々戰つたが、結局彼は勝利者であつた。此報が支那政府に聞えたる爲め、二千人の韃靼人の騎兵が弓矢、大砲を携へて黑龍江に向はせられた、三月二十四日に滿洲軍は露西亞人の砦の前に現れた、其大兵は砦の城壁を破つたけれども、中に這入ることは出來なかつた、滿洲兵は非常なる損害を以て擊退され、その死者は六百名を超えたが、露西亞側は唯だ十人を失ふのみであつた。カバローフは第二の攻擊を恐れて、千六百五十二年四月二十二日に、黑龍江を遡つて、カマラ河の川口に達し、其所に第二の砦を造つて、カマライスクオストローグといふ。

千六百五十一年、此報道が莫斯科に達した。東部西伯利の富は誇張して傳へられた。皇帝アレキセスが此報道を聞いて、大に喜び、三千人の遠征隊を派遣することになつた。而して遠征隊の總司令官にはイヴアン・ウワノウイツチ・テストウイスコンが任ぜられ、其先陣はデミトリ・イワノフ・シモヴイオーフに命ぜられた、彼は千六百五十二年三月、莫斯科を出發し、其の秋レーナー河に達した。東部西伯利の評判は大したものであつた。黃金は澤山あるし、銀や毛皮、家畜類は殆ど値打がないと

まで取沙汰せられた。仍て冒險家、野心家は群を成して東に向つた。シモヴイオーフは千六百五十三年八月黑龍江に達した。彼はテッエーヤー河の川口に於てカバローフと邂逅した。軍隊の指揮はオノフレーステパノーフに一任せられ、シモヴィオーフとカバローフは相携へて莫斯科に歸へり、カバローフは皇帝に謁見して、其見聞する所を述べた。ステパノーフは松花江を遡つて度々滿洲人と戰つた。時に一萬の支那兵に攻められて之を退けたこともあつた。シモヴイオーフは莫斯科に到着するやテストウイスコンの指揮の下に企てられたる遠征の計畫が拋棄された。併しステパノーフに對しては種々なる名譽が與へられて、皇帝自ら親筆の書面を彼に賜つて、賞揚する所があつた。千六百五十八年の春ステパノーフは黑龍江を下つて、滿洲軍と松花江の川口に戰ひ、衆寡敵せず、彼は戰死し、多くの露兵は捕虜となり、四十人の露人が辛うじて生命を完ふし、逭れて此悲しむべき報道をヤクーツクとモスコーに齎した。

一一　黑龍江問題と露清の衝突と交渉

ステパノーフの死後露西亞人は千六百六十九年迄黑龍江に引揚げた。然るに玆に殺人を以て西伯利に放逐せられたる罪人にニキトール・キルニゴルウイスキーといふ者があつた。彼は西伯利の牢獄の單調に倦んだる約八十人の罪人を率ゐて黑龍江地方に逭れた。或る者は途中で死し、或る者はツングース人の爲に犧牲となつたが、結局黑龍江に達して、其北岸要害の地に木造の砦を築いた。露西亞人が黑龍江に再び現れたといふ報が北京に到達するや、北京朝廷は之に反抗の意を表する爲に、使者をネルチンスクに送つた。露西亞側はミロワノーフを使節して北京朝廷に遣はされた。此使節は相當に待遇せられ、支那の朝廷よりは色々な贈物を賜つた、又ネルチンスク迄の歸途は護衛兵を付けられた。然るに此間キルニゴイスキーの砦は次第に勢力を增し、之に馳せ參ずる露西亞の脫獄の罪人が多くなつた。彼等は土人より貂の皮を租稅として徵發し、其幾分をネルチンスクの露西亞政府に納めた。ネルチンスクの知事は此の露西亞の植民者の成功を見て、千六百七十一年にキルニゴイスキーの事業を助ける爲に、イヴアンオコルコーフを派遣した。此の砦の在る所がアルバジンといふ街の本となつた。千六百七十二年此街の附近に露西亞人の村が出來た。アルバジンの移民は莫斯科に建白書を送つて、キルニゴイスキーの罪を許されんことを願つた、皇帝アレキセスは之を許したのみならず、二千留の賞與金をキルニゴイスキーに與へた。同時に支那との外交を圓滿ならしむる爲に、莫斯科政府はニコラス・スパフアーリックを

北京朝廷に派遣した。彼は千七百七十五年に莫斯科を仰山なる行列をして出發し、齊々哈の知事は彼を歡迎して仰々しき護衛を付けて北京に送つた。此使節も成功を齎して千六百七十六年に歸つた。此の間露西亞人の村落は次第に殖え、多くの滿洲の部落を征服し、セレンバ河、ドロンバ河の邊に新しい砦が築かれた。千六百八十一年ネルチンスクの知事はイグナテース・ミロクナーフに命じて、デセーヤ河及セリンダ河の探險を爲さしめた。彼は愛琿の街を發見した。然るに此間黒龍江沿岸に於ける露西亞の植民地は益々發展したるが故に、支那側に於ては之を無視することは出來なかつた。此の地方は從來支那政府の支配する所であつた。千六百八十三年に支那は愛琿の街及其上流二哩の所に在る島にも防備を加へ、守備兵の數を增した。

千六百八十三年七月、グレゴリーミリニコーフは一隊のコサック兵を率ゐてアルバジンを出立した。彼は滿洲軍と戰ひ、捕虜となつた、ミリニコーフ及コサック兵は北京に送られた。支那軍は黒龍江の下流沿岸に在る所の露西亞の植民地を攻めて之を燒拂つた、アルバジンのみが安全であつた。

千六百八十四年の春、支那政府は北京より二名の露西亞の捕虜をしてアルバジンの知事に宛てゝ一書を送つた。而して速に其土地を引揚げることを要求した、知事代理イヴアン・ウオルロクニコーフは協議の結果兵を以て之を守ることを決議した。援兵及物資を要求する使者がネルチンスクに向けて發せられ、露西亞人は直に其要求に應じ、六月に新知事アレキセートルプシーがアルバジンに送られた。支那軍は百艘以上の船を以て黒龍江を遡り、其の數は一萬八千を超えた。彼等は弓矢を持つて武裝し、幾門かの大砲をも持つて居た、六月十日にアルバジンに達し、翌日滿洲軍の將軍は城内に向つて降伏を勸めたけれども、何の答へもなかつた。十二日より攻擊が始り、豫想の如く露軍は少なからぬ損害を蒙り、遂に露兵は知事に嘆願して和睦を要求した。知事はネルチンスクに退却するの許可を滿洲軍に求めて、其の許可を得た。數名の出奔者は支那軍に投じた、彼等は大に厚遇された。アルバジンを出立してネルチンスクに向ふ途中、露西亞兵は約百人の軍隊と彈丸硝藥を齎したる後援隊に遭遇したが、評議の結果一應ネルチンスク迄引揚げることになつた。滿洲軍はアルバジンを燒拂つて黒龍江を下り、愛琿に達した。

一二 ネルチンスク條約の成立

扨、ネルチンスクに於てはアルバジンを捨てたるトルブチンと知事のイヴアン・ウラソーフとは會議をして、黒龍江岸を回

復せねばならぬといふ決議をして、アルバジンに探險隊を送つた。然るにこの一行はアルバジンは支那人の爲に全く燼拂はれてしまつたといふ報告を齎し歸つた。此の報道を受くるや、トルプチンはコサックの一聯隊を率ゐて、ネルチンスクに近頃到着したばかりのベートンといふ將軍と共に黒龍江に向つて再びアルバジンに於て露西亞の根據地を築く爲に出發した。此の度の遠征隊は六百人より成り夥しき武器及彈藥を齎した。アルバジンの砦は改築せられ、前よりも一層大なるものとなり、支那人に蹂躙せられなかつた麥畑よりは多數の收穫があり、土人は再び露西亞に租税を納めることになつた。然るに千六百八十六年の三月齊々哈爾軍の知事が再び遠征軍を送るといふ報道が達した、支那の遠征軍は七月六日、海陸より併進して來た、先づ最初に三千人の騎兵が現れ、次に砦が圍まれ、收穫は蹂躙せられた。支那軍は四十門の大砲を以て遠慮會釋なく砦を攻めた、併し城壁が堅くして破れない。九月一日支那軍は大擧して城を攻めたが悉く撃退せられた、此の戰ひにトルプチンは討死して、ベートンが指揮官となり、露西亞軍は三箇月の間城を守り、戰死せる者よりも病死者の方が多かつた。十一月には城中生殘れる者百五十人となり、彈藥は盡き、食糧も豐富でなかつた。されどベートンは支那軍よりの退却せよとの忠告に應じなかつた。十一月の終に有力なる露西亞の援兵が到着することを知り、支那軍は退却し始めたけれども、全然圍みを解いた譯ではない、彼等はアルバジンより三露里の距離迄退いたに過ぎなかつた。千六百八十七年の五月更に彼等は退却して、休戰が宣せられ、七月になつて莫斯科より北京に使節が派遣されたことが分り、八月三十日支那軍はアルバジン附近より愛琿と齊々哈爾へ引揚げた。斯くして再び露西亞人は其地方を支配することとなつた。露西亞政府は二名の使節を北京に派遣し　千六百八十六年の夏に首府に到着し、彼等は皇帝に嘆願してアルバジンの攻撃の手を緩むることを請求して成功した。

特別全權公使のペートル・アレキセーウイッチ・ゴロヴインは千六百八十七年五月莫斯科を出立した。多くの從者と一聯隊の軍隊が護衛した。此一行は途中にて冬籠りをして、翌年蒙古に進入つた、混雜事多くして容易に北京と交通するを得なかつたが、遂に北京政府よりも使節を途中迄出すことを承諾させた。千六百八十九年、二名の使節より成る支那の代表者が、千四百人の兵士、多くの從者、二人のキズエットの宣教師を連れて出發した、此二人は通譯として委任せられた、一行は七月十一日にネルチンスクの對岸に達した。其の河を横る船の中に千五百人の兵士が居つて、此の使節の從者其他一切を併せて九千にな

つた。然るに露西亞の代表者ゴロウインは途中の道路が悪いといふて到着しない。支那の使節が待つこと一箇月以上にして漸やく露西亞側は到着した。呑氣なものである。二十二日より會議が始つた、會議場は砦と川の間の大きな天幕の裡に行はれたが、境界問題に就て兩國の意見は容易に纏らず、屢々破裂せんとする場合もあつたが、遂にネルチンスク條約が成立した。此條約は露西亞の歷史に於ける甚だ重要なる新紀元である、それは獨り亞細亞の强國と結んだる最初の條約たるのみならず、既に占領したる土地を還付したといふ、露西亞側から見て、殆ど前例なき條約である。兎に角此條約の結果として露西亞は一世紀半の間太平洋に接近することが出來なかつた。八月二十九日支那側はネルチンスクを引揚げ、露西亞はアルバジンに關する條約を實行することに着手した。ベートンは其部下の者をネルチンスクに呼戻し、支那人は其城を破壞した。

扨、露西亞側の代表者ゴロウインはネルチンスクの防備を盛にして、彼が莫斯科に向けて出發したる時は、大砲、武器及び彼の部下の大部分を殘した。彼は莫斯科に歸るや、皇帝は彼の成功を賞し、貴族に敍せられ、陸軍大臣に任ぜられた。其後支那及露西亞の兩政府の間に條約の批准が交換せられ、ベーター第一世は北京に更に敬意と友情を現すべく使節を派遣することを決定した。其時には北京の東北の一隅既に露西亞の居留地があつた、居留民は主に露西亞の捕虜で、彼等は支那に於ては相應に待遇せられた。時としては露西亞人の一小隊があつて、近衞軍に屬して居た、居留民は聖堂を建つることを許され、其中にはアルバジンより齎されたる聖書などが掲げられてあつた程である。千六百九十三年にベーター一世の使節としてエーベル・ハーミル・イスブランドエーデスが北京に到着した、彼は露西亞の居留民の爲に正教會の僧侶を送る許可を得た。

一三　カムチヤツカ半島の領有

千七百七年、勘察加半島は露領なりと聲明された、二年後には捕虜の最初の一組が西伯利に遣はされた、十八世紀の初め露西亞は瑞典と戰ひ、多くの捕虜を得た、千七百九年には一萬四千人の捕虜が西伯利に遣はされた、多くの者は途中の困難に打勝つことが出來ずして悲慘なる死を遂げた。

扨、支那側に於てはアムール河畔より露西亞人を撤退せしめたる後、彼の再び來らんことを恐れて、愛琿、齊々哈、吉林の城を堅めた、而して支那人の黒龍江の北岸に移住することを禁じ、又黒龍江上の貿易權は北京政府の特許を得たる十人の商人に限られた。是れにも拘らず國境に於ける露支の貿易は窃かに

行はれ、支那の官吏は賄賂に依つて動かされ易かつたので、國禁を破つて貿易が行はれた。

露西亞人はネルチンスク條約に於て失ふ所多かつたことを後悔し、其幾分を回復せんと努めた、ペーター一世は再び使節を北京に派遣し、千七百二十一年レオン・イスマローフが北京に到着した。愈々使節が皇帝に拜謁する場合に三拜九拜の禮をとれと命ぜられて、露西亞の使節は之に應じなかつた。已むを得ず其の間に妥協が成立し、ペーターよりの國書を齎したる支那の役人がイスマローフに代つて三拜九拜の禮を行ひ、イスマローフは康熙皇帝に拜謁することが出來た、康熙皇帝は親しく露西亞皇帝の國書を受けられ、イスマローフの秘書官の一人をして北京に止まらしめ、永續的に外交官たらしむることを承諾した。イスマローフは其秘書官の一人のヴウーランジーを北京に殘して彼が莫斯科に歸るや、北支那の富源を探り且つ北京との陸上の交路を開かんが爲に隊商を派遣することになつた。此一隊は遂に北京に到着した、然るにヴウーランシーは北京の官邸に捕虜の如く閉込められて居た。康熙帝は瀕死の病床に横つて居た。折角の隊商も國境迄退去を命ぜられた。さればペーターの苦心も水泡に歸した譯である。然るに西伯利の事情が漸次知らるゝに隨つて、露西亞は太平洋に到達する通路を開かんとする決心が起つた、殊に新領土勘察加に食物其他の一切を送らんが爲に、アムール河を航海するの權利を得る必要を主張する者が現れた。そこで千八百六年に露西亞はもう一度使節を北京に送つた。ゴロヴイキンが其の任に當つた。彼は黑龍江の自由航海に關する條約を結ばんと欲したが、成功しなかつた。千八百四十七年に東部西伯利の知事に皇帝ニコラスが伯爵ムラフイーフを任じた。ムラフイーフは先づコサツクの一小隊をして黑龍江を探險せしめ、ムラフイーフは亞いでオコーツ海及アムール河口を調査する爲め探險隊を送つた。千八百五十年に黑龍江の河口が發見された。ネブロスコイが黑龍江を遡つて、ニコライツスクを建設した。翌年にはマリインスクを建設した。千八百五十二年には千島列島の一つの得撫島（ウルップ）が占領された。千八百五十三年にはアレキサンドロウスがカストリース灣に建設された。同年秋サガレンの西海岸のヴウーイに露西亞の殖民地が設けられた。千八百五十年四月にムラフィーフは黑龍江を占領する決心をした。當時クリミヤ戰爭が始つて、黑海が封鎖された爲に、間宮海峽に碇泊中の露西亞の艦隊は食糧を供給する爲には、黑龍江の航海が必要となつたが故に、ムラフィーフは斷然として此の決心を爲したのであらう。支那側の官吏は北京の命令を受けるに非ざれば、ムラフィーフの交渉に應ずることが出來なか

つたので、ムラフィーフは專斷に黑龍江を大軍を擁して下ることゝなつた。露西亞の此の擧は國際の親誼に照せば無論間違つて居る、併し既に勘察加に露領が在り、間宮海峽に添うて露人の植民地があつたので、其の急を救ふ爲に法律を無視しなければならぬといふのがムラフィーフの主張であつた。此遠征隊は六月十七日にサガレンのアンバーに達した、愛琿の滿洲人は此遠征隊に好意を表したが、城内には入れなかつた。ムラフィーフは六月二十七日にマーリエンスクに到着した、其所から彼はイルクーツクに歸つた。

一四　愛琿條約の締結と露西亞の大成功

クリミヤ戰爭の開始するや間もなく、英佛聯合軍は極東に於ける露西亞艦隊を破壞する目的を以て小艦隊を派遣した、此小艦隊は五艘の帆前船と一艘の蒸汽船より成り、百九十門の大砲と二千の水兵を運んだ。其の年の八月二十八日勘察加のペトロハバロフスクの沖に此艦隊が現れた、當時港には二艘の露西亞の快走艦が、砲臺の保護を受けて碇泊して居た。聯合軍艦隊が將に砲撃を開始せんとする時、英國の水師提督プライスが病死し、佛蘭西の水師提督が其任を受けた。攻撃は九月一日に試みられたが、失ふ所多くして成功しなかつた、九月六日に艦隊は海に浮んで遠く去つたが、途上食糧及軍需品を運べる二艘の露船に遭ひ、之を捕獲した。三ケ月の後に聯合軍の艦隊はペトロパウロウスクを攻略するの命を受けて歸つて來たが、露軍は既に其の前に撤退して居た、即ち彼等の大砲や軍需品を千八百五十五年にカストリー灣の方に移して置いた。

斯くして太平洋上に於ける英佛艦隊の出現は黑龍江の航海權を確立する事の一層急務なるを、露西亞側をして痛切に感ぜしめた、而して支那側に於てもそれに對しては何等の異議はなかつた。千八百五十五年中に三回も遠征隊がシリンスクを出發して、三千人の兵士と夥しき數の植民者及食糧や種々なる器具を運んだ。ムラフィーフは最初の遠征隊に加つて黑龍江を渡つたが、何等の障害に遭遇しなかつた。されど彼がニコライウスクに到着して間もなく、支那の大官の一行が來つて、境界を決定せんことを求めた。其の間英國の艦隊が勘察加及間宮海峽に現れたが、露西亞の軍艦は影を晦まして無事なるを得た。

同年の七月下旬には英國艦隊が黑龍江の川口の沖合に現れた。英國艦隊は偶然にも黑龍江の川口を發見した、之に追撃せられて一艘の露西亞の帆前船は沈み、他の一艘の帆前船は二百七十人の將校と水夫とが、捕虜として香港に送られた。九月三日に聯合艦隊は得撫島を占領した、是は前に述べた通り千八百

四年に露西亞人に依つて植民されて居たのである。唯だ不思議なる事には此戰爭繼續中英佛艦隊が黑龍江を遡つて露西亞の根據地を破壞せんと試みなかつた事である。

千八百五十六年の六月半ばに平和條約が結ばれた、戰爭の終局と共に一度捨てられたる植民地に移民を送る計畫が立てられた、ブラニコラウイ、マリエンスク、カストリー灣、サガレン灣、バラクター灣等の植民地に移民が送られた、又ムラフィーフ將軍はアムール河畔に植民するの計畫を立てる爲に露都に歸つた。其の間コルサコーフ將軍が彼に代つて、黑龍江沿岸に幾多の軍營が設けられ、有力なるコサックの部隊が駐屯した。ムラフィーフは再び露都より歸つて自由行動を許されたので、千八百五十七年の六月セーリンスクより一隊の步兵を黑龍江に下した彼も亦遠征隊に續いた。

伯爵プーチヤチンと云へる人は、朝鮮に達する最も便利なる通路として黑龍江を下つた、プーチヤチンは朝鮮ハミルトン港に赴いて、石灰積込所を設けることを韓國政府をして承諾せしめた。それより彼は海灣に赴いて北京の皇帝に宛てたる一書を高官の手を通して朝廷に送つた、プーチヤチンは北京政府に對して滿洲の讓與を迫つた、其條件としては北京政府を助けて長髮賊を平げるといふ約束をした。併し北京政府は之に何等の確答を與へなかつた。此報道を齎らしてムラフィーフは露都に急ぎ歸つて、支那に對して何等かの處置を採るべきかといふ指揮を待つた。千八百五十三年五月、ムラフィーフは再び黑龍江に現れた、當時英佛艦隊は露西亞の味方をした爲め、支那は遠慮して敢て抵抗しなかつた。ムラフィーフは此機會を逸するが如き人間ではないので、遂に五月二十八日に愛琿條約を結んた。此條約に依つて露西亞は黑龍江の左岸を烏蘇里河迄讓つて、烏蘇里河より海に達する迄は兩岸とも支那は露西亞に讓つた、又松花江及び烏蘇里河は露西亞の利權を有する商人及旅客の自由航海に任せるといふ事が聲明された。愛琿條約を締結するや否や、ムラフィーフはブラゴエチエンスクの街の基礎を据えたばかりで、黑龍江を下りて烏蘇里河口にカバロフカの街を建設した。同時にプーチヤチンは北京に在つて、北京政府と交渉を重ねて、他の外國に與へられたと同樣なる權利を露西亞の爲に獲得した、それに依つて露西亞は北京に使節を駐在せしめる權利を得た。支那の諸港は露西亞人の爲に開かれ、陸上の交通は以前と變る所はない。領事は港に駐在することが出來る。又兩國間の郵便はキヤクタ經由にて行はれることになつだ。又支那と西伯利間の新國境を圖面に現はすことが極められた。愛琿條約に依つて露西亞は全西伯利を支配するの權利を得た、是は偏へ

にムラフィーフの功績に歸すべきものである。彼は殆ど一人の生命をも失はずして、此の美事なる勝利を得た、露西亞皇帝は其功を認めて彼に種々なる高級の勳章を與へると共にアムロスキー伯に任じた。而して新たに獲得したる領土は黑龍江地方と沿海州との二部に分つて、一人の總督の下に支配せらるゝことになつた。此地方の產業の發達を助長する目的を以て黑龍江會社が千八百五十八年に皇帝の許可を經て組織せられ、莫斯科と黑龍江の間の電信の交通を直に開くことゝなつた。又其地方の人口を增加する爲に、西伯利の各地に存在して居る政治的犯罪者に向つて移住を許す所の旅劵が發行された、此結果として黑龍江地方の住民の數が增加した。千八百五十九年の初めに一萬人の植民者が西部西伯利より黑龍江地方に到着した、殊にデッウエヤ河の上流に金鑛が發見されたといふ報道が移民の數を增加した。

支那が愛琿條約に於て大讓步を爲した時は英佛と戰爭の最中であつた。千八百九十五年の六月、支那軍は白河の河口に於て聯合軍の使節を拒絕することに成功した、之に勢ひを得て支那は再び傲慢となり、露西亞に對して讓步したことの馬鹿らしい事を悟つて、支那は未だ曾つて露西亞に黑龍江を讓步したことはないと言ひ出した。此報道が露都に達するや、イグナチーフ將軍が北京に派遣され、彼が北京に到着した時は聯合軍が再び北京に進擊しつゝあつた時であつたので、北京政府は腰が弱くて一も二もなく露の言ふことを聞いた、仍てイグナチーフは何等の困難なく、烏蘇里河と太平洋の間、滿洲の沿海州全體を讓與せしむるの約を得た、又烏蘇里河に至る迄はアムール河の水路を以て國境とする、獨り是れのみに止まらずして千八百六十年の十一月十四日に於ける北京條約はバイカルの周圍の地方、トルキスタンに於けるイシック地方をば露西亞に讓與せしめ、北京に旅行する權利を露西亞の商人に與へ、ウルガーに露西亞の領事館を設立することを承諾せしめた。ネルチンスク條約は破棄することを承諾せしめた。

以上の事實は、此の莫大なる西伯利が三百年の間に、如何なる苦心を以て、如何なる野心を以て、如何なる犧牲を以て、又如何なる政略を以て、露西亞が之を支那より奪取つたかを語るものである。此の狹き日本が、島國の中に張切れるばかりに充滿して居る人口の處分に困難を感じつゝある時、如何に吾々の祖先が不自然に國を鎖して、發展し得べき時に發展することが出來ずして、一衣帶水を隔てた對岸に於ける此の莫大なる土地に入込んで、吾々の生活の基礎を造るの機會を逸したかを慨歎せざるを得ない、今や時機を失して、或

は西伯利の撤兵となり。或は北樺太占領の爲に世界の批評を蒙らなければならぬことは、一に祖先不明の罪であることを痛切に感ずる、西伯利横斷に十日費やした私は、此歴史的事實を研究するの興味を鼓吹せられた事だけでも滿足しなければならぬ。

一五　革命の一原因――政治犯人に對する脅威

私が西伯利を横つたのは明治四十一年、即ち千九百八年である。吾々の乘つた氣車は萬國寢臺會社の急行車で、その構造と裝飾とは佛蘭西風である、西伯利の荒野に、交通上、此の文明の利器が運轉して居る事は大なる祝福である。兎に角吾々は一定の金を拂ひさへすれば、食堂に於て相當の御馳走を喰べることが出來た。勿論日露戰爭後間もないことで、日本の旅客に對しては、露西亞の官憲は幾分注意して居たかも知れない。私は食堂で食事を濟ましてから、十分間位落付いて、窓越しに野外の景色を眺めて居ることがあつた。特に景色の佳い所、或は空模様の變化の面白いことのある毎に、小さい手帳を出して書付けた。同行の先輩は、さういふ事をすると日探と間違へられるから、止めたら宜からうと言はれた。併し折角西伯利を通過して、自然の面白い變化や特色等を書き記さなければ、やがて忘れるだらうと思ふて時々書き記した。所が西伯利を半ば以上通過した頃から、平服の露西亞の青年刑事とでも思はれる者が同車して、始終吾々の行動を注目して居たかの如くに推測された。其の男は莫斯科迄同車し、吾々と同じ宿屋に行つた。それが果して露西亞の刑事であつたかどうかは判斷することは出來ない、併し日露戰爭後間もない事であつたから、其の位の事は露西亞の官憲はやりかねなかつたらうとも思はれた。

其の頃は露西亞の政府が反動政治を行つて居る時代で、多くの自由思想家や革命家が、非常なる壓迫を感じつゝあつた時である。私は外國人として何もさういふ事には注意せずして通拔けた。然るに英國に着いてからプリンス・クロパトキンの「露西亞に於ける脅威」と題する小冊子を讀んでみると、其當時露西亞の監獄の内部は、隨分慘酷を極めて居たやうに思はれる。千九百九年二月一日の統計に依れば、露西亞帝國に於て牢獄に投ぜられて居る者は十八萬一千百三十七人とある。而もそれは獄中に在る者で、拘引せられずして、或は移送せられつゝある者を含んで居らないが、是は恐らく三萬人位あつたらうといふ事である。其他地方の小都會や村落に於ける警察の拘留場に拘留されて居る者が澤山あつて、其の數は露西亞の新聞の報する所

に依れば五萬乃至十萬であつたらうといふ。而して警察の拘留場に於ては、最も慘酷なる待遇が被拘留者に加へられたといふ事である。數年前以來、囚徒の數は漸次增して來た。千九百五年に於ては平均の在獄者數は八萬五千人であつたが、千九百六年は十一萬千人、千九百七年には十三萬八千人、千九百八年には十七萬人となり、千九百九年の二月一日には前に述べたやうな十八萬千百三十七人となつた。而して露西亞帝國の有ゆる牢獄の收容力は十萬七千人に過ぎない。そこに約八萬人の超過人員があつたのであるから、監獄の生活が如何に悲慘なものであつたか、略々理解することが出來る。衞生的にも、道德的にも慘めなる事が多く行はれて居たことが分る。監獄に於て、失望落膽の極、自殺した者が次第に多くなり、千九百八年だけに百六十人の囚徒が自殺した。又千九百八年に於て軍法會議に依つて死刑の宣告を與へられた者が千七百四十一人、死刑執行が八百二十五件であつた。

殊に氣の毒なるは、遠方に流罪された者である。千九百八年、時の總理大臣ストルピンが、英國の「評論の評論」のウイリアムステッドに物語れる所に依れば、行政處分に依つて流罪に處せられたる者は一萬二千人程あると言つた。其の後ステッドは內務大臣のマカローフに會見して、其の意見を質したるに　總理大臣の舉げたる統計は、內務省に依つて決定されたる件數で、其他に地方の知事に依つて命令せられたるものは、其中には加へてないといふ事である。クロパトキンの計算に依れば、其當時西伯利及北露西亞に於て、流罪に處せられたる男女の數は七萬八千人あつた。然るに千九百九年、內務省の決定したる流罪者の數は一萬五千五百人に達して居る。其分類は勞働者が六千三百六十二人、農夫が三千八百七十九人、學生が五百四十人、教師が七百九十二人、商人が七百五十五人、官吏が三百十五人其他職業の不明なる者二千八百五十七人。この單調なる數字の裏に潜む血と淚の物語を知るには私達の想像の力を働かせなければならない。

一六　西伯來流罪者の悲慘なる生活

扨、かゝる不幸なる流罪者は如何なる地方に生活して居るかといへば、北露西亞の極寒の地方、若くは西伯利の北極に近き方面で、最も慘憺たる生活である。露西亞の一新聞の記事に依ると、次のやうな事が書いてある。

總ての流罪者はイニスエ河に接するトルカンスク地方に定住して居る。トルカンスクよりイニスエクス迄は七百二十哩、隔つて居るが、其の間に六十四の小さい村があるのみである。流

罪者の主なる大部隊は、其の中の三十の村に割當てられて居る。其の最も大きな村のスマローコーフに二十戸あるのみで、他の村には五戸若くは七戸位で、其住民の數も三十乃至四十に過ぎない。或る村に於ては全部落の總人口は二十人を越えない。トルカンスク地方の下流の方には六百七十哩の地方に三十七の小さい村があるのみで、其中の最大なる村は十戸しかない、他の村には一戸二戸位しかない。而してかゝる部落に十五人乃至二十人の流罪者が定住したとすれば、其土地の人民に取つては非常なる重荷となる。流罪者は何等衣食の途を見出すことが出來ない。其結果、彼等は初め十人、後には二十五人の團體がイニスエ河に添ふて掠奪を試みた事が曝露した、此の掠奪團の中六十五人が捕はれて處分された、彼等は軍法會議に連れられんが爲に、トルカンスクよりイニスエクス迄歩かせられた。

是等の流罪者に對する政府の扶持は千九百八年の一月迄は一箇月三留三十五哥である。之を英貨に換算すれば七志一片、日本の金に直せば三圓五十錢である。然るに其後政府は此手當を一留八十五哥、即ち三志に迄引下げたるが故に、一月の手當一圓五十錢位であつた。軍法會議に依つて處分せられたる流罪者には此手當すら下らない。是等の流罪者が割當てられたる地方は、流罪者に多少の土地を與へなければならぬ、然るに流罪者は農具もなければ、家畜も有して居らない、又主としてかゝる人々は都人士なるが故に、農業の道を知らない。彼等は飢えて死するばかりである。大きな村に於ては、流罪者は共同の寮所を造つて、一日に一回、十錢若くは十二錢位で食事を提供して居る所もある。行政處分を受けて流罪者となつた者に對しては、政府は衣服料として一年に六十志八片を與へる。流罪者は主に此金を食料に振當てゝ居る、いふ迄もなく、一月三志の手當で生活することは出來ないからである。又如何に食物が安いとしても、一月數志を儲くるが如き職業を見出すことは殆ど不可能である。されば流罪者の生活は誠に暗い、陰氣なもので、悲觀の極、失望の極、長い冬の壓迫の下に在つて、遂に自殺をするやうな心持になるのは已むを得ない事である。政治的流罪者に對する唯一の光明の方面は、何等かの團體を造つて、互に勵まして、其の道徳的墮落を豫防する事である。是等の者は相互扶助の會を組織して居る。鄕里より幾分の送金を受ける者は幾らかづゝ寄附をする、其の寄附を以て寮所を造り、小さい圖書室を造り、講演會を開く。併し書物や紙を得る事の困難、殊に冬期の間の燈火の費用は中々容易ならざるものである。而して官憲は絶えずかゝる會合の成立及進行の阻害をする。千九百八年一月には、オブドロスコ地方のかゝる植民地に於て、失望

落膽の極、五人の流罪者は自殺した、それを魁けた者は一婦人であつたが、四人の男子は彼の女の先例に倣ふた。

此の統計は、私は露西亞を通過しつゝあつた時は無論知らない。後に至つて之を追懷して、其の當時自分の不注意にして觀察の徹底せざりし事を悔いたのである。兎に角私が萬國寢臺會社の二等室に安樂に睡眠し、自由に西伯利の大平原の自然の變化を味ひつゝあつた時、又食堂に於て相當な美味を口にして居た時、幾萬の不幸なる露西亞人は、西伯利の北方、或は東北方面に於て、殆ど人氣なき荒れ果てたる村々に於て、彼等の理想と信念の爲に、大なる苦痛を嘗めつゝあつた事を想出す時、私は露西亞には革命は當然來なければならなかつたものであると思はざるを得ない。己れに出づるものは己れに歸るといふ譬の如く、露西亞の反動政治家の亂暴なる行動が革命を促進するに與つて力あつたに違ひない。露西亞の志士仁人が其の理想と信念の爲に、或は鞭たれ、或は呵責せられ、或は栲問せられ、或は牢獄の苦を嘗め、或は失望落膽の極、自殺をして、其の靈魂を永遠の力に委ねた。是等の人々の執念が積つたゞけでも、露西亞帝國が長く存在することが出來る筈はなかつたのである。私が西伯利露西亞を通抜けた時はロマノーフ朝廷が全盛時代で、日露戰爭の失敗の痛手も殆ど回復されて居た時であつた。併し此時代に既に露西亞の革命の種子は蒔かれつゝあつたのである。クレムリンの宮殿の外觀は今日も當時も變りがあるまい。ペトログラードの冬宮は依然としてその壯大なる影をネヴア河に寫してゐるだらふ。併ながら露西亞の民心の中に築かれたる、ロマノーフ王朝の土臺は既に其の時から搖ぎ始めて居たのである。

一七　弦月の下のサマラの大寺院

これからまた一昔前の旅行に立ちかへる、九月十六日。午前八時頃、目を覺ますと、汽車が愈々歐羅巴露西亞の東南部に這入つて、今や將にベーヤラ河に沿うて進んで居る。ウーヘル停車場にて繪葉書を買つて日本へ出した。河岸に石油の貯藏庫が澤山あつた。景色は頗る佳い。ウラルの山を越したばかりで、西伯利と露西亞は流石に違ふ所が見える。畑はよく耕作せられ、牛馬山羊など、群を成して居る。家屋も西伯利に較べると稍々上品である。鐵橋の上からウーヘルの街を望むと繪の如く美しく見える。同じ名の停車場にて乞食が群を成して、十字を切りながら憐みを乞ふて居た。猶太の商人よりウラル山の葡萄を求めた。沿道の畑では麥を刈つて取入れて居る農夫が多い。刈つた麥の根よりは靑い苗が出て居る。晝頃風が出て埃が多く

立つ。或る停車場には非常に不潔な人が居た、是は露西亜人でもなければ、韃靼人でもない、西伯利邊の土人であらう。此の邊は禿山を多く見る。正午通過したる停車場には數人の韃靼人が居た、髯は生やしてない、黒い着物を來て、甚だ不潔である、多分勞働者であらう。時々西伯利行の植民車と行違つたが、箱の中を覗いて見ると、棚を幾段にも造つて、老若男女が雜然として混居して居る狀を見て、氣の毒に思つた。汽車の中にストーブを炊いて居るのを見受けられた。或る停車場のプラットホームで跣足の乞食が、日廻の賞を囀りながら、乘客にせがんで居た。又靴の代りに草鞋のやうな物を穿いて居るのも居た。停車場の井戸は大きな車で、釣瓶を下げて、釣上げるやうな仕組であつた。此の邊は冬になると一丈位の大雪のある所ださうであるが、夏の終りであつたので、唯だ禿山が、ゆるい波形を打つて居る光景を見て、冬景色を想像するに止まる。露西亜は山の形迄どことなく、ゆつたりとのろ〱して、露西亜人の性格を暗示するものがある。平野の所々には刈上げた麥が山の如く積まれて、それが數十となくある。農家には藁屋根の家屋が多い。五六匹の馬を綱で固く繋いで、小麥を踏ましめて居るのも見える、隨分原始的の農業である。西伯利の旅行中莫斯科の茶の商人と稱する、英語の話せる男と知合ひになつて、車中でもプラットホームでも折々話したことがあるが、其の男は愈々露西亜へ來たといふので、頗る安心したらしく、愉快さうな顔をして居る。其の部屋に行つて、話をすると、君は英國へ留學するさうだが、どうだ、莫斯科に止つて、莫斯科大學に這入らないか、學費は一年七百五十留で濟むのであるから、其の方が宜いではないかと勸めて呉れた。露西亜人は中々親しみ易い。晝過ぎより風がやんで、夕方に小雨があつた。數萬の鳥が群を成して飛んで居るのを見た。大きな虹が東の空に現れた、露西亜では虹迄大きいのかと話合つた。其の虹を背に負ふて、一羽の鳶が空高く飛んで行く景色は雄大である。野面は一杯に夕陽を浴びて輝いて居る。午後十一時頃サマラの停車場に着いた。サマラは露西亜の西南部の、農業、牧畜、漁業の中心地である、此所よりオデッサに行く鐵道が岐れる。エルサレムに行く巡禮者が多く此所から乘換へる。農民は殊に熱心なる巡禮者である。サマラの大寺院が月の光を浴びて、高く聳えて居るのが如何にも神々しい、停車場を離れると靄が平野に這ふて、空には弦月が輝いて居る。サマラの街の電燈が星屑を散らしたやうに見える。餘り景色が佳いので眠れない、同室の露西亜人は何故寢ないかといふやうな顔をして居る。退屈凌ぎに停車場で西瓜を求めて喰べたりした。實は有名なるヴォルガ河を眺めやうと思つ

て、起きて居たのだが、午前一時頃迄經つたけれどもヴォルガには來ない。遂に眠つて、ヴォルガ河は夢の中に過ごしたらしい。

一八　ゆるく廻る風車の行列

九月十七日。沿道には西瓜の畑が多い、小麥、大麥、裸麥、日廻等を栽培して居る所が多い。午前九時、ペンツアの停車場に着いた。非常に大きな停車場である。待合室の畫像は中々壯麗なものである。此の街の近くには大きな森も牧場もある。一人の羊飼が數百頭の羊を連れて歩く狀は、如何にものんびりして居る。正午近く、西伯利行の萬國寢臺會社の列車に行違うた。珍しさうに窓から顏を出して居ると、向ふの窓から一人の日本人が顏を出して居て、目禮をして分れた。無論誰やら分らないが、何となく懷しいやうな氣がした。午後三時半、マーシヤンスク停車場に着いた。此の地は穀物の市場であつて、沿道に風車が澤山ある、幾十となく、青く、又赤く塗つた風車が夕陽を浴びて廻つて居るのは氣持が快い。此の停車場には大きな飲食店が附屬して居る。五人の露西亞の騎兵が軍旗を捧げて番をして居る。餘程重要なる場所と見える。遠くから風車を見るのは、まるで繪のやうである。和蘭の風車と東南露西亞の風車は世界の名物である。私は退屈の餘りクラーク老人を訪ねて色々話をした。私は風車が休んで居るので、露西亞では風車迄怠けて居ると云つた所が、老人は我輩の肩を叩いて、そんな事を露西亞人に聞かれると、又日露戰爭が始まりますよといふ。そこで我輩も負けて居ず、其の時は貴方はルーズヴェルト大統領の役割を演じて下さるでせうと冗談を言合つた。

明朝は愈々莫斯科に着くといふので、今夜は、汽車中の最後の晩餐で、食堂は大した賑ひである。食堂で英人スチアードといふ青年に會つた。此の人は劍橋大學のトリニティーカレッヂを卒業したばかりで、露西亞に遊びに來て居るのだといふ。其の人の紹介で露西亞の一青年に會つた。此の人はペータースブルグの人で、上流階級の者らしい。數年前に父を失つて、弟が一人あるのみで、自分は十九、弟は十七といふ、此の秋は母と共に英國に行つて、劍橋大學に學びたいといつて居る。スチアートといふ青年は其の家庭教師らしい。此の十九歲の上品な青年は中々話せる。彼はトルストイの崇拜家である。又彼は佛教も幾分研究して居るらしいので、立派な宗教であると賞して居た。十九歲の青年としては、早熟驚くべきものと我輩も舌を卷いた。彼は劍橋に於て經濟學を、弟は化學を學びたいと云つて居た。此の青年は日本の海軍の事を餘程研究して居ると見え

て、主なる軍艦の名を大抵知つて居た。多分は日露戰爭の當時覺えたのであらう。スチアート君は可なりの露西亞通で、日本に於ける露西亞文學の影響に就て聞くから、ゴルキーの作物が大分流行して居ると云つた所が、彼は、それはいけない、ゴゴールとドストエーフスキーの方はゴルキー以上である。トルストイは「戰爭と平和」と「アンナカレンニナ」が傑作である。など丶尋ねもせぬのに通を振撒く。私は彼と劍橋に於ける再會を約して別れた。露西亞の青年は日本の言葉を少し敎へて呉れといふので、一二三四五を敎へたが、五位迄は能く覺えた。食堂のボーイが日本語を敎へて呉れといふので、林檎、椅子、電燈、鼻、耳、お早う、などの言葉を敎へた。又日本のお錢を呉れといふから白銅一枚遣つた。車中の乘客は何れもソワ〳〵して荷物の片付方に忙しい。私も荷物を片付けて居る所へ、莫斯科の茶の商人が來たので、箱の中の佛像を出して、どうだ、是は君等の畫像(アイコン)に似て居るではないかと云つた所が、其の男が言ふのに、それは偶像であつて、畫像(アイコン)ではない、吾々は決してそんな物は拜みませぬと威張つて居た。

十八日の午前二三時頃、莫斯科の停車場に着いた。併し朝迄汽車の中に居ても差支ないといふので、吾々は眠り續けて、朝の七時頃に目を覺ますと、莫斯科のグランドホテルより迎ひが來て居る。一行四人は懷しい萬國寢臺會社の汽車に別れて、馬車に乘つた。英吉利のクラーク老人は、君は年が若いから宜いかも知れぬが、外套を持たないと、風邪を引くから注意なさいと云つて別れた。

一九　豫言者的畫家ヴエレスチヤーギン

九月十九日快晴、昨日より幾分か暖い。午前十時立博士と共に、トレチアコーフ畫堂に馬車を驅る。此の畫堂は富豪トレチアコーフ個人の畫堂を公開するやうになつたものである、露西亞に於ける最も完備せる畫堂である。此の畫堂に於て私の心に深き印象を與へたものはヴェルスチヤーギンである。恥しいが私は、其當時ヴェルスチヤーギンの名も知つて居たし、有名なる髑髏の畫の寫眞を見たこともあるが、此の畫堂に來てヴェルスチヤーギンの大作物を見る迄は、彼の偉大を十分に理解することは出來なかつた。トレチアコーフ畫堂には、勿論ヴェルスチヤーギン以外の多くの傑作があつた。今でも私の頭に深き印象を殘して居るのは、ヤロチンコーの農民生活の畫である。殊に移民列車の窓に、鬚のむくつけき老人や年若き母親や、小さい子供などの顏が、鐵の格子の内側に見られて、其の外のプラットホームに十羽ばかりの鳩や小鳥が餌を漁つて、群つて居る圖で

ある。如何にも自然で、汽車の中の單調なる、淋しい生活と、暖かい日を浴びて、プラットホームで餌を漁る自由な小鳥の生活との對照の如き、露西亞の農民生活の苦痛の一端を仄かすやうに思はれた。しかし何といつても近代露西亞の代表的畫家は、ヴェルスチヤーギンである。

ワッシリーウイッチヴェルスチヤーギンは千八百四十二年十月二十六日ノブゴロッド省のリューベッチの一名門に生れた。其の地方の上流社會の習慣として、子弟はペータスブルグの海軍士官學校に送らるゝのである。ヴェルスチヤーギンは千八百六十年に優良なる成績を以て、此の學校を卒へた。學校を卒業すると共に、彼は一生を藝術に捧げんとするの意志を發表した。當然彼は兩親より反對をされた。學費が缺乏して、やがて兩親の希望通りになるだらうと豫期して居たのであるが、ヴェルスチヤーギンは、かゝる事には少しも頓着せず。美術學校に入學し、二年間勉強して、ペネローフの戀人を殺すユーリッセースの油繪で銀牌を得た。其の頃露西亞の青年の間に、進歩思想が旺盛となつて、文學、藝術、新聞、雜誌に、其の機運が動いて來た。ヴェルスチヤーギンは此の自由思想に尠からず共鳴した。彼は西歐の政治的社會的の問題を取扱ふたる新しき書物を耽讀した。隨つて急進的人物として取扱はれた。彼は美術學校の傳說や習慣に囚はるゝ事を好まないで、千八百六十三年に飄然として高加索地方に去つた。

高加索は露西亞の伊太利のやうな所である。其の自然と傳說は、多くの露西亞人を驅つて、ロマンチストたらしめた場所である。ヴェルスチヤーギンはテーフリスに行き、一身を支へる爲に或る商館の製圖家となり、或は學校に教へ、或は家庭の圖畫の教師等を務めた。此の間彼の精勵は言語に絕したもので、此の多忙の時を割いて、實物や自然のスケッチを取つた。千八百六十四年にはヴェルスチヤーギンの父も我を折つて、彼に學費を提供して、巴里に留學せしめた。彼は巴里に赴いてジエロームといふ有名なる畫家の畫室に於て勉強した。ジエロームは新しき弟子の力量に驚いた。同年ヴェルスチヤーギンは美術學校に入學して、ビーダに主として學んだ。千八百六十五年にヴェルスチヤーギンは再び高加索に旅して、歸來つた時、ジエロームもビーダも彼のスケッチの豐富なるに驚いた。當時ヴェルスチヤーギンは主としてペン畫を試みて、隨分大作をしたけれども、油繪は試みなかつた。彼の繪は非常に寫實的で、極めて緻密な點迄實物を描寫することに努めた。ヴェルスチヤーギンは巴里の社交上の誘惑を退けて、極めて質素な、非常に謹嚴なる生活を續けて、一日十六時間も働いた。ジエロームもビーダも理性派と

いふよりも、寫實主義の畫家であつたが、ヴェルスチヤーギンは更に民衆的氣分の溢れた人で、常に野外に出てスケッチを取ることを喜んだ。ヴェルスチヤーギンは民衆の我慢强い、半ば無意識の苦痛を表現するのが、彼の藝術の目的であると考へたが、此點にはジエロームもビーグも共鳴はしなかつた。

二〇　非戰的民族性の代表者としての ヴエレスチヤーギン

千八百六十七年はヴェルスチヤーギンは其の技倆を發揮するの時が到着した。即ちカフマン將軍の參謀部に從軍して、中央亞細亞の遠征軍に加はるの許可を得た事である。彼は百難を排してウォーレンブルグよりタシケン島迄旅をした。露西亞に歸つた時、彼の功績が認められて、名譽あるセントジョールズ勳章を與へられた。千八百六十八年にペータースブルグのトルキスタン博覧會が組織せられて、其の一室に彼の畫が展覧された。彼の希望に依つて入場は無料であつた。ヴェルスチヤーギンは非常な評判となつた。中央亞細亞に於ける戰役が其の當時の問題であつたばかりでない。ヴェルスチヤーギンの戰爭畫は、極めて寫實的なものであつて、從來戰爭に關して一般社會が與へられたる印象と全く違つた慘憺たるものであつたからである。此の陳列の中には「襲撃の前」と「襲撃の後」といふ有名なる畫がある。前者は露軍が襲撃前、地に伏して、命令をまつてゐるし、參謀將校は物かげにて双眼鏡にて敵陣を視察してゐる畫である。後者は野戰病院の慘憺たる光景を示してゐる。皇帝アレキサンダー第二世及其皇后が此の博覧會を見物せられた時に、此の繪の前に暫くの間立つて、瞑想されたといふ事である。恐らく戰爭の悲慘なる事を始めて理解したことであつたらう。博覧會が閉會となつた時、此畫の所有者であるハインツ將軍は之を皇帝に獻上したが、皇帝は是等の畫を、其の居間に掲げて居られたといふ事である。ヴェルスチヤーギンは戰爭を憎んで、其の戰爭の最も慘憺たる方面を示さんとするの決心をしたことは、勿論其當時流行し始めたる人道主義の傾向にも立脚して居るのであるけれども、更により深き根柢がある。といふのは露西亞の國民性が非戰的傾向、平和的傾向を著しく有して居る事である。ゴール人、アングロサクソン人、チュートン人の性格の中には、戰爭的氣分が豐かに流れて居る。然るに露西亞人の國民性には、戰爭的氣分は餘り現れて居らない。其の證據には露西亞には眞の軍歌といふものは無い、古いのも新らしいのも無いといふ事である。例へばテニソンの輕騎隊進撃の歌には軍閥主義の精神が現れて居る。又キヤンボリや獨逸のクルネ

ルなどにも軍事的精神が現れて居る。然るにトルストイの戰爭及平和には、戰爭の記事は在の儘に描いてある。何等の誇張が無く、何等の光榮が無く、悲慘なる事は悲慘なる事として書いてある。是が露西亞の國民性であるといふ事である。勿論露西亞人も戰はなければならぬ時は戰ふ、非常なる勇氣を以て戰ふ、又一種の諦めを以て進んで行く。併ながら彼等は戰爭の眞實を直視して戰ひに從事するのである。決して光榮や野心の幻に醉ふことはない。されば進軍の際に、露西亞の兵隊の注目するものは、將校の指揮棒に非ずして、僧侶の淋しい十字架である。ヴェルスチヤーギンは此の精神を豐かに有して居た點に於て、露西亞の國民性を代表したる畫家である。千八百六十九年ヴェルスチヤーギンは東方の旅を試み、キルギユースの草原を過ぎ、殆ど支那の國境に達し、幾多の冒險を冒して千八百七十一年に歐羅巴に歸つて、ミュンヘンに落付いた。彼は三年間此所に於て幾多の大作を完成した。從來彼の色彩は、暗くして物凄かつたのであるが、此の時より俄に華美やかなる色彩を用ゆるやうになつた。同時に日光を風景の上に十分に浴せしめて、實さと自然と物を一層眞實に描くやうになつた。彼は東洋の生活の特色ある點を捉へ來つて、「阿片喫煙者」、「サマルカンドの乞食」の如き傑作を描いた。千八百七十三年に彼の主なる畫が倫敦の水晶宮に於て展覽された。彼の畫は非常に注目を惹いた。英國に於ける民衆藝術は、寫實主義に反對のものであつた。それにも拘らず一般の注意を惹いた事は非常な成功である。千八百七十四年に彼はペトログラードに於て展覽會を開いた。非常な人氣を博した。觀客は雲霞の如く密集したので、警官が付いて、會場を整理した程である。此の展覽會に於て評判となりたる物は、「戰爭の祀神、過去、現在、未來に於ける大征服者に捧ぐ」るといふのであつて、人間の頭蓋骨の三角塔を造り、其の上に肉を漁る所の一群の鳥が飛んで居る圖である。髑髏の數は幾千幾萬となくある、果しなき荒野がそれを取圍んで居る、落葉したる、枝の折れた木が所々に見える。鳥は幾羽となく空より飛び來り、或は既に髑髏の上に降りて、殘れる肉を啄んで居る。私は其の後ベルリン、ドレスデン、ライプチッヒ、ローマ、ミラン、パリー、ロンドン等に於て、幾多の名畫の前に立つた。併しトレチアコーフに於けるヴェルスチヤーギンの畫の如く、私に深き印象を與へたものはなかつた。殊に此「戰爭の祀神」は一將功成つて萬骨枯るの言葉を畫にしたもので、永遠の眞理を現す所の畫である。此の畫は日露戰爭を去る數十年前に試みられたる畫であるが、日露戰爭の後に之を見たるが故に、私には非常に鮮かなる印象を與へた。歐洲大戰の後、又之を想ひ出し

ても大なる感じを起させられる。

扨、此の展覽會が開かれて數日經つと、有力なる將官の一團より抗議が申込まれた。或る畫は實際以上である。露西亞の陸軍に損害を及ぼすものであるとの抗議であつた。ヴェルスチヤーギンは尋常一樣の抗議に凹むやうな畫家ではなかつた。併し實際以上に書き過ごしたと突込まれたので、憤慨して、其の二三枚の畫を破いてしまつた。其の中に有名なる「後に殘されて」といふのがある。是は破られたるが故に、トレチアコーフ畫堂にも陳列してない。又繪葉書や刷物としても殘つて居ない。唯だ記錄に依つて此の畫を想像するのみである。負傷したる兵士が沙漠の一隅に倒れて居る。彼の親友は遠く去つて、河を越えて進軍して居る。太陽は後ろの山に隱れんとして居る。餌を漁る鳥は、此の犧牲者の上に飛廻つて居る。此の平和なる背景の美は、此の人間の恐るべき運命と、不思議なる對照を爲して居る。此の畫を見て哀愍と義憤の精神に燃えない者は無かつた。作曲家ムッソールグスキーは此の畫の印象に基いて、最も寫實的な悲しい歌を作つたといふ事である。

ヴェルスチヤーギンはペーターースブルグの展覽會を以て滿足せず、更に新しき畫題を探らんが爲に、亞細亞に旅行して、日本に達せんと試みた。併ながら彼は印度に長く滯在した爲め、我國に來ることは出來なかつた。彼が露西亞を出立するの報傳るや、ペータスーブルグの美術學校は彼に敎授の椅子を提供した。ヴェルスチヤーギンは之を拒絶した。其の口實は、一切の官吏としての位置及榮達は、藝術の利害に全然反するものであるといふのである。

千八百七十六年三月、彼は健康を害して、歐羅巴に歸り、巴里の近郊に於て質素なる別墅を造り、製作に從事した。彼は印度の生活を題目として、多くの傑作を描かんとして居る時、露土戰爭の噂が聞えたので、彼は再び本國に歸り、從軍した。千八百七十八年、彼は巴里に歸つて、一年半の努力の結果、バルガリヤ戰役に關する二十枚の畫を完成した。是等の畫は彼の間熟せる藝術の結晶で、彼の心の血を以て描かれた物である否、彼の神經纖維其物を以て描かれた物と言はれて居る。其の中最も名高い物は『シプカ峠の靜寂』といふ畫である。是は三枚續きで、第一の畫は、一二尺積れる雪の上に兵士が銃劍を肩にして、哨兵として立つて居る。第二の畫は雪が降りに降つて、哨兵は全く頭を垂れ、腰迄雪に埋もれて居る夜の景色である。第三の畫は雪が降積つて、哨兵は全く雪に埋もれて倒れ、辛らうじて外套の頭巾と手の先きと、銃劍の先きのみが現れて居る慘憺たる光景である。之を觀て、征軍の疾苦を想はざる者はな

い。「死者の祝福」と題する畫は、果てしなき平野は幾千の戰死者に滿たされて居る、其の左の端には半かば倒れかゝつて居る十字架が立つて居る、其所に一人の盛裝したる露西亞の正教會の僧侶と脫帽したる將校が立つて居る、將校が手にせる書物は多分聖書であらう。髮を長く伸ばして、黃の天鵞絨の金の緣を取つた法服を纏へる僧侶は、金製の香爐を持つて居る、さうして死者を祝福して居る。是亦戰爭の祀神と同樣に大なる印象を與へるものである。私が此の畫の前に立つて見惚れて居ると、一人の五十歲位の露西亞の將校が見て居る。餘り私が熱心に此の畫の前に立つて居るので、其の將校が私に露西亞語で話かけたが、不幸にして答へることも出來ず、唯だニヤリ〳〵と笑つてお互に好意を交換したのみであつたが、私は其の畫中の露西亞の將校と、現に自分の右隣に居る、生ける本物の將校とを見較べて、一種の感に打たれた。畫中の人物が拔け出して眞物となつたのか、實物がカンヴァスに入つて畫中の人物となつたのでないかなどと空想して獨りでほゝえんだ。

二　ナポレオン――戰爭の畫家としてのヴエレスチヤーギン

千八百八十一年より翌年にかけて、是等の作物を彼は歐洲の各地に於て展覽して、彼の名聲は絕頂に達した。露土戰爭後、日露戰爭に至る迄、二十六年の間ヴェルスチヤーギンは實戰を目擊しなかつた。併し常に旅行をした。パレスタイン、シリヤ等を旅行して、戰爭に關する題目の畫を描いた。彼は實戰より材料を得ることが出來ない爲に、歷史畫を描くの決心をして、ナポレオンが千八百十二年に露西亞に侵入したるを材料として歷史畫を描いた。トルストイは既に露西亞の歷史に於ける劇的の事件を「平和及戰爭」の中に取扱つて居る。ヴェルスチヤーギンは同一題目を、トルストイと等しく獨創なる、寫實的方面より取扱はふとした。最初彼は有ゆる新しき材料を廣く集めて、一切の傳說風聞を排斥して、此の活劇の主人公たるナポレオンの實際の歷史の研究をした。傳說のナポレオンは鼠色の外套に三角型の帽子を被つて居る。併しかゝる服裝では露西亞の冬に堪へられる筈はないから、黑い長い外套と、耳蓋のある頭巾を被つて居るナポレオンを描いた。露西亞に於けるナポレオンと題せる十五枚の畫が千八百九十八年、倫敦のグラフトン畫堂に於て陳列された。後是等の畫はペーターースブルクのアレキアンダー第三世畫堂に陳列されることゝなつた、私が莫斯科を去つてペーターースブルクに數日間滯在して居た時、是非此の畫を見たいと思つて、馬車を驅つて、伯林に向けて出立する日の午後、

此の畫堂に馳付けたが、午後四時かに閉館するので、十分しか時間がなかつた。門番は手眞似で、這入つても駄目だと云つた。私は時計を出して、尚ほ十分あることを口實として、馭者を待たして飛込んだ。他の畫には一切目をくれず、立番をして居る人に、唯だヴェルスチヤーギン、ヴェルスチヤーギンと言つたので、二階に上れと指して呉れた。大急ぎでヴェルスチヤーギンの室に行つた。其所には十五枚のナポレオンを主題とせる畫がある。ナポレオンの肖像は毛の襟のある黒の外套で、胸には肋骨が付いて居る、左に大きな勳章が下つて居る、帽子は顏を少しく出して居るだけで、前面を毛で包んであつて、其の上に襞積のある頭巾のやうなものが出て居る。其の容貌は普通の畫に見るが如き、天下を併呑して居るといふ希望に輝く顏ではなく、どことなく不安を感じ、風聲鶴唳にでも喫驚するやうな樣子が現れて居る。顋髭も生えて居る、而も多少の白髮も混つて居る、鼻下にも白髮混りの髯が生えて居る、莫斯科退却の、流石の豪傑も窮した時の容貌を想像したものであらう。他の一枚は、クレムリンのアッサンプション大寺院を、ナポレオンの軍隊が之を厩舍とし、金碧燦爛たる聖堂の中に、右側には七匹の馬が繋いであり、左側にも數匹の馬が居るが、唯だ尻の方が見えるだけである、入口には兵士が立番をして居る。右の隅の方には梯をかけて、三人の輕裝したる兵士が、黃金の飾物を取外しかけて居る所である。他の一枚は莫斯科郊外と思しき雪の森の中にナポレオンは參謀を從へて立つて居る。其所へ佛蘭西の步哨が三名の露西亞の農民を捕虜として報告に立歸つて來た所である。他の一枚は莫斯科の大火災で、火の子が炎々として飛び來る中を、黑裝束したるナポレオンが兩手を擧げて、顏を覆ふて落延びんとして居る景色である。ナポレオンの護衛の者が二三人居る、何れも黑裝束である、邊りは一面の紅の炎で、實に物凄い對照を爲して居る。他にも十一枚の畫があつたが、一々觀て居ることは出來なかつた。其の中に後ろの方から鈴を鳴らして、時間が迫つたから出て行けといふやうに、催促して來るので、今暫く立止つて名畫を心飽かず觀たいと思つたが、遂に別れを惜んで驅足で畫堂の外に出て、ホツと息を付いた。

二三　旅順口外の犧牲者としての ヴエレスチヤーギン

ナポレオンの戰爭畫は、彼の實物寫生の如き深き印象を與へることは出來なかつた。何となれば是は空想の所産である。されぱヴェルスチヤーギンも自ら安んずることが出來ないので、折々は南露西亞に遊んで、山の景色等を描いた、併しヴェルスチ

ヤーギンの畫家としての大事業は大抵終局に達した如く思はれた。其の時に日露戰爭が開かれた。ヴェルスチヤーギンの血は燃えて來た。彼は此の空前の機會に、更に新しき戰爭畫を試みやうとした。此の大なる目的を以て、彼は旅順口に來た。彼の過去に於ける戰爭畫は、主に陸戰の圖であつた。日露戰爭は彼に海戰の材料を豫約した。彼は危險を冒して千九百四年四月十二日、旅順港外に出でんとしたる露西亞の旗艦ペトロパウロフスキーに乘つた。それが不幸にして我が海軍の敷設水雷に當つて遂に爆沈したのである。彼は六十二歳を一期として、戰爭畫家として如何にも適當なる最後を遂げた。其の時マカロフ提督も彼と運命を同じうした。私共は敵ながらもマカロフ提督に弔意を表したのであるが、殊にヴェルスチヤーギンに對しては深厚の同情を表したのである。ヴェルスチヤーギンの作物の前に立つて、其事を思へば感慨無量である。

私は一昨年の九月下旬支那の旅行をおへて、旅順口へ行つた。さうして旅順の港の周圍の砲臺を一巡して、日露兩國の戰死者に對して弔意を表した。旅順の春は極めて靜かであつた。旅順の港内も港外も油を流せるが如き穩かさである。旅順は旅の順であつて、山東省方面より滿洲に至る者は、旅の順として必ず上陸せねばならぬ所であらう。此の平和なる旅順口に於て曾て悲慘にして慘酷に、日露兩國の軍隊が幾萬の犧牲を拂つて戰つたといふ事は、殆ど想像することは出來なかつた。唯だ天に高く聳ゆる忠魂碑や、所々に破壞されて居る砲臺を見れば、其の當時の戰爭を追懷することが出來た。私は乃木大將の事を想出した。其の心事に同情した。同時に此の靜かなる海に、旗艦ペトロパウロフスキーと共に、犧牲となつたる人道の畫家ヴェルスチヤーギンを追懷せざるを得なかつた。彼れ一度死して後に戰爭畫家は殆ど無い。ヴェルスチアーギンを敵として殺したる、海國日本の畫家の中より、海を背景としたる戰爭畫を描くやうな畫家が是非現れなければならぬ。

ヴェルスチヤーギンの他に、私に深き印象を與へた者はレーピンの畫である、彼の農民生活、或は歷史を取扱ふたる畫の如きは、寫實的にして、同時に鬼氣人を襲ふものがある。フリップマリヤウイン、ヴイグトールワシフツオーウの如きも、或は農民の生活の描寫に、或は宗教的畫題に於て、各々特色を示して居る。私は約二時間をトレチアコーフ畫堂に費やしてホテルに歸つた。私の心は全くヴェルスチヤーギンに占領されて居るの感を懷いた。其の後二三年の後に伊太利を旅行した時、私の心はミケランジェロやラファエルに依つて占領されたことを經驗し

た。併し歐洲の藝術に對してはヴェルスチャーギンは全く私の初戀であつた。露西亞に滯在中、是非ヴェルスチャーギンの畫を買ひたいと思つた。無論繪葉書、畫帖の類を買はふとしたのである。莫斯科に於ては探し漁る暇は無かつた。ペータースブルク滯在中、ネルプチンフロムペクターの一部分を一人で散歩して居た時、大きな本屋があつたので、其の店に行つて、ヴェルスチャーギンと聞いた、丁度賣子の女が獨逸語を話すので、どうやら話が通じて、ヴェルスチャーギンの繪葉書や畫を見せた。ヴェルスチャーギン全集といふ百圓ばかりのがあつた。私はそれを買ふの財力を持つて居らなかつた。其の店の女は貴國の伊藤公が來られた時、之を求められたといふた。私は十圓ばかりのヴェルスチャーギンの畫帖を買つて滿足せざるを得なかつた。併し此畫帖と繪葉書其の他の寫眞は今も尙ほ私の書齋の貴重なる備への一である。折々之を觀ることは言ふべからざる刺戟である。若しヴェルスチャーギンが今日迄永へて居たならば、歐洲大戰を主題として、如何なる傑作を試みた事であつたらう。又露西亞の勞農政府を題目として、如何なる大作が現れた事であつたらうか、想へば彼が日露戰爭の犧牲として、旅順港外に其の屍を沈めた事は寔に遺憾である。

二三　最も熱心なる宗教的國民

世界の基督教國の中で、露西亞の基督教程、旅人に深き印象を與へるものはない。露西亞の基督教はオーソドックチャーチ即ち正教會であつて、東ローマ帝國の希臘教會の傳統と精神を維持するものとして誇つて居る。露西亞人は世界に於ても最も宗教的人種の一である。其理由の一は自然の影響、環境の支配が與つて力ある。露西亞程長い冬の爲に苦められて居る民族は少い。人間は自然と戰ふの勇氣が無くなり、自然を征服する氣慨が無くなり、自然の威壓の前に頭を垂れて屈服するより外ない。即ち運命の支配に委ねるより外に方法はない。是が露西亞人が古き型の基督教に嵌り込み、それが第二の天性となつて、今日に至るも其の態度が變らない理由ではあるまいか。汽車の食堂に畫像があり、停車場の待合室に畫像が掛けてある。莫斯科に行けば目立つて見える建物は悉く寺院である。日本にも南朝四百八十寺といふ言葉があるが、莫斯科では、莫斯科八百八寺と云ひたい程、教會がある。角々に畫像を掛けてある所がある。而して教會で跪く者もあり、畫像の前に跪いて十字を切る者もある、馬車の上から帽子を取つて斜に小さい御堂に對して敬意を表して行く者もある程、宗教的空氣の濃厚なるものであ

る。露西亞の大きな寺に行けば、莫科斯のクレムリンの古き寺院も、ペートログラードの大きな寺院でも同樣であるが、古代の聖者の遺物に對する崇拜が盛である。硝子箱の中の眞黑な古々しい骨が、バプテスマのヨハネの骨であるとか、聖母マリアの骨であるとか、宜い加減な名が付いて居る。其所に參詣する田舍の善男善女は、硝子の上から、跪いて三拜九拜してキッスをする。それを見て居る吾々は堪らなく不愉快を感ずる。併し斯ういふ事をしないと、露西亞人の宗教的性質が滿足されないのであらう。

露西亞の基督教は迷信の多い基督教である、併し希臘教會が幾多の儀式と、幾多の迷信を以て、其の原始的の慘酷なる、更に更に輪に輪をかけたやうな迷信を征服する爲には、已むを得ざる方法であつたらう。原始露西亞の野蠻人を指導する爲には餘りに進歩したる理性のみの優れたる宗教では成功し得なかつたであらう。其儀式の壯麗にして、又幾分、一般人民の迷信的要求に反應し得るやうな宗教でなければ大なる勢力となる事は出來なかつたのではあるまいか。玆に暫く、如何にして基督教が露西亞に這入つたかといふ事に關する面白い物語を述べてみやう。

二四　ウラデミールの新宗教へのあこがれ

紀元十世紀の頃、南方露西亞のキエフにウラデミールといふ英邁なる君主が居た。此政治家は、各地に割據したる群雄を統一する必要上、新宗教を求めなければならぬ事を痛切に感じた。此報を傳へ聞いて各宗各派の宣教師がウラデミールに各自の新宗教を提供する爲にやつて來た。紀元九百八十六年には、先づマホメットの宣教師が訪れた。

『大君は賢明にして、思慮に富み給ふけれども、未だ神の法律を知り給はない。依て吾々の神の法律を信じ、豫言者マホメットを尊敬なさらなければならぬ。』

ウラデミールは尋ねた。

『然らば君達の信仰は何であるか。』

マホメットの宣教師は答えて、

『吾々は神を信ずるのであります。マホメットは吾々に教へて豚肉を食ふな、酒を飲むなと云つた。其の代りマホメットは一人の男子に七十人の妻を與へます。』

ウラデミールは耳打ち傾けて之を聞いて居た。何故ならば彼は中々の女好きであつたから、七十人の女房を持たせられる事は、餘り不愉快な事ではなかつたらしい。併し酒と豚肉を禁ぜ

られることも亦我慢することは出來なかつた。そこで彼は答えた。

『露西亞に於ては酒は喜びの源である、酒無くして吾々は暮せない。』

マホメットの宣教師はコソ〳〵と引下つて行つた。

其後獨逸人の宣教師達が來た。彼等は揚言した。

『吾々は羅馬法王より遣されたる者であります、而して法王は大君に對して、かゝる挨拶を私共に托されたのであります。貴君の國は吾々の國と異らない、併ながら貴君の信仰は吾々の信仰と異る、吾々の信仰は光である、而して吾々は天と地と星と月と、一切の生きとして生ける物を創造し給へる神の前に吾々は跪くのである、けれども貴君の神々は木で造つたる偶像ではありませぬか。』

ウラデミールは尋ねた。

『貴君方の宗教の命令は何でありますか。』

羅馬教會の宣教師は答へた。

『一人前の男子の出來得る範圍内に於て斷食せよ。若し誰でも飲食をするならば、吾々の教師ポーロが述べたるが如く神の御榮の爲にのみなさらなければなりませぬ。』

ウラデミールは大に憤慨して、宣教師に向つて言つた。

『立去れ、吾々の先祖達はこんな馬鹿げた命令に甘んずる人ではなかつた。』

其後猶太人が、マホメット教及羅馬教會の代表者の失敗を耳にして、吾れこそはウラデミールを改宗してやらふと意氣込んでやつて來た。

『私達はマホメット教徒と、基督教徒が、各々其の信仰を傳へる爲に罷出でたといふ噂を聞きました。基督教徒が信仰する所の耶蘇をば吾々は十字架につけたのであります。吾々は唯だ一の神を信じます。アブラハム、イザック及ヤコブの神を信じます。』

ウラデミールは默つて聞いて居た。

『時に貴君の宗教の掟は何でありますか。』

と、尋ねた。猶太教の宣教師は答へた。

『割禮を受けること、豚肉と兎の肉を食はざること、安息日を守ることであります。』

ウラデミールが尋ねた。

『扨、貴君方の本國は何所に在りますか。』

『エルサレムに在ります。』

ウラデミールは尋ねた。

『實際エルサレムに貴君方の本國が在るのですか。』

猶太人の宣教師は窮した。併ながら答へた。

『神は吾々の祖先に對して憤怒の念を起させ給ひました。吾々の罪の爲に世界中の諸國民の間に散らばさしめ給ふたのであります。さうして吾々の國は今は基督教徒に與へられてしまつたのであります。』

ウラデミールは尋ねた。

『貴君方自身が神より振捨てられて居るのに、他の人々に教を傳へるといふのはどういふ事であるか。若し神は、貴君方と貴君方の掟を愛するならば、神は知らざる國々に迄貴君方を散らばらしめることはなかつたでせう。貴君方は其の不幸を吾々にも齎さうといふのですか。』

猶太教の宣教師は默然として立去つた。

二五　希臘教の採用と國民的改宗

其後希臘人はウラデミールに一人の學者を送つた。其學者はウラデミールに告げた。

『此の地は汚れたものであります。有ゆる國民に優つて、神より呪はれて居るものであります。彼等はソドム、ゴモラの民の如きものであります。是等の死は天よりの使の爲に破壞せられて、さうして今は死海の底に埋もれて居ます。同樣なる破壞の日はマホメット教徒の前途に存在してゐます。其時には神が來つて、此の地球を審判して、掟に適はざる事を行ふ所の者は亡ぼす時が參りませう。』

ウラデミールは答へた。

『猶太教の宣教師の言ふ所に依れば、希臘人と獨逸人との信ずる所の神は、彼等が十字架につけた所の人であるといふ事であるが、それは本統でありますか。』

學者が答へた。

『此事は既に豫言者に於て豫言されて居たのであります。主キリストは猶太人の手にかけられて、十字架上に於て殺されたのであります。さうして三日目に死より蘇つて天に上つたのであります。其の後四十六年の間懺悔の時が猶太人に與へられた。猶太人は懺悔しなかつた。羅馬人は彼等を征服して、其の都會を破壞し、地球の表面に猶太人を散布したのであります。猶太人は今、世界を彷徨ふて居ります。』

ウラデミールは尋ねた。

『何の爲に神は地に下つて、かゝる苦しみを受けたのですか。』

學者は答へた。

『若し貴方が御知りになりたいといふ事であるならば、世界の創造の物語より御話し致します。』

ウラヂミールは答へた。

『喜んで承りませう。』

そこで學者は世界の創造より一切の事を物語つた、ウラヂミールは希臘の學者に少からず感服して、九百八十七年、役人及市民の主なる者を集めて、協議會を開いて、希臘教を採用すべきや否やを諮つた。會議の結果、兎に角コンスタンチノープルに十人の使者を派遣して、研究調査を任せることになつた。十人の使者は最初マホメット教を視察し、次に羅馬教を視察し、最後に希臘教會を視察して歸つた。彼等はキエフに歸つた。ウラヂミールは市民及軍人を集めて、使者の報告を聞いた。使者は次の報告をした。

『吾等は最初マホメット教徒の下に行きました。彼等が其の寺院に於て祈るのを見ました。彼等は帯をも締めないで、跪いて祈りました。右を見たり左を見たり、まるで氣狂のやうにして居ました。其殿堂には何等の優美がありませぬ、唯だ悲しみと不潔があるのみであります。又彼等の掟も餘り立派でありませぬ。吾々は獨逸人の教會へ行きました。其教會に於て澤山の儀式を見ました。最後に希臘人の下に行きました。彼等は吾々を神に仕ふる所の場所に案内しました。吾々は天に在つたか、地に在つたか、何所に居つたかといふ事は分りませぬ。吾々は生れてからこんな立派な美しい場所を見たことはありませぬ。吾々は之を口で述べることは出來ませぬ。神が人に會ひ給ふ所はかゝる所でなければならぬ事が分りました。其の禮拜式は、有ゆる國々の禮拜式以上に立優つて居りました。私共は其の儀式の立派さを忘れることは出來ませぬ。一度甘い物を嘗めた者は再び苦がい物は食べたくありませぬ。そこで吾々は現在の露西亞の宗教を以て滿足することは出來ませぬ、どうしても希臘の宗教を採用しなければならぬと思ひます。』

衆議は此報告を承認することに決定した。然るにウラヂミールは中々な政治家である、假に希臘教會を受入れるとしても、服從的に受けるのを好まない。そこで彼はクリミヤ半島の征服を思ひ至つて、ケルソン共和國の首府を襲うて、希臘皇帝に一書を送つた、皇妹アンナ姫と結婚をしたいと申込んだ。皇帝よりの返書が來て、決して異教徒には結婚をさせないといふて來た。ウラヂミールは更に答えて、既に希臘教に改宗の決心をしたから、アンナ姫に附僧を付けて送つて貰ひたい、然らば國民

を擧げて改宗を致しませう。若し此の願ひが聞屆けられないならば、ツァールゴッド、即ち今のコンスタンチノープルを大擧して屠つてしまふと脅した。羅馬帝國には恰かも内亂があつた時であるから、皇帝は已むを得ず此の要求に應じた。ウラデミール自らは、云ふ迄もなく、全軍を擧げて悉くバプテスマを受けさせ、又アンナ姫と結婚した。又一部隊を派遣して希臘皇帝を助けしめた。ケルソンをば其の義兄弟、即ち希臘皇帝の一王子に與へて、自らはキエーフに歸つた。ウラデミールはキエーフに歸るや、偶像征伐を始めた。先づ雷の神のピーリムをば馬の尻ッぽに付けて、之を山から川に押拂ひ、十二人の人を派遣して其の偶像を打たしめ、而も其の偶像が再び川の岸に觸れないやうに中流より流さしめた。偶像は黒海に迄流れて行つてしまつた。彼はキエーフの町に使者を派遣して布れしめた。富める者も貧しき者も、洗禮を受けない者はウラデミールの心に適はない者であるど。仍てウラデミールの全市民は否應なくドニューペール河に於て洗禮を受けた。此の物語を記したるネットルといふ歴史家が述べて言ふのに、地に於ても天に於ても喜びがあつた、何となれば其の日多くの魂が救はれたからである。ウラデミールは各地に命令を發して教會を建てさせた。北方のノブゴロッド地方に於て、多少の反對はあつたが、露西亞にウラデミールの爲に一朝にして改宗したのである。

歐洲各國に於ける基督教の發達の歴史に於て、ウラデミールの如くに使者を派して、比較研究をした結果として基督教を採用した國は他にない。

露西亞の北方バルチック沿岸の諸州に於ては、基督教は獨逸人に依つて無理に强ひられたるが故に、國民性が著しく蹂躙されて居る。例へばエルベ河とニエマン河の間、又バルチック海とボヘミヤの間のスラブの諸族は、基督教が獨逸人に依つて强ゐられたるが爲に、獨立及言語、及民族性をも失つて居る。然るにウラデミールは本來不世出の政治家で、基督教を採用する以前に、種々なる利害を異にせる種族を物質的の連絡に依つて統一して居た。然る後、彼は大英斷を以て希臘教を採用したるが故に、諸族の統一上大なる便利を得た。何となれば信仰の紐程强いものは無いからである。而して如何なる國に於ても露亞西程信仰が强き根ざしを有して居ない。ウラデミールは紀元千十五年に死んだ。

二六　露西亞國教の弱點と暗黑面

要するに露西亞の基督教は天降り的の基督教である。露西亞のみではない、英吉利に於ても、佛蘭西に於ても、多くの場合

に於て基督教の傳播は天降り的であつた。君主が信じて、それが一般の人民に普及するに至つたのである。併ながらウラデミールの場合には是が最も大仕掛に行はれた。世界の歴史に於ても類の稀なる事である。同時に露西亞に幾多の迷信や民族性を其儘に今日迄保存して來て居る。彼等は基督教を國教にして居る。其の基督教は中世紀的の基督教で、宗教改革とは沒交渉の基督教である、現在の實生活と殆ど關係なき基督教である。近頃、チェックスロウワキアの大統領、マサリック博士の「露西亞の精神」を讀んで居る中に、其序文に面白い話がある。

この世紀の初め、マサリック博士は莫斯科に來つて、トルストイの紹介に依つて、莫斯科の郊外の森林の中に在る名高い修道院を見た。此修道院は今も尙ほ十四世紀の基督教を代表して居る。全く現代離れをしたる宗教的制度である。其の修道院に居る者は悉く現代生活との關係を斷たれて居る、彼等は新聞を見ない、彼等は歐洲の現在を理解しないのみならず、露西亞の現狀も、莫斯科の現情をも知らない。院長の命令の下に二十四五歲の青年僧侶がマサリック博士を案內した。到る所に畫像が在る、聖者の遺物が在る、其等の物に對する每に案內者の青年僧侶は、或は跪いてキッスをし、或は十字を描いて禮拜したり、實に丁寧を極めて居る。新教徒であるマサリック博士は是等の物に對して何等敬意を拂はれない。青年僧侶は驚きの目を上げて、何故に此の不信仰なる外來者の上に神は罰を立所に加へ給はないかと、怪んで居るが如くに思はれた。有ゆる場所は悉く案內された。それでも青年僧侶は立去らうとしない、マサリック博士に色々な事を聞いた。莫斯科の事を聞く、露西亞の事を聞く、歐羅巴の事を聞く、乾いたる土に雨が吸込まれるやうに、新聞も、新しい書物も讀まない青年僧侶はマサリック博士の物語を非常なる興味を以て聞いた。やがてマサリック博士は修道院の入口に送出された。それでも青年僧侶は立去らうとしない。長い林の間の道を連立つて、森の入口迄來ても尙ほ青年僧侶は立去らない。そこでマサリック博士は、何の爲に青年僧侶が立去らないのであるかを考へた。赤面しながら思付いた。是は多分心付を貰ひたい爲に立去らないのであらうと、一枚の紙幣を出した、所が其の中世的の僧侶は恭しく手を延べて頂戴して、また修道院の中に歸つた。

露西亞の教會にはかゝる矛盾がある、一方には全く此の世離れしたる中世的の生活があるけれども、同時に之に伴ふ所の乞食根性が殘つて居る。例へば新教國に於て、羅馬教會の外に新教會が成立した。殊に英國に於ては新教の國教會の外に、より自由なる所の民立教會が發達したのである、又神學的民立教

會の壓迫と、不自由に反抗して、自由派、進歩派の教會が設立せられるやうになつた。有ゆる種類の宗教的色合と色彩とがある。そこで頑固派の人も自由派の人も、保守派の人も、何所かの教會若くは團體に關係を付けて行くことが出來る。然るに露西亞に於てはそれは不可能である、いちかばちか、成功か、然らざれば不信者である、其間に折衷、調和はない。さればトルストイの如き知識階級に屬する人は、露西亞教會から離れて、基督の言葉を其の儘實行しなければならぬ事を主張するやうになつたり、ドストエーフスキーの如く愛の在る所に宗教がある、懺悔の在る所に宗教がある、罪を悔いる所に宗教があるといふやうな、教會と神學を離れたる實生活の中に、新しき基督教を生かさうとする努力が現れて居る。されば現在の露西亞に於ては知識階級を滿足せしむる所の宗教的思想も、運動もない、知識階級の宗教は、文學藝術の中に主に現れるやうになつたのは已むを得ない。しかし國教以外に各種の宗教團體の存在することはいふ迄もない。

二七　カザン大寺院の一挿話

此事に就て想出さるゝ事は、ペトログラードに於て、或る日曜の朝、ネプスキー・プロスペクタスといふ大通に在るカザン大寺院に行つた事である。その日は聖母マリアの誕生の宵祭であつた。一體キリストが何時生れたかといふ事さへ、新約書の何れの條にも書いてない。キリストが十二月二十五日に生れたといふことは、羅馬教會が政略上取り極めた事で、キリストの誕生日は不明である。況んや其の母マリアの誕生日に至つては誰も知る者はない。然るに九月下旬であつたが、其の日曜日の翌日は聖母マリアの誕生祭であるといふ。其の日のカザン大寺院の群衆は非常なものである、數千人の人が參詣して居る。色々莊重なる儀式があり、歌がある、蠟燭が點されて居る。會衆は或は起立し、或は跪いて敬虔な態度を現して居る。我輩も何も分らぬけれども、他の人々と同樣に、或は立ち、或は跪いて居た。何故ならば何千人といふ人が跪くのに、自分一人眞中に立つて居れば、頗る可笑しなものとなる事を自覺したからである。儀式は十時から午後一時頃迄續いてから、僧侶が祈禱を始めた時に、後の方から紙片に書いた物を、肩を叩いて送る者がある、見て居ると又前の人も紙片に書いた物を、肩を叩いて送る、かくして祈りや願ひを書き記した紙が正面の祭壇に居る金碧燦爛たる法服を纏ふて居る僧侶の手許に達する。僧侶は是等の祈りを代表的に祈るのである。

午後一時頃儀式は一先づ濟んだ。僧は教會に殘つて居る男女

が數百名あつた、何をするかと思つて、私も殘つて居た。正面の祭壇より左の方へ、細い狹い階段を登ると、右側の壁に、聖母マリアの硝子箱に嵌めてある畫像が掲げてある。信者は其所へ行つてキッスをする。私は好奇心を起して、自分も其所へ行つて見やうといふ氣になつた、それから他の人々の後に隨いて段々祭壇に近付いて行つた。祭壇の上には金碧燦爛たる法服を着た髯の生えて居る僧侶が立つて居て、金の十字架を持つて居る。信者は銘々金の十字架にキッスをする。それから左の方へ行つて階段を登つて行く、併し私は其の金の十字架にキッスすることは眞平御免であるから、成たけ接近しないで、左の隅の方から急いで通拔けやうとした所が、其の僧侶の方が我輩に迫つて來て、私の右の頰に大きな金の十字架を付けた。仕方がないから爲すが儘に任せて置いた。それから大勢の人の後に隨いて階段を登つて行くと、段の終つた所に二三人の人が立つだけの床があつて、其の床の壁の上に三尺四方位の聖母マリアの硝子箱入の畫像がある、それを熱心な信者達――主に婦人であるが、キッスをする。五人位十字を切つてキッスした時に、大きな男が立番をして居て大きな布切で硝子の上を拭く、後から行つて又キッスをする、我輩は之を見てガッカリした。私は何もキッスをする積りではない、見さへすれば宜いのだから、其の儘降りて來やうとしたが、後から人が來るし、番人も立つて居るので、唯だ其所を見て通拔けるのも甚だ工合が悪い爲に、硝子板から一寸位の距離の所迄顏を持つて行つて、後の方から見れば、キッスでもしたかのやうに見せかけて、素知らぬ振して通拔けた。

露西亞の宗教は斯の如く迷信が盛である。合理的でない。神秘的の分子、宿命的の分子が非常な勢力を振つて居るやうに思はれる。併ながらカザンの大寺院の如き寺は、羅馬のセントペーターの大寺院、或はミランの大寺院、或はケルンの大寺院等を除けば、世界に類の少い大伽藍であると思ふ、其の大寺院の前には何十人といふ乞食不具が集つて、お詣りの人々に憐れみを乞ふて居る光景は實に悲慘なるものである。一體露西亞では乞食に物を遣る事が、一の宗教的義務になつて居る、それで乞食は食ふに困らない國だといふ事である。世界に於て乞食の多い國は露西亞、支那、伊太利で、支那が第一、露西亞が第二であらう。併し勞農政府が成立してから、乞食の數は減じたか、或は殆どなくなつたことではあるまいか。

二八　東西文化の連鎖としての露西亞

東北歐羅巴と北部亞細亞の間に大平原が展開して居る、それ

を形式的に境をして居るのはウラル山脈である、併しウラルは障害となるべき程の高い山脈ではない、殊にカスピアン海に近き方面に於ては、幾らも騎馬で乗越せるやうな低い所がある。故に昔から歐亞二大陸に跨がるこの大平原には人種的の競爭、民族的の移動が激しく行はれた。露西亞を西部歐羅巴と較ぶれば、著しく亞細亞的なるに氣が付く。其風俗習慣等に亞細亞的氣分が濃厚に存在して居る。曾てトルストイが僧院に出家せんとして、やがて途中停車場の驛長社宅で病死した時、倫敦タイムスがトルストイは半は歐羅巴的で、半は亞細亞的である、彼の前半生は歐羅巴的であり、後の半生涯は亞細亞的であつた、殊に老軀を提げて僧院に出家したるが如きは、亞細亞的、東洋的本能が迸り出でたのであると書いた事を想ひ出すのである。

何故に露西亞は斯の如く亞細亞的氣分を有して居るかと云へば十三世紀より十六世紀の初めにかけて、彼是れ三世紀に亘りて蒙古人の羈絆の下に在つたからである。成吉思汗の孫の拔都汗は裏海方面より東南露西亞の沃野に遠征し、最初に南方のキエフを占領し、漸次侵略の手を擴げて莫斯科をも征した。けれども幸にして北方には、殆ど人跡を入れない大森林があつた爲め、蒙古人の希望は之を貫くことが出來なかつたので、北方のノブゴロッド地方は、その專制政治を免れ得たのである。當時露西亞は中央集權は行はれず、群雄割據にして、互に相助け合ふこともなく、各自の城壘を高くし、相提携して敵を防ぐの準備も出來て居らなかつた。こゝへ百戰百鬪の結果、大に集團的戰術を練上げたる蒙古の騎兵が襲來したので、露軍は一溜りもなく破られたのである。

蒙古軍即ち韃靼軍の露西亞に對して提出したる條件は、『有ゆる物の十に就いてその一を與へよ。十人中の一王子を與へよ。人民十人の中一人を與へよ。黑馬、白馬、雜色の馬、鳶色の馬の十頭の中一頭を與へよ。有ゆる種類の野獸の十頭の中一頭を與へよ。一切の財產と一切の産物の十の中一を與へよ。』であつた。

韃靼人はかゝる條件を以て露西亞の豪族を壓倒した、露西亞の豪族は已むを得ず之を容認した。拔都汗は紀元十三世紀の半頃ヴオルガ下流の東岸の薩萊(サライ)に蒙古人特有の野營的都會を建設した。金張汗の國がこれである。二百數十年間露西亞は恥を忍んで蒙古に仕へた。此の間蒙古人は露西亞人と强制的に結婚した。されば蒙古人の中に露西亞人の血が流れ、露西亞人の中に蒙古人の血が流れるやうになつた。幾多の露西亞の貴族豪族は蒙古の國王若くは重臣の娘を妻として迎へた。故に露西亞人の血液の中には蒙古人の血液が可なり濃厚に存在して居る譯であ

る。或る歴史家の研究に依れば韃靼起源の露西亞人の姓は總計百三十五あるといふ事である。ペートル大帝の時に滿州に來つて清の康熙大帝の代表者とネルチンスク條約を締結したるテオドール・ゴロウインは矢張韃靼系統の露西亞人ださうである。文豪ツルゲネーフも此の種類に屬するといふ事である。ペートル大帝の母方も此の系統から出て居るといふ事である。金黨汗は内訌のために分裂し、これに乘じて莫斯科のイヴアン三世を盟主と仰ぐ攻擊軍のために滅ぼされた。紀元一五〇五年の事であつた。佛蘭西のヴオルテールは露西亞人、皮一重剝げば韃靼人であると稱した程、露西亞人には蒙古人の血液が豐かに存在して居る。露西亞人の長い上着は餘程亞細亞的の物である。ペートル大帝の時迄は貴族は長袖の禮服を纏うて居たが、彼が西歐の風を輸入するに及んで、強制的に之を嚴禁した。尙貴族が長い惰性から、彼の命を奉ぜなかつたので、ペートルは宮城の番兵をして、この禁を破りたる貴族の長袖を無理に切落さしめたといふ事である。韃靼人が露西亞に這入つた前には、露西亞人は跪いて敬意を表する事を知らなかつたらしい。然るに其の後皇帝の前に於て跪拜の禮が行はるゝやうになつたのは、韃靼の勢力の一表現に違ひない。刑罰が慘忍酷薄である事、專制政治が長く露西亞に於て勢力を得て居た事、かゝる事は何れも露

西亞が蒙古より與へられたる感化である。故に露西亞は地理的に歐亞に跨がる一大民族であるが、人種的にも亞細亞と歐羅巴を結付くゝ連鎖となつて居る。此意味に於て露西亞は甚だ興味ある位置を占めて居る。人種としても、文化としても、兩大陸を調和する使命を有して居るやうに思はれる。露西亞が日本の對岸に居る事は、單に歐羅巴人が居るのみではなく、幾分、亞細亞化したる歐羅巴、或は歐羅巴化したる亞細亞が控えて居るのであることを忘れてはならない。此意味に於て露西亞は、獨逸よりも、佛蘭西よりも、英吉利よりも、日本に接近して居る、又日本人が努力すれば、或る程度迄は其の民族性及其の特色を理解し得るのである。但露西亞は飽迄大陸的民族たるが故に、支那の如き大陸人とは餘程共通の點が多い、其の間の理解を容易に成立すべく思はれる。例へば支那にしても露西亞にしても、昔から無政府的の傾向は著しい、何となれば莫大なる土地に交通機關が割合に貧弱であるから、中央集權が徹底的に行はれて居ない、故に警察力が手薄である。行政機關が不完全である事より、政治的にも思想的にも、無政府的氣分は露西亞に於ては昔から存在して居る、支那に於ても露西亞程ではなかつたとしても、同樣なる氣分が現れて來て居る。一方に於ては露西亞も支那も大まかなる民族であるが、同時に極端より極端に

走る所の性質を有するが故に、政治上の解決でも、思想上の解決でも、徹底的に之を貫く意氣込を有して居る。支那に於て民政が成立し、露西亞に於て過激派の勞農政府が成功したことは矢張共通の點が兩民族の間に在る爲めではあるまいか。之に反して日本の如き島國は支那を理解することが或る點に於ては困難であると共に、露西亞を理解することも之と讓らず困難な點がある、いつも日本の島國性を以て露西亞の大陸性を律せんとする所に行違ひが生ずるらしい。併しそれにも拘はらず露西亞はどこ迄も亞細亞化したる歐羅巴なるが故に、吾人が獨逸人、若くは佛蘭西人、或は墺地利人、または伊太利人を理解するよりは、容易に露西亞人を理解することが出來ると思ふ。最近露西亞の文學が日本に於て特別なる興味を以て研究せられて居ることには、種々なる原因があるかも知れないが、兩民族間に流るゝ、共通の亞細亞的、東洋的分子が、互に相引付けつゝあるのではあるまいかとも考へられる。

二九　見た露西亞から見ぬ露西亞へ

私はあまりに永く見た露西亞のことを書いた。こう永くならふと知らずに書き過ごした。何といつてもあの大國と大民族のことであるから、何處かの一端をあげて、その内部を覗き込めば、思はず知らず長談義をするやうになる。しかし露西亞は一九一七年十一月の大革命以來全く變つて了つた。露西亞の過去を語るはあまりにあつけない昔噺しをするやうなものである。しかし何か一つ結びをつけて、見ぬ露西亞へ移つてゆきたい。

モスコーの驚異は何といつてもクレムリンの宮である。その寺院である。鐘樓である。その寶物である。私達の案内者が英語を可なりに話す老人で、伊藤博文公をも案内したとてその名刺を所持してゐた。私はクレムリンの大石壁の際で、この老人に聞いてみた。モスコーには虛無主義者がゐますかと。老人、物知り顔に四方を見まはしながら、ゐるとも、ゐるとも、この邊を通る連中は皆ニヒリストだよと答へたので、隨分人を喰つた話だと思つたが、今になつてみると老人は一種の豫言者であつたやうにも考へられる。雀ケ岡に於ては誰もするやうにナポレオンの侵入を追想した。王立オペラではアイダを見た。モスコーのホテルを出立して、停車場に向ふ途中、一人の若者が私達の馬車について來て、金をくれとせがんだことを記憶する。直線のやうなペータースブルグまでの鐵道、ネプスキ大路の壯觀、夜のカフエーの妖艶、二葉亭四迷をその寓居に訪れて、熱いレモン茶を啜りながら、露京の社會觀をきかされたこと、數々の美術館や寺院の巡禮などを思ひ出す。冬宮の宏大と豪奢に

ロマノーフ家の全盛をうかゞひ知りえた感がした、

西伯利亜の廣漠たる平原を横切つて、大自然の懐に起臥すること約二週間目の後にはじめて見たモスコーとペータースブルグは何といつても、そのビザンチン式大伽籃と大まかながらも一種の歐洲文化とは、はじめて歐洲の地を踏んだ私に深い印象を與へた。私に東西文化の比較研究の興味を感ぜしめたのはモスコーの初印象であつた。

この見た露西亜と見ぬ露西亜との變化はあまりに急激で、一向見當がつかぬ。この大變化、大破綻が如何にして發生したかを検討するは餘りに平凡であるか、記事の順序として一瞥を與へる。

日露戰爭は露西亜の國民をして自國の秕政を自覺せしめた。政府は大讓歩をなして、立憲政治を行ふこととなつた。一九〇六年の國會（ヅーマ）は權限の擴張と内閣責任論を主張して解散せられた。一九〇六年の國會は土地問題のために解散された。一九〇七年の國會は五年間解散せられなかつたが、その政策手ぬるくして、國民の多數をして失望せしめた。政府は一方には波斯問題で英國と諒解し、また日露協商も成立せしめた。要するに露西亜政府は依然として反動政策をとつた。即ちフィランド及びポーランドに對しては威壓政策となり、小露西亜に對しても同様の態度をとつた。ことに猶太人に對する壓迫は非常なるものであつた。殊にこの反動政策は一九一三――一四に於て最高潮に達した。大戰爭の突發せんとする頃は、大仕掛の勞働爭議が頻々として行はれた。街頭の衝突や騷擾は珍しくなかつた。國會は保守黨が勢力を有したに拘らず、常に政府と衝突した。大戰爭は大都會の經濟事情に大なる影響を及ぼし、また國民の生活は漸く安定を缺くやうになつた。これまで煙を出してゐた革命の噂さは赤き炎を發しかねまじき模様となつた。同時に政府内にスツンメルや怪僧ラスプーチンの如き獅子身中の蟲があつたので、終に一九一七年三月の亂となつた。形勢は急轉直下した。三月十四日には假政府組織せられ、十五日にはニコラス二世の退位、ついでその捕縛となつた。四月十六日にはレニンが歸國した。七月二十三日にはケーレンスキー内閣が組織せられた。九月十二日ケレンスキーは元帥となつた。この自由派と社會黨の右派との提携は多數の勞働者や一部の農民を滿足せしむること能はず、十一月七日ボルシエヴィストの革命がペトログラードに勃發した。十二月にはブレスト・リトヴォスクの條約が開始せられた。

一九一八年三月十六日勞農政府と中歐諸國との條約が成立した。四月五日我が日本軍は浦鹽に上陸した。五月末にチェッコ・

スラファック軍と過激派とが西比利亞に於て衝突した。七月十六日、廢帝とその一族はエカテリンブルグに於て慘殺せられた。八月、英米政府はチェッコ・スラヴァクス軍を應援することゝなつた。十月、南部露西亞の反過激派軍の司令官アレキシーフ將軍死して、デニキン將軍が代つた。同月末、オムスクに反過激派軍が新に組織せられて、コルチヤック將軍之を統率した。

一九一九年。三月二日、第三回インターナショナルがモスコーで開かられた。六月、コルチヤック軍漸く振はず。十一月、一時勢力を占めたデニキン軍も振はない。十一月十五日、赤軍オモスクを占領す。

一九二〇年。二月、コルチヤック暗殺せらる。四月南方義勇軍のデニキン辭職してラングル代る。五月ポーランド軍キューフを占領す。六月、過激軍ポーランド軍をキエーフより擊退す。四月より六月にかけて英露通商促進の議がある。十月ポーランドと勞農政府との間の平和及び休戰の豫備條約成る。

私は大正九年（一九二〇年）八月末横濱を立ちて太平洋を横切つた。米國に滯在すること約三月にして、太西洋に浮んだ。私は世界最大の汽船インペラートルの二等船客となつた。百四十幾人の二等客は二十數國を代表した。この食堂は宛然たる國際會議の觀があつた。船客中には戰後の露西亞へ親類や家族を訪れんとする露國生れの猶太人が多かつた。彼等から私は興味を以て革命後の露西亞の物語りを聞いた。固より雲を掴むやうな話である。英國には大正十年の紀元節の夜まで滯在した。露西亞の事情は矢張り解らない。たゞレーン及びルーボフ、ランスベリミー、スノードン夫人、ランソーム、マローン、ラッセル、ウェルズ等の旅行記によつて、見ぬ露西亞の實際を想像するのみであつた。

二月中旬、一寸ベルリンの客となつたが、露西亞の事情はよく解らない。Fホテルに落ち合つた我が一武官は責めてワルソーまで這入つてみたいと語つてゐた。巴里に於ても滯在が極めて短かく、露西亞に關する數冊の參考書を集めたに過ぎない。ゼネヴァに露西亞人の滯在者が多いと聞いたが、いづれも反過激派の人々らしかつたし、殊に一晩泊りの急ぎの旅人では是等の人々よりさへ、新しい事實を聞きとる時がなかつたのである。されば見ぬ露西亞に關する記事は主として書籍と雜誌との材料に依つたものである。加ふるに見ぬ露西亞に就いて比較的に多くのページを費した故に、見た露西亞に關する材料を十分に整理し、按配する時もなく、又ページもなくなつたことを遺憾とする。

三〇　大革命成功の原因とレニンの新經濟政策

鳴り渡れ、汝、巨大なるモスコーの鐘よ
諸國民に大なる新事件を告げよ、
舊物は死してゆく――つき鳴らせその弔鐘を、
鳴り渡れ、汝、巨大なるクレムリンの鐘よ。

鳴り渡れ、汝、遠く響きゆく鐘よ、
檻房から逃れいでたる囚徒のために鳴れ、
忠實にして斃れたる人々のために鳴れ、
鳴りわたれ、汝、巨大なるモスコーの鐘よ。

鳴り渡れ、汝、殷々としてどよめく鐘よ、
邪惡は強く根ざしは深し、
地獄の砦は難攻不落、
その沒落を鳴らせ、汝、雷のごとき鐘よ。

大波のやうなうねりをなして鳴り渡れ、
鳴り渡れ、汝、巨大なるクレムリンの鐘よ、
人々は餘りに永く暗黑のなかに住む、
夜明を鳴り渡れ、オー、モスコーの鐘よ。

ウイリアム・ワトソン

十九世紀の初めから屢々起つた露西亞の革命は色々な誘因を有してゐる。原始基督教の精神と生活とがその一つ。宗教革命の大決心と大斷行とが其の一つ。佛蘭西革命の手本がその一つ。ルーソーの議論がその一つ。マルクスの階級鬪爭がその一つ。トルストイの財産否定論がその一つ。しかし最近の大革命の原動力はいふ迄もなくマルクスである。マルクスやプルードンは社會進歩は遲々たる、冷靜なる、秩序あり、且つ連續的進化に基くのみならず、又急激なる變化に基くこと、卽ち革命の必要を主張した。革命は要するに進化の新しき速力、もしくは突然として方向を變へたものに過ぎぬといふのである。

さもあらばあれ、五年に亙る空前の大戰爭が支配階級、宮廷生活及び政府當局の無能と腐敗とを暴露し、又天下を舉げて衣食住の問題に窮迫せしめなかつたならば、勞働政府の革命は、よしんば發生したとしても、發展しなかつたであらう。

又露西亞は莫大なる土地を有し、自給自足を徹底的に行ふことが得たから、革命が成功したのである。是れが小國に發生し

たとせよ、しかも外國と戰端を交へ、その干渉を受けながらの革命騷ぎである。内敵を征服する前に外敵のために威壓されて了つたかも知れない。然るに流石の金張汗も結局持てあました大國である。大ナポレオンをして退却を餘儀なくせしめた大國である。勞農軍は何處までも退却する。聯合軍は或る地點まで進出するが、物資が續かない、寒冷は烈しい。退却し出すと、赤衛軍がその後を占領するといつたやうな調子で、勞農軍は負けて勝つたのである。

しかし七年の戰爭と三年の封鎖とにとにかく耐え得たのは何であるか。十年の非常戰時狀態は物資の缺乏を來した。薪炭は足らない。鐵道は破損し、機關車も壞れたのが多い。この間の露西亞國民の辛酸は言語に絕した。

一九二〇年九月、露京を見舞ひたるウェルズの言によれば、ペトログラードの荒廢は驚くべきもので、店を開いてゐるのが六軒位しかなかつた。大きな菊の一束が五千ルーブル（當時の英貨六志八片）もした。一九二九年百二十萬もあつた人口が七十萬に減つてゐる。死亡率は戰爭前千人について二十二にして、歐洲の都市に於ては高率であつたが、八十一といふ驚くべき率を示した。戰爭前千人について三十であつた出産率は十五に減つてゐた。

衣服の材料は餘程乏しかつた。ウェルズが不意打を喰はした學校の教師は綠色のセルの胴衣の上に燕尾服をきてゐた。有名なる學者にしてカラーをつけずに頸巻をしてゐたのが多かつた。マキシム・ゴルキーも着のみ着の儘であつた。ペトログラードの文士の集合で、アンヒテアローフはウェルズに來會者一同の外套を示したが、その裏はボロをあてたりした見じめなものであつた。

その前年即ち一九一九年二月、アーサー・ランサムといふ英國の社會主義者が二年振りにペトログラードを訪れた。ネブスキの大通りの人々は新調の衣服を着てゐるは殆どなかつた。よく保存してあつた毛皮を纏うた若い婦人が藁靴を穿いて、麻布でその上を包んであるも見受けられた。

マッチの材料たる木材とパラフインとが缺乏してゐた。そこで苦しまぎれに、廢紙を木に代用し、樹脂をハラフインに代用した輕便マッチを發明したゝのがあつた。チチリエンの新しい服が目立つので、ランソムは多分、彼がベルリンに派遣せらたた時に買つて來たのであらふとランサムが判斷してゐる。役所にも、ホテルでも火の氣がない。薪炭の缺亡のためである。

勞働政府はこの窮乏の間に大奮闘をした。モスコーで一人の兒童でも飢死せしめてはならぬとの意氣込で、十五萬乃至十八

萬の兒童は日々學校に出て食物を與へられてゐた。一萬足以上の毛皮の靴が之を要する兒童に供給せられた。圖書館も增加した。しかし生理的には勞働者は一九一二年よりも遙かに衰れむべき狀態にあつた。精神的には意氣昂揚たるものがある。

勞農政府はその主義を實行するために多くの悲喜劇が演ぜられたことはいふ迄もない。ランサムに物語つた一人の青年の實歷談は面白い材料である。

『私の伯父は戰爭中、株主であつた一鞣皮工場を買ひ受けた。一九一七年三月から十月までの最初の革命の時には、伯父は勞働者と戰ひ、工場主側の委員會(ソヴィエト)を組織した。いふ迄もなくその目的は勞働者の委員會の努力を壓迫するためであつた。しかし十月の第二革命のために駄目だとあきらめた。伯父は有產者として多額の寄附金をとられた。伯父は新聞を注意してゐたが、銀行迄國有となつては反抗するも甲斐なしとあきらめた。但し何とかして工場丈は保存したい考であつた。

伯父は勞働者を召集して、工場を共同經營にすることゝし、各人をして運用資金に一千ルーブル宛を提供せしめた。勞働者はそれ丈の金がないので、追つて返却するといふ約束で、伯父が之を立て替へた。

これは無論不法行爲である。しかし中央政府から遠い田舍の事であるから誤魔かしたのである。伯父は勿論返金を豫期しなかつたが、勞働者をして工場に興味を持たしめ、從つて事業の繁榮のためになると考へてやつたのである。

勞働者は管理委員を選擧した。伯父は會長に、私は副會長に選ばれて、外に委員は三人の勞働者であつた。伯父の給料は一月千五百ルーブル、私は一千ルーブルである。會計も一千ルーブルをえた。さて勞働者は伯父を依然として旦那と呼んだ。伯父はこれはいけないといふと勞働者は「この工場は私達のですが、貴下は矢張旦那だ」といつた。

伯父は家屋までも工場に寄附して、表向き間借りをしてゐた。そこで地方委員會から財產稅を徵發に來た時、伯父は當然之を免かれえたのである。しかるに地方委員會は伯父に六萬ルーブルの稅金を課する豫定であつた。伯父はその不合理を說いた、私も之を應援した。すると收稅官は君には二萬ルーブルを課してゐると。

私は二千ルーブルなら拂ふと答へた。收稅吏はよろしいといふからそれ丈の金を差し出したが、まだ足らぬ。いやといふなら監獄にゆけと威壓した。そして役員はいふ。

「君達のやうた人間を取り扱ふにはこういふ風にやるより外に方法はない。勞農政府はこれ丈の金が必要である。若し私達は之を集めなければ逆まに入牢を命ぜられる。私達は君等に同情して、自ら入牢することは出來ないじやないか。

伯父と私は民軍本部につれてゆかれた。地方の金持連中と共に一室に檻禁せられた。窓の外には妻女達が群をなして騷いだ。

翌日鞣皮工場の勞働者が民軍本部に出頭して伯父は最早有產階級の人でないことを說明し、稅金の半額三萬ルーブルは工場基金から支拂ふから、放免されたいと願つた。伯父は三萬ルーブル丈を提供した。かくして伯父は自由の身となつた。私も亦放免せられた、工場に私はなくてならぬものであることが說明されたからである。仕事は普通にやつてゐる。だが勞働者は矢張り伯父を旦那と呼んでゐるので、閉口してゐる。勞働者の能率はよくもわるくもたらない。利益は積立てゝ資本に加へ、又擴張工事に當てる積りである。

また富豪の邸宅は沒收せられ、家財道具は國有財產となつた。しかしそれが往々にして勞農委員會の家庭になど現れて來ることがある。」

勞農政府はかゝる無理をしても、繼續して來たことは何によるか。一つは露國は歐洲の穀倉であつて、うまくその生產を分配すれば、贅澤は出來ぬ迄も、生存丈は出來るからである。若しこれが英國であつたとせよ、英國は世界の工場である。假りに革命が發生して、六週間も騷動が續けば、海外から食料の供給が斷絕する。すると反動が起つて革命政府が倒れるにきまつてゐる。しかるに、露西亞は大陸である。自給自足の國である。古河に水が絕えない。七年の戰爭と三年の封鎖にも、一昨年の飢饉にさへも、どうやら凌ぎえたのである。支那の革命の成功また國內渾沌として、猶存在しうる理由は大陸だからである。日本や英國のやうな島國では支那や露西亞の眞似は中々出來るものでない。

反勞農軍の失敗も亦當然勞農政府をして今日まで繼續せしめてゐる原因の一つであらふ。デニキンもラングルも、コルチャクも、セミヨノーフも尋常一樣の反動的軍人で、何等の經綸も主義もない。假りに彼等が勝利を奏したとして、露西亞を安定の位置に立たしむることは六ケしい。或は却つて形勢を一層惡

化するかも知れぬ。これが露西亞の大多數の國民は矢張勞農政府にいや應なく服從してゐる理由であるし、又反動軍の失敗に歸した原因であらふ。

初め勞農政府の旗印は極めて鮮明であつた。一九一八年、モスコーに於けるブハリンがなした「×××××の政綱」の中に左の一節があつた、

『×××の綱領は一國のプロレタリアートの解放のみのそれではない。それは萬國のプロレタリアートの綱領である。何となればそは×××××の綱領であるからである。××せる反抗によりて×××××××を××するは勞働階級の國際的××××への道程である。』

實にえらい宣言である。しかしいざ實行となれば理想通りにはゆかぬと見える。

『大革命後最初の八ケ月は外國貿易、銀行、鐵道、水運事業とのみが國有となつた。他の多くの産業は勞働者と所有者との共同管理に屬した。國内の私人の通商は維持せられた。

内亂の突發するや、勞農政府は武裝せざるをえなかつた、最初の二年間に十八軍が組織せられた。内亂の終期に於ては勞農政府は五百萬以上の兵力を擁した。

この軍隊に軍需品を供給するは大事業であつた。餘分の食料は悉く國民より沒取し、或部分は買收した。又軍需品に關係ある工場は悉く國有とした。これは大工業の四分の三を占めてゐる。

内亂は政府の勝利に歸した。今や靜かに國内の幸福と安寧とを回復せざるべからざる時となつた。今やレニンは新經濟政策を提唱せざるをえなかつた。即ち一九二一年三月、露西亞共産黨第十回大會に於ける彼の演説である。要するに露西亞以外の歐洲各國に資本主義が行はれてゐる間、露西亞のみ社會主義を實現することが出來ぬ。今や第二線に退却して機會を待たねばならぬ。要するに勞農政府は資本主義の部分的回復を承認するに至つた。露西亞の經濟組織は資本主義より社會主義への過渡期のものとなつて現れた。外資輸入は最早恐るゝに足らぬのみか、むしろ露西亞の歡迎する所である、たゞ私有財産制度が回復せられないとすれば、外國の資本は露西亞のためにも、世界のためにもなるに相違ない、

これは勞農政府の外務省新聞及び情報局長マイスキの意見である。彼の態度がかくの如く穩和となつたのであるから、日本の立場としても左程に敬遠したり、恐れたりする必要がないやうに思ふ。

三一　勞農政府の困難の二三

勞農政府の困難は多い。內部の種々の困難はさて置いて外部に對する紛糾は世界の重要なる諸政府が通商關係を開始せぬ事である。この方面の事實を正當に理解する材料として米國勞働者の態度を研究することは無意味でない。この爲に米國勞働總同盟會長サミュル・ゴンパース君の意見を叩くことが必要である。

彼は米國勞働者がソヴィット政府に對するはツァールの政府に對すると同じで、しかも同一理由に基くと聲明した。しかもその反感は獨逸の軍國主義に對すると同様であると附言してゐる。

『米國の勞働者は露西亞の獨裁政治に對して、どうしても妥協が出來ぬ。米國の勞働者は露西亞のボルシェヴイキに對して敵たる位置にあるを聲明するのみならず、歐洲各國の一般政策はこの暴惡なる專制主義に對して同様の態度を持してゐる。』

ゴンパース氏は露西亞國民に對しては大に同情あることを說明して次の如く述べてゐる。

『露西亞國民は米國勞働者のみならず、米國民の友情を有する。米國勞働者に關していへば、露西亞國民がその欲する、如何なる種類の政府を對立すること、又その政府を通じて彼等の承認する如何なる哲學をも表現することは米國民の自由である。米國勞働者の主張するは自ら支配せんと欲する國民の自由に表明せられたる協贊なくして存在する如何なる政府をも承認せず、又之と取引をせぬといふ事である。これは最も重要なる論點である。

ボルシェヴィキの勢力は一種の獨裁政治の一般觀念とあらゆる點に於て全然調和する方法に於て行動して來た。第一着に其は國內に於て完全なる獨裁的政治を維持した。其は露西亞に於けるあらゆる民主的運動を破壞した。而して是等の運動の破壞を確實ならしむるために、民主的理想を促進せんと努力したる幾千人の生命を奪ひ、幾千の人々を牢獄に投じた。其は完全に言論の自由と出版の自由を抑壓した。其は勞働運動とあらゆる大消費組合とを破壞した。今日露西亞には何等の勞働運動がない。その代りにその會員たることが强制的にして、其思想と行動とにソヴィットの權力に依つて命令せらるゝ勞働者の團體あるのみである。其處には自由なる言論と自由なる行動がない。今日露西亞に於て眞の勞働組合員たらんと欲すれば勞農政府の大罪と

思惟するにきまつてゐる。入牢しくは死刑はその罰である。」

ゴンパース氏はこの理由に基いて勞農政府に反對する。米國に於て個人の自由が如何に尊敬されてゐるかはこの論法の中にあらはれてゐる。レニンをして言はしむれば、露國民はプロレタリアートの政府を經驗したことがないから、文句をいふ資格がない。今我等は之を示したのだから、專制も必要だと口實を設くるかと思はれる。しかしこれもゴンパース氏は不服であらう。

米國政府は勞農政府に對して「國際的交際を要求するならば國際的義務を果たさなければならぬ」と主張して、七億弗乃至十億弗の債務――そのうち少くとも一億三千萬弗とそれに對する利子とは露西亞政府の支拂ふべきものと掛合ひをつけてゐるらしい。

又生産には生命の安全、私有財産の確乎たる保證、契約の神聖、及び自由勞働の權利が必要である。然るに現在の露西亞に於てはこの條件が完備してゐぬから、露西亞を條約國と承認することは出來ぬといふ主張もあるやうである。

しかし一方面には輿論に變化が生じつゝあるやうである。若しソヴィット政府が不正當とすれば更に革命が必要である。而してこれを敢てするは露西亞國民を一層不幸に沈淪せしむることである。勞働政府は或程度まで法律及び秩序を維持し得るものと認めて可なりであるといふ意見が次第に勢力をえてゐるやうに思はれる。日露交渉問題の再燃に際して、米國の態度は眞面目なる研究を要するのである。

勞農政府の第二の困難は資本の缺乏である。歐露の人口は一八九〇年に於て一億であつたが、一九一四年には一億五千萬に達してゐた。最近の露西亞は一年に四百萬人宛の人口を增加したわけである。增大せる人口を維持するには土地のみではない。機械や工場や、會社等を要する。土地は餘る程存在してゐても之を開發する資本が足らなかつた。西歐の資本はこの缺陷を補充せんがために注入せられた。大戰爭前の四半世紀間に、西歐の資本は約百億圓乃至百五十億圓も、公債やその他の形式をとりて露西亞に這入つた。浪費なる舊政府は之を濫用したに違ひない。しかし長い鐵道が敷設せられ、港灣は開發せられ、工場が建設せられた。工場の大部分は外國人もしくは半外國人の管理の下にあつた。之と同時に露西亞は世界貿易の輸出總額の

四分の一の小麥を西歐に供給した、

波蘭人や猶太人は米國に移住した。しかし人口は一向減少しない。而して世界の七分の一を占むるこの膨脹力ある民衆は最も残酷にして、最も腐敗した、最も低能なる政府によりて支配せられた。頭腦よりも頭數に重きを置いた政府であつた。大陸軍を擁した政府であつた。小數の貴族のみが外資の利得か、淡大なる自然の資源の占有によりて、贅澤三昧の生活を營んだ。この下に專門的革命家が命を棒に振つてあぶない離れ業を演じた。

大戰爭は露西亞の内部的社會的腐敗を洗ひざらひに暴露した。かくして舊政府は倒れた。終に一九一七年十月の大革命となつた。舊政府は根柢から破壞せられた。しかし七年の戰爭と三年の封鎖とは鐵道も港灣も、工場も、いづれもみじめなる狀態に陥ゐらしめた。嘗て百億圓を投じた機關は一向運轉しない譯である。流石のレニンも我慢の鼻を折らなければならぬ。人口は躍進的に增加するが、自然を開發すべき機關が破壞の手に委して顧みない。此に於て、レニンは資本に渇望した。これが一昨年の新經濟政策の發表となつたのである。

露西亞は四萬哩の鐵道を有してゐる。しかし一九一五年以來枕木の修繕は極めて部分的にのみ、しかも應急的に行はれた。パラスの入れ方も極めて不充分であるから、大貨物の運轉にはとても堪えそうもない。

機關車總數は、一萬八千四百輛と稱するが、そのうち六割四分は修繕可きぬ。又三割即ち五千二百輛の機關車は大修繕を要する。しかもこの修繕は餘程に完備せる工場にあらざれば不可能である。小修善を要するは二千五百輛である。通常の場合に於ては修繕のきかぬ機關車は一割六分にして、運轉しうべきものは現在の六千六百輛にあらずして、一萬五千三百輛でなければならぬ。客車は二萬四千五百輛ある。七千六百輛は大修繕を要すれども不可能である。貨車は四十一萬六千輛ある。修繕の不可能なものは十二萬輛ある。而して工場の製作能率は戰前の二割五分乃至五割に漸く達したほどである。これは露西亞政府專門家の言明にして、マンチエスター・ガアデアンの昨年六月發行の露西亞改造號に發表せられたものである。約十億圓の資金がなければ鐵道及び港灣の根本的大修繕が不可能である。而して露西亞はこの資本を何れに見出さんとするか。

勞農政府がかゝる問題を解決すればその基礎は容易に動くまい。たゞその解決が出來るや否やが問題である。國民は反動的革命を欲求してゐないであらふ。その犧牲があまりに重大なる

べきを杞憂するからである。しかし五年まち、十年待ち三十年待ちて、その甲斐なき時は猛烈なる反動は起らぬと限らぬ。勞農政府は當分は大丈夫である。しかしこれは五十年も百年も現狀で進むわけには出來ぬ。レニンを首として勞農政府の首腦者は勢ひ、妥協交讓の政策を採用せざるをえなくなつたのは當然である。

三二　勞農政府の大學政策

勞農政府の最も得意は教育政策である。しかしこの事に就いては多くの人々の研究の發表があつたから繰りかへす必要がない。モスコーにスワドローフといふ勞農大學があつて、ボルシエヴィズムの宣傳者を教育してゐるといふ事も知られてゐる。舊大學はブルジョア階級の擁護のために有したのであるから、新國家はそれ自身の中流階級を創造しなければならぬといふ考であるらしい。かくして勞農政府は大學に對しても高壓手段を用ゐて、何等の自主權を附與しない。その最高幹部は學生や、大學の下級事務員や、勞働學部員等によりて選出せらるゝが故に教授より選ばるゝ者は極めて小數である。總長自身も必ずしも學者と限らない。教授は大學の任命にあらずして民衆教化大臣の指命である。

又學科目から死語や神學は全然消え去つた。哲學、論理、心理は第二流の科目となりて社會學と經濟學とのみ主要なる科目となつた。

大學教授は幾年となく西歐との交通遮斷によりて精神的にも貧弱となるはやむをえない。しかも勞農政府は舊ブルジョア階級出身の學者を虐待すると共に、一方には共産主義の學者を保護して、富豪より沒收した機械や書籍を藏する圖書館に接近を許してゐる。かくして大學教授はパンのために戰はねばならぬのみならず、書籍のために戰ばねばならぬは誠に氣の毒の事である。

勞農政府は痛切に人物を求めてゐる。單なる勞働者や農夫以外の官吏や、機械家や、醫師を要してゐる。しかしながら舊ブルジョア階級のものは出來得る丈排擠してゐると傳へられる。この態度に對して舊ブルジョア階級の教授も憤慨した。そして犧牲の血を流したのは少くないといふ事である。

勞農政府のこの辛辣苛酷なる態度は政治的に勝利を奏すべきも、知識的には單に露西亞のためのみならず、全歐文化のために大なる不幸を來たすであらふ。

勞農政府は教育ある維持者を大學より供給せられんことを欲する。このために大學生を共産主義者より募集するのである。

その起源と確信とに於て共產主義者なれば、先取得權を與へられて大學に入ることが出來る。舊ブルジョア階級の子弟はいかに優良なる頭腦を有してゐても、國立大學より敬遠せらるゝわけである。勞働政府の目的は大學を社會的に改造するにあるのである。勞働者學生に對しては種々なる特權と補助金があつてもブルジョア階級のものには何の恩典はさて置いて、壓迫あるのみである。また大學の費用も不十分なので、昨年の如きは大學生の四割は街上の小賣商賣を行つて利得を取る必要に迫つてゐたといふ事である。

されば來らんとする時代に於ける露西亞の智力は西歐諸國のそれと對抗なし得るであらふか。眞面目なる問題である。

たゞ茲に一道の希望は舊ブルジョアの學者が私立學校を經營しはじめたことである。かくして私立大學が生るゝ時には、新しき光りが再び輝きそむるかもしれぬ。

大革命の後に冷靜にして公平なる態度を要求するは無理である。しかし世界の進步のために勞農政府の大學政策がより寛大ならんことを求むるはやむをえない。

* * * * *

見たる露西亞も十分に述べつくされない。況んや見ぬ露西亞は又聞きの集積である。更に進んで將來の露西亞がどう展開するであらうか。依然たる混沌のうちに始終するであらうか。或はいつか歐亞二洲に誇る聯邦共和國として雄を北米合衆國と爭ふであらうか。凡ては謎である。然り大きな謎である。謎を解くは面白い。我等は一衣帶水を隔てゝ、この謎の國に對するを意義ある天の配劑と考ふる。

無產階級歌人としての啄木其他

安成二郎

一

この命題には二つの肯定がある。それは無産階級歌人の存在即ち引いて階級藝術の存在である。今一つは、歌人石川啄木は階級藝術家なりといふことである。そして之は何れも一般的に承認されて居ることであり、この雜誌の編輯者から、この題を出されて私も容易に呑み込めたのであるが、而も改めて啄木歌集を點檢して見て、石川啄木を無産階級歌人とする一般的承認の內容を少し考へて見たくなつた。

その前に少し階級藝術について書いて置く必要がある。私の考によれば、無産階級藝術とは、作者が有産階級にあると無産階級にあるとを問はず、現在の資本主義的な社會組織を否認する階級鬪爭に參加する意志によつて生み出されたものである。だから中には、無産階級に對して階級意識を植ゑつけるものや、すでに其の自覺ある無産階級を鼓舞するものや、內容には色々あつても、すべて燃えるやうな宣傳の力を持つてゐなければならないのである。宣傳は文學で無いといふ論も、文壇にはあるやうだが、私は、あらゆる文學は、有産階級の爲めか、或は無産階級の爲めかのプロパガンダだと思つてゐる。若しさうで無いやうに見えるものがあれば、有産階級が勝利を占めて、その上宣傳の必要も無いところから生れて來た畸形的な文學か何か、ひどく怪し氣なものなので、矢張り有産階級的心情の一産物には違ひないのである。

さてさういふ意味から、石川啄木がどこまで無産階級歌人であるかを、啄木歌集一卷から探し出して見ると、少しく覺束ない感じがする。私は一卷約三百八十首の中から、僅かに左の二首を拾ひ出した。

百姓の多くは酒をやめしといふ。
もつと困らば、
何をやめるらむ。

×

友も妻もかなしと思ふらし――
病みても猶、
革命のこと口に絶たねば。

だが、啄木を無産階級歌人とする一般の承認は、この二つの歌ばかりによるので無いことは明らかである。今手許にないから引證することは出來ないが、彼の詩には、もつとはつきりと彼の無産階級藝術家たる熱情が現はれてゐる。それから啄木の小說や論文や感想のやうなものを私は一つも讀んだことが無いが、恐らく其の中にも彼の思想を明らかに汲み取ることの出來

るものが正しく無いところから、彼を無産階級歌人とする一般的承認が生れて來たのであらうと思ふ。そして、啄木が歌人としてエポック・メーカーであるところから、色々の藝術を製作した彼を引つくるめて歌人と呼んだことに不思議は無い。

猶ほ、單に啄木が無産階級的意識を持ち、さういふ環境の中に住んでゐたといふことを知るべき歌は、左の數首を擧げることが出來る。

平手もて
吹雪にぬれし顏を拭く、
友、共產を主義とせりけり。

×

赤紙の表紙手擦れし
國禁の
書を行李の底にさがす日。

×

賣ることを差し止められし
本の著者に
路にて會へる秋の朝かな。

×

世におこなひがたき事のみ考へる
われの歌よ！
今年もしかるか。

×

やや遠きものに思ひし
テロリストの悲しき心も——
近づく日のあり。

で、私は啄木を優れた歌人だと思つてゐるが、それは無產階級歌人としてゞは無い、啄木歌集一卷を立派な無產階級歌集だとも言へないのである。

石川啄木が優れた歌人であるのは、彼が一つの藝術形式を創造した事にある。之より先き明星派の歌人であつたところの啄木は、階級意識に目ざめて、有產階級の遊戯となつてゐた歌のリズムを自分の手に取り戻して、自分一個の感情を盛るために古い形式を破つて、一首の歌を三行に書き出したのである。彼は歌壇のアイコノクラストであつたのだ。そして彼の創造した形式に、彼の優れた感情がぴたりと合したところに、啄木の歌人としての優れた素質があつたのである。

この點に於ては、與謝野晶子が明治の歌壇に一のエポックを造つたのと似てゐる。彼女も亦た自分一個の感情に適合するやうに、短歌のリズムを改造したのである。三十一文字たること

に變りは無いが、その歌の持つトーンはまるで啄木のものと違つて現れたのである。そして、啄木は晶子の持たない階級意識を持つてゐたので、歌の形式を變へるに至つたのである。彼がもつと長く生きて、立派な無産階級歌集を殘さなかつたことは彼のみの遺憾では無い。

二

土岐哀果は今はまるで歌を作らない。どうして歌を作らないかと、人あつて訊ねたならば、彼は恐らく、「ひとりのプロレタリアの青年としての生活だから、昔も今も心持は變らない。たゞ仕事が忙しく、社會全體を客觀する必要が多いから、個人の主觀を表現してゐる機會が少い」とでも言つて、其のノオブルな表情を見せるだらう。哀果は今、朝日新聞の社會部長として精力をその仕事に傾注してゐる。讀賣新聞の千葉龜雄氏の記述に從へば、新聞記者として「新しい時代に君に多とするのは、社會の趨勢のはつきりした見渡しがつく君の聰明と、その適所についてあまり誤まらない君の識見に依頼すべきものであらう。また君の理想する新聞、また新聞記事が、無知な社會へまでの妥協や同化ではなく、反對に文化への民衆の引上げであるといふ考へを、編輯の上に實際に探つて居るのが心強い」とところの哀果は、又た言ふであらう。「新聞に取扱ふ事件の原因、その反響に對してはつきりしたプロレタリアとしての態度から見極めがつくのだ」と。

土岐哀果は石川啄木の親しい友人で、その歌集には啄木のこと、その妻子のことを詠んだ歌が隨所に見られる。又た哀果は大杉榮の雜誌近代思想に歌や詩を寄せ、彼のグループに交つて文壇では最も早く無産階級意識にさめてゐた一人であつた。そして彼の無産階級歌人としての全面容は、その數種の歌集を集めて一冊とした土岐哀果集に見ることが出來る。その後に、緑の地平、雜音の中の二つの歌集を作つたが、それは謂ゆる專門的歌人になつてからのもので、無産階級歌人から一轉機を示してゐると彼自ら言つてゐるから、私はその最後の二歌集には言及しない。

無産階級歌人として土岐哀果は、極めて小心な、用心深い道を辿り始めた。彼はその時すでに新聞記者であつたから、一方に謂ゆる社會全體を客觀する必要があつたのである。而も彼の若い感情は、時に無産者としての意識に燃えざるを得なかつたのであるが、それは甚だ烈しいものでは無かつた。

わが知れる青年はみな貧し

かれもかれも
わが知れる青年はみな貧し、冬

×

惰けろ、
もつと惰けろと呟きつつ、
働くかなや、きのふも、けふも、

×

やつぱり、われ、
働かずにはをられざる、
かくてさもしくならんとするも。

×

むつとして
わが職業を怒りたれ、
伊豆の山邊の月夜の山火事。

大正二年の夏から三年の冬までの街上不平の中にはこれらの自分の仕事に對する不滿、怠惰の權利を主張しやうとして危く崩れる弱い心の數首を引くことの出來る外に、無産階級歌人としての彼を最も明白に出してゐる貧民窟巡察二十二首の連作を擧げなければならぬ。何れも第五句を「何にも知らず」といふ句にしてあるが、貧しい境遇に壓し潰されて、何にも知ることを許されない人々を見て、何者かに對する彼の憤懣が強い表現で讀む人に迫つて來る。

じめじめと
この泥濘路のくらやみに、人間住めり、
何にも知らず。

×

金をくれ、金をくれ、——
いきなり、くらきとんねるの中、
何にも知らず。

×

諦めて、諦めて、
たゞ諦めて、不平も言はず、
何にも知らず。

×

父と子と喰ひつくやうに抱きあひ、
ゆふ日あかあかく
何にも知らず。

試みては二年五月、哀果が新聞記者として滿鮮に旅した歴遊の歌集であるが、ここには一個の尋常な歌人を見るのみである。朝鮮の亡國の風物に對しても、彼は平凡な觀察しかしてゐな

い。インターナショナリズムもソシアリズムも顔を出さない。汚い朝鮮の市街と人に對して、彼は單にいとはしい感じを抱くだけである。

　東京、東京、東京と
　　わが心
　ゆふべとなればつぶやくなりけり。

×

今ぞかも妻は寢ざめて、
　うつつなく
ふくませをらむ、さびしく、乳を。

哀果は斯うして一個のセンチメンタリストになつて、何を見ても感情が啜り泣いてゐる。そのせいか、このイみて約二百首の歌は調子が一體に甚だしく窘縮してゐる。中にたゞ一つ帝國主義に疑問を投げつけた歌がある。

いかにして、これを
日本のものにするならむ、日本のものに、
　ゆふ日が赤し。

が、この歌の調子も強いとは言へない。矢張り啜り泣いてゐる。之はつまり彼が帝國主義であつた少年の日の記憶が、遠く家を離れた淋しい彼を捉へたのである。ここに哀果の無産階級歌人としての弱さがある、

　少年の愛國心に悲しみし
旅順の港に、
　けふ來つるかも。

次ぎの不平なくは二年七月の出版で、實際不平の無いらしい生活が歌の調子にも見えて來る。黄昏には四十二年から五年までの歌である。

革命を友とかたりつ、
妻と子にみやげを買ひて、
　家にかへりぬ。

×

日本に住み、
日本の國のことばもて言ふは危ふし、
　わが思ふ事。

×

波止場にて投げつけられし
かの哀しく、尊き石を
　いまも藏せり。

之は彼の初期に屬するものであるが、內容に於ては直ちに街上不平に續いてゐる。

うれしく、うれし、うれし、
心、このごろ、
すべてのものを愛するをうる。
斯ういふあいまいなところに落つかうとして、時には、
新しきわれの事業をよしとせし、
母のこころを
哀しむ、このごろ。

×

別れては、同志に愧ぢぬ、
ひとり、わが、弱く、哀しく、
詩をおもふ心。

さう自分を省みることもあつたが、やがて彼は、不平を言はずには居れなくなつた。不平を言はなければ窒息をしなければならない。

かくれんぼ、
少年の日の戀しさよ、
今は世に息をひそむる。

この後に續くものとしては、イみてと不平なくは一時謂ゆる詩をおもふ心に隠れたもののやうに見える。そして數年の後に街上不平となつて燃え上つたのであるが、間もなく彼の一轉機となつたのは殘念である。土岐哀果集中の最も新しいものとして、街上不平に次ぐ心遊ばずの一章三十首ばかりが劈頭に置かれ、中に左の二首がある。

書齋のなかに、
なにを考へてゐたりとて
あぶなくもなし、なんとするものぞ。

×

わがすること、
わが思ふことの、やうやくに
この世のためにならざらんとす。

然し、これは後につゞくものがない。無產階級歌人としての彼はこの歌を終りとするのである。

この卷末にローマ字歌集 Nakiwarai がある。そして彼は、之が短歌を三行に書いた最初であると序文に言つて居るが、恐らくローマ字の性質上、偶然三行にしたものであらう。和歌を英譯する人達のしてゐるのと同じく、英字の性質がさうさせたのではあるまいか。短歌を三行に書いた形式の創始者として、先きに啄木を擧げてあるので、この事を一言附け加へて置く。

三

西村陽吉は啄木や哀果を歌の友とし、又た嘗て哀果と共に雑誌生活と藝術を發行して、その歌は歌壇から生活派と呼ばれてゐた。彼はさう言はれることを承認し、論集新社會への藝術の中で、歌壇の生活派その他二三の論文を以て生活派の意義を宣明してゐる。陽吉にしても哀果にしても、又た啄木にしても、彼の言つてゐる生活派として、よく知られてゐるので、彼等がみな無産階級意識を持つてゐたから、私はここに順々に彼等を論じやうとしてゐるのであるが、その歌集の中から、無産階級意識のにじみ出てゐる歌を拔き出して見ると、それは全體の幾パーセントに過ぎないのは已むを得ない。

陽吉には二つの歌集がある。都市居住者と街路樹である。彼は生活目標が、無産階級といふには、ほんの少しばかりではあるが金があり過ぎる。

金持に非ず、
されど食ふにも追はれざる、
このなまぬるき生活に飽く。

で、彼の階級藝術はハートから出ずに、變則な道をとつてヘッドから生れる。

際立ちてこの立派なる旅行具を、
この人は持つ、
所有の不思議さ!

之は陽吉の知識となつてゐる私有財産制に對する疑ひである。

たべものが無くなるといふ革命の、
寒き巷に
我を置かしめ。

×

素裸の男となしてこの我に、
鍬をもたせて
土を打たしめ。

斯う言つてロシアの革命を懼うてゐるが、實感をもつて、感情が燃えてゐるとは言はれない。矢張りヘッドの歌である。

住ひよげなる、
かゝる屋敷に靜かに住まば、
人の心は正しからんか。

この歌には彼の唯物史觀の芽がある。啄木に果しなき議論の後といふ詩があるが、陽吉にはそれに似た連作がある

一座みな
不平となりし青年の、
この心をばいづちへやらん。

×

羊のやうに
やさしくおとなしきこの友の、
口より出たる強き言葉よ。

×

我らみな、
悉く現狀に安んぜず、
かくていつまで續かんとするか。

以上は街路樹の中の歌であるが、第一歌集の都市居住者にも

家も金もある哀しさ、
午後の街をぶらぶらと、
浮かぬ心にあるきけるかな。

×

國禁の書を讀みつつ
小旅行の、
ゆとり心をかなしみにけり。

といふやうなプチ・ブルジョアの生活を哀しむ心が歌はれてゐる。彼も亦た此の頃歌を作らないやうである。第二歌集街路樹は七年十二月までの作で、その後の陽吉について私は殆んど知るところが無い。

四

ここに恐ろしく表題に正面を切つた歌集がある。大阪の人西川百子著無産者である。が、この人の態度は少しくあいまいである。その序文に「貧乏そのものがその人に對して先天的に約束されたるものでなく一にこれは現在社會組織の缺陷に職由するを知るに及んで」貧乏讃から貧乏呪咀を叫ぶやうになつた彼は、次ぎの一節で「貧乏問題の解決を物質的方面に求るを以て足れりとせず、進んで貧乏人の人格的主張を識認するにあらざれば斷じて完全なる社會組織は實現さるべきにあらずと信ずる」人格主義者になり、而も「自分の叫びはまさしく歐米各國に於けるが如き資産階級に對する無産者階級のそれと共鳴すべきものなることを確め」たといふのである。

思想の矛盾は矛盾として、さて歌について無産階級歌人としての百子を見ることにしやう。彼の歌は時に一行になり、時に三行四行になるが、その形式については彼は何も言つてをらない。彼は大阪の新聞記者で、その階級意識は河上肇の貧乏物語によつて喚起されたのであるといふ。本は大正九年の發行である。

百子の歌には謂ゆる和歌用語は殆んど無い。之に啄木にもな

いが、哀果、陽吉には、かもよとか、しづもりにけりとか耳遠い言葉が可なりにあつて、それが少からず歌の調子を弱めてゐる。百子の言葉は非常に直截で、從つて强いリズムを持つてゐる。

粥に水を增せば足らむといふ如き溫情主義に唾して來よ

×

月謝滯納、貧しき者を除名する學校の掲示眺むるも秋

正面を切つて本の名に無産者と題したごとく、その歌も亦た正面から資本主義に反抗してゐる。

富豪の子の外ここに入るなかれ、資産階級の大學の門

哀果、陽吉の歌には始終、力の足らない自分を顧みて逡巡するやうな、まつしぐらな元氣を缺いてゐるが、百子は自分のからだを以て、ドシンと敵にぶつつかつてゐる。

百子の歌の今一つの特色は、新聞記者として社會的事件に當面した時、それが直ぐに彼の無産階級意識を突いてゐることである。

何をすれば生きらるるものか、働けど、働けど人の食らひ得ぬ時

之は生活難の爲めに妻子五人を絞め殺して自分も自殺を企てた一賣藥業者の事件を取扱つたものである。

生れ落ちて他人の土地に鋤とりて流せし汗の値知る時

×

手の鋤をいづこに入れむ、一塊の土も地主の足跡のある

×

己が手に作りし米を食らひ得ぬ疑は死こそ解くべかりけれ

之は地主の迫害に逢ひ、溜池に身を投げて憤死した小作人を歌つたものである。

恐しき突貫の後、銃劍の血の滴りを誰れか拭はむ

×

この路次に米暴動に引かれたる父あり子あり——凝とそむ

之は米騷動を見た百子の實感である。斯うして彼は、日常生活に無産階級意識を生活したのである。そして、階級意識の上に生活の藝術化が實現されたのである。尤もこの點は、すべての無産階級歌人の、その階級歌人として認めらるべき歌の上に同じく言はれることではあるが、百子の如く、直ちにその生活の血をペンに含ませて紙に落したものは少い。矢張り一度机に向つて、謂ゆる藝術家のやうな風になつて、それから記憶を再現したといふところがあるので、その歌にどこか餘裕があり、實際生活に對する反省からの遠慮が言葉を弱くして來るのである。この意味で、百子の歌は、如上の無産階級歌人の中で、獨

特の位置を占むべきものである。從つて謂ゆる歌よみ專門家から見れば、より多く邪道であるかも知れない。特に石川啄木の歌に對しても、まるでその價値を見ることの出來ないやうな、めくらの歌人の未だ甚だ夥しい現代の歌壇は、百子の歌を以て恐らく、新聞記事の繼ぎ合せであるとでも言ふに違ひない。で私は事の序でに、それらの歌人に言つて置く。今に必らず、短歌が悉く西川百子の歌のやうになる時代が來ると。さういふ時は、萬葉調模倣の歌などは三文の値うちも無くなる時である。

百子の無產者は內容を無產者と戀愛篇の二つに分けてゐる。後者については私は何も言ふことは無い。前者には、歌の總數約二百五十、中に單純な生活の歌もあり、それにも捨て難いものがある。東京の文壇で未だ廣く名を知られない彼の爲めに、その中から一二首を摘錄して置かう。

食べさして
貰へば不足は云へぬものかと
唯ひとこと洩らせし妻の言葉

×

鼠の子、一かたまりの古綿に重なり合ひて眠り居たりけり

後のは、百子が貧民窟を步いた時の觸目の歌に過ぎないが、讀者は恐らく、鼠の子のやうに盜めいてゐる人間の貧しい子供達の狀態を、この歌から想像することが出來るだらう。

五

最近に現代口歌選が出版された、青山霞村、西川朝風、西村陽吉の三人が各自の持つてゐた機關雜誌に集つた投稿家の歌を選して一冊に纏めたもので、歌數約千三百、作者約二百人である。そのうち西村陽吉の選んだ中に數人の無產階級歌人がある。

この三人の選者は、早くから、今の歌人の誤まつた歌言葉の遊戯を排して、口語で歌を作ることを主張してゐた。尤もその主張の內容が悉く同一なわけではなく、三人三樣の理由を持つてゐるのであるが、ともかく三十一文字の和歌のもつてゐるリズムを現代の口語で現さうとしてゐる意向は同じである。それはどんな歌であるか。左に彼等の歌を拔いて見やう。

とゝろよい卯月の雨にたゝかれてそして梅の實はいろづいた　青山霞村

×

湯あがりのつまがそら見るかどぐちに秋の日ぐれの竹の葉が鳴る　西川朝風

×

儲かることを熱心に語るこの男のあの輝いた瞳はどうだ
西村陽吉

だが、私は今ここで短歌の用語について一般的な意見を述べやうとしてゐるのでは無い。たゞ、口語歌の主張者が、現代の生活は現代の言葉でといふ以上ゝ、もつと現代生活其物の内容に立ち入つて、口語で表現するの避くべからざる生活內容を持つ人でありたいと思ふのである。成る程、かういふ事を言ふには口語の形式による外あるまいと思はせる、そのかういふ事をしつかりと摑んでゐたら、議論などはどうでも、口語歌は直ちに立派に出來上るとおもふのである。

啄木は、その粗雑な言葉を、短歌の形式を變へて三行に並べた。我々はその歌を見て、成る程、こんな言葉でこんな事を言ふには、この形式が一番好いと感ずる。口語を以て作る歌も、その如くでありたいと私は思ふのである。そして、私は此の問題を無產階級歌人の解決に待ちたいと思ふ。それは彼等こそ、從來の歌人等とまるで違つた生活內容を持つてゐるに違ひないからであり、それが最も口語で表現するに適してをると信ずるからである。

さてそれでは、無產階級の口語歌人はどんな歌をよんでゐるか。

今日といふその日その日に追ひやられ憤りさへ忘れはてたか

×

汗くさいズボンを脫げばポケットに錢の音がする疲れた疲れた

之は橫濱の社會主義者である伊藤公敬の歌である。彼には、昨年死んだ社會主義詩人根岸正吉と合著でどん底で歌ふといふ本がある筈であるが、私はまだ見てゐない。ここにある十八首の歌の多くは謂ゆる生活の歌で、無產階級意識はその片鱗を見せてゐるに過ぎないが、而も、その生活內容が口語の表現によつて、ある力を示してゐることは確かである。前に擧げた良村朝風の歌と比較して、口語の歌はこの生活のものだといふ氣がする。

しみじみとこの淺草で墮落する人の話を聞かせた巡査

×

ふところの啄木歌集――その本でおれをなぐつた淺草の巡査

×

芝浦の地べたである夜何氣なく思つたことは脅迫の手段

これは、堺利彥の雜誌新社會に歌を出してゐた松村炳の歌で

ある。勞働者といふべきか、所謂ゆる不良少年といふべきか、さういふ生活の歌で、私は新社會を讀んでゐたといふので彼を無產階級意識を持つてゐたと考へるのであるが、これらの歌からその階級意識を汲みとる事は出來ない。

單に勞働の經驗を再現した勞働小說でも、その形式が歌よりも長いので、作者が階級意識を持つてゐれば、彼はどこかにそれを書くことが出來る。然し、歌の短い形式では、それを現すことは多く概念的になり易く、そして、それが現れなければ單に勞働の歌となり、貧乏の歌となり、不良少年の歌となり、結局生活の歌の中に引つくるめられる。若し、無產階級歌人といふことが、無產歌人といふ意味であれば、今の萬葉模倣歌人などは、大概その範圍に入るであらうが、階級意識を歌つた歌人とすれば、その偉大なるものは今後に待たなければなるまい。

以下、この本の西村陽吉が選んだ中から、目に觸れた面白い歌を拔いて置く。

○　後藤　史郎

天城の山の茶店の犬がもんなしの俺の前に出てチンチンをする

うつかりと口には出せぬことを考へ電車の中に腕くんでゐる

自分一人が喰へないくせにきれいな妻がほしい私をお笑ひ下さい

それがはかなく頼りないにしろ神よりも人の心を私は信ずる

○　森川喜久藏

日が暮れて工場がひけて歸る頃考へる事はみんな悲しい

自分ひとり食つてゆけないこの俺にたよらうとする年とつた父母

久しぶりに出會つた友はなつかしさの消えないうちに金借せといふ

しみじみと蠅とふたりで手をこする冬の夕日のテーブルの上

○　植田　景一

同じやうな理想をもち同じやうにそれが破れつつ生きて行くのだ

○　海田　邦夫

馬車馬のやうに一生働いて死んで行くのか俺等の仲間

金持であつたら馬鹿でも宜いといふこんな心に誰がしたのか

電車にかまれていつそ死なうかと想ひつめてた去年の今頃

○　　秋田としみつ

資本主義——官僚——そしてその下にふるへてゐるのかあはれな教師

親もある、妻もある、この恐ろしいくはだてがぢつとくぢける夜だ

○　　徳田英夫

くつてしまへば何ものこらぬ百姓がばからしくなつて今日もねそべる

高いところから懐ろ手して勞働は神聖だなどとおだてる人々

懐ろ手のやつらにみんな搾りとられて勞働は神聖だとすましてをれるか

金がなければ生きられぬ世が呪はしい働かねば生きられぬ世が早く來い

をやぢの借金で一人まへになつた俺がまた借金でこどもを育てる

俺達が汗水たらして作つた米を寢てゐて食ふ奴遊んでゐて食ふ奴

○　　峯岸孝子

生きてゆくといふ苦勞さへなかつたら歸つて來ませう純な私が

私ばかりからしてこつこつ働いて居るやうな氣がするのよ今日は

○　　鷲宮葛人

安樂な地主のやうになりたいと飯時が來れば考へる癖

猶ほ多くの私の知らない無産階級歌人が、工場と農場とに、或は書齋にも居るかも知れないが、一と先づ以上で打ち切つて私は少しばかり私自身のことを書いて見やう。

六

君自身のことも書けと、この雜誌の編輯者が私に言ふのである、自分のことを書くのは小説では流行するが、かういふ文章ではあまり普通では無いので、別段處女のやうに顔を赧めたわけではないが、一寸面食つて、そして喜んで承知したのである。現に私がここに書いたやうに、まかり間違へば他人に批評されることも無いとは限らない世の中である。自分を自分が一番よく知つてゐるとは言へないかも知れないが、本人の私が書く方が、人に書かれて腹を立てたり嬉しがつたりするよりは世話が焼けない話である。自分が他人から小説の材料にされるとモデル問題などをやかましく言ふくせに、自分はすまして洗ひ

ざらひ身の上話をする小説家もある。それに比べると、私は自分の歌を並べて、無産階級のプロパガンダをするのであるから氣持もいつそのんきなわけである――といふのが、自分のことを書く前置きである。

私も近頃殆んど歌を作らない。それは私の最初の歌集貧乏と戀との中にある歌の通り、歌では食へないからである。

『戀は身を助ける』
それも嘘とは思はねど、
歌を作れども其日が送れず。

この私の歌集は、初期のセンチメンタルな歌、その頃の友人若山牧水の歌集海の聲をよんで感激して作り初めた頃のものと、大正二年五月から四年九月迄の間に作つたみぢめな暮しの歌を集めたもので、その暮しの歌百八首の中に、無産階級歌人としての意識が少し出てゐるのである。

豐葦原瑞穗國に生れ來て
米が食へぬとは
嘘のよな話

中でこの歌が、私の歌として一番ポピュラーな歌で、人の論文や何かにも度々引用されてをる。私もこの歌は好きでよく短册などに書くのであるが、『君が死んだらこの歌一つ殘るだらう』と心細いやうな有り難いやうなことを言ふ友人もある。一寸餘談に亘るが、私はお正月の鏡餅の堅くなつたのを毎年持て餘すのである。所が昨年、友人の畫家前川千帆君が、鏡餅を拵へるのを止めて、お手のものの筆で半折に鏡餅を描いて床の間に掛けたと聞いて、その名案に感服し、早速前川君に一枚書いて貰つて、チヤンと表裝して今年のお正月に床に掛けたのであるが、同時に前川君が自分のも一枚新しく描いて私に何か讃をしろといふので、私は早速この豐葦原の歌を書いたのである。この機會に、私はこの畫餅を一般に宣傳したいと思ふ。これなら鼠に嚙られる心配も無い。立て廻した金屛風の蔭からチヨロチヨロと鼠の出るのも風流なものかも知れないが、無産階級には金屛風の背景があらうとも思はれない。

蓬萊に徐福と申す鼠かな　　虚子

無産階級でも俳人などは、痩我慢で鼠に餅を嚙らせたがるけれど、それなら畫餅に鼠を馴してもよからうでは無いか。

妻よ、無限の生殖力をもつ如き
お前のからだと
經濟組織と。

私は結婚すると續けさまに子供が生れた、これは堪らんといふので、こんな歌が出來たのである。今の世の中では生産と分

配が合理的で無いので、一方には食物が有り餘つてゐながら、他方には食ふに困つてゐる人間が無數にある。で、子供が生れることは彼等の一大恐怖で、貧乏人には昔は中條といふ重寶なものもあつたが、今は間引くことも禁じられてゐる、

金こそは悲しけれ——
歐洲の大戰も、
われと妻との悶着もこのため。

今の世の爭ひはすべて金の爲めである。よく思想の爭ひなどといふ、親子の新舊思想衝突などといふ。が、立ち入つて見ると金の問題である。經濟組織を超越した思想があるなどと思ふのは大きな間違ひである。石川啄木の歌に

わが抱く思想はすべて
金なきに因するごとし
秋の風吹く

といふのがある。萬人の思想はすべて金あるか、金なきかに原因して、色々な形をとつてゐるので、自分のポケットの金ばかりではなく、この社會の經濟組織が萬人の思想を支配してゐるのである。

金のある男の面が
氣に食はず
髭に火をつけて燃やしてやらうか。

私は疑ひもなく無產階級意識をもつ歌人であるが、先きにも言つたやうに、その意識が全部の歌に現れるといふわけに行かない、單に生活の歌といふべきものとなるのは已むを得ない。たゞさういふ意識をもつ人の生活の歌を讀む人は、それに滲み出てゐる色を見ずに批評してはいけないのである。

兒がかなし、里に遣られし兒よりも、
わが身がかなし、
その日に追はれる。

×

ヒロシよ、
お前の母は貧の中にお前を孕み、
父は貧乏してお前を厄介にする。

×

好人物と、
われを言ひし男に金を借りて、
返さず、此頃は何と言ふらん。

×

生れる子が可愛くなりはしまいかと、
恐れてゐしが、

果して然り。

×

しつかりと、
金を握つた心もち、
十圓足らずの、生の充實。

×

『貧乏な家からエライ者が出る』
それを樂しみに
子供をこさへる。

×

夜おそく歸れば、
妻の寢てゐたり、
その顏を見て世がいやになる。

×

上の子の着物を着せやうと思ひ居しが、
生れし子には、
ちんぽこが無し。

×

父となりし、免かれ得ざる過ちと、
夫となりし、
愚かの過ち。

單純な生活の歌を自分の場合にのみ澤山並べたのを咎め給ふな。本を書く人が出版するのと何の違ひがあるか。それに、私の歌集は大正五年の一月に五百部を刷つただけで絶版になつてゐるので、啄木の本のやうに版を重ねたのや、哀果のやうに次ぎ／＼に出した本を又た一冊に纏めたのに比べれば、この位ゐの事は許されて好いではないか。

この歌集の後、私は猶ほしばらく歌を作つた。

後に生れる者の爲めに、
何か一つの事をなさん、
現在の生活に疲れる前に。

×

何の爲めに、
何を働くことぞと、
妻にかくれて思ふことあり。

×

眼は兇暴を見、
耳は悲慘を聽く、
生れるに時を得ざりしものか。

×

妻子をば養ひかねつ、この國に生れしことを歎く我が身ぞ

×

愚かしき子等あまたもちふくよかに着せしを見れば憤ほろしき

前の三つのやうに、かう理窟つぽくなつて來ては駄目で、後の二つの方がきちやうめんに歌の形式を守りながら、私の氣持が出てゐる。

私は口語の歌も少し作つた。その中から二つ三つ拾つて置く。

食ふために
一生懸命に働いて、
涙を流す、貧しい食膳に。

×

どうしても、
食つて行けなくなりまして、
盗みましたと泥棒が言ふ。

×

一と口に、
日本人とは言ふものの、
資本家もあり、勞働者もある。

次ぎに歌集以後の生活の歌を少し摘錄して置く。歌壇には自歌自釋といふことが、吉井勇あたりの發明で行はれてゐて、自分の戀歌などについて、長々とその歌の出來た前後の事情などを說いてゐるが、それとは違ふけれど、かうして何かとで何を言ひながら自分の歌を並べて行くのは、無産階級歌人にとつても愉快でないことも無い。

犬に添へて、
犬に食はせよと與れしパンを
犬に食はせず、子等が食ひにけり。

×

冬近し、
温かに着て、人皆のあらばと思ふ、
ましてわが兒ら。

×

按摩をさせて、
からだが樂になりにけり、
暮し向きの按摩はあらぬか。

×

弱いからだに生み、
榮養不良に育てゝ、

病氣になれば、醫療に事缺く。

×

無ければ無いで濟まず、
有れば有るで不足なる、
金と妻こそ我が不平なれ。

七

西川百子が新聞記者として時事の事件について優れた歌をよんでゐることは前に書いたが、私は大正五年八月からしばらく新聞に現れた事件を歌にして、之を東京日々に發表したのが可なりの數に上つてゐる。それは、特に無產階級意識を以て作つたと言つても好いものである。

高利貸に、
歳費はすでに抑へられ、
妻子に勳章を食はせけるかな。

これは代議士が勳何等の勳花を貰つた時の歌である。

花に添へて、
表情を賣る娘だち、
花賣り盡さば、何を賣るべき。

これは女學生が街路に立つて二錢の花を賣つたことの諷刺である。

ペスト來れり、
殺鼠劑を食はぬやう、
用心をせよ、鼠と女中だち。

×

奧羽線の、
舊式な列車衝突す、
助役の頭も舊式なりしか。

この衝突は五年の十一月末のことで、助役は責任を感じて發狂してしまつた。

成金が、
三千圓の雛を買ふもよし、
沒落の後の思ひ出のため。

大正六年の春のことで、謂ゆる戰爭成金が豪奢を盡したときである。

人間が着物を着て
生れるやうに、法律を
改正すれば面倒なからん。

これは、その秋、展覽會の裸體畫取締問題について、內務省のお役人の參考までに述べたものである。

大事な金を借り、
飛んでも無い思想を
　返してよこすロシアの忘恩。

大正七年の十二月に作つたもので、漸くロシアの赤い思想が日本でもやかましくなりかけた頃である。

雨降れば、
東京の街泥ンこになる、
　いつそ天から泥が降らぬか。

これは道路改良會といふものが出來たときの歌である。

慈善を受けずとも、
　二十五年も働かば、
　疊の上で死ねさうなもの。

三井がその炭坑の坑夫に對して、二十五年勤續すれば家を建てゝやるといふ溫情主義を發表した時の歌で、次第に勞働問題が頭を擡げて來たのである。七年五月。

燒けるもの、家のみならず、
　日本人の、
　頭の中の思想火事かな。

×

日本海、太平洋を飛びこえて、
　思想の火の子、
　降り來る日本。

×

山本農相、
　有れども無きが如きかな、
　米も有れども無きが如きかな。

×

有りがたき、
命の親の米の値が、
　愈々騰り、愈々有り難し。

×

何は無くとも、先づ一椀と、
　米の飯の、
　有り難き世となりにけるかな。

さて、あの時分から見れば、物價も少し安くなつたし、私のところでは四人の子供が三人になつたし、といふのが、私がこのごろ斯ういふ歌を作らない原因だといふのでは無いので、外に衣食の道を見つけて、それが忙しくて歌を作らなくなつたのは、土岐哀果と似てゐるが、一つには、この頃作らない哀果や陽吉もさうだらうと思ふが、啄木の言つたやうに、矢張り歌は

悲しき玩具で、私達無產階級の者には、そこに安住し切れない心持があると言ふのが本當であらう。

と、そこになれば、歌を口語にしやうが、三十五字四十字の字餘りにしやうが、乃至もつと自由な形式の詩にしやうが、そんなことは問題にはならないのである。で、私は初め此の稿で歌人ばかりで無く、近頃盛んに活躍してゐる無產階級の詩人についても、その詩を檢討して見たいと思つたのであるが、それは思ひ切ることにしたのである。まア 歌を作る人は作れ、詩を作る人は作れ、悲しき玩具で無いといふなら、それも好からう、が、それでは一體何だ！ と私は訊ねる。——どうも、あまり面白くも無い歌を澤山に讀んだり、自分の古い歌反古を引繰り返したせいか、私は心持が少しいら〳〵して來たやうだ。

（終）

農村見聞錄

白鳥省吾

一 飢えたる村々の話

奥羽山脈を遙かに北に控へ、數萬石を產する平野の片隅に、青田に埋れるやうにして成田（なりた）といふ部落がある。戸數五十、多くは小作をして生計をたててゐる。平野の南方を迫川が流れてゐる。彼等とても初めから小作人ではないのであるが、三十五年の凶作、三十九年の東北三縣の凶作とひきつゞいたので、その頃は一反廿圓前後の借財から土地を手放さねばならなかつたものも多い。毎年一萬俵以上の小作米を取りたてる大地主の家は其處から半里と隔つてゐなかつた。

その部落に一つの分教場がある。教員は一人、木目の見えるやうな黑板（ボールド）の前に机が三十ばかり、柱には煤けた八角時計が眠たさうに振子を動かしてゐる。小使は別に用もないので自家に歸つて仕事をしてゐることが多い。この學校と名づけられる分教

場は、普通の民家よりも小さい位であるがそれでも壁は白壁であつた。

兒童はみんな汚ない風體をしてゐた、女の髮は油をつけることもなく乾草のやうで、それに蝨の子（虱の卵）が草の實のやうについてゐた。顏は洗ふか洗はぬかもわからず、頸筋などには剝げるほど垢がついてゐた。着物の前の方は洟汁をなすりつけたり、汁をこぼしたりして異樣に光つてゐるのだ。

學用品でさへ成るべく買はないやうにしてゐるのであつた。中には學齡に達したので督促にゆくと、みんなが外に働きにゆくので赤ん坊を子守するものがないから出されぬといふのがあつた。

分教場も兒童の樣子も今とても大差はないのであるが、さて次のやうな話は東北の大饑饉の疲弊をうけた翌年の冬のことである。

山脈のうちの高峯である栗駒、花淵には雪が白く降つた。あんなにも見渡す限りつゞいた黃金の稻の波は、全く刈り取られて、寂びしい荒れ果てた感じであつた。

教員のSは一年生と二年生とを教へたあとで、もう午後二時であつた。空は曇つて、農家の前に圓錐形に積まれた稻の塚のほとりで鷄のなくのが長閑にきこえた。あと一時間教へると今日はきまりであるといふ放課時間であつた。

四十位の男が小走りして來て、「慶次やい、慶やい」と呼びながら控所の方に行つた。その父親である。控所と言つても狹い所だが、外は寒いので、みんなこゝに居て十人ばかりが相撲をとつてゐるのだ。がやがや騷いでゐる中で、一人がそれをきいて、

「慶次たどや」と注意した。

腹も見えるほど前のはだかつてる慶次は、帶をなほしながら不平そうな、怪訝そうな顏をして、

「何や、何か用があんのげ」ときいた。

「あれ、お母つさんが今ゆくだ。巡査にひつぱられて行ぐだ、よつく見ろ。」

父の指す向うを見ると田圃の中を六人の男女が入りまぜに繋がれて、一人の巡査にひかれて行くのであつた。それらは濁聲で高く言ふのでSの耳にもすぐはいつた。Sは直ぐに「はあ、密造したのだナ」と思つた。慶次はさつきの元氣はどこへやら涙を浮べて向うを見てゐる。その友達等も窓口に倚つて口々にしやべつてゐた。

成田では大ていの家では密造酒をこしらへた、自家用のためでなくして、生活難に堪えられずに、こしらへて賣るためであ

つた。在るだけの米はどんなに喰ひのばしたところで知れたものだ。生きるためにはどんなこともしなければならない。見付けられて罰金を課されても、金を拂はずに一ケ月も監獄に行けばいゝと心得てゐるのだつた。

學校の隣の家の女房も門前に立つてそれ等の群を見送つてゐたが、一人の小さい女の子を見ると

『貴様のお父さんが、築館さ壁塗りに行つてだつけ、悪るくすると、直ぐに築館から引つぱられるかもしれねえから、お母さんさ、お父つさんに教しへに行げと言うんだぜ。』

と言つた。その子の家でも密造酒を見つけられたと見える。

『それだつて、お母さんは、山に松葉さらへに行つて居ねえもの』と女の子は悲しさうに言つた。

『そんでは仕様がないな』と女房も歸つて行つた。巡査にひかれてゆく人影は次第に小さくなつた。Sは寂しく始業の鐘を鳴らした。

成田には、たゞ一軒の造酒家があつた、平野の中なので、いつも見張り番が出て遠眼鏡をもつて見てゐた、屆出し以外の酒を澤山に造るためで、税が高いから、そうでもしないとひどい儲けはないのである。税務官もそれを知つて變裝してゆくやうになつた。或る日、密造が發覺して、酒樽は堀端に持ち出され夥しい酒が捨てられた。傍に見てゐた人足共は、『勿體ねえことだ』と堀端に腹這ひになつて、奔流する水面に口をつけてしたたかに呑んだ。堀の水と酒の量とどちらが多かつたかは知るところでない。

密造酒も家の内でするとすぐ見付かるので、田圃の中などに巧妙にするものがあつた。しかし密造酒はいくら巧妙にしても税務署に誰かかゞ投書することが多いとのことであつた。あいつ一人に儲けられてはといふ嫉みのためであらう。

そのためでもあるまいが、成田から三里ほど山奥の某村では一村が共謀して、役場の椽の下に密造酒をこしらへた。誰がつくつたかと言つて詮議されると、村では誰かを出さねばならなかつた。すると八十を超したよぼ／＼の婆さんが

『おれが造りやした』

と申出た。

やはり饑饉の時に米や金品を入れた慈善袋が各町村の役場に分配されたが、それが窮民にほんとうに正しく渡つたのは少かつた。救助米といふものでも、窮民の認印を係員が先づ受け取

つて、帳面を見せずに盲判をしたのであつた。そして『それッ三升『それッ五升』と家族に應じて渡した。役場の小使が助役の辨當の容箱を家に屆ける途中、誤つて路に落したところ、中から白米が溢れ出たといふ風な細かいごまかし方さへあつた。

或る男が一軒の農家の前を通りかゝつた。貧しい農家のこととて中までよく見えた。どこかへ一寸出かけたらしく人のけはひがなく、手の屆くところに役場から貰つて來たばかりの救助米の袋が置いてあつた。飢ゑたる彼はそれを盜まうと思つた。その時、家の中から赤ん坊の泣く聲がした。彼は自分の子供を思ひ出した。もし今、この救助米を盜まれたなら、家族もまたこの赤ん坊も困るだらうといふ溫い愛が湧いた。彼は米を欲しかつた。また容易に盜み得るのであつた。しかし彼は斷念して其處を立ち去つた。

二　旅で聽いた民謠

民謠は言ふまでもなく農民の中から生れたおのづからなる聲であり、土の匂ひ豐かなものである。旅でその地方の農村の狀態を聽き、民謠をきくことは私の至樂とするところである。すでに民謠集で承知してるものでもその地方を背景として、その地方の音律によつてきくとき、その民謠は湧くがごとき感興を誘ひ、特にもまた、未だ知らなかつたものである場合には、その興も一だんと深いものである。私の心に觸れたそれらを、成るべく地方の現狀と織り交ぜて舉げて見たいと思ふ。

お月さまさへ夜遊びなさる
おらだ夜遊び無理はない

會津平野の一隅、奧羽の三樂境の一と言はれる會津東山できいた盆踊の唄である。東山は若松市から平坦な田圃の路を一里、幽邃な溪谷をさしはさんで旅館の櫛比してゐる一廓である。旅館そのものが待合、藝妓家を兼ねてるやうな內容を持つてる他に類のない所で、溫泉がラヂームであらうとなんであらうとそんな事はこの土地繁昌の理由とはなつてゐないのであらう。從つて盆踊なども盛んなもので、溫泉神社下の廣場に高い屋臺を設けて、其上で若者等は太鼓笛を鳴らし、腕達者の藝妓がかはる／＼三味を彈き、屋臺をめぐつて、女連はいろ／＼に假裝したりまた旅館の屋號つきの法被姿で、村の若者はメリンスの襦袢などで踊り廻るのである。

それを圍んで笑ひ興ずる浴客、たまらなくなつて不馴れの手つきで仲間入りする浴客、自動車を威勢よくとばして若松市か

ら驅けつける若者。それらは凡て解放された原始的な歡樂に歌ひ且つ醉ひ痴れてゐるのである。溪谷の上に逼つてゐる眞黑い山々の上にまんまるい月がいつしか覗いてゐる。夜が更けてます〳〵樂しみが濃厚になる。果てはめいめいの旅館にひきあげてからまで、徹宵して踊り狂ひ、且つ唄ふのである。

　會津平野は土地頗る肥沃である、私は飯盛山の附近を散策して、その途中の畑の豆、牛蒡、籬草などのいかにも艶々しく育つてゐることを嘆賞した。また田舍育ちの私にさへはつきりわかるほど、野菜物は凡て美味であつた。東山は賑やかなところであるが、その附近は何處も同じ貧しい農村で、ことに東山の山奥には炭燒きを業とする部落があつて、毎朝早く炭を若松市に積み出す大きい眞鍮の馬の鈴の音がしきりなしに通る。或る時は荷車の上に足を繃帶した四十男を載せて三十位のその妻君らしいのが若松市の方に曳いてゆくのを見かけたことがある。それはいかにも薄い白手袋の車上の紳士や、自動車に客と同乘した藝妓や、旅館の椽で籐椅子に横になりながら女と話してる青年などと、いゝ對照をなしてゐるのだ。しかしいつも勤勞な農村の老若男女も盆には三日の休みを得て、待ち焦れた夜の來たのを喜びながら潮のやうに、東山もしくは若松市へと集るのである。若松市には三ヶ所ほど踊る場所があるさうだが、私の見た監獄跡のは五百人以上の一大集團が圓をなして踊るのであつた。濛々とした塵埃にまみれながら、世にも狂はしい悲しい壯觀であつた。

　この唄はこの地方に限らず、山形、北越をかけて日本海岸にも流布してゐるやうである。そして「おらだ夜遊び」が「まして若い者」と換へられたり、「おらだ」が「殿の」と換へられたりしてゐる。しかし「殿の夜遊び無理はない」といふことになると、其處に卽ち頽なる女性の哀艷はあるが、大きい自然の下に人間の本能を肯定しながら踊り樂しむ合唱の心持が無くなつてゐるやうだ。やつぱり三つのうちでは「おらだ夜遊び」の方が一ばん面白い。

　　イヤサしようたれでもこしらうて出せばエッサ
　　早稲に雀がサたかるよだ

　若松を新潟に向けて三時間あまり、信越本線の接續點に新津町がある。これは其處できいた新津甚句の一つであり、私は嘗て現代の民謠詩人の民謠と比して生れたものと作りあげたものとの差異があり、土地から生れた民謠といふものに生きた「永遠の心」と技巧以上の技巧があり、深刻で端的な表現をしてゐ

るその一例として舉げたことのあるものである。唄の句のうちで、『しようたれでも』は「不性者」から轉訛して『不縹緻者』と解釋するのが至當であらう『こしらうて』は『化粧して』である。つまり唄の全體の意味は『不縹緻者でも化粧し出せば、早稲に雀が寄つてくるやうに男が寄つてくる』といふのである。下の句が殊に田園風な比喩に鋭さを見せてゐて面白い。次のやうなものもそれ〲含蓄がある。

○

今宵はまただまされた
さくら林にわしひとり

○

新町から一の町かけて
お主さがすに夜があけた

○

道樂せば親爺が叱る
親爺取るやうな猫が欲し

一番目の『今宵は』の唄は何といふ美しい情景であらう、春の夜の櫻林にひとり情人を待つて愛慾に汗ばむ輕い恨みと戀しさを感ずる田舍乙女の心がそのまゝ出てゐる。二番目の『新町』も『一の町』も共に新津町の兩端の狹斜の巷なそうである。道樂者の若い亭主を持つた女房の嘆きであらうか。

これらのものはわが民謠として決して上位に置かるべきものでないかも知れぬ。私はこれらを賞めると何んだそんなものに感心するのかと、書棚から民謠集を持ち出して得意げに他の民謠を讀み上げるものがないとも限らぬ。しかし新津町に於て新津甚句をきくことによつて、殊に最初の「しようたれでも」の如きは、農村の唄として、まことに胸に沁み入ることを感ずる、酒席に侍べつた女はみな越後女らしい美しさで、驚くべく無表情な顏をしながら、所謂泣くが如く恨むがごとくといふ風な低調な哀愁の音律をもつて歌ふのである。それは如何にも暗い空と雪の下に日夕を送り情熱を內に燃やす冷たい火の舌の囁きである。それをきいたのは急がしい旅の途中なので、眞夏の晝であつた。廣やかな座敷は明け放たれても、ビールを呷る時、額に汗が流れて止まらなかつた。すぐ前に靑田が續いてゐた。その中に四十女がたゞ獨り這ひつくばつて田の草を取つてゐた。川をへだてた丘の向うには石油坑の櫓が三つ四つ並んでゐた。新津は石油の產地だ、私は停車場に下りた時、すでに赤錆びて大きい石油の貯藏罐を百人近くの女が綱でひいてゐる光景に驚いたのであつた。これらの櫓は小學時代に地理の讀本で見た圖を思ひ浮ばせた。今ではこれも舊式となつて、土を堀り出

すための他の用途に用ゐられてるとのことであつた。田の草を一心になつて取つてゐる女を見ると私はまた別な哀愁に胸が閉された、故郷の母を思ひ出したのである。母は三十年以上も田畑の仕事をした結果、最近は過勞のために痛風になつて、四肢の活動がよほど鈍くなつてゐるのである。大正三年頃、私はまだ母が丈夫な頃に、いつも勤勞な母に感謝しながら、都の片隅で、かく歌つたことがあつた。それはこれまで一度も發表したことがないものなので、今、茲に記して置く。その頃、やはり、詩といふものに唯美的な見方をしてゐたので、つい發表の機會を失つたものの、顧みれば自分にとつて却つて他の詩よりも感慨のふかい詩である。

母

水は湯のやうにぬるんで
稲はみな日にかがやいてゐる
遮ぎるものもない靑の田に
母は田の草を取る
一日を働く
田にちかい
日を一ぱいに浴びた低い青草の丘
低い林で郭公が鳴く
山鳩が啼く
何といふ單純であらう。
山里に日がのぼる
日が暮れる
母はその一日を働く。

汗の尊さ
汗の悲しき
日に焦けた母の肌は
都の生活を夢想だにすることが出來ない
おゝ如何に貧乏しやうとも
私は仕合者だ
一ぱんの仕合者だ。

貧しい自分の農家の母を思ひながら私は嘗てかく歌つた。されば新津町で眼前に見た青田の中の草取りの女が、まるで母そのもののやうに見えたことも當然なことである。

盆買して買つて貰うた
何を
眞鍮のかんざしさらしの手拭
買つて貰うた

高田市できいた三階節の一つである。新潟縣は大地主の多いので有名なことは人の知る所である。その小作人には羽織一枚新調する自由さへ持たぬ程度のものもあつて、そゞろ露西亞の農奴時代を連想させるといふことは、いつか本誌の『農民生活に對する悲しみ』の中に書いたことがあつた。そういふ地方だけにこの唄も意味深長である。正月とお盆とは村人には年二回の最大の樂しみだ、その盆になると田舍の村人達は、最寄りの町に買物に出るのだが、その時、何をその親や兄姉から買つて貰つたかといふに『眞鍮のかんざしにさらしの手拭』である。田舍では女が髮を結ふのに元結でなくして、藁の心のミゴといふ細いのを用ゐるのさへある。『眞鍮のかんざしさらしの手拭』を新しく買つて貰つて新粧を添へる喜び、其處に貧しい農民生活さへ髣髴とするではないか。いつたい人間に必要な衣食住のうち、農民の生活はどれも最低限度であるが、殊に衣と住のために金錢を費すこと全く稀であると言つてもよからう。茲に生活全般の精密な支出の調査を掲げるまでもなく、小作人の家族の一ケ年の被服費といふものは一人あたり五圓以内なのが普通である。これは他の諸雜費をも極度に節約して、しかも被服費にはそれだけしか廻らないのである。いかに農民の服裝が質素であるとは言へ、家族には妙齡の娘のあるのもあるであらう。この民謠は現在に於ても決して誇張でないことを人々は知らねばならない。都乙女にはチョコレートのやうに甘く溶けてゆく抒情小曲よりも、こういふ民謠を讀ませたいものである。道德的な意味でなしに、眞の詩がそういふ處にあることを知らせる爲めに、着實な情緒の成長のためにである。三階節にはまた次のやうなのがある。

○

夜が明けた
寺の鐘撞き坊主とお前のお蔭で
夜が明けた

○

米山さんから雲が出た
いまに夕立が來るやう
ピツカラ、コロリと鳴りて來る

右の二つの意味は說明するまでもない。『米山さん』は有名な米山藥師のある米山である。單純で調子の輕妙なところに田舍人らしい面白味がないでもない。

盆が來たとてお寺の庭に
　切子燈籠の灯が見える

それはてうど舊盆の夜で、富士川のほとり鰍澤の古奈屋で、村の青年にきいた盆踊の唄である。盆の提灯など町や山にちらめくのを眺め、また川近い涼しさを感じながら、二階で、この唄をうたひながら手を拍ち足を廻して踊まはる所謂手踊りを二十人ほど一團になつてみんなでやつたのは愉快であつた。この唄は一本には『盆が來たそだ、お寺の庭へ　切子燈籠に灯がついた』とあるが、私の實際きいた方が說明的でなくて調子もいゝくらか柔らく、遙かに藝術味があるやうに思はれる。

粘土おたけやんが來ないときけば
　廣い釜無川眞の闇

甲府を鰍澤の方に向うと間もなくわたる長橋の釜無川は、河原廣く、水量少くいかにも水の氾濫しさうな川である。これは護岸工事が生んだ唄で、さきの「盆が來たとて」と、共に何の奇もないもので、ことに「眞の闇」などと結んだのは常套な手法であるが、「粘土おたけやん」と言ひ切つた所に、ものにかゝはらぬ勞働者らしい響がある。おそらく美貌のおたけやんは護岸工事の粘土の係りでもあつたらうか。

土地の俳人の市川某君は「西に農鳥東に富士よ四十萬石おらが里」と民謠を新作して私に示したが、甲府盆地の平野は立派にそれだけの收穫はあらうが、農村の疲弊は日に月に加はるばかりで、農村の青年子女は爭うて他國に出稼する現狀はやはり他の農村と大差はない。

女は女工になつて行くのであつた。そして身體を惡くしては農村に歸つて來、然らざるものは都會風をへんてこに輸入して風紀を亂すものが多い。或る村に模範女工といふのがあつた、働きに一段落をつけて鄕里に歸つて來てゐると、また勸誘員に巧みにすゝめられて働きに出たが、結局重い肺病になつて歸つて來た。貯へてきた金で甲府の病院長にも治療を受けたが、療りやうもなくとうとう死んでしまつた。親父は平氣で自慢らしく言うには『あれも若くて死んだが、まあ博士にまで見せたんだから……』とあきらめてゐた。資本主義の社會に於て、模範勞働者であることは、生命を失ふことであつた。

農民の無智に乘じてぼろい儲けをする爲めにいろんな商人が入り込んでゐる。これは獨りこの地方に限つたことではない。江州商人などは、反物を來年までの利子を見込んで高くうりつけ、翌年集金に來るといふ風な、金がなくて着物を着たい人間の弱點につけこんで巧妙な商賣をする。しかも集金に來られた場合も窮乏は同じことなので無理をしたり、いぢめられたりするものも多い。此等の商人はむろん江州人に限らず、他國のものや、隣村の青年などもある。目指した家に行つて、お茶一杯出されたら大丈夫もう商賣が出來ると言ふ自信を持つてゐるそうだ。坐り込んだ場合にお茶も出さないやうな家では、取りつき惜いが、お茶を出すやうな好意を持つ家なら、賣り込む隙があるといふのである。彼等の辛辣さはお話にならないもので、どうしても賣つて金を握らうとするのだ。もともと反物は凡て光澤があつてもまやかしものが多いのだ。

或る寺に商賣に行つた。和尚と梵妻(だいこく)とが居た。商人は反物を並べて買うことをすゝめたが、和尚はそつけなくして取り合はうともしなかつた。しかし梵妻はさすが女で欲しさうでもあつた。商人は一時間も四方山の話をした末に、爐邊の和尚が傍に置いた煙草入に目をつけた。『和尚さんは大へん立派な煙草入をお持ちですね。これを讓つて頂けませんか』と言つた。和尚は意外さうに、

『讓らないこともないが……』と重く口を切つた。

『では、どうでせう、七圓位では』と商人が素早く言つた。その煙草入はよほど以前に二圓で買つた古びたものであつた。

『それなら讓らう』と和尚の顏は喜びに輝いた。

商人はつゞけて言つた。

『あやにく、今、現金は持つて居ませんが、どうでせう、この反物で取つて買いたいんですが』

『なんなら反物だつていゝさ。』もともと和尚は儲かつてゐるので、心がだいぶ柔かく打ちとけて言つた。

『この銘仙は女物の極上なんですが、大奮發して十七圓のところ十五圓にまけて置きませう。』

と商人は言つた。いろいろ押問答の末に、十二圓まで、引くことになり、結局、和尚の懷から五圓札一枚を出さねばならなかつた。

山國の田舍の人に反物を見る明はない。その銘仙は三圓で仕入れて來た光澤のいゝ新銘仙であつた。商人は歸途、その煙草入を機なげに籔の中に捨てた。七圓で買つた煙草入を捨てても商人は差引き二圓の儲けであつた。

村の若者等が路傍の或る家に集つて談笑してた。其處へ商人が通りかかつた。聲をかけてはいつて來て反物を並べて見せた。大島紬といふものを見せた。村の若者は大島紬の高價なことはきいてゐたが、實物を見たのは初めてであつた。村一ばんの豪農の長男も其中に居た、

『これは大島紬といふものですよ。おまへさん達にはわかるまいが、若旦那にはおわかりになりませう。』

と平百姓の若者共を輕蔑して豪農の長男に特に好意ある笑を見せた。長男は自尊心をあをられて、勢ひわかつたやうな顏をせねばならなかつた。

『これからはどこへ出るにも大島紬に限りますよ、第一命知らずで、強くて意氣で。……大島を着る身分になりや人間も立派なもんだ。だがこちとらには、とても一生着られる品物ぢやありませんよ。何しろ高いんですからね。それになかなかさう捌ける品物ぢやありません、金持だなんと言つてもよほど物のわかつた人でなければ田舍では買ひませんから。』と商人は續けて言つた。

初めはその値段をきいただけでも驚いたが、非常に格安にして置くと言はれたので、若旦那は大島紬を買ふ氣になつた。それに値段が高いので、どうやら品物も特別に立派に見えた。商人は結局、一疋の値段がまるで一反のそれに近いほど割引きした。若旦那は思ひ切つて買つた。それでも米三石の價格を超えてゐた。青年達は大島紬を買ひ得る若旦那を驚きの目で見た。しかし事實は一疋が米一石の價格に辛うじてなる程の大島銘仙であつた。

蚊帳を賣る商人が來た。家には婆さんが一人居た。商人はそれを賣ると急ぎ足でそこを立去つた。受取つた金を途中で出して見るとループル紙幣であつた。しかし立ち戻つて抗議を言ふことが出來なかつた。新しい蚊帳として賣りつけたのは、畳んだ表面のみきちんとして、中味がぼろぼろの染めかへしの古蚊帳であつた。どつちも騙し合つたのだ。ループルでは木の葉の小判とかわりがなからうが、ぼろぼろの蚊帳では雜巾にもなるまい。

どうしても儲けやう、商賣をしやうといふことになると彼等は手段を選ばないのだ。少しも商賣がない時は故意に路傍の家の硝子窓を毀したりする。そして辨償したいのだが金がないから反物で取つてくれといふ風にして若干の金を差引きとして受取るので、それで充分な利益のあることは無論である。また大

などに咬みつかれた場合には、それをきつかけにして反物を賣ることを忘れない。

甲府では、また十二三錢の椿油を女學校に七八圓に賣りつけて歩るいて金鵄勳章の恩給を剝奪された在郷軍人があつた。いい油は油煙がたゝぬものであるが、惡い油でも紙縒を左よりにすると煙がたゝぬといふ話で、この在郷軍人はさうして油を賣つて歩るいたのであつた。

村落の農業生活者は地主、商人、また都會への誘惑、に對して荒さんだ心を持つ外に、生きやうがなくなつてゐる。まして「粘土おたけやん」のやうな貧しい美しい女はもはや永久に釜無川の「よいとまけ」などはしなくなつたのである。

夜され馬こさ乘つて
煙草こぱふ〳〵煙こふよ〳〵
豆坂下る
夜さのソウラ、ヨウヤド。

これは弘前できいたヨサレ節といふのである。「豆坂」といふのは九十年前の大饑饉の時に、その坂をのぼり切れずに百人ほど死んだ所なさうである。おばこ節などに「螢の蟲こなど飛んでくる」とあるやうに、東北地方では名詞の下に『こ』をつけて馬こ、牛こなど呼ぶことが多いが、この歌は全體としても、どこか飄逸な呑氣なところがある。「煙草こぱふ〳〵」と吸つて「煙こふよ〳〵」と吐いてその豆坂を下る、何事も天にまかせて無關心らしい東北の農民の表情も見えるやうに思はれる。

何しろ自分の土地でとれた米が無くなれば喰ふものが無い時代のことで、饑饉の慘禍もよほどひどかつたらしい。故老の言ふ所によると茶碗の蓋にはいゐくらゐの米を十五人ぐらゐで水にしてのんでた人はまだいゝ方で、喰べ得る限りの野外の草根木皮は爭つてたべ、松皮餅（松の上皮をはがして、その下の皮をはがしたもの）を食べたりしたがそれでも追ひ付かなかつたのだ。

流浪して乞食に出るもの無數で、乞食が來た時はなんでも手近にあるものを直ぐとつて呉れてやらないと、軒下で死なれるので困つたもので、道路に饑死するものも多かつたさうである。さてこそこの呑氣さうなヨサレ節にある豆坂は、その最も面を背けさせた處として記憶され且つ歌はれたものであらう。

青森縣でも南部領と津輕領と比べると、津輕領の百姓は、食物が著しく上等なさうである。日に少くとも二度も魚をたべ、白米だけの飯を一日一升位平らげるのである。殊に最上の米を自家用の飯米として除き、その他を小作料として納付する如き

は他の地方の産米検査にびくびくするに比して、なかなか心得たものである。また、麥はよほど貧困なものでないと喰べないものとされ、從つて麥を作るものはそう多くない。宮城縣地方の農民は粗惡な米を自家用とし、麥飯をたべるのは上等の部で、馬鈴薯、大根等を刻んで米と半々位にしてたべ、魚も一月に數へるほどしか食べないのに比すると、食物の點から言へば津輕の小作人は宮城の地主以上とも言ひ得るであらう。青森から秋田にかけては冬の期間が永いので、大酒家が多く、密造酒がいまなほ盛んに行はれてゐるさうである。

そうかと言つてそれで辛うじて人間並なので、むろん贅澤といふほどのものでない。農民の不幸はどこでも變りはないので他の衣と住とはみじめなものである。

副業として養蠶等の外に林檎作りがあるが、數年來價格のよい時は百五十個入の一箱が中味の林檎だけで八圓前後したのであるが、景氣のいゝので林檎作りが殖えたのと、世間の不景氣のために、昨年の秋は百五十個入のものが一箱僅か五十錢に下落したさうである。いかに勤勞であつても農民自身の知らぬ需要と供給の目標なき動搖の悲劇が玆にもある。失望のあまり林檎の樹に頸をくゝつて死んだものもある

一昨年あたりまでは藁の加工品として北海道に賣り出すトマ織りといふのがあつた。一枚十五錢で子供さへ一日一圓位の仕事をしたのであるが、それも不景氣で買ひ手がなくなつた。農民は仕事をすることは厭はないのであるが、生活を樂にする適當な仕事がないのである。

弘前地方で歌はれる『彌三郎エー節』といふのがある。嫁入り先を出された女が夫に執着を持ちながら、その親子を怨み歌つた一種の數へ唄であるが、脈々として農民生活の哀愁の出てゐるものである。殊に女それ自身がたどたどしい言葉を綴つた所に一層の深刻さがある。

一ツエー 木造(一) 新田(二)の相野村 村のはづれの彌三郎エ
　一、それも彌三郎エ
二ツエー 二人三人と人頼んで 大開(三) まんくろから(四)
　嫁もろた それも彌三郎エ
三ツエー 三つ道具揃つて貰つ嫁 貰つて見たとて氣にくはぬ それも彌三郎エ
四ツエー 夜草朝草刈りに行つても 遲くもどれば いび(五)られる それも彌三郎エ
五ツエー 一から十まで氣にくはぬ 口に三度の口つもる(六)
　それも彌三郎エ
六ツエー 無理な親衆に使はれて 十の指から血を流す

それも彌三郎エ
七ツエー　なんぼかせいでも働いても　つける油こもつけさせぬ　それも彌三郎エ
八ツエー　彌三郎家ばり日こ照るな(七)　村のはづれこも日こ照るネ、それも彌三郎エ
九ツエー　此處さ來る嫁みな馬鹿だ　親も子供もみな鬼こ
それも彌三郎エ
十ツエー　隣知らず(八)のぼた餅こ　嫁さ食はせねで親子ばかり　それも彌三郎エ
十一ツエー　十一日は倉開き　倉も開かないで嫁いびる
それも彌三郎エ
十二ツエー　十二山の神餅つきだ　餅こ食てだら村廻はれ
それも彌三郎エ

(註)(一)木造……町名
(二)新田……耕地整理もしくは開懇した田
(三)大開……地名
(四)まんくろ……嫁の父の名
(五)いびられる……虐待される
(六)ロつもる……食物制限する
(七)日こ照るな……日は照らない
(八)隣知らず……隣に知らせない

三　地主と犬の事

果して黎明は近づいたのか、暗は深い。もとより個を以て全を推斷することは出來ないが、貧しきが故に墜る罪は、富の暴力ほど惡くはない。わが日本で私が次に擧げるやうな實例と地主心理は特殊のもので、共通なものでないと言ひ切り得る者、果して地主の何割あるだらうか。其の故にこそ私が斷片的に例證する實例も何かの意義があり得ると思ふのである。

平日は農夫で、閑暇の時は賣藥の行商人でそしてまた詩人を兼ねてゐるM君は最近、來訪して農村に就て談話して行つたがその一節にこんなことがあつた。

『一ケ月ほど埼玉方面を歩るいて來ましたが非常に暗い氣分になりました。あつちの貧乏な百姓はすばらしい位でした。一日歩るくと呆氣にとられる位の家が二三戸はありました、たとへば板間もなく、土間に莫座を敷いた一間に家族が四五人住んでゐるのです。しかしそういふ家に限つて澁茶をすゝめたり、どこに錢があるとも見えないが、片隅でゴソ〳〵させてきちんと藥代を支拂ひます。冬なども寒さも

相當にきびしいでしようが、よく凌げるものだと思ひました。それに比べると私の奈良縣地方は氣候もいゝし、あゝいふ極端な貧乏人も少いし、よほど樂なやうです。

農村の改革案もいろいろありませうが、然し私の眞に欲するものは、農村に於ける役員に就てです。これまで役員と言へば大低地主がやつたものでした。そして彼等は小作人の無智を利用して、勝手なことばかりやつて來ました。

ちよつとこれは私の村の實例ですが、數年前から、村の役員は有產階級の者と無產階級（小作人）とが半數宛位に選擧して役につき、おたがひの意見を交換して、地主と小作人とがよく調和してゆくやうにしてゐます。所謂小作役員（又は物代とも言ひます）は地主と小作人の間に立つて、相互の利益の向上をはかることです。これは私の村などが率先してやりかけたもので、未だ他村では實行してゐません。農村自治上、これはまことに結構だと思ひます。地主はすこしは小作人にその場所を讓つてもいいと思ひます。この役員の平等選出を全國に波及したいと思ひます。

農村に於ても彼の工場法と言つたやうなものが欲しいと思ひます。即ち農村の賃金勞働者に。勞働時間の長短は農村勞働者は問題にしてゐない樣ですが（冬は短く、夏は長くても苦痛する關係上）怪我をしたり、死んだりしたときの規定がないことです。これは一日も早く定めないと悲慘な勞働者が出來ませう。

十數年前、私の村の一等の資產家が、その小作人を傭つて高い柿の木の枝を切らしたのでしたが、その男が木から落ちてひどい負傷をしたのです。そして長い間、苦しんだ揚句、貧乏と傷手を悲觀して首を絞つて自殺して了ひました。しかしその地主は、一日分の日傭賃金と米二升とかを添へてやつたばかりだと言ひます。その遺族の者はそれから乞食のやうな生活をしてきました。私はこの話をきく度に、どんなに憤つたか知れません。それでこの農村賃金者のことについて、規定といつたやうなものが欲しいと思ひます。それから次の話は、私が兵隊から歸つた昨年の話ですが、かうです。

私の村の隣りに、柏森といふ割合に金持の揃つた村があるのです。その村にこんな規約が出來たことです、他村から流れ込んで來たものは追放するといふことです。理由も何にもありません。その爲めに五家族はその村を立つてゆきました。そのことに就ては新聞も大分書き立ててその村を攻擊した相です。

私はその村の人間の心が憎くて憎くて堪らなかつたのです。自分の金儲けを、他村から來た者にされる。それだけの汚い心からその人達を追ひ出したといふ、實に言語同斷だと思ひます。』

地主が小作人を蟲けらのやうに思つてること、勞力に對してその正當な報償を思はないこと、それ等はやつぱり私の郷里地方に類似してゐるものであつた。時代はいくら變つたとは言へ事實はどれだけ變つたらうか。

明治四十三年の夏、溫泉村八湯はその沿線の荒雄川の大増水と山津波で三百人の死者を出したが、丁度その數日前に、縣下の一二の大地主の息子が小作人に馬に送られて溫泉に行つた。送つて行つた小作人は歸途、川を渡らうとするとすでに橋が落ちてゐたので、少し深いとは思つたがさほどでもなささうなので、馬で越した。馬もろとも流されて、小作人はやうやく助かつたが片眼をつぶしてしまつた。馬は行衛も知らず流されてしまつた。しかしその地主から出た弔慰金は馬そのものを一頭購ふ半額にも足らなかつた。

『地主の機嫌は取んなげねえ
地主に憎まれりや
神樣に憎まれると同じだあ』

といふ一節を持つてる民謠を曾て私は作つたが、その取材は美貌の妻を持つてる小作人が、地主であり代議士である豪農にその妻を常に妾のやうに公然とされてゐることを唄つたのであつた。中老の小作人は他郷にゆく氣力もなく、その土地を離れることは同時に生計の路を失ふことで、魚が水を離れるごとき恐怖であるのだ。いかなる屈辱も忍從しなければならないのだ。

愛知縣知多郡××は金持揃ひの處で、また見識ぶる所である。家門一族などいふものの體面を重んじて、どこかが一軒沒落して他に家産を渡すやうな場合には、一門のうちの誰かが買ひ取るのである。また家憲といふものがあつて、どれ位の資格の人が來るまで本門といふものを開けない。悲慘なのは小作米を運搬する小作人で、門外で車を止めて狹いくぐり戸から、辛うじて一俵づつ運び入れて遠い倉まで擔つてゆくのである。くぐり戸は高さ四尺、幅二尺足らずなので、自轉車と人とが一緒にはいれぬ程度なのである。どんなに他に不自由させても冷然としてゐる處に彼等の時代遅れの冷酷さがある。

甚しい人間同志の無意味な差別と障壁とは人間を反抗的に導かずに置かない。勞働は神聖だと言つても勞働してゐる人々は

どれだけ幸福な位置にあるのか。たとへば熱田から常滑まで電車九里であるが、その沿線の農民はいつも海岸の別荘とか新舞子あたりを見にゆくブルジョアの華美な生活を見せびらかされてゐるので、おのづから他の土地の農民とは違つた感情を持つてゐる。何故に私達のやうな乙女が湯のやうな炎天の下の田の中で田の草を取り、何故に彼等は着飾つて『神のごとく綺麗』に笑ひ興じてゆくのか。何故に私達若者が暗默して終日、汗を流し土を耕してゐるのに、かの紳士といふものは藝妓と戯れてゆくのか。歡樂を欲するは人間の性情である。こういふ對照は人間の生存する到る處に見得るのであるとも言へやう。一を永久に忍從せしめ、他を放埒に解放する世界は、いつまでもそのままで在り得ないのである。

　極端な一つの例がある。二十年間も農村學校に忠實に勤めた小使が、その校長に隨行して、東京に來り、富豪××家に行つた時、玄關脇に犬が絹布團の上に寢て、番人が一人恭しくついてゐるのを見た。犬でありながら何といふ尊まれやうであらうか、私は一度も絹布團に坐つたこともないのに……アア」と大いに厭世觀を起して其場で號泣したといふことである。形が犬であればこそ強く印象したのであるが、それは犬と對比せずとも、心あるものは人間相互の生存に就ても差別の甚しきに泣かざるを得ないであらう!

四　小作人と其の妻子

『君達は一生の望みとしてどんなことを望むか。』

と那須野ヶ原の或る農場の小作をしてゐる若夫婦にT君はたづねたのである。すると

『一年中を食ふだけの米を持つて仕事したいと思ひます。』とその夫婦は答へた。

　小作人はもとより自作農も、一年中を食ふだけの米を蓄へて置くことは不可能のことなのだ。たえず彼等は食物に追はれてゐるのだ。農夫の苦みは、農業勞働そのものも勿論樂ではないが、生活難が更に大きな脅威でなければならぬ。勞働してその手で食はねばならないといふところにほんとうの味ひと善行があるので、何にもそれで食はなくともいゝ勞働ならば、何の詩にもならないものだ。寧ろ勞働は遊びであり贅澤であり、愉快なものである。私は少年時代に苗代搔きの手傳ひをしたり、田植の苗散らしなどを手傳つたことがあるが、今でも鮮やかしい記憶となつてゐる。それは働きながらもいつも傍觀者であり、生活に何等關係がないからである。

　雲ケ畑御獵場で勢子が打たれて問題になつたのはごく最近で

あるが、やつぱりその少し以前に、那須野附近のある御獵場でそれに似たやうなことがあつた。華族といふものはどんな樣子をして鐵砲を打つものだらうと好奇心に驅られて、ある農夫は林の中に覗きに行つたのである。然るに外れ玉で足をしたゝか打たれて重傷を負つたのであつた。それを見てゐた他の農夫は華族が打つたのだと言つたところが、『とんでもないことを言ふ奴だ』と警官に散々になぐられたのであつた。結局、隨行してゐるものがうつたといふことになり、百圓で示談になつたといふのである。

やはりこの地方では農休日のことを神事(かみごと)といふそうだが面白い言葉だと思ふ。休み日も人間の放恣な怠惰のためでなくして、自然の命なのである。故なくして一日怠ればそれだけ田圃が荒蕪するわけなのだ。少し粗(あら)つぽい言ひ草だが、唄にも

　お正月七日の神事(かみごと)あるに
　　お盆の畜生めたつた三日

と言ふのである。

小作人の嫁連といふのは勤勉ならざるを得ないであらうが、農閑の日などには男にも劣らぬふざけ方をしてゐる。自家の白米を二升、三升とクスネて田舍廻りの棒手振りの魚屋や吳服屋に買つて貰ひ、それを小遣とする。嫁どもはその金を持つて寄り集つて酒を呑み歌ひ興ずるのである。つねに粗食なのでこれより樂しいことはないのだ。

農家の副業もいろ〳〵ある。たとへば愛知地方などでは養蠶、煙草、草刈、養雞、蔬菜などで、殊に蔬菜の栽培は期節はづれのものを早くつくることによつて莫大な利益を得ることが流行してゐる。自然の與へる光と雨とにまたず、人工によつて、農業を著しく企業的にした。卽ち溫床(クレーン)をつくつて胡瓜とか茄子をつくる、溫床とは南向きに高さ一尺に一尺五寸位の傾斜した塊をつくり、硝子ばりにして、胡瓜を上方に這はせるのである。二月頃つくられた茄子は一個四十錢乃至六十錢の價格を持つ。普通の期節に出來たものなら茄子百個二十錢位なのだから、溫床栽培に比すれば、醇朴な無技巧な農夫のすることは馬鹿としか見えまい。

また十坪千圓位で溫室をつくり葡萄をこしらへる、百目二十圓もする。(ナポレオンなどいふ種類)、風雨にあたらないので味が柔かい。出來は普通よりちよつと早いだけて六七月頃なのである。

いつたいそんな高價なものは、どこに行つて誰に味れるものか。

こういふ副業と對照的なものに、人毛工業といふのがある、か

もじ等にする毛髪の整理をするのである。同地方の加木谷といふ處で、穢いけれども金になるので、それに從事するものも多い。町を貫ぬく清い川は毛髪を洗ふために、いつしか溝川よりもひどいものになつた。附近には呼吸器病のやうな厭やな病氣が流行するやうになつた。重に女の若いのがやつてゐるが、腕から胸にかけて垢と油で光つてゐるのはこの世のものとも思へない。人間の身肉までいやな古い毛髪の匂ひが浸みこむのである。小學生までひまびまにやつて一日五十錢位はかせぐのであるが、その不潔さに教師が困つてゐるとのことである。

今年、還暦の祝をする郷里の父親は一箇の村夫子であるが、近頃、詩を作つたから見てくれと言つて「米の御飯になるまで」といふ新體詩を送つて來た。その手紙の端に童謡をも作るつもりだと言つて來た。私はいつもながら老いて益々若々しい父親の心境に微笑しながら興味をもつて讀んで見た、調子が堅くてどこか唱歌のやうな感じだが、忘れかけてゐた田園の記憶が新しく甦へつて來て、なつかしさを感じて來た。いつしか私も「米の生る木をまだ知らぬ」都會生活の中にはいり過ぎたことを感ぜさせられた。

米の御飯になるまで

我等の食する御飯は
百姓辛勞の米炊ぐ。

春早く籾を選んで水に漬け
芽の萠えしを苗代に蒔く
苗三四寸にのびし頃
田の畔を塗り土をよく碎き
水かけ平にしろを搔く。

苗移し植える田植終へ
見渡す限りの青き田を
見廻り水を増減す
夏の炎天に草を取る三四回
苗の成長を樂しみて
日々の苦勞を忘れ働けり。

涼風吹きくる秋となり
薫り床しき稻の花
靡く穗波の美しさ

害する鳥や蟲防ぐ
鳴子または案山子立て
風の吹く日も雨の夜も
倦まず豫防に勇しき。

稲稔れば田の水落す
初冬から刈り稲を乾す
稲を扱きのぎを打落し
籾を挽き米と粃とを分ち
臼に米を搗精け御飯にする。

小作人の要造一家は貧しかつた。娘が結婚するときの嫁入道具は田畑に働きに出る襦袢と股引等の野良着物を一つの行李に入れただけであつた。それでも自家に飼つてゐる鶏を一羽つぶして十人ほどの客に酒を振舞つた。要造の嫁のお産の時はいつも産婆は頼まなかつた。年寄りの姑が枯木を集めて歩るいて湯を沸かすのであつた。そして隣家から新聞紙を貰つてきて脱脂綿の代用をさせ、古びた鋏で臍の緒を切つた。六人の子供がいつもそうして姑の皺だらけの不馴れな手で取上げられた。

母は間もなく勞働に出ねばならないのだ。そうした幼兒は莚を田畑に持つて行つて敷き、その上に寢せて置いてときどき添乳するのである。子供が歩けるやうになると何かに使ふのだ、六つ位で赤ん坊をおんぼしてるのも珍らしくない。

これは要造一家ばかりでなく、田舎の子供はそうして育つのが多いのだ、また要造一家程度の貧乏な生活狀態は一村に必らず何戸もある普通のことである。村を經めぐつて歩るくかのM君の話もそれを證明してゐる。

五　輕便鐵道と農村の荒廢

この間、歸鄕して來た農村の見聞を終りに加へやう。新田驛から私の鄕里の築館町まで二里半の道程である、五月十六日の午後五時、人力車を走らす。苗代の苗はまだ二三寸、桑畑の桑は一寸ほどの葉を揃へてゐる。蠶がつい四五日まへに孵化したのだ。柔かい苗が黄味がかつた緑の色に萠えてゐるのを見ると少年時代に『夜とぼし』といふのをやつて鯲を取つたことを思ひ出す、夜、松明をつけて苗代を見廻ると鯲がじつとして動かないでゐるのがよく見える、それを竹の先に針をたくさん並べたもので上から被ぶせるやうに突くのだ。刺されて上げられた鯲はキュツ、キュツと聲をたてて、さるの中に収められる。一晩に二三合はとれるのである。今の子供もやつてるだらうかなどと

思ふ。

田畑のなかの數軒の農家を見てだらだら坂をのぼると、大きい沼が見える。私を乘せた人力車は沼の左岸を走る。沼の水は漫々と溢れるばかりである。沼に注ぐ小川が雪しろで增水したため、しぜん沼も岸を越すばかりに水を湛えてゐるのだ。この沼のほとりを通ると、周圍の民家の貧しさや、朽ちたやうた小舟などから來る連想でもあるが、この邊で魚介を稜つて生存してゐた土蜘蛛時代の原始民族が浮んでくる。實際、對岸には今なほ穴居時代の遺蹟である數箇の穴がまだ殘されて、石斧や矢の根石などが畑の中に散見してゐるのだ。

路傍に自轉車が横へられて、土堤下で釣してゐる二人の若者があつた。見ると一人は町の醫者の三男で小學時代の友人であつた。二里もある此處まで釣に來てゐるのである。挨拶して別れる。車夫の言ふ處に依ると、こんど東横丁に弟と共にめいめい一軒の家を新築して、別家になつたが、何にもしてゐないのだといふ。農村では二男三男が耕作しやうとしても耕作のためにわけて貰ふ田畑がなく、止むなく出稼ぎに出るのが普通であるが、これはまた徒食して悠々たるものだ。「結構な身分だね」と私が車夫に言ふと、「そうでがすよ、仕事と言つては料理屋はいり位なもんですからね、いつたいに金持は得ですよ、だが私等だつてまあ稼げば暮して行けるんだからそう不幸だとも思ひません。たゞ面白いものを見たり聽いたりすることが出來ないんでね。」と言つた。一生勞働だけして全く面白いものを見たり聽いたりすることが出來ないといふことは簡單なやうで重大な意味がある。

車夫の前曳きを勤めて走つてゐる大きい赤茶けた犬は荒く喘いで苦しさうである。この邊の習慣として車夫はみな一匹づゝ犬をつれて勞力の分擔をさしてゐるのだ。沼を過ぎると畑中になりまた小川の岸を走る、荷馬車の荷の上に二人の乙女が乘つてゐる、荷物のやうに運ばれてゐるのは、此の邊の人々の貧しさと純朴さを示してゐる。何もガタゴトする荷馬車の上が乘りいゝわけでもなく、いくぶんの羞しさもあらう。しかし都會の女ならいくら貧乏でも出來ない藝當である。熱く苦しさうに喘いでゐる犬は綱(つな)を放してもらふと、いつさんに小川の中に飛び込んで、水に身體を浸していゝ心持さうに休んでゐるのは痛々しい。「ヒウツ、ヒウツ、これ！」と車夫は聲をかけて、犬の來ることを促す。今年の六月末に開通する見込だといふ輕便鐵道が町の方に向つて伸びてゐる。四五年このかたの提案であるが漸く通ずることになつたのだ。

向うの森でカッコー、カッコーと太く鮮かに呼ぶやうな鳥の聲

がする、鳩ほどの大きさで、この邊ではカッコー鳥ともいふ、郭公と書けばホトトギスの一種のやうに思はれるが、啼き聲も形も全然違ふもので、晴れた夕かたなどにきくと、いかにも田舍らしい感慨を誘ふ鳥だ。桑畑のかなたに赤く夕日が沈みかけてゐる、故郷の丘である藥師堂の杉の森がこんもりと見える。

東横丁にはいつて驚いたことは先づ窮乏の影のあまりに著しいことだ、屋根は古く朽ち、柱はよろめいたまゝである、そこに餘裕のある富の姿といふものはない、それに下水を堀るために黑い襤褸姿の十數人の男女が夕がたの薄暗い中に何やら騷ぎながら立つてゐる、一日の仕事を終へたのであらう。家並そのものも襤褸姿で立つてゐるやうな侘びしい感じである。もともとこれは二男三男や他所から來た者の家々が町の出店のやうに伸ばされた町であつて、本通りはさほどでもないが、荒寥たる感じはやはり深いのである。これが私の生れた町なのである。少しも成長することがなく、しかも一人の人間のやうに老いてゆく町の感じである。町はこれではならないのだ。少しでもよくなり、希望を持つてゐねばならないのだ。しかし、事實は外觀よりも更に悲慘であつた。特殊な生産物といふもののない純粹な農業地で、商店と雖も購買力の薄い數ヶ村を控へてゐるに過ぎないから、活氣のありやうがないのだ、しかも何の必要あつて輕便鐵道がしかく必要であつたらうか。

農村は實に金といふものに哀れなほど乏しいのだ、私は子守を欲しいと思つて半年ほど探して貰つたが、ついそれらしいものが見當らなかつた。最近五ヶ年間の年期で十四五歳の女の子が僅か百五十圓乃至二百圓で埼玉地方に女工に買はれて行つたもの六十人もあつて、子守になるやうなものは町村に痕を絶つたのである。その二百圓なども一回に渡さずに百圓だけ渡して、暫らく樣子を見てから、後で渡すといふ條件なさうである。その群の中でたゞ一人四百圓といふ破格の値段のがあつた、赤坂といふ村（赤坂と言へば東京の狹斜の巷を連想するが、この赤坂は舊道筋にあたる貧乏極まる村で、戸數三十位、田地を持つもの僅か一二戸に過ぎず、草履、竹細工で細々と糊口をつないでゐるので草履町の名がある。）の娘で、非常に聲がいゝので高價だつたといふのである。疑を持つことの少い町村の人々は聲がいゝので歌を稽古さして蓄音器に吹きこませるためだと言つてゐる。しかしその上に容色もいゝのであつたかどうか、私はつい聞き漏らしたが、何しろ二三百圓の金で人間が賣買されてゐるのである。女工などに行くのは奉公に行くとはだいぶ意味が違ふであらう、當人の心身、運命などの點から見ても、再度と浮び上かれない運命的なものであることは、殆んど凡ての實例

が示してゐるところだ。しかし親にとつては百圓以上の金を一時に握み得るといふことは、抑へることの出來ない誘惑なのだ。

輕便鐵道がひかれるといふことに就ては町は三萬圓を負擔しなければならなかつた。それに對して町會議員共はどう決議したかといふに、普通は各戶の富の程度に比例して租稅を分擔すべきであるが、有產階級から成る町會議員は自分達の損になることは贊成出來ないのだ。中にも町內一の富豪で米穀商の太吉といふ者などの發議が通り、三百町の町有地を賣却することに決議した。その町有地の大部分は山林であるが、開墾された何十町かの田畑もあつた。それは土地を有しなかつた者、若しくは勤勞な農夫の手によつて、何十年以前から開墾し拓かれたもので、其處から其處まで誰の分といふ風におのづから定まつたもので、法律上、確たる所有權もなく、ごく輕い租稅を納めて來たのであつた。町から半里乃至一里の距離があるのと、土地が瘦せてゐるので、施肥、耕作の點から見ても實際そういふ種類の人達でなければ耕作し得る土地ではなかつたのだ。畑には桑を植えたり、豆、麥、馬鈴薯等を作つた。つまり町の無產階級の群が持つてゐる唯一の土地であつたのだ。それだけ血や汗が深くその土ににじんでゐるわけだ。

然るに町會議員中には反對するものもあつたが、最も有力な太吉側が多數を占めてその町有地の賣却を主張しそれを貫徹した、そしてそれは分賣せずに唯一人に賣ることを決議した。太吉の腹では町內では誰もそれを買ひ得る者のないのを見透してゐた。そして自分が安く買はうとした。少くともその半額位にーー反對側の町會議員達は無競爭で安く太吉に落札することを虞れて、糾合してそれの競爭者となる運動をした。太吉にとつて强敵が現はれたわけである。太吉はどうしても自分の手で買ひたいので、最初の算盤より遙かに多額の金を出して二萬なにがしで彼の手に落札した。それでも極めて安い値段であつた。

しかし、これまで町有地を耕して來た貧民階級はどうなるか。彼等はこれまで愛育して來た土地を完全に取り上げられたのである。小作料を出して耕作してはとても間に合はない瘦土なのだ、彼等の或る者は自分達の植えたものだといふ理由で、大きく育つた桑の木を伐り倒して來ては薪とした。かくて土地は開墾以前の荒廢に歸りつつある、橫野なる貧民達も言ひ知れぬ憤怒に胸を燃やしつつある。無產階級はその利害に永久に發言權がないのだ。町會議員はそんな施政の方針をたててまで、自分の割り前は少しも出したくないのである。太吉のやうなものは、それをいゝ機會に私腹を

肥やさうとしてゐるのである。これまでさへ食ふや食はずに貧乏して來た人々はどうして生きて行けるか。

輕便鐵道が出來、停車場が出來るといふので、停車場附近の土地は著しく騰貴した、坪五圓のものが三十圓位になつた。商人等にとつて、また何か企業をしやうとする金持にとつてそれは問題であらう。しかし一般の農民にとつて何物でもないのだ。米穀商である太吉はいち早くその邊の土地を買つたが、その停車場前の角に當る十畝ほどの土地は某家の所有で、何度交渉を重ねても賣らなかつた。太吉は手こずつてゐた、其の上にその十畝の土地は或る他の米穀商に貸すといふことを聞きこんだ太吉は、心はなはだ平かでなかつた。停車場前に幅七間の大通りを作るに二つの案があつた、第一案は停車場へ正面に東横丁から、第二案は町の大通りに向つた停車場へは斜めなものであつた。孰れにしても某家の所有の十畝の土地は角になる好位置にあつた。町會議員達にとつて問題になるのは、どの通りが町のために最も便利で、停車場としていちばん美觀であるかといふことより、その沿線にどれだけ自分に好都合な自分の所有の土地があるかといふことが先づ問題であつた。第一案が通過した、その附近には町會議員達の所有の土地が多かつたが、しかしこれは大問題といふ程のことでない、問題は次にある。大通りは無論、停車場から正面にひらかるべきである。然るにこれを着手する以前に、太吉は消防夫を召集して、停車場とは三間ほど喰ひ違ひに道路を設計して桑畑の桑の木を全部伐らしめたのである。即ち角に當る某家の土地の過半は道路となつて、どんな小さな家を建てる用途をも成さぬものとせしめたのである。町長がそれを聞いて驅けつけた時は、既に桑の木を伐つたあとであつた、そんな横暴なことをやつても太吉が人に責められるよりも、町長が、責任を負はねばならぬ仕末である。何の理由もなしに停車場と喰ひ違ひの七間幅の道路、そして太吉の獨占の新しい建物、そして輕便鐵道を利用して、機敏活潑な米穀の取引、それを考ただけでも彼はいゝ氣持なのであらう。

某家には太吉から十年前から三百圓ほどの借財があつた。年々利子を入れて來たので元金だけで借財は殖えなかつた。太吉は五六年前から高利なものを普通に利下げることを口約したので、某家では年々その割で仕拂つて來た。某家では太吉に全部の借財を仕拂ひに行つた、然るに今度土地を賣らぬいきさつがあつたのを根に持つて、太吉は中途で利下げした覺えはないと言ひ出した。年々利子を仕拂つた殘額が立派に利下げを證明してゐるのであるが、物言ふ證書はなかつた。某家では仕方なく百圓餘も多くの利子を仕拂はねばならなかつた。農民のうちで

は彼から借財して一度返濟したものを、古證文を盾に催促されて、農民では證書を無くしてゐるので二度取りされたものも多いとのことである。實際、農民は一度返濟したらそれでいゝものだと思つて、證書など保存して置かぬものもあるのだ。昨年新潟に旅行した時も、それに似た穢多の勘公といふ男の話をきいた。その男は別に穢多なわけではないのだが、强慾者で心情の陋劣さから名付けられたもので、一度返濟した金を二度かへさせたことが多い。また床板をはしかへに拵へらせて桝の安定を得させず小作米の俵をつくりなほして賣り出したので、勘公の米といふと米屋で安くしか買はなかつたが、それでも俵の數が多い方が儲かつたといふ。今ではそんなことでは通るまいがともかくそんな風にして金をためたのだ、その娘を貰つた青年が苦行庵草舍など言つて、一部流行の無產苦行を標傍してゐたことなども片腹いたく勘公なる者の面貌に心の内で唾をしたが、それにも劣らぬ非人間が自分の鄕里で横行してゐるのを見ると、社會共存の叫びは、まるで夢のやうに遠いことのやうに思はれる。こうした時代おくれのエゴイズムの權化は、その生命なり財產なりが脅やかされる時代が來たとしても、寧ろ至當なことである。大多數の人の幸福はいつもこういふ人間に蹂躙されるのだ。童話に惡魔といふものが出てくるが、農村に輕便鐵道がひかれて人心の荒廢日に甚しくなるといふことは正しい社會ではあり得ないことでないか。ヴェルハアレンの『觸手ある都會』の觸手は鐵や煉瓦や漆喰のそれで作られたのであるが農村の實狀から見れば、私はそれらに伴ふ人間の惡でつくられた戰慄すべき觸手を思ふのである。(完)

無產者から出た世界的作家と無產者を主題とした世界的作品

千葉龜雄

(1) 無產階級としての或る作家達

靑白く顫へる顏

デンマルクの首都コッペンハァゲンで、日刊新聞「ポリチケン」の編輯局に起つた話。

或る日一人の靑年が、一篇の原稿を持つて編輯局に現はれた。ノウルウエイ生れの者だとか。居合はせたのは、編輯記者のエドヴアド・ブランデスであつた。どこの編輯局にもよく通つて居る流義で彼は別に原稿の內容も改めずに、たゞ長過るといふ口實でうまく斷はらうと思つた。が、その斷はりの言葉が唇だけで消えてしまつたのは、ブランデスが、その靑年の顏を一目見てからであつた。恐らくこの長い間、「ポリチケン」新聞社の閾をまたいたもので、これほど窶らしい姿をして、これほど痩せ衰へた人間がまたとあつたらうか。それなのに、その靑白く顫へる顏の表情に或るものが潛んで居る。ガラス窓の後に吸ひついて居る海のやうな瞳も、我知れずブランデスの心を捉へた。そこでブランデスが原稿を自宅へ持ち歸つて讀み始めると、無情であつた自分をしみじみと後悔し出した。なぜなら、此作物によると、主人公らしい若い天才は、今頃は食ふ物もなくてすつかり弱り切つて居る時分だから……。そこで彼はこの見知らぬ作家の名宛をかいた封筒へ、十クロォネの紙幣を封じ込んで、停車場から大忙ぎで出したものだ。そして最後の場面をなほ讀みつゞけて居るところへ、例の靑年がおこりつぽい宿のおかみに氣がつかぬやうに、こつそりと上つて來たものだ。金包みの封筒を受取つたので、氣ちがひになるほど嬉しかつたといふのだ。成るほど十クロォネはこの作の主人公が持ち得る最高度の財產であつたから。

その晩にブランデスが、スウヱデンの批評家アキセル・ルンデガルドに遭つたので、不思議な靑年作家の作物が、どんなに自分を動かしたかを話してから、「それは單に文才があるどころぢやない。全く咽喉をしめられるやうな深刻さがある。まあ、ドストエヴェスキイに似た或るものが在るとでも云へるやうな……」といふと、ルンデガルドが、「へい、本當にそんなに素晴しいものかな。で、表題は何と云ふのだ」「飢え」「して作家は」「**クヌウト・ハムズン**」

一九二〇年の秋に、スウエデンの國王からノベル文學賞を受けとつたところの、ノウルウェイの現代作家クヌウト・ハムズンは、國の違つたデンマルクで、始めてその藝術の輝やきが發見されたのである。彼の作物「漂浪者」若くは「飢え」の主人公

のやうに、彼は全く裸一貫の無產階級者として。……かくて彼はエドヴァド・ブランデスの好意の下に處女作「飢え」の初めの部分がコッペンハアゲンでの新思想を代表する雜誌であるところの「新らしい土(ニユウ・ソイル)」にのり始めた。それが一八八八年のことである。そしてこの出來事は、ハムズンが、絕望のアメリカから歸つて、デンマクルを二三箇月漂浪した頃の事であつた。

蜘蛛の巢の家

イギリスに、「蜘蛛の巢の家(ザ・ハウス・オブ・コブウエブス)」といふ短篇がある。一種風がわりな青年が、同じやうに風變りな性格と生活哲學を持つた青年に、蜘蛛の巢でとぢこめられた、荒れ果てた屋敷の部屋借りを申し込むところから話が始まつて居る。借りる方の青年が、前の下宿屋の一室で、一時間も前から目が覺めながら、まだベツドにもぐつたまゝこんな事を考へて居る。それは六月の朝の五時である。壁紙にさす朝日の光が、紙の上の花模樣をくつきりと浮び上らせる。それがおそらくどんな植物學者も、一つも知り相もない變な花ばかりだが、青年はそんな事にお構ひなくそこに流れるみづみづしい夏らしき赤光から、直ぐ花畑や、野や生垣に連想を走らして居る。「どうしても三箇月はかゝるのだが、どうして遣つて行つたものだらうな――一週間で十五志(シリング)として、間代に、食事に、洗濯料と、それぢやとてもやつて行けやしない。するとこゝを立退きかな。尤もこゝだつて決して贅澤なわけぢやない。が、こゝでは、どんなに少なく見積つても二十五志以下では遣つて行けないのだ……處がこの作はどうしても三箇月はかゝる。もしそれでやれなかつたら首を縊つてもよい。そこで出版屋を探すのだが、まあそれまでの僕の唯一の仕事は、ぢつと落ち着いて、此作に喰ひ付いて居ることだ、夏なので幸ひ、火がいらない。靜かで、日光の當る隅ならどんな場所だらうが構はぬ。一體がこの土地で、間代と食事を、一週間十五志ですまさして吳れる間貸しはないものかな。運だめしだ。一つ起きて散步と出かけやう」

かうして旨く探しあてた蜘蛛の巢の家である。「僕は全く眞面目に話して居るのですよ。なるほど僕は、ちよつと小綺麗ななりはしてますがね、持ち金が僅かしきやないのです。それを書いて居るので、書き終つて賣れさへすれば苦情は無いのだが、それまではどうしても三箇月かゝる。で、靜かでさへあればどんな部屋だらうが構はん。どうです貸しては吳れませんかね」

聞き手の表情に、段々と驚ろきが加はつて來る。瞳が歡喜ともいふべき動情に燃えて來る。とうとう口笛でも吹くやうに小

さい口をすぼめて、「本ですつて、貴方、貴方が本を書いて居る！　すると貴方は文學者なんですか。……」「え、まあ駈け出しの……ね、但し道連れは貧乏と二人と云つた譯で、」「ぢや、ジョンソン博士のやうな！　チヤッタアトンのやうな、……いや、チヤッタアトンのやうな最期をされる方でないことは保證しますが……！ええと、それではゴルドスミスのやうな、」「兎に角オリブアの名を半分だけは持つて居ますよ、ゴルドスミスでなくて私はゴルドソルプですからね」

かうして部屋は借りられた。いよいよ三箇月で書き上げられた原稿が、本屋から本屋へ旅行した果が、或出版書肆からいよいよ五十磅で引き受けるといふ、事務一ぺんの手紙をやうやく受けとつたのが一月の或る日の事であつた。それはゴルドソルプの文壇的歴史にとつて最も記憶すべき一日であつたが、この作家はその翌月に、誇らしい氣分でロンドンへ旅をした。留守に大風が吹いてロンドンでも地方でもいたみが多かつた。作家が旅から歸つて來て蜘蛛の巣の家を見舞ふと、青年は相變らずのんき氣に荒果てた一室に棲んで居た。そして作家に向つて、「貴方が私と一緒に居て、朝鮮あざみに初霜が降る頃を見ないのが殘念だ」と語るのであつた。

「道連れは貧乏と二人だ」、と、この作家が云つた。なるほどこの作家ほど貧乏と一緒に連想される作家も珍らしい。彼は殆んどの生涯を、貧乏でくらした立派な無産階級者である。たゞ後半生の僅かな部分で、どうにか食へるだけに浮び上つたのであるが、それさへ決して充分ではなかつた。その癖彼は恐ろしく超人主義で、また貴族主義の趣味に滿ちて居た。だから、貧乏をどこまでもいやがつて居る。むしろ境遇さへ許すなら、どんな貴族的享樂に耽ることも憚らなかつたであらう。まだ少くとももつと働らいたら、相應の暮しは出來たであらう　それなのに懶けて居る、そしていつまでも、いやないやなその貧乏に引づられて居た。そこに彼の貧乏に對する暗さと、かたくなさと、反抗がいつもある。ゴルドスミスや、ドストエフスキイのやうに、貧乏に一種の愛着と安住を感ずるところの、和みと親しみを彼から享け入れられないものがそこにある譯だ。或る批評家はまた彼をもつて、貧乏を享樂して生きた作家だと云つたが、彼のやうだと享樂も複雜した味になる。彼とは誰れか、**イギリス**の**ジオヨジ・ギッシング**である。十九世紀末のイギリス文壇で、現實主義派の雄將であつた彼である。

パン燒の放浪者

彼が九歳の時は靴屋の小僧であつた。靴屋のおやぢといふのが、ラシア人としては恐ろしく殘酷な男であつた。作家はかう語る。「私は或る日彼のために湯をわかして居たが、碗が落ちて來てひどく彼の手にやけどさした。その晩とうとう其家を飛出したために、祖父から小つぴどく叱りつけられたが、次には私はもうペンキ屋の小僧であつた」と。が、しかし彼はこゝにも長く居なかつた。此の頃からの彼の魂は、すつかり「漂浪性」に蝕ばまれて了つたからである。彫刻師に弟子入りもした。園丁にもなつた。結局どうにかかうにか、暫時の安住を見出したのは、彼がヴォルガ通ひの船の中で、厨夫としての彼を見出した時であつた。印刷された文字に對する猛烈な好奇心を吹き込まれて、十六歳になつたこの少年の姿は、やがてまたカザンの大學町に現はれた。そして、「こんなあらゆる美しいものを、無料で學ばう」といふ居ても立ても居られない彼の慾望は、直ぐその大學を訪問さしたのであるか、それは何といふ運命の殘忍ないつはりか。無料教授といふ事は學校の規則に一切ない」といふ一點張りで、折角の彼の望みもぺちやんこになつたのである。有産と無產とで、教育の均等がはつきりと差別される。それは何といふ社會の不合理であらう。この有るまじい社會の不合理が、どれほどまた虐げられた此少年の胸につよく烙きつけられたことか。彼が思想と藝術のために奮闘しつゝある現代の勞農ラシアは、世界に類の無い均等教育制を布いて居る。彼の少年時代の傷ましい公憤が、この制度の生ひ立ちを幾分でも助けたものがないと誰れが斷言されやう。かうしてすつかり絶望した彼は、數ケ月後に或る町でのパン燒き男となつた。太陽と荒野にあこがれる彼の夢は、こゝでも、きたないじめじめした穴藏の中に二年といふものを幽閉されねばならなかつた。彼は間代と食料を合せて一ケ月僅か四圓の給料で、腐れた食物を喰はせられながら、五人の同じやうな壯漢と狭い屋根裏の一室にごつちやに同居したものだ。「パン燒をして居た頃の私の生活は、生涯中での最も辛い二年間だと思ふほど、それほど悲慘な印象を持つものだ」と作家が一篇の短篇の中でそれを說く。

「天井といへば、蜘蛛の巣と細かい煤で掩はれて居る。その低く壓しつけるやうな天井の下で、六人の男か木箱そのまゝの部屋に棲んで居る。夜になると、泥と黴でしみだらけの、二つの壁の間に押こめられる。起きるのは朝の五時、ぐつぐつと吞氣に構へて居る中に六時になる。愈よ仕事に取りかゝるのだ。仕事といふのは、私等が眠つて居る中に、仲間が用意して置いた捏粉でパンを作るのだが、明け方から夜の九時か十時まで、テイブルに倚つたまゝ一日中捏粉を伸して居る。或る者は粉を捏

る。その中にも我々は、からだのしびれるのを防ぐ爲に、始終中からだを前後にゆるがして居ねばならない。怪獸のやうな巨大な窯が、ぎらぎらする火焔をほう張つた大きな口を開いて、熱い息を我等に吹きかける。またそれについて居る黑い二つの大きな空氣孔が、眼をみはつて、果てしのない我等の仕事を見張つて居る」

「こんなに、我等は粉の埃と、我等が足へくつつけて運んで來る塵泥と、息のつまる怖ろしい高熱との中で、毎日毎日捏粉を伸したり、ビスケツトを拵へたり、そしてそれを我等の汗でまぶして居るのであつた。我等は、この仕事に何とも云へない憎惡をもつて居たので、だから我々は決して自分のつくつたパンは喰べずに、そんな臭い物よりも、黑パンを喰べて居るのであつた」

空氣がわるい、食ひ物がわるい。彼の健康は、それ以上彼がそこに止まつて居るのを許さなかつた。それからの彼の仲間は素性も故鄕もない無宿者か、放浪者の群であつた。いな、寧ろ彼の方が、無宿者や放浪者の憂愁は道づれであり、また彼等の書家たり、詩人たるべきで彼はあつたのだ。彼は波止場人足と思へば、次の日はもう木伐り人足になる。そんな風にしてラシア中を漂泊し廻つた。彼はポケツトに一コペツクさへあれば、本と新聞を買つて其夜を讀み耽るのであつた。彼は空腹と寒さに苦しんだ。彼は夏は野原に眠り、夜はどこかの隱れ家か、穴藏で寢た。そんなにふみにじられた心の中に、鋭どい叡智が烈しく働らき出すと、其結果ラシアの青年の間に、自殺を擇ぶ傾向となつて現はれて來ることが度々ある。一八八九年、彼が二十一歲の時であつた。彼もまた胸部を射て自殺を企てたが死ねなかつた。なほると、冬の間ザラチインで門番となり、夏が來るや否や、またもや、第二の本能である放浪の旅に上つた。

この後の**マキシム・ゴルキイ**は、もう世界の眼にあまりに明らかに親しくなつて居るが、彼の藝術の全價値は何であれ、作家自身が一人の無産階級者として、跣足の群の生命を、新らしい時代によみがへらしただけでも、もう彼をして無産階級としての藝術家の誇りを無窮に永遠に傳へるに値する。跣足の群は、決してラシア文學で新らしいものでは無い。レストニコフ、ウスペンスキー、マアミン、ザアシンスキイその他がみなそれを材料とした。けれども彼等に現はされた跣足の群は、みな始末の了へない持てあまし者として、人間の屑として見られたに過ぎなかつた。意識のない半獸の、本能生活に過ぎなかつた。然るにゴルキイの跣足の群では、どんな放浪者も、無宿者も、みな强烈な自意識を持つて居る。世間道德を微塵にふみにじつ

て高い心をもつて道德の上に超絕して居る。何物にも拘束されぬ自由な魂をひつさげて、社會の不合理に向つて公然と宣戰して居る。それはたとへば、現代に見るやうな、鋭どい社會戰鬪意識までに達するには、まだあまりに多く叡智的自由の享樂が濃過ぎるにしても、兎に角彼の藝術では、あの社會のどん底に窒息させられた無產者の群を、地上よりもづつと高い一線までにひき上げて、彼等の意識と生活をして、眼下にうようよする人間の社會を、蔑視させ、無視させ、情ながらしめるほどの強さを裏付けさせるのであつた。だから彼のいわゆる曠野生活の藝術は、近代無產者を捉へた多くの藝術の上に、遙かに高い地位を與へられるものでなければならない。

下女の子から

彼は一八七二年三月**ノウルウエイ**に生れた。彼はストリンドベルグのやうに下女の子であつた。母は彼を養ふことが出來なかつたので、彼は小さい中に田舍の百姓家へ貰はれて行つた。そこでのみじめな彼の生活が、「大いなる飢」やその他によく如實に描かれて居る。「彼れの實母の話を人々が口に出す場合に、なぜ、彼等は彼を「氣の毒な小供だ」といふのであるか。またいつたのであるか。友達が怒る時に、なぜ彼を指して「このてゝ無し兒」がと罵つてはまたいでもるのであつたか。が、それは何にしても、ピイルは、このトロエンの氣の好いあばた面の妻君をおかあさんと呼んだ。また彼女の蹩脚の夫をおとをさんと呼んだ。そして鍛冶をする時でも、小舟で魚採りに海へ乘り出す時でも、命ぜられると、いつでも此の老人の手助けを彼はした。そして彼の小供時代は、笑ふのを罪惡だと考へるやうな、そうしたこの村人の間で過した。この村人は、根こそぎの貧乏と、讃美詩を歌ふことと、地獄の恐怖だけに心を占領されて、灰白な海霧のやうに陰鬱な人間達であつた。」と「大きな飢（ザ・グレエト・ハンガア）」では主人公ピイルの生ひ立をかう書いて居る。

彼はフョルドで魚を捕つた。夏は野へ出て羊や牛の番をして居た。學校へ行くのは一週間に一度で、日曜日だけは教會に行く。田舍の小學校へ始めて通學が出來たのは、彼が十五歲になつてからで、文學だの、詩だのといふものが此世の中にあることを知つたのは生れて此時が始めてであつたのだ。小學校を終へると、彼はある金持の農家の奉公人になつたが、どうしても勉强したくてやり切れない。やつとの事で許しが出たので、今度は或る下士官がやつて居た私立學校へ入つた。こゝでは月謝も着物も無料なので、三年間居られた。その間彼は金のかゝらない教育なら、どんな處からでも知識を吸ひ取らうと力めたの

であるが、その時一緒に英語を勉強したホテルの玄關番は、後で殺人罪で牢へ入れられた。このモデルが彼の小說にあらはれて來る。また市の公開講義もせつせと聞きに行つたが、ヘルマン・バングとクヌウト・ハムズンの講演がとりわけ彼に強い印象を與へた。しかし彼の其頃までの將來の望みは、どこか小さな田地の地主になることか、でなければ、軍曹ぐらゐの軍人になりたいといふことであつた。なぜなら、軍曹でさへあれば、戰爭があれば大將級にすらも昇進する機會があるから。けれどもこれ等の野心は今はすつかり引つくりかへされて、彼の心は、たゞ詩人になりたい憬がれだけで一杯になつて居た。

が、そう思ひ乍らまた現實に目ざめると、彼はもう美くしい詩歌などの夢は見て居られない。生活の惱みがひしひしと容捨なく面前に暗く押し寄せて居る。そこで下士官の學校を去ると共に、彼は先づ商賣に手を染めたが、もう次の年には、もつと色々な職業に移つて居た。ロフオツト群島で、漁夫になつた一時もあれば、人足頭にもなつた。ミシン機械の賣捌き係にもなつた。また或る商事會社の社員ともなつた。會社に居る時はフランス文典を研究したり詩を書いたり、夜は戯曲や小說の脚色を構案すると云ふ風で、その結果は、翌日が仕事の苦しいほど、頭が惡くなつたりするのは始終中である。自然彼の計算帳簿などいふものは、氣の毒なほどめちやめちやを極めて居たものであつた。

現代ノウルウエイの文壇において、クヌウト・ハムズンと竝び立つ作家ヨハン・ボオエルは、實にかくの如き過去をいだいた意志の作家である。

(2) 無産階級作家とその作物

現代作家といつても其數は無數である。從つて彼等が現代にうけて來た環境もまた無數に違つて居る。もし細かい統計によつて、彼等がどんな環境から生れて來たかを分類することが出來るならば、それは決して無用な事業ではないのである。いなそれが無用でない許りではない。現代のやうな時代にあつて、有産階級から生ひ立つて、正しい學校教育をうけた藝術家と、無産階級に抛げ込まれて、汗と苦しみの中から尊とい魂をもり育てて來たそれとの差別によつて、現代の世相が、若くは人生がどんな違つた角度をとつて表現されて來るか。それは必ず考へられねばならぬ一つの事業ではあるのだが、今まはそのひまがない。たゞ行きあたりばつたりに思ひついた作家の中で、特に近代もしくは現代無産階級作家としての特調を持つところの、四人の作家を捉へて來たのが即ちこれである。尤もこの四人の

中で、ジョオジ・ギッシングだけは、年代だけでも他の三家に比べればずつと古い。其の上彼は一八五七年に生れて、一九〇三年に死んで居る。また他の三家もたとへ現代に生きると云つても、彼等の創作の旺んな年代は可なり早い頃に過ぎた。もし新らしい時代を代表するものが、別に新らしいゼネレエションの作家を要求するといふならば、それも尤もな必然ではあるが、こゝではそれを抜きにして、あるが儘に即して説いて見る。

「飢え」の主人公

先ずハムズンであるが、ハムズンの「飢え（ザ・ハンガア）」や「漂浪者（ワンダラアズ）」に捉へられた無産階級者は、恐ろしくのん氣な地下人達である。雙方の主人公は、共に所有するものを持たぬために、同じやうに文明の社會から跳ね飛ばされて、食ふや食はずのみじめさで電飾の輝かしい都會の白晝を、うろつきまわる。またはピヤノ直しを商賣にして、家並みの賤しい田舍路を辿つて行く。殊に「飢え」の主人公は、喰ふや喰はずどころか、何日も何日も全く食ふものが無い。彼は神を咀ひながら、犬にやるといふ口實の下に、屠肉屋から何かの骨をもらつて來る。着物の下にそれを隱して、或家の戸口の蔭で嚙み始めたが、異調になつて居る胃がどうしてもそれを受けつけない。すぐ吐き出さねばならなかつた。目からは涙が流れる。からだはむか付きでがたがた慄へる。果は木片を嚙んで僅かに空になり切つた胃を慰める。その木片の味といふものがまた細かい感覺で眺められて居る。恐らく飢えの感覺と心理を、どんな心理學者でも、こんなに深刻に研究した者はないであらう。不思議なことにこの主人公は、或る忘恩な個人と神の外に、何ものをも呪咀し、また憎まない。彼はただ、胃の空つぽさが、神經に、また感覺に働らきかける苦痛の過程を、科學者の細心をもつてぢつと實驗して居るだけだ。この苦痛を與へるところの空つぽな胃を社會の細胞が何故に持たねばならぬかについては、その關心が全く彼の興味の外にある。こゝではたゞ飢えた一人の男の臨床日誌を、あるが儘に見すえて居ればそれで用が濟むのだ。社會組織がどうであらうと、此の男の飢えに何の交渉があらうか。だから此の作物には頭もない。尻尾もない。果は主人公をクリスチアニアの市中をうろつかしただけでは氣がすまぬのか、作家は氣の毒にも、空腹しきつた儘の主人公に、「あらゆる家の窓が、さんらんと輝やいて居るクリスチアニアにお去らば」をいはして、「イングランドへ行く船へ水夫として乘込」まして居る。

が、この謎はハムズンの傾向を考へればすぐ解決がつく。な

ぜらば、一體ノウルウェの國民性には二つの違つた型がある。一方は海賊時代の遺傳性を持つたもので、絶えず新らしい憧がれを求め、何か知ら、止まず外から抑へられるものに反抗して、永久流轉の生を營まうとする。探檢者になつたり、水夫になつたり、何でも構はぬ。絶對自由の天地を求めてあるくのがそれである。他方は生れた國土にがつしりとしがみ付いて、神聖な祖先からの大地を、ますます深く堀り下げて行かうとする。ハムズンの作物は、この二つの傾向が前期と後期をくつきりと色づけるのであるが、「飢え」でも、「漂浪者」でも、「牧羊神」でも、みな前者の漂浪者の享樂を中心として居る。それはどれもハムズン自身の體驗を或る部分まで採り入れたもので、即ち彼の無産者等にとつては、文明の都會で鼻くそほどの金儲けにくよくよするよりも、むしろ一文無しの境涯で、青空の下を放浪してあるくのが、なほ彼等の本望なのである。それでこそ、自由に彼等の漂浪の歡喜を味はせるわけなのである。だから彼等が無産者であることは、その氣輕るさによつて猶ほ自由に救はれるわけだ。そうした心理をもつた作物が、現代の階級闘爭を主題としたものと、全く桁のちがつて居るものであることは改めて云ふを待たないであらう。

豫言者の母

ハムズンの無宿者や放浪者の憧がれは、マキシム・ゴルキイの眺めた無産者の、跣足の群の哲學に共通したものがある。「マカアル・チウドラ」の主人公は言ふ。「まあ聞けよ。五十八の今日まで、俺はどれ程澤山のものを見て來た事か。俺が行かない國つたらどこにもありあしない。これが唯一の俺の生き方だよ。歩け、歩け、そしたら色んな物が見られる。一つ場所に長く止まるんぢやないぞ。慣れて來りや何んだつてつまらなくなる。だから人生がいやになるまいと思ふなら、月並な生活などはまあよして、たゞ驅け廻るんだよ。丁度晝と夜が、永遠に追つかけつこをするやうな具合にな……」コノワロフが續いて話す。「兄き、俺は世界中を廻つて見やうときめたよ。世界には何か知ら、始終新らしいものがある。……何も考へるな——風が吹く、我々の心の塵を、吹き清めてくれるとも云ふものさ。自由だ、氣樂だ。——誰一人邪魔者はなし、腹がすいたらそこへ止つて、働いて二三錢儲けるさ。若しまた仕事が無かつたら、パンをもらつてあるくと誰かゞきつと呉れるよ。かうして澤山の國も、素晴しく變つた美も見られるといふものだ、」

けれどもゴルキイの無宿者哲學がハムズンと違つたところ

は、ゴルキイの無産者の中の第三級にあたるものが、ハムズンに少しも見當らぬ事である。ゴルキイの無産者では、前にあげたやうに、たゞ無性に自由と變化とに憧がれる漂浪者が第一。ゴルキイのいはゆる心の痛み（ハアト・エイク）である世界の悲しみ（ウオルド・ソロウ）から、或は救はれない宿命觀から、もしくはラシアの血管に流れる人生虚無の悲哀から、出口のない絶望にひたつて居る放浪者中の哲學者が第二。彼等の自由と自我の解放に向ふ熱情は、現實につき當つて反逆の精神に燃え上る。彼等は天國へ行つて神々へ奉仕するよりも、むしろ地獄を征服して、地獄王になる方が痛快だと昔のサタンのやうな考へを持つて居て、爪先の向くところ目の向くところ、何でも憎悪にわき立つて來る。これがゴルキイの第三級の無宿者で、ゴルキイの作物が、立派に現代階級鬪爭藝術の先驅となつたのは、全たくそうした反抗の精神が、太い動脈をつくつてうごめいて居ればこそである。勞働者と革命を捉へた多くの彼の作物がそれである。

豫言者の母と呼ばれた「母」の主人公を見よ、勞働者であり社會主義者である愛兒のパウエルが、十字架上の殉教者のやうにシベリアへ放逐されてから、彼女の心臟は始めて夜が明けたやうに眞理の光の前に見開かれる。「此の地球はあまりに多くの不正と悲しみを運ぶのに飽き疲れて居る。そして人間の胸に昇りつゝある新らしい太陽を見たさに微かにふるへて居る」。彼女は居たくなつた我子の仕事を續ける爲に、隣町へ行つて「善い言葉」を宣傳すべく、汽車へ乘込まうとする刹那に警官につかまつた。もう駄目だと思つた老母は、群集に向つてから叫び出すのであつた。「御聞きなさい。彼等は私の子やお友達が、皆さんに眞理をお投げして居るといふので、彼等を處刑したのです。我等は勞働で死にかゝつて居ます。ひもじさと寒さで惱まされて居ます。我々はいつもどぶ泥の中につけられて居ます。そしていつも不正の中に居ります。我等の人生は死であります。眞暗な夜であります」「お婆さん萬歳」と群集の一人が叫ぶ。すると警官が彼女の胸を突いたので、彼女はよろめいてベンチの上に斃れたが、それでもまだ叫ぶ。「皆さん、皆さんの全力を、一人の指導者の下に結合せねばなりませんぞ」警官の赤い大きな手が、今度は彼女の咽喉を突いたので、彼女は後頭部を壁へぶつつけた。「だまれ、この惡たれ婆！」と。警官が鋭い聲で怒鳴ると、老母の眼はまたまた大きく見開かれてきらきらと輝やいた。そして顎をふるはせながら、「誰が復活した人間を殺せるものか」と叫び返す。警官はなほ危鬼になつて、今度は眞向からいやといふほど顔を毆り付けた、その瞬間何か赤黑いものが老母の眼をくらくらさせると共に、口から血が一杯流れ出た。「正

じい人を溺らすのは血ぢや無い……」老母はそう叫びながら、疲れて弱り切つてよろめいたが、直ぐと群集の眼が彼女のまわりに勇敢な火で燃えて居るのを見出した。彼女のよく知つた親しみのある眼が。

また「……どれほどの血の海を作つても、彼等には眞理は摑めない……」と彼女が云ひ切る刹那に、警官がまた手ひどく喉をつかんだ。彼女がごろごろする咽喉から、わづかに「不幸な人達」とだけ云つた時、群集の一人が、深い溜息で彼女に無言に答へた。

「懺悔(コンフェッション)」では、神を求めて基督教の神に絶望し、勞働者の群に入り込んで苦しみなやんだ揚句、唯一つの自分の理想の神を、最後に民衆に發見したマツヴェイが居る。「民衆よ、汝こそ私の神である。汝等の煩はしい骨の折れた探求の中に、汝の美くしい心臓でつくり上げた、有ゆる神々の創造主たる汝等こそは即ち私の神なのである。汝等の外に、地上に他に一つの神だも無からしめよ。なぜなら、汝等こそは、奇蹟の創造者たる唯一の神なのだから」

貧乏を享樂する作家

かゝる革命の魂と、反逆の精神は他の三家には決して見られぬものである。不思議なのは「ヘンリイ・ライクロフト日記」の作家で、「新グラブ街」の作家で、貧乏が一生の道連れであり、「此の世の地獄」の同情者とかつて呼ばれたジョオジ・ギッシングである。彼は彼が、あれほど多く貧乏を作物の主題としたにかゝわらず、心からの貧乏人ぎらひであつたのはどうした矛盾か。不思議ではない。彼は心の底からの個人主義者であり、超人説をもち、溢れるほどの貴族趣味の作家であつたからだ。彼は長篇「デモス」によつて、デモクラシイの正體を考へて見た。が、獲たものはニイツヱなどのやうに、デモクラシイは所詮賤民の大集に過ぎない。藝術や思想のエリテは、その賤民を脚の下に蹈み据えて、高處から見下す權威を許されたものだと彼が考へる。そこで貧乏人は、また下層階級は、趣味にも、また知識にも、一番洗練されてない無知の群である。自分は長い過半生をそうした階級と親しむことによつて、なほはつきりとかれ等の無知がわかつたとかう彼が考へる。ゴルキイの「懺悔」のマツヴエイと、この場合全く正反した發見をしたのである。さらばこの無知の源がどこにあるか。ギッシングはハムズンと共に、この一線に視野を掘り下げて行く興味を生憎く持ち合せなかつた。あのロンドンの町中を、乘合馬車であるくなどは思ひも付かない。彼はあまりに貧乏であつた爲に、時間のつひえと

足の疲れるなどはお構ひなしに、十二時間も、十五時間も、ロンドンの町中を徒歩で歩いたと、「ライクロフト日記」で書いた彼はその後半生に、勞働問題について一篇の論文を書くことをある有力な雑誌から賴まれた時、私はもう「貧民生活の問題などには、一向興味を持たなくなつた」とそつけなく答へた彼でもあつた。と云つて、彼は「中流階級の歴史家」と云はれただけ、「イオニアン海のほとりで」で書いたやうに、「勞働と、ほつとりばなしの爲に、不具にされた、傷だらけな手と、長い間櫛を忘れた髮の毛と、とても着物とは思はれない、汚ないぼろとで包まれた中年の婦人の、どうしても人間と思へない」みすぼらしさまでを忘れるものでは無かつた。が、たゞ彼の長い間の貧乏と不遇は、いつ知らず彼をして、凡ての人間に對して、執拗なひがみと白い眼を向けることを強ゐさせると共に、誇りの強い教養を持つ彼は、いわゆる群衆の無知と見るものまでに、自分をひき下げて、その中に入つて行くことをその趣味が許さぬのでは無かつたか。

無知の暗鬪

ヨハン・ボオエルになると、これもまた他の二家とちがふ。彼は長い間の無産階級者との親しみによつて、虐たげられた階級の苦しみを充分に味はつた。けれども彼はそれをくつがへす爲に、決してゴルキイのやうに、産業革命と社會主義による社會改造を採り上げなかつた。彼は虐げる側の不合理を充分に見拔くと共に、虐げられる階級にも、まだ救はれねばならぬ無知があると見た。世界の惱みは、とりも直さず、この二つの側の無知と無知との爭鬪から生れる。それはもと知識の問題である故に、差當つての社會改造は、先づ心靈の改造にあつて、様式の改造は第二次であると彼が考へる。その心靈の改造を、宗教の信仰から持つて行かうとしたのが卽ち「大きな飢（ザ・グレエト・ハンガア）」であり、人道的精神から進まうとしたものが「世界の面（ザ・フエス・オヴ・ザ・ウオルド）」もしくは「我が王國（アワア・キングダム）」である。「おかあさん、貴方は虐げられる者とはどんな人々であるかを知つて居ますか。それは虐げる者を虐げ得るやうに、虐げる者の上に乘りかゝらうとする民衆を云ひます。大抵の勞働者が、より高い賃銀を得た場合にどうしますか。彼等の仕事の成績はなほ惡くなるのです。我々があるき廻る世界を眺めわたして、その進歩といふものに自慢なさい！貴方は何を見られたか、大陸は、民族憎惡でもつて我鳴りあつて居ます。政黨内の各團體は、お互を憎み合つて居り、各團體の中の團員が、お互を暗殺し合つて居ます。それは我がちに他の團體の上に立ち、團體を征服しやうとする爲です。私は、そ

れらの一切に向つて立ち、そしてそれを改造しませう。この私が！」これがボオエルの世界改造の信念である。

(3) その他の無產階級作家

石に拉がれた雜草

「世界歷史の新世紀の曙は、人類の血をもつて赤くなつた。虐殺された國民の藝術は壯嚴でなければならぬ。でなければ存立することは出來ぬであらう。人類がかつて取扱つたどんなものよりも廣い、戰爭よりも偉大に、美よりも富み、愛よりも尊とい一つの視野が、今や藝術家の前に自身を捧げて來た。それは勞働である。人類が額の汗によつて生きたこの方、女をくどいたり、戰爭をしたりする世界を滋養するところの勞働は、もう人間の詩の上に照りかへさなくなつたのである。」―我等の上に落ちて來た苦惱の激流が、その不思議な運命の海へどんどん人類を押し流しつゝある現代に、未來から我等へ呼びかけるやうな、望みの聲が少しも聞えぬのは何故か、勇氣にとんだ國民が素晴しい人類の努力を示して居るのを、心ある人々がじつと見つめて居る。かやうな輝やかしい努力から、かやうな物すごい惱みから、かやうた望みに滿ちたものから、なぜ考へ深い容智人が立ちあがつて、その鳴りひゞく言葉によつて、新らしい様式を創造せぬのであらうか。來れ、詩人よ、世界は汝を待つ」から呼びかけたフランスのピエル・ハンプも、また立派に無產階級から生れ出た作家である。だからかれの「民衆」の一篇は彼が勞働者であつた自分の體驗を機軸として、勞働者の世界に新らしく芽ぐみ出でつゝある新らしい近代自己意識を、内から眺めて權化したその習作である。彼は賤しい一人のパン燒き男として、その深い藝術心を、鋭どい社會意識の中にすつかり飽和して了つた。かくして虐げられた勞働者の眼を通して見れば人間の心の凡ての美くしさといふものは、石にひしやがれた雜草が、石の下から弱々しい花を咲かせるやうに、却つて虐げられた側にあつた。その歪められた、しかし必然の生命の表章が、美が、また何といふ痛々しい姿に具現されて居ることか。虐げられた美、搾取された美、こゝにパンプの大きな憤どほりがある。密娼の飼犬に、一日百ソオの御料理が出る。骨がまぢらぬやうによく叩いて、脂みを入れないやうにとの御注文だ。「何といふ人類の耻だ。自分は二ヶ月も腹ぺこで居たこともある。何一つ口に入れなかつた日も何日もあつたのだ。それに一匹の犬に百ソオの御馳走とは何だ」その中にお犬様の御料理が出來た。それへ給仕人の一人がしこたま唾をはきかけて、「これには骨な

どが交つて居ませんよ」すると仲間の一人もまた唾をかける。「かうして彼等の、傷つけられた正義の觀念が復讐されるのであつた。」といふ「料理屋で」といふ短篇は、彼のいたましい體驗でなくて何であらう。また「富んだ町(リッチ・シティ)」に展開された無産者の種々相を見よ。ストライキの後の寂れた不安の町に、貧富の兩階級が入り交つてあるきまわる鬪爭の心理を、どんなに細かく正義のはけ口を求める彼が省察して居ることか。かれはフランスのゴルキイといはれる。彼は少年の頃から、パンを求めてイギリス、スペイン、フランスと、吸ひ込まれるやうにどこへでも放浪した。パリイの人民大學の生徒となつたのが廿六歳の時で、その後は北フランスの鐵道で七年間も働らき續けた。

少年とパイプ

パン燒きの勞働者から出た現代藝術家としては、ゴルキイとハンプの外に、もう一人ベルギイの作家**スチイン・ストラウヴルス**が居る。勞働者のみの生活を集めた短篇集である「人生の路(ザ・パス・オブ・ライフ)」の作家である。彼もまた文壇へ出て來るまでには、西フランダースのアヴレエムで、百姓やおかみさん達を得意としてパン燒きをやつて居た。こゝに描かれた勞働者は、放浪者がある。百姓がある。勞働者の子供がある。かれは「奇禍」の主人公のやうに、たまには社會の不合理を憤る場合も無いではない。「なぜ彼は働らかねばならぬのか。いつまでも引切りなしに働らかねばならぬのか。何もせずに生きて居るところか、何もせずに安樂な生活をふんだんに享樂して居る人間が澤山居るのに」といふ反抗も根ざゝないではないが、それよりも、彼はより多くの心のいたみを、勞働する人々がもつ環境に向ける方が忙かしい。

それは「パイプかパイプ無しか」といふ一篇のスケッチだけでも、彼のやさしい情緒がしみじみと味はれる。そこでは一人の少年が手押し車を押して行く。途中で車を止めてある煙草屋の飾り窓を吸ひ込まれるやうにじつとのぞいた。綠門のやうに積み上げられた煙草の小箱の上には、長い長い肉桂のパイプが綠色の絲で澤山吊されて居る。素的に大きな雁首には、王様だの黒ん坊だの、綺麗な娘の顔などが彫刻されて、それから琥珀の吸口のついた海泡石のもある。あらゆるパイプの種類がそこにある。少年が一つ溜息をつく、「こんなに美くしくて、こんなに澤山ある！あゝ、お母さんが仕事が見つかりさへすれば」彼は鼻をぺしやんこに硝子窓に押しつけて、いつまでもいつまでも眼でパイプの大きさや値段などを飽かず味はつて居る。「あゝ、お母さん！」少年はよいパイプが一つ欲しいのだつた。母は仕

事が見つかりさへすれば、一つ買つてやる約束をして今日も出掛けた。彼は思ひ切つてまた手押し車の柄をつかまへ、廣い往來を停車場まで押して行く、そこで歸つて來る母を待合せるのであつた。晝の日光が、裸かな石にぎらぎらと嚙みついて居る恐ろしい暑い日だ。馬車の上の御者が居眠りをしてゐる。馬はぢつと頭を下げ、三本足で立ち乍ら、時々思ひ出したやうに、蠅を追ふために輕い足踏みをする。無宿者の群が涼しい木蔭で眠つて居る。少年は柵によつかゝつて、首を伸していつまでも俟つて居た。やがて汽車が來た。一番先に下りたのが太つた紳士であつた。次には婦人、その次も婦人、いつも他の人ばかりだ。とうとう母親が下りて來た。彼女の肩の上には、青と白をなひまぜの空な帆布の袋が乘つて居た。彼女は悲しさうに手押車の上に袋をなげかけ乍ら、「まだ仕事が無い。神さま、どうか御惠さ下さい」、母子はそれから何一つ話もせずに、遠い遠い村の家路へ歸つて行く。煙草店を通るとき、少年がちよつと飾窓に横眼をくれて何か小歌を歌つて居た。家は遠い。日は燃えつゝある。

勝利者ペルレ

マキシムゴルキイが、靴屋の小僧であつたやうに、デンマルクのすぐれた現代作家であるところの、**マルチン・アンデルセン・子キズウ**も、また少年時代を靴屋の小僧として過した。彼はコツペイハアゲンの貧民街に生れた人間で、文壇へ出る前までは煉瓦工として暮しを立てて居た。彼の四部長篇「勝利者（ペルレ・ザ・コンケラー）ペルレ」では、無產階級の或る一人の少年が、世の中と鬪ひ、世の中に立ち、惱んで居る。が、しかしつひには立派にその鬪ひに勝ちとげ、大規模な社會改造者としての營みに着手する歴史を捉へて居る。しかるに「デッティ」の方では、勝氣な、善良な貧しい家に生れた田舍乙女が、どんなに無慘な運命に呪はれて、賣娼婦の群に身を落したかが、三部の長篇によつてしんみりとくらく記錄されて居る。ともにじめじめした無產階級者の記錄であるが、少くとも「勝利者ペルレ」の方は、作者自身を或る點までモデルにしたもので、「一八七七年五月初めの明け方であつた。海のはうからは、灰白な尾を重く水面にひいて、海霧がしとしとと押寄せて來る」北歐の海岸で、職を求めにこゝへ渡つて來た親子連れが、始めて下り立つた感想が繪のやうに印象される。主人公のペルレが、社會主義も近代產業組織もまだ入り込まない小さな田舍で、靴屋の丁稚である間はまだよかつた。一たびコツペンハアゲンの大都に躍り出してからは、彼の鬪爭を裏づけるものは悉く現代の勞働問題であつた。彼は第一線の勇者として、いつも雇主と官憲の横暴と戰つた。作者

はまた自身の親しい體驗で、この鬪爭の意義を内から眺めることを忘れなかつた。作家は溢れるほどの想像力をもつ、けれども傷感者であることからはすつかり免疫されて居る。ペルレは遂に勝つた。そして彼はそのかち得た資本を投じて、勞働者共同の生活のために、田園都市を建設することになる。ペルレは克つた。デッテイは浮世のどぶ泥に沈んだ。それには彼女が意志でどうともされない、運命の力が多分にあるとしても、何にしてもデッテイ自身の道徳的責任がそこには少しも無い。たゞどこにでも働らいて居るのは現代文明の惱みである、資本主義の横暴である。人道をどこへか置忘れて來たところの有産階級の搾取手段である。

(4)　無産者を主題とした作物

そこでは必ずしも作家が無産者であり、搾取されたどん底の群であることを要としない。たゞ現代のやうな不合理な社會に置かれたところの無産者を主人公として取扱つた作物もまた數限りなくあるのである。今までそれを、私の乏しい、そして貧しい記憶の底から拾ひ上げて二つの型(タイプ)に分類しやうとする。

一つの型は、限りのない反抗の意識に湧き立つて、全身が、たゞはり鼠のやうないらいらした鬪爭の氣分で包まれて居る。彼が斃れるか。自分が死ぬか。彼の眼の前では、凡ての對象がたゞ敵か味方かの二つの陣營だけに排列されて行く。たゞ××があるだけだ。××されたものの上にのみ、始めて望みのある創造が築き上げられる。少くとも多くか、少くか、さうした興奮に燃える主人公がそこでは多きを占める。之れは近代の産業革命が生んだ悲壯なヒイロオで、血と、火と、棍棒と、××とが、彼等の好んで採り上げる武器となる。

ラシアのマキシム・ゴルキイの「彼等の三人(スリイ・オブ・ゼム)」のイリアは、ゴルキイ自身を或る點までモデルにしたものだといはれる。イリアは現代産業組織の中心たる大都會へ移住した百姓の息子であつた、彼は「フオマ・ゴルデイイエフ」の主人公と共に、暗黑な地下のどん底に投げ込まれ、裸一貫の無産者として、人生の意義を探し廻らねばならなかつた。絶えず落着かない空虚な不滿を抱いて、どんなものにも心からの妥協を看出し得ない。「人間はお互を盜み合ひ、苦しめ合ひ、お互をくびり合ふ。誰一人お互を助け合はうとするではなく、却つて障らぬやうにと片隅へよけて居る。眞の處は俺も隅の方へはひよつて居るその一人なのだ。爭ひのない、眞實の世界は一體どこにあるのか。」とも彼は深く懷疑する。「私は小供の時から勞働をして、もう足を四十に掛けてるのだ。それなのに未だ充分にパンも喰べられな

いっ每日いやなほど味ふものは貧乏の惱みばかりで、うまい玉菜の汁さへいつ吸つた覺えさへない。全く家族なんてものはいやになる。餓鬼はがあがあ泣くしさ、婦はこぼすしさ。出來るなら自でありたいと思ふほどだ。とうとう我慢がしびれをきらして癇癪玉を破裂させる。まゝよ破れかぶれと飛び出してどんちやん騷ぎをした揚句が、さて醉ひが覺めて氣がつくと、これはどうだ、貧乏神めが、猶ほと白齒を剝いて猛烈に攻寄せて來るのだからやり切れない、「全くその通りだよ」「するとお前はおいのりをする。神樣お助け下さいなんて、なぜ私ばかりがかう苦しまねばならぬのでせうなんて。所が俺の考へぢや、神樣はそんな事は聞いてないのだよ」「そうよ、俺も、神樣は聞いて居ないと思ふのだ」鐵壁のやうな絕望に押しつめられた彼れは、警官につかまへられる前に、とうとう壁に頭腦をぶつつけて自殺して了ふ。

腐敗した都會

ベルギイの現代作家**ジヨルジユ・エクウ**は、「新カルセエジ(ザ・ニユウ・カルセエジ)」の作家として、主人公パリデエルに、無產階級者としての怒りと反抗を物すごいほど强烈に表現さして居る。ラウレント・パリデイルは、父親が死んで孤兒となつた爲に、父の商賣仲間であつた實業家ドボオサイスの家に、居候とも、小僧代りともなつて養はれる。學校へもやつて貰つたが、ドボオサイスの娘のギナに戀をしたので、ギナには跳ね付けられ、ドボオサイスからは家を追はれる。そしてギナは船會社の持主であり、其癖恐ろしく山師で、冷刻で詐僞を何とも思はない惡資本家ベエヤアドといふ男の妻になる。早くからアントワアプの無宿者の群に投じて、プロレタリアの生存權を要求するために、あらゆる力を揮つて鬪つて居たパリデエルが、今まで正面の敵として向ふへ廻すことになつたのはこのベエヤアドである。それに此頃はベエヤアドの殘酷と利慾の搾取がますますひどくなつて、移民會社を計畫しては移民を難船さしたり、やわな彈藥工場をつくつては、幼年工や女工を火事で燒き殺したりする。愛するギナの仕合せのためにも、搾取される無產階級のためにも、とうとう耐え切れなくなつたパリデエルは、彈藥工場の燒け落ちる火花の下で、ベエヤアドと引組んだまゝ二人とも燒け死んで了ふ。この作物が現はれてこの方、アントワアプへ行くものは、武器を用意してでないとうつかり踏み込めないほど恐れたといふ。こういふ實際的な評判を與へたのは、此作物の中で、パリデエルが交はつて居る無宿者の群の生活が、そんな脅威を與へるほど突き込んで眺められた爲だと云はれる。それほどこゝに集め

られた無産者は、法律と道徳に對する恐怖を感じない群であり、それだけ底知れない憎悪を、暴慾な資本家に向けやうと考へて居る人々でもあつた。けれどもパリデエルが實際行動に手段を假りたのは、決してこの最後のシインばかりではない。市會議員の選擧で、パリデエル等無産組の立てた候補者が、無慘にも金權黨の立てたベヤアドによつて破られた時にも、民衆の側は火のやうな怒りに燃え立つた。「この爭ひのお了ひの結果として恐ろしい混亂と怒りがアントワアプの民衆を捉へた。金權黨はたゞ腐敗とまぬけさの共同で、やうやく勝利を占めたに過ぎぬのだから、だから市の議員達の頭がちよつとでも露臺に出るものなら、憎惡にあふれた眞赤な顏や、怨みに滿ちた蒼い顏が、殘念さの涙をふり拂ひながら、毒矢のやうなのゝじりと惡口を民衆の頭の海の中から容捨なく抛げかけるのであつた。」十九世紀末のアントワアプの現實をとらへた此作物が、「新カルセエジ」と命名されたのは、商業市となつた昔のカルセエジが滅びたやうに、新らしい商業市となつた新アントワアプが、金權萬能政治の腐敗の中に滅びて行くことを象徴しやうとするものであつた。

人生の鬪爭

エクウと同じやうな根本觀念から、無産階級の主人公を、さながらの、階級鬪爭史中の勇者として擇んだものには、スペインの**ピオバロジヤ**の三部作「人生の鬪爭」(ザ・ストラッグル・フオア・ライフ)がある。バロジヤには、また同じ傾向をとつた「用心深い都會」(ザ・シテイ・オブ・デスクリイ)がある。「人生の鬪爭」では、私は第一部の「探究」(ザ・クヰスト)を讀んだだけであるが、要するに、彼が「人生の鬪爭」で捉へやうとしたものは、現代の社會組織が、人生の味はひを極端に苦くし、その偏見と無慈悲とが、見す見す、自然の人間性を虐殺するのを見遁ねて、それに對して猛烈な抗議を提出しやうとするものである。だから「探究」も、むさぐろしい下宿屋の女中をして居るペトラといふ女の息子に當るところの、マヌエルといふ青年が、マドリッドへ始めて來て靴屋の弟子になるところから始まる。かれはやがて浮浪漢や無宿者や、果は淫賣窟の巣へ自由に出入りするやうになつて、血まびれの喧嘩や、命がけの色戀や、今日主義の耽溺や、獸よりもむさぐろしい貧民長屋の臭氣やが、永遠の廻り燈籠のやうに、ごつちやになつて彼の荒つぽい生活の印象にだんだん喰ひ込んで行く。そうした地下層の社會が、おそろしい原始的な獰猛さで、ひやひやするやうに展開されて居る。が、その屑屋の店をひつくりかへしたやうな、息づまるやうな下層人生の雰圍氣の中に、マヌエルは作家とともに

ぢつとその意義を見つめて居る。極度な夜の靜寂と神秘が、人の世に覺めて行かうとする大都會の一秒間よ。マドリッドの曙に立つマヌエルの姿はまつたく壯嚴そのものであつた。「夜番の角燈の光りが青白い夜明けの色の中にぼんやりととけて、灰色の鋪道の上にそこでは躍つて居た。黑いぼろ拾ひの影が、往來の屑を拾はうとして屈んだ時に、それは汚物そのものの化身のやうな薄氣味惡い姿に見えた。上着の襟を引上げて顏を包んだ、青くやつれた無宿者が、明け方の前の無氣味な梟のやうにこそこそと消えて行く。その後からまた勞働者が通つて行く……働らき者で、正直なマドリッドは、今やその物騷な此日の仕事に用意をしてゐるのだ。落つかない夜の混雜から、朗らかになごんだ朝の活動へ移つて行くこの一瞬間が、マヌエルを奧深い冥想の淵に沈めた。」

「彼はかう解釋した、この町梟の群の存在と、勞働者の生存は決して平行線の上で、一寸でもかち合ふものではない。一方には、歡樂惡德の夜である。他方のものは、勞働と疲勞の太陽である。彼は？……彼には彼がその第二の階級に屬せねばならぬもののやうに思へた。すなわち、蔭の闇にはひまわるそれ等ではなく、日光の中に働らくそれ等の方に。」

長い人生の第一期の「探究」は、彼をこの結論までに運んだ。

第二部以下は、自覺した勞働者としての彼の復活でなければならない

彼の「用心深い都會」(ザ・シテイ・オブ・ザ・ヂスクワイト)においても、また時代の曙に目覺めた無産者の眼に宿つたところの、鋭どい文明批評がある。用心深い都會！　それはあまりに用心深くて生氣をすつかり失くなした都會だ。いやそれは都會ではない、スペインそのものだ。「民衆はすべて死んだ。彼等の頭腦は働らくことを止めた。スペインは、關節硬化で苦しんで居る一つの肉體である。ちよつと動いても直ぐひどい痛みが來る。それが爲に、進歩するにしてもそろそろと進まねばならぬ、――飛躍しちやいかぬのだ。」その死にかゝつたスペインを昏睡からゆり動かすために、あらゆる努力を惜まなかつた主人公クエンチンも、「良心とは何か、弱氣だけのものぢやないか。正直とは何か、機械的な或るものに過ぎない。」スペイン人は唯だムウア人のやうに働らき、ジユウのやうに金を儲けて居ればそれでよいのだと、暗い重い心をいだいて、白銀の流れる月光の下にすゝり泣く外はなかつた。

イバニエスの二作物

同じスペインのブラスコ・イバニエスの「伽院の蔭」(ザ・シヤドウ・オブ・キヤセヅドル)でも、また「葡萄の實」(ザ・ノルウト・オヴ・ザ・ツイン)でも、やはり無産階級者の、社會

改造を中心として描かれたものであるが、どちらもみじめな慘敗に終つたところに作家の文明批判がある。前者ではダアウヰンやブルウドンによつて力を與へられた若い坊さんであるガブリエル・ルナが、偶像化された宗教の殼を內からたゝき破つて無産者の光りとしての新宗教を創造しやうとする。「生き身であり、充分な滋養が採らるべき筈の君達が、貧しい馬鈴薯とパンぐらゐで、君達や、君達の妻子の胃の腑を胡摩化してるのに、このお寺の神どもの木製の偶像はどうだ。無際限な贅澤で、眞珠と黃金で掩はれて居るではないか。君達が、其日其日の食事さへも充分に採られず、悲慘の檻の中に呻つて居らねばならぬ刹那に、何の役にも立たないあんな偶像どもが、なぜあんなにぴかぴかして居てよいものだといふ事を、君達は一寸でも疑つたことが無いのか」と。說敎の講壇から若い坊主さんがかう怒號するのだから、「聽き手達が、火焰の閃めきに撲たれたやうに驚いて、互に目を見合はして居る」に不思議はない。一時は疑ひの影が彼等の胸をさつと掠めたが、「結局固い目さめの確信が彼等の顏をかゞやかした。先づ陰氣な聲で、鐘つき男が「全くだ」と言ふと、靴屋も「全くだよ」とくり返す。が、この金碧さんらんたる大寺院の片蔭に、一文無しに病みさらばいたこの戰線の鬪士は、結局悲しい絕望に永遠の眼を閉ぢて了ふ。「大地は彼の死の秘密をひめて居た、面をくもらした母たる大地は、今までこの一人の生の鬪爭を無感覺に見まもり、彼のあらゆる偉大も、野心も、悲慘も、愚行も彼が最後の目あてであつた人生の豐饒と革新と共に、みな彼女の懷に朽ちて了はねばならぬものであることを知つて居た」と。作家はいたみ、且つ絕望するのであるが、しかし新手な建設の後援隊は、世界の四方から突驅して來る。彼の戰線はちつともやぶれず、彼の理想は決して大地の懷に朽ちなかつたのである。

「葡萄の實」では、葡萄酒工場の職工を中心として、勞働者フエルナンドウが飛躍する。「世界は今や數千年の眠りから目ざめ始めた。子供の時代に掠奪されたものを取戾すための、勇敢な抗議が今はそこに開かれ始めた。土地は君等のものである。誰れがそれを造つたといふものはない。だから土地はみな君達のものなのだ。もしまた土地の上に、或る改良が施されたと云ふならば、それを施したのは、たゞ君達のきたない手によつてである。だからそれは當然君達の所有に歸すべきものだ。人間は空氣を呼吸する權利がある。日光によつて暖まる權利がある。それなら、君達を維持する土地の所有權を要求することは、少しも不思議のない話ではないか」「慈善とは？ 慈善とは美德の名を冠つた利己主義のことだ。搾取した剩餘價値の極めてわづか

ばかりを、犠牲の名で、自分の都合のよい時に分配するだけのものではないか。慈善？　いな正義だ。彼の所有するものは萬人に分たるべきものだ」「人類をすくふものはたゞ正義である。正義は天國のものではない。地上のものだ」この國は廣い、しかしこの國の富は、わづか八十人か百人の資本家によつて搾取されて居る。それは何といふ不合理か。フェルナンドウは、この葡萄酒工場の職工達に對して、工場資本家の正體を絶えず發露する。けれども官憲と資本家の對抗力の方は、手ぶらな彼よりはもつと實力があつた。勞働者達はすつかり資本家側の懐になづいた。今は誰一人ドン・フェルナンドウの熱辯に耳を傾ける者がない。「よく勞働運動に來る人間共のやうに、あいつも指導者づらをした立派な詐僞師だよ、彼の煽動で働らひた人間共は、今はみな墓地の下に腐つて居る……何でも説教は少なく、收穫は多くよ、勞働者の本當の良友は、賃銀を拂ふ雇主だけさ。賃銀の上に葡萄酒を飲ませて呉れると猶ほ好い雇主さ」勞働者の一人が仲間にかう話しかけて、元の指導者であつたフェルナンドウに侮蔑の眼をなげかける。

葡萄の實はますます實のりがよくて、資本家の財嚢はますます膨れて行く。

「生命の河」その他

ラシアの無産階級を取り扱つた藝術になると、私のやうな貧しい知識を持つものでも、數ひきれない程の作物につきあたる。**ドオストオエフスキイ**の「罪と罰」や「貧しき人々」その他は改めていふまでも無からう。一寸手近なものをあげても、**アルチバアシエフ**の「革命物語」と、とりわけその中の「セヰリオフ」が心を惹く。**クウプリン**の「生命の河」にも、ラシアの學生階級の悲慘が何と黒々とにじみ出て居ることぞ。屍骸の右足の裸かな膝關節の上に、十四號と粗悪なインキで書かれて居る。解剖講臺に上る番號なのだ。殘忍なほど嚴肅な作者のレアリズムに、實生活の殘酷がぴつたりと喰ひ込んで居る。**ロプシイン**の革命を捉へた「蒼白い馬」や「起らなかつたもの」から、溯つて**ゴオゴル**の「外套」レエシコフの『諸短篇』トルストイ、ツルゲエネイフ、コロレンコオ、ヴエレセイエフと擧げて來るときりが無い。たゞ**レオニイド・アンドレエイエフ**の「國難に逢つた民衆の告白」ではちがつた刺激をうけとつた、それは一九一四年の世界大戰に遭つて、職業も、地位も、落着いた生活をも一緒くたになくした無産中流階級の男の告白であつて、切羽つまつたそ

の現實の世界が、どすぐろく流れるアンドレイエフの人生懷疑をなほ陰慘にして、地獄の火に燒かれる罪人の苦惱を味はせる。「人間といふものは何といふ哀れなものか。この世における人間の運命は何といふ苦しくて、その謎のやうな魂に對する何といふ苛責だらう。何を求めようとて人間の魂が探し廻るのか。血と涙の中にもがいた果は、一體どこに行きつくといふのか。」彼は絕えずかううめき乍ら、目かくしされた屠所の獸のやうに、明日知れない運命の下を、あてもなくほつき廻つてゐる。

たゞ私は變つたラシアの古い「作家の意味ある作物として、ステプニイアツクの「虛無主義者の生涯（ボーキャリーアー・オヴ・エー・ニヒリスト）」を提出する興味をそゝのかされる。なるほどステプニアツクは嚴密な意味での藝術家ではなからう。「地底のラシア（アンダアグラウンド・ラシア）」の著書は、この小說すらも、宣傳的だ非藝術だと批評されたのを苦にして頻りに辯護して居るほどである。作物の筋を一言に縮めれば、それは標題が示す通り、ラシアの王朝政府と××を根こそぎひつくり返さうとして、警官と探偵の監視にまもられながら、絕えず秘密な運動をつゞけて居る虛無黨員の生活を細かに描いて居るが、それは藝術といふべくあまりに事實の報告になり過ぎた同志の交渉でもあり、また主人公アンドレエの戀と、彼等夫妻の活動史でもある。結局彼はツァーの馬車に××を拋げ付けて失敗し、入牢の末處刑されたところで內容は終つて居る。しかし作家が「彼は死んだ。しかし彼の事業は死なない。それは失敗また失敗を重ねて、つひに終局の勝利に達すべきものだ。我々のこんなみじめな世界では、撰ばれた少數者の惱みと犧牲によらねば、最後の勝利などはどうしたつて求められるものではない」と確信してものを言つて居るだけ、この長い作物を讀み通させる唯一の鍵は、この作物の一行の綫にも溢れる熱烈な信念それだけにある。もう一つは、「藝術は宣傳か」の議論が文壇に八釜しい我國の現狀に照して、此の作家がこの作物の劈頭で、藝術はあくまでも宣傳でないことを主張して居るのが興味多く思はせる。彼はかう斷はるのだ。「こゝに描かれた虛無主義者は、政治家として描かれたものではなく、單に人間として描かれたものだ。この主人公達の、勇敢な自己犧牲の魂、それには敵さへも驚歎するやうな勇ましい魂の行動を目擊した私は、小說としての充分な持ち分の中でこれらの熱信者の人間らしい魂と、內心の感情をその中に示さうとしたものである。かゝる研究の一般的な興味が、私から政治的の目的などをすつかり忘れさした。現代のやうな複雜した時代には、いろいろな違つた型をもつた人間が世界到る處に現はれて來る。その現代の人間性のある一つの型を、忠實に描いて見やうとしたのが、私のこの制作の唯一の關

心であつたのだ。もし私がこの小説の人物を、もしくは行爲をラシア革命家中の過激派、或は虚無黨の上に何故置いたかとなれば、それは單に、それが一番よく、私の表現しやうとする藝術の目的に適合したからに過ぎない。この恐ろしい鬪爭の渦卷のたゞ中で、私の描く人物が、彼等の唯一の特殊性を、遺憾なく具象し得るからに過ぎないのであつた。」「だから多數人が此の小説を、小説の形を借りた政治的パンフレットだと批評する」のはいわれのない事だ。「また虚無黨の意義をよく考察した人々は、虚無黨員が、理論としては極端に否定的であるのに、實行として恐ろしく過激であることを怪しむ。」なるほど虚無黨員は、個人としては非常にやさしくて、敏感である。その個人がどうしてあゝ云ふ實際行動を採るのであるか。その自然の結び付きを考へる爲にも、人間としての虚無黨を知る必要がますます大事になつて來る。その役目は藝術にあつて決して宣傳用パンフレットにないのである、……といふのが彼の主張である。

反軍國主義

オオスタリイのアンドレス・ラツコオは「戰ひの人々（メン・イン・バツトル）」において强烈な反軍國主義を提唱したばかりではない、「歸國（フオム・エゲン）」において、祖國の爲めに大怪我をして、手柄を立て、戰爭から歸つた戰線の勇士が、戰爭成金になつた强欲な工場主を刺し殺す。それは戰爭中に工場が出來て、この勇士ボグダンの言ひかわした娘が女工としてつとめて居る中に、工場主に强ゐられて節操を賣る。贅澤に着かざつたこの娘は、もう貧乏なボグダンなどふり向きもしない。その上ボグダンは砲火のために、二目と見られないぶおとこになつて了つたから猶の事であつた。そうした彼の絶望を、戰線でやしなひ上げた殘忍性がなほの事煽り立てて、極端な憎惡を工場主に懷かせる。また村の人々が、この工場のお蔭で、村が潤ふて來たなどと追從するのが猶ほ癪に障る。すると戰爭から歸つて來た時、村の入口で逢つた社會主義者で、ミハレエといふせむしの皮肉も頭に浮んで來る。「君は眼を無くしていくらになる。一年に五百パオンドか。それよりもつとで、一千パオンドか。處が戰場で鴉の餌食になつた人間共などは何ももらへないのだ。それにどうだ。あの工場の持主などは！　一日何百パオンドを儲けながら、指一本も怪我はしないのだ。その金をまたポケットへ一杯入れては、工場の女工を片つ端から誘惑してあるく。今ぢやあの男も村中で一番の成金となつたのだよ」

ボグダンはとうとう工場主を慘殺して自殺した。

此の外に、近代勞働者の目覺めを捉へたものとしてはフランスのエミイル・ゾラの「ゼルミナル」とか、キングスレイの「アルトン・ロック」とか、ガルスウオジの戲曲「爭鬪」なども擧げられるであらう。近頃めつきり勞働者の工場生活を題材とした作物が多いが、ショウ・デスモンドの「デモクラシイ」や、バルボアの「赤い空に向つて」（エゲンスト・ザ・レッド・スカイ）などは、まだ印象の新らしいものである。

(5) 違つた三つの視野

最後に擧げられるのは、無産階級を眺めた作物の、三つの違つた視野であるが、それはもとより前に擧げたところの、反抗精神を持つたものとは、やゝ變つた態度を採るものである。

先づAは、無産階級者が無産者である故に、現代の産業組織の下にあつて、機械工業には追ひ詰められ、資本家からは搾取される。その悲慘極まる情態を、限りのない同情と憤どをりで表現した作物である。

Bは、有産階級といふ限界をとりのけて、一種の文明批評から出立するものである。たゞ原始的な野性と放浪性が、文明の華やかさに反抗して大自然に向ひ、複雜な現在生活機關の機構に背中を向けて、體力一杯、本能一線の純朴性に還らうとする。そうし　無宿者や浮浪者の群がそこにえらび出される。

Cはまたそれが三つに分たれる。第一は人道的精神のいたみから眺められた無産者であり、或は人間世の大きな悩みを救ふために、爵位や、富や、特權やの誇りを悉くかなぐりすて、すべての所有をふりすて、自分から好き好んで無産階級へ墮ちて行く、そしてかれらと同じ苦行の生活を營む。それが第二。第三は、無産者の環境から生れ出て無産者の境地に安住しながら、大きくは世界を、少さくは個人の苦しみを、人道的な魂と、犧牲の血によつて、いくらかでも輕くしやうとする爲に、迫害と慘苦の中を勇敢にあゆんで行く。

Aに屬するもの

Aの部類には、アメリカのアプトン・シンクレエヤの「叢地」（ジャングル）などが擧げられるであらう。「叢地」は、ラシアから出て來た頑丈な農夫ユルギス・ルドクスの家族が、シカゴの或る屠肉會社へ雇はれてから、始めの中は仕事もまだ樂であつた。十一人の親戚からなる大家族が、男三人の働らきでどうにか其日を食ひつないで行けたが、彼等が現代産業組織の身慄ひすべき殘忍な姿につきあたつたのは、それから間も無いことであつた。先づ

會社内にはそれよりそれと幾つもの係が歯車のやうにつながつて居る。監督とか、見廻りとか、いふ手合が、順繰りに下へ下へと金をしぼつて行く。職工には何時間でもお構ひ無しに働らかして、出來るだけ少なく賃銀をやり、支拂ひはみな別々にする。それでも誰も誰もが、仕事を無くすのが恐ろしいので、苦情も云はずに我勝ちに働らいて居る。一家の苦しさは云ふべくもない。果は子供達すら工場に出ねばならなくなつた。こゝでは一分間も出るのが遅れると一時間の賃銀がふいになつた。また五十分間働らいても、一時間分の仕事でないと金を拂はない。こゝで働らくのは、全く機械との驅けくらべであつた。もし機械に追ひ越されたなら、門の外には、彼等に取つて代らうとする無産者連中がうようよとひしめいて居た。とうとうユルギスは病氣になつた。會社は直ぐ契約を楯に解附した。病氣のなほつた後に穫た職業は、前よりももつとひどい仕事で、全たく泥と汚物の中につかつて居るやうなみじめさであつたが、それも未だよいとして、或る晩、女房のオナが歸つて來ない。翌日歸つて來て何とか言譯したが、同じ事がまた間もなく重ねられた。詮索すると彼女の會社の親方が、金づく力づくで彼女を手に入れたのだと解つたので、怒つた揚句彼は親方といふ奴をひどく毆打した。それが爲に彼は牢にぶちこまれた。家族は追出されて彼は永久に會社の黑表にのることとなつた。こんな人間消費のみじめさが、物質文明の頂上である大都會に、大手を振つて横行して居るのである。けれども考へればそれに不思議はない。物質文明とは所詮經濟文明であり、生産文化である。それでは幾千萬の機械の歯車が不斷にプロペラのやうな呻りを擧げて、は、下積みになつた無産階級の苦惱の聲を片つ端から押しつぶして行くのだ。マキシム・ゴルキイは云ふ、「勞働者は奴隷である。彼等はたゞもう建設するだけで、たゞいつもいつも働らいてばかり居る。彼等の血と汗は地上のあらゆる建設物のセメントである。彼等は彼等の勞働で、すつかりおしつぶされて居ながらも、受ける報酬は、棲む家さへも與へられず、眞に生きて行くだけの食物だけも與へられぬのだ」と。

Bに屬するもの

文明がもしそういふものであるならば、世に文明よりいとはしいものはない。そこでゴルキイのRestlessの仲間が生れるのだ。彼等は文明が生んだ一切の習慣をかなぐりすて、一切の社會の法則に屬する束縛を打つちやつて了つて、一路直ちに野蠻な自然兒となり、眞裸かな人間をむき出しにして、虚僞の文明に挑戰しやうといふのである。だから彼等の一人は自分で自分にか

ら呼びかける、「この仲間から逃げ出さうといふ欲望を持たずに一生をこゝで暮す忍耐を持つためには、君達は文明社會に生れねばならぬ。そこにこそは君達を妨げる澤山の束縛がある。毒をもつた僞りの習慣で承認された束縛がそこにある。自己愛の病的な中心がそこにある。ちゞめて言へば、心を亂し、感情を冷たくする虚榮の中の虚榮がそこにある。何等當り前な理由もなく、極めて虚妄に、一般に文明と呼ばれるものが即ちそれだ」「かつて人であつた生物（グレエテユアス・ザツト・ワンス・ワア・メン）」の主人公は、この理想を代表するのである。

所が私の前に擧げたBの作物は、同じ放浪者を主人公としながらゴルキイの自然兒とはまた型がちがふ。**ジヤツク・ロンドン**の作物に現はれた人々や、**ブレツト・ハアト**の作物に擇ばれた人々がそれである。なぜなら、ゴルキイに現はれる跣足の群や、世界苦の人々は、みな文明の意識を背景にして、その束縛から逃れ出た自由の歡喜にひたるのであるが、ロンドンや、ハアトの主人公は、始めから文明に興味を持たない。たゞ生れたまゝの自然兒として、最も純眞に、汚されずに、大自然に哺くまれた原始人の自然愛をもつて居る。彼等は七面倒な人間社會の法則に縛られて生きるよりも、意志の上でその本能と欲望を遮り止めるもののないところの、生物の世界と大自然に盡きる時のない自由をいつも求めやうとする。ロンドンにはそうした荒削りの壯嚴美と意志美を見る。が、ハアトになるとやや人間味が加はる。そこにはもつと野性を包んだ無宿ものの群が居る。それは文明社會にあつては、或はごろつきであり、無賴漢であり、汚女でありとさへ嘲られところの追放者であり、組ぬけの群であるが、彼等がそのいわゆる不道德漢であり、恐ろしく粗硬な人格を持つと思はれるにかゝわらず、一方虚僞に滿ちた文明社會に求められぬところの、恐ろしく強烈な他愛と犧牲の美しい感情を包んで居る。たとへば彼の傑作である「怒鳴り小屋（ザ・ラツク・オヴ・ロアリン・ザ・キヤンプ）」や「ボオカア・フラツトの追放者（ザ・アウトカスツ・オヴ・ポイカア・フラツト）」を讀むがよい。誰が石原に咲き出た桔梗のやうな、微妙なやさしい對照に、涙ぐましい心を感ぜずに讀みうるものがあらうぞ。

Cの第一

Cに屬するものの第一部としては、**イギリス**の作家**ミハエル・フエヤレス**の「道路直し人足（ザ・ロオド・メンダア）」の如きが擧げ得られるであらう。私はこの作家がどんな經歷を持つた人であるかを知らない。けれども彼れが、おそろしく謙遜な、また敬虔な神のしもべとして、もしくは暖く涙ぐましい人類祝福の奉仕者として、道路直しとして、石割り人足として、現實の人生の姿をぢつと見据え

る刹那に、深淵のやうに澄んだ瞳の清らかさを思ひ、また聖者のやうな心の和みを私の胸の鼓動に感ずる。「私の理想はとゞいた、私は道路直しである、或る者は石割りだともいふ。どちらも正しい。「我等の若い頃に、我等は頻りに我々の理想が何であるかなどと自由に議論し合つたものだ、しかし私の外に、どれほど多くの人々がその理想に達したことか。またどれほど多くの人が、この私のかなつた思ひを解つてくれる事か。所詮現世と未來の我々は、同胞と交り、生き、奉仕する許しを乞ふ外に、または大地の膝の上から、神の顔を見上げる外に、人生に求めるものが何があるといふのか。曲りくねつた白い往來のそばに腰かけて、我が同胞の足跡に奉仕する刹那、あらゆるこれ等のたまものは皆な私のものである。もうそこには貪慾と心配が私の人生に入りこむこればかりの隙もない」この道路直しの人生觀察は、濃い宗教味をもつてつゝましく開展されて居る。

同じ宗教味と、暖かい人道的精神をもつて眺められた無産者に、スウエイテンの女性作家**セルマ・ラゲルレエフ**の、棄てられた人(アウトカスト)」がある。誤まつた世間の噂で人生に破産させられた若いスヴエンが、無慘な迫害に堪へかねて淋しい小島にうつり、部落の人道的開發と慈善事件の營みに、いたましい想ひ出を忘れて居る尊さには、彼女のすぐれた短篇「クリスマスの客(エ・クリスマス・ゲスト)」と共通した一味の信念がある。これは「見えぬ鎖(インヴィジブル・リンクス)」の中の一篇である。音樂が充分に知られてない此の村では、急に年金を奪はれたルステルには、手も足も出ない行きつまりたものであつた。なぜなら彼の職業は、樂譜を謄寫するのと、笛を吹くことだけであつたから、方々をさまよいあるいたが碌な商賣にならぬ。止むを得ず元のわづかの知合であるところの、提琴家として聞えたリリエクロナの家へころげ込む。その中にクリスマスになつたが、毎年家族だけで水入らずのクリスマスを樂しむこゝの家では、今年はルステルが居るので邪魔になつてたまらぬ。それを察したルステルがまた旅して來るといふので、幸ひと彼を旅立せる。が、善良で親切なこの家の主人は、あの氣の好いルステルを追出したのを氣にやんですつかりふさぎの蟲に取りつかれる。案の定、ルステルは途中で雪に埋まり、村人の助けでやうやく音樂家の家へかつぎ込まれる。結局このクリスマスにはルステルも參加することになつたが、主人はもちろん妻君も、すつかりルステルの善良な人物であることに感心して了ひ、この人を無慈悲に追出した事を悔んだ、そして子供達の音樂教師として頼むことになつたが、その爲にこの年のクリスマスは、すべてが心に滿ちた歡喜をもつて、例年になく樂しくおくつた愉快なクリスマスであつた　やゝ御伽話のやうな味はあるがこれ

がラゲルレエフの作物の特性で、要するにすべての人の感情を暖かく繋ぐところの、「見えない鎖」がそこに通つて居る。

Cの第二

Cの第二部に屬するもので、殊に私の興味をひくものは、オランダの作家**ルイ・クウペラス**の「王位(マゼスティ)」に現はれた社會主義者**ザンチ**である。彼はもともとこの王國の華族であり、重臣でもあつた。けれども一たび社會主義の理論を味はうと、その日から先祖から持ちつたへた榮爵をぼろ着物のやうにぬぎ捨てゝ一人の農夫として宮廷を去つて了つた。そして一平民として、××主義の使徒として、新らしい理想を百姓の間に宣傳するのであつた。彼は國内を巡つて來た皇太子オツトマアの前で堂々と説く、「都會は腐敗した。田舍の生活こそは最も聖化されたものである。こゝは彼等が棲む。私はあのずつと向ふから廣い耕地と牧場をみな百姓にやりました、私は彼等のために家畜を買つてやらねばなりません。」「すると君は百姓を卒ゐて行かうといふのか」王子が尋ねると。「どうしまして、卒ゐるなんてことが有るものですか。彼等は私の百姓ぢやありません。彼等は彼等自身の百姓なのです。彼等はみんな自分のために働らくのです、私は彼等と同樣、やはり單純な一人の百姓に過ぎないので要するに我々はみな平等なのです。」と、ザンチは愛想も無く答へる。「王位」は、この社會主義の娘と皇太子の戀を中心として王位の傳統と時代の惱みが三つ巴になつてつかみ合ひ、縺れ合ふ。

他の一つは、ボヘミヤ現代の女性作家、**カロリネ・フエリシア**である。こゝではボヘミヤの民衆が、オオストリイの專制から獨立しやうとして、農民の間に一つの宗教團體が起る。それを指導するのが、貴族の娘で美くしい**マリア・フエリシア**である。もう一人はフエリシアの別邸の門番の子であるところの一青年である。オオスリトイのジヨセフ二世は、皇太子の中こそボヘミアその他に同情とデモクラシイの親しみを懷いて居たれ、一度皇帝となつてからは、却つてオオストリへボヘミヤを併合しやうとする。それをフエリシアがすつかり看破り、子爵の一人娘として、當然自分がつぐべき子爵家の富んだ領地も、別莊も、子爵の榮譽も根こそぎ拋げ捨てゝ門番の子たる青年と結婚する。そして單純な無產階級者の妻として、百姓達の、自由のコウズの爲に奮鬪する。

Cの第三

Cの第三部では、**ドイツのゲルハルト・ハウプトマン**の「キリストの愚者」や、**アルチバアシエフ**の「イザン・ランデ」を忘

れることが出來ない。「キリストの愚者」では、彼の戲曲「機工（ウエイバア）」に採り上げられた、彼の故郷である純朴なシレシアがこゝでも主人公の舞臺になつて開展されて居る。そして「機工」に現はれたやうな機工町の悲慘な生活が、こゝでもやはり主人公の心理にぴつたりと喰ひ込んで居る。この鄕土で、貧乏の極度の家に生ひ立つたエマヌエル・クイントは、少年の頃から、キリストの福音を說敎しやうとする熱情で、心を燃される。すぐと弟子達がふえて來た。と云ふのは、こんなに貧乏と苦しみにさいなまれるかういふ地方ほど、神の愛の憧がれをそゝるに格好な土地はなかつたから。奪はれた物質上の惠みを、天國から投げらる福音で慰められる外は無かつたから、段々と宗敎的マニヤが彼れの全人格をつかんで來た。彼は神の聲をもつて、この限りない地上の惱みを救はうと決心した。迫害が加はれば加はるほど、彼の信念と弟子の數がますます高まつて行くだけであつた。そして入牢したクヰントが、法悅の中にキリストの降臨を見てからは、かれ自身がクリストであることを固く信ずるやうになる。彼の說く所は、デモクラチツクな社會平等を基調としたところの、無私の愛の敎旨であるとともに、原始クリスト敎への還元を强調する純眞な心の聲でもあつた。迫害が到る所に起る。多數は彼を狂信者だとけなす。けれどもそこには、合理的に彼のいはゆる神の敎へを否定する人々がある。「過去數千年の間、神が探された。けれども神は見當らない。或は見つけたにしてもよい。どちらの場合でも、私は斷言する。神は探すに値しないと。恐らく此の數千數百年の間、神は隨分と頭をひねつた筈だ。それなのに猶ほこの社會平等の問題が、少しも解決されずにあり、また神がそれに何等の興味を持たぬとならば、神が我々に何を値するといふのだ」とクロオスキイが冷笑する。「運命が人間に墮ちる？」と、或る牧師が、力のこもつた拳でとんと卓子を撲つ。「私は卓子を撲つことが出來る。けれども運命は人間を撲てない。神は其力を運命に與へられぬのだ。神は人間に自由意志を與へた。彼は善行に報酬を與へ、惡行には刑罰をむくひた。神と人間の前で、汝の罪惡に責任を帶びるものは運命ではないのだ。責を荷ふべきものは獨り人間なのだ」と彼はどこまでもクイントの神の意志を否定する。ハウプトマンは、その嚴肅な現實主義の眺め方で、何等の審判を下さずにこの新らしい狂クリストの行く途を、たゞじつと無私の眼で見まもつて居る。やがて行衞の知れなくなつたクイントは、久しく立つてから、死體となつて、スヰス境の深い氷雪層に埋まつて居るのが發見された。恐らく行倒れになつたものであらう。ポケットの中から、たゞ一枚の紙片が現はれた。書いた文字はまだどう

にか讀める。「天國の神秘」誰もこの意味はわからなかつた。「クイントは悟つて死んだか、それとも疑つたまゝで死んだか、この一片の紙片は確かに問題の鍵を握るものだが。が、それは所詮何を意味するのか。「天國の神秘？」……」作家はこゝでペンを捨てて居る。苦しみのもとは物質か、靈魂か。物質改造か、心的改造か。作家は已に「機工」でも同じ疑ひを投げかけて居た、今日こそ、この作家がその懐疑の雲を割つて出るべき時機が熟した時ではないであらうか。

アルチバセエフの「イヴン・ランデ」は、クキントと同じやうに聖純で、敬虔で、同じやうな忍辱の心にあええで居る聖者ではあるが、さればとて、クキントのやうな強い熱狂をもつた宗教人ではない。ランデではたゞキリストに、むしろより多くの人道精神と悩みの救世魂を見出す。憐人の愛の權化を見出す。彼は人間のいかに微少なるものであるか、各瞬間、或は百萬分の一瞬間に、この巨大な地球も、ある恐ろしい力のために、全く考へることの出來ない遠距離に掃ひ去られることの恐怖におのゝい一居る。そして人生の空虚をそこにしみじみと感じ乍らに、また「極めて些細な敵意のある力が、我々の存在をうばつ事が出來る」事を信じ乍らに、然しこの宇宙の眞核たるべく見える人道の歴史の發展は、極めて確かであり、又た自由であると見る。人は凡てが冷却して何物かゞ我等の地球に起ることを期待して居るやうに見えるといふ。その何物かは必ず起る、起らねばならぬ。それが起つた日にこそは、あらゆるものが搖き動される。茲に破壞が起り、そこに創生が現はれる。「新らしい光は我等の目前に現はれ、新らしい革命、新らしく、且つより多く驚異すべき人生がそこに湧き起る」ことを内に彼は感ずる。

そのランデである。憐れな一學生が數十里の彼方のヤルタに病むと聞いて、居ても立つても居られなかつたのは。然も旅をする一錢の金も無い。さらばと徒歩で何十里の途をあるいて病友を訪はうとした。シシユマリオフが無謀な企だてだとしてそれを止めると、彼は、「我等はお互に愛し合はねばならぬ。お互に憐れみを感ぜねばならぬ。其他の事は自然にどうにかなるだらう。あらゆるものは苦悩に洗はれて成就する。もし世の中に苦痛なるものがなかつたなら、靈魂は停滯して死滅するであらう」と魅かれたやうに言ひ放つ。そして途のない荒野を、一錢の金もなくて辿つて行つた彼は、やはり目的地にも達せぬ半ばで、深林の中に餓え死んで了つた。「神樣、神樣」彼がそつと呼んで見た。この眞暗な深林の中では、その小聲の呼びかけが、恐ろしいほどはつきりと自分の耳に反響して來るやうに思へた。が、それだけ深林の靜寂は、前よりも一層しづまりかへつて來

るのであつた。雨が土砂ぶりに降つて來た。彼は全く知覺がなくなつて了つた。輝やいた眼をした親しい人々の顔が、長い行列をつくつて、彼の前で會釋しては、そこをとをつて行く、後から、後からと、そしてみんな遠い彼方に消えて了ふ。……「アーアーア」呻きとも、泣いてるともわからない弱い叫びが、ぼんやりと暗黑の中を流れて行く……たゞそれだけであつた。

こたゞけの現實を、私はたゞ無差別に展開した。それに對して、何かものものしい結論を與へねばならぬのが普通の論文の樣式のやうであるが、無性な私はそれを止める。一つは此の小說文は、藝術から社會性を見たものではなく、社會性から藝術相を觀やうとしたものだからである。しかも刻々に變化し行く社會相は誰もの現前にある。誰人もはその現前によつて、この藝術相を自らの思索の中に拾ひとるのが便利だと考へるからである。たゞ私が全體を通じて感ずることは、藝術家がえらければえらいほど、どんな巨大な事相の前に立つても、決してその個性を一毫も失はぬばかりか、ますます潑溂と、その事相の中から、事相大の自己を輝やかして來るといふ平凡な哲理である。

プロレタリア作家とその作品

野村吉哉

このやうな題目のもとに爲される評論は、すでに、多くの先輩によつて書き盡くされてゐるやうに思はれる。そして、この鼻垂らし小倅が、いまさららしく、業々しいかゝる大看板を擔ぎ出すことは、いさゝか僭越なことであるかもしれない。しかし、既成されてゐるところのそれらの相場表に、作家としてもいつまでもその變りない價に停滯してゐるものでない限り、それらに不滿足を抱いてゐることであらうし、従つて讀者にとつても、新らしい改正相場表を要求してゐることは當然のことで

あらうと思はれるのである。

それに從來あるところの相場表は、その同業者同志が、樂屋裏から眺めたものを書かれたものがその大部分であるために、黨派的であつたり、妥協的であつたり、商策的であつたりしてゐる爲に、それを一般的に通用させてゐることは、刻々と騰落し、變動しつゝあるところの新興文壇の權威ある公定相場としては、いさゝか普遍性と必然性とに缺けてゐるやうに思はれる。

以下、目下活躍しつゝある、そして代表的な花形として一般から見られてゐるところのプロレタリア作家について、取引所の觀覽席に佇んで、その最新相場を報告してみようとするのである。

順序はいろは順である。

●●●井東憲。人間としては、性質から見ても、私は、彼はあんまり完全な、人派な人格をもつてゐる作家では無いやうに思つてゐる。いかにいろは順であるからといつても、第一番目に引つぱり出す程の作家ではないやうに考へられる。そしてまたプロレタリア作家の最つ先きに書きはじめるだけのものではないやうに思ふのだが、いろは順として書きはじめてしまつたことでもあるから、まあ前座を勤めさせる程度の作家として、他のプロレタリア作家諸氏も憤慨しないでゐて貰ひたいと思ふのである。

彼の書いた作品——小說でも、戲曲でも、評論でも、なかなか達者によく書けてゐる。なかなか上手に、すらすらと面白く書けてゐる。が、しかしそれだけのことである。面白く一通り讀ましてくれる。要するに、たゞそれだけである。

彼は社會のどん底を通過して來たと云ふことである。そして人生のどん底に呻いてゐる多くの悲慘な魂を見て來たと云ふことである。確かに見て來たに相違ない。彼の作品を讀むならば確かに見て來たに相違ないことがわかる。しかし、それは見て來たに相違ないだけのことではないだらうか。その正確な知識が、間違ひなしに彼の頭の中に沁みこんでゐるに相違ない。しかもそれは、たゞ知識として這入つてゐるだけではないだらうか。彼の作品に現れてゐるものは、その知識の完全に、具體的に表現されたところのものなのではあるが、しかしたゞ完全に具體的に表現されただけのものなのではないだらうか。

彼の長篇小說「地獄の出來事」にしろ、其他の小說や戲曲にしろ、それには、少しも間違ひやごまかしはないのに、讀者の胸に肉薄してくる力が感じられない。「なる程、そんなものかな」と云つたやうな、肯定の心だけが起つて來るのである。或

はもう一歩進んで、共鳴の心が湧いてくるだけである。たゞそれだけである。讀者の心は、すぐに他の別な自分勝手な事柄に心を移してしまつて、井東憲の作品を讀んだといふことは一瞬にして忘れてしまつて、その印象といつたものは殘らないのである。

それは悲慘などん底の生活が描かれてあつたとしても、それがありありと目に見えるように如實に書き現はしてあるだけで、それには魂が感じられない。三面記者の雜報記事を讀むやうな氣がするのである。しかし、さうであるからといつて、別にその作品が、つくりものであるとは思はない。その背景、その姿、その思想、その感情、溢れるばかりの實感に滿ちてゐる。しかもそれは鮮明は寫眞を見るように、はつきりと現はされてゐる。それに、どうして魂が這入つてゐないのであらうか。

彼がどん底の生活から得た體驗を、ありありとその作品に眺めることができる。それにその體驗が死んでしまつてゐるのは何故であらうか。表現や、其他の創作上の條件が、滿足でないのでは決してない。前に言つたように、それはすばらしい上手さである。しかも新鮮な美しい草花を見るようである。それにどうしてそれが造花のように見えるのであらうか。

私は、彼が如何なる動機から、そのどん底生活に這入りこんで、そのどん底の社會を眺め、そして悲憤と涙とを味ふようになつたのであるかが知り度いと思ふのである。

彼は大學を出てから、世の中へ飛び込まうとする時、彼の目の前には、澤山の道が現れてゐたのに違ひない。その幾條ものの道のうちで、もつとも醜惡な道を選んで歩いて行つたといふその事は、最も同君の作品に現れるべきものについて重大な關係をもつてゐるであらう與件をもつてゐなければならないことである。私は、人生の試練に堪へるべきための勇猛心をもつて、そのまつたゞ中に飛び込んで行つたところの勇者としての彼の姿を見るものである。しかしそれは一種の道樂的意味を有するところの自己慰安、變態性慾的に出發したものではなかつたかと考へるのである。

彼の作品に現れたる背景觀念に、讀者は、自己慰安的な、變態精神的な、そして道樂的な、しかしまた化學者の試驗管の藥品を取扱ふような態度の眞摯さを見出すのである。

自分がそのまつたゞ中へ飛び込んで行つて、自分自身から働らき出すのではなくて、傍に佇んでそれを眺めてゐる――作られた自分を、作つた自分が命令して働かせてゐる。さうした感じがするのである。

しかしそれでも良いのである。今は「それでも」良い時なの

である。日本の文壇は、今そこにあるのである。それでうまく書けてゐる、そして新らしい表現をもつて爲されてゐる彼の作品は、決して耻かしいものではない。立派なものなのである。しかし……しかしといふ不滿が湧いて來るのは、「それでも」良い時が、もうやがて終りに近付かうとしてゐることを考へて見るからである。だが、この作者は、世の中の苦勞を知つてゐる、世渡りの方法を知つてゐる。決して時代におくれるやうなことはないであらうと、私は信じてゐるのである。

吉田金重。彼に一寸でも會つたことのある人は、誰でも、すぐに、偏屈な、非常に我儘な性格の持主であることを直觀することができるであらう。しかも彼の場合にあつては、その我儘さや、偏屈さが、いさゝかも癪に障らないのである。それが、少しの不自然さもなしに、むしろ快よくさへ感じさせるのである。それは、その偏屈さや我儘さが、彼の人間として、少しのまごかしなしに、ぢかにぶちまけられて現れてゐるからである。いさゝかの技巧もなしに、いさゝかの粧はれたるものもなしに、自然の儘にあらはされてゐるからである。

つまり彼によつて、その偏屈さや我儘さが、すつかり征服されてしまつてゐるのである。

私はかなり前に、はじめて彼の小說を「熱風」で讀んでからそしてそれがあんまり立派な作品でなかつたので、大して偉くない作家だと考へこんでしまつてゐたのである。そして、それが潜在意識になつてゐたせいであるためか、其後彼の作品を、いくら讀んでも、大して感動することがなかつたのであつた。大抵の人々も、彼に對するさうした潜在意識をもつて、彼の作品を評價してゐるらしいやうである。

ところが、近頃になつて、その最近の作品を讀むに及んで、そのかなりに頑固に頭に泌みこんでゐた潜在意識が、だん〱跡形もなく消滅するやうになり、つゞいて新らしい感激が湧き起るやうになつてしまつたのであつた。

最近油ののりきつてきたその力强い筆致は、前の非束縛の場合と全然反對な意味での上手さで、私を驚歎させてしまつたのである。そして、「これだ。これだ！」と云つたやうな、今まで求めてゐた作品が、やつと與へられたやうな心地がしたのであつた。それ程、彼は最近すばらしい立派な小說を書いてくれるやうになつたのである。

彼の作品には、彼の性格が、その偏屈な我儘な姿が、そのまゝにはつきりと躍動してゐるのである。

彼の作品の最近の成功は、決して他の作家に於けるがごとく

幼稚な境地から、段階を經過して進歩して行つて到達したものではなく、本質的には變りのない同じ土臺が、今までは充分に書き現はすことができなかつたのが、最近餘す處なく書きこなせるやうになつたことを示してゐるのである。その手腕が圓熟して、その持つてゐる本質的な力量を、思ふ儘にあらはすことができるやうになつたのである。

もし他のプロレタリア作家達が、その小技巧を弄した作品に行き詰つて、文壇的に忘れ去られ、自から亡んで行くやうな時がやつて來たとしても、彼だけは、その影を消してしまふやうなことは無いだけの實力を持つてゐるのである。彼の作品は作られたるものではないからである。作られた創作觀念や、借りものの思想や、間に合せの感情ではないからである。すべてが彼自身そのもののあらはれなのであるから。

しかし時代は刻々と停止するところなく進んで行く。もし將來が、彼よりずつと前方に進んだ境地に到達してしまつた場合に於て、他の作家達、例へば井東憲の如き作家の場合は、それに迎合するだけの悧巧な立廻りをする小手先の技巧を持つてゐる。しかし彼にあつては、默々として、その偏屈さをもつて、いさゝかも彼の本質と變りの無い作品を示してゐることによつて、氣まぐれな讀者の心から、忘れ去られるやうなことになりはしないかと思はれるのである。

彼は、現代の末期から、次代の初期へかけての代表的と稱することのでき得る作家である。しかし次代に爲つて、彼自らは永遠に亡びることはないとしても、讀者から遁れて、捨てられてしまふやうなことになりはしまいか。今は私達の心を打つに足る其作品も、讀者がその境地より更に高いところに到達することによつて、いさゝかの感激も起し得られないやうになりはしないか、といふ問題である。

彼は其場合に於ても、置き去りにされてしまつたことを、あきらかに感じながら、しかもその偏屈さは、我儘さは、相變らずの自分自からをもつて押し通さうとするに違ひないと思はれるのである。其處に彼の惱みがある。其處に、思ふ儘な轉換を自分に障害されて爲し得ない、弱い彼の一面が現れるのである。

彼はあまりに眞面目過ぎるのである。それは、作品に現はれてあまりに單調なものになりたがる傾向となるのである。彼の作品にはまた、ねばり强さが無い。そしてまたあまりに熱情が無い。それは、彼の冷靜な性格の一面が、偏屈な性格の部分があらはれてゐるのであるが、大變損な立場に、その作品を導いて行くことになるのである。彼は自分でもそれを知つてゐなが

ら、彼にはどうすることもできないのである。まとまつた哲學を所有してゐない彼には、その作品を單調にし、無味乾燥なものにしてしまふより仕方がないのは、殘念なことである。

藝術家としての彼は、將來を期待すべきものではない。すでに現在にあつて、最高潮に達しつゝある。そして現在に於て、何人も比肩し得ざる境地を持つた作家なのではあるまいか。

內藤辰雄。私は、彼が「完全なる凡人」であるか、「不完全なる天才」であるか、といふことに久しく考へ迷つてゐた。そして彼が、いづれに進んで行くかといふことに、興味をもつて注視してゐた。そして、それは今私をして、未だそのいづれにも到達するまでには行つてゐないところの、ほんの子供に過ぎないといふことを知つた。

彼は未だ頭の完全に出來てゐない子供の境地にゐるのである。だから、どのような物笑ひの種になるやうな馬鹿げた言動をしたとしても、それは頭の堅まつてゐない子供の無邪氣さなのであつて、彼には、何等科學的な、そして自己反省的な意味をもつて批判され得る程度迄には到つてゐないのである。

しかし彼は、その子供の境地に存在してゐるのであることを否定するに違ひないが、しかし、それは子供が、大人と差別されることを嫌がり、子供として侮辱された待遇であることに滿足しない、といふような心理に異らないのである。或はその子供らしい稚氣から、その子供らしい感情の逃避所として、むしろ子供であるといふことを呼稱する程度の子供らしさであるかもしれない。

彼を作家として、批判することを要求するならば、私達は一笑に附するより仕方がなくなつてしまふのである。

彼は、その子供らしい單純さで、物事を批判し、決定したりする結果、それがすぐに後から後から幻滅に導いて行つてしまふのであつて、そして仲間からは、馬鹿であると信ぜられ、白痴であると價値づけられる所以なのである。しかし彼は決して馬鹿でも白痴でもない。彼は非常に悧巧な、そして頭の良い男なのである。たゞ、それが子供の幼稚さにあるに過ぎないのである。

例へば彼が、未來派作家なり、と自稱する。ところがそれは、彼の處に遊びに行く廿歳前後の文學青年が、お世辭に言つたことを本統にして信じたに過ぎない。彼は、未來派なる藝術は如何なるものであるか、といふことは知らないのである。素人が新らしい畫を見るように、一寸書き方が普通と異つてゐると、

とにかく未來派と思ひ込む程度の子供さなのである。「もう評論は書かない」と自稱しながら、相變らずあくせく書いたり、そんなことはどうでもよいのだが、初めから公稱する必要の無い事を、何等の自己反省無しに、一寸した感情で定めてかゝつて物笑ひの種を蒔いてゐる程度の子供さなのである。しかも彼にあつては、子供から純粋さを引き去つた殘りの子供さなのである。

昨日の言葉と、今日の言葉がとんちんかんでまとまりがなかつたり、意味の解つてもゐない文句を引つぱり出して、馬鹿にされたりする程度に低迷してゐる子供さなのである。

私は、彼の最近名を知られて以來の作品については、言葉を述べることを耻ずる。私は彼の無名時代に於いて發表したところの作品を推稱しておきたいのである。

事實その頃の作品を讀むならば、相當頭のある人間ならば、誰でも彼の前途にすばらしい期待を抱いたことに相違ない。ところが昨年あたりになつて、多少その名が知られかゝつてからの作品は、一つとして、その期待をした自分に呆れるやうなものばかりなのである。

プロレタリアの文藝の興隆につれて、彼をして、あまりに急に名を知られるやうにならしめたことは、自己反省なき彼をして、このやうな慘憺たる悲境に陷らしめたのである。勞働以外に生活の無かつた彼に缺けてゐた修養の不足といふことよりも、商策として彼を引つぱり出してしまつたプロレ文壇人に罪があるのである。

學問や、知識の多過はこの場合問題では無い。この位の日本の文壇ならば、一寸文章でも上手に書き得られるならば、誰でも、何時でも、小學生でも自由に、ある程度までは作家として通用することのできるところである。そして「作家」の肩書を得るために、小說を書く人々によつて爲されてゐる文壇に過ぎないのである。それだけのものとしての觀念をもつて、小說を書いてゐる憐れなる作家のごとく、彼も當然その境地に陷つてしまつたのであつた。彼の場合、豫期するところが大きかつただけに、救はれることがなかなか困難なのである。

彼は、彼自身の既成されたる創作觀念、思想、感情の一切を放棄して、第一歩より築きあげなくては、到底救濟され難いのである。彼の造つたカテゴリイを自ら破壞して、自然のうちより、新らしく生れ出でなくてはならないのである。

彼は何時でも、朝から夜まで、こつこつと部屋に閉じ籠つてその小說を書きつゞけてゐる ―それは彼の頭をして異常に不完全にし、ペンの上の小技巧によつて感情を弄する惡癖に導い

てしまつたのである。それが、知識を浪費するばかりで補充する暇のない、しかも元來豐富でなかつた頭を以てして、異樣に奇形兒となつて現れてしまつたのであつた。もし頭がそれに伴つてゐるならば、或は一新境地を開拓する導因となつてのであるかも知れなかつたが、それは不完全な、流産されたる奇形兒となつて出てしまつたのである。

彼はもう到底救はれ難い。と彼を知る人々によつて言はれてゐるのである。しかし私は、尙一つの道を、彼のために見出すことができるのである。

彼は子供である。子供なることによつて流産されたる彼の藝術は、大人となつて後――この大人といふことは、子供の大きくなつたものを指して言ふのではない――完全な健康兒を生むことができ得るであらうことを豫期するのである。だが、彼はそもいくばくの年月を費して完全なる大人になり得るかは疑問とするところである。

しかし、あへて彼の大人になることを待つてまで、その藝術を期待する程のことでもないのではあるまいか、といふことを私はおそれてゐるのである。

中西伊之助。彼には未だ會つたことがないので、彼がどんな人間であり、どんな人格を所有してゐる作家であるかは知らない。しかし、きつと彼の作品に示してゐるやうな、いや彼の作品そのもののやうな人間であるに違ひないと思はれるのである、そして彼の作品は、彼そのもののあらはれたものであり、いさゝかも粉飾され、粧はれてゐるものではないのである、と思はれるのである。

彼の作品は、上手すぎる程上手である、といつて、しかし非東懲の作品に見るやうな浮ついた小さな上手さではない。どつしりとした重みのあるすばらしく太い線で、快よく示された上手さなのである。

彼の小說を讀んでゐるうちに、われ知らず躍りがあがつて怒鳴りたくなつたり、思ひきり大きな聲で泣き出したくなつたりしてしまふのである。

彼の作品には、それ程の力强さと、熱情とを持つてゐるのである。しかしそのくせある一面では、氷のやうな冷たさがあるのである。

兎に角、私は文句なしに、新興藝術家としての最も優れたところの本質を彼がもつてゐるといふことを、最高級のプロレタリア作家であるといふことを斷言することができるのである。

彼にとつてはそんなことにこだはつてみられないことなので

あるかもしれないが、そしてそんなことに文句を言ふ方がまちがつてゐるのかもしれないが、彼の作品には、よく洗練されてゐない文句や、概念的な文章があつて、それが奥歯に何か挿まつてゐるやうなぎごちなさを感じさせるのである。しかし、そこが、彼の原始的な力強く胸を打つところなのであるかもしれない。だがさうした點が、單に文章の上から見ると、非常に古くさい感じをさせるのである。

彼は科學的な新らしい感覺や神經によつて、新鮮さのある境地に進んで貰ひたく思ふのである。彼はあまりに完成され過ぎてゐるので、さうした處にも不滿が起つてくるのである。

そして、思ひきり飛びはなれた境地に進んでくれても、決して失敗するようなことは無いであらうと思はれるのである。

小川未明。彼はプロレタリア作家の大親方として、自他共に許してゐるところである。

彼は、加藤一夫。江口渙、宮島資夫、等と共に、プロレタリア作家のうちの先輩に屬してゐるが、他のそれらの作家と比較して、大して彼が、飛びぬけて優れてゐる程のものでもないのに、如何にして彼が、その大親分なる地位に擔ぎあげられるやうになつたのであるか。

前記諸先輩のそのまた先輩であるから、とするならば、いささか滑稽な次第でなければならぬ。

彼の書くとこの小說のうまさと、その反抗精神も、なかなかうまく溢れるやうに書けてゐることによつて、それで元老としての地位が定まつてゐるものとするならば、彼程度の上手さ、革命意識は、かけ出しの三文小說家や、プロレ小說家志望の文學青年でも容易に書き得らるゝところであつて、彼は年功によつて、自由に、達者に、すらすらと書き得られるやうになつてゐるといふところのもの以外ではないのである。

新興文壇が、さうした半分死にかゝつてゐる老人を、傳統的な意識のもとに奉つてゐるのであると、すると、いさゝか心細い次第でなければならぬ。

彼の小說は、單なる長年の間書きなれたことによつて泌み出してきたところの味に外ならぬ。味はつてしみじみ感賞して、喜こんでゐる文壇であるとするなるならば、いさゝか情けない次第のことでなければならないのではありはしないか。

彼のもとに日夜推參するプロレ文學青年達は、その數かなりなものであると聞く。そして御機嫌奉仕に參上する、かけ出しのプロレ作家の群と共に、この元老のお聲がゝりをもつて、あつぱれプロレ文壇に乘り出うとの野心をもつて團繞してゐる勢

力は優にプロレ文壇を動かし、支配することのでき得るだけのすばらしいものであると。

彼また良い心持に納まつて、野良犬共の間に、偉風堂々と君臨してゐるのである、といふことである。

故にこの大親分の御氣嫌を損ずるやうなことがあるならば、プロレタリア作家にとつては、その偉大なる潜勢力によつて、プロレ文壇的致命傷となつて報ひられるであらう、あなおそろしや、といふことである

もしそれが本統であるとするならば、こんなことを書いてゐる私も、非常にあぶない立場にあると言はなければならない。まことに怪しからぬ大べら棒のことどもである。いやこんなことは、所謂流言といふもので、決して本當のことではないのであらう。きつとさうに違ひない。

しかしこのような老人については、すでにその用務を終つた前代作家として、しかしながら今日に於ても、尚プロレタリア藝術を論ずる場合に於ては、その名前だけは引つぱり出して來る必要があるのである。と書いて、この御老體を煩はすことはこれでやめておいて、次に移ることとしやうと思ふのである。

尾崎士郎 彼もまた中西伊之助と同じやうに、未だ私は接したことが無いのであるが、その三四の作品を通して見た彼の姿なるものは、中西伊之助の場合と同程度に、作品そのもののあらはれとして、彼を知ることができるのである。

彼の小說は、非常に氣の利いたもので、一寸した散文的に成功してゐるのである。しかし、その成功してゐる點に於て、いさゝか不滿が感じられるのである。あまりにすらすらと流れ去つてゐるところに、ある物足らない感じが湧いてくるのである。

勿論どれもこれもみんなさうであるとは言ふことはできないが、それが、あまりにも氣が利きすぎてゐる爲に、その線が淡いものに現れててゐるので、讀者の心を打つものが、濃く太く現はれてゐないやうになつてしまつてゐるのである。

それは子供の純粹さでなく、大人の幼稚さである。彼に、面白い、或は力のある、熱のあるどつしりした作品を求めやうとするのには、彼はあまりにも小才子すぎてゐるのである。

彼に、泥くさい、すゝけた、油じみた太い線の作品を求めることは、求める方がまちがつてゐるのかもしれない。しかし、彼はその無理な點から、次代に殘るべき姿を失つてしまつてゐるのである。

彼は、彼のその境地から、更に新らしい科學と哲學とを生んで、さうした味ひのある作品を造り出すことの技巧に馴れることが必要なのである。

しかし、繩のれんのぬらぬらした空樽のうちに、このような胸をすかせる快よいソーダ水も必要なのかもしれないのであるけれども、しかし氣の拔けた古い、水つぽいそれでは、いさゝか情けなくなるのであつて、下痢させるものは、初めから飲みたくないやうな氣がするやうになりはしないかとも思はれるのである。

私は、彼の小説よりも、その評論の方が好きであるやうな感じがしてしまふのである。彼もまた、いつまでも行き詰まりなしに、その小説を書きつゞけてゐることができることとは思つてゐないであらうと考へられる。

前田河廣一郎。彼は、十三年もアメリカを浪浪してゐたといふことである。そして、ジヤツクロンドンのやうな作家であるといふことである。何も十三年アメリカを放浪してゐたといふことは自慢にはならないが、そしてジヤツクロンドンに似てゐる小説家であるといふことも、何も別にさう大して自慢にはならないのである。

彼自身から、決してそんなことを自慢してゐるやうなケチなりようけんの作家ではないであらうと私は考へるのである。

そのメリケンゴロあがりで、無頼漢あがりで、熊のような身體をして、暴力があるので、それにおそれを爲して、誰一人として、彼をケナす者もなく、みんなお世辭を言つたり、お上手を言つたりして褒めたくもないのに褒めてゐるのではないであらうかと思ふのである。「前田河を賞賛する者は、彼のスケールの大きさを云ふ。しかし、私はそんなことには感心はしない。こんなことに感心するのは、その昔、有島武郎の作品のあるものにスケールの大きさがあるとか云つて感心したのと同程度のものだ。私でも十三年もアメリカに放浪してゐたら、彼以上に「スケールの大きい」とか云つて、其處らの群小批評家を感心させて見せる。また或者は、彼の作品の傑ぐれた技巧、特に海上の描寫を賞賛する。しかし、私はそれにも餘り同意ができない。前田河位ひの技巧なら、私にだつて持合せがある。彼が太平洋を描寫した「三等船客」と、ゴリキイがヴオルガ河を描寫した「フオマ・ゴルデイエフ」とを比較して見て、いかにヴオルガ河の描寫がヴイヴイツドであるかを知るがよい。前田河の賞賛に値するのは、そんなスケールとか技巧とかいふ末梢的なものではない。

新興階級と云へば、それがプロレタリア階級であるが如く、新興藝術と云へばプロレタリアの藝術(即ちプロレタリア自身の發想か、又はプロレタリアの味方をする者の發想か、何れにしてもプロレタリアの解放運動の一分擔をするものでなければならぬ藝術)である。このプロレタリア藝術の根本をなすものは何であるか、即ち階級鬪爭の精神ではないか。もし藝術、人間の生きることに對して何等の貢獻をなさないものなら、すくなくとも私だけにとつては、藝術なんかは、この地球の上の邪魔物に過ぎない。道樂息子がこの社會からその安住を呪はれるのと同じ理由で、藝術をプロレタリア解放運動から呪はるべきである。否、既に勞働階級の戰鬪分子からブルジョアの藝術のみならず、プロレタリアの味方であると自稱するプロレタリア藝術に對してすらも反抗の聲が上つてゐる。そしてこの反プロレタリア藝術の聲は、ある點までは我國のプロレタリア作家は甘受しなければならないと思ふ。それ程に組合運動の決意と、所謂プロレタリア作家の決意との間には甚だしい差違がある。ブルジョア作家はさて措いてプロレタリア作家と稱する人達のなかで、幾人の作家が階級鬪爭の精神を眞に理解してゐるであらうか。正義派や人道派の作家は、プロレタリア作家と稱せられてゐる人達のなかに數多く見受けられる。しかし誰がそのなかで、眞に階級鬪爭の精神を把握してゐるであらうか。流血の場合にも、無産階級××の原則を擁護して、正義や人道の悲鳴を擧げて反革命者にならないプロレタリア作家が幾人あるであらうか。私が前田河を賞賛するのは、この點である。彼はプロレタリア作家(彼自身でそんな名稱を自分で冠したことはないであらうから、或は迷惑かも知れないが)中で、この階級鬪爭の精神を摑んでゐる極めて少數の人達のなかの一人である。彼の作品のなかから、この根本を摑まないで、スケールや技巧やばかりを賞めてゐるのは、酒に醉つぱらつた前田河の勇敢を賞賛して、その背後に潛んでゐる頭の冷靜、酒に吞まれたやうで、その實は少しも酒に吞まれてゐない彼の確かさを、まるで見逭して終つて、ワイワイ賞賛してゐるのと同樣で、恐らくは彼は批評家達の甘さを彼方向いてベロリと舌を吐き出してゐることであらう。

前田河に感心していゝのは、この階級觀念から出發した迫撃力である。同時に、彼の作品の持つ性的粘着力である。見よ！彼の書く一本の樹木、一筋の河の流れと雖も、それがまるで××であるかのやうに、性的粘着力を發散してゐる。お上品なブルジョアや、藝術的プロレタリアは、この階級的迫撃力と××的描寫とを正視することができないで面を背けて終ふ。そし

て非藝術だとか、芝居がかりだとか、無作法だとか呟く、しかし、私はこのブルジョアや藝術的プロレタリアの言に同意することはできない。その反對に、この迫撃力と××的描寫に「及び難しとして、感嘆し賞贊するものである」と山川亮は彼を批判してゐる。

私の言ひたいことは、彼が殘りなく言つてくれてゐるやうな氣がする。

彼は中西伊之助と共に、次代藝術を形造る二鬪士であるように、私はのぞんでゐるのである。

藤井眞澄。彼れに對する批評は、相當にあるらしいが、しかしそれらが、彼自身にとつては屁程にも感じられてゐないようであることは、彼が、それらの批評家よりも偉いからなのではなく、科學的な彼の頭は、それをすぐに分折してしまふからなのであつて、彼を批判するには、「毒を以つて毒を制す」式に、科學的な根柢の上から立合はなくてはならないのである。

一般に、それ程、彼は科學的な觀念と性格とをもつた人間のやうに思ひ込まれてゐるが、しかし、彼は科學者ではない。彼はそれよりも、哲學的な唯物論者である。人々は唯物觀的に彼を見て、そして唯物論者として彼を承認しようとする。しかしその根柢を爲してゐるところのものに氣付かないでゐる。

彼は極度に科學的であると共に、唯心的な分子を多量に持つてゐるのである。むしろ私は、彼を唯心論者であるとさへ言ひ度いと思ふのである。

彼のその唯心的立場が、唯物觀となつてあらはれてゐるのである、しかも彼の場合では、それを綜合して、相制的に統一されることもできないのである。科學的に見て、科學萬能論者らしからぬ、曖昧なその態度は、從つて機械觀的に陷り易いのである。

彼はそのもつてゐるところの唯物觀、唯心觀を相制的に進ませて、絕對に入るためには、順序として、まづその表面にこびりついてゐる唯物觀をかなぐり捨てて、絕對的な唯心觀に進まなくてならないのである。そして、彼は、その境地から、哲學的思索に向はなくてはならないのである。

彼のもつてゐる科學は、非常にばらばらな支離滅裂とした雜然としたものなのであるが、彼はそれを哲學を働かせて綜合統一しなくてはならないのである。

彼は、彼の劇によつて示してゐるところの表現主義が今日到つてゐるごとき境地にゐるのである。轉換期の混亂そのもののあらはれである表現主義から、彼はその科學を土臺として 哲學

學を通過して、構成主義の藝術に進まなくてはならないのである。

ところで、すでに科學的藝術に徹したるところの作家は、當然なる自然的階程をもつて、おのづからなる順序に進んで行くものである。彼の新著「超人日蓮」に於ては、すでにその表現主義的な筆致は、その科學的分子よりも、哲學的な分子を多量に見ることができるのであつて、私は微笑を禁ずることができないのである。

しかし未だそれは、完全な洗練を遂げてゐるとは言ふことができない。勿論、それは次代藝術を形造ることの資格は充分ではあるけれども、そして沈潜しつゝある現代藝術境からは、はるかな先驅を爲してゐるものではあるけれども、しかし、更にその數歩前方を照らすことのでき得る理想郷を、私が敎へることができ得るとするならば、私が玆に述べようとすることも、決して無駄なことではないと信ずるのである。

普照と云ふ坊主の言葉の「隨處作主立處皆眞境來回換不得」の境地に到達する爲には、まだまだかなりな道程を必要とするのである。その道程を通過せずに、眼と、ペンを持つ手とだけが目的地に飛んで行つてゐるだけでは、まだ力強さを持つ藝術は生れ得ないのである。その完全な藝術を建築する爲めに適當なるところの根本的な土臺が、淺薄な、上すべりな、根柢の無いものと爲つてしまつては、彼個人としての、そしてその藝術としての、悲しむべき末路を示す原因となつてしまふのである。

彼はよく勉強してゐる。よく學んでゐる。しかし、それは彼の藝術を助長させるための表面的な一部分を爲すものに過ぎない。彼はその根柢を爲すその土臺の方向について、勉強することを怠つてはならないのである。

私は玆に、彼の作品について、そのうまさだとか、力だとか思想だとか、創造精神だとか、表現形式だとか、技巧だとか、については多く費す必要がないと考てる。

「彼位ひ親切で、彼位ひ友情に富む男は稀である。彼が如何に、無益である。ばなりでなく、有害なる友人のために、時間と精神とを搾取されながら、奴隷的無反抗であるか。しかも彼は孤獨の尊貴をも知らず、靜寂の法悅も知らず、さうかといつて大道、或は群集の中で怒號するだけの勇氣もなく、一室に革命病人、色盲患者、手淫的生活者を集めて、枯草や何人の常識でもあることを喋々し、呶々して、自他のセンチメンタリズムをあへてして居る」と内藤辰雄は彼に就て言ふ。そしてまた「彼思ふであらう。自分は功利、打算に徹し、いざとなると彼等を利用するのである、と。しかし不聰明なことには、彼の友情、

恩義に感じ、いざとなると、彼のために働らくような者ありや否やを友人中に物色する丈の智の働らきを持つてゐない。而してプロレタリア××を要求しながら、プロレ文士志望の青年の多くを友として、夕陽の光りに洗はれた竹藪の雀の如く聲を揚げてゐる」と、内藤らしい考へ方である。しかしその見方は、内藤の立場に於ては正しいものであつたが、彼にあつては無意義なる言葉である。そして、すでにこの思想は、支那に於て、漢の末期に現れたところのものであつた。當時、天下は麻の如く亂れ、前代に曾て見る能はざりし三國六朝の時代を現出したのである。人情は破壞され、道徳は地に落ちて、混沌たる社會が現出したのであつた。かゝる時、哲學者の間には、内藤の如き説が多く現はれ、そして、山奥深く逃避して、隱者的な生活を送り、孤獨の尊貴に感激し、靜寂の法悦に涙を流して歡喜する者が多かつたのである。そして同時に、當時の混亂した不安な人心に、落付きを與へ、安心の境地に導くために佛教思想が發達するようになつたのである。

しかし今は一九二三年である。階級意識に目覺めたる人々によつて、舊き思想は破壞され、舊き道徳は頽敗する。古き道徳學者、古き宗教家、内藤辰雄等の人々は、山間に逃避し、隱者的な生活を送り、孤獨の尊貴靜寂の法悦の境地を憧憬するのは當然のことである。そして新らしき、藝術家は、混亂せる不安な人心に、新らしき藝術によつて落付きと安心の境地に導くための使命を持つのである。

藤井眞澄は、さう言つた作家のうちの一人である。彼の頭の中では、さうした精神が絶え間なく渦をまいてゐるのである。この點で、亡び行く山奥の隱者的な、幼ない觀念と異つてゐるのである。

彼の作品には、さうした精神が、生々しく現れてゐて心を打つのである。

しかし、藝術作品として批判される場合、まだ洗練されてゐない。そして作品としての力が缺けてゐることが感じられるのである。ひどく人生を茶化したような、馬鹿にしてゐるような、感じがしてゐるのである。さうした小技巧的な表現が、その火のような精神と、相容れないでゐるのである。その不自然さ、あるぎごちなさゝが幾分難解な様式と共に、その精神をも滴確な働らきを爲さしめない立場に導くのである。

「科學食料會社」にしても、上演されて見たところの劇的効果は、その爲めにかなりに殺がれてしまつてゐるのである。

彼自分もよく知つてゐるその狀態は、即ち彼の科學が、支離滅裂な唯物觀に災されてゐるからなのである。それは、哲學的

な綜合と統一とに進まなくては救はれ難いところなのである。

私は彼が、その境地を、近く通過し得るであらうことを信じてゐるのである。

新井紀一。プロレタリア作家のうちでは兄貴株に屬してゐる。兎角ひとりよがりなうぬぼれを多量に持つてゐて、「俺こそは……」と兄貴になりたがるその仲間のうちにあつて、彼が兄貴として先に納まつてしまつたことに、いづれも羨望的な反感といつたものを懐いてゐて、それが、彼の作品批評や、人物批評にあらはれがちなことは、彼のために氣の毒なことである。そしてそのくせ蔭ではとやかく言ひながら、彼の前では、兄貴として彼を尊敬してゐるように粧つて、取り入つて置いて何かの足しにしようとしてゐる、驅け出しのプロレ作家達の心を、彼はよく知つてゐるだけに、それがまた彼の温厚な、そして神經質らしい性格に氣にかゝることで、納まりこんではゐられない、といふことを感じ、あくせくと書きつゞけてゐる所以である。

しばらく休養したい。と思つてゐても、發表しないでゐると、「讀者に忘れられてしまふであらう」といふ心配や、更に「もう賣れなくなつたのだらう。ざまあ見やがれ」と仲間に思はれることの心配等で、創造慾もなしに、機械のように、あくせくと書きつゞけてゐるのではないかと思はれるのである。

さうした神經質な心は、一寸した仲間の言動や、態度にも、大きくどきんと感じるのである。それで、心にもない妥協をしたりすることが、ともすればその作品に現れやうとするのである。

彼の作品には、その兄貴らしい沈着さ、眞面目さ、地味さ、等が、堅實に漲つてゐるのである。それが道徳學者的な冷たい理性によつて、陰影のようにうすぐらく、おつとりとした長男らしい上品さの中に沁みこんでゐるのである。

その飛躍する餘地のない、平凡な彼の作品には、その單調な精神生活から生れ出たところの、倦怠さが溢れてゐるのである。

「實用向きの極お堅い品」なのである。それには大したぼろも見せないで、當分押し進ませて行くことのできるだけの底力は持つてゐるが、飽き飽きとするやうな、一編讀めば充分であるようなその作品を、いまに誰も讀みてが無くなつてしまひはしないか、といふやうなことが心配になつてくるのである。その現在の境地から、そのまゝ油がのりきつて、押し進んで行くだけのことなのでは、いさゝか心細い氣がすることである。

彼は先ず至急に大爆發を試みて、その境地をぶち破つて、そ

こから飛び出して、自己を燃焼させながらあばれ廻つて欲しいのである。それには、まづその精神的な根底からの轉換が必要なのである。

その單調な生活から、一寸横に身體を振り向かせて、あたりを眺め廻して、世の中のさまざまな狀態、自分以外の事柄、未だ知らないところの種々の人生の有樣、等を知らなければならない必要があるのである。

それは新聞記者らしい、そして雜報記事的な見方ではなく、もう少し感激をもつて、情熱をもつて涙をもつて、その登場人物の一人としての印象を殘して欲しいのである。

そしてそれを、營養價値のある美味な作品として調理する腕きゝの料理人になつて欲しいのである。

これには、もう二三人もの子供の親父であるべきところの年配をもつてして、皺だらけのお婆さんや、小便臭い妹等とのみの、油の拔けた生活、火の消えてしまつた火鉢の白い灰をかき廻してゐるような生活に支配されてゐる忠實な主人公、堅いせがれ、信用のできる兄さんの境地に安住してゐて貰ひたくないと思ふのである。

枯葉のようになつた、魂のないミイラのような、青ざめた生活をしてゐないで、カロリーのある食物をとり、昂奮する酒を飲んで、どしどし女郎買ひにでも行つて、早く粹な、物わかりの良い、話せる兄さんになつて欲しいのである。さうして、潑溂とした、血のしたゝるやうな生々とした作品を書いてくれるなら、元氣な、そして新鮮な境地に進んでくれるなら、私達の期待するものを、ある程度まで滿たし得るだけの本素を彼は持つてゐるのである。

その爲には、現在の地位からずべり落ちるとか、人々から忘れ去られるとか、仲間から笑はれるとか、いつたような心配をすることはぬきにして、五十歩百歩の同じ程度の作品を、或は多少の小器用さの進歩ぐらいに小さな自慰を感じてゐることをやめにして、そしてそのために、別に生活上の心配をするやうなこともないのであるから、當分その創作を休んで、その本質的な根底――それは素質だとか、文章だとか、創作精神だとか、表現觀念だとかに對してではない――を築くことが必要なのである。

例へば科學的な、哲學的な頭を養つたり、新らしい宗教觀、倫理觀を建設するために努力するとか、立派な美術に對する審美眼を肥すとか、音樂についての觀賞に進むとか、等に向つて猛進して、一方それにともなつて、肉體上の快樂主義的な方向に歩みを進まなくてはならないのである。

或は彼は、そのやうに創作に離れてゐることによつて、新らしき作家の輩出と共に、再起は困難となりはしないか、と怖れてゐるのかもしれないが、しかし修養なき群小作家に、そもいくばくの生命を有せんや。堅實を稱せらるゝ彼にして、その地味を、唯一の生命としてうごめくのみに急に、大計を見るの堅實さに缺けてゐるならば、時代は彼の小進歩よりも、更に數倍の速度をもつて飛躍し彼は永遠に圏内に沈潜し、敗殘の涙を味ふより仕方がなくなるであらうと思はれるのである。

其他のプロレタリア文壇の新鋭に、山川亮、山川清三郎、林政雄、金子洋文、渡平民、今野賢三其他の多くがあるのであるが、それらの諸君については、次の機會に待つことにしやうと思ふ、尚餘裕があつたなら、目下プロレ文壇の第一戰線に立つて、花々しい活躍ぶりを示しつゝある詩人諸君、評論家諸君についても書きたいと思つてゐたのであるが、それも他日に讓ることにする。

ロシアの舊きインテリゲンチヤと新らしきインテリゲンチヤ

——階級的から超階級的へ——

尾瀬敬止

一

ロシヤにおけるインテリゲンチヤとプロレタリアートとの關係を說くためには、先づそのインテリゲンチヤがいかなるものであるかを知らねばならない。なぜなら、この國のインテリゲンチヤは他の國のインテリゲンチヤに見られないやうな特殊の

性質　帶びてゐるからである。

　いま、ロシヤのインテリゲンチヤのもつ特質を述べるならば、これは去る十八世紀の七十年代に起こつたので、その社會的組織といふ立場からみると階級的のものであつた。しかし、その目的とか使命とかいふ立場からみると超階級的のものであつた。それの證明は、かのデカブリスト（十二月黨）の運動によつても充分であらう。事實、かれらインテリゲントは階級的條件とか利益とかいふことを無視してゐた。といふよりは、さういふ狹苦しい領域にうづくまるには餘りにも正義あり亦熱情に溢れてゐたのである。そして、十九世紀の六十年代に、おほく貴族階級から出來上がりはしたものゝ――ほとんど階級的特權を有たないやうな人々から「ラズノチーネツ」といふ新集團が生れてからは、インテリゲンチヤはまつたく超階級的乃至超條件的のものとなつた。しかるに、この超階級的乃至超條件的インテリゲンチヤは、自己の微弱な力を結合しやうとして、却つてかれらの唯一の大きな道から外れるやうなこともあつた。そのことは、西歐文明を斥ける『スラブ派』とロシヤ文明と西歐文明との一致をとく『西歐派』と、これら兩派の主張を變形したやうな『國民派』と『マルクシズム派』との分裂によつて窺はれやう。いづれにしても、革命前のロシヤ・インテリゲンチヤは國民的自覺の機關として十字架の道を進んだのであつた。かれらは國民の解放のために、人間の權威のために、「人類としての（我）の明るさと深さと廣さのために」、あらゆる苦痛と懊惱と犧牲とを顧みることがなかつた。かゝる殉教者的精神はまたロシヤ文學のなかに充分散見されるところで、インテリゲンチヤといふ言葉を廣義に解すると、プーシユキンも、レールモントフも、ベーリンスキーも、ゲルツエンも、ツルゲーネフも、トルストイも、またドストエーウスキーも、その中でのもつとも大きな代表者であつたといへる。しかし、おなじインテリゲンチヤを今說いたやうに倫理的乃至思想的ではなく社會的乃至歷史的表現としてみる場合には、あるあたらしい政治形式と思想とを發見することによつて、ロシヤ大革命の勝利をうるに必要なすべての條件を創造したとも考へられるのである。

　しんにロシヤのインテリゲンチヤは、一方において倫理的乃至思想的であり他方において社會的乃至歷史的のものであつた。然しながら、その國の文化的價値を單に說くものは、ひとしくインテリゲンチヤの奉仕がいかに大きかつたかといふことを思ひ出すのを忘れることは出來ない。すなはち、かれらを知識あり教育ある集團と見る說である。これる要するに、この國のインテリゲンチヤはいろ〳〵な性質と分子を含んでゐるが、

おほくの場合は後者でなく前者の意味に用ひられてゐるのである。

二

しかるに、ロシヤにいよ／＼革命がおこると凡てのものが一變されたやうに見えた。それも三月革命のときには、古いブルヂョア的世界觀を破壞するとともに新しい哲學と社會と政治とを建設しやうとするやうに見へたが、十一月革命になると有らゆるものが、本統にどん底から覆へされてしまつた。言ふまでもなく、サウェート政府は從來の勢力者であるブルヂョアジーの地盤を倒壞してプロレタリアートをのみ中心生命としたからである。ことに、このプロレタリアートがゆはゆる（虐げられた人々）から組織されてゐるだけ、夫れだけ仇敵ブルヂョアの事業や施設にたいする破壞の程度はつよかつた。しかし、プロレタリアにとつてもつとも必要なのはかれら自身のあたらしい社會と政治とをつくることであつた。同時に、かれら自身の文化をもつことの必要であつたことも言ふまでもない。やがては、かれら自身の文學とか美術とか音樂とか演劇とかの建設にも努められるやうになつた。かゝる創造的事業には力も勇氣もなければならないがもつとも缺いてならぬのは知識といふものであつた。

ところで、この（知識）の所有者はいづれの國においてもインテリゲンチヤであつた。とくに創造的精神の旺盛な現實ロシヤにあつては、謂ふところのインテリゲンチヤが重要な役目を勤めずにはゐられないことは勿論である。しかし、國家も社會もかはつたやうにそのインテリゲンチヤも變へずには氣がすまないやうに思つた。そして、こゝに『あたらしいインテリゲンチヤ』が生れやうとする譯で、かれらはいづれもプロレタリアートの中から出なければならないやうに考へられた。といふのは、一批評家ゲイ・ミロゼイツの言つたやうに「古いインテリゲンチヤにはプロレタリアートの歴史的役目における政治的理解がない。またかれらには、わが全的生活の改造事業に必要な民衆との組織的連結も、階級的乃至プロレタリア的知識の一部分さへない」から。この說はかならずしも理由のないことではないが、かれらに必要な知識はプロレタリアートからのみ求められるものであらうか。いな、おなじ批評家自身も言つてゐる。「あたらしい生活の創造には、古いインテリゲンチヤの技術的修練が大きな意義を有つてゐる」。しかし、かれはなほ續けてから言つてゐる。「プロレタリアートであるインテリゲントは西ヨーロッパにとつては新しいものでない。しかしわれ／＼は誇

ことが出來るであらう。カピタリズム的平和の一つの國においても、またミリタリズムの時代においても、民衆的乃至プロレタリア的インテリゲンチヤは存在することがなかつた。西ヨーロッパにおいては、勞働者が民衆からはなれ、ブルヂョア的文化に養はれてゐるから孤獨である。しば〱勞働階級の叛逆者となつた者もある。それがわがプロレタリアートであるインテリゲントでは、プロレタリアートの思想のなかに養はれ革命の火のなかに鍛えられてゐる。かれらは事實上（戰線においても後方においても）生活における自己の知識を改めつゝある。かうして民衆と接觸してゐるからそこに力がある。あたらしいプロレタリア的インテリゲンチヤは、自己の先祖の根本的罪惡から、自己の階級的價値から、自己の知識を特權の泉とする希望から放たれてゐる……プロレタリア的乃至農民的インテリゲンチヤは古いブルヂョア的インテリゲンチヤとかはる――そこに問題の確定がある」

これを要するに、在來のインテリゲンチヤ――ゆはゆる古いインテリゲンチヤと今日のインテリゲンチヤ――ゆはゆる新しいインテリゲンチヤとがともに國家とか社會とかを重要視してゐることは同じである。しかし、前者は超階級的であり、思想的であり、宗教的であるに反して、後者はプロレタリア的であり、實際的であり決定的である。ここに、新舊インテリゲンチヤの立場がかなりの相違を有つてゐることを見逃してはならぬ。

三

若しさうとすれば、謂ふところのあたらしいインテリゲンチヤはすでに生れたのか。生れたとすれば、かれらの事業や効績とはどんなものであらうか。これを例の「イズウェスチヤ」新聞によると、無所屬的インテリゲンチヤの多數は過去五年のプロレタリア的農民的政權によつて少からず學んだ」とも「ロシヤにおける教育家は充分である。若い教師たちは多くの場合において忠實に自己の教務を果たしてゐる、もし（サウェート學問）の影響がかれらに對して敵意を有たないときに」とも言つてゐる。しかしそれはかれら自身の努力であるのか。またかれら自身の仕事であるのか。若しくは他の力をも借りたものであるのか。それは後に說くところがあるであらう。しかし、かれらの新しいインテリゲンチヤはほとんど武力をもつて古いインテリゲンチヤを壓迫したものだけに――たゞし、最初の間ではあつたが――それだけ後者の人々の多くはひじように悲慘な目に逢つてゐる。かれらは反抗しやうとしても方法がない。よし

有つたところで、それが成功しなければ明日のパンはおろか生命も危いといふ譯である。ある新聞は、『ロシヤの知識階級はいかに生きいかに働いてゐるだらう?』といふ問題をかゝげて次ぎのやうに書いてゐる。かれらは朝の六時におきて薪をわり（もし夫れがあれば）一階から六階まで水をはこぶ（水道の水は二階以上に登らぬ）。それから庭を掃き、甚だあてにならぬ食料給與を受けるために町へ行かねばならぬし、十時にはサウェートの仕事に就かねばならぬ。（さうでないと强制勞働を課せられる）。午後の五時にかへると朝とおなじことを繰りかへす。そして暖爐に火をおこし夕食の支度をする。しかし、これは何んとも特別の事件がないときの話だ。たとへば、途中で知人の待ちぶせを喰ふか、市場や劇場で書類の檢閲を受けるか、つまり、勞農聯邦共和國自由市民の一特權に逢はなければその日は無事に過ごされるのである」。

この記事はいくらか誇張したところが見へるが、勞働といふことはたんに古いインテリゲンチヤにばかり强ひられるのではない。反對に、あたらしいインテリゲンチヤは自らすすんで勞働しやうと努めてゐる。たとへば、革命のあつた當初、ペトログラードには『インテリゲンチヤのプロレタリア勞働組合』なるものが組織された。ここの組合員は往來の雪を掃いたり、氷を軒下へやつたり、お役所でつかふ薪をたかく積み上げたり、品物をあつちこつちへ運んだり、下着やシヤツを洗濯したり、邸番をしたり、もつといゝところではタイピストとか、技師とか、醫者とか、法律家とかになる。また、モスクワには學生たちの『鐵道貨物運搬組合』なるものもあつて、各運搬人は八時間勞働で一日二十五ルーブルを受ける。かと思ふと『實際勞働同盟』といふのもあつた。ここでは新聞廣告によつて古着やシヤツの寄附を一般人からあほぐ。そして、この寄附されたものを希望者に頒つことにしてゐるが、萬一餘りが生じたらそれを賣り拂つて貧乏人に與れてやるのである。

しかし、いづれにしても古いインテリゲンチヤの境遇は同情すべきで、一九一九年の秋「ペトログラードの街衢ならびに庭内の掃除」が始まつた時にはかれらの凡てが驅り出された。かれらの種類は、もとの上流階級婦人から老人、少年、詩人、文士、大學教授等に及んだ。また「下水掃除の命令」が下つたことがある。當時『藝術宮』にゐた有名な文學者アンドレー・ベールイもその仕事に就くことになつた。けれども、その日かれは學生に講義することになつてゐたので、學生が衛生委員に懇願してやつと一日だけ掃除を免れたといふことである。たゞし、かういふ報道にはとかく疑はしいのが少くないから、ヨリ

信用ある材料によつてかれらの狀態を詳しく說明することにしやう。

四

一九一九年、サウェート・ロシヤからストックホルムへのがれた女流作家ダマンスカヤは一つの貴重な資料をもたらした。それはマクシム・ゴーリキーがレーニンに宛てた手紙で、若しそれを信ずるならばそこには次ぎのやうなことが書いてある。

「ウラヂーミル・イリーチ（レーニンのこと）。どうぞ軍醫大學の總長ウェ・ティ・トゥコフを御引見下さい。そして貴下の胸襟を披いてかれらの意見を聞いてやつて下さい。なほ、ロシヤでは一二といはれるほどの碩學が十人以上も獄に繋がれてゐます。その中には、ディプ・オシーポフ、テレシン、ブーシュ、クロギュース、オリデンブルク、ベロゴローウイ・デ・グリムその他の名士がゐます。で、私はこれらの事實について少しく愚見を述べたいと思ひます」。

「私は、國家の富または國民の力が智力の程度、その性質、またその數量によつて成り立つもの。そして、革命はそれらの力な生活狀態におよぼし、さらにその發達を計るといふところに意味があると思ひます。それ故、學者にたいしては能ふだけの考慮と尊敬とを拂はなければなりません。ことに、わがロシヤのやうに十八歲の青年を兵役につかせ、かれらを國內戰に從はせるといつた國、智的能力をことごとく閉塞してしまつたその國では、今言つたやうな考慮がもつとも肝要であらうと信じます」。

「われ〳〵は、自分が生きたいばかりに國民の頭腦を粉碎したりその腦味噌を喰ひ盡さねばならぬのか。またそれが果して成功するかどうか。さう言つた勝利にたいして少しも希望をもたぬのは我々でせう。それでなくとも、もはや貧弱になつてゐる國民の頭腦を痲痺させるやうな政策には飽くまで反抗したいと思つてゐます。かういへば、貴下はきつと例の言葉で答へられるだらうといふことを知つてゐます。すなはち、『吾人と意見を異にするものは仇敵である……同時に、中立を主張するものも夫れに遠くはない』と」。

「しかしこれらの人々は大抵中立的で客觀的な態度をもつてゐます。てふど科學と同じやうに。別の言葉でいへば、かれらは政治界の人物ではない上に多くは老人か病人です。だからさういふ人々を拘禁することは殺すことに變りがありません。なぜなら、かれらはもはや衰弱してゐる上に飢餓にさへ襲はれてゐます」。

「ウラヂーミル・イリーチ。夫れはとにかく、私はこれらの幽閉されてゐる學者たちに深い同情を表してゐます。そして、これらのロシヤ國民にとつて貴重で偉大な力を滅ぼさせる同僚を眼の前に見てゐるよりも、むしろ自らかれらと同じ運命におちた方がとも考へてゐます。かうして私には、ボリシェヰキーもアンチ・ボリシェヰキーも國民の敵であるといふことが明らかになつて來ました。しかし、個人としてはアンチ・ボリシェヰキーの犠牲として斃れたいと思ひます。同時に、ボリシェヰキーは依然として私の希望する人々でないことが解つて來ました。どうか、貴下が私の意中をよく御洞察下さることを期待して止みません」。

そこで、さすがのレーニンもゴーリキーの熱誠に動かされずにはゐなかつた。そしてトウコフ教授をしたしく引見し他の學者をも自由にしたが、この頃にはベロゴローウィ教授は腦震盪を仆れブーシュとクロギュースの兩教授は病死してゐた。さういへば、ボリシェヰキーが政權を握つてから約三年のあひだに二百數十人の學者が亡くなつたといはれてゐる。

五

先きに示したゴーリキーの手紙は學者に關したものだが文學者の境遇も決して幸福ではない。それは、一九二〇年十二月、モスクワの『全露作家同盟』から國民教育委員長ルナチャールスキーにあてた報告書をみてもわかる。その注目すべき箇所を二三拔萃しやう。

「ロシヤの作家は、過去三ケ年、生きたロシヤ文學が壓迫され苦しめられてゐることにサウェート政權が注意を向けることを待つてゐる。われ／＼は期待した。國家とその一般的文化生活の復興のすゝみが、ロシヤ文學が存在するための道徳的條件の復興を伴ふであらうといふことに、ロシヤ作家には再び（書物にたいする權威）と（讀者にたいする權威）――つまり、全國民の讀者界に示すべき印刷される自分の原稿を見る權威がかれらに歸つて來るだらうといふことゝを」。

「しかるに今日までさういふことはなかつた。ロシヤ作家がこの三年間經驗した條件は良くならないばかりか惡い。印刷所にたいする接近も廣くならないばかりか約められてゐる。最近の原稿は順序によつて採用され作者に返へされる。ロシヤの藝術的、批評的、哲學的、乃至歴史的な書物はつひに屏息されてゐる。ロシヤ文學は存在することを止めてゐるのである。その文學は、世界的意義の見へから、自分たちの原稿を讀んでお互ひに聽く可能ある少數者のための家庭的日常品の見えにかはつ

た……歴史はその事實を認めることを忘れないであらう、二十世紀の最初の四分の一、すなはち一九二〇年に、ロシヤ作家は數世紀前のやうに書籍印刷が始まるまで自分の作物をみづから一冊の本に書きうつし、かうしてモスクワやペトログラードにある「作家同盟」の書店二三に賣るべく並べたことを」。

「われ／＼はこの苦しい三年間を自己擁護に賴るべく試みられた。われ／＼は作家自身からなる書店をおこし、革命までに存在した作家の書店をヨリ内的に固めまた廣めた。またわれ／＼は、ロシヤ作家の獨立權を道德的にかため、國家の巨大な文學力と生きた直接の關係に結ばれ、ロシヤ文學のまへに絶對的な時には耀やかしい奉仕をする數個のよき個人的書店をサウェート政權のまへに防守することを努めた――われ／＼は期待した、ロシヤの書物が再び兩足で立ち上がるやうになるまで、かうしてこれらの氣孔（書店のことを言つたのであらう）にでも新鮮な空氣の支流をうることに成功したいものだと」。

「われ／＼は、作家の言葉がなほ惡い條件のもとに置かれたまゝ續くものであると豫覺することは出來ない。此れ以上かゝる生き方をすることはロシヤ作家に出來ないからである。これがために、ロシヤ文學の運命に關する問題が國家の最高權の前で正當に審議されるためのこの陳述書を、今日責任をもつてロシヤ文化の國家的建設を支配する人としての貴下に致す譯である。法令の正確さといふことは必要である。約束なく動搖ある方式は廢止されねばならぬ。文學上の我慾的表現は終息せねばならぬ。文學と讀者との關係の可能を安全にしなければならぬ。ロシヤ文學は生きなければならぬとの聲は聽かれねばならぬ」。

六

ロシヤ文學者といへば、かれらのうちの在來の作家は革命があるとおほく海外へ出た。しかし、かれらは祖國の土をはなれてゐる上に今日までの著作權をほとんど奪はれたから精神的にも物質的にも苦しんでゐる。すなはち　文學者の窮乏は國内ばかりでなく國外にまで及んでゐるのである。

このことは、パリーにある『ロシヤ文學者及び學者後援會』の宣言書をみても充分であらう。これはエヌ・ウェ・チャイコーウスキーの主宰するもので、メレヂュコーウスヤーもクープリンも關係してゐる。「人道の名において、滅びゆくロシヤ文化の救濟のために、國外へのがれたロシヤ作家を援助することは必要である。かれらは祖國を見棄てることを餘儀なくされた。なぜなら、名狀しがたい飢餓が支配し、言論の自由も、行動の自由も、

勞働の自由もない騷擾に充たされ、個人の權利すべては踏みにぢられ、テロルが政治的樣式として用ゐられる國では、いかなる精神上の創作も有り得ないからだ。その創作に從事した作家中のある者はすでに萬策つきて家族もろともロシヤを遁れた。こゝ海外においては、精神狀態も物質狀態も甚だ哀れなもので、毎日のパンに關する不斷の焦慮と將來に信用のある書店や新聞雜誌の缺乏とはかれらの創作力を衰頽せしめてゐる。今や、ロシヤ人の各種社會的慈善團體は文學者以外の避難民數千によつて充たされてゐる。當パリーにある『ロシヤ文學者及び學者後援會』は、過去二年間かれらに相當の援助をしたが、現在はロシヤ人社會がおひ／＼窮乏を告げてきた結果ロシヤ文學の誇りをうしなひ、また恐るべき慾求におびやかさるゝ人々も少くない。これらの作家たちに與へる最後のものがなくなつた。餘裕あるすべての人々よ、われ／＼を援助せよ』。

しかし、ロシヤの古いインテリゲンチヤー――それが文學者であつても、學者であつても、また政治家であつても、かれらの精神的ならびに物質的の窮乏さはます／＼募つていつた。それが國内にあると國外にあるとの區別がないことは言ふまでもない。だから、かれらの苦痛を訴へる聲はやがて世界各國にむかつて放たれるやうになつた。この場合に、是非記憶しなければならぬのはマクシム・ゴーリキーといふ名である。かれは、インテリゲンチヤの不幸に同情してあらゆる努力を吝しまなかつたから、かれら仲間から《恩人》といふ尊稱さへ奉られてゐるといふことである。

七

先頃南露に一大饑饉があつた時のことである。ゴーリキーは、例のエッフェル塔上に据えつけた無線電信を通じてドイツのハープトマンに次ぎのやうな檄文を送つた。『あらゆる正義の人々に告ぐ。南ロシヤの廣大なる草原は旱魃よりする未曾有な饑饉に遭逢した。私はおもふ。ロシヤ國民は戰爭と革命との結果肉體の力を失つてしまつた。そしてこれらの權威の日は、レフ・トルストイ、ドストエーフスキー、メンデレーエフ、パウロフムッソルグスキー、グリンカ其他の世界に知られてゐる人々の國土のうへに迫つてきた。私はかたく信ずる。ロシヤ國民の悲劇的現狀を理解するヨーロッパ並びにアメリカの教養ある人々が、その國民にパンと醫藥とをもつて援助するだらうといふことを。もし人々の人道主義と感動とにたいする信仰が戰爭と敗北者とにたいする勝利者の慘忍な關係によつて搖るがされたならば、また、これらの人々の創造力と勝利者の感動とにた

いする信仰のなかに疑ひを起こしたならば、ロシヤの不幸は人道主義の代表者にその活力を示すべき輝ける機會を與へたのである。私はおもふ。ロシヤ國民を救濟するもつとも熱き同情は、戰時の恥づべく又あやしき情熱をもつて人々を教唆し、その教唆を通じて、人々によつて造られた創造力を甚だしく阻止しまた愚昧と殘忍と且つその創造力を破壞した輕燥さとをもつて虐げた人々によつて始められねばならぬ。辛酸をなめつゝある國民の苦痛狀態に同感する人々は、私の言葉が止むを得ず峻烈になつたことを赦して呉れるであらう。私は、出來るだけの速さをもつてロシヤ國民を援助するやうにヨーロッパ並びにアメリカ人に冀ふ。その國民にパンと醫藥とを與へよ」。

この檄書は一般的なものであるが、かれは學界の不幸を遠いアメリカ國民に訴へてもゐる。その檄書の興味ある二三節を紹介しやう。

「私はいふ。人間生活におけるもつとも貴重な寶は智識力及び科學の發明であつて、世界においてもつとも價値ある人間とは秀拔な科學思想を有する學者であると。諸君においても恐らくこの說に反對する人は誰もあるまいと信ずる。ヨーロッパならびにアメリカの文化が今日のやうに有力なものとなり、しかも輝やかしさを加へた所以は一にかれら科學者の力に負ふものと言へるであらう。冀くば私の言葉を聽け。今日ロシヤの優秀な科學者で且つ世界の文化と開發とにつくした多くの人々が飢餓のために死のうとしてゐることを」。

「ロシヤにおける自由貿易の復興はかれら科學者の生活狀態をすこしも改善するものではない。なぜなら、物價の騰貴と食糧の缺乏からするかれらの窮狀は依然として變りがないからである。今日でもサウェート政府は期限內に賃銀を支拂ふことが出來ず、かれら科學者は八月以來（一九二一年）すこしの俸給も受けないやうな狀態である」。

「これらのロシヤ科學者は、ヨーロッパ大戰から革命の時代を通じて生活的の苦痛をひじように甞めてきたが、しかも決して研究を怠つたことがない。ことにアカデミー其他の學閥の會員および他の學者はもつとも有益な著述をし、印刷となるばかりとなつてゐるものも甚だおほい」。

「親愛なるわがアメリカ合衆國の人士よ。冀くば基金をつのつてこれらの著作出版にたいして助力せよ。これこそ眞に世界の人道のためである」。

また、かの有名なエスエル黨（社會革命黨）數十名の裁判にたいして、おなじゴーリキーはアナトール・フランスにかうも訴へてゐる。この裁判はモスクワの全露勞働組合の本部である

『勞働宮』で開かれたもので、多數者が死刑に處せられやうとしたのでひじような評判を呼んだ。

「ロシヤ社會革命黨員にたいする裁判は、今日までロシヤ民衆の解放のために眞面目な努力をしてきた人々を殺さうとする公式準備のある皮肉を帶びてきました。そこで私は貴方に是非お願ひしたいことがあります。それは、かゝる罪惡を犯してはならないことを、貴方からなほ一度サウェート政府に理解させて頂きたいのです。あなたは貴方の權威ある言葉によつてかれら社會革命黨員を救ふことが出來るかもしれません」。

八

これらの飛檄は決して徒勞に終らなかつた。なぜなら、ロシヤのインテリゲンチヤはあまりにも悲慘な境遇に置かれてゐたことが判つたからである。そしてモスクワでは作家救濟のための著述が發賣され、またパリーやベルリンではあらゆる藝術家を救濟するための音樂會や演劇やが催された。しかし、外國からの物資援助はもつとも効果の多いものであつた。

一九二一年の春のことであつた。ペトログラードの『文學者及び學者相互補助協會』へあてゝ多額の生産物が送りとゞけられた。これはニューヨークにある『ロシヤ文學者及び學者補助基本團體』からの贈物であつた。そこで、前記の『補助協會』ではカウフマン會長の提議で一つの委員會を組織し、文學者と學者の資格、年齢、健康狀態等によつてそれらの贈物を會員に配布した。しかし、會員外でも食糧のひじような缺乏を告げてゐる文學者と學者とにも與へられた。『文學者及び學者相互補助協會』から『ロシヤ文學者及び學者補助基本團體』に送つた謝狀にかう書いてある。『外國から送られた贈物が作家にとつていかなる恩惠として現はれたかを語らねばなるまい。當會幹部は、文學者及び學者の名のための未知寄贈者に謝する自己の神聖な義務あるものと考へてゐる』。また、右の贈物と前後して、おなじく『文學者及び學者相互補助協會』長の名指しでフインランドからも生産物が送りとゞけられた。それはロシヤ作家と學者の多數がひさしく眼にとめることも出來なかつたものばかり――つまり、固形のミルク、ココア、米、上等の鹽漬豚等であつた。しかし、それを送つてきた者は何人とも判らなかつた。アメリカ人ともおもはれフインランドからとも思はれた。やがて分配がはじまり、(未知の贈物)はポルタワにゐたコロレンコに先づ與へられた。かれは政府から補助を受ける筈になつてゐるがその事なく且つ健康もひじようによくない。しかも大部な著述『現代人の記錄』に餘念がなかつたのである。殘りの贈物

はペトログラードで分配された。第一には同會の會員に配られ、それに關係のない有名な作家にも配られた。ブロックやソログープやレーミゾフがこの選ばれた人々であつた。すなはち、會員七十五非會員六十五總計百四十人の空腹を充たすことが出來たのであつた。しかしこれで充分だといふのではない。たんにペトログラードにある作家と學者とを救ふことも覺束ないのであるが、それは一時的にかれらの愁眉を開かせるには絶好のものであつた。これらの狀況を報告したウェ・ラフレツキーはかう言つてゐる。

「フィンランドあるひはアメリカの贈物はペトログラード作家にある歡ばしい瞬間をあたへた。かれらは文化の中心から割かれほとんど餓えてはゐるけれども、生活の窮乏狀態などは構はず創作をつゞけ、ロシヤの生活狀態は變へられ、革命の火の中に鍛えられた復活のロシヤ、あたらしい自由なロシヤは間もなく世界文化の能動的參加者の一人となることを信じてゐるのである」。

九

上述のいろ〳〵な記錄によつても判るやうに、ゆはゆる(古い)インテリゲンチヤば生活の上でも精神の上でもほとんど根こそぎにされた。しかし、それは多く革命當初の現象で今日ではよほど趣を異にしてゐるやうに見へる。といふのは、革命があつて三年の後レーニンが「今は古いインテリゲンチヤをも斥けはしない」と言つたのに始まつてゐる。かれの主張をすこし詳しく說明するならば、「智識と技術とがあつてこそ農工業は發達する。しかるに我が勞働階級にはその二つに缺けてゐる。だからこれを從來のインテリゲンチヤに受けるより道はない。かれらを重く用ゐるとともにわれらはかれら專門家をたくみに利用しなければならぬ」といふのである。そして、その後(あたらしいインテリゲンチヤ)の中へ(古いインテリゲンチヤ)が加入することになつた。たとへば、政治界では立憲民主黨(カデート)の錚々たる領袖グロデスクール博士を、學界では有名な植物學者チミリャーゼフ博士を、經濟界では先頃までサウェートの施設に反對したコーペラチーブの人々を、軍人界では帝政時代の勇將ブルシーロフ將軍を、演劇界ではベースの名手シャリャーピンを、また文學界では例のゴーリキーをはじめ詩壇に重きをなしたブリューソフなどを舉げることが出來る。しかし、これらの人々はしんに重立つたもので、夫れ以下でサウェート政府の仕事に就いてゐるものは決して少くない。

もつとも、チミリャーゼフ博士自身も言つてゐるやうに「サ

ウェート政府に同感してゐる者は少數で、その多數は政府の施設を飽きたらず思つてゐる。要するに、かれら（インテリゲンチヤ）のサウェート政府への轉向はタイムの問題である」。だから、おなじく新しいインテリゲンチヤのなかへ加入した者にもいろ／＼な分子がある。しかし大體からいふと、一般のロシヤ、インテリゲンチヤは次ぎの三種類に分れるであらう。すなはち、第一は政府の施設を肯定する者、第二はそれを全然否定する者、第三はいづれにも屬しない中立派とである。たゞし、この第一に數へられる者はいゝが、第三もしくは第二に數へられる者は決して安住してゐることは出來ない。政府の古いインテリゲンチヤにたいする態度は、だいぶ穩かになつたがまだまだ滿足される迄には至つてゐない。先頃にもかういふ事件がおこつた。昨年の秋のこと、モスクワでは同市の『文化協會』に關係してゐる數十名が捕縛された。かれら下獄者のなかにはベルヂャーエフ、ツルベーチコイ公、ミヤコーチン其他の各專門家がまぢつてゐた。かと思ふと、その十一月末には四十四名のインテリゲントがペトログラードからベルリンへ追はれて來た。かれらの中には有名な哲學者ロッスキー博士、史學の大家カルサーキン、ペトログラードにある『文學者會館』の支配者ウォルコウィスキーなどの名が見へた、かれらはベルリンへ追はれた（第二回目）の人々で、これを迎へたベルチャ！エフやヤーシンスキー博士などが（第一回目）のベルリンへ追はれた人々である――といふやうな悲喜劇もあつた。

一〇

筆者は、ロシヤのインテリゲンチヤとプロレタリアートとの關係を說くべく、あまりにも古いインテリゲンチヤの生活狀態をかいた資料を示した。しかし、これはあたらしいインテリゲンチヤの事業とか効績とかを述べるのはまだ尙早だと思はれるところがあるからである。夫れはとにかく、プロレタリア革命の勝利とサウェート政權の成長とはすべてのものを一變しなければならなかつたかも知れない。同時にそのすべての價値を轉換しなければならなかつたかも知れない。しかし、かれらプロレタリアが社會的にもまた經濟的にも創造精神に燃えてゐるとすれば、かゝるサイエンスを基礎とする事業には、それに必要な知識をもつゆはゆる「古いインテリゲンチヤ」をヨリ重く用ゐるとは必要でないだらうか。また、ゆはゆる「あたらしいインテリゲンチヤ」はかれらプロレタリアの要求するすべてを建設するにはあまりにもまだ若くはないだらうか。もつとも、批評家ミロゼイメツの言つたやうに――「古いインテリゲンチヤにはプロ

レタリアートの歴史的役目における政治的理解がない。またかれらには、わが全的生活の改造事業に必要な民衆との組織的連結も、階級的乃至プロレタリア的知識の一部分さへない」かもしれない。けれども、おなじ批評家自身も「あたらしい生活の創造には、古いインテリゲンチヤの技術的修練が大きな意義を有つてゐる」と言つてゐるではないか。このことは、先きにも示したやうに、レーニン自らが「智識と技術とがあつてこそ農工業は發達する。しかるに我が勞働階級にはその二つに缺けてゐる。だからこれを從來のインテリゲンチヤに受けるより道はない」と言つてゐるので充分であらう。なぜなら、ゴーリキーの指摘したやうに「國家の富または國民の力は智力の程度、その性質、またその數量によつて成り立つ」からである。

事實、新舊インテリゲンチヤの和合はサウェート・ロシヤにおける最近の進歩の跡が雄辯に語つてゐる。ことに、例の新經濟政策が樹てられてからは夫れが著しく看取されるので、たんにインテリゲンチヤばかりでなく一般國民も自由となるとともによほど活躍して來たやうに見へる。かうして、文學者も、美術家も、演劇家も、經濟家も、また政治家も皆起つであらう。これらの事績を今一々列擧することは出來ないが、本年三月乃至四月の諸新聞を披いてもその樣子が窺はれる。たとへば、サウェエートの機關紙『ベツノタ』には『ロシヤ地理協會』のチベツトならびにモーコの學術的遠征團派遣のことがあり、全露の『社會學教育大會』の企てのあることが書かれて居る。かと思ふと、ベルリンで發行されてゐる『ナカヌーネ』には『全露藝術展覽會』がモスクワに開催されることをも報道されてゐる。若しさうとすれば、かれらプロレタリアの創造精神が盛んになればなるだけ、またその文化運動が烈しくなればなるだけ、あたらしいインテリゲンチヤは勇敢になるだらうし、同時に古いインテリゲンチチも活動を始めなければなるまい。そして、『あたらしいインテリゲンチヤ』は『古いインテリゲンチヤ』へ――『古いインテリゲンチヤ』は『あたらしいインテリゲンチヤ』へより多く接近し混合し融和するであらう。爰においてか、ロシヤのインテリゲンチヤは、新舊の別なく、左右の別なく、プロレタリア的から超階級的へ、思想的から宗教的へとすゝんで、つひにかれらの偉大なロシヤの偉大な革命の實をむすぶことが出來るであらう　（完）

地方に於て父祖の業を繼ぐ中學卒業生は鄕黨に於ける知識階級

地方に於ける知識階級の責務

安部磯雄

獨逸には我々の羨ましいと思ふ一つの習慣がある。それは中等教育若くは高等教育を受けた人達で田舍に住んで居る者が、大地主であるとか、又は其他の理由で相當の資産を有し居る場合に、自然さういふ人達が田舍に於て種々なる事業の中心となり、或は自ら村長となり、村會議員となつて地方政治の方面に活動して居ることとである。獨逸には又一つの非常に面白い風習がある。冬期になつて農業が出來なくなると田舍に住む獨逸の紳士達はベルリンとか其他の大都會に出て來る。冬の間は社交時期であつて、大都會には音樂會や芝居が盛に催され、都會生活が非常に樂しいものになつて居る。其間に地方に住む人々は都會に出て來て都會の生活を樂しむのであるが、其他の時期、即ち温い春から、夏、秋の初め頃までは田舍に居て働く。立派な貴族でさへも田舍に居る間は村長となつて仕事をすることもある。斯ういふ點になると英國は獨逸と少し趣きを異して居るのであつて、英國では田舍に於てまでも社會上の階級差別が甚しく、大地主などは他の小さな百姓と交際したり、自分が村の仕事に携はるといふやうなことが少い。獨逸の田舍は頗る平民的であるけれども、英國は之れに反して田舍までが貴族的な匂

ひがする。然るに米國の田舍は又一種獨特な性質を有つて居る。之れはたしかに米國が英國や獨逸と異なる點であつて、一口に云ふと米國の田舍は一般に富んで居る。小作人といふものが殆どなく、皆が自作農であつて、而も畑が多く、農業家の間に貧乏人といふ者がない。米國の田舍を旅行すると分ることであるが、到る所村落が富裕であつて、農家もなか／＼立派に作られてあり、そこには穀物を容れる納屋があり、牛馬を飼ふ小屋があるといふ風で、それらが皆堂々たるものである。そこへ行くと英國や獨逸の田舍は寂びれて居て、殊に獨逸の田舍は日本の田舍のやうに何となく貧弱な、淋し氣な生活が忍ばれる。で、米國の田舍に於ては、農村が富裕であるために、農民が皆相當に教育を受けて居るので、特別な人が出て來て村長となつて農民を指導する必要が殆どないと云つてもいゝ。そして日曜には皆自働車位は持つて居るから、それに乘つて家族が一緒に教會に出かけるといふ風で、田舍に於ては自然特別な偉人が住む必要がないのであつて、云はゞ農民それ自身が皆偉れた人間であるといふことが出來る。

斯くの如く見て來ると日本の田舍は獨逸のそれに餘程似て居る所がある。從つて今後我國に於ける地方の智識階級がどういふ仕事をやるべきかといふことに就いては大いに獨逸に學ばなければならぬ點があると思ふ。今日我國に於ける地方に住む中等程度の教育を受けた者を、假りに地方に於ける智識階級とするならば、それが地方に於て如何なる地位を占めて居るか、又占むべきであるかといふことを考へるのは非常に興味ある問題である。

今日は村落から次第に都會に人間が移住する傾向があつて、此現象は我國に於ても著るしく顯れて居る。又一國の富も地方から離れて都會に集るやうになり、更に、單に人間としてゞはなく、教育ある人物が皆都會に吸引されるやうになつて居る。だから中學若くは高等教育を受けた者があるとすれば、それらは大部分都會に於て職業を得ることになるのであつて、從つて富の分配が都會と田舍の間に於て不公平であるのみならず、人間の場合に於てもさうである。或地方の人口一萬ばかりの小さな町であつたが、其處で、或人が其町に住む中學卒業生を集めて或會を作らうとしたら、其町には中學卒業生がたつた六人しか居なかつた。これは其町の教育に對する不熱心を證明するものではなく、其町でも中學や大學の教育を受けた者が隨分多く出て居るのであるが、それらの大部分が大都會に行き、殘りが中學卒業生が六人であつたといふのである。斯う考へると現在地方に住む中學卒業生、若くは大學卒業生は其地方に於て非常

に重要なる人物であると云はなければならない。實はさういふ人達も次男三男であるならば夙に都會に出て居たであらうが、地方に於ける　祖の財産を繼ぐ必要から田舍に住んで居るのだと考へられるが、其事の其人達にとつての幸、不幸は別として、地方にとつては非常に幸福なのである。地方に於て財産あり、中學、大學の教育を受けて居る者は其地方にとつて大なる利益であることは云ふまでもないのである。

私の見る所では今後は中學卒業生などでも、都會に出て行く者よりは、田舍に踏み止まる者が多くなるであらうと思ふ。それは前に云つた獨逸の場合に於てもさうであるが、若し澤山の財産を有つ家ならば、それを受け繼ぐ青年達は必しも其一生涯を田舍で暮す必要はない。交通機關が開ければ、五時間なり、十時間なりで其地方から東京或は大阪に出ることが出來るし、それらの人達は一年の中二三ヶ月は田園の生活を離れて都會生活をやることも出來る。又さういふ習慣がつくと、反對に一年中都會生活をする必要もなくなる譯であつて、問題は其處にあるのであるが、地方の人々は常に地方生活、都會の人々は年中都會生活といふ風に一處に繼續的に定住することは不自然でもあり、國家全體から見ても不利益であるから、矢張獨逸のやうに冬の社交時期は都會で、其他の時期は田舍送るやうでになることが必要であつて、さうなれば中學教育を終れる青年も、地方に於て、腰を落着けて安心して住むことが出來るのである。今云つたやうなことは都會と田舍との接近であつて、兩者の生活を自由にやれるやうに現に交通機關も整つて居るのであるから、習慣がさうなれば好いのであつて、其時には教育を受けた人間の都會集中の弊もなくなるであらうし、彼等の中の衣食に困らぬ人々は好んで田舍に住むやうになると思ふ。

次に起る問題は中學程度の教育を受けた青年が地方に於て如何なる方面に働くべきかといふことである。或人は自分に財産がなければ、進んで農業なり、副業なりをやるべきであるが、假りに財産があつて生活にも困らぬ人であつたならば何ういふ事をしたら好いかといふことは大いに考ふべき問題である。さういふ智識階級の仕事、即ち自分の利益以外の仕事としては地方の政治などが主なるものであると思ふ。若し政治の方面に働くとすれば、縣會議員や、國會議員に手を出すのは考へものであつて、地方に於て財産を有つて居る者は往々他人から煽動される恐れがある。次の總選擧に出るならば投票は必ず纒るからなど〻煽てられて出る氣になると、二三十萬圓位の財産ならば二三回の選擧で全財産を蕩盡して了ふ。此場合全然金がないか、若くは何百萬の財産のある人ならば縣會議員や國會議員の選擧

を爭ふのもいゝけれども、さうでない他の青年が斯くの如き野心を抱くのは慎まなければならない。仕事は地味であるけれども、政治のために盡すならば其地方の町長なり、村長になることが望ましいのであつて、又それは重要な仕事でもあるが、其他に或場合には村會議員となり、教育問題に興味があれば學務委員になつて自治體のために盡すといふことになれば自分のためにも幸であるし、同時に地方の利益にもなる。無論仕事はそれ丈けではない。若し其人が中學を卒業した後、獨學で自ら修養する志のある人であるならば、今後農村にも社會問題、經濟問題が起つた時に、それに關する書物を讀み、又は年に二三ケ月位都會に出る機會に、專門學校や、大學で講義を聞いて、それに關する智識を養つて置けば、さういふ場合に進んで働くことが出來るのである。譬えば農村に於て今日でも八釜しい問題であるが、將來に於ても困難な問題は小作爭議であつて、此問題に關しては農村に住む青年は一通り其性質を理解して置く必要がある。現在の日本の小作爭議の狀態にしても、又外國の小作爭議の實情にしても、それを知ることはさう難かしいことではないから、其點に關しても先輩の說を聞くなり、學校で專門の學者の意見を聽くなりして置けば、小作爭議に際して自ら盡力することも出來よう。現代思想についても雜誌や書物に依つて其方面の智識を得て置くことも又必要であるが、更に今述べたやうな方法に依つて、それらの人々は郷黨の間に於て指導者となることが出來るし、同時に智識階級としての任務を果すことにもなる。

田舍に於ては中學程度の教育を受けるといふことは小さな百姓の家では困難である。然るに地方に於て相當の家柄の人でも隨分昔風の考を持つ者が多く、教育などは小學丈けで好い、何も自分の息子は學校を出て會社に務める必要もないし、先祖代々の家を受け繼いで、家に居て財産の番をして居れば好いのだから、中學教育やそれ以上の高等教育を受ける必要もないといふ風な教育無用論を唱へる者がある。やゝ進んだ人の考へでも教育は無用ではないが一つの裝飾であつて、地方であの家と指れる家柄ならば、其地位に對してそれ丈けの資格をつけなければならないから、其子弟に中學教育を受けさせるといふに過ぎない。併し之れは誤れる考へ方であつて、いくら其家に資産を有する者と雖も、中學教育は勿論、高等教育までも修めることは必要であつて、教育は決して裝飾ではないのである。多くの教育を受けた青年が地方にあつて働くことは其地方にとつて非常なる利益であることは云ふまでもないのであつて、此點に於て教育は實用である。今後如何なる人でも、其身分や位置を問

はず、其地方の自治體のために盡す考へが欲しいのであるが、此考が各自に於て强ければ强い程國家にとつて强味であつて、社會奉仕のためには一人の力よりも團結の力が尊重されるのである。そのためには專門の智識といふのはさほど必要でなく、寧ろ其精神が一層大切なのであるが、然し其事が教育を輕んずる理由とはならない。教養あるものが社會奉仕の精神を持つといふとが最も喜ぶべきことなのであつて、個人に教養があればそれ丈け社會のために盡すことが出來るとも云へるのである。

我々は小學校の教科書に於て二宮尊德に就いて書かれたものを見る。人々は二宮尊德を見るに一種特別なる人格、稀なる人間として、尋常人の追隨を許さないといふ風に考へるが、然しながら今日でも二宮尊德のやうな精神を以て種々な仕事をして居る人のあることは考へられないことではない。否、寧ろ一層教育のある人間が尊德の精神を以て仕事をやつたならば、尊德がやつた仕事以上の有益な仕事をやることが出來たかも知れないのである。私の友人に京都の大學を出た法學士があるが、此人は初めから農村のために盡す考を持つて居た人で、大學を出ると直ぐに農村の中に飛び込んで行つた人である。或る野菜の不自由な村では、廣い土地を借りて畑を作り、野菜を作つて、町の人に廉くそれを供給したり、或は他に蜜柑畑を作つたり、鷄を飼つたりして、そのやうな仕事を十年以上もやつた。今日では其人の仕事はそれ丈けではなく、日本全國機會あれば招かれて行き、或は自ら旅行して、其地方の小作爭議や、其他の問題に就いて盡力して居るが、最近私が會つた時には其人は非常に好い仕事を始めて居た。それは主に地方の金持を說いて、それらの人々に何萬とか、何十萬とかの金を出させて財團を組織せしめる。そして其財團は地方の教育のために、或は之れから進んで高等の教育を受けやうとする者のために、其學資を助ける目的で其財團から出る利子を每年使ふといふのである。今日では富豪の中にも金を出す氣はあるけれども、何ういふ方面にそれを使用して好いか分らないので躊躇して居る者が大分あるが、其人はさういふ人達を指導して、十萬なら十萬の金を出させて、其人達の名を冠かせ、譬へば佐藤といふ人なら佐藤財團法人資金といふ風にするのであつて、今日金持がまご／＼して居ると子孫のために其財産をめちや／＼にされる恐れがあるから、財團を作つて管理者に委せて置けば其名は子々孫々に傳はり、それは墓石に自分の名を彫るよりも永久に其家の名を記念することになるといふ風に說いたので、地方に於ても十萬、二十萬なり、或は大富豪なら百萬、二百萬の金を出して財團を作る者が增えたといふことである。此友人の十何年の活動の實績を

見ると、昔に二宮尊徳を求めずとも今日あらゆる方面に其人を見ることが出來るやうな氣がするのである。斯くの如く考へて來ると、今日地方に於ける智識階級は、やらうと思ふ意志があればいくらでもやる仕事があるべき筈であつて、高等教育を受けた者は大部分都會に引き拔かれて了つて、殘る所の仕事は中學卒業生の手に委ねられて居るのであるから、彼等が眞に社會奉仕の念を以て其爲すべき仕事をやることが出來たならば、郷黨は彼等を推する至るであらうし、地方も亦彼等の爲めに利益を得るに違ひない。

最後に之れ等の地方に於ける智識階級に望むことは、第一に極めて謙遜な心を以て地方に於ける仕事のために働いて貰ひたいことである。昔と違つて今日では財産があるからといつて、皆が自分に從ふといふやうな封建時代の思想は持つべきではない。幸に自分に資産があるから自分の住む地方のために盡すのであるといふ考で、義勇奉公の念を猶ひ、丁度昔の奉公といふ言葉が意味する通りに、下女、下男が其主人に仕へる如き精神を以て自分のやるべき仕事に仕へることが必要である。第二に又彼等は衣食には困らぬから金を得るといふ必要はない譯であつて、名譽職を望んだり、報酬を期待するやうな考を排すべきであつて、單に有形の報酬ばかりではなく、無形の報酬をも拒むべきである。卽ち之れをやつて置けば後の爲になると云ふので、譬えば、今は國會議員になる考へはないが、後日候補者として立つ時に、今日地方のために盡して置けば、其時には投票を集めることが出來るといふ、有形無形の報酬を期待して仕事をすることは其仕事を下品にする。第三に、地方の町村にはいろ／＼の自治體があつて、其中には樣々な階級を含み、譬えば村であるならば地主對小作人、町であるならば、其處には種々なる事業、商業があるであらうから、資本家對勞働者の關係があり、又は傭主對被傭人、主人對下男、下女といふやうな對立があるから、地方に於ける智識階級は總ゆる之等の階級に對して公平な態度を以て臨むことが必要であつて、總ての階級のために仕事をするといふ覺悟が肝要である。斯くの如き態度を一方に持すると同時に、更に地方に於ける中學卒業生は、現在の教育程度を以て滿足せず、進んで獨學して修養することが必要で、一年の中二三ケ月は都會生活をやる傍ら、專門學校なり、大學なりの講議なども聞くことも望ましいのであつて、それらの學校も彼等のために必ず門戶を開放するに違ひない。斯くの如くにして修養を怠らなければ彼等は社會的事業のために一層盡すことも出來るのであつて、地方の智識階級は今後此點に於て重要視されなければならない理由を持つのである。

自重せよ地方の中學卒業生

文學博士　三宅雪嶺

今は義務教育延長が問題になつて居り、延長せぬ間、他の或る國々よりも一般的知識の程度の低きを免かれぬが、中學校が全國で四百を超え、一府縣約十個宛てになり、相應に知識の進むを認めねばならぬ。高等學校が二縣で一個宛になつて居り、それが一縣一個の割に成れば、更に知識が高まらう。それでも大學に入らねば知識が足らず、それ程大學を設ける事が出來ぬと云ふが、從來の大學は專門學校を意味し、一般的知識の開發に關係なく、高等學校が一般知識の爲めにするに拘らず、事實上に大學の豫備とし、今のところ中學を以て普通に修むべき學問を一通り修め得べき所とする。今の中學の如きで可いか何うか、中學を通したと通さぬとで何の違ひあるか、疑問になつて居るものの、その利害を數字で明かにする事が出來ず、無駄な事を教へ、害もあるとし、害よりも利が多いとせずに居れぬ。

中學で習つた事を實際何の方面に活用すべきかと云ふのは、知識を技術同樣に心得ての事であつて、中學で得る知識はさういふものでない。新聞雜誌に興味を覺え、記事及び議論に對し比較的適當の判斷を加へ得るとして差支へない。小學で得た知識でさう行くとしても、地方の郡部では全く新聞を讀まない者が少くない。時事に興味を感ぜぬのである。最高教育を受けても、時事に興味を覺えぬのがあるけれども、小學では夢の如く過ぎ、爺さん婆さんと仕事を共にし、爺さん婆さんの了簡に成り勝ちである。總選擧の場合何の誰を選べよとて、一圓か五十錢で狩り出しに來られれば出て行く。選擧とはさういふものと知り、駄賃を取つた心持ちになつて居る。其處へ行くと中學を卒業しては違つて來る。さう押付けられては困る、選擧で金を貰つたりしないと喝破する。中に値上げさせるのもあるとし、先づ眼が覺めて居ると云へる。都會で政府黨に從はず、警察の威しを恐れぬのも、一部分は知識の高まつて居るに由る。今の割で中學教育が進んで行けば、幾年かの後、政府黨が必ず多數を制するといふ愚劣なる現象を打ち破るに至るであらう。

中學教育が改まらば、一層効能あると思へるが、今の儘でもそれ位の事は出來さうである。何でも其の割りで判斷するやうにならう。太郎兵衛さんの云はれたのでさうして置かうと、一村悉く定まるやうな事が變らう。太郎兵衛は太郎兵衛　俺は俺、外の事と違ひ、選擧は好加減の事をする譯に行かぬと言ひ張らう。地方問題にもさういふ事があらう。中學を出ただけでは何程の事なく、それで實際問題を理解するところに効能があるのであつて、新聞及び種々の雜誌を見、次第に知識が高まり、中には大學出身者と議場で爭ひ、之を閉口させるやうな事がある。大學を出ては法律は法律、經濟は經濟、何方かへ偏つて、全局から判斷を下し得ない恐れがある。中學だけ終り、それから專ら實際問題に打突つたのは、眞相を知り要點を摘むに適したりする。特別に何學を修めたと云ふ事は無いだけ判斷が偏らぬ。淺いと云へば淺いが、深くして何うなるかも知れぬ。大學を出て幾年かすれば、教室で記憶したところの多くを忘れてしまふ。中學を濫りに侮るべきでない。都會では今後特別の違ひがなく、いくらか良くなるくらゐのところであるが、村會等に少からぬ影響を及ぼさう。今尚ほ數が無くて、見るべき事なけれど、中學を出たと出ぬとで、村の問題を議論するに違ひが起る。何處となく水際立つて聞えるところがある。同じく溝から溝へ水を引くといふに就ても筋道を立てゝ論じ立て、他は合點せぬにしても、遠慮しようとする。中學生がもつと多くなれば何の變りなからうが、少いところは明かに違つて居る。

然し其れだけ氣位が高く、成らう事ならば村に居らず、都會で働く氣になる。高等學校から帝大に入らうとするが、費用が高く、家で支へ切れぬ程である。それで思ひ止まるが、小作して、利の勞を償ふに足らぬを知り、他に道を求めようとする。地主となつて居るのも、小作人に面倒云はれ、それで上り多寡の少いのを以て安んずるよりは、早く田地を手離し、都會に旗を揚げる方が、氣の利いた處置とする。小作人が鐵道工事に加はれば、何倍の收入あり、何時までも肥桶を擔ぐよりも可いとして出掛ける。村の顏役たるものが將來の事を考へ、一時の短慮を誡めるやうにすればよいが、そこがなか〳〵難しく、顏役が率先して新事業に就かうとし、兎角の動搖を免がれぬ。

然し他に見す見す利益あるのを見ながら、鋤を以て泥塗みれになるの、何の爲めであるかを知るに困しむ。農村荒廢が次第に問題となりつゝある。日本內地で小農に從事せず、大陸に行くのも一考案である。西伯利には既に水田の實驗があり、肥料なくして相應に收穫がある。事によつては大農で從事するのも可い。勞農政府の下、資本家に成り難いが、幾多村落が殘らす

は何の難い事が無い。

然しそれは急に決すべき問題でなく、徐々に考へて可い。都會より大都會へ移らうとする傾向の盛んであつて、如何に之を防ぐに努め、棲めば都とし、其の都を樂園にするかが郷里の爲めに竭くす者の最も考ふべきところであつて、教育を受けた人人は、相應に目が着くやうである。郷里の爲めに竭くしたいとも思ひ、大都會に事業を起し、事によつて海外に踏み出さうとも思ふ。それで止まつて郷里の事に口を利き、市會又は縣會に牛耳を執り、代議士選擧のボスを請け合つたりするのは勢である。何うせ郷里の爲めに盡くすとなつては、我が利權の爲めに攪亂せず、少しでも良くするやうに導くのは、地方の爲めのみでなく、全國家社會の爲めになる。

然し農村問題は實に世間の知識を絞ぼらねばならぬ程、難しくならうとしてゐる。

地方に於て父祖の業を繼承せる中學卒業生は郷黨の知職階級

法學博士　堀江歸一

富の少數の地方殊に都會に集中することを以つて、今日の經濟組織に於ける一の病弊とするは、世間一般に行はれる所說であるが、都會に集中するものは獨り一の富ばかりでなく、人の知識や才も亦次第に都會に集中する傾向を免かれない。是れは富が先づ都會に集中し、斯く集中した富が天下の人才を吸收するのであるか、或は都會人が環境の然らしめる所として、本來豐なる天分を持つ爲めに、富の生產なり、又は其利用なりに就て、特殊の技能を備へて居る爲めに、自ら都會に富と人才との集中を併せ促すものであるか、兩者の間には、原因が結果と爲り、結果が原因と爲つて居ることを知らなければならぬ。兎に角都會に於ける人才の集中は都會に對する彼等の憧憬から來るものがあり、更に都會に於ける學校や、兵營の設備が一旦學校

や、兵營を通じて、都會に集中された人々をして其學校を卒業し、兵役義務を終了した後に於ても、尙ほ依然として都會を離れることを好ましめざる結果、益々都會に於ける勢力集中の現象を著明ならしめるものと認めなければならない

斯の如くにして起つた都會に於ける人才の集中が一方に都會に集中された富の分量と常に正當の比例を保つて居り、都會に集まつた人が各自の分に適した職業に就くを得るとしたならば其間に議す可き問題の重大なるものはないが、都會に於ける人口の集中にして、右に述べる如く、地方人の都會に對する憧憬から來るものである以上は、人々が一時の感情に支配されて、確乎たる職業なく、又依賴す可き生計の道なきに拘はらず、都會に密集し來ることは、何としても勢の避けられ難き所であつて、斯くて生ずるものは、都會住民の生活標準の低下することであり、續いて發するものは、經濟的循環期の變動に於ける彼等の失業である。

現に之を目前の事實に徵して、如何であるか。都會の全體から云へば、商工業は日に盛大と爲り、富の增殖の著しきものがあり、商工業區域に於ける建物は如何に立派に爲つたとしても其內部に於て取引される物資の數量なり、價格なりは如何に增進したとしても、都會の四隅到る所には、衣食の資料を得ることに困難を感じつゝある階級があり、都會の內部に行はれる職業に就きながら、都會に生活することに堪へずして、遠隔なる郊外に幾多の不便を忍びつゝ、住居しなければならぬ者があり、更に甚だしきに至つては、不景氣の襲來と共に、都會の商業にも、工業にも就く能はずして、失業の已むを得ざる狀態に陷る者もある。

失業者救濟策として、失業者の歸農論なるものが主張される。卽ち都會に於て失業と爲つた人々を其鄉里に歸還させ、農業に依つて、衣食の計を致さしめようと云ふのが此議論の骨子であるが、幾年かの久しき間、都會に住み慣れた人々をして一朝の失業に依つて、鄉土に歸還させると云ふが如き甚だ困難とする所であつて、失業者の如きは、失業の爲めに、如何に生活難を感じたとした所で、依然として都會に留まり、生活上に大なる苦痛を忍ぶのは勿論、現に職業に就いて居る者に對して、競爭を致し、職業奪取の脅威を加へざれば已まない一方に、地方殊に農村に於ては年々歲々勞働者の供給に不足を感じ、其結果として農村疲弊を歎ずるの外なき次第と爲つて居るのである。

都會と農村との間に於て、斯の如く利害の不調和を來して居るのは、單に勞働の供給に於て然るばかりでなく、知識才能の分配に於ても亦然るのであつて、斯くて生ずる所は地方自治の

頽廢、地方産業の衰微、地方教育の不振等、種々の方面に於ける缺陷に外ならない。然らば都會に集中し來つた人々が都會に於て必ず滿足に其生活上に目的とする所を達して居るかと云ふに、決してさうではない。現に年々地方の中學を修業し、高等の學校に入る目的を以つて、多數の學生が都會に集合し來るが如き、從來に於ては勿論、今日に於ても尙ほ高等教育機關の地方に普及しない現狀を以つて考へれば、巳むを得ない所であらうが、斯く都會に集合した靑年中の幾部分が所期の高等教育機關に入學を許されるであらうか、入學を許されるとしても、一回二回は愚か、四回五回の落第を經た曉に於て、始めて當初の所志を果す者も少なしとしないばかりでなく、斯る難關を踰越した學生が全部成業するものではなく、其一部分は學資不足、身體虛弱、學力劣等等の事情に依つて、廢學しなければならぬこと〻爲り、斯くて學生中の多くの人々をして徒に風塵の間に老ひしめること〻爲る。神田本鄕三田の如き學生の集まる區域に於て、途方もない老書生を見受ける度每に、私は常に今日の教育制度が人物經濟とか、勞務經濟とか云ふ上から見て、甚だしく不合理のものであることを嘆ずるのである。

右の如き事態の惹起されるのは、固より今日各地方に於ける大學高等學校の不足若しくは既設教育機關の收容力の不足を以つて、重要なる原因としなければならないが、同時に私は一方に我國の社會に於て、高等教育熱の餘りに昂進し、高等教育を受けるに値しない者若しくは受けることを要しない者までが、妄に學校に於て、之を受けようとする間違の存することを指摘するに憚らない。高等教育は學校で受けるばかりが唯一の方便ではなく、獨學自修亦之を難しとしない一方に、高等教育を受けるばかりが人間處世の必要事でもない。此點から見て、私は地方の靑年が其出生地方の中學を卒業した場合に、無暗に靑雲に志すとか、矢鱈に富貴を夢みるとか云ふような古風なる考へに制されて、都會に集合することを止め、地方に商工業なり、農業なり、父祖傳來の家業を有する人々は之を基礎として、其大を成す方針を取つたならば、如何なるものであるかと云ふことを思はざるを得ない。中學卒業位の學力では致方ないと云ふ說もあらう。又今日の中學校なるものが實は高等學校に對する豫備教育を授ける場所であつて、中學校だけで、獨立しようとする人に對する教育機關として、不備のものであることも、論を俟たないが、是等の點に就ては、追々改良の講ぜられるものとして、兎に角教育は人間の一生を通じて、色々の形に於て、又種々の機會に於て、受けなければならぬものであると考へたならば、又現に今日斯る機會の增進しつ〻あることを知つたならば、中

學卒業の程度だけで、其れ以上の學校教育を思ひ止まつたからと云つて、其人の知能が其處で行き詰つたものとは斷定するを得ない、幾らでも之を上進させる工風のある可きは勿論である。而して一方に今日地方に於て農工商業の實地に當つて居る人々を見れば、時には專門高等の教育を受けたり、又は中學を卒業したりした向もあるが、多くは中學すら完全に卒業して居らず、中學を卒業したからには、學資の續く限り、大都會に出で丶學問上の修業を勵むことを以つて、一の約束として居り、其爲めには親戚知人から借財さすることも、父祖傳來の田畑を賣飛すことをも辭せざる勢である。斯くて地方民智の水準點の一樣に低く爲つて居る際に、中學卒業生が家郷に留まり、家業に勵み、實地の經驗を積むと共に、學校に於て修得した素養を基礎として、知識を積んで行つたならば、如何なる點に於て、家業を刷新し、進捗して行く可きものであるか、冗費を節約して、利益を增加するには、如何なる工風を以つてす可きものであるかと云ふことも自ら理解され、更に家業の餘暇を以つて、公共事業に盡瘁するように爲つて、其處に始めて地方自治體の改善も亦之を期するを得るのである。

中學卒業生は生半可の者であつて、手紙一本書けなければ、應對一つ出來ないて云ふ非難は從來屢々耳にする所であるが、此點に就ては從來の中學教育が豫備教育に偏倚した結果であることを知らなければならぬ。中學卒業生をして郷里に留めて、郷黨の知識階級たらしめるには、中學校の教育方針を改新するか、其れとも中學修了者は從前の通り、高等學校に進ませ、一方に地方に殘つて、父祖の業を繼承する者は實業學校の教育を受けしめるか、孰れか一の方法に就くことを要する。實業教育を受ける目的を以つて、實業學校の教育を受けた者が卒業後志望を變更して、高等の學校に進まうとするが如き、大なる矛盾を表明するの外ないのである。

地方に依ると、議員の候補者として、地方に無關係の人物を輸入したり、又市長の候補者に爲れば、必ず中央都會に名聲の高い人物を拉致したりすることが今日一般の風と爲つて居るが如き、一面から云へば地方人士の虛榮心に基くものもあらうが他の一面から見れば、地方に人物が拂底し、所謂地方に遺賢なき狀況を語るものであつて、斯の如くして地方の改善、地方の開發は到底之を望むを得ない。而して都會に於ては人才徒に多くして、其才能を鍊磨する機會が與へられず、才能其もの丶低下を來すは勿論、才能を持腐れに終らしめるが如き、本人なり、社會なりに取つて、不幸此上もなしとする。私は我國民が教育中毒病や、都會集中狂から脱するに至ることを希望するの念甚だ强いのである。

有識階級に望む

我農生 山崎延吉

一

世に愍れなるものがあり、愍れむべきものがある、共に貧乏人として知らる。幸福を共有すべき人に意識するものは、衷心よりして彼等に同情する、人は平等であると覺醒する者は、本氣に彼等を氣の毒に思ふ。其處に何の詐りもなく、何の修飾もしないものである。これが本當の人であり、眞人である筈である。

廣い世の中には、好むで貧乏するもあるが、大抵は貧乏人に生れた爲めであり、環境が貧乏に導く爲めに然るもあつて、其多數は眞に同情に値し、氣の毒に堪へざるものとする。乍去、國民の中には貧乏人と見れば、一種異つた人の樣に思ひ、好むで貧乏するものゝ樣に考へ、之を蔑視するものがあり、甚だしきは一瞥をだに與へぬもある。平和を希ふて之を得る能はず、浄土を望むで之を見る能はざるは、世に如斯沒人道のものが存し、非人情の人があるからである。

二

古來我國には七貧乏てふ言葉がある、之は何を意味するかは知らないが、考へて見れば

金の乏しきもの——ないもの
物の乏しきもの——ないもの
信用の乏しきもの——ないもの
智識の乏しきもの——ないもの
健康の乏しきもの——病身もの
仕事の乏しきもの——失業者、無職者
相談相手の乏しきもの——無援のもの

の種別は慥にある。此七つを兼有するものは確かに貧乏人であり、誰が見ても、考へても貧乏人に相異はない。世に斯る人亦乏しからずであり、乏しからざらんとして居るが時の勢である

とする。

就中凡ての貧乏を齎らすもので、貧乏に誘ふもので、換言すれば貧乏の根源であるは智識に乏しきことであり、それが人並にないことである。智は利刀であつて繁根を絕ち、識は明鏡であつて曲折を分つものである。迷はぬことも、惑はぬことも、躊躇せぬことも、臆病にならぬことも、皆智識の力である。それを缺くは盲と同様であり、鳥目と同然であつて、尤も憐れむべく、悲しむべきである。

三

我帝國の文明を阻害するものありとせば、そは働かねば食へぬ勞働者が智識に乏しきことである。農村が國家問題の種子となるは、糞水を掬せねば食へぬ小作者が智識に乏しきに基因するのである。食へぬ人は多く智識のない人であり、自暴自棄して禍を社會に及ぼす人は亦智識のない人である。

財政困難の折柄、義務教育の國庫補助を千萬圓より四千萬圓にしたのも、知能の啓發が大事と見たからである。然し六ケ年の義務教育では、如何に考へても、工夫しても到底役に立つ智識は得られない。之れ前進國に於て既に義務教育の年限延長を斷行した所以であり、我國に於ても今や其議が自覺的になつて來た所以である。而して補習教育の必要は喋々されて居るが、之は所謂羊頭を掲げて狗肉を賣つて居るもので話にならない。故に我國に於ては小學校以上の智識は、全く見聞によるのである。都會の人が悧巧に見へ田舎の人が馬鹿に見へるのも、市民が知つた振りをして農民が愚物として扱はるゝのも、皆環境が然らしむるのである。而も悧巧に見へても根が淺く、知つた振りをしても奥がないのは、皆敎へられざる民である、學び得ざる人であるからである。

故に小學校以上の學校に學び得る人は幸福の人であり、中學學校の卒業生や其以上の學校卒業生は幸福を自覺せねばならぬ人である。而も得たる智識は敎へて減するものでなく、傳へて消ゆるものでもなく、授けて減するものでもない以上、之を凡る形式に於て分配するが義務であり、又た美德でもあるとする。特に其事が出來易きことであり、比較的容易の業であれば、是非努めねばならぬこととする。

金は使へばそれ丈けなくなる、物はくれゝばそれ丈け減る。勞力を貸してやればそれ丈け弱はる。然し智識は利刀の如く使へば使ふ程確かになり、敎へてやればやる程記憶が新になり、貸してやつても損はせぬのであれば、有識者が無識者の爲めに智識の分配讓與を吝む理由はあるまいと信ずる。

四

今日我國に於ける無識階級者は多く無產階級者でもある、故に始末に了へぬものが多い、されぱと云つて彼等を惡む筋のものでなく、忌むべき理由もない。世間多く彼等を危險視して之を恐るゝものがある。取締の方法に焦念工夫する向もあるが、それは事實である。然し吾輩は孰れも愚であり、痴なりとする、同時に此現象を默視する。放棄する有識階級者の無情と怠慢とを責むるものである。

吾輩は高等學校の昇格に頭を惱ます文部省の高官や、之を政綱に掲けて得々たる政黨者が、脚下に學び得ざる不幸の民あり、無識なる爲めに徒勞の苦を嘗めつゝある無產階級の人あるを知らざるが如き態度を責むる暇を持たぬことを遺憾とする。又た各郡に中等學校の設置をはかり、府縣內に一高等程度の學校を設立して得意がつて居る府縣當局者が、各地方に營々乎として汗に塗れ脂に汚ごれて、何の知見をも得る能はさるものゝ多數が蠢々として居るに氣が付かぬ仕方に小言を言ふ氣になれぬことを殘念に思ふ。然し世には篤志の人があり、厚情の人があつて、よく智識の分配に集念し、其讓與に工夫してるがある。其成績また見るべきあり、其功德の著しきもあつて、擬し易く學び易く則るに容易なるが故に、吾輩は敢て之を有識者に望むのである。

五

愛知縣は西青々井郡山田村に小川義夫といふ青年が居る、愛知縣立農林學校の卒業生で、今年二十歲になるかならぬの男である。彼れは農耕の暇を見て村の補習學校につとめて居る、勿論無給であるが故に一週間に四日間の出勤だと言ふ。昨年の末に六十圓の年末賞與を貰ふたが彼は受取らぬと拒むだ、村當局者が困るといふので受取つた彼は、簡單なる印刷物を作つて村民に配布することとした。彼は毎年夏期講習會を青年の爲めに設け、講師の招聘や會場の設備に晝夜を分たぬ努力をしつゝある。

名は上げないが、到處如斯、中等學校の卒業生で働きつゝ、地方青年の爲めに智識を提供し、智能啓發の爲めに最善の努力をなしつゝあるが居る、而して斯ることは志さへあれば出來ることであり、やつて見る氣さへあれば何處でもやれることである。

靜山縣は濱名郡に天王村といふがある、其處に池端愼八郎といふ青年が居る。中等學校は卒業せぬが獨學で勉強した人であ

るだけそれ丈け無識者に對する同情は深いものがある。同じ郡に大村智慧三郎といふ壯年の人がある、之も池端君と同じ境遇の人である。兩人申合はせた樣に、朝學の世話をなし、自分の家を解放して居る。即ち農閑の時、毎朝四時頃より青年少女を自分の家に集め、到處より篤志の智識階級を聘して教授をして貰ふのである。其實際を見ては何人も涙が流るゝばかり、力ある人は己を省みて慚愧に堪へぬと云つて居る。

稀有であるが篤志家は世にあるものであり、あらねばならぬものである。池端君は小さき自作農であり、大村君は僅かな陶器を商賣してる人であれば、決して財産に餘裕あるべき筈がない、全く篤志で出來るのであり、同情でやられるのであれば、吾輩は世の篤志家に此方面の篤行を望むと同時に、有識階級の人に向つては、之に則る所あるべきを望むものである。

愛知縣碧海郡依佐美村に向上社といふがある、稻垣稔といふ今年廿七才の青年が中心となつて七八名の青年が一團となり、村内に郵便物の配布をなしたり、雜誌を出したり、圖書館を經營したり、時々講演會や講習會を開いて居る。稻垣君は農學校の卒業生で、戴星踏月の農耕に晝夜を分たぬ勞働をして居る男である。所の人は物好でやつて居るといふが、農村の青年や少女に對する一片の同情の表現であるは識者之を認めて居る。

世には彼に比して財に餘裕あり、時間に於ても餘裕あり、力に於ても餘裕あるものゝ存するは明白である。此等の人は稻垣君の半分丈け働いても、地方の青年や少女は幾何程助かるか分らぬと思ふ。

高知縣長岡郡に關田爲平といふ中學校の卒業生が居る。彼れは相當の家に生れて財産がある、所謂有産階級であつて有識階級の人である。彼は一身を修めて玉の如く、一家を治めて城の如くし、餘力は擧げて民衆の教化に努めて居る。人格の人に接しては其言行を綴り、學者の說を聞いては之を敷衍して印刷に附し、以て地方民に頒ちつゝある。名士を追ふて宿に訪ね、學者を追かけて其說を聞くことに東奔西走して居る。其の篤行は衆の範となり、其感化は炬火の如く民草を照らして居る。宜なる哉、彼は、攝政宮殿下の御前に召された光榮を得ても居る。

思ふに都市にも地方にも、有産者にして有識階級に屬する者は多い、彼等が關田氏の志に則り、同氏の行に學ぶ所あらば、不祥なる社會問題は之を未發に防ぎ得るもあらう、不幸なる民衆を倫落の淵より救ひ上げることも出來よう。吾輩は敢て管らぬことに金を費したり、時を消しつゝある徒に向つて反省を促かすものである。

六

世に吝嗇家といふがあり、何時でも何處でも排斥さるゝものとなつて居る。然し吝嗇は多く金や物の出しをしみを意味してる樣に思はる、金錢や財物に汚ない行爲を敢てするものを云ふかの如く考へらるゝ。然し吾輩は、財貨は一度出せば之れ丈け減ずる者なるが故に、或は尻込みをしたり躊躇することもあらうと思ふが、有識階級者が其智袋を開くことを吝むだり、識囊を擇ることを嗇しむことは、尤も忌むべき吝嗇なりとする。而して世間財貨の吝嗇家を罵つて、智識の吝嗇を責めないのは解しからぬことゝ思ふ。吾輩は敎へて減らず、傳へて減ぜず、授けて空にならぬ智識の出し吝みをするものは、尤も罪ある吝嗇家として譴責する。見よ、日本の學者には徒に名聞を憚つて(?)著述もせず講演にも出ず圖書の解放もしないものが多い、偶之をなすものがあれば高き原稿料を貪り講演料もとり圖書は死藏しても人に貸すこともせぬ徒輩が居る、而も之れ等が甚だ多いのである。特に地方に散在する高等程度の學校や中等程度の學校に勤むる有識階級者は隨分澤山居る、而も多くは學術を死藏して學校以外に其功德を及ぼすものがない。偶地方の青年や民衆が講演を賴むでも、或は面倒がつたり、厄介視したりして、眞に學び得ざる無識階級者の不幸に同情するものがないのは、所謂寶の持腐と謂ふべきか、吾輩其吝嗇を惡まざるを得ぬものである。上の好む所下之に習ふといふは、此處に應用されると云ふべきか、其等の學校卒業生は全く地方の敎化に沒交涉なるが多い。久しき慣習は、今日民衆をして之を怪しとも思はぬ樣にした。故に有識者が到處に散在して居て、無識者は救はずに放棄されて居る。其結果は今や有產階級に對する無產階級者が抱きつゝある心理は、有識者に對する無識者の感情にも顯はれて來る樣になつた。斯くて我國は極端と極端との隔りが益廣くなり、正に異りたる階級が相對峙せんとして居る。而して平和を希ふ世に平和が破壞され、文化を憧憬しながら文化と遠りつゝあるは、悲しい現代の恨事である。

七

人多き人の世の中、有識者にして始めて是非の判斷が出來、曲直の批判も出來、善惡の區別も出來る筈である。それが分り、それが對策の出來る者が、即ち有識者であらねばならぬとする。

天下に憫むべきものあり、名けて貧乏人と云ふ。貧乏の中でも尤も悲慘なるものは智識貧乏であり、尤も始末に困るものは無識者である。世に同情すべきものありとせば、貧乏を招來す

る無智の徒であり、貧乏より脱出することの出來ぬ貧乏人であるとする。世は進みて無識者多く、事多くして無智の徒之にあたる、何等の怪事ぞ。

見て分るが有識者であり、之が處置を理解するも有識者であり、之を教導する力あるも亦有識者である。吾輩は敢て人道の大義を云々せんとは思はない、それ程の餘裕を持たぬ。現在、脚下に蠢々乎として居る不幸の民、徒勞の苦に腦みつゝある愍れなる不學の徒、食ふべき方法も手段も知ることの出來ぬ無智の人を默視することが出來ないものである。口に筆に、吾輩は現に智識の分配をして居る、暇や金があれば小印刷物を作りて配布をもして居る。圖書は解放し、有益の圖書と見れば出來る丈け四方に寄附もして居る。然し所謂九牛の一毛だに値せぬを遺憾とする、唯之が爲めに有識者の無情と怠慢とを責むるの資格ありと自信し得るものである。

等しく之れ人である、平和と幸福とを共有すべき人である、文明の惠澤に浴し、文化の恩德を喜ぶ上に於て差別なき人である。故に吾輩は人に意識し、人たり、人たらしめん義理に於て、有識者の自覺と努力とを衷心より希望する。無識者の不幸が深酷となり無智の人の悲慘さが彌加はる今日に於て、更に其の希望を深ふするものである。

地方の中學卒業生に望む

文學博士　澤柳政太郎

地方に居つて、如何なる方面にしろ、何等かの活動をしようとするには、今後は少くとも中學校若しくはそれと同程度の教育を受けてゐなければならないと思ふ。府縣會議員は申すに及ばず、郡會議員(尤も之は今年から廢止されるさうだが)から市町村會議員に至るまで、其の過半數が中等教育を受けた者でなければ、本統に自治體の精神を發揮して、其の實績を擧げる事も困難ではあるまいかと思はれる。更にさういふ名譽職公職を離れて各方面の職業に從事する者でも——例へば農家ならば中農の主人公、商家ならば中等の商店主なども、やはりそれ〳〵中學校又は同程度の農學校なり商業學校なりを出た者でなけれ

ば、十分の効果を擧げ得られない。教育は有難いもので、總選擧の場合などにも、買收されたりする者は多くは教育程度の低い者で、中學でも卒業した者には餘りさういふ過を犯す者は無い。之れは當然の話で、今日の中學校は決して完全なものではないが、之れ位の効果はあると思ふ。だから地方に中等教育を受けた者が多數になれば、こんな弊風も自然跡を絶つて、やがては選擧廓清の一端ともならう。

又、農事の改良などでも、地方には農事試驗場があつて、作物なり肥料なりをいろいろ試驗して、その研究の結果を年々報告してゐるが、之を實際に利用する農家は極めて少い。之れも亦當然で、多くはそれを讀んでも了解する程度に教育されてゐない。今の小學校は六年であるが、今日三十代の人々は、十才位の時に當時は四年であつた義務教育を僅かに終つた程度の人が多いから無理もない話である。折角の研究報告も之れでは何の役にも立たない。之れが中學校の卒業生で、家が農家で田畑でも持つてゐる者ならば、この報告が目に止まれば、必ず之を利用して大いに効果を上げる事も出來ようと思はれる。

中學の卒業生は、世間で云ふやうに、必ずしも高等の學校に志す者ばかりが多い譯ではない。近來は卒業後父兄の跡を継いで地方に留まる者が随分殖えて來た。かういふ連中が増加すれば、互に話相手にもなり、一緒に協力して村の爲めに竭くす事も出來る。卒業生が一人や二人では、何とか村の爲めに活動しようとしても、何の靑二才がと知識も無い連中から輕蔑され、當人も教育のある者は一村に一人か二人しかないとなれば、無智無學の父兄が何んだと云ふやうになつて、互に反目とまでは行かなくても、何となく面白くなくなる。之れは仲間が少いからで、同程度の者が多數になれば、互に協力して一つの勢力となり、農村農事の改善に力をつくす事が出來ようと思ふ。日本の地方では今日でも中學卒業生が物珍しく持て囃され、大學でも出れば學者のやうに思はれたりしてゐるが、之れ位の教養は普通一般に成らなければ駄目である。西洋では市會議員などは過半大學を出た連中のやうだが、日本では衆議院議員すら最高の教育を受けた者は極めて少數であると云ふ有樣では、まだ／＼前途遼遠である。

彼等への一警告

（寧ろ學者に教へよ）

林　癸未夫

私はさう屢々ではないが、たまに講演を頼まれて地方の小都會へ出かけることがある。さういふ場合の演題を選ぶ時に、どの程度の聽衆を目安にしてよいかを主催者に相談すると、大抵は、中學卒業生ぐらゐの者に適當するやうな題目をといふ返答を受ける。恐らくこれは、私ばかりでない、多數の講演者の等しく經驗されるところであらうと思ふ。そして又疑ひもなく、これは至極適切な注文に相違ないのである。特別な知識經驗を持つた人は別として、地方の小都會や農村に一定の職業に携つてゐる土着の人々であつて、しかも私たちの講演に興味を有ち得る人、又それを理解することのできる人は、まづ少くも中學卒業程度くらゐの知識を有つてゐる人でなくてはならない筈である。が、しかし、知識慾に飢ゑてる人々は、誰に限らず、自分の理解力に丁度相當であるよりは、幾分かより以上の內容を有つた講演なり書籍なりに接したがるものである。だから、多くの場合、中學を卒業したくらゐで、終日職業にいそしみ、平素殆ど眞面目な讀書時間を有たないやうな人々と、それから、中學も卒業してゐないけれども、新聞や雜誌を通じて、現代の社會に重要な諸問題には、幾らかの知識と興味とを有つてゐる人々とから成立つてゐる、地方講演會の聽衆を對手の講演は、中學卒業程度を標準として、それにやゝ高すぎるくらゐな事柄もチョイ〳〵挿みながらしやべるのが、丁度頃合なところになるのである。

が、しかし、地方へ講演に出かけて行く人々（私も其一人として）は、大抵は書籍を通じてのみ社會を見てゐる「學者」と稱する一特殊階級に屬する人間である。どんな重大な社會的事實でも、それが學者の頭腦の中で、分析されたり、綜合されたり、考究されたり、批判されたりした揚句の果に、それが文章となり、書籍となつて、世上に現はれ、それが又他の學者によつて

今一二へん篩にかけられたり、焼直されたりした後に、やつとの事で、それが地方の講演會の席上で辯上げられるに至るまでは、早くても五六年、少し込入つた事でゝもあればまづ十年以上は經過した後であると思はなければならぬのである。だから學者といふものは、いろ／＼小むづかしい理窟はならべるものの、眼前の生きた事實に對しては、案外疎遠であつたり、又それに適切な意見を下したりすることのできぬ場合が多いのである。此弱點は誰よりも學者自らが最も良く知つてゐるのである。彼等は、講演會の辯士として地方へ招聘されたやうな場合には、聽衆の殆ど全部が、學生でなくて、實務家であつて、社會上の事でも、經濟上の事でも、單なる事實としては、自分より遙に豐富な知識經驗の所有者であることを忘れない。そこで彼等は、現代の活事實に觸れた一問題を捕へて、聽衆の胸を貫くやうな舌鋒を振つて、地方人の度膽を拔いてやらうといふやうな冒險的な試みが、如何に自分たちの弱點を暴露し、學者としての威厳を傷つける虞れの甚大であるかに良く氣付いてゐるのである。從つて彼等は滅多にさういふ題目を選ばうとはしない。よし先方から希望されても、「學者の本領」といふ切り札をさつと投り出して、結局自分に都合の好い——つまり現代の活事實には大して觸れないで濟むやうな——抽象的な理論で捏ね上ることのできるやうな題目を選定するのである。

かういふ題目になると講演者は頗る得意である。まづ第一に「何分時間の少いことでありますから、ほんのざつとしたことだけしか申し上げるわけには參りませんから……」といふ前口上で以て、内容の杜撰や疎漏に對する責任を豫め自分で解除して置く。それから本論にかゝるのであるが、聽衆の大部分が前に述べたやうに中學卒業程度である。しかも平素規則的な讀書には遠ざかつてゐる人々である。そして自分には少しばかり理解が困難な程度の話を却て難有いと思ふやうな傾向を有つた人々である。凡そこれくらゐ講演者としての學者に都合の好い聽衆はないのである。それが現代の活事實に餘り觸れないで、唯學説や理論の大摑みな紹介に低迷してゐる限りは、決して聽衆に弱點を觀破されたり、反對論を構成する隙間を捉へられたりする氣づかひは毛頭ないのである。一口に言へば、體良く聽衆を煙に捲いて、拍手喝采裡に壇を下り得ること請合なのである。そして翌日其土地を去つた後でも、「あの先生は學問はなか／＼しつかりしてゐる」と二三子に噂される程度の感激を殘すことができるのである。

これは事實だ。少くも私の見聞の及ぶ限りに於て判斷し得たところでは、誤りのない事實だ。が私は此種の講演者を都合か

ら地方へ招聘して彼等の理論を謹聽するに熱心なる人々——所謂「郷黨の知識階級」に告げたい。諸君の有する中學卒業程度の知識は、學者の講演の内容を批判して、其中から眞に諸君の人として又社會の一員としての責任を完ふするに適當な滋養分である部分のみを攝取し、有害である部分は躊躇なく之を棄て去るだけの鑑識を諸君に與へるには、甚だ不十分なものである。諸君は先づ自ら此事實を承認することを要する。從て諸君は學者の言論にうつかり感服してしまはないだけの警戒心を持つことが常に必要である。そして諸君は自らが實務家であることを忘れてはならない。否でも應でも、眼前の仕事を、自己のために、家族のために、郷黨のために、處理して行かなければならぬ責任と義務とを有つてゐる人々である。諸君の脚は常に固く大地の上に着いてゐなければならない。諸君に最も大切なるものは現實である。今日一日の現實である。

私は實務家としての郷黨知識階級に向つて警告する。諸君は學者から學ぶよりも、寧ろ學者に教ふるの意氣がなくてはならないことを。

地方文化運動の指導者たれ
地方文化史の研究者たれ

内ヶ崎作三郎

一

至つて近頃のことである。或夜地方の一青年の友人が訪ねて來た。この人は數年前に東京の一大學を病氣のために最早や卒業といふ矢先に退學して、今は妻子もある。兩親にも別れて、戸主である。數十町歩の田や畠を持つ大地主である。父なる人の代までは傍ら商賣もやつてゐたが、それはよして了つた。二三時間もゆつくり話し込んだ揚句、この友人のいふには、田舍

の生活も單純でつまらぬから、東京生活をやりたいがどうかといふ問ひを出した。これは地方の有產階級の教育ある青年に共通の煩悶ではあるまいか。

私は間接に先達近縣へ旅行した時の見聞を以てこの友に答へた。其處は東京へ至つて近い所で、汽車で二三時間で行ける町である。この町の地主で、地方に定住してゐると稅金のみ重くてたまらないというて、東京に寄留した者が少くない。彼等は小作の所得で樂な生活が出來る。東京に寄留してゐるので、町村の稅金を大分免除せられるわけである。さて彼等は如何なる生活をしてゐるかといへば、別にこれといふ仕事もない。つまり徒食遊食が出來るので、面白半分の生活をやる。芝居を見る、活動へゆく、角力を見物する、名所まわりをする、湯治や遊山に出かける。これで一二年は續く。歡樂極まりて哀情生ずる世の習ひである。すべての見物や遊覽にも飽いて了ふ。一體人間は生きんがために働く、その疲勞を醫やし、新なる活動力を貯へんがために遊ぶのである。しかるにこれといふ使命もなく、仕事もなく、義務もなく、遊んでばかりゐればその退屈に堪へない。佛の顏も三度といふことがある。これが二年となり三年となるともうたまらない。かゝる人々の中には都會生活を咀うて、コツソリと田舍に歸つてゆく向もあるらしい。

私はこの物語りをした。私はこの友人につげた。「君が東京に來て生活することに私は必ずしも反對しない。若し君がその不動產を大會社の株券にでも換へて、その重役の位置をえて、財界に活動するといふ自信と力量があらば別問題である。しかし、今更腰辨となつて安月給のために束縛される境遇には安んじまい。成程君は音樂が好きである。音樂の稽古に時を殺すも勝手であるが、專門の音樂家となるのでもないから、わざ〳〵居を東京に移す必要もあるまい。折々の講習會にでも出席すればよいでないか。先達關西の小都市に歸つて、父の事業を助けてゐる、一大學の新卒業生は音樂が好きなので、クライスラーを聞くためにわざ〳〵上京して來たのに邂逅した。君も折折西洋の名人でも來朝する時には一週間位の日定で、上京するは差支あるまい。とにかく東京に一家をあげて住居するは考物だ。」私はかく話すと、友は「御尤です。しかし田舍は話し相手がないし、本當につまらないから、こういふ考も起るのです。しかし御說はよく參考として考へ直してみませう」といつて、辭して行つた。

二

私が十五六歲の頃、今から三十年前位の時代には、地方の有

産階級で、中學以上の教育を了したものは比較的少く、大抵は小學校を通過したのであつた。彼等は新聞雜誌で、多少の智識を有してゐても、凡てが半可通で、小なまいきで、すぐ遊蕩を覺え、賭博などをやつて、親讓りの身代を棒にふるものは珍しくなかつた。私の郷里の縣でかくして倒れた舊家が少くない。しかし今は時勢が變つて、中學以上の學歴を有する者は地方至る處に散在し、東京で大學生活までやつて、長男なるが故に、否應なく地方にかへりて、父祖の業に從つてゐる青年が珍しくない。やがて結婚する、子が生れる。とにかく落ち着いたとする。家族はいふ、宅のも先づ腰を下して眞面目にやつてゐるので、安心致しますと。近所合壁はこの殊勝な心掛の青年を評判にしてほめそやすは疑ひない。しかし御本人は折々いふべからざる悲しみと淋しさとを感ずる。田舍に陳分漢分の連中の多いのに愛憎をつかす。同級生の彼是れが、官吏となつたり、會社員となつて、時めいて出世するのが羨ましくも思はれる。地方生活に對してやうやく呪咀をするやうな破目に陥ゐる。

是等の地方の有産智識階級の人々に對して私は說教をするのではない。是等の人々はいふのであらう。「隨分と蟲の好い話ではないか。自分は東京の生活をやつてゐながら、我々には地方に殘つてゐて椽の下の力持ちになれといふのか。請ふ隗より始めよ、乃公自身が模範を垂れては如何。」と。

これは手痛き攻撃である。私の郷里は東北のS市から北の方に四五里離れてゐる丘陵のなかにある小さい村である。私達の本家は舊藩主の祖先の英邁なる武士のために破られて歸農した。半農半商の生活が三百年以上も續いて來た。私はこの別家である。今より十年ほど前に父が死してから、私は戶主である。私は本籍に居住して、一切の村の負擔を荷つてゐる。私は一年數回歸郷する。村の仕事は私がゐてもゐなくてもよいやうなもので、甥にまかしてある。しかし名義人は私である。私の村は痩山に圍まれてゐて、大きな川もなければ、田畠も少くない。大地主は一人もない。(私の縣では三十町歩の田地を所有する者を大地主と呼ぶ)過剩の人口は居たたまらぬ。そこで村の識者は教育には可なりの資本を注ぎこんだ。私は幸か不幸か、村のうちで高等教育をうけた卒先者である。二百戶內外の小さい村であるが、中學以上の教育をうけたものは二十人に近い。一兩人を除く外に皆世界各地に散在してゐる。村の産業の不振のためである。私はこの理由で、東京に踏み止まつてゐるのである。村や地方に對する義務はいろ／＼な形に於てやつてゐる積である。私と大勢の家族が村に歸らぬのが、村の生活を幾分か調節する

のである。村にある親譲りの猫の額のやうな財産丈では大勢の子女の教育も六ケしい次第である。そこで私は負け惜しみのやうだが、私一個の立場としての理由は十分に持つてゐる積りである。

三

話はまた前の友人のことに立ちかへる。私はこの友人に勸めた。

「君は村の中心人物である。父君は村長として名望があつたと聞いてゐる。君もこの次の選擧には村會議員となつて、地方自治の根本を培養することに努められてはどうであるか。もうすこし年が加はらば村長に守り立てられたら辭することもあるまい。馬鹿金をつかはず、衆に推される時は縣會議員となるもよいでないか。古い格言に『寧ろ鷄口となるも牛後となる勿れ』といふがあるが、東京で腰辨をしたり、他人の御機嫌などをとるよりも、遙かに意味があるではないか。

若し村の政治などに關係したくないといふならば、青年團の世話をしてもよい、君の妻君は處女會を周旋してもよい。在郷軍人團や自警團などをもう一層合理化し、自由化する仕事はいくらもあるではないか。圖書館を作つたり、文化講演會を主催したり、よい民衆娯樂などを創始することは重要なる文化事業である、君が眞劍になつてやり出せば五人や六人は乾度協力するであらう。君の郷里の町では十人二十人の同感の青年を糾合することは不可能であるまい。

さればである、私は何も君の出鼻を折つてみたい考などは毛頭ないが、一つかゝる事をやつてみてはどうか。平凡なやうで割合に困難な仕事で、派手ではないが、内容のある仕事、今、君の目前に待つてゐるではないか。

今日の日本はあまりに中央集權である。東京へ何もかも集り過ぎた。頭がほてりて足が冷めたい。君の趣味の理想では尚更適せぬことでも、やつてゐるうちには面白くなるかも知れぬ。」

この友人は私の平凡なる助言を謝して郷里に歸へつて行つた。私の忠告はあまりに常識的であつた。しかし私はこの友人の性質を多少辨へてゐるので、人をみて法を説いた次第である。

四

しかし多くの青年諸君のうちには單に表面の事業や奔走をやるばかりでなく何か凝つた研究をしてみたいといふ希望を懷いてゐるのが少くあるまい。是等の人々に向つては二三の點に就

いて考慮を煩はしたい。

第一に私は生活問題のために顧慮少き青年諸君が地方の生活問題を科學的に研究せらんことを望む。産業の問題、副業の問題、人口移動の問題、風紀問題、健康衛生問題の如きものである。

第二に私は諸君は公平なる立場にありて町村の政治問題を研究せらんことを望む。自治體に政黨の餘弊の侵入することを豫防せねばならぬ。既にこの害惡の存在する時は、之を芟除せなければならぬ。殊に地方の資産家の主人にして專横を行ふことは稀でない。之を監督し制裁する必要もある。

第三に、人文の發達に興味のある諸君は、郷土の文化史研究を企てられんことを望む。

一般の地理や歴史はあまりに大まかに失してゐる。例へば鹿兒島についていへば、島津家七百年の勢力の下に士族が特別の位置を確立しえたこと、これは他の地方に類例の少ない現象である。

土佐が山内家によりて支配せらるゝ以前は、長曾我部の領地であつた。從つてこの遺臣は郷士となつて存在を繼續した。彼等は武士の特權と平民の自由とを共有した。土佐藩に於ける勤王論と自由主義とは主として郷士の間に發生した。

元龜天正の頃、尾張から英雄を輩出したのは、木曾川の沖積層に於ける農産物の豐富が一原因でもあるし、京都へもあまり遠くないといふことも一つの理由であるが、他にもう一つの誘因がある。これは伊吹颪である。亞細亞大陸より日本海を超えて寒い風が十一月から五ケ月位續く。尾州にては之を伊吹颪と呼ぶ。尾州名物の切干し大根はこの伊吹颪にむけて日かげ干しにするのである。非常に冷たく、乾燥した風であるから、大根の水分が吸收せられる。これで切り干しになる。この風が西北より吹いて來るので、尾州人は勇氣を養つた。信長の機略、秀吉の智謀、賤ケ岳七本槍の鋭鋒、皆この賜である。

山梨縣の南北都留兩郡は古來郡内と稱して、甲府地方と風俗習慣を幾分か異にしてゐる。御殿場の方面から東海道との交渉が頻繁であつたらしい。御坂峠一帶の山嶽は郡内と甲州地方を明白に區分してゐる。

伊達政宗の汎仙臺主義を研究すれば、高橋總裁や後藤子の心持ちが理解せられる。南部藩の外交政策は原敬氏の如く政治家を生まれしめた。仙臺藩の北方の固めの水澤と南部藩の南方の要地なる花卷は共に人物を出した。兩者の競爭の結果であらふ。

このやうに地方の文化史を研究するは實に興味ある事であ

る。私の着眼點は必ずしも正しくあるまい。たゞ見本を出した迄である。かゝる研究は地方の存在を餘ほど意義あらしむるものである。又各藩や代官時代の政治史や行政史の如きも興味ある研究題目となるであらふ。

第四に、私は自然の觀察に趣味あり、且つ一隻眼を有する諸君にはこのはてしなき無盡藏の自然の寶庫を探ぐられんことを望む。春夏秋冬の變移、花鳥の音色、之を仔細に研究すれば無限の材料が展開する次第である。

この典型として私はギルバート・ホワイトの「セルボルンの博物誌」(Rev. Gilbert White: The Natural History of Selborne)ホワイトはセルボルンといふ英國の田舍町の牧師であつた。彼は獨創的觀察者であつた。彼がセルボルンの自然界に於て觀察した事實を二人の友人に通信した。これが一七八九年に一書となつて現れた。セルボルンはホワイトによりて有名となつた。十八世紀末の書物にしてこの書の如く重版して、今日も愛讀せらるゝ書はあまり多くない。

ギルバート・ホワイトは一七二〇年ロンドンから五十二哩離れてゐるハンプシャーのセルボルンといふ村に生れた。オツクスフオードのオリエル學院を卒業し、一七四七年に國教會の教職に就いた。彼は郷里の教會やその他の場所に於て務めを果した。その生涯は極めて平穩なものであつた。然るに彼は前述のやうな郷土の博物の研究と古物研究とについて二友人に通信した書簡を一纏めにして晩年に發表するや彼は突如として有名な人物となつて了つた。彼は一七九三年に死んだ。

彼の名著と共にセルボルンが有名となつた。そのためわざわざこの村を訪ぬる好事者が少くない。一八八五年にセルボルン協會 Selborne Society が組織せられた。この目的は鳥類、樹木、名所を保存するにある。ホワイトの名著により刺戟せられたからセルボルンの名をつけたのである。この會は一八九三年にセルボルンに大會を開いて、博物界の使徒の百年紀念祭をやつた。この會は地方の探索旅行を實行してゐる。その本部はロンドンにある。

若し諸君がホワイトの熱心と研究心とだにあらば諸君の平凡なる郷土をして非凡なる聖地たらしむるは不可能でない。

第五に、もし諸君は單に研究丈とし甘んずることが出來ぬとすれば、田園詩人たるも可、田園を背景とする小説を書くも可、田園に流行せしむべき俗謠を作るも可なりである。もし更に一歩進んで、剛健なる生活に基いて宗教運動や精神運動の源泉となることが出來るならばこの上もない。耶蘇は田舍者であつた。そしてあの純眞な宗教を說いたではないか。また諸君は地方人材

の敎養のために一臂の力を振ふも愉快の事でなければならぬ、小學や中學は大都市より地方が遙かによい。殊に健康の方面に於て然りである。

かく觀じ來れば、地方在住者の使命と意義とは甚だ大なるものがある。願くば自ら輕んずるなく、自重自愛して內容ある、目的ある、希望と歡喜にみてる生活を營まれんことを希望する。

敎養ある地方青年の反省を請ふ

公爵　近衛文麿

爛熟した近代文明は漸時行詰り異常なる都市の膨脹、人口都市集中と、地方の疲弊とを齎らし今や此の窮地に陷つた文明を如何にして更らに高い文化階級に展開せしむべきかに苦悶して居るのである。地方文化の低級なる事農民の困憊に就いては既に餘りに多く論じられて居るから玆に更らに云ふを要しないが凡て事物はドン底に陷つて初めて浮び得るので現在の地方疲弊は正に之の浮び上らんとする時機に在るものではあるまいかと思ふ。即從來の社會制度文物が餘りに中央集權的であつたに對し今や地方分散的、自治的に文物を改造せんとするの機運が動きかけて來たのに徵しても、今後の文化は力强い地方自治を根底に持つ處のものでなければならぬものではあるまいか。此の意味に於て今日の農村問題を中心とする社會問題を特に重大視し度いと思ふ。

一體「地方青年知識階級」とは如何なる意味であるか明瞭でない。私はむしろかゝる階級は存在しない、青年こそ存在するが青年知識階級なる特別な階級は地方には存在しないと考へる。都會には多數の男女學生が集り、其他に所謂青年の知識階級者が存在するが地方特に農村にはかゝる青年は稀少であつて、從つて今日の青年團運動の漸く旺んならんとする秋に當つてもかゝる知識階級の勢力は微小であると云ふべきである。若し學校敎師其他地方官公署の青年官公吏をも地方青年知識階級中に數えるならば之等青年の活動が現に相當大なる効果を擧げて居るの事實は之を認めざるを得ない。特に地方小學敎師が國民敎育の重大なる責任を盡して居るに加へて、昨今社會敎育として最

務教育修了者を更らに補習學校に收容して公民訓練、實業上の智識を啓發する等、過重の負担を餘儀なくされて居るの點に至つては實に感謝の辭を知らぬ者である。

反之地方青年中比較的教養のある青年子女が此の重大なる機運に對し未だ徹底的に自覺せず、已の幸運(フォーチュン)を都會に求めて續々都市に集り田園を去るの事實は誠に遺憾に耐へないのである。私は彼等の田園避逃が單なる都市憧憬に由るに非ずして、實に今日の農業經營の困難と、農村の固陋なる因襲に耐へずして比較的自由な民主的空氣の旺溢せる都市に自己の運命を開拓せんとする向上精神に對しては何等批難を加へんとする者ではないけれ共、彼等が今一歩進んで田園開發の使命に自覺しなかつた事を遺憾に思ふ。

思ふに文化は制度よりもむしろ人によつて進展する。凝滯せる精神を促して進化に赴かしめ、古い制度に執着せんとする者を驅つて新運に伴ふ者は實に青年であり、青年知識階級者であらう。即精力と理知に充溢した有能な青年によつて、其地方の文化が一般的に釣上げられるものと思ふ。而して今日の行詰つて居る文化が一般地方文化の復興によつて新生命を與へらんとする時、地方青年中最も良質なる青年が地方を去ると云ふ事は新らしき文化によみがへらんとする農村文化の水平線(レベル)を遙かに低下せしめて仕舞ふことは疑ふべくもない。

此の點に就いて特に教養ある地方青年の反省を請はざるを得ない。私は地方青年知識階級者の責務は、之の文化の水平線(レベル)を押し上げるに在ると信じ、而も、之を描いて他に求むるを得ないのである。今日稍もすれば不振の聲を聞く我地方自治諸產業及形式に流れて眞精神を沒却せんとするが如き青年團運動の如き、或は一般國民訓練の如き之皆以上の責務を自覺せざるの致す處が尠くないと考へるが故に地方生活を擴充せしむべき種々の文化施設運用の鍵を握る地方青年知識階級者の自覺と、奮鬪を切に希望する者である。

「數」の力と意義

戰爭に於ける數の力と其の意義

水野廣德

一

「敵を殲滅するは數に在り」とは、たしか英の海將ネルソンの言であつたと記憶する、若し日本の將軍をして言はしむれば、「敵を殲滅するは大和魂に在り」とでも叫ぶであらう。恰かもトラフアルガーの海戰に於けるネルソン提督の信號が、「英國は各自が其の義務を盡さんことを求む……」であつたに對し、日本海々戰に於ける東郷長官の信號が「皇國の興廢此一戰に在り……」であつたのと、同一意味の相違である。彼は唯物的、我は唯心的。彼は義務觀念に訴へ、我は愛國心に訴ふ。そこに東西國民の思想的相違が明らかに窺はれる。

凡そ個人間の競爭若くは爭鬪に於て勝敗を決する要素は、其人の力量と四圍の狀況即ち環境との二つである。例へば商賣の競爭に於ては各人の機敏、勤勉、策略の如きは力量である。地域の適否、交通の便否の如きは環境である。又武術の仕合に於ては技術の練達、身體の强健の如きは力量で、足場の良否、風向光線の順逆の如きは環境である。之を以て双方の力量同じければ環境の優れる者が勝を占め、環境等しければ力量の優れる者が勝を制する。然るに團體の競爭若くは爭鬪に於ては、團體を形成せる各個の力量並に環境の外、更に數の力が勝敗を決する大要素である。

現代世界に於て、團體競爭の最も大規模にして而かも最も激

烈なるものは、先づ國際間の戰爭に指を屈せねばなるまい。而して戰爭の勝敗を決するものは、直接間接之に參加する人と物との各個力量と、其の數と國の環境とであることは說明を待つて知るまでもない。是等三要素の中、其の何れかの二者が彼此同等なる場合に於ては、第三要素の優れる者が必ず勝利を占めることは明らかである。例へば戰鬪に於て、軍隊の訓練武器の精鋭と、並に其の數とが彼此同等なりとせば、陣地の利を占むるものが勝を制する。軍隊及武器の數と陣地の狀況とが同一なりとせば、軍隊及武器の力量の優れるものが勝を占める。更に又軍隊及武器の力量と陣地の狀況とが同等なりとせば、數の多きものが勝利を得る。若し夫れ一局部の戰鬪でなく、戰爭の大局に立つて言へば、全國民と全物資の各個力量と、並に其の數と、地理的政治的に於ける國家の環境との優劣、多少、良惡に依つて勝敗が決するのである。

二

人的力量は教育訓練に依つて之を增進せしむることが出來る。物的力量は研究改良に依つて之を優良ならしむることが出來る。環境は一半は自然の支配に屬するも、一半は人間の考量に依つて之を順適ならしむることが出來る。獨り數に至りては自然の支配を受くること最も大にして、人間の力に依りて自由に之を作爲增加せしむることが出來ない。人口の多少、國土の大小、物質の豐乏の如きは是れ皆數に屬するものである。而して數の作動が即ち數の力である。故に數の力弱小なるものは天惠に浴すること薄きものであつて、決して神の寵兒とは云へないのである。斯くの如き國家が數の力豐大なる國家と競爭或は對抗する爲めには、數の缺乏を他の方面に於て補償するにあらざれば勝利を得ることは出來ない。即ち數の力弱小なる國家は數の力強大なる國家に對し、競爭上多くのハンデイキヤツプを輸せるものである。而して此のハンデイキヤツプを打破するものは、各個力量の優越と環境の適順とである。之を以て若し數の力弱小なる國家にして、各個の力量と環境とが、數の力强大なる國家と同等なる時は、爭はずして勝敗の決は既に明らかなのである。況して各個力量と環境とが劣惡なる場合に於てをやである。

併しながら數は唯徒らに多きのみを以て、直に其の力を發現すものではない。數の力を發現せしむる爲めには嚴格適切なる統制を必要とする。統制なき多數は所謂烏合の衆なるもので、啻に數の力を發現し得ざるのみならず、動もすれば害を爲すことさへもある。日本の諺には「船頭多くして船山に登る」と云

ふのがあり、英國の諺には「料理人多くしてスープを作り損ふ」と云ふのがある。何れも統制なき多數は縱令各個の力量優れりとするも、何等益する處なくして却て害あるを教へたものである。故に數は、適當なる案配と鞏固なる結束との統制を待つて、而して後初めて其の威力を發揮し得るものである。必ずしも集團に依つてのみ其の力を發揮し得るものではない。數の力を極めて必要とする軍隊と雖ども、陸戰に於ては射擊には兵を散開し、突擊には兵を密集する。海戰に於ては搜索には船を分散し、決戰には船を集結する。時に臨み機に應じて、或は分散し、或は集結し、各個の力量を完全に發揮せしめつゝ而かも一貫の目的に對して數の力を集成することが數の統制である。而して分散の中に聯結あり、集結の中に個動あり、分つて放たず、結んで縛らずと云ふのが數の妙用である。

三

歐洲大戰に於て獨墺側の中央同盟は、人間の數に於ても、物資の數に於ても、戰初より聯合國に劣つて居つた。其の環境も亦東西に敵を受けたる點に於て、海陸を封鎖せられたる點に於て、不利の地位にあつた。併し同盟側就中獨逸に於ては、多年の訓練と準備とに依り、軍隊兵器其他の戰爭設備即ち各個力量は聯合側よりも優越であつたことは事實である。而して戰爭の初期に於ては、戰爭に關與したるものは主として常備軍事機關たりしと、且つは封鎖の効力尚ほ未だ顯著ならざりしが爲め、戰鬪力上に於ける數の力は同盟聯合兩軍共に大なる懸隔は無かつたのである。之を以て緒戰期に在つては、同盟軍は其の各個力量の優越を以て聯合軍を擊破し、一擧に白耳義を屠つて巴里附近に逼まることが出來たのである。多年軍隊戰のみを知つて國民戰を知らざりし世界の人々が、獨逸軍隊の勇猛を見て直に同盟側の勝利を輕信したのも强ち無理では無かつたのである。

然るに獨逸參謀本部の計畫したる短期決勝策戰が一たび蹉跌して長期の持久戰となるに及び、一面に於ては戰前訓練したる獨逸軍隊の精鋭は次第に減損し、戰前準備したる獨逸兵器の優秀は次第に消耗するに反し、聯合軍の訓練準備は時と共に增進して兩軍に於ける各個力量は殆んと相等しさに至り、爲めに同盟軍は其の唯一の利點たりし力量の優越を失ふに至つた。同時に他の一面に於ては封鎖の効果漸次顯著となるに從ひ、同盟軍に於ける物質の數は益減少し、戰線に於ける兵數も亦劣るに至つた。加ふるに聯合國の反獨宣傳と封鎖の嚴密とに依り、同盟國の環境は次第に惡よりヨリ惡となつた。既に各個力量の優越を失ひ、數の力に於て劣り、環境亦不利となれる同盟軍は、最早

や勝利の公算は絶無となつたのである。東西南の戰線に於ける聯合同盟の兩軍が、何時、何處に、幾百萬の兵を配したるやの詳細なる數字は此處に述ぶるの必要がない。唯戰爭の後半期に於て同盟軍の兵數が、常に聯合軍よりも劣勢なりしことを知れば足れりである。同盟軍殊に獨逸軍が戰線に於ける各員補充に關して如何に苦心焦慮せしかは、ルーデンドルフの回想錄を繙けば思半ばに過ぐるものがある。同書に據れば、戰爭の末期に於て獨逸軍の編成は一大隊の兵數僅に五百四十名にして定員の半數にだも達せず、しかも此の人員を得る爲めには二十二師團を解隊したと云ふことである。此の一事に徴するも、獨逸が如何に人間の數の不足に苦しんだかを知ることが出來る。

單り人間の數のみならず、物資の數に於ても亦戰爭永引くに從ひ、同盟國は聯合國に比して著しく劣勢となつた。制海權を掌握せる聯合國が全世界の物資を自由に獲得し得るに反し、同盟國は國外よりの供給を全然遮斷せられたるが爲め、軍需品のみならず國民生活の資料さへも大缺乏を來すに至つた。戰爭後半期に於ては戰線に在る獨逸軍の給養は甚だしく粗惡となつた。食料の數乏しきが爲めである。獨逸軍の砲彈は著しく劣惡となつた。軍需の數乏しきが爲めである。戰場の主人公と稱へられたる飛行機すらも獨逸軍は劣勢となつた。力量に於て劣れる爲めでなく、人と材料との數乏しきが爲めである。即ち數の劣勢は直接に數其のものゝ集成力を減ずるのみならず、間接に各個の力量をも減少せしむるものである。

四

同盟軍敗北の原因理由に關しては既に幾多の人々に依つて、或は政治上より、或は經濟上より、或は軍事上より、夫々論議し盡されて居る。しかも其の說く處は見る人に依りて異なり必しも一致して居ない。戰爭の經過を最も善く知れる獨逸人中に於てさへ其の意見を異にして居る。獨逸軍閥派は敗戰の原因を以て、獨逸社會黨の非愛國的なる煽動と、獨逸政治家の不熱心なる態度とが、國民の戰意を挫折し軍隊の士氣を沮喪せしめたることに歸して居る。之に反し獨逸社會黨は敗戰の原因を以て、獨逸軍閥が侵畧的野心に驅られて無謀なる戰爭を繼續したることに歸して居る。蓋し兩者共に眞事實であらう。然り唯表面に現はれたる眞事實である。併しながら皮一重剝ぎて更に內面を窺へば、兩者に共通せる一層深き眞因の存することを發見する。戰爭の初期に於て主戰派を援助したる社會黨が、戰爭の終期に於て戰爭繼續に反對するに至りたる所以は、人と物との數の缺乏に依り戰勝の不可能を覺りたるが爲めである。軍閥派が

戰爭繼續の爲めに有ゆる手段を以て國民鼓舞に力めたるに拘はらず、軍隊に迄も革命思想の傳播したるは單に社會黨宣傳の爲めのみならず、食料軍需の缺乏に依り非戰思想が國民間に醱酵したるが爲めである。歸する處、戰爭を繼續する爲めに、或は戰勝を博する爲めに、必要なる人と物との數の缺乏に依り、國民の忍耐力と軍隊の奮鬪心とを喪失せしめたるが爲めである。若し同盟軍にして人と物との數に於て聯合軍に劣ることなくば、社會黨も革命宣傳を爲さゞりしなるべく、縱令爲すも國民は之に共鳴せざるべく、從ふて今日見るが如き無殘なる敗戰には陷ゐらなかつたであらうと信ぜられる。

凡そ文明程度の同等なる國家間に於ける戰爭は、繼續三年に及べば、戰前に於ける人の訓練と物の準備とは、優れる方は減少し、劣れる方は增進し略ぼ同等の程度に達するものである故に戰爭一たび持久戰に入れば各個力量の優越は消滅するが常である。然る時兩者の環境同一とすれば、勝敗の決を定むるものは唯數である。之を以て數の力劣れる者の勝を制する必須條件は、平素訓練準備したる各個力量の優越に依り、短期間に敵を擊滅屈伏せしむることである。之に反し數の力優れるものゝ必勝條件は、各個力量が敵と同等程度に達するまで、戰を持久することである。而して其の期間は歐洲戰爭の實例に徵すれば二年乃至三年である。歐洲戰爭の當初、英のキッチエナー將軍が「英國が攻勢に轉ずるは三年の後に在り」と云へるは蓋し預言である。之を約言すれば、戰爭三年に及べば環境等しき限り、數の大なるものが必ず勝を制するのである。歐洲戰爭に於ても、若し獨逸軍にして各個力量の優越を失はざる期間に於て、ベルダンを攻畧し、巴里を占領し、聯合軍の中堅たりし佛國に致命的打擊を加へ得たりしならば、恐らく戰勝の光榮を双鷲旗の上に輝やかし、カイザーをして成功せる那翁たらしめ得たであらう。

五

日露戰爭は數の力遙かに劣れる我が軍の連戰連勝を以て終始した。是れ一は戰爭の期間短くして、我が各個力量の優越を充分に利用し得たるが爲めである。又一は環境我に有利にして世界の同情を得たるのみならず、露國自身に於ても對內關係上、數の力を未だ充分に發揮し得なかつたが爲めである。殊に海軍の如きは僥倖にも、我の全力を以て敵を個々に擊破すると云ふ數の力を妙用し得たるが爲めである。若し日露戰爭にして尙ほ二年三年繼續したらんには、或は否な恐らくは我國は獨逸の先例を開いたであらうと思ふ。海陸に於て連戰連勝の我が國が、米國大

統領を促がしてポーツマス條約を急ぎたる所以は、一に是れ次第に増加せんとする露國の數の力を恐れたるが爲めである。露國に內亂の虞なかりせば、此の戰爭の結果は固り知り難きものがある。されば當時若し我に數の缺乏の懸念さへ無くば、連勝の威に乘じてハルビンを奪ひ、チタを拔き、帝國主義者の夢想せし如く日露國境の銅標をバイカル湖畔に建て得たかも知れないのである。併し遺憾ながら天は我が國民に勇氣は授けて呉れたか知らぬが、我が國土に數を與へて呉れなかつた。時の我が爲政者が數の力を恐つて、未だ敗れざるに先ち早く兵を斂めたのは、慥かに獨逸の軍閥よりは達見であつたと云へる。素より平和を結ぶ爲めに、當時の我が環境が歐洲戰に於ける獨逸よりも有利であつたことは勿論である。

六

斯くの如く戰爭に於て、數の力の偉大にして且つ恐るべきにも拘はらず、我が國民就中老軍人の多くは、今尚ほ拔刀隊思想に捉はれて數の力を輕視し、蔑視し、十露盤彈ひて戰爭は出來ないと、肉彈萬能主義者である。肉彈萬能主義は各個力量萬能主義である。各個力量の必要なるは勿論であるが、同時に數の力の等しく必要なることを忘れてはならぬ。殊に短期戰に依つて勝敗を決し得るの可能性なき場合に於ては、數の力を尊重することが最も必要である。歐洲戰爭に對し、我が參謀本部が最後の瞬間までも獨逸軍の必勝を信じたる如きも、各個力量を過信し、數を輕視したる結果に外ならないであらう。參謀本部のみならず、力量第一主義の敎訓を受けたる自分の如きも、相當長き期間に亘り獨逸の勝利を信じ居たることを告白する。歐洲戰爭の勝敗に關しては、軍事專門知識を有せる軍人の判斷よりも、寧ろ素人の常識判斷が適中したるが如きは、戰鬪の益專門的技術化するに反し、戰爭の漸次國民的常識化する一證左とも云ふべきであらう。數は大切である。併しながら餘りに數にのみ拘泥執着する時は、或は事大思想となり、或は長い物には卷かれよ主義となり、數の劣れる國民をして自屈自棄せしむると共に、數の優れる國民をして倨傲放肆ならしむる虞がある。數を輕んずれば無謀となり、數に捉はるれば卑屈となる。此處に國防計畫と國民指導の苦心が存する。

數の劣れるものが數の優れるものに勝たんが爲めには、執るべき二つの道がある。卽ち其の一は我の數を增すことである。然るに我の有せる數は一定して俄かに之を作爲することは出來ない。是に於てか他よりの補給に待たねばならぬ。他の一は內的事情に依り或は外的作用に依り、敵の數を分散せしむること

である。日露戰爭の際、我は歐米諸國よりの供給に依り物の數を增すことが出來た。同時に露國の內紛に依り人と物との數を分散せしむることが出來た。併し斯くの如きは稀に生ずる僥倖であつて、常に之を期待することは出來ない。假りに××戰爭の場合に於て環境我に適順なれば、我は隣邦の援助に依りて數を增すことも出來るであらう。歐洲の應援に依りて米國の數を分散せしむることも絕望ではない。素より實際問題として斯かる良環境の實現するや否やは大なる疑問であるとは云へ、之を實現せしむべく努力することは　自己安全の爲め數の弱者たる我が國の執るべき道でなければならぬ。

七

前既に述べた如く、數の力は集結に依つて生ずるものである。毛利元就が其の子に誨へたる束箭の强は集結の力である。五指の交々彈ずるは一拳の打つに如かずとの古諺も亦集結の力を數へたるものである。露國の共產黨、伊國の國粹黨は共に其の數より言へば全國民中の一小部分に過ぎない。然かも彼等が今日他の大多數の國民を征服して獨裁の威力を振へる所以のものは、唯彼等の有せる强き集結の力である。素より共產黨も、國粹黨も、其の勇猛なる點に於て、其の果敢なる點に於て、黨員の各個力量優れるものありとは云へ、且つ又一は革命の混亂に乘じ、他は官憲の庇護ありしとは云へ、彼等が今日に於ける成功の最大因由は彼等の强き强き集結の力に歸せねばならぬと信ずる。

集結せる五個の力は分散せる十個の力を敗ることが出來る。我が全力を以て敵を個々に擊破すると云ふ戰術も、我が全艦隊の砲火を敵の一艦に集中すると云ふ丁字戰法も、其の原理は皆此處に生ずるのである。凡そ集結の力を强むるに必要なるものは、物に在つては調合である。人に在つては協同である。物の調合は技術上の研究に依りて、其の最善を知ることが出來る。然るに人の協同に至りては學問技術に依つて之を窮むることも出來ねば、命令規則に依つて之を强ゆることも出來ない。而して人の協同を碍ぐるものは、一は形而上の不平である、一は形而下の反抗である。不平は不公平なる待遇に對して發する人間の本能的意思である。種々の主義思想は多くは此處に醞釀する。反抗は無理解なる壓迫に對して發する人間の本能的作動である。各種の革命的行爲は多くは此處に胚胎する。不平も反抗も人間の本能であるとすれば、縱令法律と刑罰との威嚇に依つて表面的之を抑へ得るとするも、斯くの如くして得たる集結は數の束縛であつて數の協同ではない。束縛は鐵鎖と合轍とに

依つて強ゐらるゝ奴隷の結合であつて、協同は理解と責任とに依つて保たるゝ自由の結合である。奴隷の結合は縛つて敵彈の的とすることは出來ても、解ひて突撃の劍とすることは出來ない。自由の結合は停つて敵彈の的ともなれば、進んで突撃の劍ともなる。

之を以て國民の力を集結するには束縛でなく協同でなければならぬ。國民の協同を保つには國家に對する國民各個の權利と義務とを公平にし、國家に對する國民の不平と反抗とを除去することが必要である。苟くも現代に目覺めたる若き國民は、最早や小學教科書的の淺薄にして空疎なる忠君愛國論に依つて操つらるゝものでない。國家我に捉はれたる舊式にして盲目なる敵愾心に依つて煽てらるゝものでない。國民の或る一部に過度の特權と保護とを與へ、殘れる大多數の國民を虐遇薄待する如き國に於て、眞の協同に依る國民の集結を期することは到底不可能である。多數の貧民に對し苦痛大なる兵役の體税を課しながら、之に選擧權をすら與ふることを拒む我が日本に於て、果して能く眞の國民協同の實を擧げ得るや否やを疑はざるを得ない。西比利亞出兵失敗の歴史に徴するも、國民の協同を無視せる軍事行動の結果が、如何に悲哀なるものであるかを示すと共に、正義と道理とに反せる行動に對して、國民の協同を得ることの如何に難きかを證明することが出來る。

八

我が日本は今や世界五大國の一に列し、殊に海軍に於ては世界三强の一を占め、國際間に重きを爲して居る。併しながら其の實質を省みれば、人口の數に於ては英米に次ぎて第三位を占むるも、物資の數に至りては伊太利と共に第四位若くは第五位に在る。而かも物資を作動化すべき工業能力に於ては遥かに伊太利の下位に在る。殊に國民の生活文化に至りては、彼我風俗習慣の異なるものありとは云へ、歐洲二等國にも尙ほ如かざるものがある。而して環境に於ては決して日露戰爭當時の如き良好なるものでない。動もすれば戰前の獨逸に似たものさへある。若し夫れ將來獨逸露國にして其の國力を回復し、支那にして文化發達せんか、我が國の國際的地位は決して樂觀の出來ないものがある。此の間に於て獨り我が國の利とする處は、地理的並に歴史的關係上民族の純一にして、國民の協同的集結の容易なる點である。世界國多しと雖ども單一民族より成る六千萬の國民を有する國家は、露國及支那を除けば唯我が日本あるのみである。故に人の數に於ては日本は何れの國に對しても多く恐るゝに足らないと信ずる。唯問題とする處は果して能く國民の

協同的集結に依りて數の力を發現し得るや否やである。

或は血は水よりも濃ゆしと云ひ、或は兄弟牆に鬩ぐも外其の侮を禦ぐとも云ふ。併しながら主義思想の鬪爭烈しき現代に在つては、主義思想の結合力は血よりも尙ほ濃いものがあるであらう。主義思想を實現せんが爲めには、兄弟内に鬩いで援を外に求むることもあるであらう。血の純一のみを以て未だ俄かに意を安んずべきでない。素より主義思想と愛國觀念とは別問題である。露國の共產黨は、帝政黨より常に非國民賣國奴などゝ罵られ居たるにも拘はらず、一たび彼等が天下を取りたる今日に於ては熱烈なる愛國者である。唯内外に對する政策が、一は國家主義、資本主義なるに反し、他は世界主義、共產主義なるの相違あるのみである。先きには共產黨を賣國奴と罵りたる帝政派こそ、今は却つて外國の援助を借りてまでも、自己の主義思想を實現せんと力めて居る。官僚軍閥資本家等より非國民と呼ばるゝ日本の社會主義者とても、其の日本を愛する心に於ては變りは無いであらうと思ふ。併し何れにしても國民間に於ける主義思想の爭鬪は、國民の協同的集結を阻害し、我が國唯一の利點を消失せしむるに至るであらう。抑も主義思想の爭鬪を強烈ならしむるものは、多くの場合に於て偏狹、固陋、無理解、無自省なる官憲が、一方の主義思想を庇護援助して他方の主義思想を壓迫するが爲めである。素より何れの國にも左右の兩極派は存在する。是等兩者の協同を望むことは恐らく不可能であらう。併しながら兩者の爭鬪反目を成るべく緩和融合することは局に當る者の爲すべき務である。共產主義の公園演說を放任せる英國官憲と、メーデーに於ける警官の恣行を默認せる日本とを對比する時、日本の爲めに憂へざるを得ない。

若し夫れ物の數の乏しきに至りては天惠の薄きを諦めると同時に、他國殊に隣邦よりの補給を受け得る如く、我が環境を改善するの外他に之を充たすの道は無いであらう。現在日本の環境を顧みる時、一朝有事の際我に物を供給して呉れる國があるであらうか。

九

之を要するに、短期戰爭に依つて勝を制し得るの公算ある敵に對しては、各個力量の優越を第一とし、數を第二に置くことも或は得策かも知れぬ。之に反し、長期戰爭の覺悟を要する敵に對しては、數の力を必ず第一に置かねばならぬと信ずる。是れ國防方針を決定する上に於て大なる考慮を要する問題である。

最大多數の最大幸福と社會主義の主張

林癸未夫

○

「最大多數の最大幸福」といふ倫理學及政治學上の一標語は、普通ジエレミー・ベンサムによつて初めて提唱されたものゝやうに考へられてゐるが、實はさうでない。此標語の創案者は一じ六四年に『罪と罰』――ドストエフスキーの小說と同じ表題だが、しかしこれは小說ではない――といふ一書を公にした英國の法律學者ベツカリヤであつた。彼は此書の序文の中でかういふ意味を述べた。過去の歷史に徵すると、すべて法律といふものは、最大多數の最大幸福を究極の目的とする冷靜な研究家の頭腦から出たものではなくて、大抵は少數者の感情か、さなくば偶然の一時の必要によつて造られたものであると。ベツカリヤの初めて用ひた此語は、其後數年の後に出版された『政府論』の著者プリーストレイによつて蹈襲せられた。ベンサムが此語を發見したのは、前のベツカリヤの著書からではなくて、後のプリーストレイの著書からであつた。彼は此書から見出した此一語によつて非常な感動、といふよりは寧ろインスピレーションといつても可いやうな頓悟を受取つたらしい。彼は後年かう言つてゐる。道德問題に對する私の思想が確立したのは、全く此書の此一語によつてであつた。私が此語に接した刹那には、アルキメデスが比重の原理を發見した時のやうに、恍惚として我を忘れるばかりであつたと。

ベンサムが學說上の一主義として、初めて此語を提唱し來つたのは、彼が一七七六年に公にした處女論集『政府に關する論片』であつた。彼は後に至つて、自ら此主義にユーティリタリアニズム即ち功利主義といふ名を與へた。彼の思想に從へば政府の可否も、法律の是非も、個人道德の當否も、要するにそれが功利主義に合致するか否かによつて識別されるのである。然らば謂ふところの功利主義とはどんなものかといふに、政府の施設なり、法律の規定なり、個人の行爲なりが、之によつて影響を受ける人々の功利を增すものであれば、それを善と認め、然ら

ざるものは之を惡と認むべきであるとするのである。詳しく言へば、人に恩惠、利益、快樂、善良、幸福を與へ、又は人の災禍、苦痛、邪惡、不幸を取除くやうな結果を將來たす行爲が善であり、それと反對の行爲が惡なのである。ところが總ての人に功利であり、總ての人に非功利であるやうな行爲は問題とならないが、一部の人には功利であつて、他の一部の人には非功利であるやうな行爲の善惡は如何にして批判すべきであるかといふ問題が起る。其場合に批判の標準となるものが即ち最大多數の最大幸福なのである。一つの法律なり道德なりが正しいか誤つてゐるかを決すべき尺度としては、常にそれが最大多數の多大幸福を增進する傾向のものであるか、或はそれに反する傾向のものであるかの判斷に據るほかはないのである。若しそれが前者であれば、それは功利主義に適つた法律道德であると言へるし、後者であれば、それは功利主義に背いた法律道德であるいふことになるのである。從つてベンサムに於ては功利主義と最大多數の最大幸福とは思想上引離すことの出來ない關係に在るのである。

○

が、次に起る問題は一つの法律なり道德なりが、果して最大多數の最大幸福に適つてゐるか何うかを、如何にして鑑別することができるかといふことである。之に對するベンサムの說明は十分徹底してゐない。併し彼は此鑑別に當つて、先づ第一に次の四事項に就て考慮しなければならぬと言つてゐる。一つは幸福の强さである。强さの多いものは少いものより優つてゐる。次は繼續期間である。長く續くものは短いものより優つてゐる。次は確實か不確實かである。確實なものは不確實なものより優つてゐる。次は距離の遠近である。手近に摑めるものは遠方に在るものより優つてゐる。是等の四事項は幸福の內容に關して、直接の要素となるものであるが、尙此外に間接の要素として擧ぐべきものが三事項ある。その一つはフエカンデイチーである。即ち一つの功利を獲得するために拂はなければならぬ努力の分量である。次はピユーリチーである。即ち苦痛とか嫌惡とかにならない程度の疲勞、倦怠、煩雜等の情を交へる功利と交へない功利とを區別することである。次はエキステントである。即ち一つの功利によつて更に他の功利を引出すものと、反對に非功利を伴ふものとの影響の範圍である。以上直接間接合せて七事項に就ての考察を誤りさへしなければ、一切の行爲が最大多數の最大幸福に適ふや否やを鑑別することが出來ると、ベンサムは「道德及立法原理序論」の冒頭に說いてゐるのである。

○

ベンサムの功利主義は別に心理的快樂主義の名を以て呼ばれるものである。それは彼が自説を辯證する一つの根據として、英國哲學に傳統的な一特質ともいふべき快樂主義（ヘドニズム）を取り入れてゐるからである。凡そ人間が幸福であるか不幸であるかは、要するに快樂を感ずるか苦痛を感ずるかに歸着する外はないのである。無論將來の快樂のために現在の苦痛を甘受しなければならぬやうな場合は常に在り得るけれども、究極に於て人間は快樂の追及者に外ならぬものである。それが自然の與へたる人間の本能である。到底人間は此本能の支配以外に出づることのできない者である。果してさうだとすると、結局人間が現在に於て何を爲すべきか或は將來に於て何を爲さんとするかを決定するものは、唯苦を去つて樂に就くといふ本能の命令以外には何者もあり得ないのである。そして又同時にそれが、人間の行爲の善惡正邪を批判すべき唯一の標準となるのである。最大幸福とは畢竟最大快樂の謂である。快樂の充實を除いて、人間の幸福なるものは有り得ないのである。と、かうベンサムは立論するのである。

尤もベンサムの所謂快樂は、單に物慾や性慾の飽滿を意味するのでないことは勿論である。彼は快樂及苦痛を生ずる原因として、肉體的、政治的、道德的及宗教的の四條件を擧げてゐる。健康の良否は言ふまでもなく、政治狀態の善惡や、道德的觀念の淸濁や、宗教的信仰の厚薄が人間を或は樂ましめ或は苦しましめる基本要素であることを彼は認めてゐたのである。が、其要素が何であるにせよ、人間の行爲は常に快樂を求めやうとする其本然的要求に指導せられるものである。正と言ひ、善と言ふも、つまりは正を守り善を行ふことが、究極に於て人間に快樂を與へる所以であるから、それが人間に普遍的な受納性をもち得るのである。善とは畢竟人間に眞の快樂を獲せしむべき行爲の法則に外ならないものであると、かうベンサムは考へてゐたのである。此快樂說と功利主義と最大多數の最大幸福てふ觀念とが、彼の政治、法律、倫理の諸學說を一貫する根本思想であつて、つまり彼に取つての三位一體を成してゐたものと見て可いのである。

○

ベンサムの三位一體中、最大多數の最大幸福てふ觀念が彼の創意でなかつたと同じやうに、功利主義も快樂說も亦彼の創意ではなかつたのである。從つて彼が學者としての功績は、主として是等の三つのものを融合して、新に思想上の一體系を構成したことだけに在るのである。

ベンサムに先だつて、政治學上に功利主義を樹立したものにトーマス・ホッブスがある。彼の學說は人間が自然に有する欲望を基として出發したものである。彼の說に從ふと、吾等に取つて善いものは、つまり、吾等の欲するものである。而して人類の總てが求めてゐる根本的の欲望は何であるかといへば、自己を保存することである。この故に、自己の保存は吾等に取つて最善のものなのである。ホッブスはかういふ見解から出發して、彼に獨特な國家論を組立てた。彼はアリストートルの有名な標語たる「人間は本來社交的動物である」といふ觀念に反對して曰はく、一切の人間がおのがじゝ自己保存の欲望を基本として生活してゐる以上は、自己と他人との關係は親和でなくて鬪爭である。萬人が萬人を敵とすることが原始的の狀態なのである。併しながら、若しかくの如き狀態が永續したとすると、人間は一日といへども平和な生活を樂むことができない。それは却て自己保存といふ根本的欲望を滿足せしめるに不適當な狀態であることが明白である。從つて若し吾等が出來るだけそれだけ多く自己保存の目的を達しやうとするには、吾等は人間本來の自由に制限を加へて、濫に他人の利益を侵害しないことを相互に約束することが必要である。而して更に此約束を相互に嚴守せしめ、又違約者には相當の懲罰を加へて全體としての平和を維持するために權力なるものが存在しなければならぬ。茲に於てか人類は初めて國家なるものゝ必要を發見し、且それを建設するに至つたのである。國家は法律の名を以て、國民に爲して可なる行爲と、爲す可からざる行爲とを區別して之を指示した。爲して可なる行爲は、人間が自己の欲望を滿しつゝ、しかも他人との平和を維持するに差支のない行爲である。爲す可からざる行爲は、自己の欲望を滿足せしめる一つの手段として平和を維持する必要上、自己の自由に制限を加へなければならない行爲をいふのである。從つて法律によつて禁ぜられた行爲以外に、人間に取つて爲す可からざる行爲はない筈である。言ひかへれば、法律に違背しない限りは、人間は自己の欲望の導くがまゝに、どんな行爲をしても、それは皆善なのである。欲望しながらもそれを行ふことが惡であつたり、嫌惡しながらもそれを行はなければならぬことが善であつたりする理由は決してないのである。玆に於てか法律を離れて道德なるものは存在しない。それを存在すると考へるのは、皆人間自然の本能を無視した迷妄であるとホッブスは論斷するのである。彼の此國家論は一面又唯物論的倫理觀の名を以て呼ばるゝものである。そしてそれが人間の利己的本能を立論の基礎としてゐる點に於て、功利主義や快樂說の先驅を爲すものである。要するにホッ

プスの此議論は、彼以後に於ける英國の倫理學説を喚び起す一大動機であつたと言へるのである。

○

政治學者としての立場から、最大多數の最大幸福といふ言葉は用ゐなかつたけれども、それと殆ど同じ意味を主張した者にジョン・ロックがある。彼の説に從へば、人類が國家を組織して共法律の下に服するのは、ホッブスの唱へたやうに、人類相互間の敵對的狀態を制禦するがためではなくして、各人が相孤立して生活するよりも、一國民として結合したる社會的生活を營むことの方が、人間が自然に有する權利を擁護するに便利だからである。從つて吾等が國家の主權に服したからと言つて、吾等が自然の狀態に於て當然有するところの自由の權利を放棄しなければならぬ理由はないのである。否、其自由の權利を一層完全に擁護する方便としてのみ吾等は國家を是認することができるのである。

ロックの所謂自由の權利とは、主として財産所有權を意味するのである。彼の考ふるところに依れば、吾等が財産を所有し得る權利が何によつて發生したかといへば、それは吾等が自然に存する或土地又は或物質に吾等の勞力を加へたといふ事實に起因するのである。此勞力を加へると同時に、吾等は既に其物に對して自然に所有權を獲得するものであつて、最早他人が之を犯すべからざる地位に立つのである。これが即ち權利義務なる觀念の基本であつて、ホッブスの唱へるやうに、法律あつて初めて爲すべき行爲と爲すべからざる行爲とが決定されるものではないのである。唯法律は吾等の既得の權利を確實に保護するがために必要とせられるのである。

かういふ見解に出發して、ロックは、法律の目的及是非の標準は畢竟人民全體の幸福の上に置かれるべきであることを主張したのである。彼は此意味を言ひ表すに Common good なる語を以てした。いかなる法律といへども國民の一般善に背くことは許されない。そして何が一般善であるかを決するものは國民自身である。從つて一つの法律を作るにも、一錢の租税を取立てるにも、主權者は先づそれを國民に諮らなければならない。國民の承諾なくして法律を作り、租税を徴收することは、人民の自然の權利を蹂躙し、一般善を無視するものであつて、畢竟人類が國家を組織した最初の目的に適はないものであるから、其場合には國民は進んで、其主權者を變更し又は政治組織を改訂することが當然の權利として認められるのである。此意味に於て彼は革命權なるものを肯定したと言へるのである。

が、併し、一般善はロックの政治論の根柢であるけれども、彼は後のベンサムのやうに、直にこれを以て其の倫理觀の基礎とするまでには至らなかつた 又彼はホッブスのやうに、法律以外に道德なしとする說をも容れなかつた。彼は權利の起源は自然に歸したが、道德の根本は之を神に歸したのである。彼の思想に依れば、至善の神は各人に道德上の善と惡とを識別すべき道理心を與へてくれる。此道理心によつて吾等の行爲を支配するものが道德律である。此道德律は神のみ與へ得るものであつて、國家の法律とも異なり、又社會の習慣とも異るものである。從つて若し吾等が之に違背すれば、神の刑罰を受けなければならぬのである。

○

ホッブスの唯物論的倫理觀を祖述し、更に之を極端に實際問題にまで高調して論じたのがバーナルド・マンデヰユである。彼は佛蘭西人であつたけれども、倫敦で醫師を營んでゐたのであるが、一七〇六年に有名な「蜜蜂物語」を公にして英國の紳士淑女の間に大變な物議の種を蒔いた。彼の說に從ふと、人間は徹頭徹尾利己的動物で、一切の行爲悉くそれに基くものである。飮食、名譽、奢侈、逸樂、これ吾等の行爲の指針である。若し此指針なくんば、人間の活動は忽ちにして其原動力を失ひ、社會の繁榮亦直に失はれるのである。文明開化たるものは畢竟個々人が總て自己の利益を追求する欲念によつて促進されるものである。若しそれが醜陋であるからと言つて排斥するならば、文化の向上は停止する外はないのである。從つて文化を向上せしめやうとするならば、各自をして其利己心を十分發揮せしめ得るやうな社會狀態を存置するの必要があるのである。

私が玆にマンデヰユの說を引用した所以は それがベンサムの快樂說に至る一脈の關係を辿るためばかりでなく、後のアダム・スミスの個人主義的經濟思想を喚び起す一つの伏線としての興味をも感じたからである。

○

倫理學上の功利主義を確立した功は何うしても之をダヴヰド・ヒュームに歸さなければならぬ。彼の意見に從へば、人間が或善行、例へば正直とか博愛とかを是とする所以は、其行爲が自己に快樂(利益、幸福といふが如き概念をも含む)を與へるからである。從つて何人かに苦痛を與へる行爲は非である。快樂をも苦痛をも與ふることのない行爲は善惡何れにも屬しない行爲である。しかし吾等は屢々自分自身に何等の快樂をも與へない他人の行爲を善行として嘉みすることがある。ヒュームはそれを同情の作用に歸した。彼は其倫理に係る心理學上の聯想

律を玆に應用して、吾等が或心身の狀態に在つた時に、快樂又は苦痛を覺えたことのある經驗を基として、他人が同樣の狀態に在る場合に感ずる快樂又は苦痛を自ら感ずるに至るのであると說明した。彼に取つては、他人の快樂又は苦痛に對する同情が、道德上一切の是非褒貶の根柢を成すのである。此故に吾等の行爲を支配する最も重要な動力は感情である　理知は吾等の行くべき途を指示するの役目を負ふけれども、實際吾等を動かして、其途を取らしめるものは感情である。此感情を制するには、より强き他の感情を以てしなければならぬ。

かく行爲の善惡を快樂又は苦痛といふ結果から判斷しやうとするヒユームの立場が、とりもなをさず功利主義の根據なのである。そして彼が、利益、幸福、又は漠然「ためになる」といふが如き概念は、究極に於て快樂を享受するといふ事實に歸着する外はないといふことを高調したことによつて、功利主義の立場は大に明確にされたと言へるのである。

○

右に述べた通り、功利主義と快樂說との結合は、既にヒユームによつて行はれたのであるが、更にこれに最大多數の最大幸福てふ觀念を配して、所謂三位一體を形造つたところに、ベンサムの事業が顯揚されたのであつた。

が併し、最大多數の最大幸福なる觀念は、これを仔細に檢討すると、其意義に明確を缺ぐの嫌が少くないのである。第一に注意しなければならぬのは、幸福の分量と、それを享受する員數との關係である。若し各員の受くる幸福の量が平等であるとするならば、員數の增加するに從つて、幸福の總量が增加することは勿論である。しかし、いくら人員が多數であつても、各員の受くる幸福の量が極めて少いならば、何人も殆どそれを幸福として認めないやうな結果になるから、最大多數に分配される幸福よりも、或限られたる人員にのみ分配される幸福の方が、總量としては却て大なる場合が生じないとも限らないのである。言ひかへれば、幸福の總量を最大にするがためには、之を最大多數に分配するよりも、或程度のより少き數に分配しなければならぬやうな事態を發生するかも知れないのである。が併し、ベンサムの主張からすれば、かくの如き場合でも、必ずそれは最大多數に平等に分配するのが至當である。何となれば彼は、一人は唯一人として算へ、何人をも一人以上のものとして算へてはならないと言つてゐるからである。併しながらこれは或意味から見て、彼の功利主義と相容れないものである。何となれば、幸福とは畢竟快樂である。しかも各人が快樂を感受する能力には一々相違がある。譬へば一個の花を手にした場合

に感ずる快感は、人によりて非常に不同である。花を熱愛する十人の快感は、さほどに花を好まない九十人の快感よりも、分量としてはより大である。從つてその場合には、百本の花を一本づゝ百人即ち最大多數に分つよりも、花を熱愛する十人にのみ十本づゝを與へることの方が、總體としての最大幸福を喚び起すといふ結果を生むのである。つまり功利主義の立場からは、最大多數と最大幸福とが撞着して兩立し難い場合を見出すのである。

次に考ふべきことは、最大多數の最大幸福と個々人の感ずる快樂とを如何にして一致せしめることができるかといふ問題である。ベンサムの說に從へば、吾等が感ずる快樂又は苦痛の原因は、肉體的、政治的、道德的及宗教的の四である。肉體的の快苦は自己の健康狀態から來り、政治的快苦は政府當局の與へる賞罰から來り、道德的の快苦は社會の褒貶から來り、宗教的の快苦は神の賞罰から來るものである。從つて是等の原因により吾等が快樂を感ずるやうな行爲があれば、それは最大多數の最大幸福に一致すべき筈であり、苦痛を感ずるやうな行爲があれば、最大多數の最大幸福を傷ふべき筈である。そして又、若し吾等が最大多數の最大幸福を企圖して行動しないならば、必然吾等の苦痛が增して快樂が減ずる筈であり、最大多數の最大幸福を企圖して行動するならば、必然吾等の快樂が增して苦痛が減じなければならない筈なのである。

果してさうだとすると、個々人の快樂と、最大多數の最大幸福との調和を可能ならしめるがためには、其前提として各人の健康が良くなければならず、法律が理想的に成されてゐなければならず、社會的制裁が發達してゐなければならず、又宗教的信仰が一般に普及してゐなければならぬのである。が併し此四條件の何れもが實現容易でないのみならず、四條件が全部完備するといふやうな社會を期待することは空想以外には不可能なことであるから、つまり、快樂といふ個人的な慾望と、最大多數の最大幸福といふ社會的の理想とが、永遠に一致點を見出し難い平行線に終りはしないかが危まれることになるのである。

○

回顧的に批判するならば、ベンサムの學說體系は、快樂說なる個人主義的思想と、最大多數の最大幸福てふ社會主義的思想とを、共に功利主義なる思想に聯結して、彼の時代以前に於ける各派の諸學說を綜合的に組織つけやうとした所に其特色があるのである。が併しそれは終に破綻を免れなかつた。何となれば彼の試みたやうに、個人主義的思想と社會主義的思想とを、强ゐて功利主義の下に結合することが無理であつたからである

る。功利主義と個人主義との結合は可能である。功利主義と社會主義との結合も亦決して不可能でない。が是等の三主義を所謂三位一體の姿に渾成しやうとする企圖はベンサムの宏才を以つても到底不可能であつたのである。

不可能であるものを强ゐて結合したベンサムの三位一體は、やがて解體しなければならなかつた。そしてそれが解體された時に新しい二つの結合が更に其中から生れ出たのである。その一つは快樂說と功利主義とが自由平等思想に結付いた個人主義的經濟學說であり、他の一つは最大多數の最大幸福がヘーゲルの歷史哲學に結付いた社會主義的經濟學說であつた。

アダム・スミス及其祖述者たる個人主義的經濟學者が、功利主義の立場に立つて、經濟の現象を個人の欲望といふ視角から究明するに專らであつたことは更めて說くまでもあるまい。從つて私は此方面は差措いて、他の方面卽ち最大多數の最大幸福なる觀念が、いかに社會主義的經濟思想に繼應するところがあつたかを考へて見やうと思ふ。

○

私の知る限りに於ては、近世の社會主義學者で、特に最大多數の最大幸福なる觀念を以て、自己の立論の基礎とした人は誰もないやうである。併し、それだから此觀念は近世の社會主義思想に無交涉であるとは決して言へまいと思ふ。何となればベンサムの政治又は法律に關する思想の基調として、如何に此觀念が重きを爲してゐたかを念頭に置いて、再び彼の諸學說を回顧するならば、吾等は其處に、近世の社會主義思想と、切實に相通ずる一脈の連鎖を見出すことができるからである。

ベンサムは其『立法論』に於て、次のやうな意味を說いてゐる。凡そ立法者は最大多數の最大幸福を以て目的としなければならない。しかも此幸福は結局各人の生活資料（サブシステンス）と、餘裕（アバンダンス）と、平等（イクオリティー）と、安全（セキュリティー）とに係るものである。幸福の第一の條件として必要な生活資料を必要とすることはいふまでもないが、唯それのみでは眞に幸福ではあり得ない。これに多少の餘裕が伴うて學問藝術等に携はるべき時間と物質とを有つことが必要とされる。この二つは基本的條件であるが、更に最大多數の最大幸福てふ目的のためには、生活資料や餘裕が萬人に平等に分配されることが望ましい。彼の說に從へば、富の一定量が之に相應する幸福の一定量を伴ふものであつて、より多くの富を有する者は、より多くの幸福を享有することゝなる。が、それと同時に、富める人の感ずる幸福は、其富の分量に正比例して增加するものではないのであつて、つまり富の懸隔が大であればあるほど、富者と貧者との幸福の差は小となるのである。從つて富の分

配が萬人に平等である點に接近すればするほど、各人の感ずる幸福の總量は増大するのである。彼はかういふ論理の下に富の平等論を主張したのである。併し、いかに富の平等が理想であつても、富の所有そのものが法律によつて安全に確保されなければ畢竟無益である。安全は一切の幸福の保證である。從つて私有財産權は飽くまでも擁護されなければならぬ。若し私有財産の安全と富の平等とが兩立しない場合には、平等は姑く安全のために道を讓らなければならぬ。併しその爲の不平等は富める者の死を俟つて緩和されるであらう。何となれば法律は、漸次富の平等を現出するの手段として、財産の相續權に制限を設けることができるからである。かうベンサムは主張したのである。

彼の富の平等論は社會主義の主張と相通ずるものであることは言ふまでもないが、同時に彼は私有財産權を尊重したからして、共産主義的思想とは寧ろ相容れない立場に在つたのである。此意味に於て彼の思想は革命的であつたとは言へないが、併し他面に於て彼の政治組織改造論を窺ふと、彼も亦一個の革命思想家であつたと考へられるのである。彼が畢生の努力は主として法律の改正に傾注されたのであるが、しかも當時の議會は容易に彼の主張に耳を傾けなかつた。彼は之に對して大に憤慨し、法律改正の行はれ難い原因を探究して、終にそれを、政府も議會も、自己の利益に執着して、最大多數の最大幸福を顧みないことに歸したのである。そこで彼は猛然として政治組織の改造を叫んだ。そして彼は普通選擧、上院廢止といふが如き、當時にあつては極めて急進的な改革案を提唱したのみならず、××政治を排して××政治を理想とするまでに至つたのであつた。此意味から見るも、彼は後の社會主義思想に寄與するところがなかつたとは決して言へないのである。

○

私は本誌の昨年一月號に掲げた「勞働政策上の差別觀から平等觀へ」と題する一論文に於てかういう意味を述べて置いた。吾等が社會改造の目的及手段が、究極に於て是であるか非であるかを識別すべき標準は、結局「最大多數の最大幸福」といふことより外にはあり得ない。此觀念は個人の道德的意識を究明する倫理學の立場からは、鮮明を缺ぐの嫌ひがあるけれども、實際政治の理想としては、これで明白でもあり、十分でもあると。此論據からすれば、法律、道德、其他一切の社會生活の樣式は、それが國民の最大多數の幸福安寧に合致する場合に於てのみ是認せらるべきである。若し然らずして、單にそれが一部の特權階級の利益のためのみに存するものであるならば、それは直に改造されなければならぬ。道德の發達と言ひ、制度の完

備といひ、國家の富强といふも、畢竟それが國民の大多數の個々の生活の幸福安寧と切實に相伴はなければ、無意義であるのみならず寧ろ有害である。かういふ見解は現存の如何なる流派に屬する社會主義の主張とも決して相悖るものではない。從つて私は最大多數の最大幸福てふ觀念は、社會主義の主張と永く相抱擁して然るべきであると考へるのである。

大量生産の功過

法學博士　堀江歸一

工業經營方式の變遷

大量生産は現行の機械工業に於ける特徴の最も著しきものと認められる所である。機械が工業に應用される以前に於て、固より製造工業は夫れ〴〵多くの國に行はれたに相違ないが、其經營の方式は個人の家庭を以て、仕事の單位とし、其家庭の主人が工業主であつて、同時に資本家であり、水力なり、人力なりを動力に使用して、小規模の生産を行ふに止まつた。隨つて其工業に於て生産される物資は纔に地方的需要を充すだけの話であつて、到底其以外に及ぶ力を持たず、工業主と勞働者との關係も亦密接なるものがあつた。斯の如く工業が小規模であり、又地方的であることの結果、或る一つの地方に設立された工業が如何に其經營の上に於て、特色を持つて居つたとした所で、其力を他の遠隔なる地方に伸ばすことは不可能であつて、隨つて一の地方と他の地方との間に於ける競爭は甚だ緩漫であり、地方間に互に競爭する同一事業の對立することも事實に於て出來得る所であつたし、又斯く對立する工業が自ら各自の地方的色彩を仕事の上に發揮することも出來たのである。而して當時に於ける事業主と勞働者との關係の如き、宛然たる親方對徒弟の情誼に依つて、律されて居つたのであつて、親方にして自分の多年世話をし來つた徒弟の技能が上進し、一人前の生活を營むに堪へると考へられるに至つた場合には、親方自ら後援者と爲つて、

徒弟を一個獨立の事業主たらしめた次第であり、斯の如きは兩者の間に於ける關係の美しきことを語るものと目された。

斯る時代に於ては、經濟組識は所謂小規模事業を根柢とし、經濟上に於て、斯る言葉の使用が許されるならば所謂小量生産なるものに外ならなかつた。事業の小規模經營には固より或る利益が伴ふのである。即ち事業主が一身を挺して、事業の全般を管理し、自己と事業とを同一體のものとし、最も精巧なる物資を製造するが如き、又自己の有する技能を練磨するに遺憾なきを得るが如き、小規模經營の事業に於て、始めて之を期するを得る道理であるが、滔々たる社會の風潮は多くの産業に斯る特殊の性質を有することを許さない。斯る事業經營上の特徴の最も善く發揮されるのは手工業の場合であるが、手工業の如き時勢の變遷に左右されて、工業の一形式として、永く社會に地歩を保つに難しとする。蓋し社會が進歩すれば、進歩するだけ、其處に現はれる一の事相は多量の物資に對する需要であつて、工業の經營に於て、當業者が第一に着目す可き所は此需要に應じて、多量の物資を同一規準の下に産出することに外ならない。同一種類の事業が互に他と競爭して、經營される場合に、何が競爭事業の優劣を定め、又其勝敗を律する基礎に充てられるかと云へば、其れは主として規模の大小に外ならない。手工業時代に於て、或る事業の規模の大であるとか、小であるとか云ふことは、必ずしも重大なる問題ではなかつた。蓋し其大小は敢て生産費の増減を支配するに重大なる關係を持たなかつたからである。然しながら現代の如き機械工業の時代と爲つては、事業に於ける規模の大小は直接に生産費の多寡を支配する。即ち大規模の事業に於ては、第一優良精巧なる機械を据付け、第二世間の必要に應じて、同一規準に據る物資を如何なる數量までも、瞬時に、又短時間内に生産するを得、第三原料品の買入に於て、既製品の賣却に於て、將た又事業の經營に於て、總て費用を節約し、第四副産物を製造し、利用して、此方面から擧げられる利益を以つて、全體の生産費を低廉ならしめ、第五事業の各方面を通じて統一を保ち、實驗を重ね、又幾多の人材を養成するが如き、種々の特色を發揮するのであつて、是等の特色が自ら事業家を驅つて、大規模經營に赴かしめることを誤まらないのである。

大規模經營と資本結合の方便

故に大規模經營の時代は一國が農業を以て經濟生活の基礎とする狀態を脫し、工業を以つて其基礎とする際に現はれ、而して此經營法を出現せしめるには、一國に於ける資本の供給の潤

澤であり、又機械力の使用の自由であることを必要とする。隨つて大規模經營の事業、大量生産の實現は株式會社の組織と歩調を一にすることを以て、大體の原則とする。蓋し個人の有する資力には限りがあり、又其人一個の信用を以つて、他人に負ひ得る資金にも限りなきを得ない。株式會社が有限責任を以つて、社會公衆から、資金を醵集し得る、社會公衆亦株式券面の金額を限りとする責任の下に、株式に應募する、而して其限度の拂込みの行はれた後に於ては、賣買は人々の自由であつて、投資の目的物として、最も大なる流動性を持つものであるとしたならば、株式會社の形態を利用して、事業家は始めて大規模經營に要する資金を集め得られる道理である。又大規模經營の事業に於て、最も困難なる問題は其經營を擔當する知識才能經驗を兼ね備へる適任者を得る一事である。個人經營の場合に於て、事業を創立した初代の主人は創業に伴う困難に堪へ來つたゞけ、是等の資格を有して居つたかも知れないが、二代以下の相續者に果して同一の人を望み得るかどうか、其人にして凡庸であつたならば、初代の主人に依つて、起された大規模經營の事業も一代限りで、倒壞の已むを得ざるに至る事實は世間到る所に見るを得る次第であるが、株式會社であれば、如何に其規模が廣大であり、又其經營に才能を要するとしても、數ある株主の內から、適任者を求めることは敢て困難なりとしない。斯の如くして大規模經營の事業は株式會社と共に起り、又株式會社に依つて、其發達の完成を告げるに至るのである。近年我國に於て、富豪財産家が所謂事業の解放とか、公開とか稱して、從來個人經營であつた事業を株式會社の經營に改造することの盛に行はれるが如き、之に依つて所得稅の負擔を輕減しようとか、有限責任法の保護を受けて、財産の安全を謀らうとか云ふような意圖の藏されて居る結果であることは勿論であるが、同時に社會の多方面から、株式の形態を通じて、多額の資本を吸收し、事業其ものの大を成さしめようと云ふ希望の存することは論を俟たない。

大量生産と流通資本の供給

斯の如くして一國に株式會社の形式に據る大規模經營の事業が起つて、他と對する場合には、必ず世間を擧げて、大規模經營の流行を見ざれば、已まざるに至るのである。此事たる、或は人の模倣性に依ることもあらう、或は大規模經營を企うしたいと云ふ虛榮心に刺戟される結果もあらう。然しながら其最も有力なる原因に至つては大規模經營の事業が他に對して加へる壓迫の猛烈なる一事に存する。即ち大規模經營の事業家は其製出した物資を賣却する上に於ても、其必要とする原料品を購入する

上に於ても、他の小規模經營の事業家に對して、優越する力を備へて居る。隨つて前者と後者と相對立して、一の市場に競爭して行く場合には、後者は勢其存立に於ける安全を脅かされ、責めて資本に於ける利益を保全しようとする場合には、多少不利なる條件を忍んでも、大規模事業家に依つて併合されて、益々其大を成すの資料と爲るを以つて、得策とするであらうし、小規模事業家にして少しく前途に對する豫想の利く者であれば、斯の如き壓迫を大規模事業家から受けない前に、各自互に協同し、聯合して、以つて彼等に對抗する計を爲すに相違ない。斯くて個人事業が改造されて、株式會社と爲り、一旦株式會社と爲つたものが機會ある毎に、常に增資に依り、合併に依つて、其大を致することに、努力して已まないのは、要するに之に依つて他を壓迫すると共に、他の壓迫を蒙ることを防止するの意に出づるものに外ならない。

斯の如く大量生産にして、株式會社の組織と密接なる關係を持つものである以上は、斯る形式の生産は一國に於て資本の供給が或る程度まで增加し、而して其資本たる、所謂流動資本に依つて、代表され、所有者の意圖の如何に依つて、何時に於ても一の用途から、他の用途に轉換され得る時代と爲つて、漸く發達するに至るものであることは論を俟たない。會社が新に株式を發行するとか、又は增資に對する株式を從來の株主に割當るとか云ふような手段を施す場合に、何を必要とするかと云へば、金利步合の低廉である一事に外ならない。蓋し金利步合低廉であれば、既設會社の株式で、相當の利益配當の頒與されるものは、必ず市場に於て額面以上の價格を現はし、其利廻りをして低き標準點に至らしめる。然らば新に自己の所有する資金を何等かの方面に向つて、運用しようと欲する者は斯る低廉なる利率の下に、既設會社の株式に放資することを好まない、寧ろ新に會社を組織するなり、又は從來の會社に增資を行はせ、斯くて株主の權利として、其割當を受けるなりして、資金運用の目的を達しようとする。而して斯の如く株式會社が容易に成立し、大規模經營の工業に對して、大なる刺戟を與へる一原因としては、一國に資本の蓄積される高巨大となり、人々の間に於ける轉輾亦自由と爲つた事實こそ、有力なるものであつて、資本の蓄積頗る少なく、人々の間に充分の信用なく、資本家は苟も自己の眼界の屆く所なり、監督の及ぶ所なり、極めて狹隘なる範圍を外にしては、資本を放下するに就て安んずるを得なかつた時代に於ては、到底大規模經營の事業の起る道理を存しなかつたのである。往昔英國に於て、愛蘭や蘇格蘭の大地主の間に所謂アブセンチーズムなるものが行はれ、大地主は自己の土

地の在る地方に居住して、其土地を管理する勞を取らず、之を番頭任せとし、地主自身は遙に都會に住居し、地方から徴收した所得を都會に於て費消し、豪奢なる生活を營んだことが、英國に於て一方に地方農村の衰微を招くと共に、他の一方に倫敦の如き大都會をして少なくとも國內金融の中心點たるに至らしめたと解される。而して斯く倫敦が國內金融の中心點と爲つた結果は如何なるものであつたか。金融中心點として、全國の資金の集中し來る以上は、此資金は最も流動的狀態に在ることを標準として、諸方面に放下され、或は株式を擔保とする貸出と爲り、或は債券を買入れる資金と爲り、或は低利の下に短期限の條件に依つて、他に融通される道理である。然らば從來山間の僻地に於て、水力を利用して事業を營んだ事業家が其本據を都會に移し、機械の据付其他の設備を完成するに、資本金を要するとしても、其調達の容易なるを得たのは勿論であつて、此事が大量生産を刺戟するに與つて力ありとされるのである。

既往に於ても資本供給の安易が大量生産の發達に大なる力を持つて居つた通り、今日に於ても事業に注入された資金が株式として、債券として代表され、所謂不動産的資本が動産化されることに依つて、始めて巨大の資本を必要とする大規模經營の事業が容易に起され、大量生産の効果を擧げるものと認められる。資本の豐富なる供給があり、又其供給の豐富が或る期間を通じて、繼續することは、大量生産の實現に於て、極めて必要であるとしなければならぬ。

大規模經營と人材養成

右の如き事業の集中的運動は既製品の販賣、原料品の購入、副産物の製造に就て、當業者に利益を與へるに止まらず更に事業の利益を增進することに依つて、經營に才能ある者を斯業に吸引し、又有爲の青年を養成して、他日の用を致さしめることも出來る。水力を動力として、事業が山間の僻地に行はれた時代や、小規模の家內工業盛であつた時代に於ては、工業に從事する者は單に年來の熟練を身上とし、又多年の型を墨守する親方風の人物たるに止まつたが、今日は相當の教養ある紳士であつて、有型的方面に才能を有するは勿論、部下を統率し、其品性を陶冶する人格を持たなければならぬ。北米合衆國に於ては、曩にはシユワツブの如き、最近にはフオードの如き、偉才が現はれて、工業の發展に大なる貢獻を致したことの如き、一に大規模經營の齎す所を以て、目されるであらう。啻に然るのみならず、今日の工業經營に於て、最も重要視せらる可きものは、機械の應用に加ふるに、工場の設備や、勞働者の配置等に關して、

所謂科學的經營法を適用するの一事である。科學的經營法なるものが勞働者を過勞に導いたり、勞働者の就業上に於ける區劃を狹くして、各自の聯絡を妨げたりする弊害を伴ひ、勞働組合の精神と相容れない嫌を存するかどうかは姑く別問題とし、工場經營の或る方面を科學的にすることは、經營の費用を節約し、產出された物貨の一個當りに對する生產費を節減するに至ること論を俟たない。而して科學的經營法は如何なる工場に於て最も善く適用されるかと云へば、其規模の廣大なるものに於て、始めて然るを得る一方に、大規模經營の事業であればこそ、一部の技術員なり、經營者なりをして、專門的に經營法に科學上の知識を應用する工風を研究することに、一身を委ねしめるを得るのであつて、科學的經營法にして可なりとすれば、其利益は事業の大規模經營と相俟つて、行はれるものとす可きである。

商業に於ける大量生產主義

大量生產の方法は必ずしも獨り工業のみに行はれるものではない。運輸業や、商業にも亦同一の原則が働いて、事業の規模を大ならしめつゝあるのである。姑く商業の方面に就て見ると、「デパートメント、ストーア」の如きは、大量生產の原則を最も著明に適用したものである。卽ち數府又は十數府の大廈を建築し、人間の生活に、將た又享樂に必要なる物貨は其何ものであるを問はず、總て之を陳列し、貯藏し、如何に多量の物貨を需要する顧客が來つても、之に應じて支障なからしめるのが「デパートメント、ストーア」の特徵である。今日に於ては此種の經營法は三越白木に於て、常に世人の實驗する所であるが、二十數年前私の如き始めて北米合衆國に於て、ワナメーカーや、ジョーダン・マーシュの行ふ斯る經營法を目擊して、一驚を喫したことを自白せざるを得ない。殊に是等の「デパートメント・ストーア」は一市內の住民又は其內に偶々集まつた來遊客を吸引するのみに止まらず、全國各地方又は附近の外國都會にまでも、寫眞入のカタローグを配布し、一方に其れ等諸地の新聞紙に大々的廣告を揭げて、地方民を刺戟し、郵便註文を取つて、廣く物貨の配達に力めるのである。斯くて生ずる結果は何であるかと云へば、一の都會に於ける「デパートメント・ストーア」が其都會は固より、附近に於ける大小都會の小賣營業者に大なる壓迫を加へるの一事に外ならない。卽ち「デパートメント・ストーア」は大規模に物貨を配給する地位に居る結果、之を製造業者から仕入れるにしても、又自ら製造所を所有して、物貨の製造を自營するにしても、原價又は費用の低廉に付くことは、爭う可からざる事實であり、一軒の店で必要とする

一切の物資を購ひ得られる、都合に依つては食事喫茶休憩の便の得られると云ふことが更に多數の顧客を吸引する武器と爲るとしたならば「デパートメント・ストーア」の發達するに隨つて、附近なり、全都會なり、又は近隣都會の小賣營業者は大なる壓迫を蒙り、奄々たる氣息を保たざるを得ざるに至るのである。實際上の效果は問題に屬するが、獨逸の「デパートメント・ストーア」の商品賣上高に對して、特殊の課税を加へて、以つて獨立の小賣商業者を保護し、斯くて中等民社會政策を實行しやうとすることも、亦一理ありと認められる。

銀行業の大量生産主義

更に商業の方面に於て、近頃頻に行はれる銀行の合同は如何であるか。英獨兩國に於ては夙に銀行の合同が行はれ、前者に於ては大銀行支店制度が、後者に於ては、大銀行の小銀行を支配下に置く銀行網制度が行はれて、年を經ること久しく、而して英國に於ては、戰中に端を發した銀行合同の計畫は戰後に至つて、益々其勢を逞うし、遂に倫敦の市中銀行をして僅々五行に統一するに至らしめた。(拙著國際經濟と國民經濟第六章參照)我國の如き從來銀行合同の機運の動くことは、最も遲鈍であつて、銀行界には小規模の獨立銀行が數多く對立して居り、而して資力の揃つて小である爲め、數は如何に多くとも、所謂團栗の脊較べと同樣、金融上に大なる働きを爲すを得ず、却つて經濟社會の動搖に依つて、幾多の不始末を演ずることを免かれなかつた。此一事が我國の官民に大なる刺戟を與へたものと見へ、大正九年の恐慌以來銀行合同の必要を論ずる聲は甚だ強く爲り、最近安田系統の諸銀行は合同して、一億五千萬圓を資本金とする大銀行を組織することに決定したと傳へられる。此事たる要するに銀行當局者が小規模のものであつては、經濟社會の變動と共に、常に影響を蒙り、銀行の有する資産の狀態如何に依つては、如何なる珍事の出來するかも測り知るを得ない。其れよりも合同に依つて、銀行の基礎を鞏固にし、他の一方に於ては支店制度の下に、銀行の公衆に與へる便宜なり、銀行の營業なりを擴張しやうと云ふ考へから、斯の如く銀行合同の風潮を爲すものと認められるが、一方に從來既に基礎の鞏固を以て目されて居つた諸銀行が今日を機會として合同するに就ては、其裏面に大規模經營の事業に對して、金融上の便宜を與へるに遺漏なからしめやうとする念慮の潜んで居ることを否定するを得ないのである。由來金融機關と其取引の對手たる諸事業とは、其規模に於て因果の關係を持つ。事業の規模が廣大であれば、之に相應じて、金融機關の強大であることを要するが、一方から見れば、強大

なる金融機關は其豐富なる資金を運用する便宜から、事業の大規模なるものに特殊の信用を與へて、之を援護誘導することを怠らない。我國に於て銀行合同論が起り、而して其れが着々實現されるに就ては、既に大規模經營の事業が其緒に就いて、金融機關の强大と爲る可きことを促しつゝあるの結果とするを得るのである。

外國市場と大規模經營との關係

斯の如く大規模經營の事業が發達し、大量生産の行はれるに隨つて、現はれる一の事相は斯る事業の經營者が外國市場に販路を維持し、又擴張するに當つて、一種の政策を施し、以つて其目的を達するに至ることである。蓋し大規模經營の事業に於ては、前記の如き幾多の原因に依つて、其生産費を低減するを得るが、當業者は必ずしも生産費の低減に相應じて、物資の價格を引下げることを要しないし、又引下げることを敢てしない。蓋し大規模經營の事業が成效の極に達した曉に於ては、其術に當る一の事業家は能く内國市場に於ける群小の事業家を風靡し、席捲して、獨占の勢を爲すであらう。一方に若しも國家が内國の産業を保護する意味に於て、保護關税則を制定し、外國から競爭品の輸入し來る勢を遮斷する目的を以つて、輸入品に對して、相當に重い輸入税を賦課したならば、右に述べた大規模經營の事業家の内國市場を獨占する狀勢は益々鞏固なるものと爲ることを失はない。此際に斯る大量生産を事とする事業に於ては、其産出する物資の分量を定めるに當つて、決して内國の市場に於ける需要だけを目標とするものではなく、或る程度まで生産高を多量にし、出來得る限り、生産的設備の極度を盡して、以つて生産費を節減しようとするには、内國市場に於ける需要の數量を超過する程度まで、生産を行ふに至る。而して生産物の一部分を内國市場に供給する場合に、何等他の競爭を受けることなく、完全なる獨占の形狀を作つて居るとすれば、當業者は其代價を決定するに臨んで、獨占價格の原則に據り、消費者の負擔し得る最高限を以つて、代價の標準とし、其生産費に對して、超過する高の著しいことから、之に依つて充分の利益を占める。而して生産費と内國に於ける獨占代價との間に著しい差違の存するのは、大量生産の下に、一方に生産費を極度まで引下げ、他の一方に獨占の形狀を成した結果であつて、生産物の一部分である外國に向つて輸出されるものは、剩餘産物であり、大量生産を成す附屬の産物たるに過ぎないのであるから、當業者が之を外國に輸出するや、其價格の如きは問ふ所でない。生産費と相償ふ程度であれば甚だ好都合とす

る、時には生産費以下の價格であつても、卽に内國市場に獨占價格を以つて賣却した部分に就て、利益を占めて居る以上は、之を外國に賣却することを辭さない、外國市場に於ける競爭の模樣に依つては、多々益々輸出價格を引下げて、競爭に當る餘地を生ずる結果、大量生産の下に、外國に於ける物資の販路を擴張する、此大規模經營の事業に於ける獨特の働きは所謂ダムピング卽ち人爲的廉賣法と稱されるものであつて、獨逸や北米合衆國が近年駸々たる勢を以つて、外國に自國商品の販路を擴張したのも、大量生産とダンピングを併用した結果に歸せなければならない。

大量生産と勞働者

私は以上專ら利益と云ふ方面から、大量生産に對する觀察を下した。大量生産が數の力に依賴して、其特色を發揮するの一事に至つては、近代の經濟組織に於て、吾人の刮目せざる可からざる所である。而して大量生産が内外經濟上の關係に於て、有利であることは、之を資本家や事業家の見地から考へれば、爭ふ餘地を見ざる程、明白の事實であるが、他の方面から判斷して然るを得るや否やに至つては、自ら異說なきを得ない。私は第一に勞働者の立場から、第二に消費者の立場から、此問題に對する解決を下したいと思ふ。

今日の文明諸國に於て、勞働條件は如何にして決定されるか、勞働時間の長短や、衞生設備や、婦人小兒の就業期間の如き、工場法に特殊の規定あるもの、或る特殊の勞働者に支拂はれる最低賃銀の如き、特別法の支配を受けるものを除き、一般の勞働條件殊に賃銀は一に事業主と勞働者との協定に依つて、高低如何ようにも、定められる。事業主に團結があり、又事業主は一手に相當金額の資本金を擁して居るから、之に當る爲めに、勞働者も又勞働組合の下に團結しなければならぬ、事業主は自己の利益を大ならしめる爲めに、事業を制限する以上は、勞働者亦事業主に賣る勞働力を制限して、以つて彼等に對抗しなければならぬと云ふことは、多年勞働組合の支持される根據に充てられた。斯くて株式會社と云ふ團結の下に、又は同業組合とか、同業者聯合會とか云ふ組織の下に、大と爲つた事業主に對して、勞働組合と云ふ勞働者の團結が成立ち、集團的契約に依つて、勞働條件を決定することは、大規模經營の事業の起つた場合に、勞働者自ら衞る方便としなければならぬ。此場合に勞働者の團結が薄弱であつたり、又は皆無であつたりして、甚大なる事業主の勢力に對するに、一個の勞働者を以つてしたならば、後者は常に前者の犧牲に供せられて、社會上に大なる不公正

の生ずることを免かれないのである。私が平生我國に於て勞働組合の健全なる發達を遂げることを希望して、已まないのは、社會上の關係の公正を維持せんとするの念に出づるものである。

大量生産と消費者

大量生産の下に、大規模經營の事業が起つたとした所で、一の市場に於て、直に獨占の狀形を成すものと速斷するを得ないが、多くの場合を通じて、斯る事業は獨占に傾り易いし、當業者自ら獨占に爲ることに努力して、已まない。果して然らば斯る事業家が其産出する物資の價格を決定するに當つて、獨占價格決定の法則に據り、消費者の負擔するに堪へる最高限度を以つて、標準に充てることは、當然の數に屬する。而して獨占價格が競爭價格に比較して、遙に高い程度に居る事實の動かす可からざるものである以上は、一國に大量生産が行はれ、事業の規模が如何に擴張されるに至つたとした所で、其事業家の有する獨占的權能は、代價低落の形に於て、消費者を惠むに至らす、却つて代價騰貴の形に於て、消費者を虐げるに至らざるを得ないであらう。即ち前に述べた通り、大量生産の下に産出され、製造された物資の一部分はダムピングの下に、外國に輸出され、內國の消費者は殘存する供給に對して、高貴なる價格の支拂を強要される、而して事業家は其運用する資本に對して、高率なる利益を占めるとしたならば、消費者が斯る事實に接して、安んずるを得ないのは、當然である。然らば消費者は如何にして自己の利益を保護するかと云へば、其れには生産的消費組合を組織することを以つて、捷徑とする。即ち生産者各自或る金額の資本金を醵出して、一の生産團體を組織し、各組合員の必要とする物資は此團體の管理し、經營する機關に於て生産し、實費を以つて組合員に分配することゝしたならば、現在の配給組織の下に於て、生産者から消費者の手に或る物資の到達するに至るまでの一切の費用殊に斯る中間に立つ者の占める勞利は總て省約され、組合員をして公正なる代價の下に、物資を享受するに至らしめる。而して此事は自ら營利業者の小賣價格を決定するに當つて、暴利獲得の目的を以つて、專斷的行爲を縱にすることを抑制するを得るのである。

大量生産と國有主義

即ち一國に多量生産が行はれ、其行はれる結果として、大規模經營の事業が起つた場合には、社會各方面の利害關係を公正ならしめる爲めに、勞働組合と消費者の生産的消費組合とを起

すことの必要あることは、私の固く信ずる所である。然も尚ほ後の二者の勢力微弱であつて、前の一者に依つて、常に壓倒され勝ちの狀態に居り、社會に不公正の關係を生ずることの依然たるものある場合には、國家は宜しく國有主義を以つて大規模經營の事業に臨み、總て國有國營に據つて、此種事業を運用し、斯くて國民の利害關係に公正を保たしめることを要する。

今假に或る生活必需品を製造販賣する會社が暴利獲得の目的を達する爲め、會社自ら獨占權を持つまでに、其規模を擴張したり、又は他の會社と聯合したりしたとする。此場合に最も大なる苦痛を蒙る者は一般消費者であるが、此消費者をして同時に其會社の株主であらしめたならば、如何であらうか。物資代價の騰貴に於て負擔する所は一方に其領收する利益配當金の增加に依つて、相償はるゝを得る道理である。然しながら實際問題として之を考へると、全國の消費者をして、其消費の量と正確なる比例を保つ程度に於て、各種消費品の製造分配に干與する會社の株主たらしめることは、言ふ可くして行はれ得る所でない、唯之に近き狀態を出現せしめるに足るものは、即ち國家自ら或る種類の事業を所有し、經營し、營利の目的を離れ、公益に着眼して、製造し、生產した物資を國民に公正なる條件の下に分配するの一事に外ならない。是れぞ大量生產若しくは大規模經營の實質を傷けずして、却つて其利益を發揚する所以と解されなければならない。私は本論起草中、偶々英國ウエッブ氏夫妻の合著に係る「資本家文明の敗頽（The Decay of Capitalist Civilization）と題する小冊子を入手したが、著者が今日の經濟組織を批評して「利潤獲得者は時の狀況に依り、常に生產用具の最も價値あるものゝみならず、償ひ得べからざるものをも毀傷し、破壞して憚らない。彼は必要なる物資の品質を不純にし、又粗惡なる代用品を以つて、之に代らしめる。彼は社會上價値なき、時には非常に有害なる物資又は勤勞を供給する爲めに、自己又は他人の勤勞を使用する。彼は自己に利益ある外、他の何人にも利益を與へざる方法に向つて、他人の資本並に信用を利用しようとして已まない」と論述した一節に至つて、盡く同感の意を表せざるを得ざるに至つた。大量生產は私人の企業に於てのみ行はる可きものではない。國家自ら大量生產を行ひ、其經營法をして社會に於ける諸方面の利害に調和せしめる爲め、勞働者並に消費者の團體を代表する者を擧げて、經營の方法に干與する權能を持たせ、斯くて大量生產の過を除いて　功を全うするを得る次第である。

「數」の力で維持さるゝ三越呉服店

倉知誠夫

塵も積れば山となり、點滴石を穿ち、微粒凝つて珊瑚洲を造る。是れ皆數の力である。西洋人が滴水集合して大洋をなすと云ふも數の力の偉大なることを唱ふたに過ぎない。往昔毛利元就が三兒を戒めて、一本づゝの矢は容易に折り得べくも、三本の矢を束ねてこれを折ることは困難であるとて、數の力の原理を示した逸話もある位で、數の力即ち數の加積された力の偉大なることは驚くべきものがある。最も手近かな例を擧ぐれば、わが三越呉服店が品質の優良を保證し、而も他店よりも高からざる値段を以て商ひ、他の追隨を許さゞる程の多大の費用をかけて華客の便宜をはかり、尚且、相當の配當をなし得るがためには、多大の利益を擧げなければならぬ譯であるが、さればとて二割の配當をするがために、各單位の品に對して三割も四割もの利益を課したならば、他店よりも値段が高くなるから買手がなくなる譯である。そこで廉價に商ふて相當の利益をあげるためには、どうしても數の力を利用するより外はない、即ち商賣の回轉 英語の所謂ターン・オーヴァである。一品に付き五分の利益を收める丈けでも一年に六回轉すれば三割であり、八回轉すれば、四割になる譯である、一品一單位について五分の利益を收めることは決して不當ではないと思ふ、のみならず日本に於ける小賣商賣益率の平均一割五分乃至二割の標準より見るときは低きに過ぎる位である。米國の小賣商賣益率五割乃至六割に比すれば十分の一にも足らぬ位である。假りに一年僅か三四回轉の商ひにしても一割の口錢を收むれば三四割に當る益があつて數の力の實現である。

更に三越マーケットの如き一日數萬日の商ひ品にありては一ケ年二十回轉をなすものもある。世人の驚かるゝ程値段の安きものゝあるは、聊かも不思議とするに足らぬ。全く數の力の實現に外ならないのである。

又三越が皆様の御引立により店が今日の繁盛をいたして居るも、高貴の方々の御用を蒙ると同時に、廣く世間の華客の數多

き御用をつとむるがためで、卽ち數の力の賜物である。

又往年村井吉兵衞氏が卷煙草の製造に着目した際も、最初は幼稚な手工製作の爲め、その事業の發展も遲々たるものであつたが、一度びギリシヤ人ヒリツプ氏の製造機械を採用するに當り、その發展は躍進し、忽ち煙草王の名を以て天下の耳目を聳動せしむるに至つたと云ふのも、全く爭ふべからざる數の力を意味するものではあるまいか。

更にこれを米國の自動車王フオード氏の例に求むるに、同氏の自叙傳に依ると、フオード、モートル、コムパニーを創立したのは今より二十年前の一九〇三年のことであつたが、當時氏は僅かに十萬弗の資本の會社の四分の一の株を所有したに過ぎなかつた。而もその株は現金でなく、發明したフオード自動車の特許權を二萬五千弗の評價で株に直したもので、當時氏の財産と云つては、これしかなかつたのである。爾後着々利益を擧げ、今日では會社の株は悉皆自分のものになり、その資本金は驚くべき巨額に上つてゐる、去る五月七日頃の米國各新聞にデトロイド發聯合通信として載せられた所によれば、世界中最も富裕なりと云はれてゐるフオード氏の富は七億五千萬弗と評價されてゐると。これは最も顯著なる數の力である。フオード氏は最初から數の力を最も適切に應用した人で、その製作する自動車は體裁よりも實力、高價化よりも民衆化を主として、その用途の最も廣い實用車の製造に力を入れ、而もその價格を他社の比べることが出來ない程安くしたことは、最もよくこの數の力と云ふことに烱眼であつた一例である。今日にてはその販途が全世界に擴り、フオードが自動車か、自動車がフオードかと云はれる迄に成功してゐる。

想華

身邊雜事

菊池寛

差押へられる話

私は、所得税に對して不服であつた。附加税をよせると、年に四百圓近くになる。私は官吏や實業家のやうに、國家の直接な恩惠を受けてもゐないのに、四百圓は、どんな意味からでも、取られすぎると思つた。文士など云ふ職業は、國家が少しも歡待もしなければ、保護奬勵もしない。奬勵しないどころか、發賣禁止だとか上演禁止だとかで脅してゐながら、その上收入に對して、普通の税率を課するのは、怪しからないと思つた。

私の昨年の所得決定額は、日本一、二の富豪安田何某の四十分の一であり、澁澤榮一氏の四分の一であつたので憤慨した。實業家など云ふものは、巨萬の恒産があつての上の利子的の收入である。恒産があつて、年に一定の收入があれば、私も喜んで納税したい。が、恒産のない、その日ぐらしではなくても、その月ぐらし程度の我々に、實業家の收入に課する税率を課せられるのは、やり切れないと思ふ。安田何某の四十分の一はおろか四千分の一の財産も持たない我

々の收入丈が、四十分の一に評價され、所得税法を適用せられるのは可なり不當だと思ふ。

その上、我々の收入の性質が實業家の收入などとは、全然違つてゐる。ある仕事を經營すれば、毎年定まつては入つて來ると云ふのではない。今年は一萬圓收入があつても、來年は二三千圓しかないかも知れない。その上、われ〳〵の原稿料など云ふものは、頭の中に生えた材木を伐つて賣つてゐるやうなものだ。一度伐つたら、後は容易に生えないのだ。いな、一生、生えないかも知れないのだ。ドオデの短篇小說に、「金腦の人の傳說」と云ふのがある。頭の中に、金塊が一杯つまつてゐる人のことを書いたのだ。彼は自分のためや、愛人のために、少しづゝ頭から金塊を出して使つてゐたが、あんまり愛人の追求が烈しいので、金塊を出し盡くし、頭が空虛となると同時に斃れると云ふ話だが、われ〳〵作家は、みんな「金腦の人」なのだ。頭の中の量のきまつた金塊を、少しづゝ小出しにしては生活してゐるのだ。財産家のやうに、打出の小槌を持つてゐるのではない。われ〳〵の原稿と云ふものは、繰り返しが出來ないのだ。使つたものは無くなつてしまふのだ。學者が一定の講義を毎年やつたり、役者が一の藝を二三年毎に、繰り返すと云つたやうなわけには行かないのだ。云はゞ、精神的な賣り喰ひしてゐるやうなものなのだ。そんな意味で、われ〳〵の收入に現在の所得税を課するのは、可なりひどいと思つた。

だから、私はその法の不備に對する抗議の手段として、決して自發的には、納税しない決心をした。私は、稅務署の役員が來たとき、所得は決定額より以上あるが、所得稅法が不服だから收めない。どうぞ、勝手に差押をしてくれと云つた。私は、差押へだとすると、屹度執達吏が來るのかと思つてゐたが、案に相違して、洋服を着たその若い役員は、「ぢや、差押して行きます。」と、云つた。そして、差押櫃を證明する名札のやうなものを見せた。私は、さすがに、一寸緊張した。妻は「何だかこはいわねえ」と、云つてオド〳〵してゐた。が、この人は、上つて來て、差押へるので

なくて、「何か税金位の金目の品ものはありませんか」と云つた。私は、妻に時計と指輪とを出させた。役員は、差押證書をかいた丈で、品物は封印もしないで、私達に預けたまゝで、歸つて行つた。歸るとき、「私は、貴君の作品を愛讀してゐるのですよ」と、云つた。

約束の通、競賣の日に通知が來たので、私は女中に金を持たして、入札にやつた。すると、女中が歸つて來ての話では、女中がは入つて行くと、其處にゐた税務署の役員達は「やあ！來た。來た。」と笑ひながら、税金丈を取ると、受取の紙をよこしたと云ふのである。それでは、結局私が納税した形式になつたので、これはしくじつたと思つた。

第二期は、到頭差押へに來なかつた。おや、納めなければ納めなくてもいゝのかと思つてゐると、三期分と一緒に差押へに來たのである。向ふで、手數を省いたわけである。今度も、同じ時計と指輪とを渡した。その兩方とも合せて、二期分の税金額には不足する程のものであつた。役員は、納得して差押へて行つた。妻も馴れたので、今度はこはがらなかつた。

競賣の通知が來た。今度こそ、ゼヒ落札してやらうと思つた。が、自分で出かけて行くのも馬鹿々々しいので、やつぱり女中をやつた。すると、女中はまた前と同じやうに納税の受取を持つて歸つた。私が咎めると、「でも何うしていゝか分らないのですもの」と云つた。

四期分は、税務署の方から、前以つて妥協的に勸誘に來た。だが私は應じなかつた。すると、それに憤慨した故もあるだらうし、いつもと同じ物品では、此方が懲りないと思つたのだらう。今度は、指輪と時計とを拒絶して、玄關の次ぎの間にあつた箪笥とシンガア・ミシンの機械とを差押へた。私は、その時留守であつた。歸つて見ると、妻は「私一人だと思つて、馬鹿にする。ミシンをお買ひになりましたか、御勉强ですな。それを一つ差押へて行きませうと云ふの

ですよ」と、憤慨してゐた。

所が、このシンガア・ミシンは先日シンガア・ミシン會社から、月賦で買つたもので、契約面では所有權はまだ會社にあるのである。妻は、それを知らなかつたのである。私は、今度は入札に行くのも面倒くさくなつたので、競賣の日にも行かないつもりでゐる。

が、もう一月以上にもなるが、税務署からは何の通知もない。あのミシンを、古道具屋でもが競賣で買つたとすれば、一體法律上、どう云ふことになるのか、その裡誰かに訊いて見たいと思つてゐる。

わが家のアインスタイン

私の所へ原稿を送つてよこす人は、可なり多い。三四年來、百を以て數へる位である。が、氣持丈は忙しい私は、人の原稿をよむ暇などは殆どない、すまない〳〵と思ひながら、押入れの中にかうした原稿が、だん〳〵つもつて行くわけである。

去年の八月、近江のある人から、私は四百枚ばかりの長篇を受取つた。その嵩ばつてゐる小包を見た丈で、私の心は重くなつた。十日ばかり、そのまゝにしてあつた後、ある日封を切つて一二枚讀んで見た。

大正七年五月二十五日の事なるが、神田神保町の通を歩みゆく一人の若者がある。年の頃二十五六にて、色黒く、鳥打帽を被ぶり、縞の着物を來て、駒下駄をはいてゐる……………。

こんな調子で、一人の男が口入屋へ行つてから工場へ雇はれる所を、ダラ〳〵とかいてある。小學校卒業生の程度の人が、自分の平凡普通な經驗を、ダラ〳〵ダラ〳〵とかいたものである。私は、十枚位讀んで、いやになつてよしてしまつた。小説をかく丈の素養も才分もない人が、一生懸命にかうした長篇をかいてゐることは、人間の空しい努力と云

つたやうなものを見せられてゐるやうで、暗憺たる氣持がする。
この人は、その後一二度手紙をよこした。そして原稿がよかつたら、何處かの雜誌へ、世話して吳れるやうに云つて來た。私は、苦笑してそのまゝにした。
すると、去年の秋、この人が突然上京して、私を訪ねて來た。私は、近江の人が來たときいて、心が暗くなつた。會つて見ると、三十近い頭を角刈りにした職人上りのやうな人だつた。東京に何か所用があつて來たのかと聞くと、いや原稿を讀んだ返事をきくために、來たと云ふのである。そして、あの後五百枚位かいて來たと云ふのである。私は參つてしまつた私はどんなに私が忙しいかを話し、又順序として前に預つた原稿が無數にあることを話した。そして、とても讀めないと云つてことはつた。すると誰か外の作家に紹介してくれと云つた。私は前後千枚の長稿をよむことがどんなに苦しい仕事であるかと考へると、ウソにも他の作家に紹介する氣はなかつた。私は、それも斷つた。すると、それなら玆へ一年でも二年でも置くから讀んで吳れと云つた。近江から、そのために來た人を拒む譯には行かなかつた。私は、氣が進まぬながらも、預つて置くことにした。
すると、二月ばかり經つて、十二月の半頃、またいきなり上京して來た。私は、この人のおろかな、然しながら、熱心な努力を、頭からケナすことは出來なかつた。もつと、文藝の分る人なら、私が正當に批評し忠言すれば、分るのだが、この人にはその程度の理解さへありさうになつた。私は、會つて、よめないでゐる云ひ譯をした。
その人は、たいへん自分の作品に自信があるらしかつた。
「讀んで下さつたら、きつと何かあるやうな氣がするんです。ホラ何とか言ひますやろ、哲學ですかな。その哲學があるやうに思ふので。」
「なる程」

私はさう返事するより外はなかつた。

「私は、自分で自惚れてゐるのかも知りませんけれども、あの天才ぢやないかとかう思つとるのです。」

私はあんまり馬鹿々々しいので、皮肉つてやらうと思つたがどうも、この人には皮肉が分りさうでなかつた。

「ホラ、この頃獨逸から偉い學者が來て居りますやらう。」

「アインスタインですか」

私が云つた。

「さうです、さうです。私の書いてゐるものも、あれと同じやうなものぢやないかと思つてゐるのです。」

私は、あんまり可笑しいので、つひ吹き出しさうになりかけるのをぢつと堪へた。私は、さうですかね やつぱり相對性に關係があるのですか」とでも云ひたかつたが、よした。そして、忙しいので、前の原稿さへよんで居ない、まして後の原稿をよむ暇はないと云つた。すると、誰か外の作家を紹介して具れと云つた。私は、千枚のかうした原稿をよむと云ふことが、何んなに苦役であるかを知つてゐる。已れの欲せざることを人に施すことは出來ない 私は それも拒んだ。すると、雜誌屋へ直接紹介しろ、と云つた。私は、ふと越山堂と云ふ本屋が、無名作家の傑作を廣く募つてゐるのを思ひ出した。私は、そのことを此の人に告げた。そして、越山堂の所在を敎へてやつた。その人は、直ぐ越山堂へ行くと云つて、私の家を出た。私は、少し人がわるいと思つたが、さうするより外仕方がなかつた。

が、神の目から見ると、アインスタインの相對性原理なども、眞理を摑まうとする人間のもがきの一つで、いつかまた他の學說に依つて空しく破られるのではないかしら。やつぱり、この人の長編小說のやうに、何にもならない そのくせ一生懸命な、空しい人間の努力の一ではないかしら。私は、わが家に來たアインスタインを送り出してから、そんなことを考へた。

小説 風に揉れる若木……小川未明
小説 素足で行く旅人……宮地嘉六
喜劇 高さを競ふ……上司小劍
小説 悪日……新井紀一
小説 平凡人……正宗白鳥
戯曲 厩戸皇子……永田衡吉



風に揉れる若木

小川未明

二人は、終日、物を言はずに過すやうな日があつた。

父が、胸の中に、それは烈しい、眞赤な感情を包んでゐたことは、よく私には分つてゐた。それを、父は、ぢつと堪えてゐた。默つてゐた。――ちやうど、眞暗な暴風雨の夜に、一つの光りを賴りに步るいて來た者が、たちまちその光りを見失つてしまつたやうに――闇の裡に、ぢつと立つてゐるより仕方がなかつたのだ。

しかし、なんで、父が、未來について信じなかつたと言ひ得よう？

私は、時に、父のいら〳〵した、輝やく眼を見たことがある。また、非常に、淸らかに、靑い空のやうに澄んだ、靜かな感情の表はれた瞳を見たことがある。しかし、父は、いつでも家にばかり閉ぢ籠つてゐて、ある時は、書物を讀んだり、ある時は、好きな陶器などを眺めたり、それでなければ、そんなもの一切が眼の中には入らないやうに、もう書物にも、藝術品にも用事がないといふ風に、たゞいら〳〵として感情が押へきれないで室の中をぐる〳〵と徊はつてゐたことがあつた。けれど、父は、社

會に出て、もう一度實際的な運動をするといふやうな氣持は持たなかつたやうだ筆禍で、牢獄から出て來た當座は、溫厚な父も、やはり當年の危險人物として、監視の眼がたへず注がれてゐたのであらうが、年を經るに從つて そのことは、當時の運動史の上の記錄にだけ殘つてゐて、世間からも忘れられてしまつた。

父は、不幸の人であつた。また、性格から言つて見ても、不幸な人だと言へるのであつた。しかし、私は、今日の四十年代、もしくは五十年代の人々――滅び行かうとする智識階級に――それと通有な附纏つた惱みがあり、憂欝があり、又悲劇がある如くに考へられるのである。

太陽が、東の空を上りかけて、小鳥が鳴く聲を聞く時分には、旅人の足は、決して一處に止まらないであらう。そして、彼等が、ぐん／＼進んで行くことを怪しまない。けれど、眞夜中に闇の裡で立つた人は、こんなに元氣よく、快活にはなれなかつたのだ。

私は、順序として、孤獨の日を送りながら、希望と樂しみを求めた不幸な父を、こゝに顧みなければならない。

多くの子供達は、たとへ彼等がどんな處に住まつてゐても、其處から樂しい遊び場處を見出したやうに、私は、陰氣な家から、外へ逃れるやうに出て行つて遊んだのである。

家から少し離れた處に空地があつた。そこを小さな川が流れてゐた。川と名を付けるばかりで、むしろ溝といつた方が當つてゐたかもしれない。都會の町裏を通つてゐるのでその川は汚れなかつた。水底には、いろ／＼な汚物が沈澱してゐて、黑く鉛色に、滑らかさうに光りを含んでゐた。

それは、ほんたうに幅の狹い流れであつた。しかし、私の眼には、可なり大きな川に見えたのである。恐らく、他の

子供等にも、さうであつたにちがひない。川邊には、いろ〳〵な花がいつぱい咲いてゐた。野草ではあつたけれど、赤や、白や、うす紫色の色合が美しかつた。川底は、黒く、水垢が溜つてゐても水の流れは澄んで常に清らかに見えた。風は、たへず新綠の萠える木立の枝を波立てゐる。ある時は、その柔らかな、青い雲の搖れるやうな姿が、水の面に、ちやうど鏡にでも映つたやうに動くことがあつた。

一日は、長かつた。そして、物憂かつた。しかし、私は、この川の邊に來て、みんなと花の咲いてゐる葉蔭の時間を覗いたり、また素ばしこく走る小さな魚の影を捕へようとした時に、どんなに言ひ知れぬ神秘を感じたであらう。

私の生活の安らかな息ひは、こゝで見出されたのだ。この自然には、限りない美しいものがあることも、また口には言ひ表はし得ないもどかしさのあることも、またぢつと見詰てゐると心の底から湧き出るやうな悲しみ、恐らく、永久に、誰にも分らずにしもふやうな悲しみのあることも、私は、こんな時に、經驗したのであつた。

家の中は、何となく冷たかつた。いつでも往來には日が當つてゐて、家の裡が、蔭つてゐたからでない。母のない家は、みんなさうなのであらう、母親は、家の中の太陽であつたから、母のない家が、うす暗く、寒むかつたのに不思議がないことだ。

家へ歸ると、父が、室の中に、たゞ一人でぼんやりとして考へ込んで立つてゐることがあつた。父は、その頃經濟史を書いてゐた。その、仕事のことで何か考へてゐるのであらうかと思はれたけれど、さうでなかつたのかも知れない。とにかく、ぼんやりとして寂しさを堪えてゐたやうに見える。父は、私の顏を見て、につこりともしなかつた。却つて默想を破られたのを悄むがやうに、また、何か言ふのを好まないがやうに、知らぬ顏付をして、自分の書齋にはいり込んで、襖を閉めてしまふといふやうなことがたび〳〵あつた。

さうかと思ふと、父は、何か口のうちでつぶやきながら、室の中をぐる〳〵と廻はつてゐるやうなことがあつた。この氣狂ひぢみた樣子も、見なれてしまふと、私には、自分の父はかういふ人だと思はれて、何とも思はないばかりか、この姿すら、慕はしいものになつてしまつたが、はじめて見る人なら、誰しも、異樣な態度に驚いたであらう。

かうして、私は、家に歸つても、とり付く島がなかつたのである。何人に、この胸の悲しみを訴へて見ようもなかつた。私は、いつしか、自然から慰さめられる道を見出したのである。自然は、無理に私の手を取つて、笑はしたり、喜ばしたりはしなかつたけれど、自然は、私さへ心を開いて語らうとしたら、いつでも訴へを聞いてくれるからである。

私が、ある時、病名の不明な熱病に罹つた際、父は、暗い顏をした。そして、どんなに氣を揉んだか知れない。もう、私が、二たび命の救はれないもののやうに、絕望さへしたのであつた。

「あんな汚ない川へ行くから、こんな病氣にかゝつたのだ。いくら言つたつて、お前は、俺の言ふことを聞かないから」

と言つて、父は怒つた。

さながら、あの小さな川は、黴菌でいつぱいになつてゐるやうに父は、言つた。そして、こんな病氣にかゝるのがみんな私のせいででもあるやうに、そればかりでない、私が、病氣にかゝつて、父を苦るしめるのを、はじめから私が知つてゐて、病氣になつたやうに、彼は、看病をしてくれながら、口やかましく言つたのであつた。

彼は、私に病氣が癒つたら、決して、川のところへ行つてはならないと命じた。けれど、誰にも、私の自由を奪ふ權利はなかつた筈だ。かう言ふ父にも、矛盾を指摘することが出來たであらう。

私達は、父などには、父ばかりでない、他の大人などには、到底寄りつかれさうでもない、あの汚たならしい川端から、いろ〳〵の美しいものや、不思議なものをば見出した。何といふこともない魅力が、私達を其の方に招いだ。私は、

そこで、すべてのものが活々として輝き、躍るのを見た。花も、蟲も、小さな魚も、すべてが、太陽の下で、呼吸をして、生きてゐる仔細な有様を心に刻むことができた。そして、私が、いかに彼等に對して眞劍であり、また、彼等を眞に深く愛したかは、私が、机に向つて、いつでも彼等の姿を思ひ出した時に描かれた程である。

もし、私が、一層不幸な境遇に生れたか、もしくは、異つた、もつと早くから自立しなければならない環境に育てられて、自然に親しまずに、多く人間に交はる機會があつたなら、私は、絵や、文章を描いたり、作つたりすることの代はりに、勞働者となつて、どこかの工場で働いてゐるかも知れない。そして、其の方が、却つて幸福であつたかも知れない。なぜなら、より多くの生命と親しみ、お互同志のために助け合ふことは、どれ程意義のある生活であるかも知れないからだ。

これと比較すれば、父は、たしかにデカダンであつたと言へよう。あゝ、哀しきデカダンであつた！ それは、贅澤からではなかつた。僅かに、現實を忘れるためからであつた。酒を飲むことのできなかつた父は、古い、しかも脆い昔の陶器に殘されてゐた、はかない美を見ることによつて、寸時の苦悩から逃れようとしたのだ。

濃艶、あせた明色、その他陶器の持つなよやかな曲線、しかも哀れを誘ふやうな鈍光……。

それを見た時、彼は、人生のはかなさを感じたにちがひない。現在的には、階級鬪爭を肯定し、また唯物史觀を眞理とした父も、この刹那ばかりは、氣の弱いニヒリストであつた。

けれど、人生の悩みが永久的のものである限り、この二つのことは、決して、矛盾にはならなかつたらう。

一人の人間に於て、同時に、二つの眞理を見出すといふことは、苦しいことである。寧ろ悲劇であると見做すことができる。そして、この苦しみをいつの時代にだつて感じたものは、智識階級であつた。

私は、こゝに、父を辯護しようとは思はない。冷かに、悲劇の中の一人として見るのである。

彼の趣味だけでは、襲ひかゝる時代の苦痛を忘れることができなかつた。父は、正直であつたがために、尚更できなかつたのだ。

ある日、彼は、手に一枚の古い和蘭皿を持つて、皿の面に描かれてある中世紀頃のあちらの風俗畫を眺めてゐた。人物が被てゐる着物の赤い色や、青い色は、時代がついて褪せて見えた。そして、前方には、海が望まれ、地平線を船が行くのであつた。父は掌で幾たびも、その皿を撫でながら、室の一處に坐つてこれを眺めてゐた。

「この皿は、まだお前のお母さんが、生きてゐる時分に買つたのだ。町の裏通りを歩るいて古道具屋の店さきを覗くと、この皿が目についた。どうして、こんなところに、かうした皿があるだらうと不思議に思つた。俺は、まだあの時のことを忘れはしない。家に買つて歸ると彼女までが喜んだ。俺が、殆んど幾たびとなく手に取り上げて眺めると、そんなに嬉しいのですか？　と、彼女が聞いたのだ、

「それは、お前のお母さんは、氣の弱い、忠實につくしてくれた女だつたよ。俺は、彼女が死んでから急にこの世の中といふものが、さびしくなつた。もうその年まで、お前も大きくなれば、この心持が分つてくれるだらう………お前は、お母さんの顏を覺えてゐまい？」

父は、かう言つたのであつた。私は、いつしか、中學を卒業する間際にもなつてゐた。そして、自分の父といふ人が、どんな人であるかといふことも、また子供の時分に死んだなつかしい母親が、どんなやうな人柄であつたらうかといふことも頭の中に描かれたのではあつたが、母親の姿は、ちやうどうす闇の中に咲いてゐる白い花影のやうに、たんとなくはつきりとしない、ぼんやりとした感じだけしかなかつた。

それよりは、私は、その後の父と共に暮した、さびしい生活の間に、幾たびか送つた華やかしい夏、梅雨のじめじめした晩春、木枯の音が神經を脅やかした寒い冬などについて、その時の父、その時の自分といふやうにはつきりとした記憶が殘つてゐる。

私は、默つてゐた。そして、父の言ふことを聞いてゐた。

「この翡翠の珠は、當時、支那から歸つた男にもらつたのだ。ほんたうのいい翡翠ださうだ。僕は、この色が好きだつた。この珠を手に取つてぢつとうす青い、奧深い色に見入つてゐると、忘れてゐた一切の過去が、ぼんやりと夢のやうに眼の中に浮んで來るのだつた。妻が、この珠をほしいからくれいと言つたことがあつた。簪の珠にするのだらうと聞いたら、いゝえ大事にしてしまつて置くのですと答へた。けれど、俺は、つひに彼女にやらなかつた。………」

父は、一つのうす青い………水色の珠を傍に置いた。

「みんなかうして、棚の隅に埃のかゝつたまゝでゐるが、あゝ、もう彼女は、どこにもゐないのだ」

父は、かう言つて、溜息をついた。

さびしい午後であつた。日が暮れるのに間がなかつた。毎日、いまごろになると遠く街の巷の方に當つて、笛の音や叫び聲や、いろいろな物音がするのを、誰も、氣にはとめないであらうが、偶然其等の音色が、この時二人の耳にはいつたのであつた。

父は、だいぶ年のとつた顏をばあげた。

「つい、昨日のことのやうに思ふ。なんだか、かうして、使に行つて、歸つて來るのを待つてゐると、いまにも、そこへひよつこりと彼女が歸つて來るやうな氣がする……」と、彼は、言つた。

父が、さう言つたことも、また、いつしか永久に歸らない過去となつてしまつた。そして、私は、まだ、父が、ゐていまにでも、あちらの室で呟ばらひをするやうな氣がする。

父の死後、私は、彼の蒐集して置いた書物や、愛玩してゐた陶器や、その他のこま〴〵したものをすつかり賣るべく決心したのであつた。それ等は、彼にとつては惜しいものに相違なかつた。しかし、彼は、すでに白い骨となつて、墓場の木立の多い、土の下にはいつてゐる。もう何の愛着のあらう筈がない。それよりは、私は、これを金に換へて入用に使つた方が餘程いゝと思はれたからだ。

澤山の書物の中から、私は、自分の讀みたいと思ふ書物だけを取り除いて、すべてを賣ることにした。そして、陶器や、繪畫や、其他のものは書物に對する程、私には賣るべく惜しいと思はれなかつたのは事實である。書物は智識を得るためであるから贅澤品ではないけれど、陶器や、昔の風俗を載せた古本や、繪畫などは、無くてもすむとから一種の贅澤品のやうに考へられたのであつた。

しかし、そのことは、後になつて、私が、自から藝術を職業としなければならなくなつてから、あの時の考へが間違つてゐたといふことが分つた。現實の生活に、その書物から得た智識を活用しない者にあつては、やはり書物も贅澤品であると言へるし、陶器や、繪畫のやうなものでも、其の人の生活にとつてなくてはならなかつたものなら、やはり必要品であつたのである。私は、形の上で、その二つのものを區分したことを恥ぢる日があつたことを附け加へて置く。

書物は、父がよく出かけて行つては、其の店から探がして買つて來たことがある、生前知り合であつた古本店に、私は、まとめて賣ることにした。そして、昔の繪畫や、陶器の類は、大體からいつて、骨董品に屬してゐたので、私は、安心して賣るやうな人を知らないために困つたのであつた。

父の所持してゐた書物は、科學的社會主義に關したものより、無政府主義に關するものが餘計であつたことは、父の仕事と對照して奇異な感じを抱かされたが、しかし性格からいつて、寧ろ自然であつたやうに感じられたのである。私は、人間といふものは、常に矛盾したところを持つてゐる。しかし、正直な、そして眞劍に考へる人は、いつでも私慾を犧牲にして、人生のために殉ずるものだと悟つたのであつた。

道は坂になつてゐた。だら〱と上ると、そこには、また町があつて、いろ〱な商店が軒を並べてゐた。しかし、其の町は、賑やかではなかつた。大通りから、あちらの大通りへ抜ける間の、どちらかといへば靜かな小さな通りであつた。

ちやうど、坂を上りつめると、その古本屋に突き當るのである。店に、腰をかけて上つて來た道を振返へる時は、一筋の道の色が白く乾いてゐた。そして、絶えずその面を吹く微風に、黄色な埃が、煙のやうに、輝やかしい大氣の中に舞うてゐるのであつた。

古本屋の主人は、もういゝ爺さんであつた。眼が打窪んで、頭髮がうすかつた。そればかりでなくよく耳がきこえなかつた。こちらで物を言ふと、小さな體を前にのり出して、耳をさし向けるのであつた。

「さう、さう、先生は、古くから、この店へお見えになりましたもんです。この書物も、何年か前にお賣りしたのでした。あの頃は、こんな本を一冊手にいれますのにも、まことに容易ではなかつたものでした」と、主人は、うなづきながら語つた。

何年か前に、この店で賣られた社會主義に關した書物が、またこゝへ戻つて來て、棚の中に晒らされたのである。その洋書の發行年月から言へば、もうずつと昔のものだ。運動の方針にも變化があれば、學說の上にも新しい解釋が生じ

てゐる譯だ。即ち、それから後に起つた、幾多の階級戰の結果によつてゞあつた。罷業――怠業――無數の犧牲――そして、たとへ戰術は變つたであらうけれど、しかし、其の信念には、昔も、今も變りがなかつた。古い本だといふ理由から、その書物を價値のないものだといふことができない。

「いまでもこんな古本が賣れますか?」と、私は、聞いた。

主人は、うなづいて見せた。それから口を開いた。

「さうした本をご覽になる方といふものは、大抵きまつてゐます。新しい本を探がしてお求めになる方と、もう品の少ない書物ばかしを喜んでお求めになる方と、それも大抵きまつてゐます」と、主人は、言つた。

私は、社會主義の書物も、かういふ人達には道樂にされる場合があることを考へた。そして、智識階級は、其れ自身暇のある階級であることを證明してゐるものだと考へた。

「S大學の先生は、社會主義に關した、古い書物を頻りにお探がしになつてゐます。きつと、この書物もご覽になつたら、すぐ先生がお持になりますでせう」

主人が、かう言つたのを聞いて、私は、父の書齋にあつた書物が、こんどS大學の敎授の書齋の棚に移るのだと思つた。敎授は、またその書物を參考に、新たに自分の著述をしたり、その中に記載してある事實について、學生等に語るだらう。ちやうど、私の父が、著述をしたやうに……さうして、いつかは、ある目的がかうしたことによつて、遂せられると考へてゐるのだ。

しかし、私は、疑ふのである。かういふやうに書物を著はしたりすることによつて、どれだけ民衆が自覺し、そして、階級戰が、更に一歩を進めるであらうか? と考へるのである。それは、智識階級の自己欺瞞ではないか? と。

なぜなら、他の科學とは異つて、社會問題は、生活そのものから發足した問題であるからだ。生活の實感を措いて、何も理屈がない筈だからである。

常に、物質的に、精神的に、苦しめられてゐる無産者の反抗と、自由と解放とを望む思念は、そこに何等の理屈を要しない實感だからであつた。そして、自分等の敵に對して、罷業し、怠業するのは、寧ろ本能に根ざした復讐の手段であつたからだ。

文字をもつて書かれた、この種の書物は、いかに生産者が、資本家に搾取されるかを明かに示したものだ。同時に、罷業と怠業は、生産者の權利であつて、其の行爲が眞理であることを說明したものだ。

故に、良心を有する、また、勞働者を熱愛する智識階級は、かうすることによつて、人間としての自分の仕事を果すためだとは言ひ得られるけれど、書物によつて、勞働運動が何うなるものでもない。勞働運動は、生産者自身の運動だから、はじめて革命的なのであらう。

新社會の建設は、無産勞働階級の自覺と蹶起によつて、はじめて成就する。そして、彼等が、たゞ世界の現在を知る以上には、敢て讀書家であることを要しないのだ。

父は、美術品を蒐集したといふ程でもなかつたが、これ等の書物を賣拂つてしまつた私は、後に殘つた、父が、愛してゐた皿や、壺や、また幅などを一まとめにして賣ることに決心した。

私は、自分の氣持からいつて、直接生活に役立たないやうな、それ等のものは、單に趣味だけにとゞまると考へることから、寧ろ所持してゐることに對して、ある疚しさを感じたからにもよるのであつた。そして、その値などは、どうであらうといゝから、早く、買ふ人を探がさなければならないと思つた。

私は、町を歩るいてゐて、ふと小さな一軒の骨董屋を見出した。店頭には、書畫や、いろ〳〵な古物が並べられてあつた。佛像のやうなものや、香爐や、また皿や、そして、古道具のやうなものまで、處狹い程に並べられてあつた。私は、この店を見つけた時に「さうだ、こゝで買はうか聞いて見よう」と思つた。

店へはいると、まだ三十五六にもなつた男が、火鉢の前で新聞を讀んでゐた。かういふ店の主人には、大抵老人が多いやうであるが、それにくらべて、この男は、まだ年が若かつた。若いといふことが、却つてこの場合私に、何となく話がしよいやうに思はせたのであつた。

しかし、二言、三言、話をしてみると、全く、異つた生活の氣分に生きてゐる人間だといふことが分つた。

「兎に角、お伺ひして、品物を拜見しませう」と、髮をのばして、それを奇麗にうしろへなで付けた、其の男は、言つた。

私は、一足さきに、家に歸つて待つてゐた。しばらく經つと、男は、やつて來た。父が、大事にして、彼が、仕事に疲れた時、もしくは徒然な時、またあまりに神經のたかぶつた時などには、取り出して手に取つて眺めた、小さな幾つかの美術品が男の前に並べられた。しかも、その値踏みがされるのである。いろ〳〵な色彩と、器物に反射する、微妙な、悲しい光線を見て、私は、何となく涙ぐましい感じすら覺えずにゐられなかつた。いつたい、何者が、美の絶對に對して其の値段を付け得るのか？

男は、この時仔細に、見ては小頸を傾けてゐた。やがて冷かな笑ひが、彼の唇のあたりに漂つたのを、私は、見逃すことができなかつた。

「お拂ひになるといひますのは、これだけでございますか」と、男は、言つた。その口振りは、こればかしの品物では、

やつて來た甲斐がないといふやうにも取れたのであつた。

私は、心の中で、父が、たとへこの一つを手にいれるのでも、それはたいした骨折であり、また喜びであつたと思つた。そして、かうして、こゝに微妙な、幽邃な光澤をたゝへたばかりでなく、時代の付いた色彩を見よ。この美を愛するものに、これ以上のいかなる喜びがあるであらうか。この皿や、この壺の作者は、もうとつくに死んでしまつた。しかしその人達が、どんな氣持をもつて、作品に從事し、また、繪を描いたかは、よくこゝに表はれてゐるであらう。彼等は、善良な民衆であり、また實にその友達であつた。なぜなら、美しい感じと、樂しみと、平和な氣分をみんなのために配かたうとしたからだ。

この男に、そんな深い考へが分るであらうか。私は、かう一方には、思ひながら、

「まあ、大抵こんなものばかりなんですが、だめですか?」と、言つた。

私は、實際、自分の目には、いかに美しくこれ等のものが見えても、專門家でない限りは、眞價が、よくは分らなかつたからだ。それでかう言つたのだ。

「だめと言ふことは、ありませんが、何か他に、もつと實用に向きますやうなもので、ご不用品が、おありでしたら、いたゞきたいものでございます」と、答へて、男は、ぢろ〳〵と貧しい室の中を見廻はした。

私は、男の言葉を其儘眞理であるとさへ思つた。

成程、實用には、この皿も、壺も、何にもなりはしないのだ。全く、役には立たないだらう。人間の生活が、たゞ實用だけで足りるとするものなら、また、功利以外に、生活が考へらるべき筈でないものなら、この男の言ふことは、まさしく、眞理として肯定せずにはゐられない。

「いまは何もないのですが、これだけでは買ひませんか？」と、私は、きいた。

貧しい私は、たゞこの男が言つたやうに、美術品を樂しむといふ餘裕がなかつたのだ。さういふ生活をしながら、有閑階級が玩弄するやうなものを持つてゐたくなかつたのだ。いくらでもいゝから、賣つてしまひたい。たゞ、一刻も早く身邊から、どこかへやつてしまひたいと思つてゐた。

男は、ちよつと頭を掻いた。そして、口の中で、値踏をしてゐるらしかつた。私は、男が、口を開いた時に、いよく値段を言ふのだと思つたが、さうではなかつた。

「惜しいものですな、この皿が五枚揃つてゐましたら、いゝお値段になりますのですがな………たにしろ、一枚だけでは………」

私は、男を見つめて默つてゐた。男は、次に、盃を取り上げた。そして、頭を傾げてゐた。

「それは、たいへんに、いゝものだと父が言つてゐた」と、私は、傍から、男に、注意をした。果して、その通りの品であらうか？ を知りたかつた。

「いえ、品物は、たしかでございましても、かうホツがありましたのでは、全く、參考品にしかなりません」と、男は、盃を皿と並べて、疊の上におろした。

「其の他には、青い地平線に消えて行かうとする赤い船を描いた和蘭皿があつた。また、いつか「母がほしがつてゐたが、つひにやらなかつた」と父の言つた、翡翠が混つてゐた。

「この石ですか………失禮ですが、あまり性がよくはありません」と、私が、男に、翡翠のことを聞いた時に、答へた。

いくつかの品數を、ひとまとめにして、畢竟、二皿、三皿の洋食を食べる値にしかならなかつたことを、私は、永久

に記憶するだらう。

男は、品物を自分の手にいれてしまつてから、はじめて、青脹れのしたやうな顔に、ちよつと打解けた笑ひを見せて、

「ご研究は？………私も、醫學の方をやりましたんですが、つひ途中から、ぐれてしまつて、この方面に、まあ道楽の方で飯を食ふといふ有様になりました譯で………」と、言ひながら、煙草に、火を點けて吸つた。

「ぢや、醫學校へでもお行きになつたんですか」と、私は、科學と――骨董と、あまり矛盾してゐるので、興味を覺えながら聞いた。

「學校へ行つてゐる時分から、こんなものを捻くることが好きでして」

男は、煙草いれを腰に差込むと、品物を浚ふやうに風呂敷に包んで持去つてしまつた。もう、室の中を何處を探がしまはつても、長い間、見なれた、壺や、盃や、皿が、姿を消してしまつて、棚の上がさびしかつた。しばらく、私は、室の中に坐つたまゝ茫然としてゐたのであつた。

押入の隅に、まだ二三の陶器が殘つてゐなかつたなら、そして、またあの正直者らしい屑屋の爺さんが、たま〳〵戸口から顔を出して、

「何か、ご不用なものはありませんか」と、言つて聞かなかつたなら、私は、父の殘して置いた、これ等の美術品を賣拂つてしまつたことに對して、また、年の若い骨董屋に、極めて安い値でやつてしまつたことに對して、後悔をせずにすんだにちがひない。

「こんな、皿が二三枚あるが、持つて行きますかね」と、私は、屑や、空罎をやつた後で、附加へて言つた。

爺さんは、懐ろから眼鏡をだしてかけて、私の渡した皿を手に取つて眺めてゐたが、びつくりしたやうな顔付をしながら、

「結構なお品でございますが、まだ、他にも、おありなさるのですか？」と、言つた。

「まだ、澤山あつたのだが、みんなこの頃、拂つてしまつた」

「へえ………？」

爺さんは、しばらく訝かしげな眼付をして私の顔を見つめてゐた。

「あの、あなた樣が、お集めになりましたので？………」

「なに、死んだ父が、好きなもので、集めて置いたのです」

「あ、左樣でございませうな」と、爺さんは、感歎の溜息を洩らした。そして、懐ろから、財布を出して、いつか私が年の若い男に、賣つたよりは、もつといゝ値を僅か三枚程の皿に、しかもその色だつて汚たならしい古い皿のために拂つたのだ。

「こんなに、高く買つて、お爺さんは、それで儲かりますかね」と　私は、多少心配を覺えたので聞いた。

「どういたしまして、いまでは、なか〱こんな品は、容易に手にはいるものでありません。私も、この年になるまでこの道のために儲けたこともありますが、また、貧乏もいたしました。どうしても、好きですと自分が惚れ込んでしまひまして、目が見えなくなるもので、結局損をするのがほんたうです。しかし、かやうなお品は、いま、いくら金を出したからつて、すぐに手にはいるものではありません」と、爺さんは、答へた。

私は　二三日前であつたが、もつといろ〱あつた品物を、みんな他の骨董屋に、僅に、この三枚の皿の値段よりも

安く賣つたことを話した。すると、爺さんは、しばらく默つて、感慨に耽りながら頸を振つてゐた。

私は、爺さんが出て行つてしまつた後で、はじめてこの間は、取り返へしのつかない、愚かなことをしたと悟つた。どうかして、私は、あの男から、先日賣つた品物を　たとへ賣つた時の倍の價格を拂ひ戻してもいゝから、取返へされないものかと考へた。それでなければ、また、何となく、死んだ父に對しても氣がすまぬやうにさへ思はれたのであつた。

私は、あの男の店へやつて行つた。一度目には、居ないと言つた。二度目に、男を店頭に見出して、取戻しの話をすると、男は、あの中のある品は、すでに賣れてしまつたと言つた。あとのものも、いま自分の手許にない。他所に預けてあるから、そのうちに行つて持つて來ようと答へた。

私は、男の言葉を信じた。その後、たび／＼その店へ取返へすために出かけて行つた。けれど、ある時は、男は留守であると家の者が言つたり、たま／＼男が店にゐる時は、まだ先方へ行く暇がなかつたと男は答へた。私は、かうするうちに、この男が悪い人間であるやうに思はれて來た。嘘を言つたり、他人を騙ましたりするのを格別何とも思つてゐないらしい。憎むべき人間であるやうに思はれて來た。

現社會にあつては、どの商賈でも欺瞞といふことは、免かれない事實であると知るけれど、あまりに、この男の良心のないやり方に對して、私は、默つてゐられなかつた。このことが、私自身に關係したことだからばかりでない。恐らく、何人の場合であつても、私は、かういふ人間を敵視せずにはゐられないのだ。

どんなに醜悪を感ずるやうなものでも、たゞそれ一つの存在が眺められた時には、それには相當な理由が見出されることによつて、或は許容される場合があるかも知れないけれど、純眞無垢なものとそれとが對比された時には、極度の

憎悪が抱かれるのである。私は、心の目になつかしい、あの青い地平線に、消えかゝる赤い船と、昔の彼地の風俗などが描いてあつた和蘭皿や、水色の翡翠の珠や、また卵色の鈍光を放つた盃などの姿を思ひ起すことによつて、美の純眞を蹂躙し、死んだ父の愛玩品を侮辱し、私の心持を甚しく傷付けた、若い骨董屋のしたことを默つて、このまゝに過してしまふ譯にはいかなかつた。

私の胸には、復讐しなければ、氣が濟まない、少なくもそれに近い憤りの念が燃えたのであつた。

天鵞絨のやうな五月の季節になつた。私は、子供の時分、父といつしよに住まつてゐた家を思ひ出した。そして、程隔つたところにあつた小川を記憶から蘇み返へらさうとした。いま頃になると、水がなみ〳〵として、ゆるやかに流れるのである。雨の後などには、その兩側の岸に咲いた、赤や、白や、紫の花が、ちやうど星のやうに、強い日の光りに照りつけられて、蝶が輝やかしい大氣の中で跳るのが見られた。また、こんもりと綠色から、黒ずんだ青葉に移りかけた木立の影が、しつとりと重々しげに、水の面に姿を落してゐる。私は、その時分、小川の邊りで遊んだ光景をいつまでも忘れることができない。私は、水の上を覗いて、記憶にもたしかでない、母の面影を思ひ出さうとした。そして、どんなに憂愁に囚へられたであらう。走る、小さな魚の影が、箭を放つたやうに、水の中を往來したのであつた。

私は、いつまでもこの時分の季節を愛するが、またこの頃になると、血の裡に隱れてゐた、原始的な感情や、野性が、悩やましいまでに狂ひはじめるのを覺えずにはゐられなかつた。

黄昏は、物寂しい通りを步るくと、垣根の隅の處に、紫の鈴の如く咲いた桐の花が、甘い匂ひを漂はしてゐる。車の上には、毒々しく感ずる程、西洋花の鉢植にしたのを積んで、植木屋が、夜の縁日で商ふために、遠い道を引いて行くのを見た。

晩春の夜は、黑耀石のやうに、艶やかに、しかも暗かつた。私は、この闇の下には、牡丹が咲いてゐると思つた。なた、どこかの窓の下では女が、長い黑い髮を解いたり、梳いたりしてゐると思つた。また、狹い堀割の水を分けて、カンテラを點した船が漕いでゐると思つた。こんな中世紀的のロマンチツクな幻想に耽る一方に、私は、また、青い瓦斯や、電氣の燈火に、夜を晝のやうに明るくした停車場があり、その驛內の線路には、白い蒸氣を吐き出して、汽車が出發しかゝつてゐる。それに遲れてはならないと、驅け附けて乘り込む旅客の姿を思つた。

街へ出ると、濃淡の鮮かに混つた色彩を若い肉體に着けて、女が、男といつしよに快活な歩調で歩るいてゐた。また、女同志が群つて笑ひながら行くのや、女も、男も、たゞ一人づつで、物思ひに耽りながら、右を見たり、左を見たりして歩るいてゐるのや、繁華な巷に近づくにつれて、ます／＼人間の黑い波が蛇のやうにのた打つてゐた。

空は、濕氣を含んで、暗かつたが、道幅の廣い往來の上には、兩方の商店から流れ出てゐる燈火が、黃色い、柔かな絨壇を敷いたやうに、彩つて、人々のさま／＼な足は、その上を踏むのであつた。

私は、カフエーにはいつて、街路の方に近い場所で、圓いテーブルに對つて、腰をかけながら、苺の實を白い皿の中で、匙で潰してゐた。赤い血のやうな液が搾り出された。その液は、濃厚な白い牛乳と溶け合つた。私は、同じカフエーへは、三四回もはいつたことがあるので、ボーイ等は、私の顏を知つてゐた。

私の傍に來て腰をかけた、女のボーイは、圓顏で頭髮のうすい、全體からいつて、豆腐のやうな感じのする女であつた。私は、この女を嫌ひもしないかはり、また好きもしない。何とも氣に止めてゐない。私が、ちよつと見た時から、好きに思つたのは、おきぬといふ、痩形の脊のすらりとした、眉毛の濃い女ボーイであつた。何か、この女には、私の胸の裡に隱されてゐる、感情の絲に響くところがあるやうな氣がした。私は、ちやうどカーネイションの花がコツプに

挿してある、あちらのテーブルに、今日は、彼女の姿を見出したのである。私は、其の方へ臉を向けて、ちつと其の女の顔を眺めずにはゐられなかつた。

彼女は、また、私が、見てゐることを敏感に、氣付いてゐた。そして、吸ひかけてゐる煙草を唇から離して、白い指の間に挾みながら、こちらを向いて、笑顔を送つて、挨拶をした。私は、たとへ、これだけでも、心の中に滿足を覺えたのであつた。

よく磨いてあるナイフは、燈火の下で、光つてゐた。私は、それで、脂切つたビフテキを斬る時にナイフを見ながらさう思つた。私の頭の中には、いつか、女のことなどはなかつた。人間は、自分等よりは、ずつと大きい動物を殺して、其の肉を喰つてゐるといふことを考へてゐた。そして、たゞ、其の肉の味を好むばかしでなく、いつともなく、この血腥ひ臭ひをたまらなく好きになるのだと考へてゐた。

ほんたうに矛盾してゐる。いろ〳〵な美しい花が咲いたり、果物が實つたりする、この五月の夜に、かうして、ある處では、同じ生物である、動物の肉を喰つてゐるといふことは？　しかし、人間の社會だけでは、決して、其れを不調和には感じてゐなかつた。

もつと人間よりは、高尚な、もしくは、人間から虐待を受けてゐる動物が、この有様を見たら、何と言つて驚くだらう。けれど、人間にとつては、こんなことを考へることすら、馬鹿げた空想に過ぎないのだ。

私は、テーブルから立ち上つた。圓顔の女ボーイは、入口まで送つて出た。そして、彼女は、しばらく、その扉のところに佇んで、外の人間の流れを眺めてゐた。やがて、私は、黒いうねり動く波の間に紛れ込まうとした時に、あの骨董屋に出遇つた。

こゝで、偶然にも、この男と顔を突き合はしたことは、意外であつた。あれから後、幾たび私はこの男の許へ足を運んだらう。そして、私の胸には、この男のどことなく不純な顔付が、焼印のやうに刻まれてゐた。私は、カフェーで、僅か二杯ばかしのウヰスキイしか飲んでゐなかつたのだけれど、私を煽動するには、これだけの酒精が充分であつた。私から、彼を呼び止めた。骨董屋は、自分よりは背の低い男と二人連れで歩いて來たのだ。

「はやく、あの品物を取り戻したいのだが……」

私は、水色のどんよりとした翡翠の珠と赤い船の描いてある和蘭皿を幻に見ながら言つた。私の死んだ父に、それをば愛してゐたのだ。

「どうも、一旦お放しになつたものは、あとでかれ、これおつしやつても困るのです」と、詐師のした顔で圖々しく見て、骨董屋は落ちつき拂つてゐた。それに引きかへて、私は、耳が鳴り、心臓はどき〳〵としてゐた。

「だから、賣つた時の二倍の値で取り戻さうといふのぢやないか？」

「實は、みんなもう片がついてしまつたので、他の人の手に收まつてしまつたのです」と、骨董屋は言つた。

「この間は、賣れたのは、二三品で、あとは殘つてゐるといつたぢやないか？」と、私の聲は、高くなつた。

「いゝえ、他の仲間が持つて行つたと言つた筈です」

「君は、人を騙ますんだね」

「失敬な、詐欺や、泥棒はいたしません。これだけの代金で賣つていたゞきたいと言つて、あなたが承知されたから、持つて來たんです。たゞでもらつて來たのぢや、ありませんぜ。ちやんと代金を拂つて持つて來たんですぜ」

「それに分つてゐる。しかし、君は、騙ましたんぢやないか？」

「なに、失禮なことを言ふない！　いつお前みたいな青二才のものを塵一つでも騙ましたか？　町の眞中で人聞きの悪いことを言ふない。ちやんと金を拂つて持つて來た品物だ、貴樣に賣らうが、賣るまいが俺の勝手なんだ。文句があるけえ、いつだつて喧嘩の相手になら、なつてやらあ」

青腫れの男は、腕を捲り上げて啖呵を切つた。私は、もう、その言葉を半分聞いたばかりで、用捨ができなかつた。男が、まだ言ひ終らないうちに、拳固は、男の顏の上に飛んだ。男は、殆んど本能的に後方へ身を退いたので、私が、腕いつぱいに籠めて投げ付けた力の半分も、彼の肉體には應へなかつたが、それでも、男は、出突を折られた。もし、彼が狂ひ出したら、本當の喧嘩になつたのだ。私は、刹那に頭の中で、もしもの時は、下駄を脱いで、其れを唯一の武器にしようと思つた。

彼と連れの男は、二人の間に割つて入つた、この騷ぎは、忽ちあたりに知れた。見たり、聞き付けたりして、集つた人間で、いつしか周圍を黑く取り卷いた、そして、彌次馬は、口々に叫んだ。私は、この上もう自から爭ふ氣持がなかつた。相手が打返へして來たならいざ知らず……相手はいつしか默つてしまつた。

私は、正義の前には、死を怖れないだらう。けれど、自分から、先に暴力を用ひたといふことに對して、言ひ知れぬ羞恥の念が、すぐに私の良心を咎めて、氣を弱くさせたのだ。

「まあ〳〵私に、お委かせ下さいまし、あなた方は、私共みたいに雜樂多を買つたり、賣つたりする人間などとちがつて、學問のおありなさる方なんです。それが、こんな往來で外聞が惡るうがす」

小男は、私を、この場處からはづして、歩るきながら話さうとした。私は、身のまはりに群集が附いて來ることから、一刻も早く逃がれようと思つて、仕方なしに先刻出た、カフエーに入つた。小男は、私について來たが、此處にゐる人

達で喧嘩のあつたことを知つてゐる者は、圓顔の女ボーイの他には、あまりなかつたやうだ。少なくも私は、みんなの顔を見廻はしながらさう思つた。

「珈琲二つ」と、私は、傍に來合せたボーイに言つた。そして、はじめて、小男の顔を凝視した。臆病氣な小さな眼と、白毛まぢりの短かい髭と、口のまはりに無數の小皺を持つてゐる、その顔を私は見た。

「僕は、何も言ふことがないのだ」と、私は、この男が、折角、仲にはいつてくれたから、そして、彼が、後からついて來たから、からしてテーブルにいつしよに腰をかけたもの丶、別に、私は、改めてこの男に對つて話さなければならぬ言葉がなかつた。

「旦那、いつたいどんなかゝり合があつたのでございますかい？ 私が、よく伺つて置きませう。そして、私の力で、できますことなら、話の道を付けてさし上げやしよう」と、男は、小さな眼を光らして、低い聲で私の機嫌を窺ふやうに言つた。

「品物を戻してくれる腹がないものなら、なにも、それ程までにして、取り返へさなくていゝのだが、あまり、あの男は、人を騙してゐるから怒つたのだ」

「は、は、陶器なんでげしたら、隨分、筋の通つた上手の小皿などが出ないことゝありません。何、少しお待ち下さいましたら、私が、いゝのをお格好でお世話いたしませう。先達も、伊萬里の極く古いのが、無瑕で五枚揃つたのが出ました」と、男は、言つて、珈琲を匙で掬つてすゝつた。

「なに、死んだ親父が持つてゐたのだから、取り返さうと思つたのだ」

「へ、へ。ご尤もでげす。そして、彼奴に幾點ばかりお拂ひになりましたので…………」

この生活に虐げられたやうな、感じの悪い小柄な男は、珈琲を匙で頻りに掬つてすゝりながら、貫に、一面識もない私に、いろ〱なことをたづねた。私は、この男が、あの時、仲裁にはいつてくれたばかしに、かうして席を列ねたのだ。そして、この喧嘩の起りは、私が、少しも悪くはなかつたことを、この男にだけでも、話して置く方がいゝやうな氣がして、不快を感じながら、問はれるまゝにしやべつたのだ。

「皿や、盃や、壺や、それに、翡翠の珠など……いろ〱あつた」

「なる程、それで、吉澤に、いくらでお拂ひになりましたのでげす。へ、あの男は、吉澤といひます」

私は、實に、それ等が、極めて安い値であつたことも有の儘に告げた。

男は、飲み乾した、空のコップの中に匙を突き差して、手持ち無沙汰にして、あたりをおろ〱眺めまはしてゐた。

そして、片手で、口のまはりの短かい髭を逆さに撫でながら、

「お安いと思召のも、ご無理はありませんが、陶器ばかしは、傷がありまし（た）は、どんな結構なお品でも、それはお値段にはなりません。また、よく吉澤にも、私から話して見ませう。戻せる品なら、戻すとして、まあ今夜のところは、どうぞ、さうご立腹なさいませぬやうに…………」

小柄の男は、はじめのうちは、媚び諂ふやうな様子を示したが、こちらが、取合はぬと悟ると急に、態度を變へてもう心がこの場處にはないやうに、厭味がましいことや、白々しいことを言つて、いつしか席を立つと、挨拶も碌々せずに出て行つてしまつた。

その後で、私は、しばらく、靜かに、今夜のことを思ひ返へした。骨董屋が罵つたこと、そして、私が、憤然として、彼の顔を擲つたこと、…………また、なんで、あの小柄な男が、こゝまでついて來て、はじめのうちは、頭を低く下げ

たり、語つたりしたか？…………彼等には、私達の知らない、生活の哲學があるやうに感じられた。

「どうかなさつたの？」

私の前にきて腰をかけたのは、おきぬであつた。そして、前の圓顔の女ではなかつた。急に、私の顔が、熱くたつたのを感じた。私は、どういふものか、この女に對すると、理由なしに一切のことを打開けて語つてしまふやうな氣持になつた。

彼女は、卷煙草を唇に當て、俯向き加減になつて聞いてゐた。客に勸められて、酒を飲んだと見えて、頬の色が紅味を差して、一層美しく姿を輝やかしくさせた。

私は、いつ、どこでも、自分の子供の頃のことを思ひ出すと、そして、父が、さびしい生活を送つてゐた有様を考へると、もう現在のことは、何も頭の中には映らないのであつた。全く、夢幻の世界へさ迷ふのである。永久にその世界に、私達からも　またこの現實からも遠い處になつてしまつたけれど、曾ては、この刹那、存在するやうな現在であつたのだ。私達は、現在を見、また感じ、面接しながら、なほ、これを捉へて、しつかりと握ることができないのだ。やがて、この現在は、去つてしまふ。けれど、たゞ、頭の中にだけ記憶することができるのだ。記憶されゝ限りは、失はれたといふことができないであらう。

「水色の、いゝ翡翠の珠だつた。それに、あの和蘭皿だつて、なか〳〵いゝ皿だつた。ほんたうに、みんな、やつてしまつて惜しいことをした。取り返へしのつかないことをした」と、私は、彼女に、自分が思つてゐることを話した。

彼女は、ぢつと一點を見詰るやうな目附をして、私の話を聞いてゐた。その眼の中には、彼女以外には、何人もはかり知ることのできない神秘の世界がきらめいてゐた。彼女の感情が、そこでは細かな火花となつて散り、また理性は氷

の破片のやうに浮沈してゐる。

「やつてしまつたのなら、もういゝぢやないの？　面倒臭い目をして、わざ〳〵取返へさなくつても、まだ、あなたのいくらも氣にいるものが見附かりますわ」

彼女は、私を諭すやうに、「こんなことに心を勞するのは、ほんたうにつまらないことだといはぬばかりに言つた。全く、思へば問題にするに足らないことであつた。私にさういふ氣が、彼女の言葉を聞いてゐるうちに起つた。それにかゝはらず、私は、何んで大騷ぎをしたらう？　そして、街の眞中などで喧嘩をしなければならなかつたか？

もし、あの正直さうな年寄りの屑屋が、私に、父の殘して置いた、陶器の價値について語らなかつたならば、私は、再び、あの骨董屋へ取返へしに行くといふ氣などが起らなかつたにちがひない。しかし、それであるから、私が、慾のためばかりに、取返しに行つたと言ふことができない。もとより、私のしたことは、矛盾はしてゐるが、私は、また、それ程の價値のある品物を、欺かれて安く賣つたといふ後悔があつたのである。

いづれにしても、私は、問題とすべき筈でなかつたのを問題にしてしまつたのだ。骨董屋は、うまく騙まして、近來にない堀出物をしたとでも思つてゐたかも知れない。そして、彼等は、それを正當な利得だと主張をなし得るのだ。私が、みんなで、彼れ獨りだけを特に惡人と言つて責むることができよう？

「死んでしまつた人の遺物なんて、さうたいして意味のないものね、そんなものがあるばかしに苦勞をするなんて、つまらないことよ。死んだ人は、もうゐないぢやあいの、それだのに、その人のためを思ふなんて？　自分が思ひ出すのはいゝわ、けれど、品物なんかに苦勞をするのは、ほんたうに馬鹿げた話よ」

彼女は、自分の指にはめてゐる指輪をいぢりながら言つた。眞赤なルビーが、それにはいつてゐた。燈火の光りは、

冷かに、燦爛としてこの石に輝いてゐた。

「君は、新しい女だ」と、私は、彼女に言つた。

「さう？　あなたは、さう思つて」と、彼女は、煙を吹きながら、正面に私を見て、につこり笑つた。

私は、今夜、ビールに、サラダを食べる位の金はまだ懐中に持つてゐた。そして、人を擲つたといふことが、やゝもすると意識に上つて、氣持を滅入らした。やはり、私は、また酒を飲むことになつた。

私は、おきぬの指に輝いてゐる赤いルビイと、あの水色の遠い世界に消えて行く記憶のやうな感じのする翡翠と、どちらの色を、自分は好きか？　と、心に問うたのであつた　何といふ眞赤な、生活の冒険と、若やかな紅い情慾をそゝるルビイの色であらうか。

「美しい、ルビイだね」

私は、彼女に言つた。

「これ？」と、彼女は、白い柔かな指に、喰ひ入つてゐる金の指輪を片手の指頭で抜いた。

「ほんとうに、眞赤ですわね。あなた、この石がお好きなの、あなたにあげませうか」

私は、遽かに、彼女の言葉を信ずることができないやうな氣がした。

「もう、要いりませんの、この指輪を妾にくれた人は、死んでしまつたのですもの」

彼女は、さびしく笑つて、その美しい星のやうな指輪を自分の指から抜いた。

時日は、経過したのである。

彼女が、カフェーに見えなくなつてからは、そのカフェーへも、また、他のカフェーにも、私は、やがて行かなくなつた。私の思想が變化したのだ。

その後、街を歩るいてゐる時に、よく後姿が、彼女に似てゐる女を見て、もしや、彼女ではないかと急ぎ足になつて、追つたことがあつた。また、ある日の夕方、病院の下を通行すると、三階の窓から、外を眺めてゐる、若い女の顔がさしく彼女のやうに思はれて、歩みを停めて呼んで見ようかと躊躇したことがあつた。それは、婦人科の病院であつたが、彼女が、もし金持の男とでもいつしよになつてゐるなら知らぬこと、あゝして、やはりこの廣い都會にゐて、街から街のカフェーを渡つて歩るいてゐるのであつたら、彼女であらう筈はないのだと思はれたこともあつた。

彼女の姿を思ふと、私は、ある哀しみを覺えた。そして、胸が壓せられて、惱みを感じたのであつた。しかし、これは、獨り彼女ばかりに對する愛とか、戀とかいふべきものではなかつたらう。そして、やさしい、若い、流浪の女に對する、私が持つた、ある惱みと、哀しみともいふべきものではなかつたらうか？

なぜなら、私は、當時、一人の女性のために囚へられたり、また、結婚といふ事實によつて、生活を現在よりも複雜にすることよりは、曾て、父が抱いてゐた思想と主義のために、働かなければならないと決心をしてゐたからだ。

とは、言ふものゝ、私は、蒼み渡つた、都會の建物の上に垂れかゝつた夜の空を見ると、何處かで華かな燈火の蔭で、笑つたり、動いたりしてゐる、白いエプロン姿の彼女を眼に浮べずにはゐられなかつた。

私には、父と同じように、時に、ニヒリスチックな、成行に身を委かせる氣持と、また、自由を欲することから、アナーキスチックな情熱を求めようとする考へを抱くことがあつた。しかし、私は、それがために、父の晩年が、さうであつたやうに、デカダンになることを怖れて、自から、理性を鞭打つことにつとめたのだ。

自然は、また、芝居を時々人間にさせるものだ。ある日、私は、何か考へたがら歩るいてゐた。誰でも、何か頭の中に、考へずにゐることはなからう。全く空虚でゐるといふことはあり得ない。殊に、私にあつては、外部の刺戟――たとへば、外部の色彩や、音響や、煩はしさ――といふものから離れては、全的に人生について、もしくは、人間の生活について考へることができない。たとへ、考へようと思つても、却つて人生といふものから、ます／＼遠ざかるのを知るのである。人間は、眞理を求めてゐるには相違ないが、いつでも科學的に生活してゐるものでない。

電車の通つてゐる廣い往來を歩るゐた。しかし、其の道は、割合に人通りの多いところでなかつた。不意に、女の聲で、うしろから私を呼び止めたものがある。誰かと思つて、振向くと、若い女が、電車の軌路を横切つて、こちらに驅けて來た。大空は、眩ぶしかつた。そして、すぐ、眼の前に女は迫つても、その誰であるか、よく分らなかつた。女は、なんでもよく私を知つてゐるやうに、笑つて近づいて來ても、私は、それに對して、笑つて見せることができなかつた。

「しばらくですこと………」

女は、私の前に立つて、丁寧に挨拶をした。人違ひではないかと危ぶんでゐたが、私は、やつと思ひ出すことができた。以前カフヱーに、度々行つたことのある時分、よく物を言つたりした記憶から一切を呼び起した。その時分、頭髪のあまりよくなかつた、間淵のボーイであつた。さう思つて、はじめて、なつかしみの瞳を投げながら、彼女を見ると、職業上あの頃は、派手な着物を被てゐたのが、全く、質素な風をしてゐるので、今は、すでに生活が變つてゐることに氣付かれた。

「あゝ君だつたか？　ちよつと思ひ出せなかつたよ」と、私は、言つた。

「さうでせう、だけど、妾は、すぐお分かりしましたわ、だしぬけにお呼びして、失禮でないかと思ひましたけど、ぜひお聞きしていたゞきたいお願がありますの…………お手紙を差上げようかと思つても、お所が分らないのでせう、ほんたうに、お目にかゝれて、嬉しかつたわ」

彼女は、袂で、口を隱くして、目ばかり出しながら言つた。何となく、それさへ面羞かしさうに、パラソルを傾けて、街頭に對ひ合つて立つてゐる二人の顏を遮るやうな眞似をした。

私は、常に、女といふものが、なんでもないやうな場合にも、男では、ちよつと想像の付かない、羞恥を感ずることから、なよやかな姿態を造るのを見て、女といふものは、自然にかういふ風につくられてゐるのか、それとも階級的因習から、いつしか、かうされてしまつたのかと疑ひを抱かざるを得ない。なぜなら、いつか女性が解放されて、兩性が同權を主張する曉に、なほ、女にかうした容姿が存在してゐるなら、私は、何がために自然が女子にのみ、多分の羞恥心を賦與したか、其の無意義を解するに苦しむからだ。

「僕に？…………」と、私は、言つて、どんな願が、この女にあるだらうかと考へた。

「妾、あなたのお書きなさつたものを拜見しましたのよ、そして、いつか、Mでご講演なさつ時にも、聞きにまゐりましたわ。それから、ぜひ一度お目にかゝつて話を聞いていたゞきたいと思つてゐたのです」

私は、彼女が、いつから、かうして思想的に動いて來たのだらうかと疑つた。思ひがけないことだつた。そして、彼女ばかりでない、恐らく、一般に時代が動いてゐるのだといふ氣がしたのであつた。彼女はたゞ、その流の上に乘つてゐる一人であるに過ぎない。それであつても、喜ばしい、また、考へると怖ろしいことでもあつた。

「いつから、君は、そんな生活に入つたのだね？」

「ほ、ほ、あすこを出ると、すぐ家庭を持ちましたの、いづれお伺ひしてから、いろ〳〵お話し申上げますわ、……ええ、あなたのとこへお伺ひしても、いゝでせうか」と、彼女は、顔を赤くしながら聞いた。

「あゝ、來ていゝとも」

私は、彼女に、宿所を書いて渡した。

「きぬちやんから、たよりがあるかね」

おきぬより、たしか彼女は、前にあのカフエーから出た筈であつた

「いゝえ、ちつとも」

「その後の樣子を知らないの？」

「えゝ、分りませんのよ」

二人は、こんたことを、路上で話をしたが、やがて別れたのであつた。私は、足先を見ながら歩るいてゐた。曾て、ある婦人雜誌に、新社會を建設することを助けなければならない。これからの女性について、時事問題から、論評をし自覺を促したのを彼女が讀んだと思はれる。この女は、實に、あの頃、自分の眼には面白味のない、平凡なボーイにしか過ぎなかつたのだ。振返へると、反對に行つた、彼女の姿は、もう見えなかつた。そして、眩しい光線の裡を、黃色な電車が走つて來た。

二三日後に、私は、女からの手紙を受取つた。——先日は、途上でお目にかゝつて失禮しました。あの日、妾は、子供をつれてゐなかつたけれど、も　今年三つになる女の子があります。あの日は、齒醫者へ行くために、近所の知り合へあづけて出たのでした。明後日お伺ひしたいと思ふが、ご都合はいかゞですか——と、いふやうなことが認めてあつ

た。そして、彼女の住所の下に、私は、安川とめ子と書いてある名前を見出して、あの女は、とめいふ名だつたかな、と思つた。

彼女の住んでゐる處は、そんなに、こゝから遠く離れてはゐなかつた。ちやうど、彼女の來ようといふ日には、午後から出席しなければならない會があつたので、無駄足をさせては氣の毒だと思つて、私は、更に面會する日を指定して彼女に返事を出すことにした。自分で、ポストへはがきをいれて戻つた後で、私は、あの容貌から、名前まで、特別に目立ちはしない、いはゞ一個の平凡な女であるが、かうして、思想に動揺を感じて、眞理を求めようとする。それについて、しばらく、考へさせられずにはゐられなかつた。

民衆は、馬鹿ではないのだ。智識のある者だけが、いつでも人生や、生活について考へてゐると思つては間違つてゐる。民衆は考へさせられるやうな境遇に置かれゝば、いつでも自覺するであらう。そして、強くなることもできるのだ。……

彼女が、私に、遇ひに來た時は、子供をつれて來た。この女が、夜々、燈火がつく頃は殊に華かであつた、あのカフエーに勤めてゐた女であるかと、疑はれた程、堅氣な身形に造つてゐた。しかし、不注意な瞬間のもの言ひ付きや、笑ひ付に、その頃の生活が、ありありと浮ぶことがあつた。

カフエーにゐる時、彼女は、そこへたびたびやつて來る一人の會社員と親密になつた。彼女は、其時分、もつと幾人かの男をも知つてゐて、撰び得る自由はあつたのであらうが、その男を親切な人間だと思つて、つひに約束をした。その男は、三四年前、ある專門學校を卒業して、當時、會社に勤めてゐたので、家を持つと彼女は、すぐカフエーを出て、その男の許に走つた。

その時から、約三年間は經つたのであるが、彼女は、男といつしよになると、ぢきに妊娠した體であつた。

「みんな妾が惡いんですわ。今さら誰を怨んで見ようもないんですけど、あの時分、こんな人とは思ひませんでした。それや、男の人といふものは、誰も我儘な位には思つてゐましたけど、うちの人のやうに、自分の都合のいゝことばかり考へたり、自分のものばかり大事にする人はありませんわ。その癖、妻や、小供のことなんかちつとも考へないんですもの………」

子供は、あたりに、散らばつてゐるものをなんでも玩具にして遊んでゐたが、すぐに一つのものには飽きて、それを捨てるとまた他のものを持たうとした。彼女は、それがために、その方に氣を配つて、子供の、おとなしくしてゐるやうにつとめたけれど、無駄だつた。子供は、こんどは、障子の骨につかまつて立つと、小さな指先きで、紙を突つかうとした。

「あ、そんなおいたをしては、いけません」と、まだ年の若い母親は、驚いたやうに言つて、すぐに子供を自分の膝の上にのせて、胸を開いて、白い乳房を子供の口に含ませた。

「かあいお子さんですね」と、私は、無邪氣な子供のすることを見守りながら言つた。

ほんたうに、子供は、よく晴れた空のやうに、明かるくて、少しも汚れてはゐなかつた。人間には、みんな、誰でもこんな時代があつたのだと思ふと、醜惡な社會が存在するには、何等か、そこに誤れる原因がなければならなかつた。

彼女は、かうして夫について、好い感じを抱いてはゐなかつたやうだ。しかし、この子供は、彼女ばかりの分子からではなかつた。自分が厭ふ男の血をも分けてゐるのだけれど、やはり可愛いくてたまらないやうな、母らしい態度が見えた。

「爽、それでどうしようかと思ふんですの、いまのやうな家庭にゐましては、何にもできないんですもの。まだ年が若

いのですし、いまのうちに別かれてしまつて、妾は、なにか自分でして、もつと意義のある生活をしたいと思ひますわ。だけど、うちの人は、さう言つたからつて、離縁を承知してくれる筈がありません。仕方がないから、妾、逃げようかとも思つたのですけど、妾の考へがいゝか、惡いか聞いてもらふやうな人があつたらと思ひましたのよ。妾、あなたのお書きになつたものを拜見したり、お話を聞いたりして、眼を開けていたゞきましたのですから、どうかあなたのご意見をお伺ひしたいと思つて、まいりましたのよ」

「君は、家を出たら、どうやつて生活をするつもりだね。そのことを考へて見たかね」と、私は、すぐに彼女の上に襲ひかゝる衣食の心配について思つた。そして、二たび彼女は、カッフェーに身を晒すつもりだらうか？

「妾、どんなことでもしますわ」

彼女は、この時、快活な調子で答へた。

「どんなことでもといつて、職業にもよるぢやないか。また、カフエーへ出るつもりなのかね」

私は、かう言つて、彼女の顏を見た。彼女は、面羞かしさうに、俯目になつた。

「もう、こんなお婆さんになつて、あんなところでは、雇つてくれませんわ」

「そんなこともないよ」

「あゝいふ職業は、よくないことでせうか？」と、彼女は、眞面目にたづねた。

私は、ちよつと考へて見た。そこには、幾つものにやけた男の顏が、一人の若い女を取り卷いて、幻になつて浮んだ。猥らな女の笑ひ聲が耳にきこえた。

「さあ、君は、どう考へるかね」と、私は却つて、彼女の心持を知りたいと思つた。

「妾、どんな職業をしたつて、自分さへ、しつかりしてゐたらいゝと思ひますわ。しかし、妾、もう二度とあんなことはいたしませんわ。たとへ女中になつても、眞面目に働きますわ」

「その決心なら、家庭にゐたつて、差支へないぢやないか？」

「いゝえ　駄目ですわ、家庭にゐたんでは、考へることすらできませんわ。それはちがふと思ひますのよ。どんなに、苦しんでも獨りにならなければ、新しい道は歩るけないと思ひます」

「子供をどうするつもりかね」

私は、この女が、愛してゐる子供に對して、どう考へてゐるか、知りたかつた。

「妾、いまゝで、子供のことを思ひますと決心が鈍りましたの、しかし、つれては行かれませんから、可哀さうですけど、置いて、妾一人で行きますわ。うちの人は、子供は、なんといつても可愛がつてゐますから、安心して、いゝと思ひますの」

私は、しばらく考へた。それから、彼女に、言つた。

「君は、子供まで捨て出る？　それで自由になれると思つたら、間違ひなんだよ。其日から、子供を犧牲にしたゞけの意義ある生活をするやうに、目に見えない責任を負はされたことを忘れてはならんのだ」

「えゝ………」

彼女は、つひに默つて、俯向いた。

子供は、泣きだした。彼女は、あまりおそくなつてはいけないから、そして、夫の會社から歸らない間に戻らなければならぬといつて、私の許を辭したのであつた。

その後、彼女から、どんな本を讀んだらいゝか問ひ合はせて來た。高い書物は、買はれないから、もし夜店にでもあつたら探がすつもりであるなどと附記してあつた。これに對して、私は、氣付いたやうな書物を知らしてやつたが、むしろ、それよりか、眞實に生きるためには、信念が必要である。人間は、男でも、女でも、社會的の生産に從事しなければ、民衆の一人としての義務を果してゐるのではない。そして、女は、殊に服從されてゐる女性全體の解放と幸福獲得のために協力しなければならぬだらう。つまり、自分達のために、その目的を遂げようとするには、自分達の一人、一人の力を待たなければならないことを書いてやつた。

空が曇つて、窓から外の景色を見ると、若木が風に揉まれてゐる日であつた。彼女は、突然、私をば訪ねて來た。そして、其時は、子供をどこかに預けて來たと見えて、彼女は一人であつた。

彼女の顔は、青醒めて、内心に、甚しく惱みのあるのを現はしてゐた。私の前に坐つて、しばらく伏眼になつてゐたが、顔を上げると、眼はきらめいてゐた。

「炎、ほんとうに考へますわ。うちの人は、晩方會社から歸つて來ると、夕飯を食べてごろりと臥てしまふんでせう。本なんか、讀んだことなんかありませんの、たまに讀めば、講談や、くだらない小説かなんぞの載つてゐる雜誌位なもんでせう。もつと、お互に勉强をしませうよと言ひますと、生意氣な、俺は、一日、會社で仕事をしてきて疲れてゐるんだと怒るのです。いつたい會社つてどんな仕事が毎日あるんでせうかと、彼女は、かく語つた末に、私にたづねた。

「何會社ですか」

「紙の方の會社なんですよ」

「さあ、どんな仕事があるもんですか。私にも分りませんね」

「どうせ、いくらで賣るとか、買はうとかいふ位のことなんでせう。ほ、ほ、ほ、せめて妾にだけでも、夜の時間を自由に與へてくれゝばいゝのですけど、それもさせませんの。たゞ、女を、便利な器械にして置く氣でゐますの。どこへも出しませんし、一日、妾が、洗濯をしたり、縫物でもしてゐれば、うちの人は、機嫌がいゝんです。お前みたいな無學な者に、何ができるかと、何を言つても、頭から冷笑ひますが、妾は、一生懸命になるつもりでゐても、どうすることもできないのです。そして、子供が、茶碗を一つ破はしましても、お前が傍でみてゐてなんのこつた！といつて叱られますので、考へてみると、妾、今のやうな境遇では、全く奴隷もおんなじですわ」

私は、この話を聞いてゐるうちに、この女は、もはや、冷く醒めきつてゐるなと思はれた。そして、近いうちに、其の家庭に取返へしのつかない悲劇が生ずることも豫知されたのであつた。

「どこへ行きましても、おつしやつたことを決して忘れませんわ」

彼女は、最後に、かう言つた。

「もう歸るんですか。また、ゐらつしやい」

私は、どこやら、彼女の様子に、これが暇乞であるといふやうな感じがしたけれど、故意と氣付かぬ風をして、かう答へた。そして、立つて彼女を見送つた。

ある日、安川といふ男が、私の留守に來たさうだ。さう宿の者が私に告げた時、いよ〳〵彼女が、家出したなと悟つた。

晩方、二たび、その男は、たづねて來た。私は、ちやうどゐたので、面會した。神經質な、背の高い男で、私の顏を、疑ひ深い眼で凝視しながら口を開いた。

「いろ〳〵妻が、こちらに上つてお世話になつたさうです。實は、妻は、無斷で、家出をしましたのです」

男は、かう言つて、私の顏色が動くかと、それをば眺めた。私が、この場合、無關心であつたのは、むしろ當然のことであらう。

そのために、彼は、下手に出て、つひにこゝに來た目的を言葉に明かさなければならなかつた。

「先生のところへは、妻から、たよりがなかつたでせうか」と、彼は、言つた。

たとへ、たよりがあつたにせよ、それをこの男に敎へると敎へないとは、全く、自分の意志であることを知つた。

しかし、私は、たゞこの場合正直に言つた。

「いゝえ、何のたよりもありませんよ。いまはじめて、家出なされたことを知つたやうな譯です」

私が、かう言つたにかゝはらず、男は、なほ疑ひ深い、暗い目付を、私の顏の上から去らなかつた。

「隱れてお伺ひしたり、また手紙を差上げたりした先生のところへは、たよりをしなければならない筈ですがな」

彼女が、いろ〳〵言つたのは、この男についてゞあつたことが、思ひ出された。私は、獨り心の中でうなづきながら默つてゐた。しかし、最初は、この男を、彼女が愛したのではなかつたか？

「先生、どこへ、妻が身を隱したかお知りになりませんか」と、彼は、突然、調子を變へて言つた。それは、私に、全く、意外な質問に感じられた。

「知つてゐる筈が、ないぢやありませんか」

私は、かう言つて、彼の顏を、しばらく見つめてゐた。

忽ち、彼の瘦せた、神經質の顏色が變つた。そして、急に、彼は、バラ〳〵と兩方の眼から淚を落した。

「先生、妻が家出してから三日といふもの、私は、會社を休んで、途方に暮れてゐます。子供は牛乳も、飯も、食べないで、母を慕つてゐます。もう、涙が涸れてしまつたのか、あまり泣きもいたしません。小さな手や、顔がめつきり痩せてしまひました。私は、いぢらしくて見てゐられません。いまゝでは、毎晩、母親の懐ろに抱かれて眠つたものですから、やはり、夜になると泣いて仕方がないので、私は、外へ抱いて出て、家の前をいくたびも、子供の眠付くまで往つたり、來たりいたします。どんな鬼のやうな女でも、これを知つたら、子供のことを可哀さうに思ふでせう。私は、また今夜にでも家のことを思ひ出して、彼女が歸つては來はしないかと闇を透かしてあたりを見るのですが、どこにどうしてゐるものか、その後たより一つないのであります」

彼は、かう言つて涙を拭いた。私は、子供のいぢらしい姿や、男の心持を哀れに思はずにゐられなかつた。

「どんなにか、お困りでせう」と、私は、言つた。

「いや、全く困つてしまひます。子供がなければ、かうまで弱らなくてもすむのですが……」と、男は、眞に當惑さうな顔付をした。

しかし私は、思つた。女の心持を理解しなかつたことについて、彼は、悔いてゐるのでない。やはり自分や、子供が苦るしんでゐるから、はじめて彼女がなくてはならないことを知つたまでゞある。いつか、彼女が「まるで女を、調法な機械のやうに思つてゐるのですから」と、言つたのを思ひ出した。

かう考へると、私は、彼に、同情をしていゝものか、わるいものか分らなくなつた。

さらに、五六日も經つてから、彼が、二度目にやつて來た時は、一層其の様子が悲痛に見えて、何となく物淒いやうであつた。

「先生のところへ、はがきでもよこしたのでせうか？」

鋭い、神經質な眼を、私の顏に向けて、彼は、叫ぶやうに言つた。

私は、彼の姿を見た刹那、かう聞くであらうと豫期してゐたのであつた。そればかりでなく、私は、あまり彼と年も違はないのに、先生と呼ばれることが、何となく言葉の裏に、不純な感情が潜むやうな氣がして不快だつた。

「ありません」と、私は、たゞかう答へたばかりだ。私が、言ひ終るか、終らないうちに、はや、彼の暗い顏には、眼の中にきらめく涙が見えた。

「はあ――」と、溜息をした。そして、つゞけさまに彼は、言つた。

「たよりがありませんか。實は、搜索願も出したのですが、やはり分らないのです。もう、私はあきらめました。たゞゐる處さへ知らしてくれゝば、それで滿足をします……………」

「お分りになつたら、どうなさるのですか」

私は、彼が、あきらめてゐるといふことに對して、そのゐどころを知りたいといふことの矛盾を感じたのであつた。

「たとへ別れるにしましても、もう一遍遇つて、互によく理解してからにしたいものです。女の身が、この先どういふ風にしてやつて行きますか、それも案じられてなりません。私も、ほんたうに自分勝手でしたでせう、それはよく分ります。しかし彼女を愛してゐました。この愛が、どうして彼女には分らないのか、それが不思議でなりません。私の愛には今も變りがありません。これから先もできるだけの面倒は見てやりたいと思つてゐるのです。せめて、この心持が、彼女に通じたなら、きつと、彼女も、私の惡いところは許してくれるでせう。彼女だつて、さういへば、隨分だらしのないところがありました。たとへば、仕事をしかけて、そのまゝ眠つてしまつたり、戸棚の中に、物を腐らして置いた

り、缺點がないとは言へなかつたのです。一家の主婦となつたら、もつと經濟的に考へ付かなければならないものです。しかし、私は、そんなことを今更數へて、彼女を責めようとはいたしません。すべてを許してゐます。何事も子供までである間ですから、家庭を勝手に、破壞するなどいふことは、常識があつたら、できないことです。頭もしつかりしない癖に、いろ〳〵の新しい學說を生噛りするから、こんな失態が生ずるのです。新しい思想は、必ずしも健全ではありません」

私は、彼の言ふことを默つて聞いてゐるうちに、これが、世間一般の所謂、智識階級の持つ考へであるかと疑はれた。成程、まだ彼等は眠つてゐる。恐らく、ある者は、最後まで眠つてゐるかも知れない。男でも、女でも、少し考へのあるものは、ずん〳〵目覺めて行つて、彼等に對して、反逆を企てる譯だと思はれた。

「あなたは、ほんたうに、とめ子さんを愛してゐられるのですか」と、私は、聞いた。

彼は、私の言葉に、却つて呆れたやうな眼付をして、私の顏を見ながら、

「あなたには、私が、彼女をどんなに深く愛してゐるか、いまお話したのでは、お分りにはなりませんか？」

「精神的にですか」と、私は、問うた。

私は、彼に對して、かういふ言葉を使はなければならなかつた。

「もとより、精神的にです」と、彼は、答へた。

「そんなら、とめ子さんを自由にしてあげなさるのが、あなたの、一番愛することになるのです」と、私は、言つた

彼は、自分の耳を疑ふやうに、驚異の眼を見張つた。

「え、この儘に、知らぬ顏をしてゐれとおつしやるのですか。できません、私は、愛するからできません」

彼の言葉は、胸中の憤怒を押へ切れぬやうに、興奮して聞えた。

「ご勝手に、なさつたがいゝでせう」

私は、つひにかう言つて、彼を、追ひ歸さなければならなかつた。彼は、たしかに性格の破産者であつた。しかし、もう二たび、私の處に來ることはなからう。

北國のある地方の無産青年の集りから、私に、やつて來るように通知が來た。私は、行くことにした。この社會の半面には、かうして自滅し、頽廢した階級があるが、また、他の半面にはまさに、自覺し、一切を破壞して、興起せんとする階級がある。そして、正直な者は、眞理と共に行かなければならぬのだ。

ちやうど、私が、其の旅に立つ前日であつた、とめ子が署名した信書を受取つた。

彼女は、大阪に行つてゐた。そして、知り合に身を寄せて、何か適當の仕事を探がしてゐたのだが、この頃、やうやく某商店の店員に雇はれたといふのであつた。

「……梅田の停車場で、偶然、きぬちやんに遇ひました。こちらのカフエーに、勤めてゐる樣子です。相變らず、元氣よく、驚くほど派手な服裝をしてゐますので、みんなの眼を惹いてゐました。ほんの僅かばかし話しただけで別れなければなりませんでした。けれど、そのうち、きぬちやんは、妾のところへたづねて來る筈になつてゐます。あの方は、なか〳〵しつかりしたところがありますから、きつと、いつまでも、今のやうな浮いた生活をばしてゐないと思ひます……」などゝ手紙には書いてあつた。

私は、それを讀み終つてから、茫然として、しばらく窓を透して、彼方の青い空に、眼を沒した。

白い雲が、流れて去つた。私は、幾年か前の夜、翡翠と和蘭皿のことから、骨董屋と喧嘩をしたことなどを思ひ出し

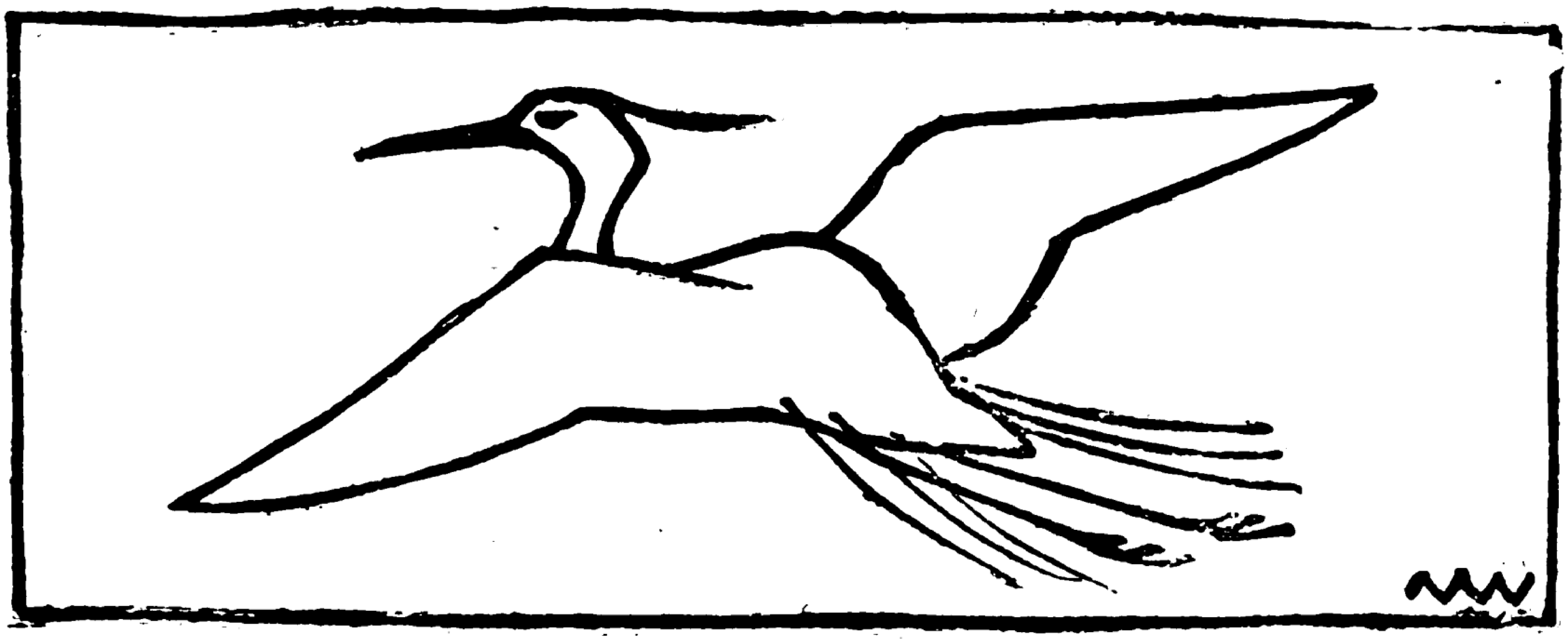
た。おきぬが、白い、柔らかな指から赤いルビーのはいつてゐる指輪を拔いて、私にくれるといつた、あの時の光景などを眼に描いた。

すべてが、虛無であり、また過去であつた。たゞ、しかし私に、忘れられないものがある。

それは、共生、共勞の喜びだ。

私の死んだ父の願ひも、もとよりこゝにあつた。私は、その種子を蒔くために、その翌日、北へ向つて出發した。

すべての希望が、未來にあるのだから。――一九二三、五作――



素足で行く旅人

宮地嘉六

一

恰度六月のなかばであつた。郷里へ行つて東京へ歸りついてからかれこれ二週間目ぐらゐであつた。孝吉は銀座通りで加茂川と云ふ男に出逢つた。加茂川は新進プロレタリア作家である。彼は此の男と久しぶりに出逢つた。外觀は無邪氣らしい面白い男である。彼は此の男と三四回酒をのみ合つたことがある。然し此の男と接近するうちに彼は自己を抑制しなければならぬ苦痛を感じた。此の男と交際するには餘程自分を抑へるか若くは露骨に思ひ切り無遠慮になるかどちらかを要するわけであつた。そして無遠慮に喧嘩腰にならねばならぬことを彼は避けたい爲めに此の男にしばらく接近しなかつたのだ。然し久しぶり逢ふとなつかしい氣持がした。

『久しぶりだから、そこらで何か飲まう。』相手は云つた。

『飲まう。』孝吉はあまり欲しなかつたがつき合ふことにした。一緒にとあるカフエー

に入つた。

『俺は腸を悪くしてゐるんで强いのは駄目だ。』孝吉は云つた。

『まあ好いさ。ぢや甘弱いものにしよう。』相手はベルモットを命じた。二三杯立に飲んだ。

『君は今千葉の方にゐるつて。』

『あ、婿の里だ。婿はポテリンだし俺も弱つた。今雜誌社に金を借りに行つて少しばかり出來たところだ。今日はあるぜ。』と加茂川は二三冊の本をねぢ込んだふところを輕く叩いて見せて『いつもお前えに出させるんで今日は俺にまかしてくれ。』

『初めからそんなことを云ふのは悪景氣と云ふもんだ。』

『さうか、まあ。ぢや好い。』と加茂川は高笑ひをして『時にお前えは同志に評判が悪いぜ。』

『さうか、どう云ふ風にだい。』

『お前えはブルジョア作家に變節したと皆は云つてるぜ。お前えはブルジョア作家からも葬られる人だが、それよりもプロ作家の連中から葬られるぞ。しつかりしろよ。旗色を鮮明にしろよ。』

『何だ。そんなことか!』と孝吉は云つたが心ではそれをかう解釋した。『立場を同じうする作家と雖も一日先に名をなしてゐる者に對しては彼等が敵意を持つのは當然である……』

二人はやがてそこを出て更に銀座裏の小さな割烹店へ入つた。

『お前え飲めないなんて卑怯だ。』

『よし飲まう。』

『俺の相手になれねえお前えぢやねえ筈だ。』加茂川は頻りに彼に强いた。と見るうちに加茂川は險惡な眼つきになつて、そろ〳〵亂暴を始めた。小皿や盃を窓の方へ投げつけた。

『よせ、どうしたのだ。』

『こんなもの二つや三つ毀したつて何だ。』

明らかに孝吉への挑戰であつた。

『さあ來い。』

二人はいつの間にか德利を持ち合つてゐた。そしてそれを打ちあてた。德利は兩方とも毀れて飛んだ。二人の手からは血が流れた。孝吉は立ち上つて相手の襟をとつた。彼はまだ醉つてゐなかつたのである。

『打て、』相手は云つた。理由のない喧嘩を挑んでそれに甘へる眼つきで。

『出ろ。外へ……』

此の時女中が上つて來た。

『會計を。』

女は驚いて下へ行つた。孝吉が拂ひをしてゐる間に加茂川は二階を下りて行つた。然し孝吉が拂ひをすませて出た時は加茂川はゐなかつた。喧嘩は矢張みだりにすべきものぢやないことを知つてゐたのであらう。

孝吉は思つた。新進と云はれるには恰度芝居の花道から出る助六の見えが必要であるのか。華やかで意勢よく氣負つて見せて、橘家……と叫ばしめなくてはならぬものか。觀客の、大向ふの人氣が必要であるのか。同時に大にあて氣が必要であるのか。鳴りものが必要であるのか。更に本舞臺には敵役の髯の意休がゐなくてはならぬものか。新進作家と

は恰度文壇の花道に出て來る助六であるか。彼は本舞臺まで行くまでには花道の七三どころで大蛇の目の長柄の端を持つていろ〳〵の大見えを切らねばならぬものか。そして文壇と云ふ一種の大劇場は五年目乃至十年目ぐらゐに幾人かの助六式の新進を迎へるものなのか。然し助六の人氣は花道から本舞臺に入る間の景氣であらう。文壇の助六もさうだ。もう一個の作家として地位が定まると觀客はそれほどやんやと叫ばない。更に新らしい助六が出て來る。新らしく出て來る助六の爲めには先の助六は將の意休に擬せられねばならぬ。然しいかなる落ち目の作家も一度は花道で叫ばれた花形の助六だつたのだ……と。

二

別れた妻のその後の消息については殆ど孝吉は何ごとも知らなかつた。唯、信州の方で夏を過ごして歸京してから僅かに次のやうなことを媒妁人であつたK氏から聞いた。

『彼女は家出をしたさうだが、君はそのことをまだ知らんかね。』

『いえ、少しも知りませんですが……』此のことは彼には全く初耳だつた。それだけ心に異樣な響きを感じた。

『いつ頃でございますか。』彼も訊ねた。

『何でも、あなたが信州の方へ行つてらした頃ですよ。だから、そこへでも仙子さんは行つたんのぢやなからうか、て云つてた人もありましたよ。』K夫人が云つた。

『さう云ふことになるとちよつと面白いが、とうちでは話してゐたんだが……』K氏は仰臥しながら病みつかれた顔に微笑して

『彼女のことだから他に情人が出來て、その爲めに家を飛び出したのぢやあるまいから、或は君の方へ行つたんぢやなからうかと云ふ風說が専らだつた。』

『いゝえ、さう云ふことにはもうならないと思ひます。』幸吉は云つた。無論彼が信州の沓掛にゐた間にそんなことはなかつたのである。或はと思つても見たが、女が自分の旅先へ來るやうな筈はないと信じた。信じねばならなかつた。あれほどにまで問題を惡化させたことは女の意志ではなかつたとしても、一旦別れてしまつた今日となつてそのやうなことはあり得べきでないと思つた。然しいづれにしてもいたましいことではある。と女の家出が直接彼とは關係のないことにしても無關心ではゐられない氣がした。

『訴訟沙汰にしたことなどは全く當人は知らないんださうですから……あれはお姉さん夫婦が勝手にしたことなんださうですのよ……。』と夫人は云つた。

時にはかう云ふ話を聞くのも彼の今の內生活には無用ではなかつたであらう。一旦別れた妻のことなどはどうでも好いとは彼の本心が云はさないのであつた。K氏夫妻もそこを見ぬいてゐるやうであつた。話はそれだけだつた。これは孝吉が森ケ崎の病院へK氏を見舞に行つて久しぶりに會つた時のことなのだ……。

彼は信州の沓掛の溫泉場に一月半ほどゐた。七月の半ばから九月の初め頃までゐた。その間に東京の方の知人等はいろ〳〵の風評を彼についてしてゐた。それは若い婦人記者と一緒に何處かへ雲がくれしたと云ふやうな風評が専らだつた。或る者はその婦人記者と云ふのは多分女歌人町田花子のことだらうと云つてゐた。いやさうではないと云ふものもあつた。兎に角その噂は彼の知人間を賑やかにした。さうした噂でも傳へられることがなかつたら離婚後の彼はあまりに慘めな印象をいつまでも世人の胸に殘すだけで終つたどらう。妻と別れた後もなほ彼が獨身を守つてゐると云ふこと

で世間は彼の人物を殊更に見上げるほどに格式でもなかつたやうだし、一部の人間は彼が離婚事件に悩まされて社會的にも彼自身の内生活の上にも一應受けるだけの傷手を蒙つたことを知つてゐたから寧ろさうした彼の醜聞を期待してゐたかのやうに興味を持つた。そしてさも羨望に値する愛人でも手に入れたのらしく噂を誇張した。彼とても艶福に乏しいと云はれることが幾分不名譽にも聞ゆる立場にあつたのである。

だが信州の沓掛溫泉場で彼と逢つたと云ふ或る文士の話しは全くそれと違つてゐた。その文士が彼に逢つた時は別に若い婦人を携帶してゐる樣子もなかつたと云ふのであつた。なんでもその溫泉旅館のあまり上等でない六疊の一室で自炊をしながら一生懸命書きものに沒頭してゐたと云ふのであつた。それは事實で、彼はそこでせつせと書きものをやらなければ旅館の支拂ひをすませて東京へ引きあげて歸ることが出來なかつたのだ。

彼はその溫泉場へ來る時には女と一緒だつた。その女は噂の町田花子とは異つた女だつた。旅館の名簿に赤塚澤子と記されてあるのを見ても知れる。その女は二週間あまりゐて東京へ一人で行つてしまつた。無論面白くないことが出來たからだ。女は初めから男を少し甘く見てゐたので我がまゝをつのらせた。少々のことをしても男は自分を手放し得ないと幾分高をくゝつてゐた。事實孝吉の方が少々女にまゐり過ぎてゐたのだ、然しだん／＼此の女の性質が分り出してからは彼も考へるやうになつた。

『あなたはわたしに着物ぐらゐを買つてやつて、それでわたしの心を繫ぎ止めて置かうたつて駄目よ。私は自分の自由を誰にも奪はれたくない。いやになれば何時でも飛んで行つてしまふから……』女は溫泉場に來る前、二三枚の夏衣を買つて貰つてさへそのやうなことを云つた。强いことを云ふ女だと孝吉は思つたが、今時の若い女のせりふとして許した。彼女は彼とさうなるまでは神田へんの安下宿屋にごろ／＼してゐたのである。着替へも持つて來てゐなかつたので

彼は一緒に松坂屋へ行つて、それも自分の時計まで質に入れてこしらへた金で荒い有松絞や阿波縮の浴衣地などを彼女に選ばせて買つてやつたのである。彼女は女學生風のちよつと小ぢんまりした女だつた。何を着せても似合ふすんなりとしたからだつきを持つてゐたのだ。洋裝して歩きたいとか、フランス語の學校にやつてくれとか云つた。どうかした時は正直な娘らしい純さも見えたが、またかなり人ずれのした不良少女あがりのしたゝか者らしいところを多分に發揮した。然し前の妻の田舍まる出しの溫順と鈍感にもやりきれなかつた彼はかうした種類の女に張合を感じたほどである。少々ぐらゐ妖婦的な女が好いとさへ思つてゐた矢さきだつたので彼には此の女が最初は非常に魅力ある女に見えたのである。兎も角彼は幸福さうに、離婚後の寂寥と憂鬱から救はれた顏色で彼女をつれて此の溫泉場にやつて來たのである。それは仕事をみつちりしたいと云ふ目的でもあつたが。

彼女と彼との關係については最初彼女を孝吉に紹介した鬼怒川の外にはあまりくわしく知るものはなかつた。鬼怒川はその前に町田花子を彼に紹介し、結婚をすゝめたりした男である。孝吉はその時分花子との結婚問題には何故か氣のりがしなかつた。三四回逢つたが、話はそのまゝに終つてしまつた。それから數ヶ月たつて鬼怒川は更に赤塚澪子なる此の女性を彼に紹介してよこしたのである。彼女は××通報社の婦人記者として或る日鬼怒川の紹介狀を持つて孝吉の獨りすまひの家を訪ねて來たのが最初であつた。その時の紹介狀には、彼女は女流作家志望の婦人だから何かその修養上の參考になるやうな話しをしてやつて貰ひたいと云ふ意味のことが書いてあつた。然し孝吉はその時感じた。鬼怒川は俺が此の女ならひつかゝると思つてよこしたのだなと。

彼はその時女流作家志望の婦人にふさはしい話しをした。何を話したか自分では分らないほど上氣してゐたことを後で彼は氣づいた。それほど彼女は魅力ある女として見えたのである。その後三四回女は彼を訪ねて來た。彼が惚れてゐ

ると云ふことを女は知つてゐたやうだ。孝吉の方でも女がさう思つてゐて訪ねて來ることを感づいてもゐた。兎に角彼は寂寥の裡に離婚後の自分を辛うじて持ちこたへてゐた。寂寥と空虚は彼をして最早顧慮のみに忠實であることを許さなかつた。尤も一人すまひの間にはいろ〳〵の婦人客が訪づれては來た。或る女は神の使ひのやうに、或る女は惡魔の手先のやうにやさしい媚を投げつけに來た。町田花子もその中の一人だ。赤塚澤子もその一人である。そして彼女が神の使ひでなかつたことだけは明らかであつた。女は此の溫泉場へ一緒に來て彼と二週間あまり暮してゐる間に彼が折角まとめあげた短篇の原稿を或る日めちや〳〵に引きちぎつてしまつたのである。無論ちよつとした感情の衝突からであつた。先づからうだつた。浴場で知り合ひになつた長野の材木問屋の主人の妾と云ふのが彼女に遊びに來いと云つたので彼女は行つて見たいと云ひ出した。その妾は旅館の別莊にゐた。無論孝吉はそれを許さねばならなかつた。然しさう云ふ場合の彼女は必ず彼の心理を不快にした。それは僅か一時間でも此の男が自分を平氣で手放し得ないだらうと云つたやうな觀測、一人でよその家へ行くと云ふことに對して何の不安なしで此の男が許し得るわけはないと云ふ觀測のもとに女は自己滿足を得なければすまされなかつたのである。彼女は既に彼に對して常にそれを味ひたいのであつた。それはずつと年の多い男に對して自分の若さを誇らずにゐられない彼女の氣持がそれをさせた。彼はしば〳〵それを感じさせられた。或る時、旅館の娯樂室で他の若い男と彼女がピンポンを長い間續けてゐた時も彼は事實あまり好い氣持がしなかつたくらゐである。それは自分に不釣合な、あまりに年の若い女を持つた男の實感と云へるものであらう。彼女はそれを知つてゐた。男がそれほど自分にまゐつてゐると云ふことを慥め得た時ほど彼女は强味と自己滿足を覺えることはなかつた。孝吉はさうした彼女の心理を無論知りぬいてゐた。彼はむしろ彼女に對してもつと平氣に冷淡になれないことを心では恥かしく思つた。

別莊にゐる妾のところへ彼女が遊びに行きたいと云ふことも彼にはあまり好ましくなかつたので彼はかう云つた。

『それは遊びに行つて見たら好いぢやないか。然しよそへ行くことは自分を見られに行くことだから氣をつけるが好い。』

『あなたは直ぐさうよ。わたし、あなたのその氣持が大嫌ひ。』女は急に言葉を尖らせた。

『嫌ひなら一緒にゐなければ好いぢやないか。』彼も喧嘩早い方である。

『え、さうよ。ぢやわたし東京へ歸るから旅費を都合して下さい。』女も氣早であつた。

『歸りたければ歸るさ。』

『旅費を下さい。』

『よし。俺には今それだけの金はない。昨日お前と小諸へ行つてつかつてしまつたからいくらも蝦蟇口に殘つてゐないのは分つてるだらう。だが宿の帳場に云へばそのくらゐの金は取り替へてくれないこともあるまい。』孝吉もさうなると此の女と分れることが何でもないと云ふ氣を見せたくなつた。却つて女がゐなくなつた方が創作をまとめる上には好いと思つた。女は彼の云ひ方があまりに熱がなかつたので一層憤慨した。

『ぢや、さうして下さい。』

『よし。』

翌日は互にあまり口をきかなかつた。女の方では何か一人で悶へてゐた。さうなると彼は却つて冷靜であつた。机に向つてせつせと書きものをした。

『何もさう喧嘩面で別れることはないから氣持よくして行くなら行つたがよい。いつ行くのだ。』

女は默つてそれには答へなかつた。彼女はだらしなく部屋の一方にごろ寢をして、ヒステリツクな顏をしたから新聞紙をビリ〳〵引きちぎつて、それをまるめて、そこらぢゆうに投げつけてゐた。かうなると彼は此の女のどこが美しいのか分らなくなつた。此の溫泉場に來た時は、二人は幸福な新婚者のやうに目立つた。その外觀だけでも保持しなければならない場合であるのに此のなりゆきは何事ぞ。と孝吉はつく〴〵さう思つた。

その日の午後である。彼は幾枚かの書きものをすましてから部屋を飛び出した。僅か三十分ほど散歩して再び部屋に戻つて見ると女の姿はなかつた。ふと机の前を見るなり彼は色を變へてしまつた。彼が幾日かを以てやつとまとめ上げた短篇の原稿がそこにめちや〳〵に引き裂かれてあつたのだ。彼は呆然とそれを見つめたまゝだつた。そこへ女は廊下の方からやつて來たが、彼のその姿を見るとそのまゝぷいと逃げるやうに椽側から下りて行つてしまつた。それは非常にドラマチツクな場面であつた。女は小川の岸の人目のない樹の蔭に立つてゐた。孝吉はそれを見出すと、つか〳〵と歩み寄つた。

『ひどいことをしたな。』

『…………』

『お前は誰かに賴まれて俺に害を加へる爲めに來た人間のやうだ。俺には許せないぞ。』

女は唇をかみしめて、じつと俯向いたまゝだつた。その顏は魔女のやうに悽かつた。孝吉は人目のないのを幸ひ女の襟もとを掴んだ。

『きさまは俺が何ごともなし得ないと見くびつてゐたのか。』

孝吉は自分の身體にみなぎり渡る暴力と怒りに恐怖した。俺は今何の抑制もなく此の女に暴力を以てしたら不具にす

るか打ち殺してしまふかすることになるだらうと思ふと直ぐにはどうすることも出來ないのであつた。自分の離婚事件がまた世人の記憶から消えてゐないと云ふことを最も彼は感じねばならなかつた。それでも此の場合はどうしても女をそのまゝ許す氣になれなかつた。その瞬間彼はもう女をそこへ突き飛ばしてゐた。女は泣きもしなかつた。彼は更に腕を女の顔の上に振り下した。女は巧妙にそれを受け止めた。然し二度目に振り下した手は女の横顔にあたつた。女はやつと泣き出した。そして彼に武者振りついて來た。それを挑ね飛ばすことは彼には無論容易であつたが、さうなれば出してはならぬ力を出さねばならぬ。彼はそれを怖れた。

『あゝこれは醜態だ、もう止さう。俺はこれまで女を打つたりしたことはなかつたのに、とう／＼つまらないことになつてしまつた。自分で自分を傷けるばかりだつた……』彼はそこで活劇をきりあげることにした。幸ひ誰れも見てはゐないやうであつたが、それでも氣になつた。

彼はどうあつても女を止め置く氣になれなかつたので宿の帳場から女の汽車賃を借ることにした。然し恰度その日の夕方、東京の雜誌社から少しばかりの稿料が送り屆けられて來た。それで先づその方は解決は出來た。女は歸京の支度をして翌日の午前の氣車で去つたのである。

或る文士がその溫泉旅館で彼と逢つた時は恰度女が東京へ去つてから一週間目であつたのだ。東京の知人間で彼が某婦人記者と雲がくれをしたと云ふ專らの風聞は以上の事實の訛傳であつたらしい。

二人はその溫泉場で最後の別れをしたのであつた。女の方でも文句はないと云つた。然し女は始終唇をかみしめて何か含むところあるかのやうな顏をして、そして去つた。彼に買つて貰つた有松絞や阿波縮や手拭地の浴衣などをも何と思つてか置き去りにして行つてしまつた。

彼はいろ〳〵のことが氣にならぬではなかつた。若し女が質のよくない援助者を求めて、自分が東京へ歸るのを待つて何事か爲さんとする意志ではないだらうかと云ふことであつた。前の妻との離婚事件を惡化させた妻の義兄である△△辯護士の援助を得ようとならばそれは彼女にとつて最も便宜であらねばならぬと云ふこと。それは△△辯護士の方でも歡迎するに違ひないと云ふことなども彼は考へて見た。それよりも今一つ氣になることがあつたのである。で彼女が午前の汽車で去つたその直ぐ後から東京の家の隣の家主にあてゝ次のやうな電報を打つことにした。

『クレガキテモウチヘイレテクダサルナ』と。彼の旅行中は家主が家のことを萬事注意してくれてゐるには違ひないのであつた。が彼女の出入だけは承認するかも知れないと彼は思つた。折角書きあげた原稿を引きちぎる程の女だからあちらでまた何を爲すか分らないと云ふ氣がした。かうなると彼と云ふ男は弱い憐れむべき被害者であつた。それでゐながら彼は女が去つた後は二三日全く何かを失つたやうにさびしい顏をしてゐた。そして彼は恰度トランプを一人で合せて氣を紛らす人のやうに机の前で背中をまるくして、そのばら〳〵に引きちぎられた原稿を終日かゝつてつぎ合せてゐた。

K氏夫妻が彼の別れた妻の行衞不明について臆測した通りに假に前の妻が此の信州の溫泉場へ彼を尋ねて來たとするならば恰度此の時分であらねばならなかつた。恐らくそんなことはあり得ないことであらうし、容易にまた彼を捜しあてることが出來るものでもなかつたであらう。然し若し彼は彼女に逢つたらかう云つただらう。

『お前には一度幻滅した、私は女性と云ふものをよく知らなかつたからだ。お前と一緒にゐるのが苦痛だつた。然しお前と別れると直ぐにお前のことを追憶することが出來た。お前をなつかしむことが出來た。「お前のよいところが分つた。然し一緒にゐればそれが分らなくなる。別れてゐればそのお前のよいところだけが私の胸に殘る……』

三

淺間の麓であるその溫泉場は九月に入ると朝夕は單衣の肌が寒かつた。旅館の客はどん／＼引きあげて行つてしまつた。東京はまだ暑いと分つてゐても人が引きあげる時には引きあげなければならぬと云ふやうに彼等は引きあげて行つた。そこには都會人特有の心理がある。旅館の支拂が出來ない爲めに滯在を延ばしてゐると思はれてはならなかつた。何故ならさうした種類の客もあると云ふことを知つてゐたから。彼等は多くの避暑客の間にあつて唯々足もとを見られないことをのみ努めた。それは彼等に於ては正しいことであつた。彼等は都會に於ける自分達の生活の程度を少しでも高く見せなければならなかつた。それも彼等に於ては當然であつたらう。何故ならば彼等の避暑の必要にはそれらのすべてが附隨してゐたからである。それらは最初から意識されてゐたことであつたからである。

孝吉はそれら避暑客の去るのを毎日机の前の窓から見た。もうあの母娘の客も行つてしまふのだな、とか、あのふとつちよの未亡人も歸るんだな、とか、一度廊下でお辭儀をし合つたあのやさ形の夫人も迎へに來た良人と共に去るのだな、とか、彼はかゝる場合の殘留者らしい心持でそれとなく見送つた。彼は退潮に殘された小舟のやうに廣い旅館の一室に止まつた。彼は書きものに疲れると散歩に出かけた。そして彼女をひつぱたいた小川の岸の樹立のところまで來るといつも立ち止まつた。女が掴みかゝつて來た時の泣き顏が彼の眼に浮ぶ。許して下さいと云ふのも聞かず突き飛ばした自分のその時の狂暴さと手荒さとを顧ると堪へがたいほど女がいた／＼しく感ぜられて來る。要するに女はまだ少女時代を過ぎたばかりの前後の辨へもないおちやつぴいだつた。不良女と云ふには少し子供らしさがあり過ぎた。と思へて來る。だまつて許してやればよかつた。反省させたゞけでよかつた 手荒いことをしなければよかつた。と彼はしみ／＼

思ふのであつた。

『可憐な妖婦。お前はあのくらゐのことは私が許してくれると思つてしたことだらう。私はそれを許し得なかつた。お前は私に額を打たれた。そして一人でさびしさうに行つてしまつた。然し俺は毎日との小川の岸に立つてさびしく悲しみに沈んでゐる。どうかお前の上によいことがあるやうに……。』

森は彼を見下してゐた。四圍の山々は彼をゆつたりとした姿で見つめてゐた。小川の水は絶えず急速に流れてゐた。

自然は彼にいろ〳〵の批判を與へた。

高崎まで彼女と偶然同じ列車に乘り合せたと云つて歸つて來た旅館の女中の話しによると、ひどくもの思ひに沈んでゐたとのことだつた。

『まあ、どうしてお一人だけお歸しになりましたの。』と女中は云つた。

『何か話しましたかね。』

『いゝえ、別に何もお話しなさいませんでした。高崎でお下車になつて一汽車おくれていらしやいませんか。と申しましたけれど……』

『そのまゝ東京へ行つたでせうか。』

『えゝわたしは高崎でお別れしてしまひましたの。』

孝吉は女からの消息をよもやと思ひながらも心待に待てゐたやうであつた。然し女からは、東京へ着いたとも、どこに落ちついたとも、その後何のたよりもなかつた。女の剛情さが彼の心にはよく感ぜられた。同時に彼の心持もはつきりして來た。そして思つた。

『俺は然しどうなるのだ。から女に失敗ばかりしてゐてどうなるのだ……』

滯留の避暑客の引きあげた後にも氣まぐれな一夜泊りの客が入れ代り來た。或る夜、一人の男が彼の隣室に泊り込んだ。此の男は東京の或る會社員であつたが、山形地方の海に面した或る小さな温泉場で二週間ほど滯留し、信越線で東京へ歸る途中、この温泉場のことを車中で聞いて立ち寄つたのである。孝吉は二度ばかり浴場で顔を見合せた時から言葉を交すやうになつた。客は三週間の休暇を得て、わざ／＼山形地方の温泉場へ行つたが、かねて聞いてゐたほどにその温泉場はよくないので失望したことや、此所の温泉の存外よいことなどを話した。そして旅中のスケッチ帖などを見せた。

『これは素人の畫ぢやありませんね。』孝吉は感心して云つた。

『いや、駄目ですよ。へたの横ずきでして、……』客は云つた。畫をやるくらゐの男だから孝吉の生活をも直ぐに見ぬいたらしい。二人は夕方二階の椽側の手すり近く椅子を引き寄せていろ／＼の話しをした。客は自分の勤めてゐる會社が護謨製造の方であつて主に自働車のタイヤをやつてゐることなどを話した。日本の道路が惡いのもタイヤの耐久力を弱める一つの原因であるが、馳走中に熱を持つ爲めに護謨の重ね目が離れて、そこに眞空が出來て、それが多くの場合にパンクの原因をなすと云ふことや、獨逸製のタイヤには自分の會社の製品の到底及ばさることや、その點については研究中であることなどをも語つた。

『それくらゐ畫がおかけになつてもそれで生活をなさらうと云ふ野心がないんだから偉い……』孝吉は云つた。

『いや、少しはあつたんですよ。中學時代は好い氣になつてゐたものですがね。何しろ兩親や弟妹を一人で背負つて行かなけりやならんかつたもんですから止むを得ず實業方面へ入つたんです。然し好きな道はどうも止められませんね

え。』と客は云つて『私はかう云ふロダンの言葉がたまらなく好きです。部分をよく知ることは全體を知る爲めである。とロダンは云つてをります。此の言葉は一番私を力づけますよ。』

孝吉はうなづいて見せた。好い言葉だと彼も思つた。

『話は變りますが、あなたは大川曙舟と云ふ小說家はお知り合ではありませんか。』

『知つてをります、あなたはあの人を御存じですか。』

『別に知つてるわけではありませんが、ちよつとしたことからあの人の名を知つてるのです。私の友人の妻君があの人の崇拜者でしてね、大變文學好きの婦人でしたが、その爲めに良人とも氣持が合はないで、子供まで一人あつたのでしたが、とう〳〵一人で家出をしてしまひました。さう云ふことから特に大川曙舟と云ふ人の名を知つたわけですが……』客は云つた。

孝吉は直ぐその婦人について思ひあたることがあつた。彼は曾て大川氏から一人の婦人を紹介されたことがある。一時はその婦人とかなり接近した。婦人は良人と氣性が合はない爲めに家出したが、再びもとの良へと添ふわけには行かないので更に適當な人を見出さねばならぬ境遇にあると云ふのであつた。離婚して間もない孝吉は彼女からいろ〳〵の身の上話しを聞くと共に、自分のことをも打ちあけながら長閑な春の郊外を一緒に散歩したこともある。

『あなたも私もよつぽど好きと思ふ人にでも出くはさない限りは結婚は出來ないかも知れませんね』孝吉は笑ひながら云つた。

『まあさうですわね。』女も笑つた。

二人は柴又の蒲燒屋で夕飯を喰つたりした。そこは孝吉が別れた妻と曾つて一度夕飯を喰べた家であつた。而もその

時と同じ部屋に通されて二人は夕飯を喰べたのである。

『恰度去年の今頃だつたやうだ』と孝吉は一人思つた――或はその日は一年後の同じ日の同じ時刻であつたかも知れぬ――二人はさうして度々接近するうちに互に相手の瞳の裡に同じ慾求を讀み得た刹那もあつたやうである。然しさう云ふことは少しも互に感じなかつたやうにしてだん〳〵遠ざかつてしまつた。唯婦人は父の重病で歸郷したと云ふ手紙を一度だけ孝吉によこした。それは今から三月ほど前のことである。

『私の知つてる婦人にもさう云ふ人がありますが』

『或は御存じか知れません。高木八重子つて云ひますが、いや、もう實家の姓をなのつてるかも知れません。多分大野と云ふんでせう。』

『えゝさうです。私の知つてるその婦人は大野八重子と云ひます。』孝吉の眼色は少し異つた。彼はそれを相手に大げさにとられはせぬかを氣にした。兎も角旅先で思ひかけない人に出逢つて彼女のことを聞くのは彼に於ては神秘のやうにも思へた。

『なか〳〵しつかりした婦人です。私共も今一度もとのやうになしたいといろ〳〵思つてはゐるんですが。』客は彼女の美點を擧げて云つた。彼女が良人をよく容れてゐたこと、首筋から胸にかけて健康な女性美が匂ふてゐること、よく働く婦人であること、少し感激し易い性質のあること、その性格が文學と結びついて、舊い思想を持つ良人と合はなかつたと云ふやうな話しを客はよくした。

さッした話しの間に山あひの溫泉場の空には夕月が冴え上つてゐた。孝吉は訊て見た、

『その良人と云ふ人は彼女の戻るのを望んでをるのですか。』

『格別望んでもゐないやうなことを云つてゐますが、矢張それを望んでゐるやうです。新らしい思想と云ふものは一つの新らしい出發點に過ぎぬ。だから思想と實際とは矛盾する。その矛盾に疲れる時が來る。その意味で彼女も何をか學ぶだらう。そしたら再び戾つて來なければなるまい。僕はその時は許してやるつもりだが、去るものを追ふ氣にはなれぬ、と云つてゐますが、何よりも子供が可愛さうです。六つになりますがね、可愛いむく〳〵肥つた男の子です。』客は云つた。

氣の毒なことだと孝吉は思つた。少しの間でもその婦人と親しくした彼は矢張それ以上に自分が進むべきものでなかつたと云ふ氣がした。また、それ以上に進み得るものだつたら進んでも構はなかつたやうな氣もした。

四

孝吉はそれから間もなく信州の溫泉場を引きあげて歸つたが東京はまだ殘暑で煮へ返つてゐた。西ケ原の家へ歸りついて、何よりも先づ彼の心を惹いたのは大野八重子から來てゐる手紙であつた。それには重病であつた父が遂になくなつたこと、目下ぼんやりとして暮してゐること、九月の末にはちよつと上京しなければならぬから、その時は是非お訪ねすると云ふことが書いてあつた。溫泉場で思ひかけない人から彼女のことを聞いたりしたので孝吉の心は動いた。いろ〳〵の煩悶があつた上に父に死なれては打擊だつたに違ひないと彼は思ひやつた。彼女が來たらば溫泉場で逢つた人の話をしようと思つた。そしてとりあへず手紙を書いて送つた。旅行中で失禮したことや弔意をも述べ、上京の際は是非立ちよつて下さいと書いた。或る豫想が彼の心を僅かに犯しかけた。

『自分はあの婦人と緣があるのかも知れぬ……』と。

歸京後も溫泉場で別れた赤塚澤子の消息は分らなかつた。鬼怒川の家を訪ねれば分ると思つたがそれも藪を突いて蛇を出すことになりさうで行く氣にもなれない。それに溫泉場で完成し得られなかつた書きものゝ後半が彼に餘念を許さなかつた。彼はそれに全心を向けてゐる間は何ごとも顧みたくない。

押入には女の單衣などが殘つてゐた。不在中彼女がやつて來た樣子は更にない。然しいづれ彼が歸京したことを知れば女はそのまゝにしてはゐない筈であつた。

或る日、一人の大學生が突然木戸口に來てから訊ねた。

『御免下さい。こちらに婦人が間借してはゐないでせうか。』その訊ね方が孝吉には少し無躾にも聞へた。暑い日だつたので彼は玄關の障子を開け放して六疊の部室の中央に机を置いて、浴衣の袖をたくし上げて書きものに緊張しきつてゐたところである。

『婦人、いゑ、ゐません。』

『あ。さうですか。失禮しました。』大學生はそのまゝ行つてしまつた。彼は直ぐ感じた。彼女の何ものかではなからうかと。或は彼女の兄ではなからうかとも思つて見た。女の兄は某私立大學の法科生であることを彼は聞いてゐたので。それから二日ほどして一通の封書が女から來た。

『わたしは只今此所に來てをります。お手數ですがわたしの銘仙の單衣を郵送して下さいませ。お願ひいたします。』

文句は至極簡單であつた。封筒の裏を見ると岡山市××町××番地△△方としてある。消印がはつきりしてないが、彼女は最早東京にゐないのだなと思はねばならなかつた。彼は早速油紙に彼女の單衣を包裝して書留で送ることにした。

岡山には彼女の姉の婚家があることを聞いてゐたが、何故彼女が東京を去る氣になつたらう、と孝吉はその動機には自

分も無關係でないことを知ると愛憐の感に襲はれた。四五日たつてから受取つたと云ふ返事がまた女から來た。

『早速お送り下さいましてお手數さまでした。たしかにお受取いたしました。』と文句はそれだけだつた。そのはがきの消印ははつきりしてゐた。

『矢張岡山に行つてゐるのだな。そしてあの大學生は多分彼女の兄であつたに違ひない。』

それから二週間は過ぎた。或る夜、女はひよつこりやつて來た。此の時恰度客が二人ほど來てゐたが、孝吉は玄關先に立つてもぢ／＼してゐる彼女の顏を見ると直ぐから云つた。

『まあ入つたが好い。』

『お客さま。』

『うん。構はない。』と抑へきれぬ愛憐の情で云つて『岡山の方へどうして行つたのだ。いつ東京へ來た。』

『三四日前に來ましたの。』

『單衣は屆いたゞらう。』孝吉は分りきつたことまで訊ねて『まあ兎も角入つたら好いだらう。それとも……』

『では少しの間お邪魔しますわ。』彼女はこつてりと化粧して髮の束ね方も前よりは風變りにしてゐる。

『恰度好いところだ。そこの籠の中のリンゴを二つ三つむいて客に出して貰はう。』孝吉はまるで里から歸つて來た妻にでも命ずる調子で女に云つた。それはもう彼女に對して何等惡い感情を持つてはゐないと云ふことを彼女に感ぜしめる爲めであつた。一方から彼の此の場合の氣持を解剖すると、書きものがすつかり出來上つて幾月ぶりかで金が入つて、諸方の支拂ひやら質受など思ふやうにすませてほつとし、現に來てゐる友人と町で夕飯をとつたりして歸宅したばかりの秋の良夜が彼の氣持をのびやかにしてゐたことも事實だ。それに彼女が突然かゝる夜にやつて來たことが尠くも客を

して『彼はそれほど慘めでもない』と思はせ得たことを孝吉は早くも感じたのである。彼は此の偶然を卑しくも利用したと云ふことになる。彼女はやがてリンゴをむいて、それを鉢に盛つて客の前に運んだ。

『いらつしやいました。どうぞ……。』彼女も少し分に過ぎる挨拶を客にした。彼はそれを默認した、

孝吉は彼女をちよつと客に紹介した。若し此の場合客が來てゐなかつたならば彼女に對する孝吉の態度は初めから聊か異つてゐたに違ひない。かうなると恰度客が來合せてゐたのがよかつたのか、それとも惡かつたのかと云ふことも孝吉は考へて見ねばならぬ。最早溫泉場で一旦關係を斷つたのであるから彼女は彼の愛人ではない筈である。それだのに彼はうつかり愛人に對する調子で迎へ入れてしまつた。彼女の方でもその氣になつてゐる。

『まあ好い、客が去つてからのことだ。』と彼は思つた。

客はそれから三十分ほどもゐて去つた。一人の客は自作を朗讀する爲めに彼を訪ねて來た青年で、その長い文章の朗讀を心から聞く義務を孝吉に強いた。此の無遠慮な青年の爲めに二時間餘も孝吉は自分達の場合を犧牲にしてしまつた。そして、その青年がやつと去つた後で彼女と二人きりで相對座することが出來た。もう夜は十一時過ぎであつた。

『突然やつて來たぢやないか。どうしたのかと氣になつてゐたが。』孝吉はあらためて女に話しかけた。

『……………』

『岡山の方へは何う云ふつもりで行つたんだ。』

『あれから東京へ歸つて見ると兄の病氣が重いと云つて、鬼怒川さんのところへ手紙が來てゐたんですの。ちよつと歸つて來いて書いてあつたもんですから、前に童話を書いてやつた雜誌社から貰ふ金があつたのを鬼怒川さんに取つて貰つて、それで汽車賃が出來たから一先づ行つて來ることにしたんですの。』

『さうか、兄さんは東京にゐるんぢやないの。此の間大學生が妙なことを云つて訊ねて來たから、或はと思つたりした。』

『兄はそんなどころぢやありませんわ。あなたも隨分ねえ。』

『そして、兄さんの病氣はどうなんだ。好いのかい。』

『え、もう好い方ですの。來月あたりは東京へこれるでせうと思ひますの。

『まあ、よく來たよ。俺も實は、あの時は少し腹を立て過ぎたと今では思つてゐる。時にもう大分晩いやうだが、電車がなくなりやしないか。何か用があるならその方の話を聞かうか。』

『別に用つてありませんわよ。唯、あの時のことが氣になるからちよつとおわびに來たんですわ。わたしも惡かつたと思ひましたの。岡山の姉の家へ歸つてから二週間ばかりわたしも病氣で寢たつきりでしたのよ。あなたは別に變りはなかつて。わたしすつかり痩せたでせう。』

『さうでもない。』

『え、もうすつかり丈夫になつたの。』

『家の中は風が入らなくなつた。戸外を少し歩きながら話さう。』

『あなた、わたしを送り出さうとなさるの、いゝわ。』

『さうぢやない。君は眞ぐさう云ふからいかん。』

二人は戸外へ出た。しばらく默つて歩いた。小さな坂の上まで來ると孝吉は立ち止つて云つた。

『電車がな、なつても好いのか。』

『あなたはわたしを避けようとばかりしてゐらしやる。好いわ。これでお別れして歸ります。』

『そんならもう少し送らう。で今何處にゐる。』

『何處だつて好いわ。』と女は持ち前の怒りつぽい感情を見せたが直ぐに調子を變へて『わたし母親と二人で新宿に部屋を借りてゐますの。當分兄と三人で暮すことになりましたの。』彼女は云つた。

五

もう電車がなかつたので二人は家へ引き返して夜の明けるまで話した。岡山の姉の家へ歸つてゐる間のこと、母親のこと、弟のこと、今後の方針について女は男に語つた。家が倒產してしまつてから間もなく彼女の父はなくなつた。その後母親は彼女の二人の姉の婚家に少しの間宛身を寄せて暮すこととなり、二人の小さい弟は親類へ養子にやり、彼女は兄と二人で東京へ出た。兄は某私立大學の夜學部に通ふ傍ら市外の小學校の代用教師を勤めてゐたが、暑中休暇で岡山の姉の家へ行つてゐる間にチブスに罹つたのである。彼女が溫泉場から歸京すると兄の重病の通知が來てゐたので早速歸國したが、年老た母親を長年引き取つてゐる上に兄は重病で寢込むことになつたので姉は良人に氣をかねてゐていつもながらよい顏を見せなかつたと云ふのである。

『お前がいつまでもそんなぢや姉さんだつてこまるぢやないの。少しは姉さんのことも考へておくれ、つていきなり云ふんですもの。わたしたまらなかつたわ。それでも兄が惡いもんですから、看護婦を雇ふには費用が一層かゝるし仕方がないからゐたんですの。子供が大勢ゐて、その子供等までがちやんと事情を知つてゝ時々憎らしいことを云ふんですのよ。そりや一番上の姉夫婦と來たらケチン坊の儉約家ですの。ですから兄も今度は思つたんでせう。母親をつれてわ

たしが先へ東京へ行くやうに云つたんですの。兄と二人でどうにかして母親一人ぐらゐ養つて行けないことはないだらうと思ひます。わたし今度はつく／＼姉の家へ行つて現實を見せられましたわ。』と語つて『わたしタイプライターでもこれから修養しようかと思ふわ。』

『それは好いかも知れぬ。』

『でねえ、わたしそれまであなたの家に來てゐようか知ら。タイピスト學校を卒業するまでよ。三ケ月すれば一人前になれるの。わたしゐようか。いけない。』

『さあ、一緒に同棲するのは君の爲めにもどうかな。』

『わたしあなたと結婚しなくても好いのよ。唯タイピストになれるまであなたの食事のことなんかをわたししてあげて、そして晝間半日ほど學校へ通はして貰ふの。』女は云つた。

『それは僕だつてかうしてゐるのは不自由だから君が來て何やかやしてくれると好いが、それは少し考へた上で定めよう。が僕のところへ來るとしても兄さんが上京してからのことだらう。母親を一人新宿に放つて置くわけには行くまい。お母さんは東京へこれまで來たことがあるのかね。』

『初めてなの。見物もさせたいと思ふけれど、臆病で部屋の中にばかりゐて出ようと云つてもいやだつて云ふの。それや變よ。父がなくなる前に叔母さんに衣類をすつかり持ち出されてからは、自分のものが人に取られはせぬかて心配ばかりして、姉のとこへゐる時だつて、もう一人の次の姉の家へ行く時には風呂敷包を背負つて行くほど馬鹿用心が深いの。可愛さうに今夜は一人で寢てるでせう』

孝吉は彼女の母親を目に浮べた。岡山の姉の氣持をも想像した。兄なる大學生の苦しい生活をも思ふた。彼女の氣持

をも察し得た。

彼女は翌日の午前中に新宿へ歸つて行つた。孝吉はひとりで考へた。彼女を家へ入れて同棲の形になることはどうも好ましくない。子供らしい無邪氣さがあるのはよいが、一つ間違へば人の書き上げた大切な原稿を引きやぶることを何とも思はない狂暴な一面に彼はもうこり／＼してゐたからである。

『わたし、もう二度とあんなことしやしないことよ。またわたしがあんなことをするとあなたは思つて。』女は云つた。さう云ふ時の彼女の笑顔は罪がなくていつまでも過ぎたことを責める氣にはなれないが同棲は考へものだと孝吉は思つた。彼女は音樂や詩を好む現代の若い女の缺點と長所とを持つた一つの標本とも云へる女である。ちよつと見ると小ぢんまりした美人で、そのハイカラな女學生風の娘らしさを以て人を惹きつける。孝吉もそれにまゐつた一人である。彼女は人の心を讀むことが敏であり過ぎる。彼女は溫泉場にゐる時でも、どの女が自分の頭髮の束ね方を模倣し出したとか、どの年增が自分の若さに對して浴場で反感を抱いてゐるとか云ふことを適確に感じ得た。さう云ふ點に非常に頭腦が動く。その爲めに同じ女性から深く親しまれない。一口に云ふとこまちやくれたところがだん／＼相手に分るからである。そのくせ決して强い女ではない、自分よりちよつとでもすぐれた女性の前に出ると直ぐに自己卑少を感じてひどく押しの弱い女に變つてしまふ。大抵の女性はさう出來てゐるのだが彼女にはそれが最もはつきりしてゐる。彼女は女學校時代にも裁縫と生理が得意で、此の二つは級中で一番成績がよかつた。お針を持たせるとかなりに達者な手際を見せた。またちよつとした生理學上の知識によく通じてゐた。女學校時代には教科書だけでは滿足出來ず自から勝手に生理學の本をあさつたくらゐだ。彼女は女醫にでもなれる女であつた。

『わたし此の花よ。此の花の感じとよく私は似てゐるやうな氣がするの。だから好きなの。』溫泉場附近を或る日一緒に

散歩しながら彼女は薊の花を指して孝吉にさう云つたことがある。全くその花の感じによく似てゐると孝吉も思つた。彼女はよく自分をも知つてゐた。スミレ色のパラソルにも其の好きな薊の花を自分で刺繍してゐたくらゐである。

『鬼薊のお澤は好いぞ。』孝吉はからかつた。

『好いことよ。鬼薊のお澤だつて好いわよ。』

『俺は一體何の花に似てゐるかな。』

『あなた。さうねえ。分つた。あなたはどんなに虐げられても、それはふみにぢられても地を這つて伸びてゐる草の花よ。ごみ溜によくあるぢやないの。西瓜の種などが芽を出して、それが伸びて花を咲かせてゐるでせう。あなたはあれよ。ほほほ。』

『馬鹿。』孝吉は怒鳴つて見せた。然しそれはかなりよく穿つた形容だつた。そのやうに彼女は驚くほど適確な警句や譬喩をその小ぢんまりとした唇から放つ女である。彼女の唇は常に皮肉な微笑をたゞよはせてゐるのであつた。

　彼女が最初孝吉の家に訪ねて來た時分は、帝大出の或る若い法學士との關係がきれて間もない頃で、神田へんの安下宿屋にゐて圖書館から借り出した文學書などを、その狹い風通しの惡い下宿の部屋で寢ながら讀み耽つてものうい夏の日を暮してゐたのである。法學士とは半年以上もその下宿屋で一緒に暮した。きれて別々になつた後も當分その法學士が下宿料を拂つてくれることになつてゐたので、そこにさうしてゐたのである。たまに法學士はやつて來て泊ることもあつた。そのやうにして彼女は兄のもとには近づかなかつた。初めは兄と一緒に間借りをして音樂學校に通つてゐたが、そのうちにいろ／＼の女の友達が出來た。それらは何れも現代の若い女の、あまりほめることの出來ない一層面を代表する女性であつた。音樂學校に通ふ若い女性は女學生中でも戀愛にかけては最も放恣であると云はれてゐるだけに、彼

女の友達の多くは皆愛人をそれ〴〵持つてゐた。幾人もの愛人を持つてゐるのさへあつた。學校を中途で退學して或る會社の重役の妾になつたり、幾人かの大學生を飜弄したりすることの巧みな女性を彼女は友とした。彼女は遂に兄と別居してその監督からのがれて、それらの友達と同じやうな戀愛生活に入つたのである。そして法學士を得たのである。その情人法學士と關係中のことを作者は此所に具さに描く資料を持たないが、彼女が孝吉に語つたところによると三角關係と云つたいきさつがあつて、彼女はその爲めに自から退いたと云ふのであつた。彼女はさう云ふ不純な戀愛關係には堪へられなかつたと孝吉に話した。彼女の方からその法學士に見きりをつけたのか、或はその一方の女に敗れたのか、若くは法學士が彼女をいやになつて棄てたのか、事實はその孰れかであらう。兎も角その法學士は女を得ることに巧みだつたに相違ない。一方の女は靜岡生れで、あまり美人ではなかつたと云ふ。彼女以上の容貌ではなかつたらしく彼女は云ふ。その靜岡生れの女學生は既に法學士と關係があるにもかゝはらず、さうでない事を裝ふて彼女を法學士に取りもつた。法學士は自分の情婦を手先につかつて幾多の女學生を手に入れる方法を知つてゐたのである。

『わたし最初はそれを知らなかつたの。然し法學士がわたしを心から愛してゐることが彼女にはたまらなかつたんでせう。とう〳〵頭巾を脫いぢやつたの。法學士はそれまで彼女から幾人もの女を取りもつて貰つた義理があるから彼女を棄てるわけには行かないもんですから、どうしても彼女の方へ引かれたんですの。』女は云つた。

『ぢや法學士は君をその女よりも好いてゐたわけだね。』

『まあ、さうですの。だけどわたしはあまり好きではなかつたの。それは不得要領なぼうとした男なんですもの。ちつともあなたのやうにきび〳〵したところなどなかつたのよ。ほんと……』

『おい〳〵さう此方を持ち上げたつて駄目だぞ。だがそれや多くの女と關係するくらゐの男は女に對しては不得要領を

装ふものさ。然しその靜岡の女つてのはなか〳〵したゝかものだな。』
『え、それや陰險な女なの。實に巧みにわたしを扱いたわ。』
『だが君のやうな人がよく默つてその女に勝利を與へたもんだねえ。』
『わたしはさう云ふ性格なのよ。不純な戀愛なんかにいつまでもこだはつてゐられない性質なの。さう云ふ點は弱いのね、わたし。』彼女はさう云つた。たしかにさう云ふ立場に自分を長く置くことの出來ない性質の女性であつた。正直で勝氣ではあるがハガネのやうにぽきりと折れ易いところがある。柳ではなく竹であつた。

六

二三日して彼女は新宿から孝吉に手紙をよこした。あなたのそばへ行きたいがいろ〳〵考慮中であると云ふ意味の簡潔な手紙であつた。彼女はあまり長い手紙を書かない女である。それが何となく相手には思はせぶりのやうにも受けとれる。孝吉はそれに對して返事をやらなかつた。その方が返事をやる以上に自分の氣持を彼女に通ずるのによかつたからである
『考慮中だなんてどこまでお茶つぴいらしい女だ。此方も御同樣に考慮中だ。』彼は思つた。
すると四五日經つて彼女は押しかけて來た。頼まれもしないのにフライ鍋などを買つて來た。
『それや新宿の方は物が安いのよ。この大きさのフライ鍋ですと外の町では七十五錢も八十錢もしますわ。これいくらと思つてあなた、あてゝ御覽なさい。これが一つなくちやいけないでせう。さう思つてわたし買つて來てあげたの。』
『それは是非一つほしいと思つてゐたんで恰度好い。五十錢ぐらゐしたらう。』

『え、よくあてたのね。五十錢よ。安いわ。』

さう云つて、それから彼女は洗ひ張のまゝ持つて行つた孝吉の袷を包から出してきちんと仕立上げたのをそこに置いて『兄が上京するまでゐようと思つたんですけれど、母が行つても好いて云ふからわたしもうやつて來たの。母にはかうした人の家へ當分お手傳に行くからつてさう云つて來たのよ——ちつとも淋しがらない人ですの。』

彼女は來ると直ぐに襷がけになつて臺所で晩餐ごしらへにかゝつてゐるのである。

『今晩は何になさる。此のフライ鍋を早速用立てることにしようか。』彼女はさう云つてその柄のついたフライ鍋を宙に振り廻しながら笑つた。彼女は孝吉の思惑を知らないではなかつた。然しそれになまなか拘泥するよりも無邪氣に振舞つた方が好いと云ふことを知つてゐた。全く孝吉はさうされることが嬉しいやうでもあつた。まあ好いと思つた。一度離れた者同志が再び新らしい氣持で相寄ることになつたその一種甘すつぱい感じを彼は始めて經驗したのである。

彼女はタイプライター敎習所へ通うて自活の出來るやうになるまでと云ふ意味で彼のもとに來たのであつた。孝吉は堅くそのことを誓つたつもりであつた。自分は最早結婚と云ふ永久の同棲を條件とする同棲に一度失敗した性格上の破産者であるから到底それを完ふし得る自信がないと用心深く前言した。彼女もそれは同樣だと生意氣にも云つた。彼女は結婚と云ふ形式でいつまでも愛のない男に自分を結びつけて置くことは出來ないと云つた。さう云ふ前言のもとに男女が同棲することは非常に不眞面目なことであるか若くは非常に眞面目なことであるかの孰れかでなくてはならぬ。後者は愛を生命とする自由人の同棲を意味し前者はその思想の概念にかくれた浮氣者同志の同棲を意味するからだ。彼等はその二者の孰れかであつた。いやそのいづれでもあつた。

『好いのよ。わたし、あなたに好い人が出來て結婚なさるやうなことになれば、それはあなたの爲めに却つて喜ぶわ。

そしたらわたし何も云はないで出て行くばかりよ。さうよほんとに。』女は云つた。さうした彼女の言葉を解剖すると、一方に於ては内心孝吉の妻となることを望んでゐ、さうなり得ることを自信してゐるやうでもあり、また、さうではなく、自分の放恣な戀愛慾を今後他の男によつて滿たす時の來るのを知つて、自分を飽くまで自由な境遇に置かうとしてゐる意味にも聞えるのであつた。孝吉はどちらでもよいと考へた。彼は彼女に棄てられることよりも、自分が彼女に對して感興を失ふことの方がより怖ろしかつたのである。彼は彼女をどこまでも愛することの出來るのを望んだ。彼女が自分にとつて唯一の愛人であり得ることを願ふのであつた。彼女が自分を離れて行く時、自分がどこまでも愛執を持つて彼女に引きづられ、彼女の後を追ふことの出來るほど彼女を心から愛することが出來れば幸福であると思つた。恐らくさうはなり得まいと思つた。此の世の中に憎むべき女性は一人もゐない筈であるが生涯愛し得ると云ふ女性が彼女であることをどうしても信じ得られないのだ。然し彼は既に此の女を愛してゐる。憐れんでゐる。それ故にこそ彼女を許した。原稿を引き裂かれた時のことを責めなかつた。彼女を再び近づけた。そし愛して行けるまで愛して行かうと云ふ氣でゐるのである。唯彼はその自分の氣持の永久性を信じ得ないのである。同時に彼女を信じ得ないのである。

『彼女は尋常の女性ではない。然し今は一時的な反省の力で自分を否定してゐる。國元へ歸つて肉親の冷かさをしみじみ感じたり、自分のプライドを傷けられたりしたのだ。そして極めて謙讓な意味で都會で生活することの悅びを感ぜずにゐられなかつたのである。然し年老た母親をも此の都會で養つて行かねばならぬ此の場合いろいろ惑ふた。此の自分に身を寄せることが心細い彼女に於て手取早い方法であつたのだ。然し此の勝氣な我がまゝな女がどうしていつまでも今の氣持を續けて行くことが出來よう。此の女が自已を抑制することに忠實でなくなつた時、自分は到底彼女の狂的な發作や衝動に堪へ得ないだらう。恐らくさうなる時が來るだらう。』孝吉はその意味で彼女に安心を持ち得なかつた。同

時に彼女にも安心を與へたくなかつた、

彼女は前の情人法學士から受けた惡疾の餘病を持つてゐた。鄕里の姉の家で二週間餘も床についたのはその餘病の爲めであつたのだ。孝吉はそれを今になるまで氣つかなかつた。彼は温泉場にゐる頃、町の醫者に通つてワクチン注射を請ふたり白檀油を服用したりした。彼は六七年前の病が酸性の强い鑛泉を每日飮用した爲めに再發したものと云ふやうに考へた。然し醫者は彼の考へを笑つた。その時から彼女に疑ひを持つた。然しその時は旣に彼女は彼のもとにゐなかつた。然し今、彼に氣つかれて女は告白した。彼女は先づタイプライター敎習所へ通ふ前に病院へ通はねばならぬ身柄であつた。

『何故それを打ちやつてゐたのだ。生理學の本などを讀んだ人にしてはあまりにうかつぢやないか。』

彼女ははにかんで默つてゐた。孝吉はそれについて深くは彼女に訊ねなかつた。彼女は早速孝吉に云はれて飯田町の病院へ隔日に通ふことになつた。泥沼の深みに足を踏み入れて正に半身を沒しようとする時、人は自から過つてそこに陷つたことを知りながらも、そこから自分を救ひあげてくれないものを當然とは思ひ得ない。そこに自分を導き入れた誘惑者を怨むと同時に、そこから完全に自分を救ひあげてくれないものをも怨まずにゐられない心理を持ち得る。孝吉は彼女に對して今正にさうした立場にあることを感じた。然し彼は彼女に對して救者であると自から云ふ資格はないのである。唯彼女をより不幸にしてはならぬと云ふ氣持を當然持ち得たに止まる。

十月も半ばになつた。彼女は病院へ通ふにもまだ單衣であつた。注射料や其他の藥代がかゝるので女は男の手もとの苦しいことを知つて買つて貰ひたいとは云はなかつた。その着てゐる銘仙の單衣に裏をつけて間に合はせると云つた。然しそれでは病院へ通ふのに見苦しいと孝吉は云つた。然しさう云ふ場合に彼女はみだりに男の心に甘へない。さう云

ふ點に於て決して男を苦しめなかつた。身につける物に對しては非常に神經的で撰り好みをする性質であるが必ずしも高價な物を欲しない。物を大切にする。それは母親の感化だと彼女自身は云つた。兎に角孝吉は銘仙の袷を彼女に買はせることが出來た。神田の下宿屋に置いてある行李の中には袷羽織などがあると彼女は云つた。

『いゝえ、それは取りに行けば渡しますわ。下宿料は法學士が拂つてくれてゐる筈ですから、その爲めに私の荷物を抑へるやうなことはしないの。唯取りに行くのがいやなの、だから俥屋にでも賴んで行つて貰はふと思ふんですの。神田の質屋にも好いものが四五枚入つてるの。それやわたしの好きな着物ばかりなの。ですけれど法學士の名で入つてゐるからどうかと思ふの、それが出せると好いけれどわたし……今こしらへるたつて容易には買へないものばかりよ。だけれど好いわ、それはもうあきらめるわ。』彼女は云つた。

彼女は或る日神田へ行つて、もよりの俥屋に賴んでその下宿屋と荷物の交渉をした。然しその時の宿の主人の答へには、その法學士から何とも云つてないから今渡すわけには行かぬと云ふのであつた。それから幾日かして、その下宿屋の主人からはがきが來た。荷物を早く引き取りに來てくれとあつた。彼女は再び神田へ行つて運送屋の手で引きとつて貰ふことにした。行李は翌日の夕方運ばれた。彼女はなつかしさうにそれを受取つたが、

『まあ、ひどいわ　唯此の行李一つよこしたのか知ら。メリンスの蒲團なんかゞまだあるのに、ひどいわ。』とひとりごとのやうに云つて奧の三疊の部屋でその大きな行李を引つくり返して中をあらためた。孝吉が覗くと、見てはいけないと云つた。

『好いわ、見せてあげよう。好いわ、これ……こんなつまらないものばかり。これがわたしの財產よ。隨分みじめでせう。これ……此の袷羽織……好いものは皆質屋へ行つてるの。』女は持前の瓢逸な笑顏で一々手にとつて孝吉の目にか

けた。ほどいた新銘仙の單衣だの化粧道具だの、原稿用紙だの、メリンスの帶だの、襦袢だのが出て來た。それらの一つ〳〵は孰れも彼女のこれまでの都會生活の斷片をそれとなく語るものであつた。云ひ知れぬ愛憐の情が孝吉の顏に微笑となつて現はれた。

『笑つてるの、あなた。』女は云つた。

行李の底の方からはよく飾物に見る模造の山鳥が出て來た。

『これ、こんなものもある。わたしこれお友達に貰つたのよ。』

山鳥は痩せ萎びて艶のない羽を疎らにつけてゐて見るからに不氣味だつた。

『こんなものを下宿屋にゐる頃は部屋に飾つてゐたのだな。』と孝吉は思つた。裝飾品と云ふにはあまりに陰氣臭いものであつた。

『あなた、こんなのいや。』

『ごめんだなあ。その長い尻尾を見ると頽廢した女がぼろを曳きずつてゐるやうな感じがする。君はそんなものを持つてゐない方が君の背景は明るい。早く屑屋にでもやつてしまへよ。』

『そんなにいやなものなの。ぢや屑屋にやるわ。』女は云つた。

『どうだ。いつそのことその古い着物も屑屋にやつてしまつちや。そしていくらかになつたら、それに足して新しくもう一枚買ふさ。』

『さうねえ、さうするわ。でもこれなんかまだ裏をつければ着られるけれど……いゝわ、思ひ出が惡いから屑屋にやつちやをか……』かうした時の彼女はまだ全く子供らしかつた。その所持品のいろ〳〵がすべて子供らしさを見せてゐる。

七

彼と云ふ男は五十年の生涯に於て百年間の生活に値する體驗をしようとするのか。若くば人が半生の間に學び得るところのものを一生涯を以て同一のことをくり返して僅かに學び得んとする愚かなる人間であるか。彼自身はその後者であることを自から知つた。彼女を再び近づけたことは彼に於ては明らかに失敗であつたからである。彼女は日を重ねるに隨つて彼女特有の性情を發揮した。それは一面眞情と子供らしさを思はせるものではあつたが、また厄介極まる變質性のものであつた。少し氣に障ると物を投げつけたり破つたりした。彼女はいつの間にか妻らしく根を下しかけてゐた。男の甘さに乘じて妻らしい實權を形造らうとしてゐた。始めの間は女の客などが來ると此の家に於ける自分の存在の薄弱なことを當然なるものとして感じ、少しも不平を云はないのみか、憐れなほど自分を卑下した。わたしは唯いろ〱のお世話をしてやつてゐるものですと彼女自から自分の立場を親しく來る女の客に向つては明らかにしてゐた。そして努めて彼女は女の客と親しくならうとした。それは此の女客はどう云ふ氣持で度々訪ねて來るのであるかを探ぐる上にも一應親しくなる必要を彼女は感じたからであつた。或る夜Bと云ふ女客が訪ねて來た。客は盛裝をこらしてゐた。それはこれまで書面の上で文學上の親交を孝吉に求めてゐた婦人であつた。菓子折などを持つて遠いところを來たのであつた。丸顏の愛らしい二十ばかりの女であつた。此の若い可憐な女客は彼女の心を最も不安にしたらしかつた。それでも彼女は『お二人の交りの邪魔になるやうではすみません』と云ふ心持を失はないかの如き態度を裝ふた。彼女がさうした思はせぶりの態度を客が去つた後で露骨に表示する時には却つて孝吉は不快を覺えた。女客と見れば直に彼と戀愛關係が暗にあるかのやうに速斷する風が彼女にあつたからである。彼女はその文學少女をわざ〱本郷の下宿屋に訪問

したりした。その若い女客は唯一度訪ねて來たゞけで、だん〳〵文通さへもしなくなつた。

彼女は女客が訪ねて來た場合に感じた不快さをば男の若い客が訪ねて來た時に復讐することを試みた。或る夜一人の詩人某が訪ねて來た。此の男は彼女がいつぞやひよつこり鄕里からやつて來たその晩恰度來合せてゐたその男であつた。彼女とは同じ山陰道の隣縣の生れであると云ふことで客と彼女とは一種のなつかしみを感じた。孝吉は彼女の生國が此の男の隣縣であると云ふことで彼女が此の男に親しみを感ずるであらうことを豫期してさう紹介したのである。彼女は客に酌をした。客はだん〳〵醉つた。孝吉は此の男とは別に深い友人關係を結んだわけではないが、ふとしたことから互に知り合つて友人と呼ぶやうになつたのである。

『君、僕と握手しようぢやないか。いけない。』客は醉に乘じて手を彼女にさしのべた。彼女はその客の直ぐ横に座つてゐたのである。客は彼女が孝吉に於て如何なる女であるかを知つてゐた。それでこそそのやうなことが臆面もなく云へたのであらう。彼女は孝吉の面前で客から手をさしのべられたことが或る意味ではいやでなかつた。さうでなくても彼女はその少し前程から、此の客に厚くすることを努めてゐたのである。

『好いから握手するさ。構はない。』孝吉は彼女に云つた。そのやうなことは如何なる場合にも決して心から云へるべきではなかつた。例へ彼女は妻として孝吉と同棲してゐる女でなく、何時他の男に走らうともそれは彼女の自由であることを孝吉は始めから承知してゐるとしても面前で客との握手を許し得たとすればそれはその場合が生んだ何ものかであつた。女は孝吉にさう云はれて客に堅い握手を許した。女は孝吉のその場合の心理を知つてゐた。彼女は孝吉の云ふまゝになることを以て孝吉に或る日頃の不滿から起る復讐を遂げ得たと思つた。然しそれでゐて彼女は孝吉に對しては『あなたはわたしを隨分馬鹿にしてゐらつしやる』と云ふ不滿の色で自分の複雜な心理を掩ふた。

一番好い氣になつたのはその客であつた。彼は次に訪ねて來た時も歸りしなに靴をはひてしまつてから、玄關まで見送つた彼女にまたしても手をさしのべた。此の時孝吉は客を通りまで送つて行くつもりで玄關の外へ出てゐたのであるが、ふと振り向いた拍子にそれを見たので彼は咎めるともなく頓狂な輕い調子でかう云つた。

『惚れるのは自由だがみだりに握手すべからず。』

客は狼狽して、笑ひながらさしのべた手を引き込めた。さすがにきまり惡さうに。

孝吉は彼女に何か一言云はずにゐられない氣持がした。例へば僕と同棲してゐるよりは他に間借でもして勉强でもしたらどうか、とか、無論生活費ぐらゐは何とかして當分援助するからフランス語の學校へ行くとすれば矢張その學校の附近にゐる方がよいから、神田へんに下宿をしたらどうか、とか、彼女を善き意味にも惡い意味にも一考させ得るやうなことを云はずにゐられなくなつた。事實彼は此のまゝ彼女と同棲を續けることは好まなかつたのである。彼女の第一の目的はタイピストになることではなく女流作家になりたいことであつた。旁々フランス語を學びたいと云ふのであつた。兎も角孝吉は彼女が日に〳〵增長して行くことが不快に感ぜられた。彼女のその複雜な頭腦のはたらきがいやであつた。男の客から握手を求められることを好機會として孝吉の上に何等かの効果を見ようとするその妖婦性がたまらなかつた。

恰度その詩人某が遊びに來た翌日の晝飯の時である。ちよつとした話から隣の犬の話に二人は移つた。隣の犬は非常に怜悧であるといふことを彼女の方から話し出したのである。

『ほんとにあの犬は怜悧ですわ。わたしがお菓子をやつても喰べませんの。唯鼻の先で嗅いだゞけで決して食べませんの。野良犬だつたらあんなことはありませんわ。主人以外の人から與へられる物に對しては不安なんでせうか。あの犬

は特別怜悧のやうですわ。』

『さうだあの犬はテリヤ種の怜悧な犬だよ。此の間も空地に僕が立つてゐると門のところへ出て來たから口笛を吹いてやると、唯尾を振つただけで寄りつかうとはしない。見ると主人がその一方の庭で植木をいぢつてゐるんだ。あの犬はどんなに他人が好感を與へても主人と他人とを決して一緒にはしないやうだ。主人の前で他人に媚びるやうなことを斷じてやらないのは實に感心だと思つたよ。』孝吉はさう云つてゐるうちに、自分の言葉が恰度都合よく彼女にあたつたことを知つた。彼女は默つてしまつた。見る〳〵うちに目色を變へたかと思ふと、喰べさしの碗と箸とを激しく置き去りにして次の三疊の間に行つてしまつた。再びやつて來たと思ふ間にそこにあつた雜誌をひつつかんでぱり〳〵と引き裂いて庭の方へ放り投げた。かう云ふ時の彼女の顏は全く夜叉のやうであつた。

『亂暴しちやいかん。』

『ひどいことをおつしやるから。』

『物をやぶいたりするのは甚だよくない。』

『わたしは犬にも劣る人間です。え、わたしはあの方と握手しました。あなたが握手を許すとおつしやつたからです。』

『だから好いぢやないの、握手したつて。人から握手を求められるのは君だつて嬉しいだらう。』

『好いですよ。』

八

夜が更けてから風が吹き出した。孝吉は毎夜晩くまで書きものをするのが例になつてゐた。彼は或る女の生涯の一片

を取扱つた短篇を書きつゝあつた。それは同棲の彼女をモデルとして、彼女の性格、彼女が彼と同棲するに到るまでの生活經路を描くことであつた。それには彼女の生家であつた魚問屋が沒落するまでの前後のこと、詐僞破產の告訴をされて彼女の父が入獄したこと、その父が出獄後間もなく妹の家で淋びしく死んで行つたこと、彼女の父はもと〱養子婿であつたこと、幾度か舅姑との折合が惡くて實家へ走つたこと、さうした意味から彼女の父はその晩年を自分の妹の家に身を寄せてゐたこと。その妹なる卽ち彼女にとつては叔母であるその婦人は誰れにもその子達にまで彼女の父の死を報告しなかつたこと、その叔母は尋常の婦人ではなく一生涯未婚で通したほどの變質性の婦人であること、その叔母が曾て東京へ住んでゐた當時、彼女は十二三で引きとられて一方ならぬ苦痛をなめさせられながら學校へやつて貰つたこと――小學校時代にはちんちくりんの海老茶の袴をはいて髮を引きつめに結つて人一倍おはねであつたこと。然し學校はよく出來たこと、東京から彼女は再び鄕里へ歸つて小學校の代用敎師に雇はれ、同じく代用敎員を勤めてゐた兄と共に一年あまりそこで暮した。そして間もなく兄と共に東京へ出て來た、兄と別々になつてからの放浪的な下宿屋生活、三角關係の戀愛、さうした彼女の樣々な經路を一應孝吉は考へて見るのであつた。それらを考へてゐると彼女に對する愛憐の情で胸がいつぱいになつた。

　彼女は隣室でぐつすり寢入つてゐた。もう夜は十二時を過ぎてゐた。孝吉はふとたへがたくなつてペンを靜かに措いて、襖を開けて隣室を覗いた。そして彼女の寢てゐる枕元に音を立てぬやうにして座つた。

『正直な感情を持つた女だ。ほんのまだ小娘だもの。』彼はしみ〲その寢顏を眺めながら思つた。彼女の枕元にはインキ壺とペンと書きさしの原稿が置き亂してある。彼女は每夜のやうに何か自分のこれまでの體驗を主題とした小說のやうなものを、寢床の中へ入つてから內證で幾時間も書くのであつた。此の夜も幾枚かの原稿を汚して遂に疲れてそのま

ゝ寢入つてしまつたのである。未來の女流作家を夢に見てゐる彼女の寢顏を見てゐると孝吉はふとおかしくもなつた。鼻をそつと彼はつまんでやつた。彼女は脣をもぐ〳〵させた。そしてふふんと呻つた。

戸外は相變らず風が吹き荒れてゐる。北隣の垣根のあたりで犬の子が悲しさうにひん〳〵鳴いてゐる。遠くで鷄が歌つてゐる。

彼女は眼を醒ました。靜かに眼を開いて孝吉を見入つた。

『あゝ、わたし悲しい夢を見てゐたの。ほんとに悲しい夢を。』

『どんな夢を見てゐた。』

『父の夢ですの。』彼女はぽろ〳〵ともう淚を流してゐた。孝吉もつい誘はれたやうに淚が目ににじむのを覺えた。

『何故さう泣く。』

『あの犬の聲が可愛想ではありませんか。』

『うむ、俺はあの犬の子の鳴き聲を聞くと死んだ赤ん坊のことを思ひ出してたまらなくなる。』

『さうお……』と彼女は彼の顏を見て『あの犬の子はいつも鎖で繋がれてゐますのよ。人間もあの犬の子と同じですわ。形のない鎖で繋がれてゐるんですもの。』

『だから、それをたち切らなくちやならん。その勇氣が人間には一番必要だよ。どん〳〵たち切つて自由に自分の運命を開いて行くのさ。それが眞の生活なんだ。お互に勉強して進まねばならぬ。』

『さうですわ。わたしもさう思ひますの。わたしのやうな者は結婚しては駄目かも知れませんわ。わたし、それよりも一生涯眞面目に獨身で勉強しますわ。あなたに導いて頂いて。』

『俺といふ人間が人を導けるものか。俺は小さな人間だ。』

『わたし　あなたに好い奥さんを持たせてあげたい氣がしますの。わたしさう思ふの。よく行きとゞく、しつかりした善良なきれいな人を。あなたはさう云ふ人にぶつからないから不幸ですのよ。さう云ふ人にぶつかればあなたは家庭を持つて行ける方ですわ。』

『そんな好い女は俺のやうな人間の妻君にはなりやしない。』

『それは分りませんわ。わたしの二番目の姉だつたらあなたに屹度好いと思ふんですけれど。』と彼女は本氣らしく云つて『それは姉妹中で一番きれいなの。それでしつかりしてゐますのよ。わたし、あの姉を今の亭主と一緒にして置くのが惜しいんですの。それはいやなぼんくらな男。あの角の藥種屋のおかみさんねえ、ちよつとあんなやうな型の女ですのよ。そつくりよ。もつとわたしの姉の方がきれいかも知れないわ。』

『いくらきれいでも、それは仕樣がない。』

『まあさうですけれど。』と彼女は笑つて更に『でもあなた駄目よ。此所へ訪ねて來る女の人で、此の人はと思ふのはないぢやありませんか、靜子さんだつて、幸子さんだつて、あなたどう思つてゐらつしやるか知りませんけれど、あの二人の方のどちらとあなたが假に結婚なさつても、大して幸福にはなれないとわたし思ひますの。』

『無論さうさ。あんな若い人と僕は結婚をする氣はない。僕などはもうこれから年をとるばかりだ。若い人を妻に持つて我がまゝをされても構はぬと云ふ氣にもなれない。それよりも恰度好い年頃の死に水をとつて貰へるやうなのが好い。』

『あなたに死に水をとつてくれる人は意外な人かも知れませんわ』と彼女は頰笑んで、『でも、わたしが、あれつきりお

家に來なかつたらどうなつてゐるか分りませんわ。靜子さんだつて、わたしに敵意を持つてるんですもの。』
『いや、僕は最初からあの人とはお友達以上にはなれないと思つてゐた。』
『好うございますよ、そんな辯解なさらなくとも、あなたも仕合せねえ。皆あなたに野心を懷いて訪ねて來るんですもの。そして敵視されるものはわたしだけ。』
『もう晩い。おやすみ。俺もこれから寢るんだ。』孝吉はさう云つて彼女の枕元を立ちかけたが『君はあんな亂暴をなるたけするなよ。本をやぶいたり何かするとこまる。一緒にゐる間は互に怒らせないやうに用心しよう。相憐れむ氣持を失はないことにしよう。僕も不幸な男だから。』
『わたしがいけないのよ。あなたを不幸にしてゐるのはわたしでせうから。』
孝吉はそれには答へず、自分の寢室へ來て寢た。戸外の風は幾分靜まつてゐた。

九

それから數日か經つて彼女はまたしても孝吉の原稿をめちやくに引き裂くほどの亂暴をやらかしてしまつた。それは彼女をモデルにして孝吉がひそかに書きつゝあつた短篇の內容を遂に彼女は嗅ぎつけたからである。彼女はさうなると自分の狂的な感情を抑制することの出來ない女であつた。孝吉はその時唯色を變へたゞけであつた。自分にも非があるとあきらめたのである。彼女は直ぐに後悔した。そしてその日の夕方、ちよつと用達しに出て來ると云つて家を出て、それきり歸らなかつた。孝吉は氣にかゝつたが三日目に次のやうな手紙が來た。
『わたしはわたしを罰すべくあなたのおそばから自分をもぎ離してしまひました。今はすべてをお許し下さいませ。わ

たしはわたしの首にからみついてゐる鎖を絶ち斷らなければ止まない覺悟でございます。あなたのいつぞやのお言葉通りにわたしはその勇氣を振り興しました。わたしの居どころは當分お知らせいたしません。おそばを離れてから、まだ三日より經ちませんけれど、それでもわたしには永い永い待ち遠しい幾日かを迎へたやうに思はれます。病氣や、生活の急變で、なるべく過ぎたことを考へないやうにしてをります。一日も早く自活の基礎が出來るやうに努めてをります。此の生活が過ぎ去つてからお目にかゝれると存じてをります。その時にわたしの罪を心からおわびいたしたいと存じます。今はたまらなく神經的になつてゐるわたしは出來る限りそれを有効に他の方へ費消しようとしてをります。わたしは此の手紙と同時につまらないものをお贈りすることにいたしました。けがらはしいとお思召しなさいましたらばごみ溜へでも何處へなりとお棄て下さいませ。然し眞實これはわたしの心からのものでございます。どうぞおからだを御大切に。さよなら。

三好孝吉樣御許へ

澤子より

居所は書いてなかつた。唯小石川にて。としてある。新宿の兄のところへでも行つてゐるのだらうと孝吉は思つてゐたが、さうでない。彼女の居所を知りたいとは思はないが、何となく氣になつた。手紙には何かを贈つたとしてある、生活の基礎……云々と書いてある。彼女の跳ねつ返りな勇氣を彼は笑ふことも出來なかつた。何處かへお友達の世話で女中にでも行つたのか、それともカフエーに……と孝吉の豫感はさまざまに動いた。白いエプロン姿に變つて彼女がこれまで卑んでゐたその女給生活に彼女が身を落してゐようとは孝吉には思へなかつた。『或は分らない。』彼はさうも思つて見た。

翌日小包が來た。彼は直ぐにそれを開いて見たくなかつた。あまりにいたましいからである。さう云ふものを彼女から贈られることが既に心苦しいのであつたのでそのまゝ彼は床の間に置いた。彼はまたしても、もとの孤獨に歸つてさびしく自炊生活を續けねばならぬのであつたが、一面には氣持が何となく輕やかになつてゐた。長い道程を辿る旅人は時々草鞋を脫いで素足の快感を僅かの間でも貪つて見たいものである。然しそれはいつまでも堪へられるものではない。草鞋は旅人に矢張必要である。その意味で彼が今後長く孤獨を續け得るものとは思はれなかつた。兎に角彼女と同棲してゐることは何時狂暴性を發揮されるか知れない點に於て初めから望まなかつたのだ。そして、それは最初から豫期した通りであつた。彼は二つの極端なる女性の性情を知ることが出來た。最初に結婚した妻は鈍重で陰忍力の强いぼうとした女性であつた。次に同棲した彼女は銳敏でヒステリックで直情であつた。彼はその孰れにも安定を得ることは出來なかつたのである。彼は最早一生涯つれそふことの出來る女性を見出すことの困難を感じた。

『自分は女性についてあまりに完全を求め過ぎるのであらうか、いやさうは思へぬ。世には多くの美くしい善良な、しとやかな、良人に忠實な、貞節な、賢い婦人がゐるではないか。豐麗で健康で從順で訓練された女性がゐるではないか。自分はさうした婦人に出逢はないのだ。俺はさうした女性を友人の妻君に見た。先輩の妻君にそれを見た。電車の中で見た。ステーションで見た。未亡人に見た。商店のおかみさんに見た。女學生の中に見た、然し不幸にして自分はさうした女性を得ることの出來ない運命の男だ。一生自分はその點に於て惱まねばならぬのであらう。』彼の氣持を文字にするとさうなるのであつた。然し彼はもう一つ自分について次のやうな缺點を氣づく必要はなかつたか。

『いや、自分には弱いところがある。何よりもそれがいけない。自分には人をつけ入らせる、よくないところがある。威嚴がない。愚かなる女性をも賢明に生かし得る暗示的指導力がない。ひどく感情的で勝氣な反抗心を起し易い彼女の

如きをば飽くまで馴らし導いて行く力に乏しい。即ちその結論は自分自身が偉大でないことになるのだ。一個の女性をさへも制御して行く男性的威厳がないのである。良夫は良妻を作る……』と。實際に彼にはその缺點があつた。その點は彼女さへも批評したくらゐだ。『あなたは人を頭の上まで乘らせるところがありますわ。人が此の人なら少々の無禮をしてもよいと思ふやうに仕向けるところがあつてよ。さうしてくれと云はぬばかりにいつも人に對してはなさる。あなたはそれを自分でも知つてゐるのよ。それでゐて自分をその缺陷から救はうとはなさらない。それが一等あなたの不幸な原因なの。』と女は云つた。彼はそれに對してはかう云つた。それは、つけ入る方が馬鹿だからと。然しそれは金を得ることにかけて常に劣敗者である者が貧乏は正義であると直ちにさう信ずると同一のものであつたらう。

　彼は彼女がゐなくなつてからはよく佐藤と云ふ友人の家を訪ねた。遊ぶには此の友人の家が一番近かつたのである。佐藤は自から一草庵と號して巣鴨の町裏の閑靜な位置にある小さな平家を書齋として獨り住んでゐる文士であつた。彼の妻君は長い間肺患で、そこから五六丁離れたところに母親と共に別居してゐたのである。が二月ほど前に死んだのである。妻君の病中佐藤は朝夕二度の食事をその一草庵から病妻の家まで通ふのであつたが彼女の死後はその草庵で自炊をしながらわびしく著作をしてゐる男である。孝吉は此の男と話してゐる間はいつもの憂鬱から救はれた。佐藤は彼に云つた。

『まだ〳〵お互にこれからだよ。もう五年たつて見たまへ。あゝあの頃はなあ、と今のことを追惜しなければならぬ。だから人間は現在が一番よい時なのだ。僕の妻も灰になつてしまつた。碇はあげられた。君と同じ孤獨に歸つた。お互に好いのによつつからうではないか。』彼は決して人前でくよ〳〵した顏をしない男である。此の男は悲しみと云ふものを知らないだらうかと疑はれるほどである。然し彼はつい先頃まで病妻のもとに食事をしに行く時には、病妻の好む果

物を買つて持つて行くことを忘れないのであつた。夕方友達と酒場へ行つて晩餐をしなければならぬ場合にも、一度病妻の家まで行つてそのことを告げてからでなければ無斷ではしなかつた。病妻は彼と食事をする爲めに彼を待つてゐたからである。然し孝吉に對しては云ふ。

『いや、俺達夫婦も不幸な夫婦だつた。互に不滿がちで十年間を一緒に暮した、二人はそれほど愛し合ふこともなしに一緒に暮した。妻は僕以外の男を愛することも出來たゞらうし、僕も妻以外の女を愛し得た。君の思つたほどには幸福ではなかつた。だから彼女はあんな病氣になつたんだ。愛してもゐない男に一生を代なしにしたと思ふと可愛想さね。』

『然し君の奥さんは僕から見ると申し分のない人だつた。君は二度目にあんなきれいな人と恐らく結婚は出來まいと思ふ。』

『さう輕蔑したもんでもないよ。』と相手は笑つて『僕は今度は二十前後の純眞な處女と結婚しようと思ふよ。時に今日の××報新聞を君はまだ見ないだらう。見せるから待ちたまへ。』佐藤はさう云つて隣室から××報新聞を持ち出して來た。

『これ、池田潮鳴未亡人と佐藤牧村氏との縁談と云ふ見出しだ。面白いいたづらを新聞と云ふやつはするものさ。』

『全く無根でもないだらうが。』

『笑談云つちやこまる。』

その記事には二三年前物故した小説家池田潮鳴未亡人千枝子と佐藤とが互に意志相通じて近く今村武夫と云ふ男を媒妁人として結婚するらしいと云ふのであつた。

『これが事實となつたら地下の潮鳴も嘘をするだらうな。』佐藤は笑つた。

『いや、以て瞑すべきだらう。』

『ところが今朝、大塚のガード下でばつたり未亡人と出逢つたものさ。面白いだらう。今日は、と云ふすました御挨拶で、僕も今日はと云つたゞけだ。僕だつて人もあらうに未亡人との結婚はいたみ入るよ。何故つて、それは非常にいけないものなんだ。死んだ良人と云ふものはなか／＼忘れられるものぢやない。だから未亡人と結婚するなんてことは君だつてまあよしたまへ。何かにつけて死んだ良人の美點ばかり引き合ひに出されてたまらないんださうだ。そこへ行くと生き別れに別れたのはまだ取り柄があるつて云ふからね。』佐藤は云つた。

『さうしたものかな。』と孝吉はうなづいて

『だが未亡人には詩があると思ふ。』

『それは君の空想だ。』佐藤は云つた。

『ぢや生き別れをした女は好いのかい君。』

『いや、それもあまりよくない。矢張初婚の處女でなくちやいけない。それからもう一つ君に注意して置くよ。文筆で立たうと云ふ女はいけない。これは以後よしたまへ。時に君のお弟子の赤塚澤子は小石川の何とか云ふカフエーにゐるつて話しだが知つてるかね。』

矢張彼女はカフエーにゐるのだなと孝吉は此の時急に躊ぎ込みたくなつた。彼女について佐藤が間接に聞いた話しによると普通の女給とはどうも感じが硬いので客の興味をそゝらないと云ふのであつた。四人の肥つた女給達の間にあつてさびしく離れた態度をとつてゐて、客が話しかけても、あさうですか、とか、いゝえ、とか、存じませんとか云ふだけであまり相手にならうとしないと云ふことや、他の女給の一人は彼女を許して『あの人はピアノを叩くやうに時々ど

ちかするとテーブルの端を指の先で押へたりするのよ。少し氣ぐらゐが高くつて、とてもこんなバーなんかに長く勤まる柄ぢやありませんわ』と云つてゐたさうだと云ふことなどを孝吉は佐藤から聞いた。

『自分に相談もせずに勝手にそんなところへ行つたんだ。K氏のところへフランス語を習ひにやると、それも自分には相談なしで斷つてしまつた、生活費の援助は月々するから間借で自炊をするなり、下宿屋住ひをするなりして早く自活の出來るやうにタイプライター敎習所へ通つてはどうかと云つても聞かないで飛び出してしまつたのだ。』孝吉は心でさう自分に申しわけをして見たが氣持が許さなかつた。

十

近々上京すると云ふ手紙を寄せた大野八重子が孝吉を訪ねて來たのは、同棲の澤子がカフエーへ走つてから一週間目であつた。八重子はその後の孝吉の身邊のことは一切知らないので彼が獨身で暮してゐることを格別意外にも思はなかつたやうである。孝吉も自分のことをあまり語らなかつた。唯溫泉場で偶然から云ふ人に逢つたことだけを彼女に話した。『まあさうでしたの』と彼女は少し狼狽して見せた。彼女の話しの節々では再びもとの良人のもとへ戻るより他に今は自分として正しい道はないと考へてゐるらしいのであつた。それを決定する前に彼女が孝吉を一度訪ねて來たと云ふことは考へやうによつては意味がありさうであつたが、孝吉は彼女に對して、再びもとの良人へ戻られることは何よりだとか、子供さんの爲めにもそれは望ましいことだとか、尤もらしいことを云つた。それが果して彼女にとつてよいことか惡いことかは彼にも分る筈はない。唯孝吉はさう云はねばならぬ氣持を此の場合意識したに止まる。

大野八重子が訪ねて來た翌朝、孝吉がまだ寢床にある時、裏口から入つて來るものがあつた。それは澤子だつた。

『まだ寢てゐらつしやるの。』

『あゝ』孝吉は落ちついた聲で寢ながら答へた。彼女が無斷で裏口から突然やつて來たことには少しも驚かない人のやうに彼は落ちついた緩顏で彼女を見た。戸外は雨が降つてゐたので女は裾のあたりをしぶきで濡してゐた。起きぬけにやつて來たものと見えて、或は顏をも洗はないでやつて來たらしく、前夜寢しなに化粧を落したまゝの蒼ざめたその顏は亂れ髮に掩はれて見えた。狂女のやうにいたましくやつれた姿で暫らくそこに突立つてゐたが、やがて孝吉の枕元へ來てすわつた。

『どうした。』

『あなたがどうしてゐらつしやるかと思つて來て見たの。』

『どうしてそれを知つて。』

『君はカフエーにゐるのかい今。』

『…………』孝吉はそれには答へず『ひどく顏色が惡いぢやないか。』

『え、身體がぐつと惡くなつてしまひましたの。夜、晩くまで起きてゝ冷えるもんですから、すつかり身體をこはしちやつたの。』

『誰がこはせと云つたのかね。』

『…………』女は默つてゐたが『あなたも僅かの間見ないうちに少しお痩せになつたやうですわ。入つて來た時にちよつと見てさう思ひましたの。』

『いや、僕は痩せなんかしない。健全だ。一人でゐるとのび〳〵としてます〳〵健康になるばかりだ。』

『さう、』と女は變に答へて床の間を見やつて『わたしのお送りしたものは何故開かずにそのまゝにしてゐらつしやるの。けがらはしいとお思ひになつて。』

『いや、開いて見るのは俺には苦しかつたからだ。あれは何だね。中は。』

『何でも好いわ。ワイシヤツよ。』

『カフエーで働いたお金で買つてくれたんだね。ありがたい。女がカフエー稼ぎをしてシヤツを買つてくれるなんて、俺も男甲斐がある。然しみじめだ。』

『さうぢやないのよ。あなたのお金がわたしの蝦蟇口に少し殘つてゐたの。だから、それに足してあれを買つてお送りしました。冬のワイシヤツがもう一枚ぐらゐあつても好いと思つたからですの。』

『カフエーにはどう云ふつもりで行く氣になつたのだね。僕に一言も相談しないで。』

『それは惡うございましたわ。でもわたし、あなたにばかり御厄介をかけるよりも、少しでも自分で働いて、一月分の下宿料でも溜つたら、それでタイプライター教習所へ通ふつもりでしたの。あなたは自分の精神さへ間違はなければ何をやつても修養になるとおつしやつたでせう。わたし體驗のつもりで行つたんですの。』

『修養になるからカフエーの女給になれとは僕云はなかつたよ。まあ好い。然し身體をこはしちやつまらんぢやないか。』

『え、わたしもさう思ふの。』女はさう云ひしなに後方へ手を突く拍子に彼の枕元の煙草盆をひつくり返して『あら大變』と云ひながらそれを始末した。その間二人の對話はとぎれた。

『惡いことは云はないから。よすが好いよ。そして早く下宿屋か貸間でも探して、そこで落ちついてタイプライター教

習所へ通ふやうにしたらどうだ。生活費ぐらゐは當分援助するとあれほど云つたぢやないか。僕の家にゐて何かと世話して貰ふも好いが、君と云ふ人は火の玉のやうな人だから、俺はおつかない。さう度々原稿なんか引裂かれては俺もやりきれない。』

『え、わたしも今度はお家におさして下さいとは申されませんわ。今明の中に貸間でも見つけたいと思ひますの。そして先づ身體をよくしたいんですの。腰が痛んで夕方になると熱が出るんですの。』彼女はひどく衰弱したらしく云つた。

孝吉は聞くなく寢床を出た。彼女は自分の家へ戻つた氣で、脫ぎすてゝ行つたエプロンを着て早速流しもとで米を洗つたり、焜爐に火をおこしたりして朝飯の支度にかゝつた。やがて二人は八日ぶりに朝飯の膳に向ひ合つた。憐れむ心と、もてあました氣持とで孝吉はあまり口をきゝたくなかつた。僅かの間ではあるが、彼女は毎夜多くの客からみだらな視線を向けられ、袖を握られ、無遠慮な笑談や謎のやうな言葉をかけられたであらうと孝吉は思つて見ないではゐられなかつた。女給であるからには彼女はそれに對してぶあいそであつてはならなかつたに違ひない。彼はさう思つて彼女の細い手をそれとなく見た。胸を見た。肩のほとりを見た。唇を見た。さては頰を、瞳を。憎ましい想像が此の瞬間彼の脳裡を過ぎた。それを咎める立場を自から否定しながらもさうした想像の惱みを避けることは出來なかつた。憎ましさに似た憐みを避けることは出來なかつた。

『で先方にはどう云つて來たのだ。今日は行かなくても好いのか。』

『今日は公休日ですの、でなくても何時からやめてもそれは構はないんですの――あゝ、久しぶりに御飯らしい御飯を喰べたわ。』

『何故。カフエーは喰べものは好いだらう。肉や何かはいくらでも喰べれただらう。』

『いゝえ、とても』と彼女は輕い咳をしながら『家の者は主人だつて肉なんか喰べませんわ。それはひどいの。三度三度お香香ですの。冷御飯にお香香きりですの。だからわたし營養不良になつたやうですわ。始めてあんなところの生活を見ましたわ。夜は二階の食堂のテーブルや椅子をかたづけて、そこに薄い蒲團を敷いて四人で寢るんですの。二人の女給はその家の親戚のものだつて厚い好い蒲團に寢るんですの。わたしはもう一人肥つた、それはもう姙娠五ケ月と云ふ身持の、その若い女給と二人でくるまつて寢るんでしたの――えゝ朝は十時までに起きれば好いことになつてるんですが、わたしそこへ行つてから、ちつとも夜眠れないでせう。だから一層身體が衰弱しましたわ――えゝ、夜寢るのは大抵二時ですもの。毎晩醉つぱらひを相手に、全くカフエーの女給なんて可愛さうよ。わたし好い體驗を得たわ。それはあんなとこへ來る男つて醜惡だわ。』

『夜客につれ出されることもあるだらう。主人の方でそれを強いはしないのか。』

『それは非常に嚴しいんですの。主人の方では自分の店の格を保つ爲めに斷じてそんなことを強いたりはしませんの。それどころですか若し客と變なことでもして分つたら直ぐに追ひ出しを喰ふんですの。その主人と云ふ人がまああなたにそつくりの人なの。頭のある人で、わたしを最初から女の文士と見たらしいんですの。洋食屋同志で何か料理雜誌のやうなものを月々出してゐるやうでしたわ。洋食に關する自分の意見を文章にしてくれないか、などゝわたしに云ふんですの。』彼女はさうした話しをした。大學生と勞働者とが酒に醉つて議論をした時、とう／＼勞働者がその三人の大學生をへこませてしまつたことや、田舍出の二人づれの老人の客に金を始めて貰つたことや、自分は他の女給達のやうに客にあまり親しまなかつたから、貰ひは殆どなかつたと云ふことなどをも彼女は語るのだつた。戸外は冷たい雨が降りしきつてゐた。床でも敷いて靜かに寢たが好いだらう、そして明日雨でもやんだら、飯田町の病院へ行つて身體を見て

貰ふことにしてはどうだ』孝吉はそれ以上何も云はなかつた。彼女はやがて隣室に寢床を敷いて身體を休めた。夕方までぐつすり眠つた。

翌日、彼女は飯田町の病院に行つたが、醫者の診察では子宮がひどく惡い上に呼吸器も弱つてゐるとのことだつた。子宮の方は或は手術をしなければならぬかも知れぬと醫者が云つたと彼女は云つた。

『あゝ何たることぞ。』と孝吉は愚痴つぽい感情でいつぱいになり『院長に見て貰つたのか』と訊ねた。

『え、院長と副院長と二人で見てくれましたの。』女は云つた。

『まあ仕方がない。然し君はもつと自重しなきや駄目だ。』

女は俯向いて唯默つてゐた。孝吉は夕刊を讀んでゐたが、ふと飯田町婦人科專門病院のその院長が九州地方へ旅行中で、非常な歡迎を受けて各地で講演してゐると云ふ記事を見出すと同時にちよつと不審が起つたので彼女に訊ねた。

『院長に見て貰つたと云ふが、院長はゐなかつた筈だ。』

『…………』彼女は隣室にゐて直ぐは返辭をしなかつたが、『え、院長はゐませんでしたの。副院長と助手と二人で見てくれましたの。』

『ぢや、院長が診察してくれたのではないのだな。』

『え。』

孝吉は僅かの彼女の嘘を不快に感ずるほど氣持は苛立つてゐた。彼女を反省させる強い言葉を吐かずにゐれないのであるが、云へば云ふだけ自分を自分で傷けなくてはならぬと云ふ恐れを持つた。

『これまでの關係上僕は君に出來るだけのことはするつもりだが、僕に相談なしでカフエーなどの女給になつたりする

のはよくない。君はどう思ふ。』
『え、それは分つてをります。でもわたしは行くところを持ちませんから、あなたをたよるより外はないんです。お宅へ戻つて來る顔はないのですが、わたしはあなたの他には甘へる人を持ちませんから許して下さい。これまで原稿を引き裂いたりいろ〳〵の悪いことをしました。然しわたしは他の人になら出來なかつたでせう。あなたにだけは出來たのです。』
『人に許されようとする氣持はよくない。君は僕のあまりに意氣地のないところを知り過ぎてゐるのがいけない。僕と云ふ男はどんなことをしてやつても好いと思ふのはよくない。』
『さうは思ひません。然しさう思はれても致し方はありません。』
そんな話しをいくら續けても同じだつた。彼女の身體の工合は二週間程も經つうちにもとに復して氣分も輕快になり腰のだるさも直つた。適當な貸間が見つかり次第別居すると彼女は自から云ひながらも、男を再び自分のものにすることが出來たと云ふ確信に安んじてずる〳〵べつたりに居据つてしまつた。孝吉はそれを餘儀なく默認した。或る夜のこと、彼が讀書してゐると女は六疊の書齋の電燈を急に消してしまつて彼の後方から抱きついた。無論じやれついたのである。
『うるさい。』孝吉は彼の腕をひねつた。彼はちよつとばかり心得てゐる柔道の手で輕く女を押へつけてしまつた。笑ひながらである。
『わたし先刻、怖ろしいことを考へて見たの。あなたを徹底的に殺してしまはふか知らと考へたの。その時はこんなやうに電燈を消してしまつたら……とさう思つて今やつて見たの。』

十一

十一月の下旬の或る日である。孝吉は兩國驛から三原行の列車に乘つてゐた。無論一人である。若し誰かゞ彼の服裝なり、强いて落ちつかうとしてゐるやうなその樣子なりによつて彼の內部即ち彼の旅行の目的やその氣持を讀み得たならばその人は次のやうに手帖に記したかも知れぬ。

『彼のポケットには質屋で借りて來た金が三十圓ほどある。それが彼には少し心細いのだ。房州の千倉には二人の若い女が待つてゐる。と彼は假定してゐるのである。彼はその二人の年若い女に逢つた上で此の旅行を淸い愉快なものにしたいのである。然し家には同棲の女を一人殘して來た。無論大磯の友人のところへ一晩泊りで行つて來ると僞つて、午前十時の發車の間に合ふやうに急いで家を出たのである。彼は今、日頃の彼ほどにみぢめではなかつた。幸福を感じてゐる。その幸福を抑へつけてゐる……。』

その通りであつた――馳る列車の窓外には廣濶な原野があつた。丘陵があつた。丘陵の彼方に習志野の兵營が見えた。冷厳な晩秋の空は悠々と地上のすべてを抱きかゝへてゐるかのやうに高く廣やかにのび誇つてゐる。

『お前は不幸である。然し自由である。お前はいたましい。然し自から樂しむことも出來る人間である。』自然は彼の不幸と缺陷に對してそれに相當する補ひを許してゐるかのやう。

『自然よ。さうですとも、私にそれが許されなかつたなら、私はとつくに自殺したでありませう。自然よ。自然は悠久であるが人生はいくばくでもありません。私はこれまで自分の若さを自分の前途の爲めに犧牲にして來ました。それは前途に望みがあつたからです。私はこれまで多くの戀を抑制し退けて來ました。それは自分の若さに對しての誇りがあ

つたからです。然し今は、もう泣いても笑つてもゐられないのです。……」

彼は自分の後半生にかうした若い氣持で旅行することが幾度もはないであらうとさへ考へて見るのである。二人の女は彼にとつて戀人と云ふほどのものではなかつた。彼は最早自から切ない戀と感じ得る戀をすることの出來ない年齢にあつたのは無論である。然し酒を好む人間が酒に醉ふことが出來ないと云ふことで盃を廢するわけにゆかないやうに、切ない戀が出來ないと云ふことでその慾望を棄てることは出來ないのである。

彼がかうしてわざ〳〵遠方の海岸にゐる彼女等に逢ひに行くその心理にはいろ〳〵のものがあつた。一つは現在赤塚浮子と同棲してゐることが彼女等の最初の好意に對してすまない氣がしたからである。彼女等は彼を愛人と定めるにはあまりに年が若かつた。唯、彼の離婚後の孤獨生活に對して可憐な空想を持つた同情者であつたと見るのが最も正しいであらう。孝吉自身もそれ以上に彼女等に對して思ふことは出來なかつた。靜子が父の家を逃げ出して來るとまでほのめかした時にも孝吉の態度は惡く云へば意氣地がなかつた。更に惡く云へば自分を守るに强かつた。その彼の消極的な自己中心主義が彼女の爲めにもよかつたと僅かに云ひ得るに止まる。靜子は資產家の娘であつた。そして既に父母の望みに叶つた或る立派な緣談が進行しつゝあつたからである。もう一人の幸子は靜子と同じ年齢のお友達である。此の二人の小女は同樣の好意を同一の對象に寄せ得ることを詩化してそのロマンチックな感情を滿足させてゐたのであらう。

「御無沙汰申上げました。いつぞやは御叮嚀に御便り下さいましてありがたく存じました。先日お目にかゝりました折からずつと風邪がぬけませんで弱つてをりました上に女中もゐなくなり少し身體を無理しました爲めにすつかり惡くなり、その爲め父母や兄のすゝめに從つて五六日前に此の溫泉場にまゐつてゐます。年末までは父母の云ふまゝに滯留いたすつもりでございます。一緒に父もまゐりましたが、三四日のうちに父だけは歸京することになつてをります。尤も

父は時々やつて來ることになつてをります。大好きな外海の遠鳴りが旅館の枕邊まで絶えず響いてまゐります。父が歸京した後はさびしく一人で私は讀んだり書いたりいたすより他はございますまい。承ればあなたの御生活に御變化があつたとのことですが私共はそれをいかに信じてよいのでございませう。おひまでございましたらお出かけ遊ばしませんか。兩國驛から四時間半で來れるところでございます。

君在ます方に横たふ山脈のま上に一つの雲切れの見ゆ。

靜子

『お便り只今ありがたく拜見いたしました。おいで下さいますとのこと、今からよろこんでお待ちしてをりますわ。でも十五日頃までおいでを願へないでせうか。十六日でよいのですけれど父が十七八日頃にまゐりますから、それ迄においで下されば好いんですけれど……早くいらして下さいませ。時日をお知せ下されば必らず停車場迄お迎へにまゐります。きつとお早く、さよなら。

靜子』

『一昨日父がまゐりましたの。そして昨日上記のところに移りましたの。これからは自炊ですのよ。一日中あたゝかい光りと風とが入つて來る海に近い靜かな家でございますの。父は四五日ゐてまた歸京するでせう。

どうしておいで下さいませんの??　おいでになります時は朝八時か十時半の『南三原行』で兩國驛をおたちになれば午後二時半までには着きます。ではまた……。

靜子』

『何故お便り下さいませんですの。今朝、ミス幸子がわざ〳〵來て下さいましたのよ。四五日は二人きりの生活をいたしますの。あなたが早くいらして下さつたらとお噂してをります。おいで遊ばせな。三人で久しぶりにお話しいたしませう。波も渚も松も山もみんなきれいですわ。おいで下さいますなら電報でお知らせ下さいませ。二人で驛までお迎へにまゐります。二三日うちにどうぞ、お待ちしてをります。靜子、幸子』

人は手紙で現すほどに純眞でないことは無論である。その意味で手紙に現れてゐるほどでない嫌もあり得るのである。孝吉にもそれは分つてゐた。彼女達は男をうまく引きずり出して思ひきり酢を飲ませてやることを知らない年頃ではなかつた。男がわざ〳〵遠いところを來てくれたと云ふ喜びよりも、とう〳〵此所まで尻引き出してやつたと云ふ何かの意味での誇りを感じ得ない年頃でもなかつた。孝吉もそれを一應考へてゐないではなかつた。若しさう云ふ意味で此の旅行が全然失敗に終つても悔いないだけの心構へはあつた。此の旅行は少々ぐらゐ彼女達を得意にしても好いと思つた。彼女達に少しぐらゐ傷けられてもそれを以て自分を悲慘だと感ずるわけには行かないと彼は思つた。彼女達を出しぬいた形で現在の女と同棲してしまつたその罪を補ふ意味で如何なる迫害をも一應甘んじて受けねばならぬ氣がしてゐた。彼には彼女達を戀してゐるのでなく小娘として愛してゐると云ふことが興味でもあつた。よしや旅先でだまし打ちに逢ふとしても年若い彼女達からそれほどの目に逢はされるだけの何等かの價値が自分にあると云ふことで或る一面の滿足は得られる。然しまた、わざ〳〵質屋へ物を運んだりして、無理算段をして、好い年をして、お茶びいの後を追ひ廻つてゐると云ふ風に考へると、列車の窓硝子に映る自分の顏が愚かしく見えるのである ―― 汽車は此の時最早千葉驛を過ぎて木更津沿岸を馳つてゐた。列車の窓から眺めると初めて過ぎる土地でも曾て一度通つたことがあるやうな氣のするものだ。とか、汽車と云ふものは恰度蓄音機の針がレコードの上を辷つて走るやうな音をさせて旅客の心に思ひ〳〵の歌を歌はせるものである。とか、私の心はレコードである。とか、彼は時々外套のポケツトからノートを取り出しては妙な感想を書きつけたりした。

千倉驛に着いたのは午後三時だつた。海濱特有のスツキリした空氣に胸をそらせながら彼はステーションの改札口を出た。彼女達が偶然そこらに姿を見せはせぬかとあたりに氣をくばつた。前以て通知をしなかつたので彼女達はそれを知

る筈はない。それで好いと彼は思つた。俥を雇つて彼女が最初にゐたその旅館まで彼は馳つた。十五分でその旅館の玄關についた。彼は女中に案内されて露臺のある表二階の一室に落ちついた。

『柏原と云ふ人が此所に此の間までゐたでせう。若い娘とお父さんとが。』孝吉は女中に先づ訊ねた。

『柏原つて方でございますか。』と年増な女中はちよつと思ひ出せぬ顔をして『え、え、靜子さんでございますか。ゐらつしやいました。恰度此のお部屋にゐらしたんでございますよ。今は濱の方へお移りになりました。でも毎日二度ぐらゐは此所のお湯においでになります。二三日前からもう一人お若い婦人の方が見えて、よくお二人でおいでになります、御存じでゐらつしやいますか。何なら呼びに使ひをやりましてもよろしうございますが。』

『いや、まあ。』

『今しばらくしたらお見えになりますでせうと思ひますが――あのお湯をおめしになつては如何でございます。そのうちにお見えになりませうから。』

孝吉は早速服を脱いで階下の浴場へ行つた。淡い醤油色の鑛泉に浸りながらこれから三十分後のことを想像してゐる彼の顔は常には見られないものであつた。

遠い廊下の方で次のやうな聲がしてゐるのを彼は湯槽の中で聞いてゐた。

『あらさう。』

『今お湯に入つてゐらつしやいます。』

孝吉は殊更に落ちついた顔をして湯槽の中にじつとしてゐる。どたばたと二階へ上つて行く足音を聞きながら微笑してゐるのである。かうなると彼には風呂に入つてゐたことが好いのである。もう十分、彼女達がおくれて來たならば彼

は風呂からあがつて彼女達の來るのを部屋で待つことになつたのである。かう云ふ場合には誰しも待つ身よりも待たれる身の勝利感を望むものだ。孝吉の部屋から三間ほど隔つた南の端の一室には大學生が泊つてゐた。孝吉が風呂場から二階へ上つて來た時、靜子はその大學生の部屋で大聲に笑つてゐた。で彼は廊下に立つてゐる幸子の方に早く挨拶した。

『まあ、よく。』

『え、あなたが來てゐられるからわざ〳〵來たんですよ。』此の言葉は彼女を喜ばせ得た。

『そんなら一層感謝いたしますわ。』と幸子は靜子に聞えては惡いやうな調子で云つて『毎日お待ちしてゐたんですのよ。』

此の時、靜子も大學生の部屋から出て來ていきなり蓮葉にかう云ふ。

『もつと早く何故いらして下さらなかつたの。もう來て下さらなくても好いつて云つてたのに。』

『ははツ。姬君の御病氣と承り早速御見舞仕るべきところ。それがし、まことに恐縮に存じまする。』孝吉もすかさずおどけて見せた。

『やだ……。姬君なんて、わたしプロレタリアガールですのよ。』と彼女は解きほぐした丈長な髮を後方へさばき『でも好いところでせう。後で濱の方へつれてつてあげますから待つてらつしやい。わたしこれから髮を洗ふんですの。直ぐですのよ。萬事はお湯からあがつてのことにしようねえ幸子さん。』

二人はやがて浴場の方へ行つた。

その夜は二人を相手に孝吉は晩餐をした。此の場合の批評を隣室の大學生にさせるならば、
『なあんだ畜生、得意、さうにやつてやがる。靜子のやつ、明日うんとやつてやらう。わたしにはかうして、わざ〳〵逢ひに來てくれるこんな人があると云はんばかりに見せつけやがる。先生なんて云はれて得意さうにお茶びいを相手にいつまでも飮んでやがるぞ、ひよつとこのプロ小說家め。ふふん……』
孝吉をしてそれに答へしめるならば彼はかう云ふだらう。
『なあに、さう云ふわけではないんだがね、まあ我慢してくれたまへ。明日は東京へ僕は歸るんだから、いづれかうした若い娘達は君達のものさ。僕は君達の向ふを張るなんてそんな若氣も持てないんだ。……』
更に靜子をして云はしめるならば彼女はかう云ふだらう。
『男を燒かせるなんて、なんて面白い愉快なことだらう。あの商科大學生のやつ、今夜はすつかりいぢけて小さくなつてるわ。先刻廊下で逢つたら變な皮肉を云つたりしたわ。わたしだつて、こんな海邊に來てゝさびしいからお友達になつてやつて時々散步も一緖にしてあげるのよ。それをそつちの方で勝手に自惚れてゐたのよ。今夜はうんとお酒を飮んで醉つぱらつて見せるから。……』そして更に彼女は孝吉に對してもそれと同じやうなことを思つてゐたやうだ。『わたしにはあんな大學生のお友達もあるんですの、あなたもたんと好い氣になつてわざ〳〵來て下すつたわね。』
もう一人の幸子は始終遠慮がちに靜子の侍女のやうにすべてに控へ目であつた。然し强いられるまゝによく彼女はお酒を飮んだ。かうしたところでこんなやうにして一緖に晩餐をするのが嬉しさうで絕えずにこ〳〵してゐる。孝吉は靜子よりも幸子の方を愛してゐたので心では飽くまで彼女を庇つてゐるやうであつた。隨分長い時間かゝつて三人は晩餐をすませてから、一緖に散步に出かけた。

『お床をのべて置ひてよろしうございますか。』年増の女中は出しなに云つた。

『あ、どうか……』

『靜子さんも今晩は此所へお泊りでせう。お三人さん共此の部屋にお床をのべて置いてよろしいでせう。』女中は靜子にからかふやうに云つた。

『いやだわお黒さんわ、隨分人が惡いのねえ、わたし達は泊りはしないのよ。』靜子は高笑ひをした。

夜はもう九時過ぎだつた。月がない上に曇つてゐたので濱邊はまつくらである。それでも二人の女は濱邊の勝手を知つてゐてどん／＼孝吉を引つ張つて行く。靜子はお轉婆らしく一人で走り出した。そして引き揚げられた舟の蔭に潜んでは、またとてつもない方面に姿を現はしたりする。

『いやよ靜ちやん、そんなにあばれてはいけないことよ。』幸子は心配げに云つたが、その實、孝吉と二人きりで肩を並べて歩いてゐるのは惡い氣持がしないらしい。いつの間にか孝吉のなすまゝに默つて手をとられて歩いてゐるのだ。彼女はそれが靜子に對してすまないのか絶えず靜子の名を呼ぶのである。靜子の影は一時見えなくなつた。と思ふうちにまた突然現はれて、そして思ひきり無雜作に砂の上に寢そべつて見せたりする。

『砂がつくぢやないの。』

『好いのよ。あゝ好い氣持、』

『僕も寢てやらう。』孝吉も寢そべつて見せた。

『何てまつくらな晩でせう。夜の海は凄いわねえ。』幸子は一人立つてゐて云ふ。

『幾日くらゐゐらつしやるの。』靜子は孝吉に訊ねた。

『明日歸りますよ僕。』
『まあ明日、つまんないわそれぢや、二三日はゐらしやらなくちや、折角ゐらしたんですもの。』
『また出直して來るかも知れませんよ。』
『くつかけの君の引力の偉大なこと……』靜子は云つた。くつかけの君と云ふのは今孝吉と同棲の澤子のことである。
『ねえ幸ちやん。』
『さうねえ。』
『ねえ、二三日ゐらつしやいな。そして幸子ちやんと一緒にお歸りになれば好いでせう。ねえ幸子ちやん。』
『さうねえ。』
まつくらな海の水平線には無數の漁舟の灯が横に續いてゐて、そこには華かな夜の都會があるかのやうに見えるのであつた。一方には半島が黑くうづくまつてゐる。重い潮風と共に打ち寄する波は三人のゐるところまでだん〳〵近づかうとして勢よく寄せてはまた引き返す。
『もつと向ふの方へ行きませう。』靜子はさう云つてまた一人でどん〳〵走り出した。
『どうかしてゐますわ、靜ちやんは……』
幸子はさう云ひながら矢張孝吉に手を借した。
三人はそれから間もなく町へ引き返して小さなカフエーでサイダを飮んだ。彼女達は孝吉を旅館まで送つたが、孝吉が寢床へ入つてからもしばらく下の廊下で女中達と笑ひ聲を立てゝゐた。
『何だ不良少女。酒によつぱらひやがつてざまを見ろ。』さう云つてゐるのは大學生の聲であつた。無論冗談に云つてる

らしい。

『好いわよ。よけいなお世話。』

『君の親爺のところへ報告してやるぞ。』

『ありがたう。どうぞお手數ながらよろしく。』それは靜子の聲であつた。二人は親しげに毒を吐きあつてる。

孝吉は二時頃まで眠れなかつた。彼は明日歸らうかどうしようかと考へた。然し一日でも長くゐることは、その大學生の爲めにも自分の爲めにもよくないと思つた。いやな三角關係に利用されることを怖れたのである。それに懷中が貧しかつたし足を出さない爲めにも明日立つのが安全である。もう一つは濱邊を歩いてゐる時彼は幸子とほんの僅の間に次のやうな對話をしたのである。

『僕木更津で待つことにして、そして一緒に歸らうか幸子さん。』

『木更津ですの。それでも好いんですけれど。』幸子はそれ以上答へなかつた。此の時靜子が舟の陸から出て來たのでそれ以上を答へる暇が彼女にはなかつたのである。孝吉は明日彼女と逢つたら、もう一度そのことを云つて見たいと思つた。木更津で一泊する爲めにも此所を早く立つ必要があつた。彼は彼女のおとなしやかなところが好きである。彼女のあまり美しくないところに、そして彼女自身それを知つてゐるところに、彼は靜かな愛を感じてゐる。

翌朝、孝吉は食事をすましてから海濱を少し歩いた後靜子の宿へ行つて見た。漁師の家の座敷であつた。二人は恰度朝飯を喰べてゐる最中であつた。

『いやよ。もうちよつとその椽側で待たせて下さいおばさん、だつて喰べてるところを見られるのはいやですわ。』靜子の聲が奥からした。

『構はねえだよ、お孃さん。』

『だつて……』

孝吉は構はず上つて行つた。彼女達はチヤブ臺を差し向ひに燒き立てのサンマを箸でつゝいてゐるところであつたが、それと見て二人は次の間へかくれてしまつた。

『好いわ〳〵、喰べてしまひませうよ。幸子ちやん。東京へ歸つたら屹度あなたは皆に報告なさるでせう。構やしないから。』瑤子はやけにどん〳〵碗の飯をかき込んだ。幸子も。

『どうしても今日、お歸りになるの。』

『え、十一時半の列車で。』

『ぢや、わたし達ステーションまでお送りしますわね。』

孝吉は一時間ばかりそこにゐて旅館へ歸つた。時計はもう十時を過ぎてゐる。彼は拂ひをすませて支度をしながら彼女達の來るのを待つたが十一時が鳴つても來なかつた。それ以上待つてゐては發車時刻の間に合はぬのでステーションへ急いだ。やつと發車の間に合つた。

『矢張今日立つたのは好い。』と彼は自分に呟いた。それは必らずしも彼の思ひ過ぎではなかつたやうである、汽車は昨日來たところを馳つた、窓外の眺めも昨日ほどに彼の興を惹かなかつた。

家へ歸り着いたのは日が暮れてからであつた。木更津で一泊して幸子を待つ勇氣も彼にはなかつたのである。一三三

して靜子からはがきが來た。

『あまりと申せばあまりのことに存じ候、今日ミス幸子ちゃんと二人で盛裝を凝し旅館へまゐり候處、最早十一時四十分の列車にて御出發の由承り、暫しは呆然として言葉もなく顔見合せたるまゝにて候ひき。苦笑に似たる微笑は二人の頬に浮び申し候。さるにても君をさほどに慌だしく手許へ引きよせたまひしくつかけの女樣の力のほどの偉大さよ。二人はひたぶるに驚歎いたす外無之候。すべては唯愚かなる我等の罪に候。かしこき君やくつかけの女樣の罪にては御座なく候。一切の過去よ。わが記憶から葬り去られよ。二人は君に對して永久に鬪ひをいどむべく相談仕候。御幸福におはしませ。榮光は物皆の上に輝いてをりませうものを。靜子。』

澤子は此のはがきを感づいた。彼女は孝吉が大磯の友人を見舞に行くと云つて出て行く時から信じなかつたのである。そして孝吉が歸宅して、服を脱いで風呂屋へ行つた間にそのポケットの裡から確實な證據を得た。千介温泉と染めてある旅館の手拭が外套のポケットに入つてゐた。然し彼女は知らぬ顔をした。

『あなたが歸つていらした時は家を出て行く時の元氣とはまるで違つてゐました。』彼女は勝ち誇つた皮肉な笑顔で云つて『わたしにかくさなくとも好いのよ。わたしあなたが靜子さんに逢ひに行つたつて何とも思ひはしませんわ。』彼女は云つた。靜子からのはがきによつて、靜子と孝吉との間が、それほど嫉妬に値するものでないことを彼女は感じ得た。

『嘘を云つたのは僕が惡い。然し。……』

『好うございますよ。』と云つてそれからしばらく間を置いて『わたしもいよ／＼あなたから離れなければならぬ時が來ましたの。今度は二度とこちらへ戻つて來るやうなことはいたしませんわ。』

『で、どうしようと云ふのだ。』孝吉には女がいつになく冷靜な態度でそれを云ひ出したのが意外に聞えた。人は昂奮し

て死につくことは出來る。その意味で人は喧嘩を最後として別れることは心持よく出來るものだ。孝吉は今冷靜な態度で彼女から縁緣を申し込まれて自分と云ふものゝ弱い性格をまざ〳〵と感じた。『何故……どうして……好い愛人でも出來たのか……お前の方から遂に退いて行くほど俺と云ふ男はつまらないのか……いやお前と別れることはそれほど悲しくはない。……俺はもとよりお前と長く同棲する氣はなかつた。然しあまりにお前のやり方は私をみじめにするものだ。まあ好い、別れたいと云ふのなら俺は引き止めはしない。それで好い。行くが好い。どこへでも自由に行くが好い……』孝吉は此の瞬間慌しい敗北的心理に陷つた。然しそれを彼女に見られることはいやであつた。平氣を裝ふた。彼女の方では男が平氣を裝はねばならぬほど自分の申し出が男にこたへたことを感じてゐるやうであつた。

『それは好いだらう。お前の方でさう云ふ氣持になつたのは偉いと思ふよ。お前が俺のやうな男にいつまでも喰つついてゐることは俺もお前の爲めに喜ばない。お前には充分な若さがある。思ふやうに進んで行けよ。』

『え、さういたします。』

『で、いつからどうしようと云ふのだ。』

『明日からでもおいとまさせて頂きたいと思ひます。』彼女は云つた。

『うむ……お前は俺が千倉へ行つたからさう云ふ決心になつたのか。靜子や幸子に逢ひに云つたから……。』

『さうぢやありません。そんなことはどうだつて好いのです。』と女は俯向いて少し間を置いて『わたしにも愛人が出來ました。許して下さい。』女は思ひきりはつきり云つた。

『さうか。それなら好い。許す許さぬもない。愛人が出來たのか。』孝吉はさう云つてゐるうちに笑ひ出して『どんな愛人だ。大學生かい。』

『それはどうぞお聞きにならんで下さい。』

『云つてしまつたつて好いぢやないか。』

『いゝえあとで分りますわ。』女も此の時笑ひ出して『わたし、あなたにもう一つ御相談があるんですの。あの……お金を少しばかり都合して頂きたいんですの。』

『金、いくらほど。』

『百圓ばかり都合して頂ければ好いんですけれど。』

『百圓、今一時に百圓は出來ないかも知れぬ。五十圓ざかりで間に合はぬか。それも今の俺には苦しいが致し方がない。何とかしよう。』

『では、それだけでもようございます。』

女と云ふものは他に愛人が出來るとかうも氣強いものだなと孝吉は此の時思つた。然し彼女の要求は當然のこととして今は否むわけにはゆかぬ。

『兎に角お前にはいろ〳〵世話をして貰つたのだから。』

此の時木戸口に誰か來た。女は立つて行つた。孝吉は誰かが自分に用があつて訪ねて來たものと思つた。然しさうでなかつた。

『わたしを訪ねて來たんですの。』女は云つた。

『お前を……誰がお前を訪ねて來たのだ。』

『それは聞かないで下さい。わたしはちよつと出てまゐります。』女はそゝくさと羽織をひつかけて出て行つた。

女はそれきり歸らなかつた。運送屋の男が翌日彼女の荷物を受取りに來た。お金は四五日中に人を取りによこします。荷物だけお渡し下さい。と手紙には書いてあつた――孝吉とその女との關係はそれで終つたのである。

さびしい孤獨の自炊生活に彼は馴れてゐたので人が思ふほど彼自身はみじめではなかつた。寧ろ輕快な氣持で、朝は規則的に寢床をはね出ると早速すべてのことを自分の手でした。器用にやつた。古新聞紙で火をおこすこと、はたきでほこりを叩いて室內を掃き出すこと、米をといで炊くこと、植木に水をやること、何一つとして彼は不器用ではない。まるで一生涯運命が彼と云ふ男をさうして送らせる爲めに仕込んだかのやうに彼は自炊生活に巧みであつた。然しそれは長い旅人が重い足から草鞋を脫ぎとつた時の輕い足どりに似たものであつたかも知れぬ。彼は素足で行く旅人であつた。

（をはり）



高さを競ふ（喜劇）

上司小劍

第一幕

東京の郊外。文化村と名づくる西洋風模倣の住宅地の一番奥。高臺がゆるく傾斜をつくつて、漸く平地につゞかうとするあたり、金氣(かなけ)のある赤い水が、ギラ〳〵と流れもせずに、泥鰌一尾さへ棲まぬらしい小溝一つを隔てゝ、十幾年前からある貧民長屋と境を接してゐる。

千九百二十三四年頃の初夏。晴れた日の朝の心。

舞臺は、其の文化住宅の一軒の、二階ブエランダ。五坪ばかりの庭の彼方に、低い垣根を隔てて、貧民長屋の北の端の方を見おろす。籐の小卓子に、籐の肱かけ椅子三つ。小卓子の上には、銀の蔓のついた硬質陶器の花模様ある灰皿を置く。ヴエランダから觀客の方に向つて、舞臺の前面は、主人の書齋になつてゐて、書齋に相應する卓子、書棚などを置き、額、花瓶其の他、中流知識階級の趣味を表現すべき適宜の裝飾をする。書齋とヴエランダとの間は、日本風の障子で仕切る。但し其の

障子は開いてある。ヴエランダには硝子戸をたてる。

主人尾上雄藏（三十八歳。著作家）登場。越後紬の袷にヨネリウの羽織。羽織の紐を結ばず。書齋を素通りして、ヴエランダに出る。

主人。（ドツカト、籐椅子に腰をおろし、持つてゐた雜誌を忙しさうに繰り披きながら）あゝ、いゝ天氣だ。久し振りにいゝ天氣になつた。（さう言つたゞけで、空も庭も見るのではない。庭には若葉青葉が、青年のやうに活々とした太陽の光を浴びて、麗はしく光つてゐる）

妻芳枝（二十九歳）登場。娘時代に拵へたと思はるゝ派手な銘仙の、羽織と着物との對を着てゐる。頭は普通の束髪だが、白粉を濃くつけて、年よりもずつと若く、どうかすると、たゞの女でなさうに見える。家に居る時も、懷中鏡を帶の間に挾んで、時々顏を見ては、粉白粉でなほしてゐる。

妻。（流眄に夫を見て）あなた、矢ツ張り自分の家といふものは、いゝものね。お掃除一つするにしても、自分のものだと張り合ひがあつて、力の入れかたが違ふわ。……あゝ嬉しい、やツとこれで、自分の家に住むことが出來た。（主人の向ふ側の籐椅子に腰をおろし、なほもじつと顏を見詰める）

主人。（冷かに微笑して）掃除するにしても張り合ひがあるつて、……お前自分に掃除したことがあるかね。顏の掃除はよくするが。

妻（大仰に、これは意外だといふ顏をして）あらツ、あなたひどいわ。顏の掃除はよくするつて、それやお化粧もするにはしますが、お室の掃除だつて、あなたのこの書齋なんか、一度も爺や（女中）にさしたことなんかありやしないわ。

主人。まアいゝさ。……けどもお前、この家が、（ヴェエランダから、書齋の方にかけて、頻りに壁や天井を見廻はしつゝ）自分のものだといふことが、そんなに嬉しいのか。（苦々しいといふ顔をする）

妻。それや嬉しいわ。生れてから初めて、自分の家に住んだんですもの。

借家で生れて、
借家で育つ。
お前の身體も、
出來合ひか。……

ほゝゝゝゝ。

主人。（呆れた顔をして）なんだい、それや。……そんなに嬉しいのか。（淋しく暗い顔をする）

妻。だツて。……（若い娘のやうに甘つたれる風をする）

主人。他人の地面の上へ建てた、家だけが、自分のものだと言つて、全地球を所有したやうに喜ぶやつがあるか。税はいる。保險料は拂ふ。修繕費はかゝる。町の寄附金は家持ちだと言つて多く取られる。祭りの提灯だつて、借家なら一つでよかつたのを、二つ出すんだらう。……莫大な金を費して、多くの人を殺して、戰爭に勝つて、一等國になつたと有頂天になる馬鹿者の氣持ちが、お前の氣持だ。馬鹿々々しい。（だん／＼大きな聲になる）

妻。また始まつた。始まり、始まり。（相變らず、浮かれてゐる）

主人。（ます／＼、淋しく暗い顔をして）僕なんかも、これで、借家で生れて、借家で育つたんだ。しかし他人の所有地の上では生れなかつたね。

妻。（不思議さうな顏をして）へえん。家が借りもので、地所が自分のものだつたの？變だわね。

主人。僕は神社の境内の社務所で生れたんだ。家は氏子からの借りものだが、產湯を流した床の下の地面は官有地だ。官有地なんて言ふと癪にさはるが、……殊に官といふ字が、胸くそのわるい字だが、……官有地を國有地と言ひかへて、それから又た國有地を共有地と言ひかへたら、僕は理想どほりの土地の上に生れたんだ。僕はこの地面といふものが、他人の所有であることを惡むと同時に、また自分の所有であることをも嫌ふんだ。（だん〳〵早口になる。）

妻。（詰らなさうな顏をして）そんなこと、幾度聞いたか知れやしないわ。

主人。この話は初めだよ。

妻。其の形式で聞いたのは初めてですが、內容はいつも同じことだわ。同じ內容をいろ〳〵と形だけ變へて言ふんですもの。あなたの思想も進步しないのね。あれから、……（細く白い指をかゞめて、年を數へる。其の一本の指に、この夫婦の生活には少し不相應なダイヤモンドの大きなのを嵌めた指輪がキラ〳〵と眩しく光る）わたし二十二の年だつたから、もう八年、同じ思想をいろ〳〵と形だけ變へて發表してるんですもの。それで讀者があるんだから、世間は廣いものね。ほゝゝゝゝ。

主人。馬鹿にするな、僕の思想は米の飯だ。いつも同じだといふところに價値がある。鮓にしたり、ライスカレーにしたり、粥にしたり、おじやにしたり、いろ〳〵にして、人を養ふのだ。（冗談でもなさゝうに、眞顏で言ふ）

妻。いこぢね。昔しからずゐぶん。

主人。僕は子供の時、小學校の教科書で『我國、我國』といふことを、うるさく敎はつたが、其の『我國』といふものは、一體何處にあるのかと思つたよ。

妻。へえゝん。

主人。歸つて親爺に訊くと、この邊の地面は皆我國だといふから、僕は子供心に俺の家は大地主だなア、それにしちや、どうしてかう、貧乏なんだらうと思つたのさ。ところが親爺め、我國だと言つておきながら、其の我國の一尺四方の土も、自分のものでないのだから驚いた。

妻。(冷かに笑つて)、それ落語？

主人。いや實際の話だよ。

妻。すると、あなたは、子供の時ずゐぶん低能だつたのね。よくそれまでになれてね。

主人。神童だつたのさ。神童だつたから、そんな、プルウドンの『財産とは何んぞや』にでもありさうなことを言ひ得たんだらう。しかし安心したまへ、今はもうそんな危險千萬なことを言つて、十手捕繩の御用にならうとは思つてゐない。僕はもう此頃、決して奪ふことを考へないで、譲ることを考へようと思つてるんだ。何んとか爭議といふものは、要するに奪ひ合ひだ。『我が爭ふものは、人必ず爭ふ。極力之れを爭ふと雖も、未だ必らずしも得ず。我が譲るものは、人必ず譲る、極力之れを譲ると雖も、未だ必らずしも失はず』といふことがある。僕たちはもう奪ひ合ふ爭ひに飽きた。これから一つ譲り合ふ爭ひを始めたいね。……アルサス、ロウレエンの譲り合ひで、フランスとドイツとが、戰爭をおつ始めるやうなことがあつたら、戰爭ぎらゐの僕も、從軍記者ぐらゐのことならやつてみたいと思つてるよ。

妻。へえゝん。

主人。資本家は賃錢を増して勞働時間を短かくしようとする。勞働者は賃錢を減じて勞働時間を増さうとする。それでストライキが起る。……さういふ世の中になつたら、同じストライキでも、もつと面白いだらう。資本家は資本の私

行を廢しようと主張する、勞働者や無産階級は、それに反對して、激烈な運動を起す。地主は田畑を小作人に分配しようとする。小作人は小作料を增していつまでも……

妻。(白い手を振つて)もう澤山！

主人。(同じやうに手を振つて、妻の手を振るのを制しつゝ)僕は兎に角、この利益中心の世の中を呪ひたくなつたのだ、善惡と言へば、甚だ立派に聞えるが、實は利害……損益なんだからね。いやになつちまふ。

妻。(少し眞顏になつて)だつて、昔しからずゐぶん、自分に損をして、他人の利益を圖つた人があるぢやありませんか。今だつてさういふ人もあるでせう。お父さんのお好きな、志士仁人といふのが。……

主人。(微笑して)お父さんのお好きな……はよかつたね。其の志士仁人といふ奴の腹の裡は果してどうか、そこまでは分らないが、彼等が表面に現はしてゐるところを、其のまゝ馬鹿正直に受け入れたとしても、彼等の目ざすところは、矢張り社會の平和とか、民衆の幸福とかいふことで、詰まり利益なんだね。多くの人々の利益を圖つて、自分の名譽心を滿足させようといふんだから、矢張り醜劣さ。僕は全然利益といふ町人根性を離れた社會を見たいね。利益を善とし、損失を惡とする世の中は厭やだ。……善惡などといふ氣取つた言葉を全廢して、總べてを利害で行くのならまた面白いが。何々宗教だとか、何々主義だとか言つても、煎じ詰めると、皆利益の一點に歸着するんだから、厭やになつちまふ。其の利益に深いのと淺いのと、念の入つたのと、念の入らないのとはあるが、大聖人の說いたところも、詰まり利益が目的で、小賣商人と相場師とのやうに、利益に大小があるだけだ。

妻。(また少し眞顏になつて)藝術家の申します、美と醜とも、矢張り煎じ詰めたら、利害といふことになるんでございませうか。(殊更丁寧に言ふ)

主人。いやあれは少し違ふ。あれは利害と言ふよりも、奸悪と言つた方がいゝ。兎に角利害といふものを超越してゐるのは藝術だけだと思ふが、僕には藝術といふことがよく分らない。……一部の人間から藝術が餘計なものゝやうに言はれるのは、利害を超越してゐて、利益の目的物にならないからだらう。超越してゐると言へば、立派に聞えるが、まア仲間外れにされてゐるんだね。

妻。(妙に眉を顰めて)あなた、今日は頭がわるいぢやないの。何んだか矛盾したことばかり言つてるわ。變にこぐらかつて、解りやしない。(急にぞんざいな調子になる)

主人。(額をばどこか痛いところでもあるやうに顰めて)頭は始終わるいんだ。僕ばかりぢやない、皆矛盾したことばかり言ふよ。矛盾しないことを言つてちや、大家になれないんだ。(苦笑する)

妻。(不圖庭の方を見下して、とんきやうな聲で)あらッ、大變だ。あんなものが。(指輪のダイヤモンドの耀く手で指さす)

垣根の外には、いつの間にか、物干竿をかける杉丸太が、蹄鐵の古いのを三段に打ち付けて、竿を受けることにし、同じ太さのを二本、にゆうと蝸牛の角の如く、こちらの植ゑ込みを突き拔くやうにして、高く立てゝあつた。

妻。(先刻とは違ひ、しんけんに眉を顰めて)あんなものを、あすこへ立てられちや、ほんとに困りますね、折角の文化住宅も臺なしですよ。このヴエランダだつて、すつかり打ち毀しだわ。(垣の外の貧民長屋へ聞よがしに言ふ)

主人。(つく〴〵と、二本の杉丸太の突ツ立つてゐるのを見て)あれもいゝぢやないか。一つの景色だよ。

妻。だツてあなた文化住宅に。

主人。文化といふことは、物干しを立てないといふことかな。

妻。また皮肉が始まつたわね。(言ひ〳〵庭の方を見下ろして)おやッ。(また一大事が起つたやうに叫ぶ)

物干しの杉丸太には、蹄鐵の古いのを打ち附けて設けた二つ目の段へ、女物の赤い襦袢と、赤い腰卷きとをば、いづれも洗濯したばかりで、ぽた〳〵と水のたれさうなのをかけた竹竿が、横に渡される。細い木の股に竹を長くつぎ足したさん股といふものが、ちよい〳〵動いて、干したものゝ形をなほしてゐるのが見える。

妻。仕様がないわね。あんなものをあすこへ干しちや。(またひどく眉を顰める)

主人。干す爲めに拵へたんだから、干すのが當然だらう。干さなけやどうかしてる。

妻。だつてあなた、あんなお腰なんか、こつちの書齋の眞正面へ向けて干すのは、失敬ぢやないの。

主人。こッちから見れや、書齋とヴエランダの正面だが、向ふから言へや、裏口で、便所の前ぢやないか。……それ赤い色と言ふものはいゝもんだよ。赤化がいゝ、なんて、うッかり言はうものなら、叱られるどころか、殺されるかも知れないが、スツカリ赤い色のなくなつた世界を想像してみたまへ。第一太陽がなくなるぢやないか。星がなくなるぢやないか。月もあれやどッちかと言へや、赤い色の部に入るから、共になくなるんだね。太陽がなくなつちや、もうお仕舞ひだから。天體の赤化だけは、いかな警視總監も大目に見るとしてだね、地上だけから赤いものをスツカリ除くとしても、先づ花といふものゝ大部分がなくなると覺悟しなくちやならない。それから人間をすばッと斬つても、赤い血が出ないとなつたら、景氣がわるいね。……

妻。(冷笑して)また始まつたのよ。お止しなさい。わたしはあなたがさうした馬鹿々々しいことを、得意氣に仰ッしやる時、あなたの價値が半減乃至三分の二減するのを感じますよ。(ツンとする)

主人。(笑ひを忍んで)半減しても三分の二減しても、兎に角赤い色といふものはいゝものだ。……赤い湯卷きに迷は

ぬものは、……(節をつけて)

妻。おやツ。(更らに甚たしく驚いた風で、きツと庭を見下ろす)

物干しの杉丸太の一番上の段へ、汚ないお襁褓を一面に暖簾の如く並べたのが、さん股で懸けわたされる。

主人。(も遂に眉を顰めて)これやいかんね。僕は明日から、旅行だ!

第二幕

第一幕と同じ場所。だいぶ曇つて、今にも、雨にならうとする日の午後。主人は新築の文化住宅が氣にかゝつて、旅行もつゞかず、二三日で歸つて來たところ。洋服。

主人。(ヴエランダの籐椅子にドツカと腰をおろして)あゝア、くたびれた。

主人の後から直ぐ上つて來た妻。第一幕と同じ頭髮、同じほどに濃い白粉。着物は稍古びた大名じまの縞大島。

妻。(第一幕の如く、主人と對ひ合つて、籐椅子に腰をおろし)あなたちよいと見てごらんなさい。

主人。(態ととぼけた風に)何處を?

妻。(得意氣に)お庭の方をちよいと御覽なさいよ!

主人。(顏をそむけて、庭の方を見ないやうにしながら)お襁褓の行列が厭やだから、僕は、これから一切庭の方を見ないことに決心して、歸つて來たのだ。(ますく庭の方を見ないやうに顏をそむける)

妻。(笑つて)決心して來たの? お庭の方を見ないやうに。……ずいぶん大仰ね。(また笑つて)だけど、ちよいと見て御覽なさい、一度でいゝから。……よう、ちよいと、たツた一度だけ。……ちよいと見て御覽なさい。

しつこく、うるさく勸めても、主人が、强情に、庭の方を見ようとしないので、果ては妻が、手を伸ばして、主人の耳朶を引ッ張つたり、兩手で主人の顎から頰を掬ひあげるやうに持つて、庭の方へ顏を捻ぢ向けようとする。

主人。うるさいなア。(頭を振つて妻の手を引ッぱづした機みに、顏が横を向いて、庭の方を見る)

庭には、垣根に添ふて高く、貧民窟の物干しを遮るやうに、杉の四分板の目かくしが、新らしく出來てゐる。

主人。おや。……えらいものが出來たね。これやまるで、洲の股城の一夜普請だね。よくこんなものが早く出來たね。……これやいゝ、これやいゝ。(首を傾けて感心する)

妻。ずゐぶんあなた、あれには苦心したのよ。(得意氣な顏を、庭の方へ向ける)

主人。わかつてる。お前は賢夫人だ。よく注意して、牛を賣りそこねないやうにね。

妻。何んですツて? (主人の言葉の意味を解しかねる) 牛をどうするの。牛の話?

主人。まアいゝさ。(微笑する)

妻。初めね、龜やをやつて、あの物干しを、どこかほかへ移してもらへないでせうかと、長屋の一番端の家へさう言はしたんですよ。ところが要領を得ないの。それから澤木さん(書生)に行つてもらツたんでせう。……澤木さんもさういふことには氣が利かないのね。矢ッ張り要領を得ないんですよ。たゞね、あの物干しが、長屋の一番端のだと聞いてゐたのが、少し違つてゐて、五軒長屋の共有だから、いづれ相談の上御返事するといふことだけ聞いて來たの。

主人。それで要領を得てるぢやないか。

妻。まアお聞きなさいよ。……あなたは澤木さんが最負ね。……それでわたしが出かけて行つたの、厭やだツたけど。

主人。(大仰に驚いた風をして) それや大奮發だ。

妻。すると、矢ツ張り嘘なの。あの物干しは、一番こツちの端の家ので、亭主は留守でしたが、おかみさんが大變な剣幕であの物干しの爲めにお宅の方へ日あたりがわるくなるとか何んとかいふことなら、わたしの方もまた考へますが、たゞ見たとこ體裁がわるいとか、なんとか、そんな贅澤なことの爲めに、わたしの方の實用のものをどうすることも出來ません。あなたの方は言はゞ遊びごとだし、わたしの方はしんけんだと、かう言ふの。憎らしいぢやありませんか。(心外なといふ顔をする)

主人。尤もだ。(感心する)

妻。ね、尤もでせう。(甘へる)

主人。いや先方の言ふことが尤もだよ。

妻。あら。あなたは先方の味方なの?

主人。味方はしないが、言ふことは先方が正しいね。此方の遊戲的眺望を妨げるからと言つて、先方のしんけんの生活を脅かすことは出來ない。

妻。さう。(不平な顔をして) それぢや、わたし、もうあの目かくしとツちまふわ。明日でもまた大工を呼んで。(悄然となる)

主人。(あわてゝ) いや、いや、誤解しちやいけない。今言つたのは、公平な批評家としての言葉だ。この家の主人としては、飽くまで、お前の態度を是認する。資本家國へ行けば、資本家の爲に祈り、勞農國へ入れば、勞働者の爲めに祈るキリストの弟子のやうなものだ、僕は。

妻。(心の釋けた風で、にツこりして)それで直ぐ、この家を建てた大工のところへ、鉋やをやつて、大急ぎで目かくしを拵へてくれと言はせると、親方は忙しいから、弟子をやると言つて、一人よこしてくれたので、何んでもいゝから早やいがいゝと言つて、あれを拵へさしたの。

主人。それやよかつた。大手柄だ。あれで、お襁褓の行列も見えなくなつた。いゝあんばいだ。……しかし、今日は天氣がわるいんで、干してないやうだね。(庭の方を見つめる。)

妻。今日も、干してあつたの、先刻まで。……それにおかみさんが、あすこへ來て、惡口が大變よ。……こんな目かくしなんか拵へられちや、また、干し物が乾かない。全體こんなところへ家を建てるから、長屋中の日あたりがわるくなつて、冬が思ひやられる、火をつけて燒いツちまへ、毛唐人の物置みたいな家……ですツて。……

主人。毛唐人の物置は、よかつたね。(ヴエランダンから書齋から、頻りに家の内を見廻す)

妻。直ぐ感心するのね。長屋のおかみさんの言ふことに。……學者のくせに。

主人、まアいゝや。(頭を搔く)

妻。それからね。(少し言ひにくさうにして)こんなことも言ふのよ。……米は高いけど、白粉は安い。……ですツて。……垣根の隙間から、わたしの顔を覗いたのよ。

主人。(ウツかり感心しようとして、急に止め、口をもぐもぐさせる)

妻。ほんとに憎らしいのよ。(殘念さうにする)

先刻から、垣根の外に人の動く氣色がしてゐたが、この時、ぬうツと高く、物干しの杉丸太に繼ぎ足しをして、目かくしの上へ、四尺ばかりも高く出る。

妻。あらッ。(目早く見とめて驚く)

主人。面白いな、これや競爭だ。此方でも目かくしを高くしてやれ。……おい、澤木、澤木。(階下に向つて、書生を呼ぶ)

書生澤木登場。飛白の着物、小倉の袴。庭の方を見て、物干しの高くなつてゐるのに驚く。この時物干しには、汚ないお襁褓の並んだ竿が懸け渡される。

わあア……と、多くの人の高く叫ぶ聲が、凱歌の如く垣根の外に聞える。

主人。(怒つた聲で)君、早く大工の家へ行つて、また一つ目かくしの繼ぎ足しをしてくれと言つて、頼んでくれたまへ。早くだよ。繪では駄目だから、君が行つてくれたまへ。(急ぎ立てる)

澤木。あゝさうですか。行つてまゐります。(退場)

主人。(むつかしい顔をして)長屋中が聯合してかゝつてると見えるね。面白いぞ、これから、物干しと垣根との高さの競爭だ。

妻。決して負けやしないわ。

主人。これは別の話だがね。僕は旅行中に一つ論文の腹案を作つて來た。それは近頃頻りに家族主義の復興といふことを保守黨の連中が言ひ出して、子は親を訴ふべからずとか、祖先の墓を大事にしろとか言ふから、其の序でに、刑法の犯罪も一家族の聯帶責任にして、一人が罪になれば家族が皆同罪といふことにするんだ。其のひどいのは罪三族に及ぶんだね。これほど徹底した家族主義はないし、こゝまで行かなければ、ほんとの家族主義とは言へない。親爺が牢へ入つても、息子は平氣で、役人を勤めてるといふのぢや、家族主義でないね。……かういふことを書くつもりなん

だ。

妻。さうすると、あなたが若し牢へ入つたら、わたしも入るの？……いやなこツた。……でも同じ牢ならいゝかも知れないわね。ほゝゝゝ。

書生澤木再び登場。

澤木。先生、駄目です。

主人。駄目とは？

澤木。其處で、あの目かくしを拵へた大工に逢つたんです。それで直ぐあの目かくしをもう四尺ほど高くしてくれ、と言ひますと、變にニヤ〳〵笑つて、それや手間賃になるから、幾らでも高くするにはするが、この競爭はお前の方が負けだらうぜ、と言ふんです。……先生、奥さん、驚きましたね、先方ぢや長屋中聯合して、もう五月幟の棒の古いのまで持つて來て、立てる用意をしてますよ。此方が目かくしを繼ぎ足したら、先方は直ぐ物干しを伸ばすつもりなんです。先生、奥さん、幾ら何んでも、五月幟の棒には敵ひませんね。十五間ぐらゐあるんですもの。あれを其處へ立てて、一面に汚ないお襁褓を干されちや、たまりませんね。

妻。まあア。……（呆れる）

主人。其の大工はまた、どうしてさう委しいことを知つてるんだね。君はどうして、其の五月幟の棒まで用意してあるのを見て來たんだね。（不審さうにする）

澤木。（少し興奮した樣子で）先生、奥さん、この目かくしを拵へた大工が、あの物干しの持ち主なんです。長屋の端の家に、大工はおかみさんと二人で住んでるんです。生れたばかりの子供が一人、それがあのお襁褓の使用者です。……

…「大工は目かくしを拵へといて、直ぐ物干しの杉丸太を伸ばす仕事にかゝつたんださうです。寸法がよく分つてゝいゝ、と言つてました。

妻。まあア。

主人。さうか。

　二人とも呆れるうちに、

（幕）



惡日

新井紀一

南に面した雨戸をすつかり閉て切つてはみたが、足立の心は矢張り落ちつかない、苛々した。風の音が、がりがりあたまの中を掻き毟る。まるでざら〳〵した毛むくぢやらな手で、むちやくちやに心臓を撫で廻されるやうな氣味の惡い、不快な氣持である。

遠くから砂塵を卷き立てて襲つて來る風の姿が、あり〳〵と眼に描かれる。底力のある、氣味の惡い呻り聲――その呻り聲は地を這ふやうに轟々として、裏の大欅目がけて一揉みに揉み散らさうと、ぶつかつて來る。と、その細かい葉は、悲鳴を上げて枝にしがみつき、風に抗らふ。

家がぐらぐら搖れる。閾々がみしみしきしる。障子が異樣な音を立てて、ばたばた鳴りはためく。

しめつぽい、むんむんするやうな風、空氣――薄暗い室の中で、足立はぴくぴくする心臓の鼓動を聞きながら机に向つてゐた。油のやうにねばる汗が、じつとりと全身

をうるほしてゐる。

後ろの小窓から射す光線が、ぼうつとした彼の黒い影を机の上に落してゐる。ペンを握つた彼の右手はそのまゝ額を押さへこんだ。

鬼ても書けやしない……睡眠不足だ……頭が痛い。——

やゝ暫くの後ち、足立はごろり机の前にひつくり返つた。風から來る恐怖ばかりでない、妙に苛々したものが胸の中で渦卷いてゐる。書かうとするものの書けない苛立たしさ——彼の眼はぼんやり天井を凝視めた。身心の異常な疲れが感じられた。書けないものを無理に書かうとした爲めのそれと、昨夜からの風に脅やかされ通して少しも眠れなかつた精神の過勞のそれと、毎日出てゆく工場の何んとなく落ちつかない險惡な空氣のそれと、その三つの混がらかつたものの疲勞にほかならなかつた

がたがたんツと鳴る戸障子の音に、過敏になつた彼の神經は針よりも鋭くそれを感じて顫え上つた。顫えながら、疲れ切つた彼の眼はだんだん、だんだん、細く微かに閉ぢられて行つた。が、その時でも、彼の耳は絶えず風の音に脅やかされてゐた。

「おい、どうしたい！」

彼はふつと眼を覺ました。氏家がのつそりと閾際に立つてゐた。

「なんだ寢てるのか」眼尻の下がつた氏家の顏が不滿さうに彼を見おろしてゐる。

「ひどい風だね」

足立は氣怠るいからだを起して、机を背に氏家と向ひ合つた。氏家の左手に提げた新聞紙包みは云はずと知れた、彼

の新作原稿であつた。彼はいつも、ステツキの代りか何かのやうに、散歩の時でも何んでも原稿を提げて歩いてゐた。

「どうした、何んか書けたかい？」氏家はその新聞紙包みを膝の上で弄くり廻しながら云つた。「これから鵜澤さんとこへ一緒に行かうかと思つて來たんだが……どうする、行くかい？」

「さア……」

足立の心は重かつた。彼はその眼をちらつと北側の小窓へやつた。障子を透して、大風に悶えてゐる大欅の姿が胸苦しく眼に描かれた。外へ出て、ざらざらした砂埃を浴びる感觸の惡るさを思ふと物憂かつたし、家にゐてびくびく脅やかされ通しに縮かまつてゐるのも堪へられない重苦しさだつた。殊に、ある目的を持つてゐる氏家に取つてこそ、鵜澤氏の家に行くことは意義のある、いや、行かずにはゐられない一つの仕事であつたらうが、只、彼のおつき合ひに過ぎない足立には非常に迷惑なことでもあつた。

「僕は別に行く程の用事もないんだがね……」

彼はさう云つて、あぶらぎつた精力の汪溢した氏家の眼を見た。

「行つたつていゝぢやないか……君の原稿だつてあうこの前に行つてゐやつなんか讀んである時分だぜ」

ねばり強い氏家の眼は、この時どうでもいいやうな彼の心にくるくるからみつきながら迫つて來た。初めは、君なんか行つたつて行かなくつたつてどうだつて構はないんだ――と云つたやうな調子でありながら、扨て、相手が動かないと見ると執拗にねばり強さを示して來る眼だつた。

足立の心はいくらか動いて來た。氏家の云ふ通り、あの原稿はもう讀んである時分だ、それに……と思ふと、その様子も聞きたくなつた。

「ぢや、行かうか」氏家の書いた筋書にうまうまと載せられるとは承知しながら、彼は立ち上つた。

外は一層ひどい風だつた。横にたるんだ無數の電線が、頭の上でびうびう叫つてゐる。ブリキ出來の屋根看板はぽこんぽこん鳴るし、幟や小旗やは、ばたばたはためいてゐる。

看板が、屋根瓦が、いつ頭の上に吹き落されて來るかも分らない不安を感じさせられる町を、二人は肩を並べて歩いた。砂埃りは線の條、べたついた膚に飛びついて來て、忽ちにさらさらにしてしまつた。口の中がじやりじやりした。苦い唾が口の中をいがらつぽくした。

ひどい風だ――

彼の口はその同じ言葉を呟きつゞけた。何んとなく苛立たしさを感じさせられる日だつた。併かもその道路までが――砂利を敷いたばかりの道は、ごろごろその足をよろつかせた。

重い、山のやうに荷を積んだ馬力が、二人の後ろから來た。その車の齒はがりがり砂礫を咬んで碎いた。馬子は手綱を取つてぴしーり、ぴしーり、その尻を叩くし、馬は血走つた眞赤な眼をくわつと見開いて、後脚で無暗に大地を蹴り飛ばし、跳び上つた。

馬子の喚き聲……砂利を咬む車の音……風……何もかもが泣き出したくなるやうな不快な騒音だつた。

馬力は橋の袂で二人にすれすれに駈け抜け、橋を駈け上つた。飼糧桶が、車の下で振りちぎられるやうに烈しく搖れてゐる。

ふと、馬の鋭い嘶きが、キット二人の耳をそばだたせた。橋の眞ん中でぴよこんと馬は一つ跳り上つた、と、どうしたはづみか、手綱を振り上げてゐた馬子はぽこんと跳ね飛ばされるやうにもんどり打つて、橋の上にひつくり返つた。

馬は竿立ちになつてそのまゝ橋を駈け下りはじめた。駈け下りると同時に、濛々とした砂塵の渦卷く町へ驀ぐらに走り込んだ。馬子は、からだ中眞黄色にしてその後を走つた。

やがて、馬力も、その後を走る馬子も、見へなくなつた。

あの勢ひぢや二人や三人は屹度やられるに違ひない――重い心が益々重くなるばかりだつた。二人はそこで電車に乘つた。

帽子を脱ると、足立は吻つとして額の汗を拭つた。それから顔、胸、腕――拭けるだけのところを拭いた。ハンケチは眞つ黒になつた。

電車は走りはじめた。その響きは、風の唸りを消し、それから起る心の不安を一掃した。あれ程までに彼を脅やかした風が、いつの間にか止んでしまつたものの如くさへ思はれた。

氏家はいつの間にか膝の上に新聞紙包みの原稿を開いてゐた。その眼はその原稿を見てゐるやうでもあつたが、多くは、車内の隅から隅に走つて何かを求めてゐた。が、それは足立には、氏家が何を求めてゐるかよく分つた。それだけに、いつものことながら厭やな氣がした。

野郎、また女を探してやがるんだ――

彼は輕い舌打をして、氏家の眼の留まつたところへ自分も眼をやつてみた。矢張りさうだつた、そこには、餘りいゝ女ではなかつたが、氏家の好きさうな若い女がゐた。氏家の眼は、膝の上の原稿と、その女との間を忙しく往復したそれは、女に自分の原稿を注目させたいが爲めの、そして、それは自分が原稿生活をしてゐるところの作家であることを知らせたいが爲めの牽引手段であることは、氏家の日頃の言葉からして充分忖度の出來ることだつた。さうした氏家

の愚劣さや、衒氣滿々とした態度を見ると、單に、小供らしいなぞ云つて見遁しの出來ない苛立たしさを感じずにはゐられなかつた。

この勞働者上りのへつぽこ文士奴！

さう云つて呶鳴りつけてやりたい程だつた。

「おい、鶴澤さんとこへ行つたらなア、俺のことをよく云つてくれや……な、鶴澤さんだつてよく俺と云ふ人間を知りや、あのおしまさんとの結婚に賛成してくれるに違ひないんだ……知らないからあんな曖昧な返事しかしないんだ」

氏家はいつか、向ひ側の女から眼を離してごつごつ彼の脇腹をこづきながら云つたのである。それは流石に、いつものがらがらした調子に似合はない、周圍をはゞかるやうな低い聲だつた。

君と云ふ人間も實に氣の多い男だね――

かう云つて頭から浴びせてやりたかつたのを、彼は無理に抑さへつけた。俺はね、女さへ見りや惚れちまふんだ――といふことを、眞面目になつて云つた氏家である。その言葉は、氏家といふ人間の正直さから出たのか、無邪氣さから出たのか、彼は知らない。が、尠なくとも、一人の女を對象として眞面目に結婚なぞといふことを考へてるものにどうしてあの淫蕩な眼をして、一度逢つて直ぐ別れて了ふやうな電車の中の女に、あの色眼が使はれるのだらう。おしまさんを熱望することだつて要するに、彼の多角的な愛慾のその一角を滿足させるにしか過ぎないのだ。その一角の犧牲で滿足するやうな女でない限り、悲劇は必ずそこから起らずにはゐないだらう。

「だつて、あればかりや鶴澤さんの意見通りにも行くまいぢやないか。おしまさんの意志もあることだし、それにだいち、鶴澤さんの妹だなんて云つたつて、どうもへんぢやないか、……さう見へたくはないかね」

や、暫くしてから、足立はさう云つて氏家の耳に囁いてみたのだ。が、その眼を見ると彼はまた嘲弄されるやうな反感を催さずにはゐられなかつた。淫蕩的な瞳が、ひとを小馬鹿にしたやうに眼尻の下がつた奥から覗いてゐたのだ。

「うん、そんなことアどうだつていいんだよ。たゞ君はね、今日に限らない、いつでも龜澤さんに逢つた時に僕の話が出たら、人間としての僕をよく云つといてくれりやいいんだ。つまり僕にだつて結婚の可能性があることを、だね……」

君ぢやあるまいし、俺は影でひとの惡口を云ふのは嫌ひだよ――と云はうとしたのであるが、その言葉は僅かに口先きまで出かかつて齒の間に引つかゝつて了つた。氏家と云ふ人間は、現にこの俺を龜澤氏へ紹介した人間でありながら影へ廻ると俺の惡口ばかり云つてると云ふ人間なのだ。

――先生、あの足立は駄目ですよ、現に勞働なんかしてる人間でありながら、少しも階級意識がないんです。革命精神もなけりや、哲學も思想も何んにも持つてないんです。だから奴の書くものは新興藝術として何んの價値もないもんです。今までの自然主義の藝術を一歩も出てないんです。……奴は毎日、活版所へ出ちや、原稿に書かれてあるだけの活字を拾つてるんでせう。奴の藝術はちやうどそれなんです。この人生を只、上つ面から眺めてすらすらと平面描寫をしてるに過ぎないんです。つまり、新聞の三面記事ぐらゐの價値しかないんです。――

それは皮肉にも、足立がひとりで龜澤氏の家へ行つた時、龜澤氏はにやにやしながら、この前氏家君が來てそんなことを云つてたぜ――と云つて聞かしたものなのだ。が、その時彼の頭には、氏家が云つたであらうそれ以上の言葉が思ひ浮べられたのだ。――だから足立の原稿なんか雜誌へ紹介してやるなんて結局先生の値打を下げるやうなもんです――と。

彼は何んとか氏家に皮肉の一矢を酬ひてやらうと思つたが、適當の言葉が出て來なかつた。で、彼は極めて平凡な言

聲を以つて答へた。

「そりや、よく云つとくよ。君と云ふ人間が元來誰れにも愛される、そして誰れもが知つてる通りの純眞な自然人なんだからね……」

　氏家の顏に滿足らしい微笑が刻まれた。彼は膝の上の原稿をいぢり廻しながら、ふと話頭を轉じて云つた。

「僕はね。全然自分の空想で、あのおしまさんを手に入れて結婚をする一人の青年を主人公にした小說を書いて來たんだよ。これはね、一人の勞働者がプロレタリアの潜在意識になつてゐる復讐觀念に依つて、或るブールジョアの娘を暴力に依つて隨へちまふことを書いてあるんだがね。……そこまでは、若しおしまさんを俺にくれなけりや、俺は暴力に依つてでも奪つてみせる――といふ俺の意志を示したものなんだ、つまり鵜澤さんに對する俺の宣言であり、示威運動なんだ。が、それから先きは、つまりブールジョア出身の自分の細君をだね、絕へず苛め通してプロレタリアの復讐を暗示してあるんだ。つまりその兩者に、二つの階級を代表さしてあるんだ。……だが、實際に結婚すりや、そんなことはしないがね……」

「ぢや、おしまさんに取つちやどつちみち助からないわけだな」彼はさう云つて聲を立てゝ笑つた。

「うん、さう云やアさうだがね……」氏家もつり込まれたやうに笑つた。

　足立はそこで腕組みをした。だんだん自分達の降りなければならない停留場へ近づくに從つて、彼の心は妙に穩やかでなくなつて來た。鵜澤氏からとかくの批評をされることは兎に角、こんなものは駄目だよ、君――なんて云はれやしないかと思はれる原稿の事、それから自分の今勤めてゐる工場の騷ぎのこと――その二つが重々しく彼の心を憂鬱にした。その二つは全然關係のない別個の問題ではあつたが、彼と云ふものを通して堅く結び合はされてゐた。

失業——その二字が眼の前にぶら下がつてゐた。それは決して彼の場合に取つて小さな問題ではなかつた。併かも考へれば考へる程つまらない、自分達ちの生活に直接に交渉のない盪動の犠牲に外ならなかつた。それは二派に分れた重役達ちの勢力爭ひの暗闘であり、原因は理事のS氏が突然、何らの理由もなく、馘られたと云ふことに出來したものであつた。S氏の親友達ち、平生世話になつてゐるその部下達ちが、一齊に起つてS氏擁護の運動を起したといふことは、間もなく、直接交渉のないこの工場の方にまで傳はつて來た。工場長は馘られたところのS氏の親友であつた。その運動はまた單なる友誼からばかりでなく、いつ自分達ちも逢ふか分らない不法馘首に對する豫防戰でもあつた。が、原因は、S氏等の勢力を嫉視したK氏らの劃策から出たことなので、工場長達ちはS氏の復職と同時に、K氏排斥を社長に迫つてるのであつた。

暗闘は暗闘へとつゞいて、騷ぎが起つてからもう一ケ月も經過してゐた。愈々要求が容れられなければ、工場長は自分の勢力範圍であるところの工場員を全部糾合して、輪轉機を停めて了ふし場合に依つてはストライキをも辭さない——と云ふことだつた。職工達ちの內重立つた者は既にその相談を工場長から受けてさへゐた

工場の中でそれに對する自分達ちの態度を決定することに對しては、無論議論があつた。S氏を一個の被傭人と見る時、それの不法馘首に對して抗議することは、この階級戰に於ける一つの共同戰線を張ることに違ひなかつたが、そして當然、自分達ちはそれに協力しなければならないことだつたが、併し、地を變へて、自分達の一人があの不法馘首に逢つた時、果して會社の重役達ちが自分らの地位を賭けてまで運動してくれるだらうか——と云ふことは問題だつた。現に、工場ではこれまで些細なことを口實にどれ程不法馘首に逢つてるだらう？——職工達ちはそのことに就て可なり議論した。が、工場長の申出に對して斷乎として拒絕して了へ——と云ひ得る程の者はなかつた。云ひ切つて了ふこと

は直ちに、工場での獨裁君主たるところの工場長の憎しみを買ふことであり、同時に、自分の馘首に對する機會と口實とを與へることとであつたから。——

電車を乙で乘り捨てると二人はその線路に沿ふた級勾配の坂道を飯澤氏の家に向つて歩いた。如何にも郊外らしい、樹木の鬱々とした町であつた。こゝに建てられてある家はまたどれも、その青々とした樹の葉で蔽はれてゐた。忘れてゐた風がどつと眞正面から吹きつけて來て、それらの葉がざわ〳〵頭の上で鳴つた。風は少しもその勢ひを衰へてゐたわけではなかつた。

電線の唸り……トタン屋根のぼこんぼこん鳴る音……粗末な湯殿の煙突がぐらぐら搖れてゐる。——何一つとして彼の神經を掻き擾らずに置かないものはない。頭の中ががりがり何かに掻き廻されてゐる。頭の中を埃りが濛々として渦卷いてゐる。その中を、馬子を後ろにはね跳ばかした馬が重い荷車を引いたまゝがらがら走つてゆく、砂礫を嚙み砕きながら走つてゆく車の齒の音が頭の中で割れ返るやうに響く。記憶が現實の姿を取つて頭の中に表現されたのだ。

たまらない、何んと云ふ不快な光景だ——彼の足はいつかそこへ立ち留まつて、じつと頭の中の光景に見入つてゐる。——馬が走る、車が走る、埃りが舞ふ——彼はハツとわきへ飛びちがつた。奔馬まくるり、方向を轉回して彼を目がけて驀進して來るのだ。

危ない、危ない——彼は叫んだ。叫んだがその聲は忽ち、さわさわ鳴る風の音に呑まれて了つた。

「おいおい、何をぼんやりしてるんだい？」

風の音か、人間の聲か、何かぼうぼう云ふ音を彼の耳は聞いたやうに思つた。

「おい、何をぼんやりしてるんだい、早く來いよ！」

氏家が云つてるのだ。彼はその方を見た。同時に幻覺は消えて、たるんだ電線が夕暗の迫つた空中にぶらぶら揺れてるのを見た。氏家の黝ずんだ姿がぼうつとして、影のやうにその下に立つてゐる。ばかに大きく見えた。門燈が風の唸るたびに、ぽつぽつとランプのやうに瞬く。彼は何んだか笑ひたくなつて來た。可笑しさが腹の底から込み上げて來るやうだつた。彼は笑つた。

「あつははは……」

一つ笑ふと、笑ひはあとからあとからと爆發して來た。

「あつははは……」

笑つて了ふと、頭の中も、腹の中もからつぽになつた。どこへ、誰れと、何をしに行くのか、それが分らなかつた。彼の眼はまた、電線の揺れるのを見てゐた。

彼は氏家に追ひついた。

「おい、あれを見ろよ」彼はぶらぶら揺れてる電線を指した。

氏家は默つてゐた。聞へないのかしらん?――彼はさう思つて、今度は割合大きな聲で同じことを云つた。「おい、あれを見ろよ!」

「電線ぢやないか」

突つ慳貪な氏家の聲が、からからになつた彼の頭に落葉のやうな響きを立てた。

「うむ、さうだ」と云つて了ふと、今まで素敵に可笑しいと思つたことが何んでもない、あつけらかんとした無感興なものに思へて來た。――おれは何が可笑しかつたのかしら?

思ひ出さうとして思ひ出せるものではなかつた。門燈がぽつぽつと瞬ぐのと、電線がぶらぶら揺れてるのと……ただそれだけだ。何も云ふことがなかつたので、彼は無理に頭を焦らせて云つた。

「あそこへ首を吊つてみろよ！」

「どこへ？」

聞くものも聞くものだ。氏家は眞面目になつて聞き返したのである。が、忽ちに氣がついたらしく、慌てゝ大きな聲を出して叫んだ。

「君は今日餘つ程どうかしてるね」

「うん、さうでもないが、少し頭がへんだ」彼はさう云ひながら、大股に歩く氏家のあとについて歩いた。

鈎の手に一つの道を曲ると、瀧澤氏の家が木の間がくれに見へた。そこの冠木門には矢張り門燈がついて、物凄い風の唸りと一緒に、ぼつぽつと瞬いてゐた。

門の傍に、電柱がのつそり突つ立つてゐた。日が暮れはじめると、暗くなるのが早かつた。何もかもがもうはつきりとは見へなかつた。只、その電柱だけが不思議にはつきりと、鼠色の空にゆうつと立つてゐた。その時彼の眼はその電柱の絶縁碍子のところからチラチラと吹き出す青い火を見た。それも物凄い風の咆哮を聞くたびに、そして大きな風の唸りを喰ふたびに、一層勢ひを得て燃え上るやうだつた。

「おい、あれを見ろよ！　火を吹いてる！」

彼はさう云つて高い電柱を指した。が、その時風は生憎と息を休めて凪いでゐた。從つて火も吹かなかつた。

「どこから？」

氏家はさう云つて電柱を見上げ、やがて腹立たしさうに、穐澤氏の門をあけて這入つて行つた。彼もこれを見捨てゝあとについて這入つた。

穐澤氏はゐた。二人は書齋に通された。取り次ぎに出たのはいつもの通りおしまさんだつた。氏家が丁寧に頭を下げてお辭儀をしてゐるのを、彼はぼんやり後ろで見てゐた。

「ひどい風だね」穐澤氏は二人の顏を見るより早く云つた。こゝでも、書齋の硝子窓が、風の唸るたびにごとごと鳴つた。電燈が時々消えかゝつてぽかぽか瞬いた。

「先生、原稿が出來たから持つて來たんです。これは小說なんかだと思はずに是非讀んで下さい。僕の本當の心持が書いてあるんです……」

氏家は熱心な瞳を輝かしながら云つた。しつかり腰が据はらないで、半分ばかりお尻が椅子の上で踊つてゐるやうだつた。

が、穐澤氏はどつしりと肱掛椅子に腰を据へて、柔らかな輝きをもつた眼の奧からじつと、氏家の物云ふ顏付きを見詰めてゐた。

「ふむ、ふむ……ふむ……」髭をひねりながら、その顏は一つ一つ點頭いてゐた。「で、本當の心持つて一體どんなことを書いたんですい？……いくら小說だつて蝕の心持ちつて書けやあしますまいが……」

足立は二人の話しする間、苛々する頭を無理に椅子の上に落ちつけてゐた。そして頭の惑と、眼頭のチカリチカリ痛むのを我慢して、外に荒れ狂ふ風の音を聽いてゐた。彼は落ちつきのない眼を時々硝子窓にやつた。外はもう眞つ暗だ

つた。轟―ッと云ふ前觸れが庭の木立の梢に鳴ると、眞つ黒い風はゴトゴトゴトンと硝子窓に向つて跳びかゝつて來た。そして、後足で蹴つ飛ばし、爪で引掻いて引き揚げて行つた。彼の眼は異形な姿をした眞つ黒い風を、暗い闇の中に描いてゐた。

と、その時、異形な形をした馬鹿に大きな白いものがすつと彼の眼を掠めて走つた。心臓がびくつと跳り上つた。

おしまさんがお茶をくんで卓子の上に置いた、その白い手だつた。

狼狽してはいけない、落ちついて、落ちついて……

臍下丹田に力を入れて、彼は卓子の茶碗を取り上げた。手がぶるぶる顫えてゐる。

氏家との話の腰を折つて、龜澤氏が突然彼に眼をつけて云つた。突然――ほんとに突然であつた。足立と云ふ人間の存在をまるで忘れてゐたやうに話し込んでゐた龜澤氏が、ふと何かに怯やかされるやうに、この時叫んだのであつた。

「足立君、君はどうかしましたか？　眼が眞赤ですぜ……」

「えゝツ？」と云ふ頓狂な聲を、彼は自分のどこから出たかも分らない程うろたへて叫んだ。ぽろりと手の先きをすべつた茶碗が、パチーンと床に當つて碎けた。

うろたへ切つた彼は、本能的に龜澤氏の眼を見た。すまないことをした――と思つた。が、龜澤氏の視線とぶつかると、彼はまた慌てて視線を床の上に落し、それからうまく二つに缺けた茶碗を取り上げて、卓子の上に置いた。

どうかしてゐる……たしかに彼はどうかしてゐる……眼が眞赤だ……眼が――

瞬間、橋の上で馬子をはね飛ばして狂ひ出した奔馬の眼を思ひ出した。自分で自分が恐くなつて來た。俺はいまに何をするかしれない。あの馬のやうに、突然立ち上つて龜澤氏の頭を毆り飛ばし、この書架にある本と云ふ本を滅茶苦

茶に引つ繰り返し、掻き廻し、そして引き破つて了ふかも知れない。——彼は自分の手を恐れるやうに、堅く腕組みをして努めて落ちついた聲をして云つた。

「別にどうもしやしませんが……」

「しかし、どうもへんだね、……先つきから様子を見てるのにどうも變つてるよ」絶澤氏は今度は膝の向きまで彼の方へ真正面にして、しげしげと見はじめた。

彼は堅くなつてその視線を避けた。と、今度は別の方から、絶澤氏は彼を試みにかゝつた。

「ところで、君の社のあの騒ぎはその後どうなつたね？　どうにか決まつたかね？」

彼はおづおづと眼を上げて、さう云ふ絶澤氏の眼を見た。そして云つた。

「いゝえ、まだ決まらないんです、事に依つたらストライキをやらされるかもしれません」

「ふむ……」鼻を鳴らして絶澤氏は除ろに腕組みをした。で、それに對する君達ち仲間の態度はどう決まつたね？」

「ところがそれも決まらないんです。いろいろな議論が出まして……」

「ふむ、どんな議論が出るね？」

絶澤氏のその口吻はまるで裁判官か、試験官かのやうに鋭く冷めたかつた。

「資本家に對する共同戰線としてSさんなんかに與してストライキするのもいゝが、若し負けて了つたらどうする？直接自分達ちの問題でもないのに馘首になつちやつまらないちやないか——と云ふのと、兎も角、今度は工場長の顔を立ててストライキしてやる代りに、これを機會に、自分達ちの要求も呈出して容れさせよう——と云ふのと二つあるんです」

「成る程……」絶澤氏は大きく點頭いて云つた。「で、君自身はどつちを贊成するんだね?」「ぼくは……」と云ひかけて、彼はまごまごした。まだ決まつてなかつたのだ。で、彼の腦細胞は急に忙しく渦卷きはじめた。扨て俺はどつちにしよう。俺は藝術家なんだ。事件を冷靜に觀察して……

この時突然、氏家が橫から口を突き出して云つた。

「足立君は駄目だよ、生活に對する信念がないんだ、哲學がないんだ、だから……」

成る程、さうらしい。……いつも君から云はれることだ。――彼の眼は、殆ど無意識にその物云ふ氏家の口を見詰めてゐる。と、その口は更に何かを云はうとして口を開いた。が、その時絶澤氏は大きく手を振つて氏家を制した。

「まあいゝ、まあいゝ、君は直ぐそれをはじめるからいけない」

氏家は口を尖らしたまゝ默つて了つた。

絶澤氏は靜かに立ち上つてベルを押した。と、間もなくおしまさんの白い顏が扉のところからチラツと覗いて云つた。

「お呼びになつて……?」

「あゝ、葡萄酒を持つて來て頂戴!」

おしまさんの引つ込んだ後ろ姿を、氏家の眼がじつと見送つてゐた。が、その眼は直ぐ彼の方に持つて來られて、そのまますつ惚けた眼をして煙草に火をつけた。

コツプが三つ、口拔きを添えて葡萄酒の壜が一本――香鼠葡萄酒らしかつた。

「足立君、君は神經衰弱らしいね……ひどい神經衰弱だよ」絶澤氏は三つのコツプに赤い液體を注ぎながら云つた。「さ

あ、飲り給へ、眼の色がどうもいけない……」

「赤いんですか？」

彼は突つ拍子もない聲で云つて、コップにいきなり手を出した。が、コップに指が觸れたか觸れないかに、慌てゝ手を引つ込めた。二つに割れた茶碗を卓子の上に見たからである。

「さあ、やり給へ、君は少しやつた方がいんだよ」龜澤氏はすゝめた。

俺の手に掴まれるが否や、こいつはいきなり俺の手から跳り出してパチーンと碎けるのだ——恐怖ともつかない、妙な遠慮を感じて彼はおづおづと、今度は兩手を出して小さなコップを捉まへた。そして、血のやうな色をした液體を舌の上に味はつた。

葡萄酒の瓶は忽ち空になつて卓子の下に下ろされた。

氏家の顔は眞赤だつた。龜澤氏の顔もいくらか眼のふちが赤くなつてゐた。俺の顔も矢つ張り赤くなつてるに違ひない。——彼は著しく高く動悸を打ちはじめた心臓の鼓動を聽きながら、龜澤氏の方へ大膽な瞳を注いで云つた。

「で、先つきの話ですね、先生が若しあの場合あそこの職工の一人として働いて居られたら、どういふ態度を取られますか？」

「なに、僕が……？」龜澤氏は仰山な愕きを示しながら云つた。

「えゝ、さうです」

「さあ……ね」龜澤氏は眼をつぶつて默り込んだ。

風の音が怒濤のやうに烈しく硝子窓を搖はした。折角忘れかけた恐怖が、胸の中で眞つ黑い塊りとなつて暴れ出し

た。大つぶな水滴が硝子窓一面、飛白のやうに飛びついてゐる。風に交つて雨まで降つて來たらしい。

彼はまたその眼を緋澤氏に移した。考へてゐるのか、眠りかけたのか、微かな鼾の聲が、その鼻のあたりでしてゐるやうだつた。

「僕は僕として意見もあるがね……」緋澤氏はいつか、ぽつかりと眼を見開いてゐた。「だが、それはそれとしていつも僕が云ふ通り、書くと云ふことはいかんね、物を書くと云ふことは、その人の持つ革命的情熱――と云つて惡ければ生活力、をだね、紙の上で空しく燃燒させて了ふ。殊に、プロレタリアとして革命の原動力となる人達ちが物を書くと云ふことは、如何にそれが宣傳の目的を持つたものでもだ……どうもいかんね、つまり煽動家と實行家とは別のものたんだ」

俺に當てこすつてるな――とその時彼は思つた。緋澤氏の云はうとしてゐることは、そして裏から云つてることは、だから工場でさうした問題が起つても君には積極的にその渦中に飛び込んでゆく力がないのだ。書く隙間に自分だけで滿足しちまつて、實行と云ふ方面にはどうでもいゝやうになるんだ――と云ふそれであつた。

「しかし先生、そりや一般には當りませんね、僕のやうな例もあります」

と云つていきなり大きな聲で叫び出した氏家の聲は、彼ればかりでなくすつかり緋澤氏を愕ろかしたらしかつた。

「ど、どうしてね?」緋澤氏はどもり勝ちな聲で反問した。

「僕に取つては書くことと、實行生活の方面とはまるで別です。なぜなら……」と云ひかけて氏家は一寸その言葉を濁らした。が、直ぐにその額を眞面目らしく緊張さして、併かも自分の手にしてゐた原稿を緋澤氏の前に置きながら云ひつゞけた。「これを讀んで貰へば分ります。これは、或る青年が或る婦人に戀して、結局その戀に成功したことを書いた

ものです。と云つてもそれは決して普通の戀愛小說ではありません、非常に強い階級的復讐心が織り込んであるのです。……ところで先生、小說の上でこそ僕は戀の勝利者ですが、現實生活では決してさうでありません。先生の論法で行くと、その作者はそれでもう滿足しちまつて、現實の上ではどうでもいゝやうな態度を執る筈ですが、僕は現實に於てもこの戀の爲めに粉骨碎心するだけの情熱も持ち、努力も惜しまないつもりです」

さう云つた氏家の眼は喰ひ入るやうに鋭く絕澤氏に見入つた。そこには鬪犬のやうな意志の強さと、蛇のやうな執念深さとがからみ合つて光つてゐる。

絕澤氏にはもう氏家の意志のあるところがよく解つてる筈だつた。とんでもない者に見込まれた、と云つたやうな困惑したらしい陰影が、淡くその面上を掠めた。

これや、とてつもない面白い芝居が見られる——足立は堅く押し默つたまゝ交互に二人の顏を見比べた。

「ぢやあ兎に角讀んで置かう」絕澤氏は輕く逃げを打つた。

「直ぐ讀んで頂けないんですか。……僕はもう愚圖愚圖してゐられないんです」氏家の蛇のやうな眼がぎらつと光つたやうだつた。

「なにが……?」

「なにが……つて、先生、恍けちやいけませんよ、僕あ眞劍なんですよ」焦れつたさうに身悶えしたからだを、ぴんと延ばして氏家が云つた。その眼はまんまるく見開かれて、絕澤氏を直視した。

ところが、絕澤氏は一向感じないらしい樣子をして、まじまじと眞劍らしい氏家を見返へしてゐる。

「なんだつけね?」どこまでも恍けつ通さうとするらしい絕澤氏だつた。

「ほんとに先生忘れたんですか、そんなら云ひますが……」喰つてかゝるやうな調子だつた。「こないだ先生に頼んだ結婚のことですよ……おしまさんのことですよ」

「うん、さうさう、そんな話だつたね」やつと思ひ當つたと云つたやうに、龜澤氏は上半身のつけ反らしながら膝を叩いて云つた。「だが僕は大勢居る前で直ぐ讀むつてことの出來ない性分なんでね……兎に角あづかつて置かう」

「ぢや、いつ讀んでくれるんです？」

「いつつて、これで僕もなかなか忙しいんでね、まだほかにも讀むやつが澤山あるし……」

「先生はそれでいゝでせうが、僕にやもうそんな悠長なこと云つて待つてられないんです」

「ぢやあどうすると云ふんだね、おしまのことだつて、まだ君に遣るともなんとも云つたわけぢやなし……君は何んでも自分勝手に都合のいゝやうに決めちまふからいけないよ、それにだいち、あのおしまだがね……あれあ實は僕の妹ぢやないよ」

「ぢやあ何んです？」ハッと彈き返へされたやうに、氏家はそつくり返つた。それが物に愕いた時にする彼の癖だつた。

「あれあ妹でも何んでもない、赤の他人さ、君も知つての通り僕の家内は暫く伊豆へ湯治に行つてゝ留守なんでね、それで手傳ひに來て貰つてるんだ。だから僕の獨斷で君にやるともなんとも云へないぢやないか」

先生、やつと兜を脱いだな――と、一寸痛快らしい氣持が湧かないではなかつたが、併し、表面では何んらの痛痒をも感じてないらしい風をしながら、その内實、可なり狼狽してゐる龜澤氏の顔を見ると、少し氣の毒にならずにはゐなかつた。氏家にしても無論聞いたゞらうが、彼の耳にさへ、龜澤氏とおしまさんとは兄妹ぢやない、女中代りに使つてる

笑だ――なんて噂が可なり眞實らしく傳へられてゐたのだから。併し、その噂がどこまで眞實なものか誰れ一人知つてゐる者はなかつた。

「だからね、君の腕でおしまを口説き落すとか、何んとかするんなら、こりや別問題で僕の關係したこつちやない、君の勝手なんだ」龜澤氏が云ひつゞけたのだ。

「さうですか、先生の妹さんぢやないんですか……ぢやあ構はないんですね」

氏家の眼が急に元氣を得て輝いた。彼は肱掛椅子の兩脇に手をついて、今にも立ち上りさうな身構へをした。

「うん、構はん、構はんが努力はいけないぜ」太つ腹を見せてる言の底に、どこか不安らしい影があつた。

「先生は今まで論文なんかで努力を肯定してたんぢやないんですか」氏家の眼が皮肉に光つた。

「さう見たかね……？」と龜澤氏が云ひかけた時、後ろの扉が開いて問題のおしまさんが白い手にお盆を支へて這入つて來た。コーヒー茶碗が三つ、白い湯氣をゆら〳〵立ち昇らせてゐる。

が、あれ程いき組んでゐた氏家がこの時はつとしたやうに默り込んで了つた。その眞つ正面から、龜澤氏の顏がにやにやと浴びせかけた。

「おいおい、氏家君がね……」そのまゝ輕く頭を下げて出て行かうとしたおしまさんを、龜澤氏は呼び止めた。「お前と結婚したいと云つてるぜ、それでお前んとこへこれから直か談判に行かうとしたところなんだ」

「まあ！」と低い聲で叫んだ彼女は、最初、あきれたやうにも取れゝば愕いたやうにも取れる、そのどつちつかずの顏でちらつと氏家の顏を睨み、それから龜澤氏を見遣り、ぽつと處女のやうに顏を赧めながらいきなり笑ひ出した。

「まあいやだ。おつほほほ……」

電燈がぼかぼかと瞬いたかと思ふと、この時ぽつと消えてしまつた。室の中は眞つ暗になつて了つた。

「やつ、こりやいかん！」龜澤氏の聲がぽつんと闇の中でした。「早く蠟燭を持つて來て頂戴！」

足探りに出てゆくおしまさんの床をすつて行く音が微かにした。瞬間、窒素瓶の中へでも閉ぢ込められたやうな息苦しさを感じて、三人は押し默つた。

眞つ黒な風は、大きな斧を持つて叩き破らんばかりに硝子窓にぶつかつてゐる。暴風はまだ止んでなかつたのだ。

耳をすますと、どこかの家根瓦ががらがらーんツと吹き落されて碎ける音がしてゐる。湯殿のトタン屋根がぼこんぼこん鳴つてゐる。いつ吹き攫はれるか分らない不穩の音だ。無限の力を持つた風は、その眞つ黒な大きな手で瓦の一枚一枚をめくつて、投げ飛ばさずには措かない決心らしい。

家の棟がぎしぎし鳴つてゐる。これだけ頑丈に出來た龜澤氏の家でもこれだ。自分のあのやくざな二階はどうだらう。今時分、或はもう吹き倒されて、父や、母や、弟や……皆んなその下でぺちやんこに押し潰されてるかも知れない。それはよくあるやつだ。大風の吹くたびに、新聞なんかで始終見る光景だ。それがどうして自分の家に廻り合はさないと云へよう。

風、風、風――何んと云ふ呪はしい存在だらう。頭の中も、胸の中も、その眞つ黒い風の恐怖でいつぱいだ。がりがり掻き搖られるやうだ。彼の魂はじりじりしながら呻いてゐる。と、その時である。彼の眼は、その眞つ黒な窓の外に、青く赤く、何か火焰らしいもののチラ〳〵反映するのを見た。いや、認めたやうに思つた。彼は瞳を凝らした。

幻覺ではない、たしかに何かの燃える火の光りだ――

電柱の碍子のところからぽつぽつと青い火を吹いてゐる光景が、この闇の中にぽかつと描き出された。それはたしか

に、彼が此處へ來る時見た光景だつた。が、彼はそれを忘れてゐた。忘れてゐたやつがいきなり、記憶からでない現實となつて眼の前に浮み上つたのだ。

　彼はいきなり立ち上つた。途端、卓子の端に載つかつてゐた三つのコーヒー茶碗が、少しも手をつけられないまゝがらがらんと烈しい音と一緒に落つこちて碎ける音がした。

「や、また……」鶴澤氏の舌打をする聲が、無慘にも彼のいき組んだ心を押へつけた。

　彼はハツとして立ち竦んだ。云はうとしたことまでが喉に引つかゝつたまゝ出て來なかつた。が、彼は無理に勇氣を出して云つた。

「先生、火事です！」

　さう云ふと一緒に、彼の耳は何かのパチパチ燃へる音を微かに聞いた。木の焦ける匂ひがツンツン鼻に衝き入つて來た。で、彼はつゞいて叫んだ。

「たしかに火事です、どこか燃へてます！」

「君はどうかしてるよ、餘つ程今夜はどうかしてゐる！」

　苦々しげに云ふ鶴澤氏の聲を彼の耳は聞いた。併し、それは彼の耳によく這入らなかつた。彼は憑かれたもののやうに、眞つ黑い窓の外にばかり氣を取られてゐたから。

「先生、そこをごらんなさい、火が……そら、青いやうに赤いやうに……」

　その時おしまさんが手燭を持つて這入つて來た。そして卓子の上に置くと云つた。

「なんですか、お勝手の方にゐますと、木か何か燃へるやうにパチパチ音がするんですが……」

「何にッ？」

龜澤氏が彈かれたやうに立ち上つた。そして書齋を飛び出すといきなり、おしまさんの今來た方へ走り込んだ。わくわくする胸を押へて彼もその後を追つた。矢張りさうなんだ――勝ち誇つたやうな氣持を感じながら。

彼は書齋から茶の間へ這入らうとした時、後ろの方で「あらッ！」と云ふおしまさんの叫び聲を聞いた。突然に、コーヒー茶碗を三つとも卓子の上から彈き落して缺いた自分を思ひ出した。で、おしまさんの叫びを聞へないふりをしてパッと書齋を飛び出した。ふらふら頭ばかり先きに走つて、足がそれに伴はないもどかしさが感じられた。

蹴つ飛ばすやうにして勝手の戶が明けられた。彼はそこから跳り出すやうに、闇の中に吸ひ込まれた龜澤氏の姿が見た。

「やッ、たいへんだ、門が燃へてる！　電信柱も燃へてる！」

龜澤氏の叫ぶ聲が風に吹きちぎられて響いて來た。

彼はいきなり書齋へ取つて返した。何んのつもりで引つ返したのか、自分にも分らなかつた。が、書齋の扉のところまで來て中を覗いた瞬間、彼の足はいきなりそこへ釘づけにされたやうに立ち竦んだ。氏家と××××××××××××××××××××。…………

氏家の眼がきらつと光つて彼を睨んだ。

「あつちへ行つてろ、あつちへ……」

さう呻ぶやうな叫び聲を後ろにして、彼はまた勝手の方へ走り出した。氏家と××××××××××、彼の頭の中で渦を卷いて跳つてゐる。

「おいおい、水を持つて來い、水を……」

絕澤氏の叫び聲を耳にすると、彼は、きなりバケツをつるし出した。そして、熱え熾つてゐる門へ向つてぶつかけた。水は、火の燃えてる半分近くまでも行かなかつた。

「駄目だ、駄目だ！　氏家はどうしたッ」絕澤氏が叫んだ。

「氏家は……」と云ひかけて、彼の胸の中でいきなり可笑しさが爆發した。

「あつははは……」

その時である。めらめらつと靑い閃光を發したかと思ふと、電線がぽつんと斷れて彼の頭の上へ落ちて來た。

「呀ッ！」と叫ぶと彼は倒れた。ビリッと云ふ衝動を全身に感じて、それきり口が利けなかつた。

「早く誰れか助けてくれ！　早く……」叫ばうとしても、口も利けなければ、手も利かない。これを拂ひ退ければ助かる――といふことを意識しつゝ、自分のからだに觸れてる電線を見ながらどうすることも出來ないのだ。

先生！

最後の勇氣を絞つて叫ばうとしたが、矢張駄目だつた。

何んといふいやな日だらう。この風……この火事……この電線……俺は氏家なんか出て來なけりやよかつたんだ。

――氏家とおしまさんの姿が頭に描かれた。それだけだつた。

――一九二三・五・一五――

婦人公論

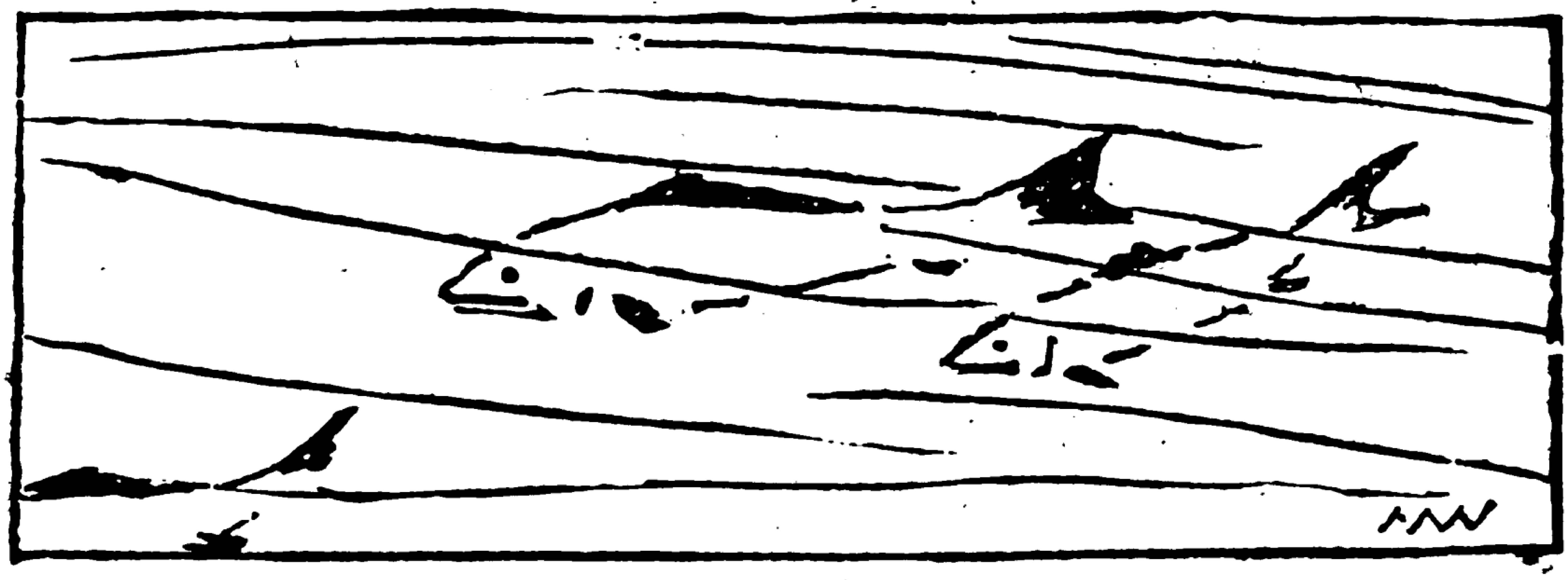
臨時增刊

▼七月十日發行▲

『女性への抗辯』號

▼全部男性執筆▲

◀定價八拾錢　郵稅二錢五厘▶



平凡人

正宗白鳥

（一）

雨の音は瀧のやうであつた。枕許にポタリ／＼雨漏りがしてゐた。佐久間は自分の頬ぺたを辷つてゐる雨水を手の平で拭ひながら「今のは夢であつたのか」と、面白かつた夢の續きの見られなかつたのを殘り惜く思つた。起上つて電氣を點けて、金盥やバケツを臺所から持つて來て雨漏り受けにして、蚊帳や寢床は横へずらして置いて、ガラス窓の外を覗いた。

水はけの惡い庭は池のやうになつて、八ツ手が薄暗い中に手を動かしてゐた。「こんな夜中に死にかゝつた人間の看護をしてゐるのは氣味が惡いだらうな」と、彼れは妻のまつ子が、妹の危篤の電報に接して實家へ歸つてゐることを思出してゐたが、次第に目が冴えて、再び寢つかれさうでなくなつた。

煙草を搜したが、すべて吸盡されて、一本の吸ひさしも殘つてゐなかつた。茶の間

の押入や臺所の戸棚を搜したが、葡萄酒の一滴も殘つてゐないで、サイダも空壜ばかりであつた。無いとなると尙更物欲しくなつた。それで、彼れは七輪に火を熾して湯を沸してお茶を入れることにしたが、さうした臺所働きをやつてゐるうちに、先つきの面白かつた滑稽な夢が思出されたり、この頃の珍らしい獨り生活の事が考へられたりした。……先日偶然會つた江木といふ文學者は、「自分で臺所へ出て飯を炊いたりお茶を拵えたりするのは面白い、男の生活もいゝものだ。本を讀めば退屈はしない。讀書に飽いたら外を歩けばいゝ。女が欲しくなればさういふ慾の充される所へ出かければいゝ」なんて云つてゐたが、さう思へばさうだ。おれだつても、この頃はさういふ氣持になれないこともないが、しかし、おれは堅くるしい事を書きならべた書物は我慢にも讀みつゞけられない。新聞でさへ自分の目をつかつて讀むとなると面倒くさくつて、汽車の中の退屈さましに、ポツケツトへ入れて持つて行くことは行つても、しみ〴〵出して見たことがない。平生の日曜やこの頃のやうな休暇などには、近在を散歩しようと思立つことがないでもないが、獨りぼつちで默りこくつて、當もないのにブラ〴〵歩くなんて、若隱居か茶人らしいので、直ぐにいや氣が差してしまふ。でも、おれもちつとは浮世に疲れたせいか、宵寢も晝寢もするやうになつた。以前は、眠るのは死んだのも同樣だと思つて、眠る時間が惜しかつたのだが、この頃は自分一人で嬶あなどにかまはれないで、そつと寢かして置かれたいと思ふこともあるやうになつた。嬶あのヒステリーの發作にも閉口だが、おしのだつて疾つくから鼻についてゐるので、嬶あが邪推したり嫉妬したりするほどに、おれは彼奴に嵌り込んでゐやしない。病身の嬶あだけを守つてゐるのもや、おれも淋しいし、第一働く張合ひがないから、あんな因緣のあるおしのの生活をおれの手でいくらか助けてゐるのだが、いゝ機會があつたら早晩手を切らうと思つてゐる。嬶あがあんまり愚痴をこねるために、却つて意地づくでおしのとの關係が續いて來たやうなものだ。女つて馬鹿なものだ、どいつも知慧が足らない。……

佐久間は湯の滾るまでに七輪の側に蹲んでこんな事を考へてゐたが、「しかし、男のくせに、お茶の一杯も飲みたいために、臺所にまご〳〵するなんて見つともいゝものぢやない。嬶あの留守中あの娘にでも泊つて貰へばよかつたのに、女と云へば雌猫でもおれの側へ遊ぶのを危かしがつてゐやがるから、おれが嬶あを安心させるために、獨りでいゝつて手傳ひを斷つたら、それだけで嬶あ奴悦しがつてゐたから可笑い。女つて淺墓なものだ。女を喜ばせるくらゐ何でもないことだ」

貰ひ物の玉露を急須へ入れて、濃いのを啜つたが、目はます〳〵冴えた。昨日から午睡も宵睡もしてゐるので眠りは足つてゐて、この頃になく彼れの身體に元氣が充ちてゐた。「獨り住ひは退屈なものだなあ」と、彼れはあたりを睨み廻しながら役者じみた見入れをした。欠伸でも出て來れば氣が紛れるのに、それさへ出て來なかつた。「おれは近年こんな所在のない思ひをしたことはないぞ」

眠飽いた彼れは、寢床へ横になるのもいやになつたので、三室しかない家の中をあちらこちらと歩き廻つた。雨漏りがポタリ〳〵音を立てゝゐる。外の雨脚はます〳〵烈しくなつた。

「大洪水でも出るといゝ」彼れは非常な天變地異の起ることを待設けるやうな氣分になつた。「嬶あの妹はろくに面白い目も見ないで、二十前に死ぬるのか。あの一族は影が薄いやうでどいつも壽命が短いやうだが、嬶あだつても將來が長くはなさゝうだ。死ぬるのはいゝが、あんまりみじめな死に方はさせたくないな。重病で藻掻死にをさせるのも不憫だが、鐵道往生や首縊りなんかの非業な最後を遂げさせたくもない。さういふ不體裁なことをされては、第一おれの名譽に關はる」

佐久間は次第に詰らないことの考へられるのに窮して、聞覺えの琴唄を口すさんだり、一攫千金の仕事を妄想したり

した。

彼れの妻は生れ付音樂の才があつたのか、數年間慰みに習つた琴が意外に上達したので、この頃は土地の娘の頼みに應じて手ほどきをしてやるやうになつて、既に十數人の弟子が出來てゐた。家計の助けにもなるし、自分で働いてゐるといふことに張合ひが出來たので、一週に二度ぐらゐは横濱の師匠へ通つて、三段稽古も四段稽古もして教へる種を仕込んでゐた「琴が私の一生の友だちだ」なんてお品のいゝことを云つてゐた。三味線で都々逸か安來節か、せい〴〵端唄ぐらゐなところたら、ちつとは趣味を持つてゐる佐久間も、コロリンシヤンをば馬の耳に念佛同樣に感じてゐたのであつたが、それを妻が樂んでゐるのには異存がなかつた。むしろ病身の妻がそれによつて慰められ元氣づけられるのを喜んで、傍から奬勵するやうにしてゐた。若い女の子が出入りするのも面白くつて、自分が家にゐる時には、弟子どもにお世辭を振りまいた。弦の切れた時には自分で手傳つて締めることもあつた。

「藝といふものは不思議なものだな。お前が琴を鳴らしてお金を取るなんて思ひも染めなかつた。これで四五十人もお弟子が出來たら、お前の腕だけで充分家の生活が立つやうになるんだね。一人の謝禮をならし二圓として、二五の百圓なら、女の商賣としてうまいものだな。さうしたら、おれは懷手で暮してゐられらあ」と云ふと、

「怠ける口實を考へてゐちや駄目よ。女の私でさへ稽古に一しよ懸命にならうとしてゐるのだから、あなたも私に負けないやうに働く氣にならなきやいけないんです。何だ琴ぐらゐとあなたは思つてるでせうけど、琴だつて藝だから、上には上がいくらでもあるんですよ」と、まつ子は勿體ぶつて答へた。

「だから、お前は勉强して、日本一の名人になつたらいゝぢやないか。おれなんざ若いうち學問を怠けちやつたから、博士にも大臣にもなれる見込みはないに極つてゐるが、お前は勉强次第で、何のなにがしと世間に唄はれるやうになるん

だから張合ひがあつていゝな。早晩東京へ引越して、みつしり修業することにしようか」

機嫌のいゝ時には二人でこんな話をすることもあつたが、まつ子の疑念が増長した時には馬鹿げた爭がおつぱじまるのであつた。日々の東京通ひに歸宅の遲れた時が、まつ子の氣分のすぐれない時に打突かつたりするか、あるひはたまに家を空けたりすると、彼女の狂亂が演ぜられるのであつた。佐久間自身は女房に騷がれるくらゐで凹むやうな神經家ではないので、どうかすると座興としていゝ加減にあつかつてゐたのだが、狂亂が昂じて生きる死ぬるの瀨戸際まで突詰めるかも知れないのが怖かつた。

「私はいつでも別居して上げますから、そのかはり一萬圓耳を揃へて此處へお出しなさい。あなたは私の身體を臺無しにしたのだから、そのくらゐなことをするのが當然なのだ。あなたが男なら、さあ此處へお出しなさい。そんなことで埋合せがつくのぢやないのだけど、我慢して上げよう。私は自分勝手な男の側へへばりついてゐないでも、自分の藝を磨きさへすりや、結構身が立てられるんです」と、まつ子はいきり立つこともあつたが、年々聲が潤れて、まだ若いのに老婆じみた音調になつて行くのが、ともすると身の毛の彌立つほどに恐ろしく感ぜられて、「さあ此處を癒して下さい」と、自分の喉を指差して、「私は生れ付人よりは聲がいゝつて褒められてゐたのに、こんなに聲が潰れてしまつたのは、誰れのせいなんですよ。……さあ此處を癒して下さい。お金もなんにも入らないの。私は親が生みつけて呉れたやうな咽を取戻しさへすりや、慾も得もないんだから」と、大きな眼に一杯淚を溜めて、夫に攻寄ることもあつた。さういふ時には、佐久間も空嘯いてゐられなくつて、手を突いて平謝りに謝つた。

彼女は二三の醫師に診て貰つて治療を加へたが効驗がなかつた。お稻荷樣へ願を掛けて神祠の修繕に寄進をもしたが、丸一年經つても何の御利益もなかつた。六月十五日といふ滿願の當日には、彼女は朝早く起きて身を淨めて、ひと

りで琴に向つて、好きな竹生島を聲を張上げて彈いたのだが、琴の音は不斷にもまして冴えたけれど、唄聲に變りはなかつたので、涙は自から琴の面へボロ〳〵と落ちた。われとわが手で喉佛を掻きむしりながら　どうしたらいゝでせう〳〵と啜泣きをするのを、佐久間は呆氣に取られて見てゐた。

彼女の茶斷ちはその日からはじめられた。それを唯一つの賴みの綱としてゐるやうに。

（二）

佐久間は、この粗末な家の中で最大の貴重品となつてゐる三面の琴が床の間に立掛けられてゐるのに目を留めながら「音樂なんかやるから喉の惡くなつたのに氣がつくのだ。喉の惡くなつたのは神經を痛めだすから、その原因を考へておれに向つて恨めしさうな口を利くやうになるのだ。……しかし、色も艷もない聲を絞りだして琴唄を唄つてゐるのを聞いてゐると、おれもいた〳〵しい思ひがして氣が滅入つてならない。おれには琴の音なんぞちつとも分らなかつたのに、この頃は身に染みて聞かれる時もあるやうになつたが、それはいゝことぢやない。あの音がおれにだけはをりをり、陰氣で凄くつて薄氣味が惡いやうに聞えて來るのだからたまらない。嬶のめ、お稻荷様の御利益か、茶斷ち鹽斷ちのお蔭で、喉が癒つて、元通りのいゝ聲になることもあらうと、まだ望みを持つてゐるやうだが、そいつは六ケ敷からう。おれが醫者に聽くと、見込みのなさゝうな口吻であつた。癒らないとすると、いくら修業に身を入れても琴の名人にはなれまいな。おれが懐手して女房に喰はして貰えるやうな時節は巡つて來ないに極つてゐる」と、獨りで思ひを重ねてゐたが、すると、手斧か何かを揮つて、三面の琴を片つ端から叩壞したいやうな氣がしだした。

「いや。叩壞すなんて、おれも馬鹿なことを考へたものだ。壞したら三文の價値もない。大切にしといて、賣れる時が

來たら高い價で賣つた方が利口だ」と、やがて佐久間は笑つた。

雨はやゝ小降りになつて、雨戸の隙間に薄明りが差した。彼れは再び寢床に就いて、明るくなるにつれて再び熟睡しだした。

ふと表の戸口で人聲がしたので、目を醒まして出て見ると、まつ子の門人の小娘が立つてゐた。

「先生は病人を見舞ひに行つてるんです。當分稽古は休むかも知れませんよ。次手があつたら他の方へもさう云つて下さいね」佐久間は寢床を片付けて、雨戸を開けたり掃除をしたり、朝餐の仕度にも取掛つたりしながら男世帶の忙しさみじめさを考へては、をり〳〵獨笑ひを浮べてゐたが、そこへ、お弟子が二三人やつて來た。

「此方へ上つて、御自分で稽古をしていらつしやいな」と、云つたり「どうです、臺所を手傳つて呉れませんか」と云つたりしたが、どの女の子も笑つて行つてしまつた。

でも、最後に來た藤島の主婦は、「それは御不自由でせう」と云つて上へ上つて、馴々しく臺所をも覗いた。

「今に女房に逃げられて獨りぼつちになるかも知れないから、その時の用意にこんなことも覺えとく方がいゝでせう」

「御戲談を……」主婦はポチヤ〳〵した頬ぺたの笑靨に愛嬌を見せて、「お宅樣では弟さんもお妹さんもゐらつしやらなくなつて、奧樣も大抵ぢや御座いませんね」

「私なぞも東京へ行つちまふかも知れませんよ。家内がさう決心すれば、こんなボロ家はいつでも叩賣つて彼地で世帶を持つことにするんですが、その方が僕のためにも弟のためにもいゝんですが、家内はあなた方にお別れするのが名殘が惜しいと見えて、なか〳〵引越しが出來さうぢやないんですよ」

「私どもゝ、これまで奧樣にお稽古して頂いたのに、今お別れしちや殘念ですから、どうかさういふことにならないや

うにして下さいましな」

「私もうまい仕事を見つけて一儲けしたら、東京に別宅を拵へて此處はこのまゝにしといてもいゝんですがね」

佐久間は主婦をいゝ話相手として引留めて、茶を入れて何かと話をしかけた。氣を張詰めて琴の稽古や家事に日夜を暇もなさゝうに過してゐる痩つぽちの、見るから餘裕がなくつてセカ〳〵してゐるまつ子に比べると、この主婦がノンビリして神經ののろさうなのが、向ひ合つてゐても、佐久間には氣持がよかつた。音樂の名人よりも、利發者よりも、かういふ女の方が彼れには有難かつた。

「近日江ノ島へでも一日遊びに行かうぢやありませんか。大勢ではうるさいから、あなたのお家の方と私だちとだけで出掛けることにしたらどうでせう。家内はこの頃藝事に熱心で遊ぶ事は一切嫌ひになつたつていふ樣子をしたがるので、あれぢや身體が續かないだらうと思はれますよ。なに、忙しくつて暇がないつていふ譯ぢやないんです。暇があつたら亭主を小突廻すのを日課にしようてんだから、亭主たるものは助かりませんよ。私はこれで金が無い時は無いで、今日を愉快に送る術を心得てゐるのだが、量見の狹い女に取つ付かれてゐちや溜らない。壽命が縮まつちまひますよ」

「それはあなたが浮氣をなさるからぢや御座いませんか。奧樣は正直な方なんだから、奧樣がお悪いんぢやないやうに思はれますね」

「あなたも女の愚痴を眞に受けてゐらつしやるからいけない、嬶あめ、あなたなんかに、始終亭主の讒訴をしてゐるやうだが怪しからんことだ。針小棒大に吹聽してるんですよ。……そりや、私なんぞはあなたの御主人のやうな無傷な男ぢやありませんがね。前科者にや違ひないが、こんな年齢をして、金もないのに、どこの女が私なんぞをかまつて呉れる

ものですか」

「あなたの仰有ることもそのまゝに承る譯にやまゐりませんね」

「私があちらでもこちらでも女の子にチヤホヤされてゐるやうに見えるんですかね。さう思はれるだけでも有難い」佐久間は卑俗な笑ひを浮べて、「嚊あの留守に色女でも訪ねて來るやうだつたら有難いんだが、うつかりすると借金取りがやつて來さうなのでビク／＼してるんですよ。昨夕も雨は漏るし鼠はあばれるし、夜つぴて眠られないで、ひとりで足掻いてゐました」

「大變な雨でしたわね。でも私はそれを幸ひに、思切りお稽古をいたしました。いゝ氣になつて琴ばかり彈いてると近所の人に思はれやしないかと氣がひけてならないんですけど、昨夕は雨のお蔭で世間へ音が聞えないから安心して飽きるまで彈けましたよ」

「あなたは性がいゝから得ですね。私のやうな音樂の耳のない人間でも、あなたの唄だけは聞いてると、いゝ氣持になるんです。それにあなたの藝は性質がいゝつて、家内は内々感心してゐますよ。教へてゐて恐ろしくなると云つてましたよ。あなたは東京へ行つて一流の大先生についてみつしり稽古をなすつたら、屹度琴の名人になれるんですね。本當は家内なんぞに習つてゐたんぢや爲様がないでせう。こんなことを私の口から云つちや、嬶あは怒るでせうけど、眞實のところを云ふとさうなんですよ」

「いゝえ、私のやうな鈍な女は、藝事は駄目なんですわ。奥樣が親切に教へて下さるからこそ、やつとこれだけ彈けるやうになつたのです」主婦の目には心の悦しさが耀いた。「でも、私はこの頃は、朝から晩までお琴の事が氣に掛つてゐますのです。どうかしてもつと上手になりたいと氣ばかりあせつて爲様が御座いませんの。出來ることなら、家の事な

ぞ抛出して、一しよ懸命稽古ばかりしてゐたいと思ふんですけど、さういふ譯にはまゐりませんですから」

「しかし惜しいですね。磨いたら光る者をあなたは持つてゐらつしやるんだから。佐久間はさも惜しんでゐるやうに云つて、「家のお弟子をかう云つちや惡いですが、水野さんの奥さんや金物屋の娘は、見榮で稽古してるんだから駄目ですね。嫁入仕度や見榮のために稽古してるやうな人は、決して上達はしないでせう。家へ來る人のうちで、心から藝の好きな方はあなたお一人くらゐなものかも知れませんね」

「下手の横好きと云ふんでせうね。好きなことは三度の御飯を止しても習ひたいほどに好きなんですけど、ちつとも上手にならないんだから詰りませんわ」

「稽古事は東京でなきや駄目ですよ。あんまり年齢を取り過ぎちやいけないでせうから、あなたも眞劍に琴をおやりにならうとするなら、今のうちですね。私とこの先生でさへ、あんなに喉が惡いのに、琴で一本立ちにならうとしてるんだから、あなたなぞ本場所で四五年みつしり勉強なすつたら、立派なものだ。琴の師匠で立派に身を立てることも出來るだらうと思はれますね」

「私、出來もしないくせに時々さう思ひますの。此家の奥様が許して下すつたら、琴を專門にして、どこかのお師匠さんから看板を下げて頂けるまで身を入れてお稽古したいと思つてゐるのですけど、主人はあゝいふ田舎者で分らずやなんで御座いますからね」

「そりや東京へ移轉なさることは六ケ敷いでせうが、一週に何度と日を極めて稽古に通つたらいゝぢやありませんか。定期だつたら汽車賃はいくらもかゝりやしませんよ」

「さういふことになるとよろしいんですけれど」

「御主人を說きつけてさう決心なすつちやどうです？　思立つたら早速實行しなきや機會を外してしまひますよ。……それで、このことは家内には相談なさらない方がいゝんです。家内も氣の狹い女ですからね。腹の中ではあなたを教へる力はないと思つてゐても、あなたのやうないゝお弟子を離すのは惜しいから、露骨に相談なすつたら引留めるのに決つてゐます。あなたの東京行に贊成する氣遣ひはありませんよ。だから、家内には默つてゐらつしやい。東京の師匠ではどういふ人についたらいゝかつてことは、私がよく調べて上げませう」

「でも奥樣にお斷りしないで、お師匠さんを替えても、お怒りにならないでせうか」

「そんな小さなことを氣にしてゐちや、人間の運は開けて行きやしませんよ。一藝に傑れやうといふ人は、兄弟や仲間の思惑でも氣に掛けないで、ドシ〳〵自分の途を進んで行くものなんですよ」

そんな話をしてゐるうちに飯は炊げた。主婦は思はず長話をしてゐたのに氣づいて暇を告げたが、間もなく小女を使に立てて、胡瓜の新漬などを屆けた。佐久間は茶の間の障子を開けつ放して、雨後のすが〳〵しい風に吹かれながら、昨夕からの空腹に朝餐のうまさを覺えてゐたが、さつき口から出まかせに云つたことが、相手の心を意外に動かしたらしいのを、ひそかに興がつてゐた。……あの主婦だつて、「私もこの通り琴が彈けます」といふ見榮のために習つてゐる連中の一人に違ひないので、先日も外から見えるところに琴を据ゑて、大氣取りでコロリンシヤンを鳴らし立ててゐた。眞面目に琴で身を立てやうつていふ女が、おれの嬶あなぞに教へを受けに來る譯がない。「しかし女はそれでいゝのだ」あの主婦は家附の娘で、自分名義の財産もちつとはある譯なのだから、おれの煽てに乘つて東京通ひをはじめるかも知れない。嬶あに內所でおれがあの主婦を東京の相當た師匠へ入門させてやらう。……

佐久間は食後には、雨漏りのために濕つてゐる蚊帳や蒲團を物干竿へかけて、緣側へ腰をおろして、雲の切れ目にあ

らはれる澄んだ容を見上げてゐた。

「妹は死んだのか、病氣は左程でもないのか。今日あたり、どちらかの通知が來さうなものだ。いつ電報が來るかも知れないが、事によつたらおれも出掛けなければなるまい」と思はれたので、家を空けつ放しにするのに躊躇されたが、でも、折角の休日に、ひとりで蟄居してゐるのは堪へられなかつたので、知合ひの木下を自分で呼びに行つて、次手にいろ／＼な買物をも調べて來た。その男を相手に將棊を差したり酒を飲んだりして一日を暮らさうとしたのであつた。

木下は小塚といふ將棊の強い男を連れて來た。佐久間は將棊盤の側へ麥酒や燒鯣などを置いて勝負をはじめたが、こんな勝負事にはたゞの座興で、一杯機嫌で横になつて世間話をしようといふ腹であつたのに、小塚が來たゝめに、遊びが眞劍になりかゝるのでいやになつた。他の二人が幾番も勝負を續けるのを傍觀してゐるうちに、佐久間は次第に欠伸を洩らした。

それで、暫くすると、彼れは客に番守を任かして置いて、ある懇意な商家へ遊びに出掛けたが、通りがゝりに見ると、藤倉の主婦は、眞晝の暑さにもめげないで、通りから見える所で簾を上げて琴を彈いてゐた。「やつてるな」と、彼れは冷笑して、立留つて耳を傾けたが、不思議にも不斷よりは彼女の聲が爽かで、弦の音も冴えてゐるやうであつた。「さつきは出鱈目を云つて褒めたのだが、あの主婦は本當に音樂ゝ才があるのかも知れないな」と、彼れは珍らしくも興味を感じて暫らく聞惚れてゐた。

ある商家へ寄つて世間話をしてゐた間に、何氣なく藤倉の家庭について話をし向けると、

「あしこは氣樂なんですよ。御存じの通り、旦那は人のいゝ方だし、主婦さんは元が鷹揚に育てられた方なんだから、誰れに對しても惡氣がありません。この近所で内輪が有福でイサコサもない家と云つちや、まづあなたのお宅か藤倉

さんくらゐなものでせう」と、そこの主人は眞面目くさつて云つた。

「私の家がそんなに有福に見えるんですかね。戯談ぢやない。私も藤倉さんのやうだと幸福なんですがな。主婦さんが容色よしな上に親譲りの財産を持つてゐるんだから」

「あなたは昨今此地へゐらつしやつたんだから、さうお思ひになるでせうが、藤倉の旦那も、主婦さんの兩親が亡くなられるまでは、お氣の毒のやうに苦勞なすつたんですよ。他所の養子になりや、誰れしも有うちのことなんでせうけれど……」

「でも、主婦さんが亭主思ひなんだからいゝさ」

「それはさうでせうがね。あの主婦さんは人づき合ひもよろしいし、御亭主とも仲がいゝやうですが、あの人でも娘の時分にはちよつと口はくがあつたのですよ。その相手は今は東京で立派な人になつてるんださうですがね。」

「あの人にでもさういふことがあつたのですか。見かけによらないものですね」

佐久間はさういふ話が人一倍好きだつたので、根堀り葉堀り訊ねて、主婦が娘時分に、藤倉の持家を借りて東京から保養に來てゐた學生に雜作なく誘惑されたことや、兩親に勘づかれて仲を裂かれた時に、おとなしく關係を絶つたことや、その學生の方が今の夫よりも男前がよくつて身分もいゝのだが、田舍の家へ養子に來る人ではなかつたので、頑固な兩親はさういふいゝ緣を纏めようとしなかつたことなどを知つた。

「御亭主は主婦さんの昔の事を知つてるんですかね」

「それは薄々知つてるでせうが、あの旦那はそんなことを根に持つてやしないでせう」

佐久間は歸りがけに、また藤倉の家を覗くと、土間で薪を割つてゐた主人と、ふと顔を見合はせたので、「今日は」と

挨拶した。先方では叮嚀に挨拶を返した。

木下と小塚とはまだ熱心に勝負を續けてゐた。「何も來なかつたかい」と訊ねると、電燈の集金掛が來たと木下は答へた。佐久間は將棊盤の方へは目をつけないで、二三杯の酒を煽つて寢ころんでゐたが、死生の境にゐる筈のまつ子の妹の顏よりも、藤倉の主婦の顏の方が一層つよく心にかゝつてゐて、彼れの目のさきにちらついてゐた。

（三）

二人の客が日暮前に歸つて行くと、間もなく、まつ子が出拔けに歸つて來た。妹の病氣は一時見直したので、どうせ助かる見込はないのだけれど、家の事も氣になるから、一先づ歸つて來たのであつた。

「身體は骨と皮なのだけれど、精神はたしかなのよ。側で見てゐると、私も今にこんなになつて死ぬるのぢやないかと思はれて、恐ろしくなつたの」

まつ子は、徹夜の看護で疲れたらしい顏して、口早に病氣の樣子を話しながら着替えをした。瀕死の妹の事が絶えず心に懸つてはゐたが、自分の家に歸つたゝめに、陰鬱な頭に多少の明るみが差したやうであつた。

「家の事なんぞ心配しないで、三日でも五日でも、しまひまで看護してやればよかつたのに。おれは一人でゐたつても決して饑えはしないよ」

「でも、よく家にぢつとしてらしつたわね。遊びに出掛けてやしないかと思つてゐたのに」

「おれは死んだつていふ電報の來るのを待つてゐたのだ」

「妹がいよ／＼いけなくなつたら、當分お稽古を休まなきやならないから、今のうち一日でも休まないでゐようと思つ

てるんです」

まつ子は誰れと誰れとが稽古に來たかと訊ねた。夫が神妙に家にゐて呉れたのも悦しかつたし、昨日からろくに咽に通らなかつた食事も、今夜は安心して箸を執ることが出來た。麥酒の殘りをも、夫に勸められると、コップに一杯だけ思切つて飲んだ。そして早くから寢床に就いたが、

「妹に比べるとまだしも私の方が仕合せね。四五年は生延びて來たのだし、琴も一通り彈けるやうになつたのだし」と、自分の幸福の量を數へ上げるやうに云つて、それに、夫といふものを持つたのだしと、これは心の中で、重な幸福として數へて、「だけど、私も妹のやうな病氣になつて死ぬるのぢやないかと思ふと心細い。どうせ死ぬるのたら頓死したらいゝでせうね」

「琴の名人にならうつて人が、そんな心細いことをいふやうぢや爲様がないね」

「本當にさうだ」今夜は夫の一言でゞも急に力づいたやうにまつ子は感じた。

（四）

二三日しても、まつ子の實家から、病人について何の知らせをも寄越さなかつた。夫妻はともすると、病人の事を話題に上したが、妹が重患に罹つてゐるために、まつ子が夫に對して素直に縋りついて來るのを、佐久間は不思議に思つてゐた。おしののことをも彼女は忘れたやうになつて、不斷ともすると口に出してゐたやうな怨みがましいことは云はなくなつた。

「それだけは有難いが、病人の極りが早くつかないと、おれも泊りがけで遊びには行けないし、折角の休暇が臺なし

だ」と、佐久間はひそかに歎息してゐた。そして、知人の家へ遊びに出掛けたり、あんまり好きでもない玉突場へ行つたりした。

琴の稽古は毎日續けられてゐた。藤倉の主婦もいつもの通りやつて來た。東京行の決心はつかないのか知らんと、佐久間は物足らなく思つてゐたが、他の女の稽古は例の如く騷々しく聞えるばかりなのに、主婦のだけは、不思議にいゝ氣持に聞かれた。唄聲は云ふまでもなく、琴の音でも、まつ子のよりも主婦の方が一層冴えてゐるやうであつた。

「藤倉の主婦は大ぶ上手になつたぢやないか」と云ふと、

「あなたも琴の音が聞分けられるやうになつたの?」と、まつ子は笑つて、「あの人だちが、まだ上手も下手もあるものですか。あの女は覺えの惡い方なのよ」

「さうかなあ」

佐久間は、嬶あにだつて分りやすまいと思つてゐた。すべての弟子を自分より比較にならぬほど劣つてゐると思つてゐるばかりでなく、隣りの町で本式に看板を出して五六十人もの弟子を取つて、日夜絶え間なく教へてゐる師匠の技術にさへ難癖をつけるほどに、樂才には自信を抱いてゐるまつ子が、藤倉の主婦くらゐを褒めよう筈はないと思つて、それについては再び口を利かなかつた。

ところが二三日後に主婦は珍らしく稽古を休んで顏を見せなかつたので、加減でも惡いのかと、まつ子は怪んでゐたが、その翌朝藤倉の主人がやつて來た。座敷では稽古中だつたので、佐久間が狹い部屋へ通して伺ふと、藤倉は言憎さうに、

「家内は永々御面倒を掛けましたが、少し事情が御座いまして、東京の××先生へお稽古に通ふことにいたしました」

と云つて、まつ子の許可を願つて、水引を掛けた禮を差出した。

「それはいゝでせう。主婦さんは藝の筋がいゝやうですから」と、佐久間は、琴の音に亂されて隣室へ話聲の聞えないのを幸ひに、鹿爪らしく音樂の講釋をして、主婦の東京通ひを推稱した。

　しかし、藤倉は快く許されたのを必しも喜んではゐなかつたので、先日から主婦が頻りに琴の專門家にならうといふ意外な望みを起したのを思留まらせようとして、夫婦で言爭つてゐたことを話した。

「據ろなくあれの氣儘にさせることにいたしましたが、ならうことなら、此方の奥樣によく意見して頂きたいと思つてゐますのです。家の事を打遣らかして毎日東京通ひをされちや、實は困るのです」

「それはさうでせうが、あなたも主婦さんのために少しの不便はお忍びになるんですね。お匹偶が音樂の名人におなんなすつたら、あなたの御名譽にもなるんですから」

「さう思つて諦めてはゐますが、二年や三年で修業が濟む譯ぢや御座いますまい」

「琴の修業は一生の事業なんでせう」

「家内もさう申して居ります」

　藤倉は暗い顔をした。佐久間は藤倉が歸つたあとで、自分の座興から出た勸告が意外の効果のあつたことを擽つたく思ひながら、休暇が明けてからの東京通ひにいゝ連れの出來たことを喜んだ。

　稽古が濟んでから、何喰はぬ顔して、まつ子にその話をすると、まつ子は顔色を變へて、「あの人は生意氣だわ」と叫んだ。「どうせ長續きはしないに極つてる。そつちへ續いて行けなくなつたら私の所へまた來ようと云ふのだらうけど、今度は私の方で眞平御免だ」と罵つたが、不安の思ひの湧上るのを如何ともしがたかつた。他の弟子も藤倉の主婦を眞

似て一人々々自分を離れて行きはしないかと疑はれだしたが、それにつけても、自分の喉の悪いことが呪はしくなつた。聲が悪いために自分の傑れた腕前までも安つぽく見られるのが無念であつた。

で、彼女は午後の稽古は聲ばかり氣になつて身が入らなかつた。前に坐つて、「姫松小松」を教はつてゐる小女の幼稚な唄聲さへも嫉ましいやうに耳に響いた。夜になると、夫に向つて當りちらした。

「私、琴なんぞ今日から止めつちまひたいのよ。あなたが働きがあつて、お金をドッサリ取つて私に渡して呉れさへすれば、こんないやな思ひをして、人に稽古なぞしてやつて日を送りやしないの。私がいくら音樂が好きで熱心になつても、私はもう爲様がないんだわ」と、自分で自分の喉を掴んで引きちぎりたさうにした。

「そりや、いやならいつでも止めなさい。はじめからおれは決して勧めやしなかつたぢやないか。人に教へたりしないで、自分の慰みにだけやつたらいゝだらう」

「止めるのなら一切止めつちまうんです。琴は三面とも叩壊して焚付にでもしてしまうんです」

「そんな馬鹿なことが出來るものか。家の中でまるで琴の音がしなくなつたらおれだつて淋しいよ。……お前の喉だつて養生のしようで癒らないとも限らないしね」

「氣休めを云つても駄目よ。完全に生れついてた私の喉を壞すやうな悪病を私にうつしときながらそんな氣休めを云つたつて駄目だわ。私が長い間苦勞して習つたのも無駄骨折だつたの。……無駄骨折をしなかつただけでも妹の方が仕合せかも知れない」

自分の一生の頼みとしてゐた尊い技藝も無慘に蹂潰されたやうに悲歎に沈んでゐるまつ子の顏を見ると、佐久間もいた〳〵しく感じて、藤倉の主婦を唆かしたことが後悔されないではなかつたが、これから東京通ひをはじめるあの主婦

と汽車に乗合せることを思ふと何となく樂しかつた。

まつ子の實家から電報が來たのは、その時であつた。妹の死去の知らせであることは讀まない前から分つてゐた。

「どうせ助からないのなら、早く死んで苦痛を免かれた方がいゝだらう」佐久間はさう呟いて、まつ子を促して、弔問の仕度に取かゝつた。

まつ子は、死骸を墓に埋められるのは妹のみではないやうに思ひながら、暫く茫然としてゐた。

廐戸皇子（五幕十場）

永田衡吉

人

廐戸皇子。（十五六歳。）
穴穗部間人后。（皇子の御母。五十六七歳。）
穴穗部皇子。（間人后の長弟。三十代。）
泊瀬部皇子。（間人后の次弟。後に倉橋宮と申す。二十代。）
物部守屋。（大連。七十代。）
蘇我馬子。（大臣。四十代。）
河上娘。（馬子の長女。後に倉橋宮の妃。十八九歳。）
負古郎女。（馬子の次女。後に廐戸皇子の妃。十六七歳。）
小手子媛。（大伴糠手の女。倉橋宮の妃。十八九歳。）
東漢駒。（馬子方の名族。）

跡見赤檮。(右同。)
中臣勝海。(守屋方の名族。)
押坂史毛屎。(右同。)
大伴囓手。(廷臣。)

博士覺哿。(高麗人。皇子の師。六十代。)
醫博士王陵。(百濟人。侍醫。六十代。)

多須奈。(後に德齊法師。)
止利。(多須奈の子。後に鳥佛師。十歳位。)
善信尼。(多須奈の妹。日本最初の尼。)
禪藏尼。
慧善尼。

其他。三人の太子、從者、侍者、輿舁、廷臣、軍人、舍人、民衆、異形の人々。

處——飛鳥地方。

場面

序幕　飛鳥の皇陵。

第二幕
第一場。雙槻宮の附近。
第二場。雙槻宮の一室。
第三場。雙槻宮の門內。

第三幕
第一場。石川精舍。
第二場。雙槻宮の一室。
第三場。馬子の第宅の庭。

第四幕
第一場。玄猪の宴
第二場。多武峯の岨路。

第五幕。　飛鳥の橘宮。

（背景はリアリズムを絕對に排する。光線の利用と一枚のカーテンと僅少の小道具とを用ひて演出されんことを望む。）

前奏曲。（催馬楽詞。）

しなてる　かたをか山に
飯に飢て　臥やせる
　そのたびとあはれ
親なしに　なれなりけめや
さすたけの　きみはやなき
飯に飢て　臥やせる
　そのたびとあはれ

（日本書紀聖徳太子の歌）

序幕

飛鳥の皇陵

深夜。微なる星の光。老樹に包まれた前方後圓の皇陵の前。周圍に池溝が繞つてゐる。烈風が梢を瀧のやうに吹鳴

らす。一隅に殘りの焚火。其傍の灌木の藪陰に布にくるまつて一人の少年が眠つてゐる。池邊宮御即位の大嘗會の翌夜。則ち丁未年四月上旬。大和國には疫病（天然痘）が流行して野には殆ど生色がない。

暫時く、上手下手より二個の影人が現れ劍を鳴らしつゝ默つて反對の方向に入る。續て他の影人が池溝の縁を傳つて出る。

影人。（それは東漢駒である。立上つて正面奧を凝視する。）何者だッ。（馳入る。）

（多須奈、押坂尚人が其聲を聞きつけて馳出る。四邊を覗ふ。續て駒が劍を鳴らしながら戻つてくる。）

多須。（唐突に。）野良犬にでも騙られたのか。

駒。（聲で多須奈と知る、笑ふ如く。）否、それよりもずつと莫迦々々しい事なのだ。此間、物部の神主の捧げた五十串の大幣が疾風に吹飛ばされて丁度衣の袖のやうに見えたのだ。

押坂。氣の張詰めてゐる時には笑話のやうな事が得て起り勝ちなものぢや。先刻、南の陵では黄金虫の群飛んだのを、それッ人魂だなどゝ立騷いだとのこと――（笑ふ。）

多須。然し人魂の飛ぶ方が當然かも知れないよ。最前も向ふの小川の邊で呻き聲がするので馳付けてみると、例の病神に取憑かれた親子二人が水草の根元に重なり合ふて既う事切れてゐる始末ぢや。

駒。初瀨三輪邊りは何更ひどいさうだ。御山の鷲や鳶が時を得顏に路傍に捨てられた人肉を漁つてゐるが途行く人は平氣でそれを見てゐるとの事だ。

押坂。（述懷的に。）昨日までは喪屋を營んで神と同格に葬られた死屍も今日は泣女、遊部はおろか、神主の祝詞さへ受けないで鳥獸の餌食となる……

多須。阿鼻地獄といふのは此のことだらう。むざ〳〵と野垂死をする人達を想ふと私は堪らない氣がする。

駒。死ぬ者は勝手に死ぬまでだ。他の死を悼んだり悲んだりする暇は私には無い、自分で自分の幸福を圖るだけが精一杯といふものだ。

多須。（嘲る如く。）汝は何といふ幸福な人だか。

駒。（平氣に高笑す）はゝゝ、譽められるのだか、貶されるのだか。

中臣勝海。（下手より登場。）どうぢや。別條はないか。

押坂。嚴重な警護に怖れてか、今夜は怪しい氣振さへ見えませぬ。

中臣。それは頂上。

多須。此陵は扨て置き、他の皇陵は？

中臣。同樣、別條の無い樣子。流石の惡靈物怪も連日の熱誠を籠めた物部氏の御祈禱に調伏したのであらう。

押坂。適切り、それに相違はありませぬ

駒。だが中臣氏、皇陵の無事平穩に引替え、村々では今にも一揆騷動の起りさうな氣配。何しろ耕地の乏しい村では青菜一枚得られない有樣だから尤もな事ぢや。

中臣。全く、それがまた新しい心配の種なのぢや。比較的豐かな村では達者な青年を狩集めて貧しい村の掠奪に備へてゐるが、どうか一大事にならなければいゝがなあ。また村内は村内で隣同士が垣根の芹一本を淺猿しう爭ふてゐる。家の中では親子兄弟までが一握りの粟を奪合ふてゐる。實に慘さを通り越したことぢや。

多須。（歩き乍ら。）平和な罪の無い野の人々をば何故此樣な修羅道に陷すのであらうか。

中臣。それは今更言ふ迄もない。あの石川精舍の外道佛が摩訶不思議の國とやらから此の神國を亡ぼしに參つたのぢや。

多須。(獨語の如く。)物部側の人達は頻りに其事を言ひ觸らしてゐるやうだが——。

中臣。言觸らしてゐるとは慮外千萬——。それでは多須奈、汝は何と思ふてゐる。

多須。それは是迄、平氣で鳥獸を狩したり人命を損ふことを誇つたり女を犯して恥ぢないやうな、言はば唯本能の儘に暮らしてゐた我國人に深い謎——積惡の業報を見せたのだと思ひます。

中臣。成程、毛色の變つた人だけに考へ方も變つてゐる。私達神國の民は瀆れといふ言葉は知つてゐるが、罪といふ言葉は知らない。汝は少し例のにかぶれてゐるらしいぞ。(自分に。)だが、まあいゝ。(調子を變へて。)これから北の陵を見廻つてくる。(行きかける。)

押坂。焚火にあたつてからお出でなされ。ひどく底冷えがして參つたから。

中臣。有難う。歸りにあたらせて貰はふ。では、皆さん。さよなら。

一同。さよなら。(中臣退場。焚火に寄る。)

押坂。(傍らの少年に氣が付く。)誰だらう。此處に寢てゐるのは。

多須。私の子供の止利だよ。

押坂。さうか。地べたも同然な處へ寢かせては身體に毒ぢや。早く家へ連れかへつて臥ませなさるがいゝ。

多須。有難う。だが此の子は母親を失ふてからは私の側を離れては片時も眠らないので、これには私もほとほと困つてゐます。(眠れる子の手についた泥を拭き乍ら獨語。)手も洗はないで寢込んで了ふたね。梟に化るところだつたよ。

押坂。母親の無い子ほど不憫な子供は無い。(寢顏を覗く。)此の無心な寢顏！(手を取つて。)早く大きうなつてお父さんに御恩返しをするのだよ。
多須。(子供の調子で。)有難うございます。
(話途絶える。風騷ぐ。夜は森々として焚火燃え盛る。)
押坂。時に、駒。精舍の外道佛は矢張その儘かね。大臣に關係の深い汝はよく知つてゐるだらうが。
駒。外道佛は表向き禁佛といふ事にして內實では蘇我氏一族の信心を寬許されてゐる。尤も私などはあの黃銅の病病面を覗いたゞけでも胸糞が惡くなるが。
押坂。其通り！私も二年程前、大臣と大連とがあの佛像の事で諍ふた時に一度見た事があるが直ぐに此眼を洗ひ淨めずには居られなかつた。髮は蛇の蜷局を卷き顏は水腫のやうに脹上り、掌や足の裏には、物部の有識が我國を呪ふ呪文だと言ふ、得體の知れぬ文字が刻まれてゐる。今、世間の噂では「この未曾有の大惡病を外道佛が持つて參つた證據は現前。惡病でくたばる人の相好は外道佛そつくりぢや。」と。さう聞いてみると、成程といふ氣がする。
駒。處が、近頃一族以外にも潛かに參詣する者があるといふ噂だが、物好きな人間もゐるものだな。
押坂。露見をしたなら重い罰を喰ふことであらう。
多須。然し人間は何を信仰しやうと自由ではあるまいか。
押坂。それは以つての外だ。我國には歷とした神々が在しますのだから、それを信仰しなければならぬ。
多須。その考へは偏よつた考へだ。捉はれた謬見ぢや。
押坂。(激して。)何と申す。

駒。(制す。)さういきり立つな。場所も場所、時も時だ。(注意を他に向けるやうに。)それよりか獲物の方はどうだらう、さあ、各々! 一廻り見廻つてくる事にしやう。(先づ立上つて四隣を見る。)あゝ早く獲物に有りつきたいものだなあ。

(多須奈押坂立つて劍を釣直ほす。)

中臣。(上手より再び登場。)どうぢや、其後は。

駒。其後は喋舌り通しだわい。はゝゝ。處で北陵はどうであつた?

中臣。不相變ぢや――が、怖しい流言が頻りに喧傳されてゐる。

駒。今時に流言は附きものであらう。

中臣。根も葉もない流言ならば兎も角。大連殿の「今に怖しい事が起るぞ! 悪病よりも饑饉よりも皇陵の異變よりも

――といふ豫言がどうやら適中したやうぢや。

押坂。はて何事であらう。

駒。その正體を訊きたいものだ。

多須。早う言ふて下されい。

中臣。(背いて。)私はまだ此耳を疑ひたい位ぢやが――汝達は、今日雙槻宮の御裏門から醫博士王陵殿の御輿が忍びやかに参内申した事を御存じか。また程經て、岡栖の氷室へ潜かに急使を立てられたことをお聞きではなかつたか。

駒。一向見も聞きもしなかつたが。(と二人を顧る。)

多須。私もさうぢや。

押坂。私もぢや。

中臣。さうであらう。それを知つてゐる者は私等の中に一人よりゐない筈。其の一人の口から怖しい罪悪が漏れて參つたのぢや。

多須。(直覺して。)むツ、帝には……。

中臣。しツ！(靜默。聲を落して。)而かも餘程の御重態とのこと。(間。)

押坂。昨日大嘗會の庭で麗しい御尊顔を拜しまつつた許りだのに――。到底、信じられないことぢや。

中臣。さ、そこなのぢや。御病名が何であるか、ほゞ御推察が出來やうがな。(駒を除き一同沈んで了ふ。)

駒。(歩廻る。)また世の中が騒がしくなるのだなあ。

押坂。(中臣に。)然し、左様な御重態なら、厩戸皇子を御召し遊ばすであらうに、今日は終日、橘宮の方角からは乗物の影一つ見えませなんだが。

中臣。成程、さう承れば疑はしい點もある。

多須。否、皇子を御召し遊ばさぬは、佛染の卑い御病氣故、間人御后が御深慮を廻らされてゐるせいかも知れませぬ。

押坂。その推測も尤もぢや。

中臣。(生眞面目に。)これも皆佛法の爲めぢや。怖しい外道佛の呪ひからぢや。(駒、嘲笑す。)汝は私を嗤ふてゐるのか。

駒。うむ。(肯く。)汝の糞眞面目な言ひ方が可笑しいのだ。

中臣。(怒る。)汝は禁制の外道佛が憎うはないのか。我國の神々が怖しうはないのか。一體。汝は何人ぢや。

駒。私は東漢駒だ。それで充分だ。

中臣。神國の民ではないと言ふのだな。それでは何故皇陵の御警護をなし奉るのぢや。

駒。その前に先づ汝達の考へから承らう。

中臣。知れたこと。皇室御奉公の赤心からぢや。

多須。今帝の篤き御殊遇に報ひ奉る爲めに外ならぬ。

押坂。私は中臣氏と同じ精神ぢや。

駒。（幾らか感傷的に。）汝達のやうに一途に純な心持で御奉公の出來るのが羨ましい位ぢや。尤も大御心に對する私の考へは汝達と寸分の相違はないが、此度の御警護に就いては、もう一つ私は個人的な心願を有つてゐる。卒直に言へば私が此の皇陵の護衞を生捕つたなら、馬子から或る褒美を貰ふことになつてゐる。汝達の想像にも及ばぬほど私の一生に輝きと幸福とを授けて吳れる天地にも換え難い褒美なのぢや。

中臣。腐腹漢！（唾を吐く、押坂も忌々しげに唾を吐く。）

（時に怪しき音。各々屹となつて別々の方向から奥に消ゆ。舞臺空虛。烈風の音。）

止利。（聞える、眼覺めて起上る。）父さん。父さん。（見廻す。長き間。正面を凝視す。）灯が見える！灯が見えるよ。オ！父さん。

押坂。（上手より登場。止利と同じ方角を見る。）灯だ！此の夜深かに。（間。）

止利。あゝ消えた！

押坂。（續いて。）あゝ消えた、烈風の中に。

中臣。（何時の間にか現れてゐる。）確か、橘宮の方角。

押坂。（獨語の如く。）大銀杏のほとり。

（不安の昂まる如き深き間。再び怪音聞ゆ。押坂中臣馳入る。靜寂。）

止利。あゝまた見える。父さん。また灯が見えるよオ！（叫び乍ら馳入る。舞臺谷底の儘。少しく右に廻る。）

（二丁の輿が下手から出る。厩戸皇子と博士覺哿とが乘つてゐる。松明は消えてゐる。三度怪音す。輿停る。）

從者。怪しき物音が致しまする。

覺哿。御陵を靖める舍人の聲であらう。氣遣ふことはない。輿を進めてお呉れ。

（輿少し進む。悲鳴鋭く聞える。）

厩戸。（輿舁に。）暫らく！（輿停る。深き間。）

從者。（慄えて。）物怪でもござりまするか。

覺哿。（靜かな笑。）物怪？（悲鳴斷續す。）

厩戸。梟に襲はれた母鳥のやうに聲が切なう涸れて行く。輿をおろして貰ひませう。

覺哿。火急の御道程を未だ半ばも參つてはござりませぬ。一刻の遲參が百年の悔を殘すやも計られぬ只今、何卒其儀は

……

厩戸。あの聲を確めずに素通りをする事は私には出來ぬ。

覺哿。（詮方なく）日頃の御氣性、已むを得ませぬ。ほんの一時でござりまするぞ。（輿舁に。）輿をおろして貰ひませう。

（輿より降る。上手へ歩み乍ら重ねて。）ほんの一時でござりまするぞ。（舞臺元に復る。）

（正面池溝の傍で肉塊のやうな人間が四人の者に嚴しく鞭打たれてゐる。苦痛を忍ぶ哀音が慘として聞える。）

中臣。人間には相違ない。だが、それにしては何故物を言はないのだらう。

駒。全く強情い奴だ。(一同頻りに鞭打つ。)

押坂。あゝ手が草臥れた。(手首を振る。)

多須。腕が抜けさうだ。(腕を揉む。)

駒。其鞭を皆貸して呉れ。私が打ち据えて呉れる。(二人の鞭を取る。風を切る鞭の音。呻聲。)

覺哿。(下手より現れる。)暫く鞭打つことを止めて下さい。

中臣。(意外に。)さう言ふ汝は誰ぢや。

覺哿。粗忽を致しました。私は博士覺哿です。

中臣。あ、博士でござりまするか。私こそ失禮を仕りました。私は中臣勝海でございまする。

覺哿。御大儀に存じます。

中臣。恐入りまする。漸く物怪を引捕えてござりまする。矢張り人間らしうは見えまするが手におへぬ代物で寸分の油断もなりませぬ。

覺哿。それは御苦勞千萬。

中臣。何はともあれ、國家の爲め御安堵を願ひまする。即刻、これにて詮議を致しまする、

(覺哿は皇子に何か打語る。其間に左の對話が進む。)

押坂。(駒に。)鞭を返して呉れ。腕が休まつたから。

多須。私のも返して呉れ。少し息むと力が百倍する。

中臣。さ、一齊に打つとしやう。白狀をするまでは手を休めないで。(打ち出す。)

厩戸。(上手に進む。)其人を苦める手を休めて下さい。

覺智。(紹介するやうに。)橘宮の御子でござりまする。

(四人驚畏して鞭を休めて默る。それは流言の當つたといふ驚きでもある。)

厩戸。其人を此儘に釋す譯にはゆかないでせうか。

中臣。(愼んで。)皇子の御言葉ではござりまするが、皇陵の神聖の爲めには飽く迄、究明を致さなければならぬかと存じまする。

厩戸。然し鞭打つことは究明ではなくて罰することではありますまいか。罰は罪に伴はねばなりませぬ。

中臣。言葉を返すは恐惶には存じまするが、皇陵を侵し奉ること自體が既に死罪にも當る大逆かと愚考致しまする。

厩戸。それは形式に泥んだお考へでせう。其人は盲目かも知れません。啞者かも知れません。又もつと不幸な白痴か狂人かも知れません。

覺智。(其人の側に寄り優しく。)貴方は何處の何誰ですか。口がお利けでしたら物を言ふて下さい。私は覺智と申す者です。彼處には厩戸の皇子が居られまする。何卒憚からずに口を開いて下さい。

その人。(切れ〲な痛しい調子。)おゝ皇子が在られまするか。私は何處の何某と言ふ程の者ではありませぬ。いつも役人達からは撲たれる側の人間に過ぎませぬ。然し今は、實際鞭に相當する惡いことをしました。(苦しき呼吸。)鞭を握つてゐる方々。私を早く撲ち死めして、苦痛をとめて下され!

厩戸。おゝ痛はしいこと!(老人に寄添ふ。)

覺超。言葉附からお察しして、貴方は深い思慮のおありになる方だと思ひまする。何故あつて皇陵を犯されたか、仰らずに打明けて下さい。私から御願ひしまする。

老人。(味氣なさ苦しき調子。)私は卑屈な人間ぢや。あゝ咽喉がつまる。水を、水を飲ませて下され。

厩戸。博士。私の輿の中に醴酒を持つて參りました。宜しければそれをあげて下さい。

老人。水で結構！何萬の同朋が生死の間に苦んでゐるのに、私だけが甘い醴酒を戴くことは出來ませぬ。

厩戸。(默然として池溝の清水を手に掬つて老人に飲ませる。次に自分の上衣を脱いで慄えてゐる肩先に被せやうとする。)

押坂。制する如く。)餘りに御勿體なきこと。

中臣。(續けて。)且つ、斯る大逆人をば却つて御憐憫遊ばすは、御政道の手前も如何かと存じまする。

押坂。理に偏する嫌ひはござりまするが申上げまする。罪を究明致す爲に鞭打つ事が不可なりとすれば同じく愛憐なことも不可なりと申さなければなりませぬ。

覺超。成程兩人の申される事に正理があるやうぢや。(皇子に。)御子。暫時これにて皆さんの御成敗を靜かに拜見する事に致しませう。

厩戸。然し、博士……

覺超。(強いて押止める。含意的に。)まづ。まづ。(皇子は已むなく覺超に連れられて少し離れる。四人繩を握つて氣構へる。其時夜はほの〴〵と明初める。黎明の光はよぼ〳〵の老人を地上に見出す、髪は剝がれ鼻梁は挫かれ皺枯れた肩から胸へかけて鮮血が滴つてゐる。斷末魔の切なき息づかひ。)

多須。（此の陰慘な光景に打たれてよろめく。）おゝ！此の痛しき人肉の上に誰か鞭をあて得やうぞ！（倒れる。）

（中臣押坂は顔を背向けて立竦む。）

駒。（平然と三人に。）如何するといふのだ。私に此の死ばり損ねた身體を呉れないか。大臣の邸へ擔いで行くのだ。いゝか？　（三人無言。）

覺弼。駒。折角だが私に此人の事を委せては呉れないか。若し汝が褒美をと言ふのなら私から差上げることにする。

駒。（笑を含んで。）博士から戴く御褒美では大方物足りますまい。

覺弼。それでは。

駒。日本の國を戴かうとも大臣の御褒美にはかへられませぬ。

厩戸。（右の對話中、老人の側に寄る。）是程までに酷い傷を受けてゐやうとは！私は自ら父上をば打擲したやうな切ない苛責を感じまする。（振向いて。）博士。傷の手當を早くして下さい

覺弼。（老人の様を觀る。）何といふ痛しい傷口でございませう。（手を取る。）この急しい息づかひ。次第に身内が冷えてまゐりまする。（間。）やゝ！これは！（狼狽して。）最早、絶望かと存じまする。

厩戸。（老人の肩に手をかけたまゝ。）あゝ。（老人死す。）

多須。（死屍に取縋る。）貴方を打殺したのは私でございます。許して下され。許して下され。（涕泣す。）

厩戸。（悲しげに博士の手を取る。）私は如何して此の一人の死を償ふことが出來るでせうか。博士。私の採るべき途を敎へて下さい。

覺弼。（憂を帶びて。）「時」がやがて告げて呉れるでございませう。今は唯、懇ろに亡骸を葬ることにございまする。

多須。覺哿殿。何卒其の役目を私に仰付けらるゝやう御願ひ申しまする。

覺哿。(厩戸に。)多須奈が斯樣に申しまする。

厩戸。良きやうに取計ふて下さい。

覺哿。畏りました。(多須奈に、)此の老人にも親戚の者がありませう。靜出して懇ろな儀式を受けさせて下さい。然し如何なる理由があつたにせよ、皇陵を犯し奉る罪は決して輕くはありませぬ。その程をよく辨へて、此の不幸な人を葬ふて下さい。

多須。委細心得ましてござりまする。

覺哿、(厩戸に。)それでは、御子。時刻が移りまするで。(促して下手に步む。中臣押坂後に隨く。下手へ。)輿を廻しておくれ。(奥で返答がある。輿を待つ間に焚火の傍で土人形を造つてゐる止利が目に付く。)

厩戸。何と器用な子であらう。

覺哿。この腕では一人前の埴輪師も跣足でござりまする。(中臣に。)誰の子供ですか。

中臣。多須奈の子でござりまする。

厩戸。(人形を手に取つて。)此の胸の膨らみなどを見ると血が通ふてゐる樣に思はれる。

多須。(死骸の傍にゐたが馳けてくる。)止利や、汝は何をしてゐました？此の御方は厩戸皇子でございます。御挨拶を申上げなさい。

止利。(父の顏を仰いだのみで又細工を初める。)

多須。(叱るやうに。)これ、止利——。

厩戸。多須奈、さういふ事は強ひなさらぬがよい。(短き間。)折角、此子の豐かな才分を譲つて、おやりなさい。

多須。忝うござりまする。(止利を向いて。)我儘の行儀知らずで困りまする。

(輿來る。皇子博士それに乘る。輿動く。)

厩戸。止利!(手を求める。)

多須。(止利の手を見て。)餘りに汚れて居りまするで……

厩戸(構はずに止利の手を堅く握る。)

多須。(思はず)あゝ、御手に泥が。

(輿靜かに上手に去る。一同暫時見送る。)其間に中臣と押坂に何か囁く。矢庭に止利の作の人形を踏み砕く。止利わッと泣く。)

多須。(驚いて振返る。)何故亂暴をなさる?

押坂。知れた事。(一つの人形を取つて。)此の人形は何だ。

中臣。外道佛そつくりではないかッ。

多須。そ、それは……

中臣。姦しいッ!(押坂と共に撲りつける。)

駒。(中に飛入る。中臣と押坂との腕を捉る)どうしたといふのだ。

中臣。離せッ。

押坂。默つて見てゐろ。

駒。何をぬかす！

押坂。退け！

中臣。退け！（駒を押坂と共に突飛ばす。駒との間に格鬪が初まる。遂に駒は兩人を摚倒す。）

駒。（快活に笑ふ。）わはゝゝッ。私は此世で一番强い人間だぞッ！

（陽出でゝ風鎭まる。）

（止利は多須奈に取縋つて泣いてゐる。）

幕

第二幕　第一場

雙槻宮の附近

飛鳥野の一部。雙槻宮の門と土塀とが見える。何處からともなく挽歌が聞える。日は曇つてゐる。棺の輿が幾つか續いて行き過ぎる。音もなき淋しき葬列である。前幕の翌年後。穴穗部皇子と泊瀬部皇子とが話し乍ら出る。

穴穗。私は私だ。他の幸福よりも自身の幸福の方が大切な位は汝にだつて分つてゐるであらう。

泊瀬。分つて居ります。然し御危篤の義　帝の御枕頭で兄弟が牆に鬩ぐ様な醜さは避けたいと思ひまする、稚宮は未だ若年ではあり、間人姉后は何と申しても女性ではありますし……

穴穗。汝は實際姉弟おもひだよ。

泊瀬。また皮肉ですか。（顏を背向ける。）

穴穗。弟。汝は覺哿博士の御弟子で、古今東西の史實にも通じてゐやう。まあ考へても御覽。神代から今日まで骨肉が政權や敎權に就いて爭ふた例しはざらにある。其爲め無論弊害もあつたがまた一面世の中の進步は爭鬪によつて助長され人民は幸福に導かれてゐる。古くは出雲の大國主命は八十人の兄弟を亡ぼして天下を取り、世は太平を謳ふたと言ふ……

泊瀨。それは外形だけを見た理論でせう。私は兄上の人間らしい感情に訴へて物を言ふて居るのです。

穴穗。だが、理論に裏付けられぬ感情は私の大嫌ひな、女々しい感傷といふものだ。（間。）そこで私は大國主命が……

泊瀨。大國主命には兄弟を殺戮遊ばされてもそれが釋されるだけの德——治者の美德がおありだつたのでせう。

穴穗。と言ふと、私にはそれが缺けてゐると言ふ譯だな。

泊瀨。（きつぱりと。）さうです。

穴穗。（冷笑。）弟。侮辱をされても私はカツとなる性の人間ではないよ。實際、私には美德といふものは無いからな。だが今に衆望を集めてゐる私を見て慚愧しない樣にしてお吳れ。今度こそは人民の後援を第一に念頭に置いて取りかゝつてゐるのだから。

泊瀨。（無言。）

穴穗。弟。いつそ今度の畫策を打明けて置かうか。（聲を落して。）あの疫病が種なのだ。何しろ眞向から生命を脅されてゐる者ほど度し易い者は無いで——

泊瀨。神の怒りだと大連の一黨が言振らして居るのを知つてゐます。

穴穗。そこなのだ。一克な守屋老人は心底からさう信じてゐるのだが私はそこを利用、と言ふては惡いが、それによつ

て、事を目論んでゐるのだ。迷信にせよ、立派な信仰にせよ、兎角信じ込んでゐる者の言ふことは恐しく民衆を動かす力のあるものだ。

泊瀨。（獨語の如く。）大連は氣の毒な方です。

穴穗。（それには無關心に。）まあ聞け、弟。處で昨夜、御重症の帝から潜かに大臣大連や我々近親の者に「三寶に歸伏したいが卿等の議に從はふ。」と言ふ詔が降つたのだが、宮中の佛法禁制は先帝の御遺詔。それで緊急に會議を開いて御奉答申上げるやうにと姉后や厩戸皇子の仰せなのだ。弟。汝も是非出て吳れるだらうね。實は其事を賴みに汝の邸へ參る途中だつたのだ。して、都合はどうだ、

泊瀨。他に差支はありませぬ。

穴穗。有難い。そこで其の詔には何卒贊成を表明して貰いたいものだ。

泊瀨。兄上は？

穴穗。私か。私は……私は反對を申上げる。

泊瀨。何故ですか。

穴穗。さう詰るやうに問ふて吳れるな。實は守屋を傀儡る爲にどうしても反對しなければ拙いのだ。

泊瀨。それでは何故私には贊成せよと仰言るのですか。

穴穗。其の不審は尤もだが、私の本意は結局贊成側が克つて豐國大師の御參内を乞ひ御授戒の式のある樣に願ふてゐる譯だ。

泊瀨。さうなると守屋一黨の言振らしで非常に佛法を呪ふてゐる窮民はどうするでせう、（穴穗無言。短き間。）兄上、私

は今夜は參りませぬ！

穴穗。來ない？

泊瀨。え。(沁々と。)兄上。衆望は集まつてくるもので集められるものではありませぬ。火に誘はれる蜉蝣の群は微風にも吹散つて了ひます。

穴穗，(嘲笑。)成程、聖賢の書にさう言ふ風な名論のあるのは私だつて知つてゐるが、多くの場合、名論と實際とは仲の悪い双生兒の樣なものだ、孔子は孔子で禹でも舜でもない、これはなぜか。つまる處、人民といふものは名論家の考へる樣に賢明でもなく、また賢明に成らうともしないものなのだ。汝は蜉蝣を例にしたが灯取蟲といふ奴は灯が無ければ生きて居られない。一つの灯を見付けて油を吸ふて了ふと他の火を探廻る。人民を誘ふには先づ大きな火を燃やすことだ。

泊瀨。然し蒙昧な人民を賢明になるやうに導くのが政道の根本でせう。殊に我國のやうに精神(こころ)の世界といふものに觸れたことの無い人民は尚更です。

穴穗。それもさうだが汝は一體理想に走り過ぎるやうだ。實際の政治は汝の描いてゐる樣に行くだらうか。理想家も何時かは現實にぶつかつて成程と肯く日が來るかも知れないよ。

泊瀨。私は理想家で結構です。凡て理想に殉ずることは人間の喜びとしなければなりませぬ。

穴穗。(幾らか皮肉に。)立派な心掛けだ。處で今の一件をもう一度考へ直してどうか承諾しては吳れまいか。

泊瀨。(地を見詰めた儘。)出來ませぬ！

穴穗。ではあらうが、兄が此樣に賴むのだ。

泊瀬。(それには答へず。)死を前にして、義兄帝が佛を求め遊ばすあの切ない、渇く様な御心持、あゝ信仰をさへ忍ばせらるゝ御胸中！(暗然。)

穴穗。其様に思ふのならば賛成側に立てばいゝ。(含む様に。)まあいゝ。私は私で料簡がある。(上手を見る。)お、守屋が來る。後方に大勢人民が！どれ、迎えに行かう。(倉皇として上手に退場。)

泊瀬。(淋しげに兄の後影を見送る。徐かに下手に退場。)

(軈て守屋と穴穗皇子とを先頭に民衆がついて出る。民衆は病み疲れ衰え飢えてゐる。其中に迹見赤檮が紛れてゐる。)

守屋。(民衆に向つて續ける。)我が大八洲、瑞穗國の民草は皆天つ日嗣の御裔ぢや。文字にも御祖と書いてみをやと訓む。是れ、神と人とが親子の間に在る有難い證據ぢや。斯る芽出度き國體が外つ國にござらうか。然るに摩訶不思議の邪教を拝して怪しまぬとは何たる事！皆さん！此の千古未曾有の大悪病は何の爲めでござる。おゝ神を恐れなさい。神を恐れなさい。

穴穗。(受け繼いで。)大連殿の言はれる、神を恐れよとは則ち佛を憎めと申すこと。皆さんは石川精舎の外道佛をよもお忘れあるまい。あれこそ神の怨敵、否や人民の仇敵ですぞ。

民一。それよりも私達は疲れてゐまするで。

民二。お肚が空つぽでございまするで。

民三。病ひ神に取憑れてゐまするで。

民四。親父も妹もくたばつて了ふたわい。

穴穂。（背く。）皆さんの内に此人の様に親兄妹を奪はれ夫や妻や子を失ふた方がゐるならば、其の悲みを怨みに代へて、佛法と蘇我氏とを呪ひ返さねばなりませぬぞ。（挽歌が聞える。）

守屋。あゝあの哀しい挽歌が蘇我氏の耳には入らないのであらうか。あゝ……

民五。藥を欲しいなあ！

民六。飯に有りつきたいなあ！

民七。菜ッ葉の切でも喰べたいなあ！

守屋。（下手を見て。）お、葬禮が參る。（民衆に。）道をあけて！

（民衆は兩側に分れる。棺を乘せた貧しい輿が出る。老いた妻と子供と多須奈止利善信尼禪藏尼惠善尼其他村民が續く。妻は狂人らしく蹌々としてゐる。佛教風の幢幡を立てゝゐる。民衆は哀悼を表する。守屋は瞑目して祝詞をあげてゐる。行列上手に入る。）

穴穗。（見送つて。）あれは何者の葬禮ぢや。國禁の佛法に則つてゐる。

守屋。精舍の比丘尼がついてゐる。此眞晝中、而かも宮の御門先を、餘りに恐多いことぢや。さうぢや、御門の舍人に訴へてあの葬列を止めさせることにしやう。（行きかける。）

穴穗。大連殿。お待ち下され。あの葬列を遮る位の勇者は此處にゐる神の子孫の中にも居りませう。

守屋。如何にも、御尤もでござりまする。（民衆に向ひ。）皆さん！私は皆さんが神の子であることを信じまするぞ。（民衆どよめく。）信じまするぞ

男。（飛出す。皺枯れた聲。）私は此の痩せ腕を捧げませう！（皮肉に。）然しあの葬列を亂して死者を辱めたなら、私――

此處にゐる私等に何を賜ふて下さる？（守屋啞然）私共は飢え切つてゐる。病みほゝけてゐる。いゝや此の廣い飛鳥野には百倍千倍萬倍の同朋が死神と戰ふてゐる。守屋殿。私共が貴方の後方に跟いてきたのは例もの御談義を聞いて、其の才孔の埃を吸ふ爲めではありませぬ。否、それだけならば未だ我慢が出來る。（上手を指す。）あれ彼處に行く粗末な棺を辱めよとは！（啜泣降る。）あの棺の中には私等の友が眠つてゐるのだ。友は氣狂の妻子や憐れな子供達の餓死を見兼ねて、恐れ多くも皇陵の御供物を盜みに行つたのだ。供物盜人は彼男ばかりではなかつたが、老人の果なさ、逃げ遲れて散々の打擲を受け、果ては血にまみれて無慘の最後ぢや！（民衆共に泣く。）

民一。泣くな。泣いてゐる時ではないのだ。

民二。否や、泣け。泣け。泣け。涙が我々を憤激させるまで泣け。

他の男。あの葬列は鞍作の多須奈の心盡しなのだ。彼は無慈悲な鞭を揮ふた罪亡ぼしにあの友を葬るのだ。

民三。あゝ泣かずには居られないわい。（泣く。或る民衆は共に泣き或は之を見て笑ふ。）

子供。（突然。）あツ爺さんが倒れたツ。

（一同の視線の集る處に一人の老爺が横はつてゐる。）

民四。爺さんも到頭死んで了ふたのかなあ！

民五。皆の衆に護られて死ぬとは仕合者だ。（民衆哀悼を表する。）

守屋。（死者の側で神道風に祈る。）

男。死んで結構な神様の國に行けるなら病んで地べたをのたうつよりはましただわい。

（民衆の中より「倉廩を開け！」と叫ぶ聲す。一同和す。次第に熱狂す。）

穴穂。（諭す様に。）倉廩の鍵は大臣が保管してゐる。それは馬子の役目ぢや。私達の関るところではない。
民衆。馬子の邸へ押寄せろ！（口々に叫び乍ら下手を向く。此の以前、門の外に厩戸皇子が現れる。一旦門内に消え再び現れて穴穂部皇子に逢ひに來る。上手の隅へ守屋をも招いて左の對話がある。）
厩戸。叔父上。（手を出して。）これは倉廩の鍵でございます。
穴穂。鍵？どうして鍵を持つて參つた？
厩戸。母上の御許しを得て持つて參りました。第三番の倉廩を開いて施しをして下さい。
穴穂。三番の倉廩は汝のではないか。
厩戸。えゝ、さうです。
守屋。おゝ勿體ないこと！卑しき民草に御子の御倉廩を開かせ給ふは恐れ多い儀と存じます。
厩戸。其様なことは決してありませぬ。何卒困つてゐる方々を少しでも賑はして下さい。
守屋。つらつら考へまするに御子の御考へは些か御未熟かと拜せられまする。總じて人民との間には障壁を構へることが肝要にございまする。得て、人民は恩に慣れ易く、延いては御尊嚴をも傷付けまじきかと恐察致しまする。
穴穂。（守屋に。）貴方の御考へは却つて頑なに過ぎはしますまいか。危急の民を救ふは至極時宜に適した事と思ひます。
それに后も御聽許の上は直ちに倉廩を開いて窮民共を賑はすことと致しませう。
守屋。（は不精無精で。）左様な儀なれば已むを得ませぬ。では、御伴を致しまする。
穴穂。（厩戸に。）御子。それでは私が宜きやうにする。おさらば。
厩戸。（兩人に。）お頼み申します。

守屋。御免遊ばしませ。（兩人下手に行く。厩戸門側に歸る。）

穴穗。（鍵を鳴らし乍ら民衆に。）倉廩は開かれた！さ、私達に跟いて來なさい！

民衆。（感喜。）おゝ穴穗部皇子樣！穴穗部皇子樣！（兩人を先頭に下手に入りかける。）

男。待つて與れ！同朋！（民衆振向く。）私共は「飢え」に引かれて行くのだぞ「飢え」にだぞッ。いゝか、忘れるないゝか。

民衆。大勢。さうだ。全くだ。全くだ。

民五。そんな事はどうでもいゝ！腹さへ脹れたならそれでいゝのだ。

民六。皇子樣は行つて了はれたぞ。早く跟いて行かう！

民衆。さうか。行かう。行かう。（狂喜の餘り老爺の死骸を忘れて騷然として退場。）

厩戸。（寂然として後を見送る。中央に進む。死骸を見る。獨白。）鞭に刻まれて死ぬ人、今、路上に棄てられる哀れな骸。（默思。）何故この人々は死なねばならなかつたのであらうか。それをおもうと、私達は何ものかに濟まない氣がする……）

（陽春の靜かなる夕暮。）

負古郎女。（花束を持つて上手奧から徐かに登場。）厩戸皇子樣。此の花束を御父上の御枕邊にお捧げ下さりませ。

厩戸。（靜かな眼で郎女を見る、花束を受ける。心を籠めて。）有難う。負古郎女

負古。（花束から手を離して面を伏せる。）

（物思はする靜かな間。鐘が鳴る。）

厩戸。（鐘が鳴る方を向いて。）鐘が鳴る──。

負古。精舎の鐘でござりまする。

厩戸。今宵に限りなぜ打鳴らすのでせう？

負古。御葬禮が初るのでござりまする。

厩戸。どなたの？

負古。陵で亡くなられた哀れな老人の……

厩戸。（次第に髄が滋ふてくる。）

（鐘の音。靜寂。）

第二場

雙槻宮の一室

間人后の御居室。庭前に散りそめし一本の櫻。前場より約一時間後。間人后は疲勞の體にて坐つてゐる。王陵が離れて物を言つてゐる。

王陵。斯様な次第にござりますれば最早如何なる靈藥も所詮は熱砂に注ぐ水も同然、効驗のほどが疑はれまする。唯此上は氷室の使者を待つて御尊體を氷中に浸き奉るより外に手段はござりませぬ。

間人。それが最後の手段と申すのかえ。

王陵。（苦惱さうに。）遺憾の極みに存じまする。

間人。(氣を取直して。)斯うしては居られませぬ。御病室へ參りまする。(立ちかける。)

玉陵。(制して。)唯今は快よく御寢の態に拜せられまする故……

間人。左樣なれば今暫時休息致しませう。御眼覺めの上は直樣知らせて給も。

玉陵。はは。御免下さりませ。(退場。)

廐戸。(登場　花束を持つ。)お、母上。これにお在でゝしたか。唯今叔父上に鍵を托して參りました。

間人。御苦勞。せめてもの功德となりませう。(間。)あの氷室の使者は未だかえ。

廐戸。唯今、漸く歸參致しました。

間人。(嬉しく。)あゝ、なんぼう待ちくたびれたことやら。(ほッとする。)

廐戸。處で父上の御病態は如何なのでござりまするか。一向雲を摑むやうな氣持が致しまする。

間人。(肯く。)まづ此處へお坐り。(廐戸花束を置いて坐る。)濕やかに。)夜中、急使をたてゝ招寄せ乍ら御病室へも入れ申さず又落着いて物語りをする閑もなかつたので、汝の不審申すは尤もなれど。(躊躇る。)

廐戸。先づ御病名は?

間人。さ、それが……あの怖しい流行(はやり)の病。

廐戸。(愕然。)あの疱病!(長き間。)

間人。それを聞けば此の母が豐國大師の御參內に御反對申上げる譯も自然お解りの筈。今、世に疱病は佛法の祟りと言ふに帝自ら御信仰遊ばされては民の怨恨は必定。殊に黨爭の激しい此頃、これを機に民心を煽てゝ事を計る者の無いとも申されませぬ。それ故、よし父上が御授戒を受け給はすに御他界遊ばされやうとも民の平和には換えられま

せぬ。

厩戸。それもさる事ではござりまするが、父上の御願を左様に無にする事は出來ませぬ。穴穂部叔父上と守屋一黨とを除き凡て御賛成と推せられまするに、肝心の母上が御反對とは……

間人。御子。國が大事か、父上が大事か、何れでござりまするか。

厩戸。國が亂れるとは杞憂と申すもの。又、朋黨の爭ひは行き盡く處まで行かねばなりませぬ。然し父上の事は眞の解脱を受けられるか、受けられぬか、人の一生で一番切實な深い問題でござりまする。母上の仰せは如何あらうと今夜の會議に私は初志を翻しませぬ。

間人。(厳として。)許しませぬ!(兩人押默る。)

覺哿。(急ぎ登場。)王陵殿の懇なる御手當に依り御苦惱は一しほ御減退の御容子に拜せられまする。然し乍ら打續く御高熱の爲め心の臟の御衰弱甚しく今夜は最も危惧に耐えざる御容態との事。斯く相成つては最早庶民に對し秘密に致すも詮なき儀故、何卒御公表の程願はしう存上げまする。

間人。其通りぢや。即刻大連と大臣とに申付けて御危篤の旨を公にして呉りやれ。

覺哿。委細拜承仕りました。(首を下げる。)猶ほ帝には唯今御眼覺めあつて御后を御召しにござりまする。

間人。御眼覺とあれば直ぐに參上致しまする。(立つ。)

厩戸。私も御連れ申して下さりませ、母上。

間人。今、暫らくは――。

厩戸。御目にかゝりたうてなりませぬ。一目……(取縋る。)

聞人。汝の身體は大切ぢや。良き折りにお招び申しまする。（皇子の手を離す。覺哿に。）唯今のことは……

覺哿。（受けて。）はは。畏りましてござりまする。（立つて下手に行きかける。聞人后退場。）

厩戸。（涙ながらに。）博士！私は何ものかに寄り縋つてゐたいやうな氣がしまする。あゝどうすればいゝのか……

覺哿。御子！悲哀は深く悲めと古人も諭して、ござりまする。然し悲しみに傷れては不可ませぬ。ぢつと噛み堪え乍ら人生の深い事實に徹しなければなりませぬ。（布帛を出して皇子の頬を傳ふ涙を拭ふ。）さ、お離しなされませ。御用が急ぎまする。（退場。）

厩戸。（椽に出る。庭上の落花に對し。）淋しいなあ。（間。空を仰ぐ。）宵月が浮んでゐる。月もさみしげに。（再び土に委する花片を見て。）父上の御軀も此儘土に歸つて了はれるのだらうか。（沈思。）

（馬子下手庭より急ぎ登場。上手に民衆の喧騒が聞える。）

馬子。（手を支える。）はは。皇子に渡らせられまするか（厩戸振向いて會釋す。）今夜の御會議に就き言上仕り度き儀が出來致し急遽御參内申してござりまする。（周圍を見廻して。）御后には？

厩戸。唯今。父上の御召しで御病室へ參られました。

馬子。では、皇子にまで事の次第を手短かに言上致しまする。某る人々が陋策を弄んで事件（こと）を醸すの怖れがござりまする故、御會議は即刻御取止め遊ばさる樣御懇願申上げまする。

厩戸。（間。）大方は推量して居ますが。然し馬子、詔の儀は……

馬子。其儀は此の馬子が國の大臣としての責任（せめ）を負ひ、豐國大師御引見の儀を取計はせまする。

厩戸。汝の自信深い言葉附は私を喜ばせるが、母上が未だに御反對の[illegible]はよく存じて居られるでせう？

馬子。如何にも承知致して居りまするが、御后の御憂慮は描ける虎を怖れらるゝの類かと恐察仕りまする。萬事は迂臣に御委せの程願はしう存じまする。(騒音頻りに起る。上手を見詰めて。)實に訝しき騒音。

王陵。(登場。)御后の御召しにござりまする。

厩戸。(直覺する。)父上には。はや……

王陵。御門外の喧騒に御安静を亂され給ひ御苦惱も一際御増進の態にて頻りに御囈語を遊ばさるゝ御氣色。最早此上は御精神の和らぎを只管御祈り申上げる計りにござりまする。

押坂。(息を切らせて下手庭より登場。)申上げまする。(王陵が話してゐるので差控える。)

厩戸。何事ですか。押坂史毛屎。

押坂。は。(平服。)御門前……(息が切れる。)

馬子。早く申上げよ。

押坂。御門前は一揆騒動。(切れ〲に。)先刻穴穂部皇子には大連殿と共に倉廩を開いて人民共を些か賑はせされたる處、是事を聞傳へたる他郷の者共、我も我もと押寄せ參り倉廩には既に一握の米粟をも餘さず、手を空うして歸る窮民等は自然自棄の體にて、倉を開け、外道佛を毀せ、などと雄叫び乍ら恐れ多くも御門前を騒がせ奉る次第。取敢へず、中臣勝海、東漢駒、迹見赤檮等御門扉をひた押しに閉め申して居りまする。されど無智蒙昧の者共故、殊に夜に入つては如何なる事態を醸すやも計られませぬ。何卒當面の御處置に就き御下命を仰ぎ度く、推參仕つてござりまする。

厩戸。民はまだ帝御危篤の儀を存ぜぬのか、それとも知つてのことであらうか。

押坂。(言葉に詰る。)大方、未だ……

馬子。(慨然。)帝を悩まし民を誤まる者は何者だ。風ならでは梢は騒がぬ。(押坂の眼光と合ふ。)御子。騒擾取鎮めの儀は迂臣に御命じの程願上げまする。

厩戸。懇ろに帝御危篤の砌を傚へて暫時静謐を守られる様、説得致されたい。

馬子。は。萬事宜きに取計ひまする。

厩戸。押坂。大儀であつた。お降り下され。

押坂。は(馬子に一瞥を投げて退場。)

王陵。(再び機を得て。)先刻申上げまするが如く、ひたすら御精神の和らぎを得させ給ふやう、覺哿殿並びに不肖王陵、切に御懇願申上げまする。

厩戸。(決然と背く。馬子に。)直樣大師御参内の用意を致してくりやれ！

馬子。はは、(直ぐ立上つて剣を釣る。喧騒の聲。)では御免を蒙りまする。(勇んで退場。)

覺哿。(急ぎ登場。)來目、殖栗、田米の御子達も御一緒に參らせらるゝ様、御后の御言葉にござりまする。

厩戸。それでは、暦博士。弟達を何卒——。

王陵。唯今。(暫時これにて御待ちの程願上げまする。(下手奥へ退場。)

(靜かなる間。)

厩戸。博士。私は今日過つた事をしたと思ふ。一途な慈悲心から倉廩を開いて施しを致したが、思ひがけない結果を見なければならなかつた。父の功徳にと思ふた事が却つて父の禍ひとなる。否、民自らの禍ともなりました。一椀の

食物に雀躍りをする人の傍らには千人萬人、嫉妬と憎惡とを燃して理性をさへ失ふ人々がゐる。又、今日雀躍りをした人も明日は同じく飢渇に泣かねばならぬ。考へてみるに慈善慈悲と申すことは偏頗な惡いことではありますまいか。

覺哿。物を以てする慈悲に平等と絕對とを望む事は不能ませぬ。否、機會と方法とを誤まる時は善より惡を生じまする。

厩戸。(肯いて。)さうだと想ふ。然し、博士、私はあの病人や飢死をする者を此儘見棄てゝ置くには忍びない氣がする。殊に何不自由もなく暮してゐる自分の境涯を省ると。

覺哿。民を導く者は其の御志を以て最も貴しと致しまする。よくそこに御氣附き遊ばされました。かまへて其の御心を失ふては相成りませぬぞ。

厩戸。(少年の感傷を以て。)私は貧しくなりたい。飢えてみたい。渇いてみたい――。

覺哿。(夢を笑ふ如く。)はゝゝ。

(周圍に夜の色が滲出す。)

厩戸。博士。會議の時刻が逼りましたが帝御危篤の爲め俄かに御取止めの旨を傳へてお吳れ。理由は後程申上げるから。

覺哿。承知致しました。(下手へ退場。)

厩戸。弟達は何故遲いのであらう。かうしては居堪らない氣がする。先きに行く事にしやう。(ふと足元の花束が眼に入る。拾上げる。强く唇付ける。そして足早に上手へ消える。)

(空虚な舞臺の背景に一點の灯がちらつく。それは豐國大師を乘せた輿の灯である。花片頻りに散る。)

第三場

雙槻宮の門内

第一場に見えた門の内側　騒擾の後らしい氣配。前場より約二時間の後。

幕明く。門扉に近い處で守屋中臣押坂の三人が頻りに押問答を重ねてゐる。

守屋。(續けて。)ちやど申して、先帝御在世の砌より篤き御殊遇を蒙りし身が……

中臣。(袖を捉えたまゝ。)否々。見す〳〵敵の術中に陷ちて萬一大連殿に不吉の儀がござつては、これこそ國の一大事。却つて先帝の御殊遇にも背き奉ると申すもの。

押坂。切に國家の柱石たる御身分を御自省あつて、今夜の御出仕は平に御止り下さりませ。

守屋。汝達の諫言もさることと乍ら、所詮御奉公に朽ちる命ぢや……

中臣。御奉公は是からでござりまする。

押坂。御自重の程、切に。切に。

守屋。(暗然。)ぢやが私もとつて七十有五歳。惜むに足らぬ齡ぢや。

(中臣押坂言葉無く彫刻の如く立つ。)

押坂。(ふと下手を見て。)おッ警護の松明が見える。

中臣。見付かつては面倒ぢや。先づ暫時あれにて。(三人扉の内側に身を隱す。)

（舞臺空虚。軈て馬子と駒と登場。）

駒。（松明を持つてゐる。）否、大臣からさう改つて禮を申されては恐入りまする。唯、時が時故、大師の御輿に狼籍者があつてはと思ひ十二分に警戒は致しました。

馬子。天晴々々。恙なく大師の御參内を見たのは汝は元より馬子にとつて日本一嬉しいこと。おゝ駒！重て禮を申すぞ。

駒。（何か厭足らぬげに笑ふ。）ヘツヘツ……

馬子。先きに皇陵の狼籍者を引捕えて大連等の妖言を一掃し、いま又この勳功。何れ朝廷へ奏聞して重い御賞與をとらせることにしやう。處で今一度汝の力を借りたい事が出來致したのだ。餘の儀でもないが――忌々しい今日の騷擾。あの背後に糸を引いてゐる痴漢(しれもの)が居るかどうか、そこを汝の鋭い鼻先で嗅出して貰いたい。

駒。それは嗅出すまでもなく分り切つたことでござりませう。

馬子。汝の鼻には敬服する。（微笑。）私が守屋一味の者から常日頃怨敵扱ひを受けてゐる事は三歳兒さへよく知つてゐる。そこへ此度の疱瘡ぢや。到頭その罪まで私に塗付けて、無智な人民を煽動し後日の爲めを計つてゐる。先刻も倉廩の前で凡ゆる罵詈雜言を私に浴せてゐた事は密偵からちやんと報告があつた。それを耳にした時、憤怒の血汐が此の頰ぺたを熱火のやうに燃やしたが……だが、駒。私は私憤に驅られる性(たち)の人間ではない。たゞ公の爲め、我國の爲めに、今の間に背後の糸を斷切つて（强めて。）切つて了はないと又何時がはかられぬ。後世の憂ひを斷つは今が時だ！そこで（駒の腕を叩く。）汝のこれを又借用したいのだ。無論、兵馬は一令の下に集まり、巨勢比良夫(こせのひらぶ)、平群神手(へぐりのかみて)、迹見赤檮等にはそれ〴〵通じてはゐるが、汝の腕が一本缺けては千慮の一失を免れぬ。先づ今宵守屋が御參

内の期を見計ふて彼の邸宅に兵仗を差向け一氣に火を放つ計畫なのだ、かうすればさしもの守屋も一兵を集める時機もあるまい。(駒返答無し。)何故默りこくつてゐるのぢや、名の無い戰は眞平だと言ふのかえ、心配無用！そんな間抜な大臣では無いわ。世間へ對して申開きの立つ手配はちやんと取つてゐる。先づ泊瀬部皇子には最前御領解を得て置いた。厩戸皇子はあの通りの世間知らずで、佛法には御贔負。竹田、春日、彦人の各皇子は從來の關係から見て矢張り佛法の御味方に定まつてゐる。中にも彦人皇子は皇子に帝位を望む御志ありと邪推し奉つて、中臣勝海が一七日の間、御繪像に對ふて死の呪禁を續けたとある。無論、穴穗部皇子へ諛ひ申す爲めの守屋の入智慧であらうが、其事が彦人皇子の御耳に達してからは兩人を蛇蝎のやうに忌まれてゐる。斯樣な譯で形勢は凡て味方に有利なのだが唯一つ不足なのは汝の鐵の腕だ。(駒横を向く。)はて、如何したのだ。何か私の言葉に不滿があるのか。理不盡なところでもあると言ふのか、え？

駒。(態と笑ふて。)駒は理や非を兎角申す男ではありますまい。

馬子。其點は萬々承知してゐるが、(考へる。はたと駒の肩を打つて笑ふ。)はゝゝ……

駒。(極り惡るげに。)お笑ひなさるとは酷うございまする。

馬子。はゝゝ。私がわるかつた。謝る。では駒。明後日、否、早い方がよい。明日の暮方、私の邸へ來て貰はふ。其上で約定通り娘に紹介す事にしやう。(駒微笑す。)私は其方面の事は凡て娘の自由にさせてゐる。子供は自由に延びるだけ延ばすに限るからなあ。(間。)大分、喋舌りすぎた。別れることにしやう。處で、今の頼みは引受けて呉れたね。

駒。確かに御引受け申しました。だが、私の一件も間違ひなく願ひまする。

馬子。(手を取つて握る。)此通りだ、ぢあ、さよなら。私は此足で御病室へ參る。

(互ひに會釋し、駒は先づ門外に去る。馬子後を見て苦笑。上手へ行く。此間に扉の中で爭鬪を想はせる一場のパントマイムがある。そこへ迹見赤檮が松明を持つて上手から現れる。馬子に行逢ふ。)

馬子。お、赤檮御巡視御苦勞。(奥を指し。)彼方へ參るのか。

迹見。左樣でござります。

馬子。では、燭火をたのむ。

迹見。畏りました。(松明を差延べ乍ら兩人徐かに歩む。)

馬子。(指で物を斬る擬ねをして。)これに拔かりはあるまいな。

迹見。(得たり顏に。)天下の刺客、迹見赤檮ですッ。(高笑ふ。)

馬子。む。駒風情とは違ふて、私は千人力を得た氣がするぞ。

迹見。餘り煽てゝは困りまする。(笑ふ。退場。)

(扉を排して押坂が躍出す。兩人の跡を追ふて斬らんとするを中臣、守屋制す。)

押坂。お、お離し下され!

中臣。血氣に逸つて事を爲損じやうぞ。

守屋。(立塞がつて宥める。)押坂。まづ。まづ。

押坂。あの兩人奴を殺さぬ間は……

守屋。此處を何處と思ふぞ。(嚴として言放つ。)

押坂。(はッとして劍を投げ棄てる。)無念!

守屋。(泌々と。)此上は是非もない。敵の手の廻らぬ間、阿都の別業に立退き、兵馬を集めて齒向ふ迄ちや。兩人!汝等

兩人は私が信頼む肱股の士ちやぞ。(兩人低頭。)

(上手奥より門に向ひ遽しき輿が出る。)

中臣。(輿に覗ひ寄る。)穴穗部皇子。

穴穗。(闇を透かして見る。)中臣勝海か。

中臣。は。

穴穗。帝は遂に御薨去でござるぞ。大連殿は?

中臣。(力の拔けた聲で。)彼處に居ります。

守屋。(皇子の言葉を聞くと共に腰を拔かす。)

穴穗。守屋殿。守屋殿。軍馬は整ふたか。先づ馬子に備へねばなりませぬぞ。

守屋。(皇子の方へ躄寄る。吃驚して一語を發せず。あはれに頷くのみ。)

穴穗。(自烈度げに守屋を見詰めて默入。)

中臣、押坂。(此の光景に對し、そゞろ前途の不安を預覺して暗涙。)

幕

第三幕　第一場

石川精舍

馬子の邸内に在る日本最初の寺。

幕明く。暗黒。正面に一燈の揺ぐのみ。數人の僧形が影の如く灯の前で夕べの祈禱を捧げてゐる。彼岸の世界を想はせる鉦鼓の音に縺れて低重な讀經の聲が漂ふ。香煙が立昇る。讀經の聲が次第に高まると共に僧達は立上つて遊拜の貌をとる。始め無きが如く管絃樂の莊重な諧調が響いてくる。それがクライマックスに達した時、天上から白蓮の花が降りかゝる。同時に香煙が一時に立昇て、全體を模糊の中に埋めて了ふ。樂、突如として止む。此の夢幻的なシーンの後、微かに左の東遊の太古の物憂さを帶びたメロデイが聞えて來る。それは多須奈の子止利が謳つてゐるのである。

うどの濱に
駿河なる　うどの濱に
打寄する波は　なゝくさの妹
ことこそよし　ことこそよし

そこ迄謳つた頃、シーンが明瞭として來て、廻廊の階に腰をかけた善信尼と止利との姿が浮出る。背景は森の中の石川精舍の正面である。

前幕より約二旬の後。晩春の夜。

止利。（淋しく）お父さまはまだ歸らないの、

善信。もう直きお歸りにならうから、「うどの濱」の續きなと謳ふて大人しくお待ちしておいで。

止利。もう謳ひたくないの。(間) 何時の間にか月が消えて了ひましたね。

善信。惡い雲が隱して了ふたのでせう。(寂靜。 時鳥の聲。)

止利。(ふと) 叔母様。お父様は何故お坊様におなりなされたのでせう。

善信。それは知れたこと。無常を――と言ふても坊やには分らないでせうが (言葉を考へて。) 父上は此間、皇陵で一人の氣の毒な人を酷い目にお合せしてからは、大層世の中をお厭ひでしたが、今又、帝の御薨去に逢ひ奉つて、御悲歎の餘り到頭汚世をお棄てなされて出家の尊い御生涯にお入りなされたのです。

止利。坊様はえらい人なの。

善信。えらいといふよりも淨い人だと思ひまする。

止利。それなら坊やもなりたい。

善信。いゝえ。坊様になるには大きくなつて世の中の事がよく分つてからでないといけませぬ。

止利。(肯く。靜かな間) お父様の遲いこと。

善信。今夜は殯宮の式祭があるので、(いひつゝ階の上に立つて下手を指し) 御覽。彼處に、ぼーつと一群の灯影が見えるでせう。あれが、帝の遺骸を祭られてゐる殯宮の前の火殯なの。儀式通りなら今頃は招魂をする遊部の謠が聞えたり、泣女の哀れな聲がほのかに漂ふて來るでせうに。野の人々が惡疫に苦しんでゐるので、古の儀禮さへもお取止め遊ばされるとは、何といふ勿體ない大御心でせう。

止利。次の帝には誰方がお立ち遊ばすのでせうね。

善信。御順序通りなら厩戸皇子様ですが、御子はまだ御若年の事故、彦人皇子か、それとも間人御后様の御弟宮達の中から、誰方かお立ち遊ばされるでせうよ。

止利。彦人皇子は、昨日、咒のために急にお薨れ遊ばされました。

善信。えッ。眞實ですか？

止利。今朝ほど、お父様からお聞き致しましたの。

善信。まあ、怖ろしい！（間）

止利。（上手を見て）篝火が消えました。もう直ぐお歸りでせうか。

善信。（同じく上手を見て）間もありますまい。さ、お立ち。お家まで送つて上げまする。

止利。有難う。叔母様。（元氣に立上る。兩人下手廻廊より退場。）

（舞臺空虚。晩春の夜の色濃くなる。時に負古郎女が、菫の白い花を胸に一杯抱えて、下手から靜かに出る。髪は束ねて後頭に垂れ、純白の着物を着てゐる。悩ましげに階段を上り、燈の前に額く。一輪づゝ白い花を取つて佛に捧げ始める。白い手と白い花とが闇の中に慄える。）

負古。（手を休めて）あゝ、此の花を幾つお捧げ申したなら、わが願ふ喜びを惠んで下さるのか知ら。飛鳥川の岸邊に涙ぐむいぢらしい菫！此の花の淋しさが何故此樣に懐しまれるのでせう。容を飾る櫻花よりも、地を彩る艶かな芍藥の花よりも（手を合せて）佛樣。この切ない心願をお叶へ下さりませ。明らさまに、戀しい人の胸に囁くことも出來ぬ弱い心の上に尊い御手をお貸し下さりませ。今宵は、夜を籠めて此花を捧げてお祈りを致しまする。（扉の内陣に入る）

（下手に遽しい足音。負古と同じ服裝の姉の河上娘が馳け出る。逃げ迷ふ如く籾舍の内陣に入ろうとして、ふと考へて、裏手へ廻て消える。暫。覆面の者が追跡して來る。四周を見廻して肯き、扉の中に入る。悲鳴。やがて負古を捉へて出てその儘下手に拉去らうとする。）

負古。あれえッ！助けて……

覆面。靜かにしろ！（手を負古の口に當てる）

負古。（切れ〴〵に）どうなさるのでござります。お放し下さりませ！

覆面。白々しい奴！（髮を捉んで引張る）

負古。あッ、痛ッ！（間）あなたは誰方でござります……

覆面。（不審げに負古を見る）うむッ（歎息。）紛はしい服裝をして……えい、忌々しい！（矢庭に突放さうとしたが）今白い着物を着た女が此處へ參つた筈だ。さ、何方に失せたか、有體に申せ！

負古。（怯え乍ら。）一向に存じませぬ。

覆面。左樣な筈はない！

負古。否え、知りませぬ。つゆ存じませぬ！

覆面。（焦燥に。）えいッ、かうだッ！（いきなり負古を下手の樹の根に蹴付ける。負古氣絶す。）ふん。（鼻で笑ふ。徐に覆面を締直す。苛々しながら獨白。）いつもの松林迄誘き出して置き乍ら、いざとなつて、逃げ出すとは何事だ。俺は此樣に女から馬鹿にされた經驗はない。（口惜氣に歩き廻る）本氣で、俺は戀をしかけてゐるのだらうか。餅のやうに、引寄せられて直ぐ突出されては堪らぬわい。それにしても、あの油の樣な滑つこい科はどうだ。（微笑）この聞

には守屋の討手に向はねばならぬ。今宵の中だ。草の根を分けても探し出さずには置かぬ！その上で、彼奴の凡てを掘るか、凡てを亡ぼすかだ。(退場)

泊瀬部皇子が下手から、忍びやかに出る。覆面の者の後影を見すまして、階に上る。と、下手の樹陰から河上娘が姿を現はす)

河上。(驚いた風に)皇子ではござりませぬか。

泊瀬。おゝ娘。(相擁す)

河上。まあ、どうしてこんな處へ。

泊瀬。先づ腰をおかけなさい。その理由を話して上げやうから。

河上。(不安げに)けれど、あの痴者が……

泊瀬。いや、彼奴は行つて了ふた。安心するがいゝ。(娘は仰山さうに安堵の息を吐く。兩人腰を下す) 丁度、半時程前、私、厩戸皇子と一緒に此境内を漫ろ歩き乍ら當面の政治策に就いて語らふてゐた處、不思議なことに、日頃人氣のないあの松林の方に當つて怪しい人聲が聲える。忍んで參つて樣子を伺ふと二人の男女。男は覆面。女は確かに汝だ。驚く間もあらせず、汝は差延べる男の手を振拂ふて飛鳥の樣に、林の中を馳け拔けて了ふた。

河上。その樣に、あなたが近くにお出でと知つたなら、聲を上げて御助を願ふたでござりませうに。

泊瀬。(續ける。)汝の跡を曲者が追馳ける。そこで私も跡をつけて參つたが、丁度曲者は汝を見失ふて何やら呟き乍ら彼方に引歸る樣子に、あれなる樹蔭に忍んでゐたわ。

河上。御親切の程、身に沁みて嬉しう存じまする。

泊瀨。して、此の經緯は一體どうした譯？それを聞かせて貰いたい。

河上。（含羞を見せて。）氣恥しさに何事も申上げ兼ねまする。一重に御推量なし下さりませ。眞實(マコト)、かの覆面の者は東漢駒なのでござりまする。

泊瀨。東漢駒！（神經質に眉を聳らせる。）

河上。御潔癖な御氣性を想ふて胸の張裂ける思ひが致しまする。私の不束から斯樣に淫らな狼藉を身に受けては女子の大事な操を失ふたも同然でござりまする。此の上は、最早御緣も是迄と思召されて、何卒瀆れた者を御見捨て下さりますやう、私から御願ひ申しまする。

泊瀨。（獨語の如く。）其のいぢらしい言葉附。互ひに許さぬ處女の頃が思ひ出される。

河上。今の私は瀆れに染んだ女子でござりまする。（媚びある目で。）思へば、夢のやうな昔が戀しうてなりませぬ。

泊瀨。（續けて。）其の想出の消えぬうちは——

河上。（遮る。）左樣に御愛着にお迷ひ遊ばされては私の胸が切なうござりまする。臨張りと此身を芥の中に御棄てなされて下さりませ。

泊瀨。（探る樣な目で。）否、瀆れてはゐぬ者を。

河上。たとへ身は瀆れずとも、斯樣な不仕儀を御目に入れては。

泊瀨。（懊惱。）よしんば、駒に——。（激越して。）私は汝の一切を愛する！瀆れも惱みも醜さも、凡てをこめて愛するのだ！

河上。眞實でござりまするか、泊瀨部皇子。

泊瀬。（いきなり接吻する。）

河上。嬉しさが込み上げてきまする。（急に調子を代へて。）否々、その接吻は……冷たうござりまする。

泊瀬。女は何故左様に疑ぐり深いのであらう。

河上。それは致し方がござりませぬ。あの小手子娘への御寵愛をおもへば。

泊瀬。え！（促す様な目付。）

河上。斯様にお優しい御情も所詮は空に消える花火も同然。満干のある様な御戀慕にはもう厭々致して居ります。

泊瀬。（考深く。）小手子と申すのか。

河上。はい、小手子娘！大伴糠手の息女小手子娘！

泊瀬。今の世に、二人三人の妃をもつは世の習俗。人も我も怪しまぬに。

河上。其の習俗が兇はしう存じまする。

泊瀬。（娘を抱締める。）此の熱情をどうして疑ふのだ。おゝ汝の身内が痺れ切るまで抱締めやうぞ。

河上。（押退けるやうに。）お離し下さりませ。嫌でござります。

泊瀬。（離さずに。）二人は、一番貴いものを許し合ふてゐるのだ。離れてはならぬ。死ぬるまでも離れてはならぬ。

河上。（苦しげに。）あゝ、血の流れがとまりさうでございます。此の手をお緩め下さりませ。

泊瀬。（懊惱。）あまりぢや。娘

河上。小手子娘をお棄て遊ばぬかぎり……

泊瀬。あゝ。（よろめき乍ら退場）

（月出づ。見送る河上娘の顔には勝誇つた様な笑ひが滲出る。軈て氣を取り直した様に下手に行く。負古に躓く。妹と知つて驚く。）妹！妹！（介抱する。漸く蘇生する）まあ何といふ事であらう。すつかり仰天して了ひました。妹や、氣を確かにお持ち。さ、しつかりして！

負古。（微かに）姉上、有難うございまする。

河上。左様な事より、この場の仕儀を早く聞かせて！

負古。はい。（斷え〳〵に。）毎夜の通り、あの精舍の内陣にて御祈りの眞最中、突然にこの精舍を掟む怪しき者。見れば覆面の曲者にて、あはやと言ふ間に此處に引きずり出されて散々の打擲。その擧句に、人違ひと知れたものか、曲者は目暴になつて此の脇腹を、うむツと一蹴り！……其後は更らに覺えもございませぬ。

河上。（落付いて。）憎い曲者！何奴であらうの。して、傷はないかえ。

負古。別段痛みもございませぬ故。

河上。それはまだしもの仕合せといふもの。では早う歸つて此事を告げ知らせ曲者を召捕る手配を致させませう。さ、お立ち！妹。

負古。（立つ。）折よく姉上がお通り遊ばしたは、まことに天の佑けと申すものでございませう。

河上。大方左様な事でありませう。

負古。それにしても、姉上には今時分、何の御用で此の處へ御越しなされました？（兩人下手へ歩む。）

河上。（媚笑。）大方は推量して下され、妹。

負古。（淋しく。）姉上は御仕合せにござりまする。

河上。(下手を見て愕く。)お！人影が。(狼狽。)私は彼方の路から——。御免なされ。(急ぎ上手に去る。)

負吉。(呆氣に取られて佇む。)

厩戸。(下手より登場。負古を見て。)負古郎女。

負古。(振向く。驚いて。)貴方は厩戸皇子。

厩戸。曲者を追ふて泊瀬部皇子が參りはしませんでせうか

負古。否え、御目にかゝりませぬが。

厩戸。(考へてゐる。)失禮申しました。御免下さい。(上手へ行きかけてふと思付いたやうに振返る。慇懃に。)此間は綺麗な花束を頂きまして有難う存じました。亡くなつた父上は、あの菫の淋しい花が大層好きで、御送り下さいました花束をば、死ぬる際までも眺めて居りました。

負古。あの様なものを……お恥かしう存じまする。(間。)

厩戸。では、さようなら、負古郎女。又、お逢ひする日まで……(會釋す。)

負古。(厭足らぬげに)さようなら、厩戸皇子。

厩戸。さようなら。(二三歩して停る。振り向かずに)も一度、私の名を何卒お呼び下さい。

負古。(胸とゞろく間。)厩戸皇子。厩戸皇子。……

厩戸。ありがと！(急ぎ足に上手へ去る。)

負古。(數歩後を追ふ。兩手に心臓を押へて懊惱する。長き間。)姉上はどうして皇子を怖れられるのでせう。あゝ初めて嫉み心が忍んでくる……(胸を抱く。)

（舞臺奥に騒音が聞えだす。）

徳齊。（堂裏から出る。）お、負古郎女。此處にお在でゞござりましたか。精舍よりの御歸りが餘りに遲うござりまする故、御迎えに參上仕りました。

負古。それはいかい御心配をかけました。思はぬ時をすごして、（空を見て。）もう月も落ちて了ふたやうな。（軍馬の音高く響く。續いて喚聲。）あの騒しい軍馬の響は何事でせうか、徳齊法師。

徳齊。大連殿御征伐の軍勢が唯今出發にござりまする。

負古。あゝ血を流す戰が到頭初まるのであらうか。未だ御喪中の間人大后や厩戸皇子の御心を如何樣に曇らせまつることであらう……（淋しく眼を空に向けると、篝火が映つてゐる。兩人廻廊に相並んで之を望む。時に上手の樹陰より駒が劍に手をかけたまゝ躍出る。兩人の後姿に向つて靜かに詰寄るがやがて當てが外れた如く忌々しげに拔きかけた劍をがちやりと元に納める。其音に兩人は思はず振向く。ぢつと闇の中の覆面の者を見詰めたまゝ――。）

第二場

雙槻宮の一室

前幕第二場に同じ。唯、櫻は葉ばかりになつてゐる。二三日後の夜

厩戸皇子は、棺と共に埋藏する父の遺愛の品々を整理してゐる。覺哿は、埴輪を檢べ乍ら、伎樂の話をしてゐる。

覺哿。管には笙、篳篥、横笛、鼓には太鼓、鞨鼓、鉦鼓、また三の鼓と申して大形の鞨鼓がございますが、是は高麗樂にのみ用ひて唐樂には用ひませぬ。

廐戸。して、それを奏でる調子は幾通りありまするか。

覺哿　六通りございまする。即ち一越調、平調、雙調、黄鐘調、盤渉調、太食調の六種でございまする。

廐　。(整理を了へる)詳しく伎樂の話を聞いて、直ぐにも觀たうなりました。奇しき樂の音につれて袖を翻す舞人の伎が眼に映るやうに思はれる。

覺哿。高麗の都にはその演伎の座が七個處ございまする。樂は相傳。朝廷の厚き御保護を受けて居りまする。

廐戸。其様な美しい國が羨ましい。あゝ其の舞樂の伎に心の痺れるまでも醉ふてみたい。

覺哿。凡そ、酒肉に醉ふ者は、醒めて悲哀の苦きを知ると申しまする。然るに、音樂繪畫詩歌――凡て天才の精神より湧出づる甘泉に醉ふ者は、醉ふて精神の養ひを得まする。子は、韶を聞いて三月、肉の味を知らず、とか曰ふて居りまする。

廐戸。孔子は何といふ幸福な人でせう。然し博士、私は今、音樂等よりも宗教に就いて種々考へて居ります。自分の心を見詰めれば見詰めるほど、早く佛道に歸依して、心の清い人間になりたいと思ひます。博士、一體どうすれば佛の信仰に入ることが出來るのでせうか。(覺哿默つてゐる。)あの石川精舍の佛様に日參をすれば、自然に淨土へ導かれるのでせうか。

覺哿。(首を振つて。)なか／＼。

廐戸。では、幾日となく經文を讀めば判るのでせうか。

覺哿。さう容易くもまゐりませぬ。

廐戸。では如何すればいゝのでせう。

覺哲。まづ捷徑を申せば、皇子が此日頃の御煩悶の源泉をば深く御省慮遊ばすが第一かと存じまする。(厩戶皇子は顏を赧む。)否、戯談ではござりませぬ。

厩戶。私はあの處女の事などに惱んでは居りません。眞面目に信仰の問題を考へて居ります。教理にも信仰にも明るい博士に導いて貰いたいと、それ計り願ふて居るのです。

覺哲。(眞面目に。)私は光ではありませぬ。唯、光に就いて饒舌をもつ學者にすぎませぬ。學者は人に信仰を與える事はできませぬ。凡そ信仰の基は鏡の前に立つて獨り寂かに自分を正視するに在りまする。(長き間。)

厩戶。(歔欷し初める。)私は、今嘘を吐きました。博士。私はやつぱり、あの處女の事を想ふて惱んでゐるのです。(間)私は逢ひたい。毎日でも。だが、その希ひを叶へる事の出來ない此身を思ふと、遣瀨なさに心い面が塞つてしまひます。

覺哲。(鷹揚に)詩人は、その心の上の翳りを眞夏の夜に捧げる盃の泡の影、とか謳ふて居ります。

厩戶。泡の影。(涙頰を傳ふ)

覺哲。やがて、泡影の消えてなくなる日が參りませう。一條の眞心の愛は石をも拔くとか。皇子。涙をお拭き遊ばせ。(可憐な厩戶の樣子に打たれて、若き日の懐想が老師の胸に芽ぐむ)皇子のいぢらしい御瞳が、此の皺枯れた胸に其上の日の懐かしい夢を展げて呉れる。高麗の都の泉水の邊りで、瑠璃色の瞳をもつた彼の乙女子を、夕べ夕べに待ち焦れた若者は誰であつたらうか。(自分の手を見詰めて)青春は遽しく過ぎて行く。(厩戶を見る。)春光の如き御眼光。若草の御髮毛。軈て其の御歎きの深さが喜びの深さを計る物差とも相成りませう。

厩戶。然し、博士。戀は罪ではないでせうか。

覺哿。罪ではありませぬ。たゞ罪を作り勝ちなものでございまする。(間) 戀を知る事は則ち人間を知ること。人間を知つて初めて罪の宗教がお分りになりまする。

厩戸。(沁々と。)有難う。よく分りました。

覺哿。(思出した様に) 先程、土部(はべ)より申出でました埴輪の檢分を致さねばなりませぬ。

厩戸。御面倒ですがお願ひいたします。

覺哿。では失禮致しまする。(奥に退場)

厩戸。(立つて庭を見る) すつかり葉櫻になつて了ふた。あの頃は落花の吹雪であつたが。(日を算へる) 御薨去からもう二旬あまり。(目を落す)

泊瀬。(登場) おゝ大分整理が進んでゐる。

厩戸。(振向いて。)叔父上ですか。あらかた済みました。

泊瀬。大儀であつた。(埴輪を見て。)立派な出來ぢや。

厩戸。今夜で全部揃ひまする。

泊瀬。(坐りながら。)姉上は。

厩戸。昨日斑鳩の郷へ御微行遊ばされました。御歸りは明後日に相成りませう。

泊瀬。愈々精舍を御建立遊ばす御決心と見える。姉上にはそれが一番適はしい御生活であらう。御心配遊ばされた民衆の一揆も起らず、神罰とやらも現れず、それ計りか惡疫は下火になる。これでは姉上も晴れて佛道に御入り遊ばす事が出來る。處で、厩戸皇子。今日また一大事が出來致したのだ——。

厩戸。一大事とは何事ですか。

泊瀬。穴穂部の兄上が矢に當つて亡くなられたのぢや！（厩戸驚く。）昨日は中臣勝海が迹見赤檮に殺される。今日は兄上が慘しい御最後を遂げられる。明日——否、今頃は守屋も血の中に浸つてゐるかも知れぬ……（憂欝になる。）

厩戸。（暫時無言。）御様子を詳しく承りたうございます。

泊瀬。（肯く。）兄上は守屋討伐の馬子勢に襲はれたのぢや。（此時覺哿が歸つてくる。兩人が談話中なので去らうとする。）

博士。差支はありませぬ、何卒此處に！（覺哿勧められた座につく。）兄上の危いといふ噂は以前から聞かぬでもなかつたが、まさかと思ふて多少は馬子を信じてゐたのだ。處が討伐軍は最初から豫定してゐた如く急に途中から二手に分れ、一手は阿都へ、一手は兄上の邸宅に押寄せ、火を放つて取圍み、遂に兄上は落ち延びる暇もなく、佐伯丹經手の放つ矢に無慘の御落命と聞く。（間。）あゝ姉上の御耳に入れたなら如何樣に御悲歎遊ばされるであらう。自ら抱く大望の爲めに此の痛ましい御運命！

厩戸。あゝ何と申上げていゝか……涙が先走る計りでございます。（間。懐中から手紙を取出す。）これは先刻馬子が持參致した手紙ですが一應御覽を願ひます。

泊瀬。（讀む。）私も實はこれと同じ書面を受取つたが、多分他の皇子達へも送つたのであらう。然し、どうして此の趣旨を受入れる事が出來るであらうか、酷らしい兄上の骸の傍で帝冠を戴かうなどとは慮外な事ぢや。況んや、かゝる世に權臣一人に推されて玉座に登る者の運命は唐土の例を引くまでもない。

厩戸。叔父上の御性格から申しても、其儀は御尤もかと存じます。

泊瀬。まつたくぢや。（覺哿に。）して、博士はどう思はれまするな。

覺哿。左樣。臣は水、君は舟――と申しまする

泊瀨。舟よく水を御すると申されまするか。(思入。)む。萬々一、私が玉座をふまねばならぬ時には、かの朋黨を眞先きに破壞して、兄上の……

厩戸。(下手庭から登場する侍者を見ると同時に。)叔父上！(と制する。)

侍者。唯今、河内國阿都より、早馬にて御注進にござりまする。

厩戸。直樣これへ。

侍者。は。(下手へ行つて使者を呼ぶ。)

使者。(登場。敬拜の後早口に。)阿都の別業に立籠り防戰に努めて居りました大連殿の守勢も衆寡敵せず、矢折れ刀盡き、遂に軍兵は狩衣に身をやつして廣瀨の河原に狩すると見せかけ、攝津國へ落延びやうと致しましたが、大臣殿の軍勢に感付かれ、大連殿は密かに榎の木に攀ぢ登つて大臣殿の攻勢を遣り過さうと致せし處を、迹見赤檮に見現はされて、よつぴく一矢に、あたら御落命にござりまする。續いて押坂史毛屎其他一族一門、悉く御最後にござりまする。

(一同沈默。)

覺哿。(侍者使者に。)御苦勞であつた。さがつて御休息を。(兩人退場。)

泊瀨。(昂奮して歩き廻る。獨白。)朋黨の慘禍を除く勇者は誰であるか。一人身を挺して之を斷つ者は誰だ。強力な兵馬を有たぬ者は永久の虐遇を受けねばならないのか。兵權を握る唯一人の爲めに、夥しい血汐が無益に流されるとは耐えられぬわい。今は巷に出でゝこれを叫ぶまでぢや。(退場。)

厩戸。博士、御一緒に叔父上の後を追ふて下さい。

覺哿。（皇子を制して。）皇子は其のまゝ！私が宜しく御諫め申上げまする。

厩戸。では、御賴み申します。

覺哿。畏りました。（退場。）

厩戸。（外の暗に眼を放つて獨白。）騷々しい日と夜とが、いつまで續くのであらうか。殯宮に在す父上の御魂魄が靜かに眠る暇さへなく！（間。）渦亂は渦亂を生んで、骨肉重臣は流血の間に仆れる。早、二旬を閲して未だ新帝は立ち給はず、人は兵馬の間にのみ走せて世を省る者もない。軈てくる新しい御代が叔父上の血に祝はれて生れやうとは！（正面を見詰めて。）おゝ銀の弓を横へた樣な月の光の飛鳥川。此の深夜の靜寂の中にも流れやまぬ清い水流――。永遠に流れるもの――。（間。）おゝ野の人達！權者のために引きづられて慘劇の間に轉々する卿等もまた、軈ては死の訪れを受ける人の子ではないか。何故、隣人の愛に眼ざめて、長生の喜びに生きやうとはしないのか。（胸を抱締めて。）胸の髓が人懷かしさに痺れるやうだ。（月光水の如く流る。）人の名を聲の限り呼び續けてゐたい。かの乙女子の名を。（庭に降りて葉櫻の根元に立つ。五月の紺碧の夜空には滿月が浮んでゐる。急に艶々とした櫻の幹に抱きつく。が直ぐ反撥された樣に飛退く。そして身を慄はせて青草の上に立ちつくす。）

第三場

馬子の第宅の庭

飛鳥川の流れを導いた半ば天然のまゝの庭園である。遥かに畝傍山を望み、林間には石川精舎と大野丘の塔とが隠

見する。青葉を彩る紅紫様々の花が咲亂れてゐる、守屋討伐軍凱旋祝賀の日、皇子廷臣軍人等が大勢上手から下手の第宅のある方へ雪崩の樣に行過ぎる。軈て馬子と東漢駒とが上手より出る。

馬子。(續けて。)幼い時分から自由な育て方をしてきたので幾分我儘とも見える點はあるが、父の威光でそれを矯めることは私には出來ない、無論娘を汝に紹介(ひきあは)したのは私であるが、それ以上の事を娘に對つて強制せよとは餘程蟲の良い話だ。汝は何も知らぬと思ふて居やうが、あれから四五度も、私の眼を盜んで娘と逢引したのは誰だらう。然し私は娘を信じてゐるので些の干渉がましい事もしなかつたが、今日になつて娘に結婚を強いて呉れとは呆れ返つた話だ。

駒。成程、一應は御尤もにも思はれまするが幾度も申上げる通り、娘は、唯父上の　貴方の御許可さへ私から得て呉れればと申すのですから、何卒一聲「許す。」と仰言つて下さいませ。でないと、私は貴方の御眞意を疑はずには居られませぬ。

馬子。私の心を疑ふ前に汝自身の心に問ふてみるがよい。さういふ事を私の娘が言ふたとすれば、それは娘がまだ〳〵汝を心から愛してゐない證據ではなからうか。若しさうなら、汝こそ無理な男と言はねばなるまい。繰返して言ふ通り、私は娘に對して自由な父である。娘から誰々に嫁ぐ！と申出せば非人だつて許してやる！(駒の肩を叩いて輕く。)駒。たかゞ女一人のために親の威光まで借らうとは勇者にも似はぬ事ではないか、え？

駒。さう申されると、顏中が火になります。(考へて。)何だか愚弄されてゐるやうにも思はれる。

馬子。はゝゝ。さう無暗に悲觀するにも當るまい。(再び肩を打ち乍ら。)森の中へ度々呼寄せてゐるからには、滿更……な駒！それは誰に問ふよりも(胸を叩き乍ら。)此處に聞いてみる事ぢや。

駒。（泣笑。）戀をする者の自惚を是れ以上咬つて下さいますな。

馬二。（半ば冷かす如く。）御方へ行つて汝の爲めにも祝盃を擧げやう。（下手に歡聲が聞える。）大勢が待つてゐる。（駒を引きつれて退場。）

（舞臺空虚。「大臣萬歲。」の聲が奥から響く。厩戸皇子と負古郎女とが肩を並べて上手から出る。）

負古。（感情を籠めて。）え、其場までも。

厩戸。私も。

負古。佛樣にかけて？

厩戸。え。（肯く。）今日といふ今日は、心底から嬉しさが溢れてくるやうです。長い陰氣な雨の後、大空に舞ひ上る日輪を仰いだ時のやうに。

負古。私も御空を馳け廻りたいやうでございまする。

厩戸。（續けて。）あの精舍の前で計らずもお目にかゝつたその夜から私は貴方の夢を見續けでした。胸が潮の高鳴る樣にどきどきして幾晩、明き明した事でせう。考へると戀をするのが罪惡のやうに思はれて信仰によつて戀を忘れやうとした事さへありました。けれど、それこそ自分に對する大きな虛僞だと氣が付きました。純潔な戀は佛樣からも祝福せられます。私は貴方のその濆れのない黑い瞳を想ふと遣瀨なくなつて、櫻の幹にぢつとしがみ附いたこともありました。

負古。私もまた　芥子の花片をその御唇になぞらへてお吸ひしたこともありまする。

（流れの方へ靜かに歩んで行く。）

負古。まあ、きれいな流れですこと。白百合の水に映つた影を御覧遊ばしませ。お、河骨が咲いて居ります。（流れの中の石に片足をかけて手折らうとする。足元が滑つて着物の裾を濡らす。少し大袈裟に。）あ！どうしませう。

厩戸。（急ぎ背後から負古を支える。）

負古。こんなに濡して……（裾をからげて搾らうとする。脛が現れる。）

厩戸。（それを見て憂鬱な表情になる。）

負古。（氣付いて。）御免下さいませ。（裾をおろす。）着物を着換えて參りまする。

（奥からは頻りに歡聲が響いてくる。）

厩戸。では、私も饗宴の席へ參ります。

負古。其處まで御伴を致しまする。

厩戸。（輕く肯く。兩人下手へ退場。）

（駒が正面奥から忙しい息をしながら登場。）

駒。（流れの水を掬つて飲む。）莫迦に渇く。（口をつけて飲む。飲み了つて汗を拭く。獨白。）畜、庭の隅々まで探しても影さへ見せぬとは。（「大臣萬歳」の聲高く聞ゆ。）チェッ、忌々しい。手柄話に有頂天になつて酒を浴びてゐる頓智機奴！業腹が煮えるわい。（四隣を見廻し。）場合によつては古先の手緩い事はしないぞッ。（歡聲聞ゆ。）癪に觸る聲だ。どれ行きがけに、狂人水を此の脚袋に詰込んでやらうか。（下手へ退場。）

（泊瀬部皇子と河上娘とが上手森の中から現れる。）

河上。それをお打明け申したなら私をお厭ひ遊ばすのは必定でござります。

泊瀬。結果はともあれ、早く言つておしまひ！一旦聞かうとした事はどうしても聞かねば措かぬ私の性分ぢや。

河上。それでは申上げまする。（含羞んで。）あの小手子媛憎さに、貴方の御心を御試し申したのでござります。

泊瀬。試したと？あゝ女といふ者はなぜ怖しく邪智深いのであらうなあ。

河上。それ御覧遊ばせ、もう私を嫌ふてでござりまする。

泊瀬。（作り笑ひをする。）

河上。けれど、皇子。私の心はまだ〳〵安堵致しては居りませぬ。戀敵の小手子媛は父の糠手と一緒になつて私の事を讒謗する計りか、此頃では物部の呪師を招じて、私を――否え、貴方までも呪禁ふてゐるとの噂。彦人皇子もその呪禁の魔手にかゝつて俄かの御他界。それを想ふと身の毛もよだち血も氷る様でござりまする。それに貴方と申せば……あゝ何にも申上げませぬ。私をお疎み遊ばす理由は愚かな私にも分つて居りまする故――。

泊瀬。その理由を明ら様に聞かせて貰はふ。

河上。皇子、あれのためでござりませう？

泊瀬。あれとは何？

河上。其様にお恍け遊ばさずとも……

泊瀬。何だと言ふのだ。早く言ふて呉れ。

河上。（擦寄つて。）私は御后と仰がれる資格の無い女子でござりまする。

泊瀬。なんと申す。私が其様な大望を……

河上。左様な事を仰せあらうとも、私はお信じ申しませぬ。

泊瀬。(やゝ落着いて。)成程、勸告のあるのは事實だが、血で血を洗ふ擾亂の眞只中に私の樣な直情な人間が民草の上に立つは嵐に船を進めるも同然――。厩戸皇子並びに覺哿博士も切なる御諫言ぢや。元より心にもなき事故、今日の宴を好機に、はつきりと私の態度を公にする所存ぢや。

河上。(改まつて。)皇子！日外、「若し、わしが天が下を此上に乘せることが出來たならば――」と掌を開いて御微笑遊ばされた事をよもお忘れではござりますまい、其の時、此の御方こそ、私の久遠の光ぢやと心に堅く盟ふた事をまざ／＼と覺えて居りまする。

泊瀬。(述懷的に。)其の時分の私は美しい理想に憧憬れる青年であつたが、今、眼の前に現世の醜さを見、且つは我が性格をば靜かに反省をすると……

河上。(遮る。)反省といふことは、いつも決心を鈍らす、性の惡い躓き石でござりまする。血の流れる荒野をば綠の野に復してこそ御稜威の輝かし榮えもござりませうに――

泊瀬。(冥想的に。)それにしても、餘りに地の面は荒れ果てゝゐる。

河上。御不甲斐なさ！あゝ是迄神かけて祈つてゐたことも、夢の中に萎んで了はふとは――

泊瀬。(卒然劍を外して娘の前に差付ける。)わが祝祭の牲贄に汝が父の血首を捧げて參れ！

河上。(動ぜず。)此の劍は御返し申しまする。私は毫も不孝の罪は怖れませねど――先づ御勘考遊ばしませ。一人のはしたなき臣下の首を牲贄にせよとは餘りに御自身の位置を輕ぜられるものとは思召されませぬか。

泊瀬。默れ！私は傀儡師の手にはかゝらぬぞ。戀を柵みに、私をあやつらうとする馬子の心底は見拔いてゐる。その上は純潔無垢であつた二人の間に斯く暗影の差すを見ては、もう是限りぢや。

河上。(優味を含ませて。)それは怖しい邪推にござりまする！(涙乍ら。)その御額の上に貴い冠の輝くまでは、お側を離れることは嫌でござります。

泊瀬。(強く。)執拗いッ！

河上。(一層執拗く。)嫌、嫌、嫌でござりまする！(近寄る。)

泊瀬。(突飛ばす。)退けッ！それとも此の劍を受取るか。

河上。(一旦倒れたがいきなり立上つて劍を奪ひ自分の喉咽元に擬す。)

泊瀬。(抱止める。)何をする！

河上。(無言のまゝ涙に輝く瞳を擧げて皇子を見る　悲痛さを帶びた顏は一段の美の魅力を増してくる。)

泊瀬。(娘の顏を凝視する。長き間。大きな旋風が心の中を吹捲くる。娘の額に手を當てて切ない調子で。)か、かむりを

……

河上。(半ば豫期したる如く、然し喜びに溢れたる表情にて。)おゝ！(相擁す。)

(下手奥より「萬歲！萬歲！」の歡聲にて幕靜かに降る。)

第四幕　第一場

玄猪の宴

五年經過。壬子年十月亥の日。多武峰の北、倉梯(くらはし)なる倉橋宮居。庭園の下手に伎樂の舞臺を造る。庭園の良き處に、倉橋宮、厩戸皇子、負古郎女、河上娘、小手子媛、馬子、覺哿、王陵、駒、赤檮、糠手、其他文武百官が數側

の卓子に椅つて酒盃を汲み交はしてゐる。其間を大勢の官女が酒瓶を持つて注ぎ廻る。一同の視線は伎樂に注がれゐてる。伎樂は當時、高麗王の獻上したもので舞裳では烏冠を冠つた十餘人の樂人の伴奏につれて高麗樂の狛杵（こま）(高麗人が往昔我國へ渡來の際玄海灘の荒波の上で感じるノスタルジアを謳つた樂。)がもう終りに近付いてゐる。滿庭の紅葉は午後の陽を受けて眞紅である。人々が伎樂に熱中してゐる間に馬子と駒とだけが同じ卓子で酒飲に夢中になつてゐる。官女に戯れる可笑味がある。暫時經つ。馬子が欠伸をする。一同は馬子を見るが直ぐ伎樂に眼を向ける。倉橋宮は之を見て不快な表情をする。伎樂が終る。樂人舞人退場。座が騷めく。官女は盛んに酒瓶を持廻る。小手子媛が酒瓶を持つて倉橋宮の盃に注がうとすると河上娘は先廻りをして注ぐ。宮は娘の科介に暗い顏をする。盃をぐッと飮干す。此度は小手子媛が先きに注がうとする。又河上娘が押退けて注ぎにかゝる。宮は盃を手にした儘、娘の酒瓶を突退ける途端、盃は微塵に壞れる。娘は「痛つ」と叫んで酒瓶を卓上に落とす。破片が散亂する。娘の右手に血が流れる。苛々としてゐた宮は手に殘つた盃の臺を娘の足元に投付ける。娘は殊更高い聲で「痛ツ、痛ツ」と叫ぶ。醉拂つた馬子は眼を屹つと据える。つか／＼と娘の傍に歩み寄つて無言のまゝ娘の二の腕を取り宮に流眄を與れて其場を去らうとする。以上、凡てパントマイム。)

負古。(馬子の袖を捉えて。)父上!

馬子。離せ

負古。何卒、父上——。

河上。妹。その手をお離し!

負古。御許し下さりませ。姉上。

河上。(聽かずに。)お離しと申すに!
(馬子は袖を振切つて娘を連れ上手に去る。座が白ける。駒、迹見、糠手等先づこそ〳〵と退場し次いで文武百官も跋悪るげに去る。倉橋宮、厩戸、負古、覺哿、王陵が殘る。)
倉橋。(堪えてゐたが堪らなささうに馬子の後を追はうとする。四人之を止める。)構はないでくれ。私は言ふだけの事を言ふのだ。
厩戸。でも、叔父上……
倉橋。(聽かず。)餘りの驕慢無禮。
厩戸。(宮の手を取つて靜かに。)たゞ御忍び下さりませ。
負古。(哀願する樣に。)叔父上樣。何卒、此場は御宥恕の程願はしう存じまする。
倉橋。(誰にともなく。)今日だけならば宥しも致さうが。
覺哿。御胸中は豫ねてより深く御推察申上げて居りまする。さり乍ら、唯「時」の裁きを待つが肝要にござりまする。
厩戸。此の一時をひたすら御忍び下さりませ。
倉橋。「時」と言ひ、「忍べ」と言ふ。私はこれ迄、時の裁きを待つて、忍び難き事も忍んで參つたのだ、然るに、かの娘までが父に見倣ふて、此の傍若無人。(間。)この忿懣は私一個の忿懣ではない。心ある民草は皆朋黨の害毒に眉を顰めてゐるのだ。廷臣より一兵卒に至るまで馬子の輩下を以て充されて居やうとも、私には信頼すべき民草がある。
今は身を挺して理想の爲めに戰を決するまでだ……
厩戸。雄々しき御精神にはござりまするが、日外、博士の申されし如く、君は船、臣は水にござります。船はよく水を

御して全きを得なければなりませぬ。ゆめ水に逆ふてはなりませぬ。況んや激し易き急湍の水に於てはでござります。

倉橋。（詠歎。）あゝ私に貴方の様な篤い信仰と寛大さとが惠まれてゐたらなあ！

厩戸。（續けて。）叔父上の御理想が馬子等の沮止に逢ふて忽ちに民草の上に其現致さずとも、善政と盛德とは永遠に渉つて必ず現れずには居りませぬ。王道は其の「永遠」を目安に致さなければなりませぬ。

倉橋。現實の波に弄されながら彼岸の光に希望をつなぐ貴方の心持は世にも美しいわい。

舍人。（登場。敬拜。）今日の佳節に際し山城國司より御祝肴の爲め――（と賀表を奉る。）

倉橋。讀上げて呉りやれ。

舍。は。（讀む。）時つ風、枝も鳴らさぬ太平の代に逢ひ奉り……

倉橋。あ、止せ！聞きたうはない。

他の舍人。（登場。）御上意にござりまする。

倉橋。何事ぢや。

他の舍人。吉野の奥、國栖の鄕より佳節御奉祝の爲め一匹の大野猪を御献上にござりまする。

倉橋。む。其猪をこれへ曳き申せ。

他の舍人。は。（二三の舍人と共に猪を曳いてくる。猪は跳廻る。）

倉橋。見事な猪だ。玄猪神への生贄に此場に於て屠り申せ。（舍人等躊躇ふ。）

厩戸。生贄とは申せ、御殺生は如何かと存じます。

倉橋。(耳に入らぬ樣に。)早く斬捨てよと言ふに。

(舍人等遽に斬殺す。)

倉橋。わはゝゝゝ(大いに笑ふ。總て淋しく猪が骸を見詰めて諷刺的に。)何日か、此の猪のやうに。——

(一同乾つと宮の顏を見る。深き間。此の少時前に小手子媛が舞臺の階の隅に立つて樣子を見てゐたが隱れて了ふ。)

倉橋。(强いて元氣に。)奥へ行つて飲み直したい。厩戸皇子。博士。今暫時、附合ふて下され。(調子に悲哀がある。)ほんの暫時——。

(一同舞臺の階段を上つて退場。舍人等顏を見合はす。舞臺少しく左に廻る。一面の庭で滿木が紅葉してゐる。大伴糠手が駒を拉して上手から現れる。)

糠手。(駒に耳語す。)

駒。(初め少し驚く。總て無氣味な苦笑に變る。力强く。)む。承知した!

糠手。しッ!(怯々としてゐる。)

駒。(上手の木立を指し。)其處で待つてゐて貰はふ。私が呼出してくる。

糠手。否、大勢の中へ貴方が呼びに行つては人目に立ちまする。私が參りませう。

駒。では賴む。私は其處でゆるりと待つてゐやう。

糠手。(小人らしく。)構へて他言めさるな。それでは御免下され。(上手へ退場。)

駒。(糠手の後を見送つて皮肉な笑ひを浮べる。獨白。)氣儘娘の御寵愛が薄らいだからこいふて、馬子の威を借らうとす

る大痴け者。だが、あれを開いたなら馬子も乾度火の玉になる。親莫迦が二人揃ふたわ。(間。)天よ、感謝をしてやるぞ。私の大願成就の日がやつてきたのだ。(仰臥す。紅葉舞ひ散る。)

馬子。(登場。糠手と話半ばである。醉つてゐる。)む。今日限り小手子はお拂箱になつたと申すのだな。

糠手。左樣な譯で。

馬子。(出鱈目に。)よし。よし。

糠手。兎角、近頃の宮の御振舞には解し兼ねる節が少うはござりませぬ。妃達は申すに及ばず、はしたなき宮女さへ凡て女性と申す女性を强つう御憎み遊ばすのでござりまする。

馬子。(碌に聞かない。)成程。(駒の姿を見留めて。)駒、どう致した?

駒。(起上る。)餘程、御酩酊の樣に見受けますが。

馬子。此れしきで醉ふたとも申されまい。處で、改まつて用と言ふのは何ぢや。

駒。左樣に御酩酊では明日に致しませう。至極眞面目な儀でござるで。

馬子。醉ふてゐるのは上皮だけぢや。心は確つかりしてゐる。

駒。此上、上皮だけをかツとおさせ申しては不可ませぬで――。

馬子。もたせ振りなら止めて貰ひたい。私は自分の爲めになる話には直ぐ正氣に返る性だから。

駒。では申上げるとしやうか。(糠手肯く。)實は大臣。(馬子の耳に口を當てる。)

馬子。(燃える樣な怒りが次第に顏に上つてくる。)眞實正銘か。

駒。(下手の猪を指し。)先づ證據から御覧が願ひ度うござる。

騃手。（附加える樣に。）娘が確かに。

馬子。（激越。）余を四つ脚に譬へて！（歯嚙みをする。）心外千萬！（駒は皮肉な眼で馬子を見る。騃手は馬子の怒りが餘りに激しいので慄えてゐる。）

馬子。駒！汝は？

駒。（惡黨らしく大きく肯く。劒を拔いて腕を刺し盟ひを立てる。）

馬子。（意を得し如く微笑す。深き間。突然駒の劒を奪ふて騃手を殺す。高らかに笑ふ。

駒。（傍らに向ひ皮肉に笑ふ。その笑ひと共に舞臺暗黑となる。）

第二場

多武峰の岨路

斧鉞の入らぬ深林。中に一條の岨路が通じて上手へ幾らか降りになつてゐる。下手に空洞のある杉の大木がある。下手奧からは樹を挽く聲が聞える。前場より二日後の午後。空虚な舞臺の下手から綱の先きを引張つた二三人の樵夫が現れる。軈て又二三人出る。續いて樟の大木の一端が見えだす。

樵甲。（下手の奧に向ひ叫ぶ。）綱先きを椈の根つ子に括り付けろ。

奧の聲。ようしきた。

樵甲。（舞臺の樵夫に。）一押しぐつと押せ。（其通りにする。樵夫等終つて汗を拭く。）

（下手から今は老いたる多須奈、即ち德齊法師と、鳥佛師と改めた止利とが出る。止利は沈鬱な表情をしてゐる。）

徳齊。汝の氣に入つた樟樹が見付つて私も漸く荷を降したやうな氣がする。

鳥。私も是程嬉しいことはありませぬ。此の森は何といふ莊嚴な感じのする森でござりませう，凜と立竝んでゐる樹はみな佛像のやうに思はれます。

徳齊。まことに心の中が清々しうなる。（空を見上げて。）日が暮れさうな。この樹は此處から谷川を流すとの事故、一足先きに村里へ歸ることにしやう。

鳥。え。

徳齊。（樵夫に。）皆の衆、お先きへ御免下され。

樵夫一同。御氣を付けて御歸りなされませ。

（徳齊と鳥上手へ退場。）

樵乙。時に、何誰様が此樟樹で佛像を御刻みなさるのかな。

樵甲。今の鳥様がよ。

樵丙。へえ、あのむつつりしたちびが。

樵甲。笑はつしやるな。日本一の巧者だちふで。（間。）

樵丁。四五年前までは、佛像を拜んだだけでも酷い目に逢はされたものぢやが。

樵戊。馬子様が權柄を取つてからは佛様に指をさしても首を拔かれる。

樵丙。いやはや、佛様もお坊様も御時勢で浮み出したわ。はゝゝ。

樵甲。それはさうと、此の木で刻む佛様は、間人大后と厩戸皇子の後發願で先の帝御供養の爲めぢやと申す。佛は藥師

如來、中宮寺へ御納めになるさうな。

樵乙。(木を撫ぜ乍ら。)同じ木でも仕合せな生れぢやわい。

樵癸。何が仕合せなものか。山におつて肥る方が仕合せぢやて。(一同笑ふ。)

(上手より土民四人が鶴嘴を持つて上つてくる。顔は菊石面である。)

土甲。ほ。えらう大ッかい木ぢやの。

土乙。何處まで曳かつしやるの?

樵甲。斑鳩までゞござる。

土民一同。大儀な事じや。

土甲。私等もちいと手傳ふて進ぜたいが先さが急ぐで、御免なされ。(樵夫等の間を分けて下手に行く。)

樵乙。いかう急かつしやるが何處へ參られる。

土乙。倉梯までゞござる。

樵丙。鶴嘴を持つて、何の御用で。

土丙。墓堀りに。

樵甲。それは〳〵。早う歸らつしやれ。歸りは嬶衆の待つものだで。(一同笑ふ。土民下手へ退場。)

樵乙。さあ、もう一息ぢや。

樵夫等。ようし!

(仕事を始める。綱を曳いて木の先端を正面奥に向け綱を解く。大響音を立てゝ木は谷間へ落ちる。跡片付けを濟

まし樵夫等は上手に退場。)

(舞臺空虚。鹿の遠音が聞える。軈て上手奥の崖に能管の音して、東洪駒が變心した河上娘を小脇に抱いて現れる。駒は岩間の水を見るや娘を傍に寢せて置いて、口に水を含んで飲ませる。娘、眼を開く。然し再び瞑つて了ふ。)

駒。氣を確かに!(布帛に水を浸して娘の口に含ませて置いて腰に帶びた小劍を拔き下手杉樹の洞を抉ぐる。そして娘の側に來て靜かに。)明日は必ず軟かい蓐の上に臥ませまする。今宵一夜の御辛抱を、何卒!(娘を抱いて洞の中に入る。)

(上手森の奧から迹見赤檮が追跡して來る。足跡を探ぐつて一旦下手に去る。駒が洞から出る。餓虎の樣に其邊を漁り廻る。切株の側に樵夫の忘れて行つた握飯包を見付け雀躍してそれに嚙り付く。下手より赤檮が再び現れる。駒を見て驚喜。)

迹見。(態と落付いて。)どうだ。甘いか。(駒驚く。)驚くな。汝の首が賭物になつてゐる事位は知つてゐる筈だ。

駒。(度胸を据える。)うむ、言ふにや及ぶ、だ。

迹見。それでは娘を穩便に返して貰いたい

駒。(せゝら笑ふ。)まあ歸つて貰はふ。

迹見。頑張らずに返して呉れろ。

駒。今更、返す位ならば辛苦を盡して此の山中までもお連れ申さぬわい。

迹見。成程、理窟だ。然し私が日頃の友情から穩便な手段をと思ふのに其の調子では所詮舌先位では埒が明くまい。私

とても汝の首があれば褒美は倍の倍にもなる。さ、駒。腰のもの丶生血を見せて呉れ。

駒。私はもう血を見るには耐えられないのだ。あゝ此様な不甲斐なしではなかつたがなあ。(迹見を向いて。)若し汝に心底からの友情があるのなら、私達二人を此儘見逃して呉れ。馬子には「尋ね敢へず」と告げればそれで濟む事。汝には盟つて迷惑はかけぬ。私達は全然此の世を捨てゝ三熊野の山中で、賤女山賤となつて靜かな餘生を送る心ぢや。人間二人を救ふとおもふて汝の褒美だけを犠にして呉れ。頼む。頼む。

迹見。罰も報復も受けずに沒義道の快樂に耽らうとは虫の良すぎる願ひだ。劍で奪ふたからには最後まで劍に物を言はせるがいゝ。

駒。(益々哀願的に。)今申す通り血汐に怖氣付いてゐる上に此様に疲れ切つてゐる。(迹見劍を鳴らす。)そんな音をさせないで呉れ。(地に額をつけて。)もう一度汝の友情に訴へる。此通りぢや。

迹見。鬼の念佛は止めて貰はう。

駒。獵師の懐中に入つた小鳥を憐れんでくれ。

迹見。其様な風を見せてはゐるが、隙を覘ふて私を討つ心であらう。いつもの手でな。

駒。今に及んで、何で——。

迹見。今に及んだから、其の奥の手も出やうといふもの。(大聲に。)河上娘！河上娘！

駒。(同じく大聲に。)娘！娘！お救ひ下さりませ！お救ひ……

迹見。(矢庭に駒に斬つてかゝる。)

駒。(驚いて劍を拔いて切先を受ける。)許して呉れ。迹見赤檮。

迹見。(遮二無二切つてかゝる。)

駒。(受太刀のまゝ叫びつゞける。)娘！娘！

河上。(物音に覺めて洞穴から蒼ざめた首を出す。驚歎。)おッ！危ないッ！危ないッ、劍を納めて！

迹見。(切結んだまゝ娘を見る。)お、娘には御安泰にござりましたか。此の痴漢を討取つて……(駒將に斬られんとす。)

河上。(狂へる樣に。)赤檮！劍を納めよと言ふに！(洞より出で中に割つて入る。)

迹見。は。(已むなく劍を納めて娘の前に跪く。)御健やかな御尊容を拜し大慶至極に存じまする。片時も早く御父君に……

河上。父上に背いて此處まで落延びし身が。歸る心は更々ありませぬ。

迹見。それでは宮に御殉死と申されましたは娘にも……

河上。(顏色變る。)何御殉死！？

迹見。すりや、非業の御最後を……

河上。御最後！あの、御最……(喪心して倒れんとするを駒が抱き止める。)

駒。(激越。)おゝ娘！世の終りまでも此樣に抱締めて居やうぞ！(間。)五歳にあまる年月を血の中に喘いできたも何の爲め！(間。)煮えたぎる戀は克つと言ふ。其昔、私を生殺しにした御身も強き戀の前には弱き捕虜となつて了ふた。聽て好機は來た！私は馬子の傀儡となると見せて實は馬子をあやつり、遂に素志を貫いて見事奪ひ返したのだ。然し、娘。私を無慘極る冷血漢だと思ふて下さるな。(苦しげに。)あゝ御身の胸を刺すべき劍の先にて……おゝ天よ、許して呉れ！(娘の耳に口をあてゝ。)娘！娘！昨夜、上居の郷社の床下で盟ふて下さつた御言葉を忘れないで下さ

れ！忘れないで下され！（振向いて。）迹見赤檮。私達二人を信じて呉れ！

迹見。信じられぬわい。娘の盟言を聞かぬうちは。

駒。（娘に。）あの床下の落葉を掻き集めながら打慄ふ身を犇と抱き合ふて、盟ふた御言葉を繰返して下され！さすれば、赤檮とて、よも、苦しめは致すまい。（娘の顔を見詰めて。）早く！早く！（娘無言。次第に其顔に油の様な笑ひが滲出る。訴へる如く。）何故、其様な御顔を……。早く言ふて下され！ためらふ時ではありませぬ。（娘無言。）なぜお默りめさる。卑怯でありますぞ。（次第に責めるやうな眼付になる。遂に堪らなくなる。卒然迹見に隙ありと見て忿に向直つて斬掛る。迹見身をかわすと同時に左手に握つてゐた砂を駒の目に投げ付け一氣に肩先から斬りさげる。）

駒。卑怯者ツ。

迹見。それは貴様のことだ。（駒血の中を跪廻る。）緩るりと自分の血でも吸ふて居れ。

河上。（駒を見て冷然。）早く、留めを！

迹見。は。（留めをさす。）

河上。（獨白。）あゝ凡ては終つた。父上、おさらば！

（身を躍らして正面奥の谷川に投ず。）

迹見。あゝ！（谷川を俯瞰して嗟嘆す。軈て駒の骸の側に歸る。哀愁を帶びて。）何事も無かつた樣に友は靜かに眠つてゐる。（落涙。）（夕暮れて鹿の遠音淋しく聞ゆ。時に濕やかに時雨降りそむる。森林の落葉。大自然は夜の色に包まれて行く。寂。）

幕

第五幕

飛鳥の橘宮

厩戸皇子の宮。今の高市郡橘寺は其の遺跡といふ。舞臺上手は居室下手は庭である。其の向ふは秋草の蕭々たる飛鳥野である。皇子は御病氣らしく蒼ざめて書見をしてゐる。負古妃は幼兒（山背大兄皇子を抱いて其傍にしよんぼりしてゐる。話が長く途絶えてゐる模樣。

前幕第二場より二三日後の夕暮。秋の殘照が野に薄らいで虫の聲がする。

厩戸。博士の御支度はもう調ふたであらうか。

負古。彼是御出發の刻限でござりませう。（そつと涙を拭く。）

厩戸。いつまでもお泣きでない。おつけ母上も御着き遊ばすであらうから。

負古。その母大后に御合せ申す顏がござりませぬ。何卒御願ひの儀を御許しなされて下さりませ。

厩戸。（窘める樣に。）またしても何を申す。父のために夫妻の緣をも絕ちたいとは淺慮と申すもの。一時の感情によつて深い結緣を破つては相成りませぬ。

負古。けれど私が御側にゐる故に、貴方樣は申すに及ばず、母大后にまで御心勞を御かけ申しては妻として何んぼう心苦しい事でござりませう。その上、貴方樣には父の言葉を飽くまで御信用あつて斷然御裁き遊ばされぬとあつては、あれ見よ、義父故に、厩戸はと、世の取沙汰も如何と案ぜられまする。斯く執拗ふに申上げるは此の小さい心に餘つてのこと。何卒心中の苦惱をお汲み取り下さりませ。

厩戸。其心持は一見、美しい謙遜の様ではあるが實は女の淺慕な考へに過ぎないであらう。一旦相觸れた者は永久に離てはならぬ。世間ではよく性格の相違といふ理由から離婚をする者もあるが、それは性格の奥に在る「人間」に徹れないからのこと、況してや汝の様に唯苟且の境遇の變化から離別などとは以つての外の儀ぢや。私の此度の心柄はずつと深い處に根ざしてゐる。負古。涙を拭ふて、まあ此方をお向き。(兩人居住ひを直す。)祖父帝の御在世に、百濟國から佛法が渡來して此方、我が思想世態の大變遷を靜かに考へてみると、宛かも千年の路を二十餘年の間に歩んだやうなもの。一事一物として急激な變革と遽しい疾風を受けぬものはない。その間にあり乍ら、傷み易い少年の心は、母上と博士と汝とこの三人の温情の中に微傷をも受けずに羽ぐくまれて參つた。然し我國を吹きまくる颶風は依然として止まず、遂に國の一切を擧げて空前絶後の奈落の底に吹落して了ふた。天は震ひ、地は戰く。兇刄の閃く中に暗雲は低くさまよふてゐる。度を失ふた民草は疑心暗鬼を生じて恐れ戰慄いてゐる。此の暗黒時代を光明の御代に還すは眼覺めたる青年者の使命ではあるまいか、私は深く此の靈覺を感じて新しい時代の表へ歩みを進めるのぢや。

負古。(皇子を仰いで。)それでは愈々——。

厩戸。巷に出づる決心ぢや。(間。)其爲めには汝の愛情と此の嬰兒の笑顏とが、此身を勵まして呉れねばならぬ。

負古。御雄志のほどは天晴には存じますれど、母大后の御聽許は如何な儀にござりませう。

厩戸。御許し無きは覺悟の前——。

負古。とは申せ、御歎きのほどが……(幼兒泣出す。)

厩戸。否、如何に仰せあらうとも。(幼兒火の付く如く泣く。)どう致したのであらう。火でも付いた様に。

負古。今朝程より急に乳が上つて了ふたのでござりまする。

厩戸。世の禍亂が此の幼き者をまで悲ませるとは。

負古。溫かい飲物の用意を致しまする。御免遊ばしませ。(泣く兒を抱いて去る。)

(侍女二人それ〴〵藥湯と燭臺とを持ち來る。部室明るくなる。侍女退場。)

厩戸。(藥湯を服む。靜かに立つて椽先に佇む。日全く暮る。獨白。)帝を葬つて三日、倉梯の山陰には一焚きの火煙さへ立昇らぬ。道に仆れし旅人の樣に唯土民の鶴嘴の下に、儀式もなく眠らせ給ふ叔父上！(落涙。流星。)王者は何の爲めの王者なのであらうか。悲慘なる御最後を見奉るにつけ、父帝の御臨終を想ふにつけ、此の疑ひを重ねずには居られなくなる。身を殺して仁を贖ふと言ふ、孔子の描ける人間は幸と言はねばならぬ。身を殺し骸を捧げて尙ほ何ものも贖ひ得ぬ王者の身の痛ましさ。(瞑目。)無我と捨身と──。それが王道であるのか。(間。虫の聲。)巷には馬子を責めるの聲か高いと聞く。然し罪過が馬子に在るとも、駒に在るとも、私は兩人の何れをも責める事は出來ない氣がする。罪の大部分は時代に在る。無反省な權力過重の時代に在る。個人の罪は宥し、時代の罪は救はねばならぬ。(下手を見る。)おゝ！(思はず二三歩進む。)

(其時德齊法師鳥法師善信尼禪藏尼惠善尼等の一行が現れる。何れも長途の旅に疲れた樣子である。)

德齊。お久しうござりまする。(首を下げる。)皇子には御健かに。

厩戸。(肯く。)ようこそ。さぞお疲れの事でせう。奥で緩るりと御休息下さい。

一同。(鳥を除く。)有難う存じまする。

德齊。(續けて。)大后樣には些の御疲勞もなく御部室に御入り遊ばされてござりまする。

厩戸。御心遣ひの程忝なう存じます。

徳齊。して、博士の御出立は。

厩戸。軈てこれへ參られませう。船は明正午の出帆と早まつた故、遙かに夜中の御出發。

徳齊。漸く御間に合ひ申して安心致しました。

（鳥を見乍ら。）御發願の藥師如來の御像は昨朝より取りかゝりましてござります。尚ほ豫ねて御吩付けの御念持佛の儀は今日持參致させてござりまする。（鳥は背にかけた包みから佛龕を取出して皇子の前に差出す。）實に未熟な鑿の跡にござります。

厩戸。（龕扉を開いて見る。感歎の間。）慈悲に充ちた寂かな眼光！これこそ正身の御佛ぢや。涙ぐましい氣がする。（鳥に沁々と。）私の心からの感謝を受けて下さい。

鳥。（默したるまゝ眼を伏せる。）

徳齊。（鳥に代つて。）殊の外御意に協ふて身に餘る光榮に存じまする。（首を下げる。）

厩戸。（靜かに龕を抱いて棚の上に安置する。）何卒、御休息を！私も母上に御目にかゝりに參ります。

一同。はは。（退場。同時に皇子も退場。）

（舞臺空虚。こほろぎ鳴く。博士の調度を積んだ三棗の輿が上手より出て下手に去る。舞臺再び空虚。軈て奥の間より「父上！父上！」と叫ぶ聲が聞える。ついで帷が開いて憔悴した馬子が現れる。其袖に取縋るやうに負古がまろび出る。）

負古。（切れ〳〵に。）御所存のほどを先づ私に御漏らし下さりませ。夫の君は身心共にいたく御疲勞にござりまする。此上御心を惱まし奉るは……

馬子（昂奮してゐる。）皇子御一人の前で申し上げたいのぢや。汝は彼方に避けて貰ひたい。

負古。父上の御耳には忌はしい取沙汰が聞えぬのでござりまするか。子の私さへ御心事を疑ひ申しまする。

馬子。父を疑ふては呉れるな。私は汝が愛しければこそ、飛ぶやうにしてこれへ參つたのぢや。汝だけはせめて父に優しい子であつて呉れ、な、負古娘。（肩から抱いて。）汝は小さい時分から、優しい氣立てのよい子であつた。人を欺かず、妬まず、皆から可愛がられてきた。然るに……汝には引きかへ、姉の娘は、汚れた……賤性の子ぢや。

負古。雄々しう御殉死を遊ばされた姉上をば惡樣に申さるるとは――。

馬子。（悶々。）聞いて呉れ、負古。姉娘は……

負古。（逼る樣に。）姉上は？

馬子。（投げる樣に。）邪淫に身を亡ぼしおつたわ。（負古打たれたる如く聲無し。一氣に。）兇漢東漢駒は、かの夜直ちに、娘と謀合して多武峯の山中まで落延びた處を、迹見赤檮に追跡せられ、駒は速座に斬罪。娘は萬丈の谷間に身を躍らして敢なく自滅ぢや。

負古。（喪心した樣に。）信ぜられぬ事でござりまする……

馬子。眞實ぢや、眞實ぢや。負古！世を擧げて私を惡逆非道と罵らうとも、汝だけは、生みの子を信じすぎた愚かな父親をば少しは不憫と思ふて呉れ。私は一昨日、皇子の御前で、罪は駒に在る、と強辯を重ねたが、先刻、詳しい迹見赤檮の物語を聞くにつれ、私の面皮は骨髓まで引剝れて了ふた。矢張り罪は私に在る！私は駒を唆かしたのだ。おゝ不埒な娘奴。屍を探出して寸々に斬り刻むぞ――と叫ぶ聲の下から……負古！（切なく。）あの娘がどうか生き返らぬか、と言ふ氣がして參るのぢや。あゝ何といふ親子であらう。（茫然として空を見詰める。）私の爲めに瓦礫同

然に失はれた人々の夥しき亡靈！おゝ！

負古。(喚覺す樣に。)父上！父上！

馬子。(現つに歸る。)それから、曳かれるやうに精舍に詣つて、長い夜を跪き明した。「人の前で無辜を詛ふ者も佛の前では積惡の罪が發かれる。」豐國大師の一語が此胸を刺貫ぬく。(間。)軈て朝の光の中で汝の手紙を受取つた。私は益々堪らなくなつた。娘！此樣な父を有つた汝の苦衷は察しるぞ。

負古。その御苦悶を正面に見るには耐えない氣が致しまする。(上手を見て些か狼狽して。)皆樣の御出ましにございまする。父上、暫時私の居間にて。

馬子。(肯く。兩人奧に退場。)

(上手庭から間人大后厩戸皇子覺哿王陵德齊及び三人の尼が出る。大后の御腰は曲り白髮の老媼となつてゐる。鈍色の法衣に水晶の念珠を手に掛けた全くの佾形である。近親に先立たれた老人の憂愁が何處とはなく漂ふてゐる。一同おのづと停る。奧が出る。飛鳥野は今、月明を待つてゐる。)

覺哿。(太い疊つた聲で一同に。)では、これにて最後の御袂別を申上げまする。(先づ大后に首を下げる。)

間人。(拔けた齒の間から。)お達者でな。

覺哿。(胸逼る如く。)また逢ひまつる日は……(語尾消ゆ。)

間人。(暗愁。)彼岸で、な。(靜かに念珠を爪繰る。)(憂ひの間。)

厩戸。(一層顏色が蒼ざめてゐる。)博士。何卒御身體を大切にしてね。十有七年も他鄕の風土に親まれた御身。殊に高麗國は任那などとは異ひ、北方の雪深い國と聞きまする。時候の變り目や寒暑の嚴しい時分には御無理を遊ばさない

やうに……（聲顫る。）

覺哿。忝う存じまする。皇子も、どちらかと申せば御蒲柳の御身故、充分御健康に御氣を付けなされませ。（皇子肯く。）そして先刻承りました御決心の件が事實と相成つた曉には、その吉報を御忘れなく御便宜の程御願ひ申上げまする。日の本の御空を打仰ぎ乍らその日の到來を御祈り致しませう。

厩戸。え、御知せ申しまするとも！其の音便が御手許に着いたならば、博士、貴方が十餘年の間、この胸の處女地にお蒔き下さつた智慧と道との實が芽生える日だと喜んで下さいませ。私に、星々見て其の輝きに涙ぐみ、野の花を見て其の美しさに沁入る、優しい心を養ふて下さつたのは博士でございます。私はその心を以て民草の間に分入らうと思ひます。詩人の吹く芦笛の音は世界の果をも搖がすと仰言いましたが、私は深く其の言葉を信じて居ります。（間。）また、父亡き後は、博士を眞實の父上のやうに思ふて隨分我儘を致しましたが、御別れに臨んで御詫びを申上げまする。

覺哿。（皇子の手を取つて。）其の御言葉こそ私への最善の餞け――。嬉しうございまする。（眼潤む。）老先きの短い私に比べたならば、皇子には光に輝く長い御生涯が開けて居りまする。其の行旅に私の拙い御教養が何かと役立つこともございませうならば、此の老人が現世に生命を享けたのも徒勞ではなかつたと申されませう。新しい時代に招かれて、日の御子が靜かな歩みを運ばれる日が廻つて參りました！切に御自重あつて、上下億兆の民草のために……

間人。（涙をためて。）覺哿。最前も申す通り、其儀計りは相許しませぬ。前車の挫けた迹はまざ〳〵と眼の前。せめて此の皇子には淨い生活を望み申しまする。

覺哿。（背いて。）さり乍ら、精舍の中に身を淨うする計りが諸佛の悲願に協ふとは申されませぬ。一粒の粟は地に落ちて

こそ萬人の糧となるとも申しまする。

間人。いゝや、左樣に申されませうとも――。

厩戸。(宥める。)母上、何卒、此場は。

間人。(涙を拭ひ乍ら背く。)

德齊。(覺哿を促す樣に、小聲で。)最早、御時刻にござりまする。

(覺哿輿に乘る。皇子は妃が見えないので氣を揉んでゐる。)

覺哿。(王陵に。)醫博士。國元への御便りはありませぬか。

王陵。(打萎れてゐたが顏を上げる。)有難う。故鄕へ歸られる貴方を想ふて、私の胸は一杯になつて居ります。博士。(進み寄る。)貴方は高麗の國へ歸られたならば、立派な御子達や御孫達が待つて居られる。然し私は故鄕の百濟の國にさへ最早一人の親戚も有ちませぬ。だが、博士。あの赤茶化た、低い山の連る百濟の路をお通りになる時には、路傍の草の葉になりと、王陵は日の本の朝廷に仕へて共處に屍を埋めるとお告げ下さい。せめてもの祖國への便りに――。

覺哿。(涙乍らに背いて王陵の手を握る。兩人暫時彫刻の如くに立つ。)

善信。(進み出て。)博士――。(次の言葉なく顏を掩ふのみ。)

禪藏、慧善。(涙聲で。)おさらばでござりまする。

覺哿。(丁重に背く。)(輿動く。)

厩戸。(上手に負古の姿を見付けて覺哿に。)博士、暫時。負古が。

負古。(輿に驅寄る。)博士！（覺哿の袖に顔を掩ふて泣く。）

覺哿。御妃には御身健かに。(深き間。)

(輿は庭を出でゝ飛鳥野に向ふ。月出づ。一同は群像の如く見送る。いつの間にか下手庭の隅に鳥佛師が現れて人知れず感慨深かさうに輿を見詰めてゐる。)

(軈て間人大后と負古との眼光が合ふ。負古直ぐ眼を伏せる。兩人の間にぶまな間が置かれる。負古涙をふく。間人大后は上手へよち／＼と歩み去る。此の光景を見て厩戸皇子の顔が曇る。振向いて博士の輿の方を見る。輿の灯が消える。)

厩戸。(呟く樣に。)あゝ、行つてしまはれた――。(喪心して其場に倒れる。)

王陵。(立騒ぐ一同を制して。)靜かに！靜かに！一時の御立暗みと存じまする。(負古に。)御心配は御無用にござりまする。(德齊に。)法師殿、御手をおかし下されい。徐かに御居間まで御舁き申上げませう。

(月隠れて暗し。時に陣風燭を滅す。暗轉。直ちに皇子の夢の世界が開ける。)

夢の場

光のさゝぬ洞窟の底。上手上部に竹林の繁つた平地がある。洞底では樣々の異形の人間が陰欝な聲で「無間苛責の大地獄。六道輪廻の底の底。絶滅飲食大餓鬼道。」と唱へ乍ら食を漁つてゐる。摩訶波羅、摩訶提婆、摩訶薩埵の三人の太子は平地より之を俯瞰し大ひに驚き何か呼合ふ。弓を持つた波羅と提婆とは無理に薩埵を引張り去る。洞底で左の言葉が聞える。

(私が見ツけたのだぞ。)

(私だ。)

(私だ。)

(否、私ぢや。)

(うむ、畜生ツ、横合からうせて取りあがつたな。)

(おぼえてゐろ！)

(ひツ……ひツ……)

――(間。)――

(今朝から食べすだ、なめくぢ一つ見付からないのだからなあ。)

(今、蔓を横合から盗んだ跛さん、私に片足くれろよ。)

(やるものか。なまけ者！)

(背中がお肚に附きさうだ。あゝから食物がなくなつたら、どうするのかなあ。)

(岩も噛れまい。弱い者が強い者の餌食になるまでだ。)

(腕の無い小父さんから食はれるのさ。)

(べらぼう奴！食はれて堪るものか。片輪だと思つて莫迦にしやがる！)

(はゝゝ……)

――(間。此時、薩埵太子は獨り再び崕上に現れて、ぢつと洞底を覗いてゐる。一方洞底の奥の方からは、微かに

脚音が聞える。）——

（シッ！靜かにしろ！）

（何ぢや。）

（何事ぢや。）

（靜かにしろと言ふに！）

（あの音が聞えないのか。）

——（一同默る。脚音近付く。）——

（お！四つ脚の歩き方だ！。）

（扉の處まで來たやうだ。）

（叩いてゐる！叩いてゐる！）

（開けるな！決して開けるな！）

——（扉を強く打つ音。次いで壊れる音。一同慴伏する。一匹の虎が出る。）——

虎。扉を開けるなと言つたのはどの餓鬼だ。

（間。）返事のないのは私が怖いのだな。（どこかで骨を嚙む音。）骨を嚙んでるのは誰だ。（音止む。）その骨を私に寄せ！腹がぺこぺこに空いてるのだ！（返事がない。）む！寄こさないと、かうだぞ！（爪牙を出して威嚇する。）

聲。（虎に。）物を言ふとこを見ると、貴樣も元は人間らしいな。

虎。立派な人間樣だ！（聲の傍に寄つて見る。）おや！君は中臣照海ではないか。

勝海。さうだ。
虎。(順次に見廻す。)君は押坂史毛屎!君は大件糠手!もう來てゐるのか。お、そこに眠つてるのは守屋ぢやないか。
王陵。おい、その隣りが醫博士王陵樣だよ。
虎。む!人殺しの名人。君は何時の間に此處へ來たのだ。
勝海。つべこべとよく喋舌る君は一體誰だ。名を名乘れ!
虎。私か――。私は東漢駒だ!
一同。(驚いて默る。)
虎。(勝海に。)私も君を殺した卑怯者の手にかゝつて殺されたのだ。人間で一番惡いことをしたといふ廉によつてな――。
勝海。一番惡いこと?さうだらう、四つ脚に姿を變へられるのはよく〳〵のことだ。
駒。(物を食ふ音をきいて。)食つてゐるのは何處の野郎だ。餓鬼の傍で物を食ふとは命知らず奴!
守屋。かたつむりを嚙つてゐるのは私ぢや。守屋ぢや。大連ぢや。
駒。まだ大連をふりまはしてる。笑はせやがる。
守屋。さがれ!人殺し!
駒。まだ威張つてやがる。あの世では大連樣だが、この世では私が一番强いのだ。空威張りをすると承知しないぞ!
守屋。なぜ、貴樣が一番强いと申すのぢや。
駒。餓鬼道では一番飢えてゐる者が一番强いのだ。私は四萬六千日の間、水一滴、飮まないでゐるのだ。

守屋。一番飢えてゐる者は一番弱い筈ぢや。

駒。(皮肉に笑ふ。)飢渇のどん底に陷る者は生命の爲めにはどんな事でもしでかすのだ。今に見ろ！大連樣だらうが、なめくじだらうが、殘らず食ひ亡ぼしてやるぞ。

守屋。(幣を出て祓ひをする。)

駒。(嗤ふ。)御幣と胃袋と何方が強いか見せてやる！(守屋に喰付からうとする。大きな音響。駒と嬖の親子とを殘して、一同搔消える。嬖は自若として、子供の兩足を引裂からうとしてゐる。その光景をぢつと見て。)その子は誰の子だ？

嬖。誰の子でもない。私の子ぢや。

駒。何故、股を引裂からうとしてゐるのだ。

嬖。腹が減つた。肉を喰ふのだ。

駒。(呆れる。)我子を喰ふ！呆れ返つた人非人だ。

嬖。それでは、汝はこの子の肉を喰はふとはしないかね。

駒。それは私の子ではない。汝の子だ。

嬖。これ見ろ。

駒。何がこれ見ろだ。他人の子を喰ふ位は平氣の沙汰だ。私はおまへの干乾びた肉をも喰つてやろ！

嬖。たべろ。勝手にたべろ！

駒。言はれるまでもないことだ。

嬖。私は私で、この子の肉を喰ふからな。

駒。淺猿しさを通りこしてゐる！もう一度問ふが、おまへは自分の子供を啖つて可愛さうだとは思はないか。

獐。おまへは私を啖つて可愛さうだとは思はないか。

駒。おまへと私とは他人だ。私は飢えてゐるのだ。生きてゆきたいのだ。

獐。私は人間ぢや——。私も飢えてゐるのぢや。生きてゆきたいのぢや。

（この少し前から斷崖の上で左の話がすゝむ。）

薩埵。（以前から腹這ひになつて洞底を覗いてゐる。）

波羅。（提婆と共に薩埵を探しに戻つてくる。薩埵の姿を見付けて走寄らうとする。）

薩埵。（兄達の來るを知らず、駒と獐との對話の終つた瞬間、身を躍らして洞窟に飛込まうとする。）

波羅。（提婆と二人で薩埵を抱止める。）危ない！どうするのだ。

薩埵。離して下さい！この臭軀を飢えたる者に與えるのです。

波羅。あの餓鬼共にか。

提婆。無茶にも程がある。私は家へ歸つて肉を取つて來る。

薩埵。（急ぐ。）その餘裕が無いのです！

提婆。（薩埵を掴んだまゝ底を覗く。）誰を助けやうといふのだ。あの子をか、獐をか、虎をか——。（弓を示し。）子を救けるには獐を射ればよい。獐を救けるには虎を射ればよいのだ。

波羅。否や、誰も助ける必要はないのだ。彼等は惡業の報ひを受けて永遠に苦めばよいのだ。若し虎が傍若無人の振舞をするなら、その時こそ、弓があるのだ！

陳塒。離して下さい！彼等が如何なる悪魔如何なる阿修羅であらうとも、私の臭軀を食んで一時でも生き延びる事が出來るなら、私は滿足です。離して下さい！（兄達を突退けて洞底に落ちる。其瞬間に大音響がして舞臺暗黑となる。次いで何處からともなく「善哉、大士、大慈大悲」といふ合唱が聞える。洞窟には紅の色が滲んでくる。天衆と共に名華が降りくだる。左の頌の聲にて黑き幕靜かに降りる。

大士救護運悲心　等視衆生如一子
勇猛歡喜情無悋　捨身濟苦福難思
定至眞常勝妙處　永離生死諸纏縛
不久當獲菩提果　寂靜安樂証無生

（此のシーンは法隆寺金堂の玉蟲厨子の蜜陀繪にある、金光明最勝王經捨身品の圖からヒントを得たものである。）

幕の上る前から民衆の喧騷の聲がする。元の楠宮の翌朝である。飛鳥野から庭内へかけて雲霞の如く民衆が充滿してゐる。馬子が民衆の爲めに引摑えられてゐる。上手に厩戸皇子が佇んで此の光景を見てゐる。場面緊張の體。

民甲。大臣ではなうて毒蛇ぢや。毒草ぢや。

民乙。蛇は幾度衣を脫いでも蛇ぢや。

民丙。皇子の新しい路を塞ぎまつる毒草は燒拂ッて了へ！

民丁。懺悔も後悔も信用しないぞッ。

民戊。見ろ、踏付けられた草は此樣に撥え返ってきたのだ。（民衆騷然。）

厩戸。（民衆の方へ二三歩進んで。）お鎮り下さい。貴方方の申すことは一々御尤もであります。然し馬子は熱涙を流し地にひれ伏して、貴方方の爲すまゝに身を委して居ります。其の大臣の心中は決して狂言ではありません。否、たとへ狂言にもせよ一旦懺悔を盟ふた者は暫時長い目で其の將來を見て遣らなくてはなりません。私達は先づ寛大な態度に出でやうではありませんか。

民の甲。俺達から寛大さをもぎ取つて了ふたのは大臣なのでござります。皇子、何卒御干渉なさらない様に願ひます。

（民衆に向ひ。）それッ！

（民衆は馬子に向ひ「犬！」「熊！」「狼！」「蛇！」「狸！」などと罵倒し乍ら手又は足にて撲つ。）

馬子。（堪り兼ねて立上る。）犬熊狼蛇狸――それは貴樣等の事だ。さあ、貴樣等の對手になつてやるぞッ。（剽悍な風貌を露して民衆を壓する。民衆一時怯む。）

民乙。（やゝ皮肉に厩戸皇子に向ひ。）悔ひ改めた狂犬は斯の通りでござります。

民丙。本性を現した此の面構えを御覺下さりませ。

馬子。うむッ！（歯を嚙合せる。）

厩戸。（馬子を制して民衆に向ひ。）馬子を斯の樣にさせたのは誰でせうか。人間を獸の名で呼ぶ者は自ら獸同然の人間であります。（間。）人を裁き罰することは其の人を善良にまで導く事でなくてはなりません。然るに貴方方は憤激の爲めに此の根本を忘れて却つて人の惡性を挑發し、懺悔する者の心を攪亂して了ひました。私は貴方方の一人が先刻叫ばれた樣に、蛇は幾度衣を更へても蛇であることを知つて居ります。惡は人間の性の半面であつて如何に懺悔をしても消えるものではありません。然し懺悔をする者の許されるのは惡を惡と識つて之を除かうとする心の生じた

爲めです。

民丁。私等が代つて除いてやりまする！

民戊。馬子の懺悔は世間をごまかす爲めの懺悔です。

厩戸。では、其の脚元の石を拾ふて一齊に馬子に對つて投付けなさい。（民衆動搖す。）誰か佛の前で人を罸する石を投げ得る者がありませうか。私は飽く迄、馬子を庇ひます。彼の罪を罸する事なく凡てを許します。さすれば、私も貴方方の敵でありませう。さ！私の面上にも石を投付けて下さい。

民癸。（老人。）大臣は義父君故、斯く御庇ひ遊ばすのではござりませぬか。（民衆の中に「さうだ。」と叫ぶ者あり。）

厩戸。（少し激す。）其の疑惑は覺悟の前であります。若し私が馬子の首を斬つて飛鳥野の楊の木にでも梟けたならば、貴方方が如何に狂熱して私を喝采するか、よく知つて居ります。然し私は際物師の物眞似は致し度くありません。政は人間相互の愛と扶助との上に立たなくてはなりませぬ。この簡單な幼稚に見える考への下に眞の政は行はれなければなりません。（民衆口々に何か語る。）

負古。（急ぎ登場。）母大后には急に御歸庵の御意にござりまする。御引留めのほど御願ひ申上げまする。

厩戸。御諫止に御從ひ申さぬため御立腹のあまり御歸庵遊ばされるのであらう。今は詮方ない。御歸庵は御隨意ぢや。

負古。（憂聲で。）左樣に申されやうとも。

厩戸。よいわ！（負古止むなく默す。）

馬子。（民衆に向つて。）石を投げよ。石を投げよ。

（民衆再び騷然、一人石を投ぐ。續いて數個の石飛ぶ。馬子仆れる。負古父に取付く。厩戸皇子傍らに赴く。時に

一つの石、誤つて皇子の額に當る。血滲む。）

民衆。（愕いて。）おゝツ！

民甲。（憤然。民衆に向ひ。）皇子を傷つけさつたのは誰だツ。

民丁。（卒直に飛出す。）私だ。過つたのだ。わるかつた。

民衆。謝まり申せ。謝まり申せ。

民丁。（皇子の前に額く。）

厩戸。過失といふものは誰にもあります。其様に謝まるには及びません。それは兎に角、馬子は此様に打仆れて了ひました。貴方方の感情は滿足されたことと思ひます。それで一先づ此處を引上げては下さいませぬか。

（民衆互ひに背き合ふ。）

民甲。（進出でゝ。）皇子！此際我々民草の熱望を容れられて天の御位に御即きの程切願致しまする。

民衆一同。御願ひ申しまする。

厩戸。（決然。）私は生涯貴方方と一緒に居ります！私を御信頼下さい。私は心から貴方方を愛します。

（萬歲の聲湧く。歡聲の内に民衆は漸次散り行く。場面寂然。負古の啼泣が聞えるのみ。）

厩戸。（馬子を抱く。）義父上。義父上。（馬子答無し。奥へ。）誰か。誰か。（近臣登場。）奥へお舁き申し、直樣醫博士を招じて――。

近臣。は。畏りましてござります。（馬子を舁きて負古と共に奥に退場。）

厩戸。（飛鳥野の民衆の影を眺めて獨白。）あゝ私は何を望んで民草の中へ歩んで行くのか。（間。）或時は湖水の面の如く或

時はわだ海の荒狂ふ如く――。民草の力は久遠の謎である。

鳥。(影の如く上手庭より登場。)皇子、御寺に歸りまする。

厩戸。(振返つて。)して、母上には？

鳥。御輿を早めさせられて、最早御發足にござりする。

厩戸。最早御發足。(いきなり鳥の手を握る。長き間。)此の御手の溫かさ。(間。)五とせ前にもなる。飛鳥野の皇陵で、土くれにまみれた此の御手を斯うして握締めたことを覺えてゐられるか、え？

鳥。(靜かに背いて。)え。(間。)

厩戸。あゝ此の御手からは世にも貴いものが生れる。私が民草の間に羽育くまうとするものは遙かに小さいものゝやうに思はれる。

鳥。凡て時の支配を受けぬものゝ爲めには精進の苦しみを忍んで、孤獨の淋しさを續けねばなりますまい。

厩戸。(背く。)民草と共に居る時ですら、私はその淋しさに耐えない氣がする。

鳥(ぢつと皇子の顏を仰ぎ見る。ふと。)血汐が滲んで居りまする。

厩戸。(額に掌をあてゝそれを眺める。)

鳥。(同じくその掌の上に眼を注いだまゝ。)

(こほろぎの聲、軈て奥から伊古郎女の忍び泣きが漏れてくる。)

(下手の飛鳥野の一隅には間人太后の御輿とそれにつゞく德齊法師及び三人の尼僧の小さい影が秋の芒の穗波の中に寂しく沒して行く。)

大團圓

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍額に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金 口座番號は東京三十四番なり

一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず

一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

　一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌別當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年六月十一日印刷納本
大正十二年六月十五日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 丸ノ内三〇二
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十二年六月十一日印刷納本
中央公論「知識階級と無産階級」號（第三十八年第七號）

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社